谷崎潤一郎全集

第二十巻

野上弥生子全集

第二十巻

解　説

默阿彌七十七歳の筆蹟である。明治二十五年二月の節分を期して、眞の引退を決心し、知己門弟の間へ酒肴或は酒肴料を配つた。壽の字はその上包みの奉書に書いたものであり、又口上は小判の色紙へ書いたものである。其の口上は次のやうに讀まれる。默阿彌の誕生日といふのは文化十三年二月三日であつた。

ことし七十七となりますく己(おのれ)は老衰なし五十七年勤めたる作者も最早勤まり難くこたび拙き筆を捨此節分の誕生日に目出度芝居を引くにつけ幸ひ喜の字の賀をかねて祝宴替りに麁末なる酒肴を呈上いたし候

二月　　　　　　　　　默　阿　彌

解説

默阿彌七十七歳の筆蹟である。明治二十五年二月の節分を期して、眞の引退を決心し、知己門弟の間へ酒肴或は酒肴料を配つた。壽の字はその上包みの奉書に書いたものであり、又口上は小判の色紙へ書いたものである。其の口上は次のやうに讀まれる。默阿彌の誕生日といふのは文化十三年二月三日であつた。

　ことし七十七となりまする己(おのれ)は老衰なし五十七年勤めたる作者も最早勤まり難くこれ及び拙き筆を捨此節分の誕生日に目出度芝居を引くにつき幸ひ喜の字の賀をかねて祝宴替りに粗末なる酒肴を呈上いたし候

二月　　　默阿彌

七十七翁
黙阿弥

二月

黙阿弥七十七翁

豊原國周筆

豊原国周筆

河竹糸女補修
河竹繁俊校訂編纂

默阿彌全集 第二十卷

所作事淨瑠璃集

東京 春陽堂刊行

默阿彌全集第二十卷目次

挿繪目次

新古演劇

十種の内

土蜘（つちぐも）

解説

「土蜘」は明治十四年六月、作者六十六歳の時、新富座に書卸された。其の時の役割は尾上菊五郎（叡山の僧智籌實は土蜘の精）、坂東家橘（攝津守源頼光）、尾上菊之助（侍女胡蝶）、市川小團次（渡邊源次綱）、市川團右衞門（兵卒兵作）、尾上松助（碓井靱負丞貞光）、大谷門藏（卜部勘解由季武）、中村鶴助（酒田主馬丞公時）、中村鶴藏（軍卒卒平）、市川左團次（平井左衞門尉保昌）、市川團十郎（兵卒軍内）等であつた。振附は花柳壽輔で、杵屋正次郎、松島庄五郎、松永和楓、寶山左衞門、芳村伊十郎等が長唄囃子連中として名前を列ねて居た。

新古演劇十種としては最初の作であるが、書卸しの時には、「三代目尾上菊五郎三十三回忌追善狂言」と銘打たれてあつた。能曲を移植したもので種々の説はあるが、尾上家の家の藝として成功したものになつたので、今も尚六世菊五郎、尾上梅幸等によつて度々上演せられてゐる。挿繪にしたのは、國周筆の錦繪及先代菊五郎の舞臺寫眞である。

土蜘

頼光御殿の場

土蜘退治の場

長唄囃子連中

〔役名＝叡山の僧智籌實は土蜘の精、源頼光朝臣、平井左衛門尉保昌、渡邊源次綱、酒田主馬之丞公時、碓井靱負之丞貞光、卜部勘解由季武、狂言師三人、太刀持。侍女胡蝶等。〕

（御殿の場）＝本舞臺一面の置舞臺、向う松の鏡板、左右竹の畫の羽目、上手に臆病口の出入り、下手橋懸りの高欄、向う揚幕、下手橋懸りへ緞子模様の幕を張り、上手大臣柱の際へ一疊臺を据ゑ、總て能舞臺の飾附よろしく。正面の臺へ毛氈を掛け、長唄囃子連中裃にて居並び、此下手舞臺へ囃子連中、侍烏帽子にて居並び、片シヤギリにて幕明く。と頭取出て、三代目尾上菊五郎三十三回忌追善に、五代目尾上菊五郎が土蜘の所作を勤めるといふ口上あつて這入ると、次第になり、橋懸りより平井保昌出で來り、舞臺眞中へ立ち、

保昌 これは源家の獨武者、頼光朝臣に仕へ奉る、平井の保昌にて候。扨も我が君には此程より、御不例に依て引籠らせたまひ、されば典薬の頭重雅より御藥調進仕り候へども、未だ效驗のあらざ

ろゆゑ、若し物の怪の祟りにやと諸寺諸山の高僧貴僧へ修法を委ねたまひしが、其奇特にや御快く、病も薄らぎたまふよし、出仕いたして御機嫌を伺はゞやと存じ候。

ウタヒ〽浮立つ雲の行方をば〱、風の心に任すらん。〽玆に源の頼光は、病に犯されたまひしも、秋の半の定めなき、空も晴れ行く長月に、長のいたつき快く、暫し端居をなしたまふ。

ト此内橋懸りより源の頼光出で來る、跡より太刀持附添ひ出で、是れにて保昌下手へ來り、頼光上手かつら桶へ掛け、太刀持後へ控へる。

俄に秋の冷氣を催し、風を膚に覺え候、君には如何渡らせ候。

頼光　典藥の頭醫療を盡し、諸山の高僧祈念を凝らす丹精の功顯はれて、昨日に今日は快く、庭前の菊咲き出しを、今しも心慰めに、端居なして詠め候。

保昌　それは一段の事にて候、菊は目出度き草にして、其香をきくも壽命の藥、朝夕に御覽あらば遠からずして御快氣あらん、いと悦ばしき事にて候。

頼光　實に百病の長といふ風邪に此身を犯されて、月を重ねて煩ひしも、思ひ出づれば葉月の末、一條許へをとづれて、

〽秋の長夜も明近く、横雲覆ふ東雲に、盡きぬ別れの袂を別ち、思ひは胸に有明の、月は殘

れる朝まだき、道の邊に咲くむら萩の、露重げなる風情に見とれ、暫し佇む草原に、朝風寒く身に染みて、

心聊か惱ましく、それより惡寒發熱し、遂に枕に就きたるぞ。

ト此内賴光中啓を持ち、よろしくあつて。

保昌　さらば御側に仕ふまつる、四天王を始めとして、御館の者打ち驚き、御介抱なしまゐらす內、

〽恐れ多くも朝廷より、典藥頭遣はされ、君の御脈を診察し、

夏三伏の暑に破れ、秋寒冷の時に發す、元風濕の業にして、是れを瘧病と申すなり、風を逐ふにしくべからずと、御藥調進ありし上。

〽諸寺諸山の高僧貴僧へ、修法を委ねたまひしが。

其效驗にや日ならずも御心よろしくならせたまふは、誠に目出度き御事にて、大慶至極に存じ候。

賴光　汝を始め四天王等も、是れまで每夜宿直なせしが、斯く快くなりたれば、最早宿直に及ばず候。

保昌　未だ御病床に居らせられゝば、常の如くに四天王等と、御側にあつて御守護いたさん。

賴光　今宵はそれに及ばず候、用事あらば呼ばん程に、休息いたして然るべし。

保昌　さらば君の仰せに隨ひ、

頼光　疾く〳〵參りて休息せよ。

保昌　畏つて候。

〽君の仰せに保昌は、暇申して入りにける。（ト保昌下手へ這入る。頼光は一疊臺へ住ふ。）

〽月も雲間へ入側を、侍女の胡蝶は靜々と、御前間近く歩み寄り。（ト下手より胡蝶出で、）

胡蝶　如何に、誰か御入り候。

太刀持　誰にて渡り候ぞ。

胡蝶　わらはゝ御館に仕へ申す、胡蝶と申す侍女にて候。

刀持　誠に胡蝶どのにて候ひしか。

胡蝶　典藥頭より御藥を、持ち參りし由、御申し候へ。

刀持　暫くそれに御待ち候へ、君の御機嫌伺ひて其由申さうずるにて候。（ト頼光の前へ來り下に居て、）如何に申上げ候、典藥頭より御藥を持ち、胡蝶是れへ參られて候。

頼光　此方へと申せ。

刀持　はあゝゝゝ。（ト下手へ來り、）君へ申上げたれば、いざ〳〵此方へ御參り候へ。

胡蝶　畏つて候。（ト前へ出て下に居て、）典藥頭より御藥を持つて參り候。御心は何と御入り候ぞ。

頼光　昨日に今日は快く、小春の頃に至りなば、全く癒ゆると覺えたり。
胡蝶　それは上なき事にて候。
頼光　今は暮行く秋の末、千草に後れ庭前の菊は盛りに咲き出でしが、都に近き山々の紅葉も嘸や染めしならん。
胡蝶　仰せの如く山々は、時雨を待たず染みて候。
頼光　何れが見事に候や、我が病の慰めに、是れにて語り聞かせよや。
胡蝶　御氣慰めとあるからは、いざやお話し申すべし。錦なす樹々を都の名所に、
〽其名高雄の山紅葉、暮るゝも知らで日暮しの、瀧の名忍ぶ愛宕山、〽峰は夕日にまばゆきも、麓はくらき小倉山、殘る青葉を冬近く、染める時雨に笠とりの、山風厭ふ嵐山、散りて流れて流れて散りて、錦織るてふ大井川、飽かぬ詠めの景色かな。
ト胡蝶舞あつて納まる。
頼光　胡蝶が今の物語に、我がいたつきを忘れたり。大儀なりしぞ休息せよ。
胡蝶　仰せに任せ御暇たまはり、典薬頭の御藥を、煎じ參らさうずるにて候。
刀持　胡蝶どのには急がせ候へ。

胡蝶　心得申して候。

〽胡蝶は心得候と、御藥携へ入りにける。(ト胡蝶下手へ這入る。)

〽此處に消え彼處に結ぶ水の泡の、浮世にまはる身こそありけれ、〽實にや人知らぬ、心は重き小夜衣の、恨みん方もなき袖を片しき詫ぶる思ひかな。

ト此内頼光瘧の發せし思入。太刀持誂への小袖を頼光の左の肩へ掛ける。

頼光　今まで快かりしも、瘧病の熱俄に發し、胸苦しく覺ゆるは、病といへど常ならず、實に物の怪の祟りかと、心惑ひて候ぞ。(ト次第になり、)

〽月清き夜半とも見えず雲霧の、掛れば曇る心かな、〽今まで明き燈火の、影さへくらき枕邊に、一人の僧の佇みて、(ト此内花道より、僧智籌出で來り、舞臺へ佇みて、)

智籌　いかに頼光、御心地は何と御入り候ぞ。

〽尋ぬる聲に現とも、夢ともわかず打見やり。

頼光　あゝら心得ぬ事にて候、人に變れる僧侶には、何れよりして參られしぞ。

智籌　これは比叡山の西塔、寶幢院の學寮に住む、智籌と申す僧にて候。

頼光　何ゆゑあつて夜陰に及び、我が館へ參られ候ぞ。

智籌　承はれば頼光朝臣は、重き病に臥したまひ、醫療業を盡すと雖、其效驗あらざるゆゑ、物の怪の祟りとて、諸寺諸山にて高僧貴僧が、惡鬼退散の法を修せど、未だ全快あらざるよし、猶も祈念をいたさばやと、今宵舘へ參りて候。

頼光　それはよくこそ參られたり、諸寺諸山の其內にもわきて叡山は尊き御寺、國家鎮護の祈願所にて然も王城の鬼門に當れり。

智籌　東北の間鬼門の方に一字を建立なす事は、古き例のある事にて、既に天竺の靈鷲山は、王舍城の鬼門に當り、又唐土の天台山は長安城の鬼門に當り、我が日の本の比叡山は平安城の鬼門にして、朝廷本命の靈場なり。

頼光　見受けし所高僧には道德備はる權者と覺ゆ、定めて壯年の頃よりして佛法修行の其爲に、諸國を經歷召され候はん。

智籌　如何にも朝臣の仰せの如く、我も由ある武士の家に產れ候ひしが、父なる者の菩提の爲、一子出家なす時は九族天に生ずといふ、敎へに依つて剃髮なし、

〽身は雲水の定めなく、樹下石上に墨染の、衣露けき旅の空、〽きのふは法の陸の奧、千松島に杖を曳き、けふは行方も不知火の、心筑紫に足を止め。

春の花秋の月、人は稱へて愛れども、
へ塵の浮世を遁れては、樂しからねば目も止らず、降り積む雪に薪水の、行を我が身にたく
らべて、道なき山に分け登り、又は船なき川を渡り、風に吹かれ雨に打たれ、難行苦行の功
積みて、此叡山へ立歸り、遊學なして候なり。

賴光　斯かる尊き高僧の祈念を受くるは忝けなし、いざ修法を賴みたし。

智籌　それは何より易き事なり、五大明王を本尊となし修するなり。

賴光　其五大明王とは。

智籌　東方降三世夜叉明王、南方軍吒利夜叉明王、西方大威德明王、北方金剛夜叉明王、中央大聖不動
明王、是れ五大明王にして東西南北中央と、五ケ所へ五壇を設け、護摩を上げて修するなり。

賴光　して、降三世明王とは。

智籌　尊容三面八臂にして、三世は所謂貪婪癡、此三毒を降ずるゆゑ降三世と是れを名付く。

賴光　して又軍吒利夜叉明王とは。

智籌　尊容則ち六臂にて、左りの肩に輪寶あり、一切の阿修羅惡鬼神を摧伏す。

賴光　して大威德明王は。

智籌　尊容三面六臂にして、惡龍毒蛇を摧伏す。
頼光　して〳〵金剛夜叉明王は。
智籌　尊容同じく三面六臂、左りの御手に輪寶を捧げ、右の手に矢を持したり。
頼光　中央不動明王は。
智籌　尊容忿怒の形相にて、左りに慈悲の繩を携へ、右に降魔の利劒を持ち、一切の鬼魅諸障惱者を降伏す。
頼光　天部の神には本地ありと、承はり及びしが、五大明王にも本地ありや。
智籌　五大明王にも本地あり、降三世は東方の阿閦佛、軍吒利夜叉は南方の寶生佛、大威德は西方の彌陀佛、金剛夜叉は北方の釋迦佛、大聖不動明王は中央大日如來の敎化大慈大悲の誓願なり、斯かる尊き明王を本尊となし奉り、護摩を上げて祈念なさば、惡鬼羅刹魑魅魍魎天魔波旬の鬼神なりとも、修力を以て立所に退散なさん事疑ひなしっいで〳〵五大明王を祈りて、障礙を拂ひ申さん。
へ最多角の珠數携へて、頼光朝臣の御前近く、進み寄りし其影の、最も怪しく見えければ、
ト此内智籌、頼光の前へ寄添ふ。
刀持　なう〳〵我が君、御油斷あるな。

頼光　なに、油斷すなとは。

刀持　火影にうつる僧の姿、いと／＼怪しく存じ候。

〽怪しむ詞に驚きて、袖を返せば傍なる、燈火はたと消えにける。

頼光　風も吹かぬに燈火の、消えしは化生の業なるか。

智籌　やあ愚なる仰せよな、我がなす業と知らざるか。

頼光　左いふ汝は何者よな。

智籌　我が背子が來べき宵なり、さゝがにの、

頼光　蜘の振舞かねてより、

〽知らぬといふに猶近附く、姿は蜘の如くにて、〽掛くるや千筋の絲筋に、五體を包み身を苦しむ。（ト此内智籌巣を出す、）

〽頼光化生と見るよりも、枕邊にある膝丸を、拔き開いて丁と切れば、〽身を躍らして背くる所を、續けざまに薙ぎ伏せつゝ、得たりや應と罵しる聲に、〽又立掛れど、膝丸の、劍の威徳に叶はじと、形は消えて失せにけり／＼。（ト此内智籌又巣を出し、立廻りあつて花道へ這入る）

〽君の御聲訝く、詰所に控へし保昌が、押取り刀に馳せ來り、（ト下手より保昌出で、）

保昌　只今君の御聲高く、詰所へ聞え候程に、急いで是れへ參りて候。

賴光　よくぞ保昌參りたり。

保昌　して、何事にて候ぞ。

賴光　苦しからず候ゆゑ、語りて聞かせ申すべし。保昌近う來り候へ。

保昌　心得申して候。（卜合方になり。）

賴光　扨も今宵夜半の頃、誰とも知らぬ僧の來りて、我が病を問ふゆゑに、夜陰に及び何れより、僧には是れへ來りしと、尋ね問へば殊勝氣に、比叡山の西塔より物の怪の祟りをば退けん爲來りしと、申す詞の訝しさに、詞巧みに佛門の祈念の法を尋ねしに、問ひに任せて一々答へ、軈て障礙を拂はんと、我を目掛けて立寄りし、僧は其儘七尺ばかりの、蜘の形も鬼形に變じ、我に千筋の絲を繰掛け五體を包み、身を苦しめしを事ともなさず、枕邊の膝丸取つて切附けしが、化生は恐れて忽ちに搔き消す如く消え失せたり。

保昌　さては今宵我が君に、障礙を爲さんと來りしは、年經る蜘で候ひしか。

刀持　火影にうつる僧の影いとも怪しく見えけるゆゑ、君にお知らせ申して候。

保昌　いしくも汝認めしぞ、天晴なりける手柄なり。

頼光　此程よりの瘧病は、彼れが障礙をなしつるか、思へば不思議な事にて候、かやうな事に先蹤のりや。

〽問はせたまへば保昌は、打ち頷いて座を進み、

保昌　斯かる例もなきにあらず。

〽昔人皇の初めとかや、紀伊國名草の郡、高野の林といへる所に、二丈餘りの蜘蛛あり、手足は長く力量勝れし、網を張ること數里にして、往來の人を慘害なす。

〽是れに依つて勅命下り、官兵彼の地へ馳せ向ひ、四方へ鐵の網を張り、鐵湯を沸して責めしかば、

〽何かは以て堪るべき、蜘蛛は悶え苦しみて、終に其身は燒け爛れ。果敢なく命を捨てし由、故老の者の談柄に承はりて候なり。

頼光　それに劣らぬ蜘の障礙を、今宵切拂ひ候ひしは、是れぞ劍の奇特ゆゑ、今日よりして膝丸を、蜘切と名附くべし。

保昌　今に始めぬ君の御威光、又膝丸の劍の奇特、旁々御家の譽れなり。

頼光　切附けし時、正に手應へなしたれば、血汐は流れあらざるや。

保昌　仰せの如く此邊に怪しからず血の滴り候、是れを慕ひて障礙なす、蜘の在所をたんだいて、退治なさうと存じ候。

頼光　いしくも保昌申したり、血汐を慕ひ行方を尋ね、

保昌　四天王と諸共に、

頼光　疾く〳〵蜘を退治候へ。

保昌　心得申して候。

〽君命受けて保昌は、勇み進んで走り行く。（ト保昌下手へ這入る。）

〽頼光朝臣も席を替へ、奥殿深く入りたまふ。（ト頼光太刀持下手へ這入る。）

〽程もあらせず廣庭へ、土蜘退治の供觸れに、從者の兵卒立ち出で〻、

ト下手より兵卒軍内、兵作、卒兵出來り、

兵作　こりや軍內、今獨武者の平井殿より、

卒兵　お觸があつたが聞いたるか。

軍內　それは何のお觸であつたぞ。

兵作　今宵御殿へ變化來り、障礙をなさんといたせしゆゑ、

卒兵　變化の居所を尋ね出し、それを退治なすとの事ぢや。

軍内　して其變化は、何でござるぞ。

兵作　比叡山の僧といつて祈念に御前へ來たは僞り、實は年經る土蜘にて、凡そ大きさ七尺ばかり、それに准じて手足も長く、

卒兵　千筋の絲を繰掛けて動けぬやうになしたるも、勇氣勝れし我が君ゆゑ、膝丸の太刀抜きはなし、丁と切附けたまひしかば、

兵作　流石の土蜘敵しがたく、逃げ行く跡に夥しく血汐が滴りありしゆゑ、平井殿を始めとして、

卒兵　四天王の方々が、土蜘退治に行かれるので、物數ならねど我々も其御供をいたすのぢや。

軍内　それは望む所でござる、我等は新參者ゆゑに、未だ手柄をいたさねば、輕い身分の軍卒なれど、いで何事かあつた時は、手柄をなして出世せばやと、兼々待つて居り候、今こそ出世の時到れり誠に嬉しい事でござる。

〽天へも昇る心地して、扇おつ取り悦びの、舞もしどろの上拍子、〽一伸に雲井の空へ羽を伸して、昇る千歳の鶴よりも、出世の雲に飛乗りて、天へ昇るはよけれども、龜の齢の萬歳樂、雲の切目が危うござる。

あゝ有難い／＼出世の雲が舞下りしぞ。

兵作　新參ゆゑに手並を知らぬが、

卒兵　して又武藝は何が得手ぢや。

軍內　何といふ事はない、弓術馬術槍術劍術、凡そ武藝の一通りは、何でもかでも皆得手ぢや。

兵作　三十六計逃げるが勝と、

卒兵　定めて逃げるも得手であらうな。

軍內　それは我等の一の得手ぢや。

兵作　大方左樣で、

兩人　あらうと思うた。

軍內　いや／＼今のは言損ひ、逃して逃げるなどゝいふ、卑怯な事は更にない、いでといふ時には、人より先きへ出るのが得手ぢや。

兵作　それでは人より、

卒兵　先きへ出るか。

軍內　出るとも／＼、後へ下るは大嫌ひぢや。

兵作　いや先きへ出るとは忝けない、是れより血汐の跡を慕ひ、退治る蜘は數年を經て、通力自在の魔物ゆゑ、近寄る者へ絲を繰掛け生血を吸つて殺すといふ。

卒兵　話しを聞いて怖しく、臆病者の我々は後退りをする中に、人より先きへ出るといふは、今もいふ弓馬槍劍、武藝に秀でゝ居るゆゑぢや。

兵作　よき者が組にあつて、我々共は大仕合せ、

卒兵　蜘は生血を吸ふといふから、成るたけ先きへ、

兩人　出てくりやれ。

軍内　いや待て兩人何といふ、其土蜘は年を經て通力自在の魔物ゆゑ、近寄る者へ絲を繰掛け、生血を吸つて殺すとか。

兩人　如何にも、汝がいふ通りぢや。

〽聞いて身の毛も忽ちに、臆病風が襟許へ、染みてがた〲顫へ出し。

兵作　見れば顏の色を替へ、

卒兵　汝は如何いたしたのぢや。

軍内　俄に持病の疝氣が起り、おいたゝゝゝ。腰の筋が引きつッて、歩く事が少しもならぬ、おいたゝ

たゝ。
兵作　土蜘退治に行く時に、汝を先きへ進ませて、
卒兵　我々命を助からうと存じ、力に思ひをつたのに。
軍内　いや、我も人より先きへ進み、手柄いたして出世なさうと、存じ居つた甲斐もなく、おいたゝた。
兵作　それでは退治のお供は出來まい。
卒兵　さて〳〵是れは困つたものぢや。
軍内　決して臆病でいふではない、全く持病の疝氣が起り、おいたゝゝゝ、おいたゝゝゝ、是れでは一寸も歩かれぬ、おいたゝゝゝ、おいたゝゝゝ。
兵作　いや、是れはさつぱりと忘れて居つたが、土蜘退治の前祝ひに、上から御酒を下された。
卒兵　あれは銘酒と申す事ぢや、なるたけ呑手の少ない内に、早く行つて開きませう。
軍内　なに、前祝ひに御酒を下された、それは實の事なるか、我等も一緒に參るであらう。
兵作　汝　疝氣で一寸も、
卒兵　歩けぬといふたでないか。

軍内　今の間にさつぱり直つた。

兵作　それはほんまの事か。

軍内　おゝ嘘でない、ほんまぢや／＼。

卒兵　そちらがほんまなら、こちらは嘘ぢや。

軍内　なに、嘘ぢやとは。

兵作　酒も何も貰ひはせぬ。

軍内　それでは今のは嘘ぢやといふか。おいたゝゝゝ、おいたゝゝゝ。

兵作　あの、こゝな、

兩人　横着者め。

軍内　横着ではない病なるぞ、おいたゝゝゝ。

〽腹を抱へ背を縮め、いち足出して軍内は、我が部屋さして逃げ行けり。

ト軍内、兵作、卒兵の三人花道へ這入る。よき程に橋懸りより、裃を着たる後見二人、冬青の葉を葺き繭葱紙子で覆ひし、山の造物を持ち出來り、舞臺眞中へ据ゑ跡へ下る。これにて一聲になり大薩摩掛りの唄になる。

大ザツマ へそれ松柏森々と長へに生茂り、目差すも知れぬ雨催ひ、更けて往來も嵐吹く、音凄まじき秋の末、芒に道も埋もれて、誰に東寺の藪蔭に、幾歳ふりし荒墳は、哀れにもまた物寂し。

へ折柄松明を振立てゝ、保昌先きに綱公時、續いて貞光季武が、滴る血汐のあとを慕ひ、古墳近く歩み來て、

トこれへ大小なあしらひ、花道より平井保昌白の後鉢卷、さばき髮、唐織の着附、上へ錦のそばつぎ白の大口、附太刀、松明を持ち出で來る。後より渡邊綱、碓井貞光、卜部季武、酒田公時、何れも白の後鉢卷、さばき髮、唐織の着附、白の大口、附太刀、此後へ軍卒四人手綱達附にて出來り花道へ居並び、大小のあしらひにて、

保昌 今宵障礙をなさんずと、御館へ忍び來り候僧は年經る土蜘にて、我が君切附けたまひたる、血汐の大路へ滴りしを、松明の光りに尋ぬれば、爰は東寺の裏手にて候

綱 その土蜘の隱れ住むは、あれなる木立の内なるか、

公時 草生ひ茂る古墳に、人に等しき聲なすは、

貞光 疵の痛みに堪へがたく、苦しむとこそ覺え候。

季武 聲を知るべに窺ひ寄り、力を合せて討取るべし。

保昌　その丈七尺有餘とあれば、千歳經りし蜘蛛ゆゑ、如何なる奇術あらんも知れず、方々油斷したまふな。

四人　心得申して候。

保昌　いで〱あれへ赴き候へ。

〽蜘蛛の聲をしるべとなし、樹々の茂みへ立寄りて、さてこそ變化は爰なりと、人々古墳に打向ひ、大音あげて申すやう。

ト保昌先に皆々舞臺へ來り、造物の傍にて、智籌の聲を聞く思入あつて、上手へ保昌、綱、公時、下手へ貞光、季武、後へ軍卒立並びて、

是れは音にも聞きつらん、頼光朝臣の御内にて獨武者と名を得たる、平井左衛門尉保昌、

綱　我々四人も臣下にて、四天王と呼ばれたる、我は渡邊源次綱、

公時　續いて跡に立ちたるは、酒田主馬之丞公時、

貞光　碓井靱負之丞貞光、

季武　卜部勘解由季武。

保昌　如何なる天魔鬼神なりとも、今立處に命魂斷たん。此古墳を崩し候へ。

軍卒四人 心得申して候。

〽崩せや崩せ人々と、呼はり叫ぶ其聲に、力を得たるばかりなり、〽下知に隨ふ武士の、塚を返し石を崩せば、

ト軍卒四人立掛る、此時後見二人萌黄緞子の布を取除ける。山の造物、四本柱へ紙で拵へし蜘の巣三方一面にかゝりある。軍卒毒氣に恐れし思入にて、たぢ〳〵と跡へ下る。五人松明を上げ、是れを見て扨こそといふ思入。

〽俄に地中鳴動なし、四方へ掛けし蜘の圍より、火焔を放ち水を吹き、左も怖しき有様も事ともなさず大勢が、忽ち崩す古墳の、岩間の蔭より土蜘の鬼神の姿は顯れたり。

ト此内軍卒四人立掛る。蜘巣の左右を破り、絲を打掛ける。是れにてどろ〳〵になり、軍卒目くろめきし思入にて、前の二人たぢ〳〵として左右へ見事に轉る。是れと一緒に正面の巣を引破り、土蜘の精黑頭唐織色なしの着附、錦の法被、紺地金模樣の半切、錦の打杖を持ち出できつと見得。これにて保昌四天王立掛り、きつとなつて、

保昌 さてこそ怪しき鬼形の變化、そも〳〵汝は、

五人 何者なるぞ。

ト五人左右より詰寄る。土蜘の精打杖を構へきつと思入、鼓唄掛りになり、

ツヾミ唄 〽我を知らずや其昔、葛城山に年經りし、土蜘の精魂なり。

ト軍卒二人掛るを投げのけ、打杖を振上げきつと見得。

土蜘 此日の本に天照す、伊勢の神風吹かざらば。

〽我が眷族の蜘蛛群り、六十餘州へ巣を張りて、疾くに魔界になさんもの、〽思ひし望み叶はねば、先づ頼光を惱まさんと、障礙をなせし甲斐もなく、我が命魂を斷たんとや。

ト此内土蜘の精打杖を持ち、軍卒を遣ひよろしく振あつて、

保昌 普天の下率土の濱、王地にあらざる所なし、

綱 此土にあつて日の本を、魔界になさん汝が巧み、

貞光 忽ち天罰その身に報い、

季武 命魂斷つも自業自得。

保昌 疾く／＼變化を討取り候へ。

四人 心得て候。

土蜘 やあ、我を討たんなんどゝは小賢きものどもよ、蟲類なれど千歳の年經し蜘の通力自在、見よ見

よ今におのれらが、五體へ千筋の絲を繰掛け、手足を包み動かさじ。

保昌 假令如何なる通力あるとも、何條討てぬ、

五人 事あらん。

保昌 いで、命魂を斷つてくれん。

〽蜘蛛の精靈繰溜めし、千筋の絲を右左り、投げ掛け〱白絲の手足に纏はり五體を包めば流石の保昌四天王等も、自由に動くこと叶はず。

ト此内鳴物にて土蜘の精は打杖、四天王は太刀を拔き切つてかゝり、立廻りの内土蜘の精千筋の絲を度々打掛け、四天王絲に包まれ困る思入、土蜘の精つか〱と花道へ行く、軍卒追掛け行き立廻りあつて、

〽樹木へ掛けし蜘蛛の圍へ、飛びかふ胡蝶や蜻蛉の、掛りし如く身動きならず、

ト四人を相手に立廻り、此内左右へ絲を打ちかけ立廻りよろしくあつて、舞臺へ來り、四天王立掛りて、

〽暫し困じていどみける。

ト此内土蜘の精は能の振と歌舞伎の立廻り、此の仕組よろしくあつて、

〽されども人々少しも屈せず、神國王地の惠みを頼み、彼の土蜘を中に取込め、大勢亂れ掛りければ、妖魔の術も消え失せて、劒の光りに恐るゝを、得たりや得たりと附入り〳〵、難なく蜘蛛を討取りて、

ト鉦ばたらきになり、土蜘の精、保昌激しき立廻りよろしくあつて、保昌に切られ飛上り、尻ギバにどうと下にゐる。

〽譽れを世々に殘しける。

ト皆々引張りよろしく、片シヤギリ、カケリにて、

幕

土蜘（終り）

新古演劇

十種の内

茨木

解説

「茨木」は明治十六年四月、作者六十八歳の時、新富座に書卸された。其時の役割は、五世尾上菊五郎（叔母眞柴實は惡鬼茨木童子）、市川左團次（渡邊綱）、坂東家橘（家臣右源太）、中村鶴藏（士卒運藤）、尾上松助（士卒軍藤）、尾上菊之助（太刀持音若）等であつた。振附は花柳壽輔で、杵屋正次郎、杵屋六四郎、松島庄五郎、芳村孝次郎、寶山左衞門、望月長左九等が長唄囃子連中として、名前を列ねて居た。

番附の面では、まだ新古演劇十種と銘は打たれてないが、「土蜘」と略ゝ同型の所作事で、後に十種の中に加へられたものである。五代目菊五郎が鬼の腕を安本龜八にこしらへさせたとか、門外で眞柴が面會出來ぬのを恨み嘆く所がよかつたとか、種々の藝談も殘され、好評を得たもの。今日も尙尾上家の家の藝として、時々上演される。挿繪にしたのは先代菊五郎の舞臺寫眞である。

茨木

渡邊綱屋敷の場

長唄囃子連中

〔役名━━綱の叔母眞柴實は茨木童子、渡邊源次綱、家臣宇源太、士卒運藤、同軍藤、太刀持音若。〕

（綱屋敷の場）━━本舞臺一面の置舞臺、正面松を描きし鏡板、上の方臆病口、竹を描きし板羽目、此上黑塗り欅のある棲板、同じく竹の畫。下の方高欄附の橋懸り、此向う板羽目、橋懸りの止り緞子の揚幕、日覆より破風を下し、花道の揚幕同じく緞子模樣の幕。總て能舞臺に准へし飾り附、正面段の上へ毛氈を敷き長唄三絃連中上下にて住ひ、平舞臺に囃子連中侍烏帽子素袍にて住ひ、片シヤギリにて幕明く。と頭取出で、口上あつて臆病口へ這入る。是より本行の鳴物になり、橋懸りより宇源太侍烏帽子素袍小さ刀、運藤軍藤達附一本差しにて出來り、二人は下手へ控へる。宇源太は眞中へ立止り、

宇源　斯樣に候ものは、賴光朝臣の四天王渡邊源次綱に仕へ奉る者でござる。扨も我が主人には此程九條羅生門にて鬼神の腕を切取りたまひ、希代の手柄をなされしが、陰陽の博士たる安倍の晴明が勘文により、一七日の其間前後の門を堅く閉ぢ、御物忌にござるゆゑ、猶も油斷のなきやうに

申し傳へんと存ずる。やあ／＼方々それにあるか。

運藤
軍藤　はあ。（ト士卒二人前へ出て、）

運藤　かねて御主人の仰せに任せ、

軍藤　前後の門戸を、

兩人　守りて候。

宇源　それは一段と大儀でござる、最早七日の御齋も明日一日となりぬれば、堅く門戸を守り候へ。

兩人　心得申して候。（ト宇源太は上手へ住ひ、士卒は跡へ下りて住ふ。是れより唄になる。）

〽それ普天の下率土の濱、王土にあらぬ地のなきに、何處に鬼の住みけるか、夜な／＼東寺の羅生門へ顯れ出て害なせるを、頼光朝臣の四天王渡邊の源次綱、鬼神の腕を切取りて、武名を天下に輝かせり。

ト此内橋懸りより、渡邊綱、立烏帽子素袍大口、小さ刀にて出來る、跡より音若、若柴、臺後、茶筅小袴、小さ刀にて綱の太刀を持ち附添ひ出來り、直に舞臺へ來る。宇源太士卒辭儀をなす。綱眞中へ立留り。

綱　此程君の御館にて宿直の折柄、保昌と詞爭ひなせしより、夜な／＼變化の出るといふ羅生門へ

赴きて、仇なす鬼の腕を切り、思はぬ手柄いたせしも、是れなん綱が武勇にあらず、偏に君が御威德、源家を守る神の御加護にて、此上もなき身の幸ひ、然るに時の博士たる陰陽の道に精しき播磨守安倍の晴明、占方取つて勘考なし、斯かる惡鬼は七日の內に來りて仇をなす事あれば、門戶を閉ぢて齋なし、仁王經を讀誦せよとの、敎へによりて愼み居るも、最早今日六日にて明日一日にて齋明くれば、門戶を堅く守るべし。

宇源　仰せの如く御齋も、はや一日にござりますれば、前後の門を堅く閉ぢ、警固いたして候。

綱　猶も心を用ゐ候へ、

三人　心得申して候。

綱　あら氣詰りの齋やな。

〽綱は心に油斷なく、仁王經を讀誦しつ、門戶を閉ぢて居たりける。

ト綱思入あつて脇座へ住ふ。音若後へ控へゐ。此時後見誂へ緋張りの門をよき所へ出す。

〽かゝる所へ津の國の、渡邊の里よりして、遙々こゝへ叔母の前が、

ト鼓のあしらひにて花道より眞柴白のかつしき鉢卷、唐織の壺折、檜木笠を斜に背負ひ、杖を突き出來り、花道よき所へ留り、

へ甥を尋ねて如月の、梅もいつしか色香失せ、片枝は朽ちて杖突の、乃の字の姿恥かしく、
笠に人目を忍びつゝ、綱が屋敷へ辿り來て、
ト此内眞柴花道にて振あつて、舞臺へ來り、

眞柴　久しう對面なさゞるゆゑ甥の殿の懷かしく、心は急けど老の足、日高き内にと思ひしも、早黄昏のかはたれ時、先づ案内いたさばや。
へ構へ由ゝしき渡邊の、門の外面に佇みて、（ト眞柴思入あつて門の傍へ寄り、）
なう／＼、此家へ案内申す。（ト是れにて宇源太出で、）

宇源　案内とは、誰人なるぞ。

眞柴　わらはは津の國渡邊の、片邊りに住む綱が叔母、甥の殿に逢ひたう思ひ、是れへ尋ねて參りたり早や／＼此門開き候へ。

宇源　折角の御出でなれど、主人事は故あつて一七日の御齋、門戸の出入を止むれば濫りに開き申されず。

眞柴　此門を開かれぬとは、それは如何なる故ありて。

宇源　是れは由々しき大事にて、御齋の內なれば、よしなき事を問はれずと、疾く／＼故鄕へ御歸り

候へ。

ヘあら曲もなき家の子や。

眞柴　綱はそれに居らざるか、遙々尋ね參りしに、なぜ此門を開かぬぞ。

ヘ音なふ聲を綱は聞き、

綱　時もこそあれ齋も、明日一日となりけるに、妨げられんは心憂し、

ヘさりとて老の杖を曳き、尋ねられしを此儘に、内へも入れず戻さんは後めたしと立出て、

ト綱思入あつて門の傍へ來て、

叔母御前には遠路の所、よくこそお尋ね下されたれど、故あつて一七日門戸を閉ぢて齋いたせば假令叔母御前なればとて、門の内へは入れ難し。

眞柴　それは他人の事にして、血筋の叔母を餘所々々しく、門を閉ぢて入れぬとは、

綱　門戸を閉ぢて齋いたすも、私ならぬ則ち主命、此儀ばかりは許し召されい。

眞柴　御主の命とあるからは、是非もなき事なれど、何故あつて齋なすぞ。

綱　祟りを受くる事ありて、身を愼みの齋なり。

眞柴　こは心得ぬ事なるかな、當時都に名の高き頼光朝臣の御内にて、四天王の隨一と言はるゝ綱に似

けなき詞、人の盛りに神ですら祟りのなきと申すのに、何ゆゑ和殿は恐るゝぞ。

綱　是れぞ陰陽の博士たる安倍の晴明が敎へにより、身を愼みての齋なり、假令血筋の叔母御前たりとも、今宵は對面なり難し、知るべき方へ宿りたまひて、七日過ぎて來りたまはゞ、聊か憚る事もなし、打解けて語り申さん。

眞柴　扨は何樣に賴むとも、甥の殿には許さぬとか。

綱　是非なき事とあきらめ候へ。（トきつといふ。）

〽詞情なく言放し、元の座にこそ直りける。（ト綱元の脇座へ住ふ、眞柴ぢつと思入あつて）

眞柴　如何なる事か知らねども、叔母を內へ入れぬとは、さりとは無情き心ぞよ。

〽袖に流の雨降りし、過ぎにし事も老の愚癡。

和殿は母の胎內に、ある內父の元は逝り、續いて母も產後の惱みに果敢なく此世を去りしゆゑ、便りなき身に養ひ取り、貧しき中に育みて、

〽晝は終日肌に負ひ、夜るは終夜抱寢してむづかる時は樣々に、欺し賺して出でもせぬ乳房を含めなんどして、身の老行くも顧ず、成長なすを樂しみに、

月を僂へ日を算へ、年月待ちし甲斐ありて、器量骨柄世に勝れ、

〽頼光朝臣の臣となり、御内の中でも一といひ、二とは下らぬ郎黨と、人の噂を聞く度に。
身にも餘れる我が悦び、其有様を見まほしく、明暮思へど足腰の、自由ならぬに日を送り、
〽今日は時得てやう〳〵と、尋ねて來たを内へも入れず。
外へ宿れと追戻す、斯く情なき者になれと、和殿を叔母は育てぬぞ。よしや齋なればとて母に等しきわらはをば、入れぬといふは無慈悲ぞよ。
〽門に縋りてさめ〴〵と、怨み託てば渡邊も、聞く事毎に歎息なし、兎やせん角と躊躇ひ居る。

ト此内眞柴笠を遣ひ、よろしくこなしあつて泣く、綱是れを聞き切なき思入、眞柴涙を拭ひ、

如何なる猛將勇士たりとも情を知らぬは武士ならず、無情き和殿に愛想が盡きた、血筋を引きし叔母甥の因みも最早是れまでなり、再び面は合さぬぞ。
〽逢はぬといへど逢ひたさに、雨に柳の打萎れ、風に揉まるゝ風情にて、行きつ戻りつ幾度となく、跡を見返り杖を曳き、是非もなく〳〵行過ぐれば、

ト此内眞柴跡へ心の殘る思入にて、行きつ戻りつ行き惱むこなし、跡を見返り〳〵揚幕へ這入る。

〽産の親にも勝りたる、恩ある叔母を此儘に、歸すも本意ならざれば、閉せし門を押開き。

ト綱思入あつて宇源太に門を明けろといふこなし、宇源太心得門を明ける、綱前へ出で向うを見て、

綱　老の運びの捗らず、未だ遠く參られねば、いで〳〵是れへ呼び戻さん。なう〳〵叔母御前、御待ち候へ。

トこれにて揚幕をあげ、眞柴出で、揚幕の際へ立ち、

眞柴　なに、この叔母に待てよとは。

綱　遠路の所御出であつしを、假令物忌なればとて、此儘お歸し申すのは、餘りに本意なき事ゆゑに、只今對面仕らん。疾く〳〵是れへ御歸り候へ。

眞柴　扨は、對面いたすとか。

綱　如何にも。

眞柴　むゝ。

へそれは嬉しき事なりと、老をも忘れて立歸り、躓き轉ぶを手を取つて、從者が案內に座に着けば、こなたは敬ひ頭を下げ、

ト眞柴嬉しき思入にて、つか〳〵と歸り來り、躓き轉ぶ、是れを宇源太手を取り上手へ住ふ、綱眞中にて頭を下げ、

綱　扨只今は齋にて、思はぬ失禮仕り候。先づ御機嫌のよき體を拜し、大慶至極に存じ候。

眞柴　和殿にも變らせなく、目出たうこそ候へ。

綱　御老體のお厭ひなく、よくこそお尋ね下されしぞ。

眞柴　久しうまみえざりしゆゑ、懐さに參りたり。して和殿には何ゆゑありて、齋をいたしやるぞ。

綱　御聞き及びもありつらん。此程東寺の羅生門にて、某鬼神の腕を切取り、比類なき手柄をなし、主人の御感にあづかりしが、陰陽の博士安倍の晴明、斯かる惡鬼は七日の内に、必ず祟りをなすものなり。

眞柴　むゝ。（トぎつくり思入、）

綱　仁王經を讀誦なし、齋せよと敎へに依り、身を愼みて門戸を閉ぢ、人の出入りを止めて候。

眞柴　扨は安倍の晴明が、七日の内に其惡鬼が、祟りをなすと申せしとか。（ト眞柴思入あつて、）いや勇氣勝れし和殿などに、何とて祟りのあるべきぞ。心安う思はれよ。何は然れ津の國へ、歸りて里の人々に、叔母が自慢に語りたい、鬼の腕を切取りし、其夜の次第を聞かしてくりやれ。

綱　それはいとより易きこと、只今お聞かせ申すべし。

眞柴　いざ〳〵是れにて物語り候へ。

綱　心得て候。

〽いざ語らんと座を構へ、（ト綱眞中へ住ひ、扇を持ち思入あつて、）

扨も此程御前に於て、九條東寺の羅生門に夜な／＼鬼の出るを恐れ、行交ふ者のあらざるよし、是れを御内に見屆くる者はなきやと保昌が、申せし詞の爭ひより、某見屆け證を建てんと、

〽鎧兜に身を固め、君より賜はる名刀の、髭切といふ太刀を佩き、丈なる駒に打乘つて、舍人も連れずたゞ一騎。

宿所を出でゝ驀地に、二條大路の大宮を、南頭に歩ませたり、

〽時しも一天掻曇り、降來る雨は春ながら、車軸を流す烈しさに、進まぬ駒に鞭を打ち、手綱引締め九條を過ぎ、東寺の表へ打つて出で、羅生門を見渡せば、茂る樹木に蔭暗く、いでや變化を見屆けんと、

〽駒を放ちて石段へ、登りて證の高札を、建つる折柄鳴動なし、一吹き落す夜嵐と、共に後の方よりして、

〽甲の錣をむんずと摑み、我をば宙へ引き上げたり。

すはや鬼神と太刀を拔き、切らんとなせば、

〽えいと曳く。
機に兜の緒は切れて、
〽段より下へ飛び下りたり。
ト此内綱物語りのこなし、眞柴是れを聞くうち思入あつて、此時無念のこなしあつて、氣を替へ、
眞柴　其時和殿は如何せしぞ。
綱　鬼神を討取り功名せんと、進めば鐵杖振上げて、
〽打つて掛るを身を交し、暫しは挑み戰ひしが、
敵し難く組附くを、しや小賢しと打拂ふ、刃に腕を切落せば、
〽こは叶はじと傍なる、築地に手を掛け飛上れば、忽ち四方に黑雲立ち、目指すも知れぬ空
中に、
時節を待つて又取るべしと、
〽いふ聲幽にいと凄く、鬼神よりも怖しゝ。
早や是れまでと切取りし、腕を持つて立歸り、
〽君の御感にあづかりて、綱が名をこそ上げにけれ。

ト綱物語りのこなしよろしく、眞柴は悦ぶ內に無念のこなしあつて、

眞柴　はて勇ましき和殿の手柄、わらはも上なき悦びなり、して其腕は何れにあるぞ。

綱　惡鬼の祟りなきやうに、唐櫃に封じをなし、堅く祕藏なして候。

宇源　博士の敎へに隨ひて、則ち我々晝夜とも、

運藤　此唐櫃の邊を去らず。

軍藤　きつと警固、

兩人　いたして候。

へ腕を藏めし唐櫃を、御前に直せば。（ト兩人誂への唐櫃を綱の前へ出す。）

眞柴　扨は是れなる唐櫃に、鬼の腕が祕めありとか。

へ心あり氣に摺寄れば、綱は話しを餘所になし、

ト眞柴思はず唐櫃の傍へ行かうとして心附き控へる。綱思入あつて。

綱　絶えて久しき叔母御前に、過ぎ越し方の物語りは、跡にて緩々申し上げん。先づ何は兎もあれ御氣慰めに、御酒を一獻參らすべし。

運藤
軍藤　畏つて候。

〽主人の命に家の子が、瓶子土器携へ出で、

ト運藤軍藤瓶子と土器を載せし三方を持ち出で、眞柴の前へ出し、

宇源　いざ一獻、

兩人　聞召し候へ。

眞柴　酒は何よりわらはが好物、辭退いたさず進めに任せ、どれ〳〵一獻過しませう。

ト眞柴土器を取上げる。宇源太瓶子を取り酌をなす。

綱　こりや音若、叔母御前へお肴いたせ。

音若　はつ、畏つて候。（ト太刀を下へ置き、扇を持つて前へ出る。）

〽君が代は四つの海原穩かに、風も渚へ漕ぎ寄する、千船百船帆を疊む長閑き空の八重霞、たつや蘆邊のあしべの田鶴の、千代の羽重ね磯馴松、翠色増す春のさゞなみ。

ト音若扇をさし、振よろしく。此内眞柴酒を呑む事あつて、

眞柴　年に似合ぬ音若が指手引手の面白さ、何よりの持成なるぞ。（ト土器を三方に載せ、）これは和殿へさし申す。

綱　我等は七日の齋中、土器は手に取り離し、未だ餘寒も烈しければ、叔母御前にはお重ねあれ。

眞柴　左あらば和殿が進めに任せ、最一つわらはが重ね申さん。
　　　ト又土器を取る、宇源太酌をなす、眞柴呑み終る。

宇源　叔母御前樣へ申し上げます。

眞柴　何事なるぞ。

宇源　只今是れなる音若がお肴に舞を舞ひましたが、叔母御前樣の舞の一手、久しう拜見いたしませぬが、お育てなされし甥御樣が、斯かるお手柄なされたるは、誠に目出度きことなれば、舞を御所望申したし。

眞柴　昔は舞も舞うたれど、斯く年老いし上からは、足の踏度も覺束なし、舞は平に許しくれよ。

宇源　ではござりませうが、御祝儀に。

運藤　何卒一指。

軍藤　御舞ひ下され。

綱　御大儀にも候はんが、某もまた齋にて、何となく鬱々と心沈みて候へば、共々舞を御所望申す。

眞柴　和殿が所望とあるからは、舞はぬといふも興がなく、一指舞ふも齋を、たゞ慰めの爲なれば、老の手振の拙きは、何れも許し候へや。

綱　御許容ありて大慶なり、いざ〳〵是れにて、

三人　御舞ひ候へ。

眞柴　あら、面なきの事にて候。

〽酒の機嫌を假初に、指手引手の末廣や。（ト眞柴扇を持ち前へ出て、謠にて）

ウタイ
〽榮え久しき神の松。（ト舞の振あつて、）

〽津の國に年を重ねて住の江の、岸の蘆間へ打ち寄する、額の浪に越し方を、思ひ出見の濱遊び、梅の花貝櫻貝拾ふ乙女も春過ぎて、〽誰にあふぎの御田植、流の水の淺澤に、深き契りの潮崎、濡れにし中も夏の夜の、〽短き緣立つ秋の、風に結びし露の散り、一人津守の浦淋し、〽遠里小野の問ふ人も、霰松原冬枯れて、今は甲斐なき老の身を、かこつ依羅の小夜時雨、〽昔戀しき舞の袖。

ト此内春の件は若き時の心にて派手なる節、夏秋は口說き模樣、露の散りといふ件は夫に別れし心、冬の件は年とりし心、今は甲斐なきといふ件は腕のなき思入にて唐櫃へこなし、小夜時雨にて老となりしを泣き、昔戀しきにて、舞の模樣になりよろしく振納まる。

三人　やんや〳〵。

眞柴　年を重ねし老の身の、心に任せぬしどろの舞、いと恥かしき事にて候。
綱　昔に變らぬ御舞振、ほとんと感じ入つてござる。
眞柴　和殿の頼みに舞を舞うたが、今更叔母が改めて、和殿へ一つの頼みあり、聞入れてくれられうや。
綱　如何なる事か存ぜねど、我が身に叶ひし事ならば、如何で違背いたしませうぞ。
眞柴　頼みといふはそれにある、羅生門で切取りし、腕をわらはに見せてたべ。
綱　さては是れなる腕をば。
眞柴　書には見れども正眞の、鬼を未だ見たる事なし、最早六十の關を越せば明日をも知れぬ老の體、死して冥土へ赴かば和殿の親に斯く〳〵と、手柄の次第を聞かせたい、冥土の土産に此叔母へ、腕を一目見せ候へ。
綱　七日の内は唐櫃の蓋を必ず明けるなと、晴明よりの戒めなれど、一方ならぬ大恩ある叔母御前のお頼みゆゑ、竊に腕を御目に掛けん。
眞柴　それは何より忝けなし、わらはが望みも是れにて叶ひ、(ト思入あつて氣を替へ)上なき此身の悦びなり。
綱　いざ〳〵是れにて、御覧候へ。

眞柴 あら嬉しき事にて候。

〽時を得顔に結び目を、解く間遲しと待つ内に、從者が櫃の蓋取れば。

ト此内綱宇源太へ思入、宇源太心得、唐櫃の紐を解き、運藤軍蔵蓋を取る、眞柴側へ寄り。

〽傍へ摺寄り差覗き、

さてこそ是れが切取りし、鬼の腕でありけるか。

〽ためつすがめつ稍暫し、打守りて居たりしが、次第〳〵に面色替り。

ト眞柴櫃へ手を掛け、中なる腕を見る思入よろしくあつて、よき程に鬼の半面になり、櫃の中をきつと見る。

〽隙を窺ひ彼の腕を、取るよと見えしが忽ちに、鬼神となつて飛上れば、さてこそ變化逃さじと、綱は跡をば追行けり

トどろ〳〵早笛になり、眞柴櫃の中より鬼の腕を取り、きつとなつて立ち上り、橋懸りへ走り這入る。綱太刀を取り、跡を追駈け橋懸りへ這入る。音若臆病口へ這入る。士卒兩人鬼に怖れ倒れ居る、宇源太もおどろきし思入。

宇源 これ〳〵兩人、如何せしぞ、氣を慥に持て〳〵。

運藤　あゝ恐ろしや〳〵、津の國の渡邊にござる、叔母御樣と思ひの外、

軍藤　羅生門で御主人に、腕を切られた鬼であつたか。

兩人　あゝ、こはやの〳〵。

宇源　舞の内に唐櫃へ心を寄せるは何ゆゑなるか合點行かずと思ひしが、さてこそ變化であつたるか。

運藤　おのが腕を取返さんと、叔母御樣に化け居つた。

軍藤　鬼めがかつと睨んだ顏が、未だに目先きに見えるやうで。

兩人　あゝ、こはやの〳〵。

宇源　成程安倍の晴明は世にも名高き博士とて、七日の内に祟りのあるを、疾くより知られし事と見える。何はさて置き御主人が、追駈けてござつたれば、跡より參つて御加勢なさん。其方共も一緒に參れ。

運藤　參りたうはござりますが、足が顫うてなりませぬ。

軍藤　どうぞ許して下さりませ。

宇源　日頃御扶持をたまはるは、何の爲と思ひ居る。さあ〳〵一緒に參れ〳〵。（ト兩人を引立てる。）

運藤　何時の間にか日は暮れて、闇さはくらし、怖さは怖し。

軍藤　跡からそろ〳〵參りますから、先づ〳〵お先きへ、

兩人　おいでなされい。

宇源　さて〳〵役に立たぬ奴ぢや。

兩人　あゝ、怖やの〳〵。

〽臆病風に士卒ども、首筋許がぞく〳〵と、怖さに身内顫はれて、しどろもどろに探り合。

ト此内かすめてどろ〳〵闇がりの思入にて、三人探り合ひの可笑味、士卒行當りびつくり飛びのき。

運藤　やあ、鬼か。

軍藤　いや、軍藤だ。

運藤　やれ〳〵怖い事ではある。（ト又探り合ひ宇源太運藤を捉へ）

宇源　おのれは鬼か。

運藤　いや、運藤でござる。

宇源　鬼は何れへ逃げ居つたか。

兩人　鬼は何處ぢや〳〵。（トどろ〳〵の入りし鳴物にて三人探り合ひ、一緒に鉢合せをなし、）

三人　あいたゝゝゝゝ。

〽くわつしと打つて自ら出た、火影に閃鑠の雲晴れて、

ト三人天窓をさすりよろしくあつて、宇源太向うを見て。

宇源　あれ／＼玄關の破風を破り、變化は彼處に顯れしぞ。

運藤　又もや鬼が出ましたとか。

兩人　怖ろしや／＼。（ト兩人顛へ居る。）

〽妖魔の障礙に鳴動なし、人々恐怖なす折しも、破風を蹴破り顯れ出で、閃鑠を睨みし有樣は、身の毛も彌立つばかりなり。

ト早笛になり、橋懸りより茨木、角のある白頭、鬼の半面衣裳腕掛け、左の小脇に腕を搔込み錦の鐵杖を持ち出來り、跡より綱太刀を持ち出來り、橋懸りにてちよつと立廻り舞臺へ來り、又立廻つて茨木きつと見得、運藤軍藤恐れて俯伏しになる。

茨木　いかに、渡邊源次綱、過ぎし夜東寺の羅生門にて、兜の錣を引き切りし、我こそ茨木童子なり。

綱　さては世上で噂ある、茨木童子でありしよな。（ト鼓唄になり。）

〽我が通力にて津の國の、叔母が姿に身を變じ、

茨木　汝に切られし腕をば、取返さん其爲に、

綱　へ是れまで來ると知らざるや。正しき叔母と思ひしゆゑ、祕藏なしたる腕をば、見せしは綱が誤りなり、いでや汝を討取らん。

へ綱は怒りて早足を踏み、討たんとすれど虛空にあり、飛行自在の通力に。

ト綱切つて掛かる、茨木鐵杖にて受留め立廻り、通力により合方鳴物にて立廻り、これへ宇源太搦み士卒恐れる可笑味などよろしくあつて。

へ如何にがなして討取るべしと、思へど黑雲立ち覆ひ、鬼神の姿は消え失せけり。

ト此内立廻つて、茨木つか〳〵と花道へ行く。

へ猶時を得て討取るべしと、妖魔に恐れぬ武勇の程、感ぜぬ者こそなかりける。

ト茨木は花道にてきり〳〵と廻つて、どうと下に居る。綱よろしくあつて段切を踏み、カケりにて、

幕

ト幕引附けると大どろ〳〵になり、茨木立上り、後を見返り、笑ふ思入あつて、切られたる腕を左へ搔込み、向うを見てきつと見得。誂へどろ〳〵の入りし鳴物になり、片手六法にて揚幕へ這入る。知らせに附き跡シヤギリ。

茨木（終り）

新古演劇
十種の内

一ツ家

解　說

「一つ家」は明治二十三年四月、市村座に書卸された。作者七十五歲の時である。其時の役割は五世尾上菊五郞（一つ家の老婆いばら、船乘島歸りの佐渡七）岩井松之助（旅の兒花若實は觀音の化身）、尾上榮之助（一つ家の娘あさぢ）、尾上松助（掃除坊主堂念）、尾上幸藏（忍びの者野育の馬藏）、尾上菊四郞（同野原の草六）、尾上梅助（定番人久助）等であつた。

能樂臭味の殆どない點に於て、新古演劇十種中異色あるものといつてよからう。例の淺草の姥ヶ池の故事を劇化したもので、全篇を夢の趣向にしたもので、醒めてからの場も評判であつた。

一ツ家

浅茅ヶ原一家の場
觀音堂夢の場

竹本連中

〔役名――一ツ家の老婆茨、惡者野育の馬藏、同原中の草六、堂番久助、所化堂念、遊び人佐渡七。旅の兒花若實は觀音の化身、一ツ家の娘淺茅等。〕

（淺草一ツ家の場）――本舞臺三間の間常足の二重六枚飾り、丸太柱、藁葺屋根竹緣附き、正面三尺繩簾の納戸口、上手崩れかゝりし鼠壁、下手古き杉戸、明け立て、眞中に切株の踏臺、上の方後へ下げて藁葺屋根反故張りの障子屋體。上手より納戸口の柱へ誂への太き繩を結びあり、いつもの所丸太柱竹簀戸の入口、此脇崩れし四つ目垣、平舞臺上手誂への池布を張り芒生茂り、すつと上に槐の立木、下手二段に藪疊、花道舞臺下手へかけ芒の土手板、二重よき所に圍爐裏、これへ自在竹にて罐子を掛け、傍に笊に茶碗を入れ、此脇に絲車古き籠行燈あり、總て淺草一ツ家の體。爰に馬藏、草六細達附にて緣に腰を掛け、煙草を呑み居る。此見得、風の音木魚入りの合方にて幕明く。

馬藏　此頃の濕り續きで、うまい酒も呑まねえから、婆さまに錢を借りに來たら、いゝ鳥を連れて來

い、さうしたら錢を貸して遣らうと、木で鼻を括つたやうに、無一國な斷りやう。
草六　いゝ鳥を連れて來ても、碌な錢はくれねえが、袖に出るより樂だから、街道筋へ頑張つて、道に迷つた旅人を勸め、此一ツ家へ連れて來て、分前を貰ふのだ。
馬藏　十日程あとに奥州から、都へ登る座頭を見附け、無理に勸めて泊らせたが、こいつが身裝は惡かつたが、官金とやらを持つて居て、大した金になつたと見え、一貫おれに褒美をくれた。
草六　百の錢でも容易にはくれねえ婆さまが、一貫といふ纏めた錢をくれたのは、餘つ程持つて居たと見えるな。
馬藏　四五十兩もあつたからか、いつになく機嫌がよく、今夜は一杯呑んで行けと、濁り酒の馳走になつた。
草六　聞けば毎晩泊る者を、殺して金を取るといふが、旅人の中にも力のある强い者があらうのに、よく女の手で殺されるな。
馬藏　そりやどんな强いものでも、一思ひに殺すのだ。
草六　なに、一思ひに殺すといふは。
馬藏　晝でも暗い一間へ連込み、旅人に石の枕をさせ、寢入つた時分に此繩を切ると、上に釣つてある

大きな石が天窓へ落ち、たゞ一思ひに殺した上で、持つてる金から衣類を取り、死骸は野中へ埋めてしまふが、人里放れた一つ家ゆゑ、誰も知つてるものはねえ。

草六　年は取つても巖乘に、見るから一癖ある婆さま、强慾非道なあの腹へ、どうしてあゝいふ娘が出來たか、高位なお方のお姫さまといつても耻かしからぬ、器量姿ばかりか心まで、親孝行で慈悲深く實に惜しい娘だな。

馬藏　それゆゑ度々お袋へ、異見をするが聞き入れず、益々募る非道の働き、親の心の直るやう、觀音さまへ朝夕參り、お願ひ申すといふ事だ。

草六　そりやあ何よりいゝ事だが、觀音さまの御利益で、婆さまの心が直つたら、旅人を連込む手前もおれも、頸が干るといふものだ。

馬藏　靈驗あらたかな觀音さま、必ず利益があらうから、今の内いゝ鳥を連込んで、割を貰ふと仕よう。

草六　それはさうと彼岸から、急に寒くなつて來たな。

馬藏　まだ今日は九月の廿日、寒くなりやうが早いやうだ。

草六　それといふのも吹拂ひの、原中ゆゑに寒いのだ。

馬藏　何にしろ日が入つて、旅人が道に迷ふ時分、

草六　街道筋へ繩を張り、いゝ鳥を連込んで、

馬藏　一杯呑んで、

兩人　溫たまらう。

ト右の鳴物にて兩人花道へ這入る。知らせに附き、上手出語り臺の霞幕を切つて落す、爰に竹本連中居並び、出語りの淨瑠璃になる。

〽武藏野の芒の埋む道の果、一むら茂る淺草の、森を隔てし一ツ家は　鬼の住家と夕暮に、秋霧深く立ち覆ひ、〽ト本釣鐘を打込む。

〽爰はいづくか白露の、結ぶ千種を踏分けて、馴れぬ旅路に行き暮れし、兒は野末にたゞずめば、老婆は納戸を立ち出でゝ。

ト此内本釣鐘をあしらひ、花道より兒花若、振袖、指貫、草履菅笠と杖を持ち出來り、花道にて行き惱みし振あつて佇む。此時奥より老婆茨、白髮鬘好みのこしらへにて出來り、竹椽より向うを見る。床の合方にて、

老婆　今まで見えし富士筑波も、雨氣に山の影もなく、見る間に空もかき曇り、軒端に暗き黃昏時。

兒　ならはぬ旅に行き惱み、日もはや西へおちこちの、野寺の鐘にいとゞ猶、憂きを身に知る秋の暮。

老婆　浮世放れし一ツ家に、常に訪ひ來る人もなく、時知り顏に音づれるは、川原へ落る雁の聲。
兒　あはれます穗の萩芒、生ひ茂る野をそこはかと、心細道たどりしが、いづくを里と夕暮に。
老婆　早や入相を告げたれば、淺草寺へ參詣に、行きし娘の歸る時分。
兒　向うに見える草の家へ、便りて今宵の宿りを賴まん。
老婆　柴折りくべて湯を沸し。
兒　暮れぬ其間に少しも早う。
老婆　夜食の支度を、
兒　今宵の宿りを、
兩人　さうぢや〳〵。
　　へ夕告鳥も啼きつれて、塒を急ぐ暮相に、柴の扉に立寄りて、
　ト兒向うへ思入あつて門口へ來る。此内老婆は下手にある古き籠行燈へ燈火を點し、絲車を出す、兒門口にて思入あつて。
兒　此家のうちへ案内申す。
老婆　往來稀な一ツ家へ、案内とは誰人ぞや。

兒　これははる〴〵都より、心願ありて東路の、觀世音の靈場を巡拜いたすものなるが、馴れぬ旅路に行きなやみ、暮に及びて難儀いたす、一夜の宿りを御無心申す。（ト老婆これを聞き思入あつて）

老婆　それは嘸かし、御難儀ならん。

〽宿りを乞ふは幸ひと、老婆はうなづき立ち出で﹅、兒の姿を打ち見遣り、

ト老婆は低き下駄をはき、門口へ行きて兒の姿を見て、よき鳥なりといふ思入あつて。

見ればお兒の一人旅、御難儀とあるからはお宿申すは安けれど、御覽の通りの荒屋に、夜るの物がござりませねば、

兒　其お心遣ひには及びませぬ、宿さへお貸し下さらば、簀の子の端でも苦しからず。

老婆　御不自由さへお厭ひなくば、今宵のお宿いたしませう。

兒　それは千萬忝なし。

老婆　御無心ゆゑにお泊め申すも、

兒　誠に是れぞ一樹の陰、

老婆　一河の流れ、

兒　他生の緣、

老婆　むさくるしくも先づ〳〵あれへ、

兒　御免下され。

〽さあ此方へと案内に連れ、他生の縁の端近く、會釋をなして座に附けば、老婆は鑵子の湯をつぎて、(ト老婆は案内をして兒を上手よき所へ住はせ、茶碗へ鑵子の湯を汲取り、)

老婆　さあ、お溫くともお湯一つ。

兒　必ず構うて下さるな。

老婆　何をお構ひ申したうても、里を放れし此一ッ家、差上げるものもござりませぬが、觀音堂へ參りました娘が歸りましたれば、夕御膳を上げませう。

兒　先刻支度をいたしたれば、其御用意には及びませぬ。

老婆　お支度をなされたら、餅なと上げませう。してお兒には何れより、何れへお出でなされます。

兒　唯今も申せし如く、都の空より東路の、所々の靈場巡拜なせしが、分けて靈驗あらたかと聞き淺草寺の觀世音へ參詣なさんと來りしが、秋の日の暮れ易く、如何はせんと難儀せしが、今宵の宿をお貸し下され、誠に安堵いたしました。

老婆　いまだお年も行かぬのに、御靈場を巡拜とは、御殊勝なお心ゆゑ、お宿申すも外ならず、觀世音

への御恩報じ、お心置きなく御ゆるりと、御休息なされませ。
兒　觀世音へ御恩報じに、泊めて下さるお志し、お慈悲深い事でござる。
老婆　明日にも彌陀の迎へが參れば、彼の世へ行きます老の身に、後世の苦患を遁れん爲、慈悲善根をいたしまする。
兒　それは何よりよき功德、老は斯くこそ有りたき事なり。
老婆　なるたけ罪を作らぬやう、火を取る蟲さへ殺しませぬ。
〽さも殊勝げに言ひ廻す、口と心の裏表、窺ふ老婆、兒もまた、此家の四邊見廻して、
ト老婆わざと殊勝に物を言ひ、門口を窺ふ、兒はこなたの絲車を見て、
兒　御老母に承るが、それにある其車は、何に用ふるものなるか、都にて見馴れぬ器物。
老婆　これは御存じなき筈なり、鄙に住ふ賤しきものが、手業にいたす絲車、枠がせ輪と申しまする。
兒　はて珍らしき枠がせ輪、如何いたして用ふるものか、苦しからずば其業を、手前に見せては下さるまいか。
老婆　それは何よりお易いこと、お望みならば絲を繰り、只今お目に掛けませう。
兒　都へ歸りて話し草、お氣むづかしくも今爰で、

老婆　賤しき業もお慰み、

兒　珍味にまさるお持成、

老婆　どれ、お目に掛けませうか。

〽傍にありしわくがせ輪、絲車をば引寄せて、繰出す綿の絲よりも、細き老女が皺枯れし、聲もあはれに謳ふ歌。(ト老女下手にある絲車を出し、絲を繰りながら唄を謳ふ、)

ウタ　〽秋の名殘りを惜しみて啼くか。(ト是れより下座へとりて、)

〽鹿の遠音もかれ〴〵に、〽時雨も近くさら〳〵と、小夜の嵐にちる紅葉。

ト老婆一くさり謳ひ絲を取る、兒感心して是れを見る。此内花道より淺茅、草色石持田舍模樣の半振袖、娘のこしらへ、片棲端折り、草履にて、藁で捻りし百度の數取りを持ち出來り、花道にてちよつと思入あつて舞臺へ來り、誰か人が居るといふ思入にて、門口より内を覗き居る、老婆は唄一杯に絲を取りしまふ。

兒　唱歌といひ手業といひ、面白い事でござつた。

老婆　賤しき業をお目に掛け、お恥かしうござりまする。

〽門に始終を窺ふ娘、差足なしてこなたへ來り、(ト娘は門口にて窺ひ花道の方へ來り、)

娘　情なや、今宵もまた泊り人がある樣子、此惡業の直るやう、お願ひ申して歸りしに、

〽なぜ御利生のない事かと、託ち淚を袖にて拭ひ、（ト娘は宜しく思入あつて門口へ來り、）

かゝさん、今戾りましたぞえ。

老婆　おゝ、娘戾つたか、歸りの遲いを案じて居た。

〽言ひつゝ門の簀戶を明け、這入る娘を見返りて、（ト娘は簀戶を明け內へ這入る、老婆見て、）

娘　常念佛の御出家が、地獄をかいた繪卷を出して、此世で罪を作るものは、來世は無間地獄へ落ち呵責の憂き目を見るといふ、お話しを聞いて居たので、それで遲くなりましたわいな。

老婆　そんな話しを聞かずとも、早う歸つてくれゝばよいに、今宵も道に行き暮れし旅のお方をお泊め申し、かねての手筈、いや、手が入るゆゑに待つて居たのぢや。

娘　それでは今宵も旅のお方が、こちらへお泊りなされましたか。

〽火影に見れば兒髷の、玉を欺く美しき、姿に見惚れ思はずも、

ても、美くしい。

〽跡は得言はず、恥らへば、

ト此內娘は氣の毒なといふ思入あつて、そつと兒の顏を見てびつくりなし、俄に形を作り恥しき思入

にて俯向く、合方になり。

老婆　これ娘、ちよつと御挨拶をしやらぬか。（ト娘思入あつて、）

娘　あなた、ようお泊りなされましたな。

兒　是れは此家の娘御なるか、今宵の宿りを御無心申し、いかいお世話になりました。

老婆　折角のお泊りなれど、里を放れし一ツ家に、何を參らす物もなく、興のない事ではある。

娘　金龍山の米饅頭でも、買うて參りませうかいな。

老婆　娘の身にて夜道は物騷、餅を燒いてと思うたが、信濃土産の蕎麥粉があれば、蕎麥がきをして上げようわいの。

娘　ほんに、それがようござります。

兒　お志しは忝けないが、決してお構ひ下さるな、只泊めてさへ下されば、それが何よりの馳走でござる。

老婆　左樣なればお心任せに、何もお上げ申しますまい。

娘　あなたは、都のお方でござりませうな。

兒　如何にも都の者でござる。

娘　都は名所の多いところと、承はつて居りますが、どうぞ名所のお話しをお聞かせなされて下さりませぬか。

兒　お望みならばお禮旁々、都のお話しいたしませう。

老婆　年老いし此婆さへ、未だ都へ參りませねば、冥土の土產に名所のあらまし、お聞かせなされて下さりませ。

兒　さらばお話し申しませう。

〽扇を笏に座を進み、(ト兒扇を持ち思入あつて、)

申すも恐れ多けれど、都は君の御座所にて、四方の名所も多かる中に、

〽先つ東には知恩院、誰白張りの傘に、名高き舞臺の淸水や、祇園の社建仁寺。

西は愛宕の山聳え、

〽小倉の紅葉くれなゐの、花も大井の川へ散る、ながめは外にあらし山。

南は宇治の平等院、

〽扇の芝や柴屋町、誰と伏見の色里に、鳥鐘うらむ撞木町、淀の渡りに幾返り、通ふ小船の雁燕。

北は加茂川金閣寺、八瀬や大原の賤の女が、
〽黒木を賣るに朝まだき、まはる洛中洛外の。
名所は詞に盡されじ。
〽その大凡は斯くぞかしと、語り終れば二人は悦び、
ト此内兒は扇を遣ひよろしく振あつて納る、娘は嬉しき思入にて、

娘　夢にも知らぬ都のお話し、委しく名所を承はり、得を得ましてござりまする。

老婆　其話しに聞惚れて、夜の更けたのも知らざりしが、里と違つて野中ゆゑ、夜風に寒うござりますれば、焚火をいたして上げませう。（ト娘薪を見て、）

娘　かゝさん、薪がござんせぬぞえ。

老婆　背戸に枯木が積んであれば、枝をこなして持つて來よう。（ト立上るゆゑ、）

兒　我等への馳走なら、其まゝにして下されえ。

老婆　いえ／＼、年寄の身は寒さも一倍、わたしも焚いてあたります。
〽年寄ながら氣も輕く用意の鉈を手に提げて、いそ／＼として門の口。
ト老婆戸棚より誂への鉈を出し、是れを持ち門口へ出で、

娘　これ娘、ちよつと來い。

老婆　あい、何ぞ用でござんすかえ。（ト娘門口へ來る。）

娘　お客人もお草臥ゆゑ、先きへ寐ようと言はれたら、あの一間へ案内して、いつものやうに、合點か。

老婆　あい、承知して居りまする。

娘　火の用心が惡いから、一間へ燈火を入れまいぞ。

老婆　それも承知して居ります。

娘　かねての言附、忘れまいぞ。

〽老婆は娘に言ひ含め、茂る裏手の藪傳ひ、背戸の方へと急ぎ行く。

ト老婆娘に言附け、逃すなといふ思入して、下手の蔭へ這入る。時の鐘になり。

〽跡見送りて溜息を、つき出す鐘も娘氣の、胸に響きてとやせんと、思ふも戀の絆に搦まれ物思ひげに側へ寄り、

ト此内娘兒を逃さうかといふ思入あつて、逃すも惜しき思入にて兒の傍へ來る。淨瑠璃の切れより媚めきし合方になり。

娘　あなた、お草臥れなされましたらうな。

兒　馴れぬ旅路に踏み迷ひ、餘計な道を歩きしゆゑ、思ひの外に草臥れました。
娘　お草臥ならおみ足をお擦り申して上げませう。
兒　思召しは辱けないが、決してそれには及びませぬ。
娘　左樣な事をおつしやらずと、擦らせて下さりませ。
兒　一夜の宿りを賴みたる、恩ある此家の娘御に、どうして足が擦らせられうぞ。
娘　そんな御遠慮なされずと、擦らせて下さりませ、わたしやお擦り申したうござります。
　〽詞をしほに寄添ひて、擦り掛かるを振拂ひ、
兒　何というても娘御に、此足は擦らせられぬ。
娘　それでは賤しいわたしゆゑ、あなたはおいやでござりますか。
兒　決していやではなけれども、
娘　おいやでなくば私が、
　〽女子の口から打附けに、お恥かしい事ながら、觀音さまから歸りし時、ふつとあなたのお
　　顏を見て、
　ぞつとする程思ひ初め、

〽こんな殿御を持つならばと、思へど賤しい此身ゆゑ、せめてお側でおみ足でも擦りたいのが身の願ひ。
どうぞ叶へて下さりませ。
〽割なき頼みこなたもまた、岩木ならねば憎からず、
ト此内娘兒を捉へ、さはりの振よろしく、兒も思入あつて。

兒　それ程までに此身をば。
娘　あいなあ。（ト娘は嬉しきこなし。）
兒　すりや、どうあつても。
娘　何はともあれ、あの一間へ、
兒　勝手知れねば、案内しやれ。
娘　お危なうございますから、お手を取つて上げませう。
〽娘が案内に連立ちて、
〽戀の闇路のくらがりへ、打ち連れてこそ入りにける。
ト娘兒の手を取り、上手屋體の内へ這入ると、本釣鐘を打込み。

〽時刻も更けて三更の、子の刻の鐘かう〳〵と、夜風に響く芒原、老婆は背戸より立出て、
內の樣子を窺ふ折、雲間を漏るゝ廿日月、これ幸ひと鉈の刃を石にてりう〳〵研ぎすます、
こなたへ二人の惡者が、四邊窺ひ忍び寄り、
ト此內本釣鐘をあしらひ、下手藪蔭より以前の老婆粗朶一把と鉈を持ち出來り、內を窺ふ。此時下手後へ灯入り廿日の月を出す、老婆思入あつて、下手の石にて鉈の刃を研ぐ、此時下手より幕明の二人出で、

馬藏
草六　伯母御。

老婆　これ。

〽是れと制して耳に口、打ち囁けばうなづいて、（ト老婆は兩人を制して囁く、兩人頷いて、）

馬藏　そんなら今夜は旅の童が、

草六　泊りに來たを幸ひに、

老婆　只一思ひに殺す氣だが、若し仕損じたら逃さぬやう、

馬藏　裏手へ廻つて、

草六　頑張りませう。

老婆　必ずぬかるな。

兩人　合點だ。

〽牒し合せて兩人は、藪の小蔭へ忍び入る。（ト兩人下手藪の蔭へ這入る。）

〽時こそよしと門を明け、老婆は内へ窺ひ入り。（ト老婆は粗朶を提げ内へ這入り、）

老婆　これ娘、こなして持つて來たぞ、娘々。

〽呼ぶ聲聞いて一間より、跡を見返り、娘は立ち出で、（ト上手屋體より娘は出で、）

娘　かゝさん。（ト老婆小聲にて、）

老婆　兒が見えぬが、寐かしたか。

娘　いつもの所へ寐かしました。

老婆　それはよく寐かした、寐たとあらば釣繩切つてしまひ。（ト鉈を持つて立ち掛るを留めて、）

娘　かゝさん、待つて下さんせ。

老婆　何で切るのを留めるのだ。

娘　まだ寐入つた樣子でなければ。

老婆　いや、期を延ばして氣取られたら、此身の大事、猶豫はならぬ。

へ留める娘を突きのくれば、是れなう待つてと取附くを、邪魔立てすなと行きかける、足に障りし以前の粗朶、蹴のける機會脾腹を打ち、うんとばかりに倒る丶娘、邪險非道に見向きもせず、一間より取る釣繩を、はつしと切ればどつさりと、落ちたる石の響にて、燈火消えて眞の闇。

ト此内老婆繩を切らうとするを、娘留めろ立廻りのうち、粗朶へつまづき、是れを蹴のける機會に娘の脾腹を蹴る、是れにて娘倒れる、粗朶は圍爐裏の內へ這入る。老婆は是れに構はず釣繩を鉈にて切る、どつさりと石の落ちし音して行燈消える。忍び三重になり、老婆きつと見得、探りながら上手の屋體へ行く。

へ勝手覺えし我が家の、落ちたる石のあたりを探り、人影なきに打ち驚き、立出る途端に躓く娘、息吹き返して取縋る、折しも野風に炎々と。圍爐裏の粗朶は燃え上り。

ト文句の通り老婆石の周圍を探り見てびつくりなし、逃けたといふ思入にて駈け出る途端娘に躓く、是れにて娘は息吹き返して足に縋る、此時風の音にて圍爐裏の粗朶燃え上る、老婆鉈を引上げ、きつと見得。

釣した石を切つて落し、只一打ちと思ひの外、兒は早くも企みを悟り、裏から逃げ失せ居つたる

か。

娘　かゝさん、許して下さんせ、兒はわたしが逃しました。

老婆　やゝゝゝ。（ト驚き。）

〽老婆は聞いて打おどろき。

何でおのれが逃したのだ。

娘　逃しましたは外ならず、見れば姿もうるはしき都育ちのお兒さま、賤しき形も顧みず思ひ染めしが身の因果、愛しさゆゑにお兒をば、わたしが逃がしましたわいな。

〽いふに老婆は齒嚙みをなし、怒りの聲を振立てゝ。

老婆　えゝ悔しいわい／＼、おのれが童に惚れしたばかりに網にかゝつた三年物、今引揚げる水際で親に背いて逃すとは、言はうやうない不孝者、どうしたら腹が癒ようぞ。

〽慈悲も情も荒氣なく、生みの我が子を引倒し、襟上取つて捻附け／＼。

ト老婆腹の立つ思入にて、襟上を取り捻ぢつけて、

こりやい、年を重ね明日をさへ知れぬ身なれど後生を捨てゝ、强慾非道に數年來、此一ツ家へ旅人を泊め、石の枕に釣置きし石を落して打殺し、金錢衣類を奪ふのは誰が爲だと思ひ居る、お

のれが爲にする事だぞ。此武藏野の露霜と、我は果敢なく消ゆるとも、おのれに出世がさせたさに、非道と知つてする惡業、是れまで石の枕にて殺せし人の數知れず、罪は忽ち此身に報い、來世は地獄へ落つるとも、今更となり止められうか、斯程に思ふ恩愛の、親の心を無足にする、恩へば憎き罰當りめ。かう〳〵〳〵。

〽拳を固め滅多打ち、怒りにたへず目は血走り、亂れし白髮逆立ちて、さも凄じき相好は惡鬼羅刹の如くなり。

ト老婆娘を散々に打ち突廻し、頭を掻毟り悔しき思入にてきつとなる、娘は側へ這ひ寄りて。

娘　お腹の立つはお道理なれど、是れまで石の枕にて無慚に殺せし其人は、幾人なるか數知れず、阿漕が浦に曳く網も度重なれば顯れて、果敢ない死をばなされた上、來世の憂目がおいたはしく、邪險なお氣の直るやう、觀音さまへ朝夕にお願ひ申して居りまする、斯かる惡業なさるのも、私ゆゑとあるならば、此身を投げて死にますから、思ひ止つて下さりませ。

〽お慈悲〳〵と手を合せ、拜むも聞かぬ邪險の老婆、

老婆　えゝ小賢しき異見立て、是れまで育てし恩を忘れ、死ぬとあるなら親の手で、殺してやるから覺悟しろ。

娘　元より覺悟の事なれば、早く殺して心を改め、非道を止めて下さりませ。

老婆　何で非道を止めるものか、おのれが死ねば猶の事、一本立ちの此茨、假令鬼と言はれうとも人を殺して金を取り、此世でえらい事をして、來世は地獄へ落ちる氣だ。

娘　ても情ない事ぢやなア。

老婆　親に逆らふ不孝者、いで息の根を止めてくれん。

へ鋭き鉈を振上げて、切らんとなせば目も眩み、五體すくんでたぢ〳〵〳〵、强情我慢に老婆は焦立ち、身をあせれども動かれず、へ不思議や庭に年經りし、槐の許に髣髴と顯れ出し兒姿。

ト此内老婆鉈を振上げ娘を切らうとする。どろ〳〵になり、老婆目が眩み、手足の利かぬ思入、槐の許に兒出で。

兒　「日は暮れて野には伏すとも宿かるな、淺草野邊の一ツ家のうち。」

ト是れにて電氣を遣ひ、光明を放ち、爰へ上下より以前の仙兩人窺ひ出で、

馬藏　怪しい童め、

草六　觀念ひろげ。

〽切つて掛れば光明の、光りに恐れて目くるめき、筋斗打つて倒れけり。

ト兩人山刀にて切つて掛る。どろ〳〵にて苦しみ、左右へぼんと轉る。

〽兒は微妙の聲高く。

ト老婆どうと下に居て呆れ居る、薄どろ〳〵音樂になり、兒の後へ仕掛にて後光さし。

兒　善哉々々、我こそは觀音薩陲の化身なり、汝が惡心矯めん爲、假に兒童の姿と變じ、今宵此家へ泊りしなり、孝心深き娘の功德に今善心に立返り、佛名をだに唱へなば十惡五逆の罪を許し、來世は淨土へ導かん。

〽宣ふ聲に老婆はひれ伏し、（ト老婆有難き思入にて、）

老婆　あら有難や忝なや、惡逆非道の此婆を、淨土へお助け下さるとは、大慈大悲の御惠み、今ぞ惡心發起なせど、是れまで多くの人を害せし我が身の罪は免かれず、重きお仕置受けんより、是れなる池へ身を捨てゝ、死したる人の恨みを晴らさん。

兒　先非を悔いて亡き人の、恨みを解かん其爲に、一命捨つるは奇特なり、來世は救ひ得さするぞ。

老婆　えゝ有難や、今ぞ無明の夢覺めて、惡業なせし罪滅し。

娘　そんならどうでもかゝさんは、

老婆　冥土の旅へ赴かん、

娘　是れが此世の、

老婆　娘、さらば。

〽性は善なる人の身の、今ぞ邪險の角も折れ、豪氣の老婆も恩愛の絆に引かれ鬼の目に、保ち難なくはら〳〵と、こぼす涙は木の許に雫の散りし如くなり。

ト此内老婆娘の頭へ手を掛け畫面の見得、トヾ娘を突きのけよろしくあつて前の池へ飛び込む。

〽傍に倒れし兩人が息吹返し起上り、また切附くれど佛體の威德に恐れたぢ〳〵五體しびれて手も狂ひ、互ひに脇腹さしつらぬき、惡の報いは忽ちに虛空を摑んで死してんげり。

ト文句の通り兩人差違ひて落入る。

〽時しも靈香馥郁と觀世音は光明放ち槐の梢へ去りたまふ、利益の程ぞ、

ト此時兒引抜き白地へ蓮を縫ひし好みの拵へになり、電氣にて光りを放ち立木へ引上げろ。娘は手を合せ拜む。此見得音樂どろ〳〵にて道具廻る。

（觀音堂夢の場）――本舞臺一面に扉をしめし觀音堂の道具、爰に頰冠り半纏着流し裝の佐渡七妻

錢箱へ寄り掛り居眠り居る。早めたる合方どろ〳〵にて道具留る。と時の鐘端唄の合方になり、下手より堂念坊主臺、墨の法衣鼠の着附、草履、萬字に正觀世音菩薩と記せし弓張提灯を持ち出來り。

堂念　今夜は風が南のせゐか、岡田の三絃が近く聞える。(ト言ひながら賽錢箱の周圍の賽錢を捜して、)暮方から曇つたので、日參をする近所の衆が、明るい内にお參りに來て、暮れてお參りがさつぱりなく、おれの懷が大違ひだ。(ト上手より久助春日山の半纏股引尻端折り草履にて出來り、)

久助　堂念さん、何を愚癡をこぼすのだ。

堂念　おゝ定番の久助さんか、お天氣が降りさうなので、夜參りが出ないから、お賽錢のこぼれがなくそこでおれがこぼすのだ。

久助　そんなにこぼすにやあ及ばねえ、今夜は呑める口があるぜ。

堂念　そりやあ何より耳よりだが、何處で酒を呑ませるのだ。

久助　念佛堂の雲念さんが、講中の衆が寄合つて呑んだ酒が殘つて居るが、下戸ばかりで呑人がないから呑みに來てくれと賴まれた。

堂念　酒と聞いては、聞き遁されねえ、おれも今に突込みに行かう。

久助　今御供所から呼びに來たから、用を仕舞つたら誘ひに來よう。

堂念　それぢやあ爰に待つて居るぜ。
久助　おゝ當にせずに待つて居ねえ。
堂念　なに、當にせずとは。
乙助　あんまり愚癡をこぼすから、ちよつとお前を擔いだのだ。
堂念　えゝ、忌々しい奴だ。
久助　錢を拾つたら勝手に呑みねえ。(ト下手へ駈けて這入る。)
堂念　折角呑めると思つたら、擔がれては我慢が出來ねえ、こいつあ自腹を切らずばなるめえ。(ト佐渡七を見附け、)此人はさつきから、賽錢箱に寄り掛つて、いゝ心持さうに寐て居るが、魘されるのは夢でも見たのか。もし〳〵、もういゝ加減に起きなさらねえか。
ト搖起す、是れにて目の覺めし思入にて伸びをなし、手拭をとり。
佐渡　それぢやあ今のは夢だつたか。
堂念　どんな夢か知らないが、大層魘されなすつたぜ。
佐渡　怖い夢を見て居たが、よく起してくんなすつた。(ト此時財布を落す、堂念拾つて、)
堂念　もし、財布が落ちました。(ト出す、佐渡七取って、)

佐渡 こりやあ有難う。
堂念 大した銀貨でござりますね。
佐渡 なに、銀貨ぢやあねえ、二錢銅貨だ。
堂念 今銅貨が拂底だといふに、大した銅貨でござりますねえ。

ト不審さうにいふ、佐渡七財布より五十錢を一つ出し。

佐渡 坊さん、是れで一杯呑みねえ。(ト堂念にやる、)
堂念 これは有難うござります。や、こりや五十錢でござりますぜ。
佐渡 拾つてくれた財布の禮だ。(ト堂念嬉しき思入にて、)
堂念 今方酒で擔がれて、自腹で呑まうと思つた所、これではたら腹酒が呑めます。是れといふもみんな御利益。どれ、御本尊へお禮を申さう。

ト堂念賽錢箱の下手へ來り、裏向きになつて拜み居る。

佐渡 國芳のかいた一ツ家の、額に見惚れて居るうちに、お堂拂ひで追出され、さつき呑んだ酒のせゐか頻りに睡くなつたから、賽錢箱へ寄掛り、思はずぐつすり寐たうちに、額に附いた一ツ家をありの儘に夢に見た。(ト堂念前へ出て、)

堂念　五十錢お貰ひ申して、胡麻を摺るのぢやあござりませんが、夢を見るほど寐なすつたのは、定めて昨夜北廓で持て、其お疲れでござりませう。

佐渡　そんな意氣な筋ぢやあねえ、昨夜の仕事で寐なかつたからだ。

堂念　昨夜の仕事とおつしやるのは。

佐渡　むゝ。(トぎつくり思入あつて、)何を隱さう、わつちは家屋職で、仕事歸りに友達と北廓で夜明しを仕やしたのさ。(ト此時堂念賽錢箱の脇にある文を拾ひ、)

堂念　爰に文が落ちてゐますが、是もこなたが落したのではないか。

佐渡　どれ、見せねえ。(ト文を取つて見て、)京町中米內小松どのへ、姥ケ池母より。

堂念　女郎の所へ行く文だね。

佐渡　今見た額の文といひ、とんだ明石の島藏だが。

堂念　え。(ト合點の行かぬ思入。)

佐渡　こいつア後日の、(ト文で手をたゝくを、木魚の代りに一つ鉦を打込み、)種になるわい。

トよろしく思入、キザミに附き早めたる伏鉦の音にて、　ひやうし幕　(終り)

新古演劇
十種の內

戻橋(もどりはし)

解説

「戻橋」は、明治二十三年十月、歌舞伎座に初めて上演された。作者七十五歳の時である。其時の役割は、五世尾上菊五郎（五條の扇折娘小百合實は愛宕山の惡鬼）、市川左團次（渡邊源次綱）、市川新藏（綱の郎黨左源太）、尾上幸藏（綱の郎黨右源太）であつた。振附は花柳壽輔で、常磐津連中としては常磐津小文字太夫、都太夫、國太夫、岸澤式佐、文字兵衛等が名前を列れてゐた。

此作は、初めて上演されるに至る前、岸澤式佐の依囑に依つて、常磐津の語り物、淨瑠璃として執筆されたものであつた。が五代目の請によつて新古演劇十種の内に加へられ、舞臺上にも成功したものである。口繪にしたのは國周筆の錦繪先代左團次の綱であり、挿繪にしたのは、先代菊五郎の舞臺寫眞である。

戻橋

一條戻橋の場

常磐津連中

〔役割＝五條の扇折娘小百合實は愛宕の惡鬼。渡邊源治綱、綱の郎黨左源太、同右源太。〕

(戻橋の場)＝本舞臺上寄りに戻橋を畫心に飾り、眞中に柳の大樹、上下樹木の張物にて見切り、後北山を見たる夜の遠見、總て一條戻橋の場、下の方淨瑠璃臺常磐津連中居並び、時の鐘、水の音にて幕明く。と水の音打上げ、大薩摩がゝりの淨瑠璃になる。

〽それ普天の下率土の濱、王土にあらぬ所なきに、何處に妖魔の住みけるか、睦月の頃より洛中へ、惡鬼顯はれ人を取り、夜るは往來の人もなし。

〽されば内裏の警衛に、都へ登りし源の賴光朝臣は暇なく、さる頃深く語らひし、維仲卿の姫君へ、便りもなさで在せしが、今日しも渡邊源次綱、君の内命蒙りて、

ト此内花道より綱、烏帽子直垂附太刀・馬手差し金剛草履、郎黨二人侍烏帽子半素袍、大小にて弓矢を持ち附添ひ出來り、花道よき所に立ち止り、

〽使ひに立ちし渡邊の、源次綱が一條の、大宮よりの歸り路も、卯の花咲いて白々と、月照り渡る堀川の、早瀨の流れ落合うて、水音凄き戾橋、綱は郞黨引連れて橋の袂へ步み來て、

ト本舞臺へ來り。

綱　戀せずば人は心もなからまじと、武威逞しき我が君も、戀は意外のものにして、かね〳〵語らひたまひたる、維仲卿の姬君へ、密々の仰せ蒙りて某使ひに參りしが、路次の用意に御祕藏の髭切の太刀賜りしは、武門の譽れ身の面目、片時も早く立歸り、彼の御方の御返事を我が君へ申し上げん。

左源　昨日までも降り續きし、卯の花くだしも今日は晴れ、此頃になきよき月夜、

右源　闇にあらねば妖怪も、今宵は出る氣遣ひなし、心易く存じまする。

綱　空行く月の廻りでは、早や三更と思はるゝ、路次を急いで參るべし。

兩人　畏つてござります。

〽夜更けぬ內と主從が、行かんとなせし後より、一吹き落す靑嵐に、岸の柳の騷がしく、心ならねば振返り、元來し道を打見やり、

ト上手へ行かうとして風の音になり、綱思入あつて向うた見遣り。

綱　はて心得ぬ、被衣面深に打ち被ぎ、向うへ見えるは正しく女子、妖怪出る取り沙汰に、夜に入つては表を閉し、男子すら通行せぬに、女子の來るは訝しゝ。

〽さては我等を脅さんと、姿をかへて妖怪が、爰へ來ると覺えたり、幸ひなるかな討取りて、君へ土産に參らせん。

〽二人の者に囁きて、機密を授け退けて、（ト綱兩人に囁く、兩人心得て下手へ這入る。）

〽おのれ妖怪ごさんなれと、太刀引きそばめ仄闇き、木の下蔭へぞ入りにける。

ト綱きつと思入あつて、上手樹木の蔭へ這入る。

〽又むら立ちし雨雲の、影洩る月をよすがにて、

ト本釣鐘を打込み合方になり、花道より妖女下髪そぎ袖、模樣物の小袖、被衣を冠り京草履をはき出來り、花道へ止り、

〽辿る大路に人影も、若しや人かと驚きて、被衣に身をば忍ぶずり、けふの細布ならずして女子心に胸あはず、思ひ惱みて來りける。

ト妖女花道にて振あつて舞臺へ來り、思入あつて、

妖女　卯月の空も定めなく、又雲立ちし雨催ひ、降らぬうちにと思へども、爰は一條の戻橋、見れば行

きかふ人もなく。

〽便りもなやとたゞずみて、暫し休らひ居たりける、〽綱は小蔭を立出で、、
ト綱上手より出で、妖女を見て思入あつて。

綱　女性は何れへ參らるゝぞ。

妖女　わらはゝ一條の大宮より、五條のわたりへ參りまする。

綱　此頃專ら洛中へ、妖怪の出る噂ありて、夜陰は往來の者なきに、御身は連れのあらざるか。

妖女　供の者を召連れしが、用事あつて跡へ歸り、只一人ゆゑ夜道が怖く、道行く人を待合せ、爰にたゞずみ居りました。

綱　怖いと申すは尤もなり、五條のわたりへ參るとあらば、某送りて遣はさう。

妖女　お情深きお詞に、隨ひますればわらはをば、お伴ひ下さりませ。

綱　三更過ぐれば夜更けぬうち、御身の宿所へ送り得させん。

妖女　有難う存じまする。

〽折柄雲の吹晴れて、月の光りに見合す顏。
ト月の雲を取り、兩人顏を見合せ、綱思はず見惚れて。

綱　はて、あでやかな。

〽水にうつりし影を見て、

妖女　え。（ト恥しき思入、綱は妖女の影を見て）

綱　やゝ、水にうつりし面影は。

妖女　あれえ。

ト被衣を冠る、綱は扨はといふ思入。此内綱は心を附ける思入あつて、妖女をせき立て兩人橋を渡り上手へ這入る、三重にて道具廻る。

（二條通りの場）――本舞臺一面の平舞臺、正面小高き草土手、上下杉林、後愛宕山の遠見、總て二條通りの體、三重にて道具留る。

〽行く道も西へ廻りし月の輪に、遠く望めば愛宕山、北野は近く淸瀧の、森を越え來る時鳥初音床しく振返り、見上げる顏にはら／＼と、樹々の雫か雲運ぶ、雨かと暫し立ち休らひ、

ト此内よき程に妖女先きに出來る、綱は跡より樣子を窺ひ出來る、時鳥笛をあしらひ、舞臺へ來り、入替つて立留り、

綱　歩き馴れぬ夜道にて、嘸草臥れしことならん。

妖女　わらはよりあなたこそ、足弱をお連れなされ、お草臥れでござりませう。

綱　暫し是れにて憩はれよ。

〽連立つ道に馴れ易く、今は隔ても中空の、朧も春の名殘りかな。

ト綱は上手へ腰を掛け、妖女下に居て合方になり。

妖女　父は五條に年久しく住居なせし扇折、舞を好みて舞ひしゆゑ、わらはは幼き頃よりして教へを受けしを身の徳に、此程までもある御所に、お宮仕へをいたしましたが、年頃ゆゑにお暇たまはり下りましてござりまする。

綱　最前から見し所、都人とはいひながら、いとも優しき裝風俗、御身が父は何人なるぞ。

綱　さては舞を舞はるゝとか、恥かしながら都の舞を、未だ一見せし事なし、途中ゆゑに申し兼ねるが、一指し舞を見られまいか。

妖女　お送り下さる其お禮に、只今御覽に入れませう。

〽綱が扇を借り受けて、會釋こぼして進みいで、

ト綱の持ちし中啓を借り、前へ出で、唄模樣になる。

〽空も霞みて八重一重、櫻狩する諸人が、むれつゝ爰へ清水や、初瀬の山に雪と見し、花も散り行く嵐山、惜しむ別れの春過ぎて、夏の初めに遅れてし、花も青葉に衣更、峰の綠の美しや。（トよろしく振あつて納る。）

綱　いや面白き事なりしぞ、斯かる技藝のある者を、妻に持ちなばよき樂しみ。

〽いふを此方はよき機會と。（ト媚めきし合方になり、）

妖女　定めてあなたは奥樣を、お持ちなされてゞござりませうな。

綱　いや〳〵未だ妻は娶らぬ、某は獨身ぢや。

妖女　いえ〳〵それはお僞り、立派な奥樣がござりませう。

綱　それは御身が思ひ違ひ、都人とは事替り、東育ちの無骨者、みめよき女性を迎へたくも、誰も妻になり手がない。

妖女　なに、ない事がござりませう。（ト是れより口説になり、）

〽お情深きお心に、今宵見えしわらはさへ、緣を結ぶ露もがな、思ふ戀路の初螢、〽言ひ出し兼て胸焦し、若葉の闇に迷ふもの、〽都女郎は取分けて、姿優しき花あやめ、〽引きつ引かれつ澤水に、さこそ濡れにし事ならめ。（ト妖女口説の振よろしくあつて、）

綱　それは御身が思ひ違ひ、かゝる名もなき田舍武士に、誰が思ひを掛けようぞ。
妖女　いえ〳〵立派なお名ゆゑに、誰も思ひを掛けまする。
綱　なに、某が立派な名とは。
妖女　當時内裏の警衛に、都へ登りし源の、賴光朝臣の身内にて、渡邊源次綱殿ゆゑ。
綱　や、如何いたして其名をば。
妖女　戀しく思ふ殿御ゆゑ、疾くよりお名を存じ居ります。不束なわらはが願ひを、お叶ひなされて下さりませ。
綱　折角の賴みなれど、左樣な事には疎き某。
妖女　いえ〳〵疎きとおつしやれど、今宵は戀のお使ひに、大宮の姬君の許へ、お出でなされたでござりませうな。
綱　むう、よくもそれまで存ぜしぞ。
妖女　戀をする身は餘所外の、事まで存じて居りまする。
綱　戀をする身と申せども、御身がそれを存ぜしは。
妖女　え。

綱　妖魔の術であらうがな。

〽星をさゝれて打ち驚き。

妖女　なに、妖魔の術とは。

綱　眉目よき女に化するとも、其本性は惡鬼ならん。

妖女　何と。

綱　汝は心附かざりしか、月の光りにうつりたる、影は怪しき鬼形なりしぞ。

妖女　や。

綱　その本性を顯はせよ。

〽いふに妖女も是れまでと、忿怒の相を顯はして、

ト是れにて妖女立上り、きつとなる。此時以前の郎黨出て取卷く。

〽我は愛宕の山奥に、幾歳住みて天然と、業通得たる惡鬼なり。（ト此時郎黨二人組附く。）

〽後に窺ふ郎黨が、觀念せよと組附くを、左右へ投げのけ髮振り亂し、さもおそろしき其の形相。

ト兩人組附き立廻りの內、角のある鬘になり、兩人を遣ひ引拔きになり、好みの鬼のこしらへに

なり、兩人を投げ退けきつと見得。

綱　さてこそ惡鬼でありしよな。

妖女　いで此上は汝をば、我が住家へ連れ行かん。

綱　小癪な事を。

〽引立て行かんと立掛れば、綱は生捕り土産にせんと、勇力ふるふ時しもあれ、〽一天俄にかき曇り、震動なして四方より、黑雲覆ひ見えわかず、躊ふ隙に電光の目を射る光りに飛び掛り綱が襟上むんずと摑み。

ト大どろ／＼になり、誂への鳴物になり、立廻りあつて所々より誂への煙を出し、惡鬼の形を消し、綱ためらふ思入。よき程に電氣の稻妻を遣ひ、惡鬼早面を掛け出で、ちよつと立廻つて、綱の襟上を取り、きつと見得。

〽砂石を飛ばす暴風に、つれて虛空へ引き立つれば、

ト仕掛にて、兩人をよき所まで引上げる。正面の草土手打返しにて、梅鉢の紋附きし、北野の廻廊の屋根になる。

〽綱は透さず髭切の太刀拔放し捉へたる、鬼の腕を切拂へば、どうと落ちたる北野の廻廊。

ト綱太刀を拔き、鬼の腕を切る、是れにて廻廊の屋根の上へ落ちる。

〽惡鬼はむらがる雲隱れ、光りを放ちて、〽失せにける。

ト綱は鬼の腕を持ち、上を見上げる。惡鬼は斜に日覆へ上る。稻妻を遣ひ大どろ／＼烈しき鳴物にて、

幕

戻　橋（終り）

新歌舞伎
十八番の内

釣狐

解説

「釣狐」は明治十五年三月、春木座に書卸された。作者六十七歳の時である。書卸しの時の役割は、市川團十郎（今様師梅津新太郎）、中村芝翫（今様師小倉山太夫）、坂東家橘（今様師小倉千之丞）、市川團右衛門（門弟大江丹右衛門）、中村鶴蔵（同石田森藏）、市川猿十郎（同門番正兵衞）、市川升蔵（同牛尾傳平）、坂東橘次（同外山長四郎）、岩井しげ松（山太夫妻かへで）、市川幸升（正兵衞女房おしが）等であつた。振附は花柳壽輔で、竹本連中としては鶴澤市作、竹本菖蒲太夫、竹本久我太夫等。長唄囃子連中としては、杵屋正次郎、松島庄五郎、杵屋三郎助、寶山左衞門、住田又兵衞等であつた。

新歌舞伎十八番之内と銘打たれて演ぜられたものであつたが、世評は一向に好くなかつた。本行に則して、狂言師蜷川庄三郎の教へをも受けたことが傳へられてゐる。挿繪にしたのは九世團十郎の白藏主に扮した舞臺寫眞である。

釣狐

今樣師小倉門前の場
同奥座敷勘當詫の場
今樣舞臺釣狐の場

竹本連中
長唄囃子連中

（役名――今樣師梅澤新太郎、同小倉千之丞、小倉門弟大江丹右衞門、同石田森藏、同門番正兵衞、正兵衞女房おしが、小倉門弟牛尾傳平、同外山長四郎、同日岡藤六、同山科鄕助、今樣師小倉山太夫、山太夫妻楓、小倉の下女お秋、同お山等。）

（小倉門外の場）――本舞臺三間の間常足の二重、本庇本緣附、向う更紗の暖簾口、上手地袋戸棚、此上二段の棚に狂言本を積みし書割、下手腰張りの茶壁、軒口に今樣狂言正本所といふ看板を掛け、上の方冠木門に小倉山太夫といふ表札を打ち、門と屋體の間滑り門出這入り、この後黑塀で見切り、下の方同じく黑塀、總て今樣師小倉邸門外の體、二重におしが本屋の女房のこしらへにて本を綴ぢてゐる。お秋、お山、小倉の下女のこしらへにて腰をかけゐる。此見得上方の鳥追にて幕明く。

しが　今日はお家の旦那樣の六十一の御祝ひで、嘸おいそがしうございませうな。
あき　お臺所は仕出し屋が大勢參つて居りますから、洗ひ返しの世話はなく、たゞお給仕をするばかり。
やま　今お道具を殘らず出して、拭きあげてしまつたゆゑ、お客樣のお出でまで、一息つきに來ました
わいな。
しが　當時今樣の御狂言では、旦那樣に續くものはなく、其お仕込みゆゑ、とりわけ若旦那樣が御評判
よく、目の寄るところへ玉とやらで、お弟子樣方が皆お上手、私などもその以前お勤め申した旦
那樣ゆゑ、誠に嬉しうござります。
あき　ほんにお前さんのおつしやる通り、お跡目がちやんとあつて、六十一のお祝ひを斯うしてなされ
まするは、お目出たいことでござりまする。
やま　昨日までは外のお客、今日は內輪のお祝ひで、お弟子衆へお狂言の御傳授を、なされまするとや
ら申すことでござりまする。
しが　今日はお家の傳授もの、釣狐を若旦那樣が、お勤めなされますさうでござりまする。
あき　その釣狐は、お弟子衆のお狂言があつた後、切にお勤めなされまする。
やま　七ツ時分になりませうから、お臺所からこつそりと拜見にお出でなされませ。

しが　若旦那樣の釣狐は、是非拜見いたしたいと、樂しみにして居りましたが、生憎宿でお得意へ御用があつて參りましたが、早う戻ればようござりますが。

あき　このお祝ひのあるにつけ、御高弟の新太郎さま、御酒ゆゑ旦那の御勘氣うけ、今はどこにおいでなさるか。

やま　以前のやうであつたらば、御弟子衆の御上席で、今日も何か御傳授ものをお勤めなさるでござりませうに、惜しいことでござりまする。

しが　その梅澤新太郎樣は眞葛ケ原へ逼塞なされ、かすかにお暮しなされまするが、此度のお祝ひでどうか御免になるやうに、お執成しをしてくれと賴みにお出でなされましたゆゑ、御新造樣まで御内々申し上げて置きましたが、何の御沙汰もござりませぬは、御免にならぬと思はれます。

あき　どうか今日のお目出たで、お許しあつて御出入りをなさるやうにしたいもの。

やま　當時お狂言師の其うちで、旦那樣に續くのは、新太郎樣ばかりとやら。

しが　實に惜しいお方なれど、酒をあがると常にかはり、箸にも棒にも掛りませぬ。

あき　然しお詫びをなされるからは、

やま　御酒はお止めなされませう。

ト合方しらべになり、門の潜りより傳平、長四郎、袴裝一本ざし、門弟のこしらへにて出來る、おあき、おやまを見て。

傳平　おゝ、こなた衆は爰に居たか、今奥で御新造さまが、
長四　何處へ二人は行つたかと、お呼びなされておいでなされた。
あき　お客さまのおいでのうち、ちよつとこゝへ參りまして、
やま　お上さんと話しをいたし、暇取りましてござります。
傳平　何か御用のある樣子、
長四　少しも早く行つたがよい。
兩人　はい〳〵、畏りました。
あき　左樣ならお上さん、
やま　後程お出でなされませ。（ト合方にて、おあき、おやまの下女二人門の潜りへ這入る。）
しが　まだお狂言は始まりませぬか。
傳平　今一二軒御內容の、お出でがないゆゑ待つてゐるのだ。
長四　いつも見世にござる主人が見えぬが、何處へか行かれたかな。

しが　お得意先きからお迎へで、ちよつと出ましてござります。

傳平　いや主人と申せば正兵衛どのが、此御祝ひを幸ひに、新太郎殿の詫言を御新造までさつしやつたので、

長四　若旦那も共々にお口添へがあつたれど、物堅い師匠ゆゑ、外門弟の示しにならぬと、お許しがないさうだ。

しが　御存じの通り私が、元旦那様に御奉公をいたしました御縁により、御門番を兼帶に狂言本を賣りまして、其日を樂に送りますのも、旦那様のお蔭ゆゑ、お氣に障つては濟まぬけれど、古いお弟子のことなれば、どうか元々になりますやう、及ばずながら正兵衛が、お詫びをいたしてござりまする。

傳平　當時師匠の門弟うちで、一といつて二のない程な勝れた業の梅澤氏、いかに好きなものぢやとて酒ゆゑ役目を仕損じて、師匠の勘氣をうけるとは、殘念なことではないか。

長四　その失錯の元といふは、名に負ふ嵯峨の御所よりして、御召しになつた其時に、師匠が不快でをつたゆゑ、新太郎殿が名代に、釣狐を勤められしが、

傳平　しかも冬の半にて、寒さ凌ぎに一杯と呑んだが病みつき大醉なし、散々な勤め振りに、嵯峨御所

の御不興うけ。他家へ對して恥辱ゆゑ、直に勘當なされたのぢや。

長四　酒さへばつたり止められたら、御免になるまいものでもないが、煙草か茶なら知らぬこと、酒ばかりは呑むものゝ止めることの出來ぬもの。

傳平　我々共にも兄弟子ゆゑ、此お祝ひでお詫びが叶ひ、

長四　お目出たの其席へ、連なるやうにしたいものぢや。

傳平　我々共も打絶えて、久しく面會いたさねば、

しが　昨日お便りがござりましたが、今日後程に御樣子を、お聞きにおいでなされます。

長四　これへおいでなされたら、ちよつと内々お知らせ下さい。

しが　はい、畏りましてござりまする。

傳平　最早狂言の始まる時刻、

長四　樂屋へ參つて支度いたさう。

しが　左樣なればお二人さま。

傳平　必ず知らせを、

兩人　頼みますぞ。（ト合方調べにて、傳平、長四郎、門の潜りへ這入る。）

しが　つい行つて來ると言はしやんしたが、お得意先きで手間が取れるか、大分歸りの遲いこと、どう
ぞ釣狐の始まらぬうち、早う歸つてくれゝばよいが。

ト誂への合方になり、花道より正兵衞羽織着流し雪駄にて出來る。あとより新太郎肩入の着附一本
差し、深編笠草履にて出來り、花道にて。

新太　そこへござるは、正兵衞どのか。(ト振返り見て、)

正兵　おゝ、どなたかと存じましたら、新太郎樣でござりますか。

新太　此程貴樣に頼み置いたる師匠の詫は如何なるか、うるさくもあらうが、聞きに來ました。

正兵　其儀は早速御新造さまと若旦那樣へ、くれ〴〵お願ひ申して置きましたれば、多分御免になりま
せう。

新太　それは何より忝けない、久しき馴染といひながら、全くこれも貴樣の蔭、禮は詞に盡されぬ。

ト辭儀をなす。

正兵　いや、まだ御免になりますか、成りませぬか知れませねば、お禮をおつしやつては困りまする。

新太　外ならぬお二方より、お口添へ下すつたれば、大方お聞き濟み下されう。

正兵　何にいたせ爰は往來、私の宅へお出でなされませ。

新太　左樣いたすであらう。（ト右の合方にて舞臺へ來り）
正兵　おゝ、今戻りしぞ。
しが　大分遲うござりましたな。
正兵　其やうに手間は取らぬ氣ぢやが。（ト新太郎笠を取り）
新太　お內儀、今日も厄介になりまする。
しが　これは梅澤樣、ようお出でなされました。
正兵　先づこれへお上りなされませ。
　　ト合方きつばりとなり、新太郎之へあがり、上手へ住ふ。おしが茶を汲みて、
しが　少しおぬるうござりますが。
新太　必ず構うて下さるな。（ト茶を取り呑む。）
正兵　これおしが、御新造さまへ內々で、新太郎樣がお出でのことを、ちよつとお知らせ申してくりや。
しが　あいゝゝ、畏りました。
新太　これは御苦勞でござります。
しが　何の造作もござりませぬ。

ト合方にて、おしが門の潜りへ這入る。あと合方きつぱりとなり、これへ大小の鳴物を冠せ新太郎聞耳を立て、

新太　あれは正しく花子ぢやが、誰が今日勤むるか、あゝ羨ましいことぢや。

正兵　あなた、お羨ましうござりますか。

新太　むゝ。（トぢつと思ひ出せしこなし。）

正兵　あゝ、御尤もでござりまする。（ト新太郎の姿を見て涙を拭ふ。）

新太　正兵衛どの、何を泣かるゝ。

正兵　私が泣きまするは、あなたがおいとしうござりますゆゑ。

新太　とはまた、何ゆゑ。（ト合方きつぱりとなり、涙を拭ひ、）

正兵　此度小倉山太夫樣の六十一の本卦還り、お目出たいお祝ひで今日で三日のお客樣、初日は不斷お出入のお歴々のお方樣、二日目は御親類方、今日三日目はお仲間や御門弟のお方のお出で、いづれも方を見るにつけ、今更言つても詮なけれど御勘當お受けなされずば、御門弟頭ゆゑ上座へお坐りなされませうに、今日を晴れのお祝ひゆゑ、御門弟の方々は、何れも立派な袴羽織、昨日上つたお弟子までも、綺羅を飾つておいでなさるに、御酒の上とは言ひながら見る影もない其お裝

世が世であらばと存じますと、おいとしうござりまして、實に涙がこぼれまする。

ト手拭で涙を拭ふ。新太郎思入あつて、

新太　以前の誼を忘れざるそなたの親切忝ない、今この通り零落して、斯く見苦しき裝をなすも、これ外ならず師匠の罰、知つての通り父親なく、幼年よりして內弟子に上つて每日お稽古うけ、先づ一人前の藝になり、衣類は元より差物まで、立派に出來しは師匠のお蔭、其厚恩を打ち忘れ、好きな酒を呑み過し、不埒をなせるを幾度となく、御異見を下されしは、實に親にも勝りしことゆゑ、酒を呑まざる其時は、勿體ないと蔭ながら師匠を拜んでゐたなれど、天魔が魅入し如くにて酒の匂ひを嗅ぐときは、忽ち變る我が心、然もその頃嵯峨御所より、釣狐のお好みありしに、折惡しくも師匠の病氣、われに名代勤めよと仰せありしは我が面目、今日ばかりは愼みて酒を呑むなと戒められしを、時しも冬の半にてちらつく雪に途中にて、寒さ凌ぎに呑みしが病みつき、一升餘り呑み盡し大醉なして勤めしゆゑ、小倉流の口傳なる釣狐をまんまと仕損じ、御所より御不興蒙りて物笑ひとなりしかば、其日師匠の勘氣を受け、追放されしは我が身の科、誰を恨む所もなく、それより諸所を流浪なすうち、跡に殘りし母親が貧苦に迫りて難儀なすを、不便と思召しまして、御新造樣よりお貢ぎ下され、老が露命を繫ぎしこと承はつて勿體なく、始めて迷ひ

の夢覺めて、神へ誓ひて酒を斷ち、諸流へ渡りて修行なし、折がなあらば身のお詫びと、思ふ折柄御年賀の、このお祝ひを幸ひに、御勘氣御免を蒙らんと、執成し頼みし正兵衛どの、そなたの親切忝けない。

トよろしく思入にていふ。

正兵 根が酒からの御勘氣ゆゑ、酒をお斷ちなされた上、御改心なされましたら、元御秘藏の御弟子ゆゑ、多分御免になりませう。

新太 どうか御免を蒙つて、此御祝儀の末席へ、御門弟並に連なりて、お流れ頂戴したいものだ。

正兵 今女房が御新造樣へ、竊に申し上げましたれば、何れ否やの御返事が、ございませうからお待ちなされい。

ト合方になり、門の潛りより楓紋附の着附、老けたるこしらへ、千之丞袴一本差し、悴のこしらへ、以前のおしが附添ひ出來り、先きへ出て、

しが もし、御新造さまと若旦那さまがいらつしやいました。

正兵 これは〱、ようこそ入らせられました、是れへお通り遊ばしませ。

トこれにて新太郎平舞臺下手へ下り、うつ向き居る。楓、千之丞これを見返り二重へ上り上手へ住ふ。

楓　昨日は勝手が手少なゆゑ、終日萬事の世話を頼み、嘸草臥れたことであらうわいの。
千之　門前に居るとはいひ、何事によらずそなたを遣ひ、餘計に暇を費やさせまする。
正兵　いえ〳〵、どういたしまして、御門番兼帶にお長屋を御借り申して、商ひをして居りますれば、御用を足すは當り前。
しが　身に叶うた事なれば、何なりと御恩報じに、いたす心でござります。
楓　さしての世話もいたさぬに、親切な事ぢやわいの。（ト千之丞、新太郎を見て、）
千之　そこに居るは、新太郎か。
新太　はつ、御勘當を受けし身で、斯くお目通りをいたしまするは、恐れ入つた儀でござりまするが。
ト平伏して詫びる。
楓　表向きでは逢はれねど、正兵衛夫婦が頼みといひ、酒を斷ちて先非を悟り、改心なせしといふことゆゑ、内々逢うてやりまするぞ。
千之　何はともあれ、そこは土間、假令内々なればとて面會いたす上からは、遠慮に及ばぬ是れへ〳〵。
新太　でも、御同席いたしまするは。
千之　却つてそれでは人目に立つ、辭退いたさず是れへ參りやれ。

正兵　あのやうに仰しやりますれば。

しが　上へおあがりなさりませ。

新太　以前に替る見苦しき、斯る姿を御覽に入れ、面目次第もござりませぬ。（ト恐る〳〵二重下手へ上り思入あつて、）何はさしおき、御新造樣、若旦那樣の麗はしき御尊顏を拜しまして、恐悦至極にござりまする。

楓　そなたに於ても、變ることなく。

千之　無事は何より重疊なり。

新太　御師匠樣は日頃から、御壯健でござりましたが、お變りはござりませぬか。

楓　知つての通り年よりは、見かけも若く達者でありしが、何をいふにも取る年に、此一二年この方は餘程弱られましたわいの。

千之　そなたが見たら見違へるほど、おつむりなども白うなり、餘程御老體になられました。

新太　御勘當を受けてより、今年で丁度足掛け五年、お面を拜しませぬが、左樣にお年を召しましたかお懷かしうござりまする。

ト新太郎師匠に逢ひたき思入、合方きつぱりとなり、楓、新太郎の顏を見て思入あつて、

楓　五年といへど中年は、僅か三年のうちなれど、そなたも心勞したと見えて、以前宅に居た折とは見違へるほど面瘦せて、年より老けて見えるわいの。

新太　仰せの如く三年なれど、師匠の大恩忘却せし御罰を受けて一身の、置き所なく流浪なし、諸國を遍歴なすうちに、長煩ひをいたしまして、一方ならぬ難儀をせしゆゑ、瘦せ果てましてござります。

千之　そなたが難儀をすることを風の便りに聞きしゆゑ、折があらば勘當の、お詫びをなさんと思ひし所、幸ひ今年六十一の賀を祝さるゝはよき折ゆゑ、そなたの母に問ひしところ、何れへ行きしか行方も知れぬと、申すに是非なく打過ぎしが、此ほど是れなる正兵衞より、そなたが參つて頼みしとて、勘當の詫びを執成せしゆゑ、早速母上諸共に、父へお詫びをいたせしぞ。

新太　不埓をなせし拙者をば、憎しとも思召さず、御勘氣お詫びをなし下され、有難う存じまする。

正兵　お話し中へ口出しをいたしまするは失禮ながら、お詫びは如何でござりまするな。

千之　下世話に申す本卦還り、昔へ還る目出度き祝ひに、此機を外さずお詫びをなさんと、再應お詫びをなしたれど物堅き父上ゆゑ、外門弟の示しにならぬと、未だにお聞濟み下されぬ。

楓　今日そなたが參りなば、好き返事を聞かせようと、幾度となくお詫びをしたれど、何分にも御返

事なく、噫やそなたも本意なからうと、氣の毒でならぬわいの。（ト新太郎ぢつと思入あつて、）

新太 すりや、御勘氣御免下さりませぬか、斯くとは存じましたれど、お慈悲にて御免なされて下さりませうかと、枕につけど寐られぬほど、此御返事を待ちましたが、最早頼みの綱も切れ、是非もない儀でござりまする。是とても嵯峨御所にて、釣狐を仕損じて師匠へ恥辱を與へしゆゑ、御免のなきは御尤、不埒をなせし我が身をば、悔むより外ござりませぬ。（ト本意なき思入）

正兵 折角のお頼みも、お物堅い旦那様ゆゑ、お許しなければ是非もない。

しが また其うちによき折が、ござりませうから先づそれまで、御辛抱なされませ。

新太 師匠の御免を蒙らずとも、今日計らず御新造様、若旦那様にお目に掛り、お慈悲の深いお詞を承はりしが身の仕合せ。

正兵 たゞ此上は旦那様に、新太郎様を餘所ながら、お逢はせ申したうござりまする。

新太 おゝ、よく言うて下すつた、實は其事をお二人様へ、申し上げたうござりますれど、勘當の身を顧みて、差控へて居りました。

正兵 定めて左樣とお察し申し、差出たやうだが私から、口開きをいたしました。

千之 其望みも尤なれど、未だ御免なきうちは、表向は逢はされぬ、垣根の外より餘所ながらお目にか

かつて參るがよい。

新太　御厚志の其お詞、有難うござりまする。

楓　叶はぬまでも今一應、お詫びをなして見ようほどに、供部屋へ來て待つて居や。

新太　はつ、畏りましてござりまする。

正兵　どうかお心が解けまして、今日御勘氣御免になり、御門弟衆と御一緒に、御祝ひの席へ連なりてお杯を頂戴あつたら、さぞ御本望でござりませう。

千之　此上は母上はじめ門弟の者一同より、御詫びを申して見るであらう。

新太　返すがへすも御厚情有難うござりまする。いや、我が身の事に取紛れ、まだ改めて御新造樣へ御禮を申し上げませぬが、手前他國いたせしうち、跡に殘りし母親が其日に迫りし貧苦をば、永らくお惠み下されし一方ならぬ御厚恩、何とお禮を申しませうか、詞に申し盡されませぬ。

楓　そなたの母も年取りて、いかう苦勞をしやるのが、如何にもいとしう思ふゆゑ、心ばかりの惠みをなせしも、勘當なせど幼年より、伜と共に育てしそなた、他人にするとは思はぬわいの。

新太　其御厚志を承はり、勿體ないと私も、既に先非後悔に及び、改心なせし砌りより、せめてお詫びの種にもと、藝道にのみ心を委ね、他國へ出でゝ他流へ渡り聊か修行いたせしゆゑ、若し御勘氣

御免蒙らば、恥辱を取りし釣狐を、再び勤めて御覽に入れんと、寐ても覺めてもたゞそれのみ、
思ひ居りしも甲斐なき次第。（トうつ向きちつと思入）

千之　むう、すりや改心なせし其後は、他國いたして修行せしとか。

新太　未熟ながらも寢食を、忘れて修行いたしました。

千之　左までに辛苦せしことを、父上へ申し上げたら。

楓　お心解けて御勘氣を、御免になるまいものでもない。

新太　何分共にお執成し。

正兵　私共もとも〴〵に。

新太
正兵　御願ひ申し上げまする。（ト此時門の潛りより下女お秋出來り）

あき　御新造さま、是れにいらせられましたか。

楓　お〻、何ぞ用か。

あき　何の御用か旦那樣が、お尋ねなされてござりまする。

千之　最前より餘程の間、何か御用があるであらう。

楓　爰へ來たのは内々ゆゑ、旦那殿に知れぬうち。

千之　早う奥へ參りませう。
新太　左樣なれば私は。
千之　正兵衞と跡より參れ。
新太　畏りましてござりまする。
楓　またもや後に。
千之　逢ひませう。（ト唄になり、楓、千之丞思入あつて、下女お秋附いて門の潛りへ這入る。）
正兵　假令是れから餘所ながらでも、大旦那樣にお逢ひなされば、日頃からのお望みも叶ひますと申すもの。
しが　私共もともぐに、お嬉しうござりまする。
新太　是れと申すも外ならぬ、そなた衆夫婦が親切ゆゑ、今日計らずお二人に、お目にかゝるのみならず、正兵衞どのゝ口開きで、假令垣根越しにもせよ、絕えて久しき師匠に逢へば、勘當の身に一つの悅び、萬に一つ再應のお詫びで御免の御沙汰があらば、身の悅びは如何ばかり、よき御沙汰をば聞きたいものぢや。
正兵　かほどまでに思召す、誠が通じましたらば。

しが　よい御沙汰がござりませう。

ト此時門の潛りより丹右衛門、森藏、袴一本差し門弟のこしらへにて、八寸に載せし口取の硯蓋と杯臺、大きな銚子を持ち出來り。

丹右　これは〳〵梅澤氏、其後は打ち絶えて、

森藏　久々お目にかゝりませぬ。

新太　途中にてもお出逢ひ申さず、五年振りでござりまする。

正兵　そこは往來でござりますから、

しが　これへお上り下さりませ。

丹右 森藏　然らば御免下され。（ト二重よき所へ上り、酒肴を下へ置き）

丹右　先頃さる方のお噂に、御不快のやうに承はりしが、

森藏　先づお變りもなき御様子、恐悦な儀で、

兩人　ござりまする。

新太　御兩所にも御健勝にて、御悦び申します。定めて日々の御稽古ゆゑ、御上達なことでござらう。お羨ましい事でござる。

丹右　今更申して返らぬ事ぢやが、未だ御勘氣御免なく、今日の御祝ひにも御出席なされぬのは、

森藏　以前水魚の交りなせし、同門の事なれば、人事とは思はれず、誠に氣の毒千萬でござる。

新太　此身の不埒に御勘氣受け、六十一のお祝ひを、承はつてよき折と、お詫びをいたしましたれど、御免なければ其席へ出ることならぬ新太郎、心中お察し下され。

丹右　その御心中お察し申し、兩人これへ出掛けて參つたは、師匠の前では好きな酒も、氣が詰つてうまくないゆゑ、是れで一獻いたす積り。

森藏　御免なければ其席へ、出る事ならぬ貴殿ゆゑ、幸ひこれでお祝ひの、お流れ頂戴いたされよ。

丹右　年では手前が上なれど、業に取つては兄弟子ゆゑ、

森藏　先づ杯は貴殿より、目出度くお開き下されい。(ト新太郎の前へ杯を出す。)

新太　思召しは忝けないが、御存じの通り酒ゆゑに、大事の場所を仕損じて、師匠の勘氣を受けたる手前、ふッつり酒は止めました。

丹右　それは深く呑まれしゆゑ、仕損じも出來たれど、此杯で二つや三つ過されたとて氣遣ひなし。

森藏　久し振りの面會に、師匠が祝ひのお流れゆゑ、ちよつと一盞過しめされ。

新太　假令師匠のお流れでも、神へ誓つて一生涯、禁酒いたしてござるから、此儀は平に御免下され。

ト新太郎迷惑の思入、丹右衛門杯をとつて、

丹右　以來は決しておすゝめ申さぬ、今日は目出度き祝宴ゆゑ、貴殿も其座へ連なつたと思ひ、一杯過し召され。

新太　ではござるが、是ればかりは。

森藏　是れから先きは古稀の祝ひ、十年たゝねばない祝宴、今日一日神へ詫び、禁酒を落して過し召され。

ト兩人杯をすゝめる。

正兵　あゝ申し／＼お二人さま、新太郎樣は御勘氣の、御免を願ふ其爲に、酒をお斷ちなされたれば、しが御迷惑でござりませうから、そんなにお進めなされますな。（トこれにて兩人思入あつて、）

丹右　然らば最早すゝめ申さぬ、爰でわれ／＼兩人が、差合で一杯呑むといたさう。

森藏　それがよい／＼、先づそこ元から始めさつしやい。（ト杯をさすを取上げ、）

丹右　なみ／＼とついで下されし。

森藏　承知いたした。（ト森藏、酌をする、）

丹右　これは伊丹の銘酒であらう、此色のよい事は、以前は大酒の新太郎殿、何とよい色ではござらぬ

か。(ト新太郎の鼻の先きへ出す、新太郎ちよつと見て顔を背ける、丹右衞門ぐつと呑んで天窓を叩き、)いや是は甘露々々、ぐつと喉を通つた所は、あゝよい心地ぢや、最う一つ注いで下され。

森藏　承知いたした。(トつぐ、また呑んで、)

丹右　二杯目はまた格別、五臟六腑へ染み渡るやうだ。さあ〳〵今度は森藏殿。

森藏　その杯を待つて居つた。

丹右　どれ、酌をいたして進ぜよう。(ト丹右衞門酌をする、森藏杯を新太郎の鼻の先へ出し、)

森藏　新太郎殿、この匂ひは如何でござる、一杯遣りたうござらぬか。(ト新太郎顔を背け、)

新太　神へ誓つて禁酒いたせば、呑みたいとは存じませぬ。

森藏　貴殿に引替へ手前などは、ぷん〳〵鼻へ匂ひがはひり、喉がぐび〳〵いたしまする。定めて貴殿も同樣ならん、さう顔を背けずとせめて匂ひをおかぎなされい。(ト杯を差し出す、新太郎拂ひのける、此拍子に杯を落し酒のこぼれし思入、)これは〳〵勿體ない、一粒萬倍々々。(ト疊の酒を吸ひ)えゝ、疊に半分呑まれてしまつた。(ト丹右衞門また杯を取つて、)

丹右　くどいやうだが梅澤氏、師匠が祝ひの杯ゆゑ、ちよつと一杯過されぬか。

新太　忝なうはござれども、此儀ばかりは只管に。

森藏　然らばせめて杯ばかり。
新太　それもお斷り申しまする。（ト匂ひをかぐも迷惑といふ思入。）
丹右　三度の食より好きな酒を、
森藏　斯くまで思ひ切らるゝとは。
新太　勘當御免を願はん爲。（ト兩人顏見合せ思入あつて、）
丹右　さてはいよ／＼梅澤氏には、誠改心いたされしか、是れは感心いたしてござる。
森藏　左程に思召すならば、及ばずながら我々も、師匠へお詫びを。
兩人　いたすでござる。
新太　交り深き舊友の、誼を思召すならば、お執成しをお賴み申す。
丹右　委細承知、
兩人　いたしてござる。（ト此時、調べの音する、）
丹右　最早狂言の始まる時刻、
森藏　樂屋へ參つて手傳ひませう。（ト兩人立ち上る。）
新太　左樣なれば何分よろしう。

丹右　お執成し、
兩人　いたすでござる。（ト下へ下り行きかけるを、）
正兵　あ、もし、此肴は、
森藏　それはそなたへ、
兩人　進上いたさう。（ト合方調べにて丹右衞門、森藏、門の潜の内へ這入る、跡見送り、）
新太　今の二人が無理強に、我へ酒をすゝめしは、
正兵　あなたの禁酒なされましたを、
しが　試しにお出でなされたのか。
新太　如何さま左樣な事であらう。何にもせよ供部屋へ、參つて御沙汰を相待たう。
正兵　それがよろしうござりますが、御門からは人目に立てば、
しが　幸ひ裏からこつそりと、
正兵　御案内をいたしませう。
新太　何から何までそなたの厄介。
正兵　どういたしまして、

新太　御内儀大きに、（ト辭儀をするを、道具替りの知らせ、立ちあがつて、）世話でござつた。

ト合方調べにて、正兵衛奥へ行けといふこなし、よろしく道具廻る。

（奥座敷の場。——本舞臺二間通し中足の二重、本緣附、向う上手床の間、好みの掛物をかけ、續いて金地墨畫の袋戸棚、下手小形の襖出這入り、上の方後へ下げて一間障子屋體、此前石燈籠、四つ目垣、冬木のあしらひ、いつもの所枝折戸、下の方一面建仁寺垣、枝折戸と屋體の間四つ目垣にて見切り、下手にも冬木をあしらひ、總て小倉座敷の體。道具半程より床の三重にて道具留る。と直に床の淨瑠璃になる。）

〽行空の雲も晴れ行く如月の、霞も八重に紅梅の馨り床しき庭の面、すみれ蒲公英鼓草、調べの音も還暦の、けふぞ祝ひの今樣に、主人は一間を立出でゝ。

ト此内奥より腰元二人褥煙草盆を持ち出で、上手へ褥を敷き、煙草盆を直す、あとより山太夫白髮鬘袴一本差しにて出來り、褥の上へ住ひ、

山太　庭の樹木も年々に養ひよければ成木なし、數百年の長壽を保つ、人間とても同じこと、兎角養ひが肝腎なり、われ壯年の頃よりして持病の爲に惱みしが、好める酒を止めてより宿醉の憂ひなく次第に身體丈夫になり、五十を越して狂言なども、勤めよく覺ゆるは、身の行ひのよきゆゑぞ。

既に定命までと思ひしも、いつしか十年生延びて、六十一の賀を祝ふは、誠に嬉しきことでござる。

あき　このお祝ひの三日のうち、お天氣もよく風もなく、

やま　誠に空も穩かにてお目出たう、

兩人　存じまする。

山太　最早今日は内々の、祝ひなれど降られては、何かに附けて不都合ながら、天氣のよいは何より仕合せ。（ト思入あつて）いや、悴と妻が密々に申す事があるといふが、何用なるか、誰も居らねばこれへ參るよう申してくりやれ。

兩人　畏りましてござりまする。

〽下女は一間へ立つて行く、跡を見送り山太夫。

ト兩人辭儀をなして奥へ這入る。山太夫思入あつて、

山太　悴と妻が密事といふは、今日、勘當せし新太郎が參りしと申すことゆゑ、多分は彼れが詫びであらう。年限經ちしことなれば許してやりたいものなれど、外門弟の示しにならねば、一つの功を立てざるうちは勘當は許されぬ。

〽未然を察し兩人が、來るを今やと待つ折柄、襖を明けて妻楓、千之丞のあとに附き重立つ門弟立ち出で、一禮なして座に附けば、

ト山太夫烟草を呑みゐる。奥より以前の楓、千之丞、丹右衛門、森藏出で、下手へ住ふ。此後へ傳平、長四郎、藤六、郷助、門弟出て居並び、皆々辭儀をなす。山太夫見て、

悴と妻が用事ありと申せしゆゑに是れへ呼びしが、思ひがけなき門弟まで、連立ちしは何事なるぞ。

千之　かく打連れて參りしは、折入つて父上へ、お願ひがござりまする。

山太　なに、願ひがあるとは。（ト誂への合方になり）

千之　外の儀でもござりませぬ、此程より母上と御勘氣御免のお詫びいたせし、門弟梅澤新太郎が、再度の御詫びにござりまする。

楓　五ヶ年以前御名代の釣狐を仕損ぜし、越度によつて追放され、艱難辛苦いたせしも、好める酒を愼まざるゆゑ、

丹右　これ皆日頃の御教諭を、忘却なせし酒の科、今般先非後悔なし、

森藏　改心なせし其しるしに、先達てより信心なす神へ誓つて酒を斷ち、

傳平　折がなあらば御勘氣の、御免を只管願はんと、
長四　それより諸國を遍歷なし、傳手を求めて他流へ渡り、
藤六　過ぎし恥辱を雪がんと、
鄕助　晝夜藝道修行なし、
千之　今般故鄕へ立歸りしも、御勘氣御免を蒙つて、此お祝ひの末席に、連なりたい彼れが願ひ。
楓　御名代を仕損じて、師匠へ恥辱を與へしゆゑ、憎い奴ではございまするが、先非を悔いて禁酒いたせば、
丹右　此御祝ひに過ぎ去りし、科をお許し下さりまして、元の師弟になし下さらば、
森藏　狂言道におきまして優れし業の梅澤氏、拙者共の力となれば、
傳平　此御年賀のお祝ひに、
長四　御勘氣御免下さらば、
藤六　門弟一同いかばかりか、
鄕助　有難く存じ、
六人　奉りまする。

〽妻や悴と諸共に、信義を盡す同門が、思ひ入つて頼むにぞ、山太夫はほく〴〵うなづき。
ト皆々よろしく思入、山太夫もこなしあつて、

山太　折角の頼みながら、此勘當は許されぬ。

丹右　すりや、何樣に私共が、

森藏　お願ひ申し、

六人　上げましても。

山太　許されぬといふ其譯は、(ト合方きつぱりとなり、)恐れ多くも嵯峨御所より、拙き藝の釣狐をお好みに預りしは、他流に對して小倉の面目、いと有難きことなるに、折惡しく風邪に冒され勤むることのならざれば、お日延べを願ひしに、關東よりのお客あつて、其日に限るとある事にて新太郎へ名代を、申し附けしはかねてより、其業の出來るゆゑ。

〽名に負ふ高位のお館にて、師匠の代りを勤むるは、弟子たる者の身の冥加、謹愼なして勤むべきを。

常に戒しめ置きたる酒を、性根失ふほど過し、お好みありし釣狐も手の舞ひ足の踏度も覺えず、しどろもどろに勤めしゆゑ、御客の馳走に召されたる其甲斐なければ御不興受け、遂に御出入り

を止められたり。

〽如何に好める酒なればとて、上を重んじ師を思はゞ、斯かる事はあるまじきに。上を上とも思はねば師を師とも思はざるゆゑ、彼れを勘當いたせしなり、私事のあやまりなら、今度の祝ひを幸ひに勘當許して遣はさんが、右の譯ゆゑ許されぬ。

〽事を分けたる師の詞に、再び返す詞もなく、差しうつ向けば、千之丞、

ト此内山太夫よろしく思入あつていふ、皆々こなしあつて、

千之　御尤なる其仰せ、此上お詫びの仕樣もなし、何か一つの功あるまで、控へまするでござります。

丹右　酒興の上とは申しながら、大事の御場所を仕損ぜしは、

森藏　梅澤氏の身のあやまり、殘念な儀で、

六人　ござりまする。

〽門弟顏を見合せて、互ひに吐息をつくばかり、〽折から小蔭に忍び居て、始終を聞きし新太郎は、我が身の先非を顧みて、是非も涙にくれにける、楓は夫の機嫌を見て。

ト門弟顏を見合せ是非もないといふ思入、下手垣根の間より新太郎、正兵衞出來り、小蔭で聞き居たるこなしあつて、四つ目垣の傍に窺ひゐる、楓これをちよつと見て、

楓 實は今日新太郎、此お詫びに參りましたが、僅かなやうでも足懸け五年、艱難苦勞なしたと見え見る影もない窶れし姿。それに附けても新太郎もあなたのお身をお案じ申し、嘸かしお年を召しましたらう、御勘氣御免がございませねば、せめての事にお目通りを、お許しなされて下さりませと、折入つて頼みましたが、目出たい今日のお祝ひにお免じなされて只一目、お逢ひなされて下さりませぬか。

山太 そちもよい年をいたしながら、分らぬ事を申す者ぢや、勘當なした者に、對面がいたされうか。

楓 ではございませうが師匠を慕ひ、お目に掛りたいと申しますれば、どうかお聞届け下さりませぬか。

〽妻の頼みに山太夫も、流石師弟の恩愛に、心に逢ひたく思へども。

ト山太夫よろしく思入、誂への合方になり、

山太 そりや新太郎ばかりでなく、五ケ年この方逢はざるゆゑ、我とても同じこと、門弟多き其中でもあれが親新左衞門は我が父の門弟にて始終相手をいたせしゆゑ、兄弟同樣になせしもの、其新左衞門が死去せし後、跡に殘りし新太郎、母より頼みに我が方へ内弟子に引取りて、八歳よりして育てた上、狂言を教へしに、音聲もよく小手も利き、日夜修行なすゆゑに瞬くうちに功者になり、

大人も及ばぬ彼れが技藝、行く〳〵は我が亡き後、倅千之丞が後見は、新太郎より外になしと、常に片腕に思へばこそ我が名代もさせしなり、釣狐を仕損ぜし其罪はにくけれど、幼年よりして仕込みしゆゑ他人のやうに思はねば、我とても逢ひたけれど、勘當許さぬ其うちは、浮世の義理に逢はれぬぞ。

〽情の詞も勘當に、師弟の中を隔てたる、垣の外面に窺ひゐる新太郎は堪り得ず、よしやお叱り蒙るとも、お側へいつて只一目と入らんとなすを止むる正兵衛、山太夫はそれと悟り、

ト此内山太夫思入にていふ。垣の外の新太郎よろしく思入あつて、内へ這入らうとするを正兵衛留める、山太夫思入あつて、

定めて彼れも逢ひたからうが、其身の越度に虧けたる月、めぐり〳〵て滿月に纏まる時節を相待ちやれ。

楓　有難い其お詞、垣の外面で、

山太　やる。

楓　いえさ、虧けたる月の纏まる時節を、待たせまするでござりまする。

山太　その時節の來るまで、再び詫びはいたすまいぞ。

丹右　あ、是非もなき儀で、

六人　ござりまする。（ト皆々是非なき思入、山太夫氣を替へ。）

山太　悴、そちが今日勤むる、我が家の釣狐に口傳あれば、申し聞かさん。

千之　すりや、私へ家の口傳を。

山太　他聞を厭へば奥へ參れ。

千之　はツ、畏つてござりまする。

山太　どりや、口傳いたさうか。（ト立上る。）

〽いざや口傳と立上る、師の俤の年老いしを、見るに附けても幼年より、親にまさりし大恩を、送らぬ不孝を顧みて涙の雨の絲柳、風に亂るゝ如くにて、垣の外より差しのぞく、顔見合せし師匠もまた、弟子は我が子も一つゆゑ、不便なものやと顔そむけ、心殘して入りにける。

ト此内山太夫垣の外へ思入、新太郎は垣に縋り山太夫を見てよろしく思入、よき程に顔見合せ山太夫も不便といふ思入あつて、顔を背け千之丞を伴ひ奥へ這入る。

〽楓はあとを見送りて、

楓　新太郞、これへ來や。
新太　はつ。
　〽はつとばかりに枝折戸あけ、內へはひりて師の影を、伏し拜みてひれ伏せば、
　　ト新太郞つか〳〵と枝折戸の內へ這入り、奧を拜みてひれ伏す。
楓　祝ひに祝ふ六十一の本卦還りのお祝ひは、勘當詫びのよき折ゆゑ再應お詫びをなしたれど、
丹右　只今それにて聞かれし如く、義を立て通す師匠の心底、
森藏　定めてけふはと思はれし、其甲斐もない此場の仕儀、
傳平　誠に以て我々も、
長四　貴殿へ對し、
六人　氣の毒千萬。（ト新太郞顏を上げ、）
新太　御新造樣、若旦那樣、各々方まで舊友の誼を思ひ共々にお口添へ下されしが、御聞入れなき上からは、最早是非に及びませぬ、覺悟は極めて居ります。
楓　覺悟せしとは如何なることか、今も夫の詞にも、時節を待てとおつしやつたれば、今日お詫びが叶はずとも、叶ふ時節があらうから、短氣なことをいたすまいぞ。

丹右　御新造樣の仰せの如く、今日に限りし事ならねば、
森藏　やがて時節の來りますまで、早まつた事なされますな。
正兵　皆樣があのやうに御親切におつしやれば、必ず死なうなどゝいふ、短氣はお出しなされますな。
新太　師匠の御勘氣御免なきゆゑ、死する覺悟と思召すは、御尤にござりまするが、故あつて私は只今命は捨てませぬ、何れもお案じ下さるな。
楓　それは何よりよい心、
丹右　我々共も、
六人　安堵いたす。

ト楓を始め同門が、いたはる詞に太息をつき。(と新太郎思入、床の合方になり。)

新太　今更申すも愚癡ながら、師匠へ恥辱を與へたる先非を悔いて改心なし、神へ誓つて酒を斷ち、御勘氣御免を願はんには、業を勵むに如くはなしと、それより日夜寢食を忘れて藝道修行なし、諸國を遍歴なすうちも浪人の身の遠慮なく、傳手を求めて諸流へ渡り、其家々の口授口傳、探り得たるを土産に御勘氣御免の時至らば、再び梅澤の家名を興し先きの恥辱を雪がんと、斯く見苦しき姿になるまで、

〽或は野に伏し山に伏し、雨露霜雪に身を苦しめしも。御免の時の嬉しさに、忘れんものと思ひしも、今日御免あらざれば、其甲斐もなく年頃の、苦心なせしも水となり、泡と消えゆく外なき身も、六十に餘る母ありて不具な子ほど可愛いと、一方ならぬ愛しみ、我一命を捨てたなら其歎きはいかばかり、不孝に不孝を重ぬるゆゑ、死するも思ひ止まりまする。其替り今日限り、習ひ覺えし業を捨て、是れより下賤に身を落し肩へ棒を當るとも、不孝をなせし母親へ聊か孝養盡せし上、老年ゆゑに死去いたさば、其時こそは諸共に今日捨つる命を捨て、冥土へ母を伴ふ所存、返す〲も幼年より、御養育に預りし師匠へ御恩を送らぬのみか、これまで水魚の交りせし、各々方にも業を捨つれば、最早今日限りでござる。

〽願ひ叶はぬ身を託ち、思ひ入りたる有樣に、楓は心なぐさめて。

ト新太郎よろしく思入、皆々氣の毒なる思入。

楓　待ちに待ちたる御勘氣御免が、叶はぬゆゑに一途に迫り、習ひ覺えし業までも捨つるといふは尤ながら、虧けたる月も滿月に到るを待てとおつしやれば、心を長く待つがよい。

新太　幼年よりして御厚恩に、預りましたを報ぜずに、御苦勞かける身の不束、申譯もござりませぬ。

丹右　六十一のお祝ひに、門弟一同打集ひ、

森藏　御酒頂戴の其席へ、連なりたいと願はれしも、
傳平　御勘氣御免あらざれば、
長四　望み叶はぬ梅澤氏、
丹右　さぞ殘念に、
六入　ござりませう。
新太　實に殘念でござりまする。
正兵　御願ひ叶はぬ上からは、一先づお歸りなされませ。
新太　いかにもお暇いたすでござる。
楓　それでは最う行きやるか。
新太　長居は却つて恐れあれば、お名殘り惜しくも此儘に、御暇いたすでござりまする、只今お詞かはさねど、お面拜せし上からは最早思ひ置くことなし。只この上は御息災で、お年の上でござりますれば御養生を第一に、御長命遊ばしますやう、お願ひ申し上げまする。
楓　そなたも其身を大切に、時節の到るを待つて居や。
新太　御勘氣御免あるまでは、御意得ませねば若旦那へ、よしなに仰せ下さりませ。

楓　承知しました。

丹右　左様ござれば、

六人　梅澤氏。

新太　何れもお別れ申しまする。

〽暇を告げてしを〳〵と、歸る姿のいとしやと見送る楓同門が、惜しむ名殘りに振返り、何の詞もなく涙、空も春氣の雨催ひ、晴れぬ思ひに行き惱む、折からこなたに聲あつて、

ト此内新太郎、楓皆々へ辭儀をなし名殘惜しき思入にてしを〳〵と花道へ行く。楓不便なといふこなし、門弟の皆々も見送りて惜しむ。新太郎花道にて振返り、皆々と顏見合せ、これが別れといふなしあつて、花道半より先きへ行く、此時奧より千之丞つか〳〵と出で、

千之　新太郎待つた。

新太　御用でござりまするか。（ト下に居る。）

千之　只今奧にて手前より再びお詫びいたせし所、許しがたき者なれど、そちを始め門弟共一同よりの詫ゆゑに、今日そちが勤むる役の釣狐を彼れに讓り、勘當詫びの種にもと、五ヶ年が間諸國を渡り修行なしたる功見えなば、勘當許し遣はさんと、有難き仰せなるぞ。

新太　すりや、釣狐にて御勘氣を、蒙りましたる拙者ゆゑ、再び今日釣狐を勤めよとある仰せとな。

千之　尤も、勘當の身なるゆゑ、田舍修行の役者となし、舞臺に於て勤めさすぞ。

新太　はゝ。有難うござりまする。

ヘ天へも昇る心地して、勇み進んで立ちかへれば。

ト新太郎嬉しき思入にて、舞臺へ立ちかへる。

楓　そなたが修行の功見えなば、お許しなさるとあるからは。

丹右　爰ぞ一世の晴れなれば、

森藏　心を用ゐて、

六人　勤められよ。

新太　嵯峨の御所にて恥辱をば、取りしを雪ぐは今日只今、師より口傳の釣狐、勤めまするでござりまする。

千之　父が心に叶ひなば、

楓　元の師弟にならるゝぞ。

正兵　嘸お嬉しうござりませう。

丹右　恐悦な儀で、

六人　ござりまする。

新太　胸中お察し、（ト嬉しき思入にて涙を拭ふを木の頭）下さいませ。

ト嬉し涙にくれる思入、みなく引ばりよろしく、鉦の鳴物にて、

ひやうし幕

ト片シヤギリにてつなぎ、引返す。

返し　今様舞臺釣狐の場

〔役名――今様師梅澤新太郎、同小倉千之丞、同大江丹右衛門、石田森藏、今様師小倉山太夫等。〕

（今様狂言の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面松を描きし鏡板、上の方臆病口、竹を描き、此外襖欄間附の棲、同じく竹の畫、下の方高欄附橋懸り、後板羽目、緞子の揚幕を掛け、總て今様狂言舞臺の體、正面段の上へ毛氈を敷き、長唄三味線連中上下にて居並び、平舞臺に囃子連中烏帽子素袍にて居並び、よろしく前の片シヤギリで幕明く。と小鼓のあしらひにて、橋懸りより千之丞、野郎鬘上下、紐の附きし大きな吸筒の瓢箪を肩へ掛け、狐罠の弓を持ち出來り、

千之　罷り出でたる者は、此あたりに住ひいたす、太郎作と申す獵師にて候。これなる原へ弓を張り、狐を釣るが得手でおりやる。幸ひけふもよき鼠を得て、油で揚げて置きたれば、必ず今宵も得物あらん。前祝ひに一杯呑まんと諸白を一升買うて來たが、さて酒といふものは一人では旨うないが、相手があれば一升は忽ち呑んでしまふゆゑ、先づ誰も來ぬ其うちに、一人でゆる〱樂みませう。

ト右のうち舞臺を廻り、上手よき所へ住ふ。是れより唄になり、

謡〽時雨に染むるもみぢ葉に、賤が軒端の暮おそく、唄〽夕日の名殘り木の間より、差し合しらぬ友垣が、隔てぬ中に連れ立ちて、

ト此内小鼓のあしらひ、花道より丹右衞門、森藏、肩衣、袴、くゝり脚袢にて出來り、花道へ留り、

丹右　山際の太郎作は、同じ獵師仲間でも狐を罠に掛けるが上手ぢや、されば皮を剝いで賣るので、いかう金儲けをしたといふことでおりやる。

森藏　大分都合がよいと見え、今しがた造り酒屋で、諸白を一升買うたが、大方今頃呑んで居やらう、何と羨しいことではないか。

丹右　誰が心も同じこと、我らもそれを聞いたゆゑ、是れから彼れが所へ行つて、馳走にならうといふ

のぢや。

森藏　それは一段とよいことぢや、早う行つて呑んでやらう。

丹右　さあ〳〵、急いで參らう〳〵。

〽田の面に張りし鳥おどし、風に鳴子の音よりも、喉をならして歩み寄り、

ト兩人振あつて舞臺下手へ來り、内をのぞく思入あつて、

なう〳〵太郎作は内に居りやるか。

千之　おゝ、内に居るが、誰ぢや。

丹右　畑中の次郎助に、

森藏　川添の三郎次ぢや。

千之　遂に尋ねたこともないに、何と思うて二人は來たぞ。

丹右　同じ獵師仲間でも、こなたは狐を取るのが上手で、いかう金儲けをしやるので、祝ひ酒を買つたといふゆゑ、それを馳走になりに來たのぢや。

森藏　惣じて酒は一人では旨うないものぢや、よつてわしらが相をしに來たのぢや、早う酒を振舞やれ。

ト此内鼓のあしらひ千之丞悪いものが來たといふ思入にて、

千之 それは折角來やつたが、さりとは氣の毒なことでおりやる。酒はみんな呑んでしまうた。
丹右 なに、一升の酒を、
兩人 皆呑んだ。
千之 なか〳〵。（ト丹右衞門、森藏顏見合せ思入あつて）
丹右 いや、こなたが左程大酒とは知らなんだ、今少し早く參らば、酒の馳走にならうものを、殘念なことをいたしたわい。
森藏 折角呑まうと思うて來たに、無いと聞いては堪へられぬ、腹の内の蟲が、ぐう〳〵と鳴きをる。
丹右 ないとあらば仕方がない、是れから二人で一升買ひ、家へ行つて呑まう。
森藏 しかし入物がないゆゑ、あの瓢簞を借りて行かう。
丹右 それがよい〳〵。（ト鼓のあしらひにて兩人瓢簞を取りにかゝるを千之丞留めて）
千之 いや〳〵、此瓢簞は貸されぬ〳〵。
丹右 酒を呑んでしまうたとあれば、明いてゐる瓢簞ぢや。
森藏 わしら二人に貸しておくりやれ。
千之 いや〳〵、これは貸されぬ〳〵。

兩人　いや〳〵、それは貸りねばならぬ。（ト三人瓢簞を奪ひあひ、ト丶丹右衞門引取り、）

丹右　これは大層重いことぢや、何が中にはひつて居るぞ。

千之　中には水がはひつて居る。

丹右　なに、水な事があるものぢや、ぷん〳〵酒のかざがするわ。（ト千之丞思入あつて、）

千之　さうと知れたら是非がない、實は水ではない、諸白ぢや。

森藏　それを附込んで二人が來たのぢや、早う一杯振舞やれ。

千之　おゝ、振舞ふからこつちへ返しやれ。（ト千之丞瓢簞を取返す、丹右衞門鬘桶の蓋を取つて、）

丹右　さあ〳〵、早く是れへついでおくりやれ。

千之　心得た。（ト瓢簞よりつぐ思入、）どく〳〵〳〵。（ト丹右衞門これを呑干し、）

丹右　これは大層よい酒ぢや。

森藏　早うわれらへ廻しやらぬか。

丹右　さあ〳〵われも一杯呑みやれ。（ト蓋を渡す、森藏取つて、）

森藏　なみ〳〵とついでおくりやれ。

千之　心得た。（ト瓢簞よりつぎ、）どく〳〵〳〵。（ト森藏呑んで、）

森藏　成程、これはよい酒ぢや。今度は主人へさしませう。（ト千之丞へさす。）

千之　次郎助、ついでおくりやれ。

丹右　心得た。どく／＼／＼。（トつぐ思入、千之丞一口呑んで、）

千之　何ぞ肴をいたしやらぬか。

丹右　その肴は二人して、

森藏　拍子事で踊らう。（ト丹右衞門、森藏扇を持ち、立ち上りて、）

〽あんの山からこんの山へ、戀に山坂越ゆる身は、ふう二人寐るのが樂しみに、りんとはねたる耳よりも、秋の夜長が短うて、ほんの物憂さ兎ぢや。

ト兩人よろしく振あつて納まる。

千之　やん／＼、さあ／＼最う一つ呑まつしやれ。（ト蓋をさす。）

丹右　それは／＼忝けない。

森藏　われらが酌をいたしてやらう。

〽さいつ押へつ杯の、數も三つ四つ六つの鐘。（ト三人酒を呑むことあつて、）

〽一むら茂る山蔭の雀の塒へ歸り來る、雀色時早や過ぎて、小闇き道の穗芒や風に亂るゝ白

菊の、花をよすがに白藏主。

ト此内こだまなあしらひ、花道より新太郎好みの僧帽子墨の法衣、中啓を前へさし珠數を持ち杖を突き出來り、花道よき所へ留り、

新太　〽我れは化けたと思へども、人は何といふやらん。これは此ところに住ひする年經る狐の骨張にて候。さる程にこの山のあなたに獵師の候て、我等の一門を釣り平げることにて候。何卒釣られぬやうにと思ひ、則ち彼れが伯父坊主に白藏主と申すがござる程に、これに化けて異見を加へ殺生の道を思ひ止らせうと存ずることでござる。何と白藏主によう似たか知らぬ。先づ水鏡にうつして見ませう。

〽雨持つ雲も吹き晴れて、照る月影に澤水へ、おのが姿を寫し見て、

ト新太郎流れの水に姿をうつし見る思入あつて、

はあ、扨も〳〵似たことかな、これでは伯父と思やらう、先づ彼れが所へ急いで參らう。

〽珠數の玉なす道の邊の、露踏み分けて殊勝げに、柴の折戶へたどり來て、

ト新太郎こなしあつて舞臺へ來り、

いや、急ぐ程に早やこれぢや。（ト下手へ立ちかへり、）ものも、甥御内におぢやるか。

ト これに二三人思入あつて、

森藏 いや、表に誰やら案内があるぞ。

千之 どうやら今のものは、伯父御坊の聲のやうぢやが。（ト言ひながら下手へ來り新太郎を見て、）いや、是れは伯父御坊には、何と思召してお出でなされしぞ。

新太 されば〱、此中は久しう逢はいで懷しさに參つたが、何事もおぢやらぬか。

千之 されば誠に此中は、手前取紛れまして御見舞も申さず、無沙汰をいたしてござる。先づ御息災で目出たうこそござれ。いざ、内へ這入らつしやれませい。

新太 おゝ、今内へ這入りませう。（ト新太郎眞中に住ひ、）見れば賓人でござるよな。

千之 いや、氣遣ひなものでござらぬ、われらと同じ獵人でござる。

新太 え。（トびつくりなし、）二人ともに獵人でおりやるか。

丹右 なか〱、狐や狸などを取りまする。

森藏 獵人でござりまする。

千之 して、伯父御坊には我が方へ、何御用あつてお出でなされましたぞ。

新太 こなたに異見したいことがあつて、態々これへ參つておぢやるが、聞きやらうか聞きやるまいか。

千之　何がさて伯父御坊の異見を、聞かぬといふ事がござらうか、何事なりとも聞きませう。

新太　それは何より嬉しうござる、聞けばこなたは罠をかけ、狐を釣りやるといふ事ぢやが、それは誠の事でおりやるか。（ト千之丞思入あつて、）

千之　いや〳〵、われら左樣なものを、遂に釣つた事はござらぬ。

新太　いや〳〵お隱しやるな、釣ることは知つて居るぞ。殊に狐などゝいふものは執念深いもので、其儘仇をなすものでおぢやる。大事なことでおぢやる程に、必ず〳〵お止まりやれ。

千之　何しに僞り申しませうぞ、左樣な狐を釣るといふことは、思ひも寄らぬことでござる。

新太　おゝよい〳〵、そなたが狐を釣らぬといふは、異見を聞くまいといふことでおぢやろ。左樣な心であるからは、是れから蜀を持つたとも思はぬ。ふつ〳〵と仲違ひでおぢやる。さらば〳〵罷り歸る。（ト新太郎立ちかゝり行かうとするを留めて、）

千之　申し〳〵、先づ戻らつしやれい。

新太　いやでいぞ〳〵。

〽立つを留しと荻の葉に、ふつはる葛の裏表、袖にすがりて引き留め、

ト千之丞、丹右衞門、森藏三人、新太郎を留め、

丹右　申しく、伯父御坊樣、あなたの異見を聞かしますれば、

森藏　まづく戻らせられい。

新太　愚僧が異見を聞きやるか。

千之　何なりとも聞きまする。

新太　しかと左樣か。

千之　何の嘘を申しませう。今は何をお隱し申しませうぞ、實は狐を釣りますれば、伯父御坊の御異見を聞きまするでござりまする。（ト新太郎思入あつて）

新太　幸ひこゝにござる衆も、獵人でおりやるとあれば、甥と共々聞かしませい。

丹右　聞きまするく。

森藏

新太　今愚僧が異見するも、こなた衆の身の爲ぢやによつて、凡そ狐の執念深い謂れを、語つて聞かせませう。

〽いざ語らんと白藏主は、扇を取りて座を構へ、

ト大小の鳴物になり、新太郎中啓を持ち、眞中へ住ひ、

抑々狐と申すものは、姿は賤しき獸なれど、皆神にてぞおはします。

〽天竺にては般得太子の墳の神、大唐にては幽王の后褒似と現じ、我が朝にては、稻荷五社の大明神にておはします。
〽昔天永の御代なりしが、直なる竹の御園にて雲の上人打ち集ひ、お歌合せのありし時、俄に荒き風吹き來り、御前にありし四十二の燈火一度に吹消しければ、東西一時に闇夜となり、こはそも不思議と人々が時の博士安倍の泰成を御前に召して占せしに、これは正しく變化の所爲と、申し上ぐれば速かに祈れと勅命蒙りて、畏り候と、
〽四方へ四面の壇を飾り、五色の幣束立て並べ、丹精凝らして祈りければ、寄りに立たる上童玉藻の前は堪りかね、幣束を手に持ちしまゝ、
〽年經る狐の姿を顯はし、雲に乘じて下野なる、那須野の原へ落ち行きたり。おろそかにては叶はじと、上總介廣常、三浦介義明へ妖狐退治の命下り、
〽仰せを受けて兩介は、那須野の原へ下着なし、矢來を結うて四方を取卷き、數百疋の犬を入れ、草を分けて狩立つれば、遠見の者の申すやう。

〽胴は七尋尾は九尋、千年を經し狐にて、其身金毛の光りを放ち、世の常の獸ならず。何とおそろしき事ならずや。其時すかさず三浦の介弓に矢つがひぴやうと射る、間も置かずに次の矢を上總介ぴやうと射て、終に狐を射留めしが、

〽其執心那須野に止まり、石と化してこれに觸るれば、空翔ける鳥、地を走る獸、人間さへも命をば、取られし事は數知れず、されば恐れて其石を殺生石と名附けたり。かやうに恐ろしき獸なるを、わごりよ達が賤しき身に、釣り來ること勿體なし、異見を用ゐず止まらずば、必ず共に家に祟り、子孫の絶ゆることならん、かまへて思ひ止まらしませ。

〽狐の執心深きこと、ゆめ〳〵疑ふ事なかれと、諭しの詞に三郎次は、肝にこたへて泣出し、

ト此内新太郎物語り模樣の振りよろしく、森藏はよき程よりしく〳〵と泣く、此時前へ出で、はゝあと泣く。

森藏 はあゝ、扨も〳〵狐といふものは執心深いものでござる。家の榮えを思へばこそ、殺生をもいたしまするが、其身ばかりか子孫まで、祟ると申すは悲しや〳〵。

〽聲をあげて泣きければ、聞く次郎助は腹を立て、(ト森藏泣くを丹右衞門見て腹を立て、)

丹右 何をめろ〳〵泣きやるのぢや、人は萬物の靈なれば、狐やなど取つたとて、何の祟りがあるもの

ぢや。えゝ、腹の立つことでおりやる。

森藏　いや、執心深いものぢやよつて、祟りをなすに違ひない。あゝ、悲しや〳〵。

丹右　そなたのやうなものがあると、狐を釣るに邪魔になる、あた忌々しい事ではある。

森藏　そのやうな事を言はずと、子孫を思ひ止めたがよい。

丹右　いや〳〵、止めぬ〳〵。

森藏　あゝ、悲しや〳〵。

丹右　腹立ちや〳〵。

〽眉臂張つて腹立てば、投げ首なしてしく〳〵と、泣き〳〵連立ち歸り行く。

ト兩人可笑味のこなしあつて、花道へ這入る。

〽跡を見送り太郎作が、可笑さこらへて吹出し。（千之丞前へ出て可笑しき思入にて）

千之　はゝゝゝ、狐は執心深いものゆゑ、子孫のものに祟るというて、三郎次が泣きやれば、はゝゝ、萬物の靈たる人に、何で狐が祟らうというて、次郎助が腹を立ちやる、はゝゝゝ、僅か一杯か二杯の酒に、なゝ、泣いたり、はゝゝゝ、はゝ腹を立つたり、はゝゝゝ。いやはや、可笑しいことでおりやる、はゝゝゝ。

（腹を抱へて打ち笑へば、白藏主は氣色を替へ、
　ト千之丞腹を抱へて笑ふ。新太郎思入あつて、）

新太　やい〳〵、をかしうもない事を、其やうに笑やるは、今の異見を聞きやらぬか。

千之　いえ〳〵、聞きまする〳〵。伯父御坊樣の異見につき、狐を釣るといふことは、ふッつり思ひ切ります る。

新太　じかと左樣か。

千之　なか〳〵。

新太　それで愚僧も嬉しうおりやる。いよ〳〵そなたが止めたとあらば、其狐を釣るものを捨てゝ見せい。

千之　それは何より易いこと、捨てまするでござりまする。

新太　愚僧がこれに居るうちに、前なる川へ流しておぢやれ。（ト千之丞狐罠を取つて、）

千之　あの是れを流せとか。

新太　なか〳〵、氣味の惡いものぢや、早う流しませい。

千之　畏つた。

〽罠を携へ立ち出で丶、澤邊へ臨み思案なし。(ト千之丞狐罠を持ち上手へ來て思入あつて、)いや／＼伯父御坊の異見でも、狐を釣るは止められぬ、先づ川へ流したつもりで、爰等へ罠を張つて置かう。

〽道の邊へ弓を張り、そ知らぬ顏に立戻り。(ト千之丞上手へ罠を張りこちらへ來て、)やあ／＼伯父御坊樣、只今狐罠は川へ流しましてござる。

新太　おゝ、川へ流しやつたとか、それは一段な事ぢや、異見を聞いて嬉しうおりやる。其かはり用があれば何なりと寺へいうて來い、錢でも米でも用立てませう。

千之　それは忝うござりまする、御無心申しますでござりませう。

新太　我らは最早歸りませう。

千之　幸ひ諸白がござりまする、一杯召しあがりませぬか。

新太　酒は五戒の一つでおりやる。

千之　さらばお茶でも參りませぬか。

新太　また重ねて參りませう。さらば／＼。

千之　ようござりました。

新太 おゝく。

へ花の袖に身を覆ひ、影を厭うて立ち出しが、杖を突くく見返りて、

ト新太郎下手へ行きかけ思入あつて、

さてもく人間といふものは、愚しいものでおりやる。伯父坊主に化けて異見のしたれば、まんまと欺されてござる。是れで取られる憂ひもない、祝うて小唄節で去なう。

へ去なうやれ、古墳へくく、ふるや時雨の夕日影、稲荷の森の燈火は誰が嫁入のさゝ事か、朱の玉垣色づきし狐の枕草の床、去なうやれ、古墳へ。へあゆむともなくかたへなる罠を見やりて襟許へ、夜寒身にしむ心地なし、足中を爪立てゝ。

ト此内新太郎舞臺を廻り狐罠を見て、ぞつとせし思入あつて、

はあ、扨もく人間といふものは賢いものぢや、我らが戻る途中に、まんまと弓を張つて置いた、先づ樣子を見ませう。

へ鼠の匂ひに所體を崩し、罠のもとへ立寄りて、

ト新太郎鼠の匂ひに我を忘れ、ちよつと狐の思入あつて、

いや、うまくさやく、此匂ひをかいでは堪らぬ、ちよと一口喰はうか。(ト思入あつて、)いや、

いや、此鼠は親曾祖父の敵ぢや、一打ちうつてくれう。

〽杖振りあげて二つ三つ、打たれて鼠は音をぞなく、われには晴るゝ胸の煙、こんくわいの涙なるぞ悲しき。（ト此内新太郎よろしくこなし、杖にて鼠を打つことあつて）

くわい。

〽一聲鳴いて草むらへ、掻き消す如く失せにけり。

ト新太郎つかくと橋懸りへ行き、あとを見返り揚幕へ這入る。

〽秋のならひの空よりも、變り易きは人心、異見も水の流れに添ひ、馴れし野中へ辿り行く。

ト此内千之丞罠を持ち舞臺を廻り、

千之　伯父御坊の今の異見、聞いたとは申したれど、なかく以て一夜さでも狐を釣らずに居られうか。次郎助がいやる通り萬物の靈たる人に、假令執心深きとて狐やなどが祟りをなさうか。先づ此邊へ罠を張り、今宵も狐を釣りませう。

〽弓を張り罠をかけ、仕濟ましたりとうなづきて、暫し小蔭へ身を忍ぶ。

ト千之丞舞臺上寄りに、狐罠を掛け思入あつて、上手後へ住ふ。これより鼓唄心になり、

〽梟松桂の枝に鳴き、狐蘭菊のかげに隱れ、野寺の鐘のかうくと、〽更け行く空と小夜

嵐、雲間の月の物凄く、照添ふ水も寐るといふ、眞夜中過ぎて人影の見えぬを幸ひ草むらより老狐は鼠の香に引かれ、心も空に慕ひ寄り、

ト此内牧笛の心にて笛をあしらひ、よき程より大小の鳴物にて、橋懸りより新太郎狐の面を掛け、本毛の縫包みを着て出來り、こなしあつて舞臺へ來り、罠の鼠を見て思入よろしくあつて、

〽取らんとせしが飛び退きて、あゝ恐しの狐罠、かゝらば命捨てやせんと、振返り見てためらひしが、〽畜生の身の悲しさは、愼むことのならずして、行きつ戻りつ狂ひ寄り。

トこれより二挺打合せの合方、大小鳴物入りにて、狐の狂ひよろしくあつて、

〽怺へがたく飛附いて鼠を取れば忽ちに、罠に掛りて引締められ、打ち驚いて飛上り、

ト新太郎罠の鼠を取りにかゝる、千之丞繩を引く、新太郎おどろいて、

新太　くわい〳〵。

千之　そりやこそ掛つた。

新太　くわい〳〵。

ト新太郎逃げようとするを千之丞とらへる。此時臆病口より前幕の山太夫出で、

山太　ほゝお、天晴出來た。勘當許す。（トこれにて新太郎、狐の面を取り、）

新太　すりや、お許し下さりますとか。
山太　おゝ、今日より元の師弟なるぞ。
新太　はつ、有難うござります。（ト辭儀をなし、面を掛けて立上り）くわい〳〵。
千之　どこへ〳〵。
新太　くわい〳〵。
千之　やるまいぞ〳〵。
新太　くわい〳〵
　　〽おのが古巣へ立返る。
ト新太郎、千之丞花道へ行く。山太夫感心の思入。大小の鳴物にて、これと一緒に、兩人は花道へ這入る。知せに附き、跡シヤギリ。

幕

釣狐（終り）

新歌舞伎
十八番の内

船弁慶

解説

「船辨慶」は明治十八年十一月、作者七十歳の時、新富座に書卸された。
其時の役割は、市川團十郎（義經の妾靜、新中納言知盛の亡靈）、市川左團次（武藏坊辨慶）、中村芝翫（船頭三保太夫）、市川海老藏（源九郎義經）、中村福助（水主岩作）、大谷門藏（伊勢三郎義盛）、市川團八（伊豆右衛門尉有經）、市川升藏（堀彌太郎景光）、市川新藏（片岡八郎弘經）等であつた。振附は花柳壽輔。杵屋正次郎、松島庄五郎、松永和楓、芳村孝治郎、芳村伊十郎、住田又兵衛、寶山左衛門、望月太七等が長唄囃子連中として名を列ねてゐた。

能曲に出發した作で、新歌舞伎十八番の一である。活歴風の演出であつたが、評は惡くはなかつた。後年に至つても行はれ、先年市村座に於て、尾上梅幸の靜によつて上演せられ、好評を博したことがある。

船辨慶

長唄囃子連中

〔役名――義經の妾靜、新中納言知盛の亡靈、武藏坊辨慶、源九郎義經、水主岩作、伊勢三郎義盛、伊豆右衛門尉有經、堀彌太郎景光、片岡八郎弘經、船頭三保太夫。〕

本舞臺一面の置舞臺、向う三間鏡板、松の畫、上の方臆病口、竹の畫、下の方高欄附橋懸り、後白木の羽目、同じく竹の畫、橋懸りの留り緞子布交の揚幕、向う同じ幕、日覆より破風を下し能舞臺の道具、正面壇の上へ毛氈を敷き、爰に長唄三絃連中上下にて住ひ、平舞臺に囃子連中烏帽子素袍にて居並び、片シヤギリにて幕明く。と次第になり、

ウタヒ へけふ思ひ立つ旅衣々々、歸洛をいつと定めん。

ト次第濟むと、花道より辨慶撫附鬘、兜巾、篠掛、水衣、白の大口、附太刀、刺高の珠數を持ち出來り、直に舞臺へ來て眞中へ立って、

辨慶 かやうに候者は、西塔の傍らに住ひする、武藏坊辨慶にて候、さても我が君判官殿は、賴朝の御代官として平家の一門滅したまひ、御兄弟の御中日月の如く御座あるべきを、言ひがひなき

者の讒言に依り、遂に御仲違はれしこと、返す〳〵も口惜しき次第なり。然れども我が君は、親兄の禮を重んじたまひ、一先づ都をお開きなされ、西國の方へ御下向ありて御身に誤りなきことを御歎きあるべき爲、御乘船あらんとて、津の國尼ケ崎大物の浦へと急ぎ候。

トよろしくあつて腰桶へ掛ける、これより唄になり、

ウタへ頃は文治の初めつかた、鎌倉殿の疑ひも、晴れぬ時雨の雨催ひ、袖さへ重く都をば傾く御運に落方の、月もろともに西の空、身は雲水の定めなく潮も波も打寄する、大物の浦に着きにけり。

ト此内花道より義經、金烏帽子、直垂、大口、附太刀、中啓を持ち、續いて義盛、有經、景光、弘經、着附大口、附太刀にて出來り、花道にて思入あつて舞臺へ來る、辨慶出迎へ、

辨慶　御急ぎありし程に、是れは早や津の國大物の浦へ御着なり。

義經　辨慶には路次を案じ、一足先きへ赴きしが、嘸待ち久しきことならん。

辨慶　途中で暫し休息なし、只今これへ參つて候。

義盛　して辨慶殿には、此浦より、

有經　我が君西國へ御下向の、

景光　御船はいづれへお頼みありしか、
弘經　御用意よろしく候や。
辨慶　其儀はお案じなさるゝな、某存ぜしものあれば、それへ御船を頼み申さん。
義經　日も晩景に及びたれば、辨慶早く計らひ候へ。
辨慶　心得申して候。
〽所に古き船長の、軒端の松をしるべにて。（ト此内辨慶下手へ來る、皆々後へ立ち並ぶ。）
いかに、此家のうちへ案内申し候。
ト辨慶、シテ柱にて言ふ。三保太夫肩衣達附、船長にて一の松へ出て、
三保　案内とは、誰にて渡り候ぞ。
辨慶　われらは武藏にて候。
三保　いや、武藏殿の御下向にて候か。
辨慶　さん候、我が君西國御下向につき、是れまで御供申して候、御宿を申され候へ。
三保　畏つて候。
辨慶　御忍びの御旅行なれば、萬端に心を附け、御乘船をも頼み申す。

三保　心得申して候、隨分足早き船の候へば、御用次第に出し申さん、先づ〳〵これへ御通り候へ。

〽いざ先づ是れへと船長の、詞に人々席に着き、辨慶君に打ち向ひ、

ト三保太夫下手に控へる、義經上へ通り、皆々よろしく居並び、辨慶義經に向ひ、

辨慶　いかに、我が君へ申し上げ候。
義經　何事にて候ぞ。
辨慶　此度西國御下向は、御忍びの旅行なり、靜御供いたし候は、何とやらん似合はしからず、世の人口も候へば、是れより都へ御返しあつて然るべく存じ候。
義經　靜を都へかへせとや。
義盛　是れは武藏殿の言はるゝ通り、
有經　御身に曇りあらざれど、
景光　鎌倉殿の御疑念晴れず、
弘經　今は日蔭の御身なり。
辨慶　御謹みあつて靜をば、疾く〳〵都へ御返しあれ。
義經　我も左樣存ぜしかど、慕ひ來るが不便さに心ならずも伴ふなり、今方々の異見につき、靜を都へ

辨慶　かへし申さん。辨慶よしなに計らひ候へ。

畏つて候。(ト辨慶立上り、)これより靜が旅宿へ參り、此由申さうずるにて候。(ト辨慶橋懸りへ行き揚幕へ向ひ、)いかに此家のうちに靜の渡り候か、我が君よりの御使ひに、武藏がこれへ參りて候。

ト揚幕より靜、褐式、錦の葛鉢卷、好みの壺織、靜のこしらへにて出來り、

〽音なふ聲に寒菊の、替る姿も香は失せぬ、判官殿の愛妾、靜は門へ立ち出でゝ。

靜　あら、思ひ寄らずや武藏殿、何のお使にて候ぞ。

辨慶　されば餘の儀に候はず、我が君の御諚には、これまで遙々參られしが、以前の恩を失はず、いと神妙なる事ながら、西國下向も忍びの旅中、長く波濤を伴はんこと、世の人口然るべからず、さればこれより都へ、早々御歸りあれとの御事なり。

靜　これは思ひもよらぬ仰せかな、いづくまでも我君の、御供とこそ思ひしに。

〽賴みても猶賴みなき、人の心を如何にせん。(ト靜泣く思入。)

辨慶　其仰せは尤なれど、御返事は何と申すべきぞ。

靜　かやうにわらはは御供申し、君の御大事になり候へば、如何にも留まり申すべし。

辨慶　あら事々しや、御大事まではあるまじく、唯御留まりが肝要にて候。

〽斯くもつれなき計らひは、武藏が業と思ふより。（下靜思入あつて、）

靜　此御返事はわらはより、直々君へ申し上げん。

辨慶　それは兎も角いたされよ、さらば伴ひ申すべし。

〽いざ疾く〳〵と辨慶は、靜を御前へ伴うて。（下これにて辨慶先きに靜舞臺へ來り、）

いかに申し上げ候、靜の御參りにて候。

義經　なに、靜がこれへ參りしとか。

辨慶　いざ〳〵、これへ進まれよ。

靜　畏つて候。（下靜前へ出る、義經思入あつて、）

義經　いかに靜、われ兄の疑ひ受け、はる〴〵東へ下りしも、一度の對面あらずして、腰越よりして追歸され。

〽今落人の身となりて、指す方もなく西國へ落行くわれを遙々と、これまで送り來りしは、返す〴〵も神妙なり、いづくまでもと存ずれど、是れより遠き波濤を越え、伴はんこと世上の聞え落人の身に然るべからず、先づ此たびは都へかへり、此義經が世に出るまたの時節を待ち候へ。

靜　さてはわらはに此所より、都へ歸れと仰せありしは、君の御諚で候ひしか、それと知らねば、問ふも憂し問はぬも辛し武藏殿の、計らひなりと思ひしゆゑ、よしなき人を恨みしは、面なき事にて候ぞや。

〽野邊に殘りし穗芒の、露重げなる風情なり。（ト靜面目なき思入）

辨慶　いや〳〵それは苦しからず、情なく歸れと仰せあるも、唯人口を憚るゆゑ、御心まで移り行く。

〽秋とな思ひたまひそと、あらきの眞弓引きかへて、慰むるこそ哀れなり。

ト辨慶こなしあつて、

靜　いや、兎に角に數ならぬ、身には恨みのなけれども。

〽これは船路の門出に、餘所に心は波風の靜を止めたまふかと、涙を流しゆふ幣の、神をばかけて變らじと、契りしことも定めなや、誠にこれは別れよりまさる憂き身の悲しさを、託つ心のやるせなき。（ト靜口說模樣にて憂ひのこなしよろしく）

〽名殘を惜しむ愛情の、深きを君も察したまひ。

義經　暫しなりとも別れゆゑ、靜に杯すゝめ候へ。

四人　畏つて候。

へ從者は心得取りあへず、千代も替らぬ土器に、妹背はなれぬ對の、瓶子を添へて捧ぐれば。(ト後より三方に土器を載せ、對の瓶子を持ち出で前へ置く。)

辨慶　へ實に〳〵これは御門出の行末千代ぞと、菊の杯、へ靜にこそはすゝめけり。

靜　へわらはは君の御別れ、やる方なさにかき暮れて、涙に咽ぶばかりなり。

辨慶　御歎きは理なれど、旅の船路の門出の和歌、これにて一指し御舞ひ候へ。

靜　さては拙き靜が舞を、

義經　門出の祝儀所望いたす。

義盛　我が君よりの御諚なれば、

有經　猶豫あらせず此場にて、

景光　靜どのには門出を祝し、

弘經　疾く〳〵一指、

四人　御舞ひ候へ。

靜　我が君よりの御所望なれば、いかで違背申すべき。

辨慶　幸ひ烏帽子の候へば、靜はこれを召され候へ。(ト辨慶烏帽子を出す。)

〽靜は賜はる烏帽子をつけ、扇を取りて立ちあがり、時の調子を取りあへず。

ト靜誂への烏帽子を冠り、扇を持つてしやんと構へ、

〽渡江の郵船は風靜まつて出づ、波濤の謫所は日晴れて見ゆ、〽立ち舞ふべくもあらぬ身の袖打ちふるも恥しや。（トこれより靜舞あつて、）

〽かこつ涙に思はずも、烏帽子を落し打ち沈めば、（ト靜烏帽子を落しぢつと下に居る。）

義經　過ぎし折堀川にて、そちが謠ひし都名所、あの今樣を舞ひ候へ。

靜　君の御諚に候へば。

辨慶　猶豫いたさず、

四人　御舞ひ候へ。（ト靜思入あつて立上り、）

〽春の曙白々と雪と御室や地主初瀨、花の色香に引かされて盛りを惜しむ諸人が、散るをば厭ふ嵐山、〽花も青葉の夏木立、茂る鞍馬の山越えて、鳴いて北野の時鳥、〽糺の森に秋立ちて涼しき風に乙女子が、手振やさしき七夕の都踊りのとりなりは、其名高雄や通天の紅葉恥かし紅模樣、〽野邊の錦も冬枯れて、竹も伏見の白雪に、宇治の網代の川寒み、あさる千鳥の音を鳴きつれて、吹雪に交り立舞ふも、あしたまばゆき朝日山影。

ト 静よろしく振あつて、

〽静は別れの惜しまれて。

静 思へば昔陶朱公が會稽山に立籠り、呉王を亡ぼし勾踐の恥辱を雪ぎ本望遂げ、天の道を心得て小船に棹さし五湖を渡り、遠き島根に樂しみしとか。

〽かゝる例も有明の、月の都をふり捨て、御身の科のなきよしを歎きたまはゞ、兄も、遂には靡く青柳の、枝を連ぬる御契り、などかは朽し果つべきぞ。

ト 振あつて、これより舞になる。

唯頼め／＼、しめぢが原のさしも草、我が世の中にあらん限りは。

〽斯く尊詠の僞りならば、やがてぞ御代に出船の、時刻に立出る船長が。

ト 静舞ふことよろしくあつて、三保太夫出で、

三保 御船の用意整ひ候。

〽早や纜をとく／＼と、進め申せば判官も。

義經 用意よくば乗船なさん。

辨慶 いづれも御供なし候へ。

四人　心得て候。

〽旅の宿りを出でたまへば。（トこれにて義經はじめ皆々立上る。）

〽靜はたよりなく〳〵も、また取縋る君が袖、さこそと知れど引分くる、袂に餘る露雫。

トー靜、義經に縋り、別れを惜しむ思入、辨慶こなしあつて、

辨慶　名殘りを惜しむ靜の心中、實にもと推察いたせども、最早時刻の移りて候。

義盛　遲刻いたせば出船おくれ、

有經　君の御爲よろしからず、

景光　やがて都へ歸らせたまへば、

弘經　再度のお目見得樂しみに、

辨慶　とく〳〵宿へ歸り候へ。

靜　あら、是非もなき事にて候。

〽翼かはせし妹背鳥、枝をはなるゝ思ひにて、名殘り惜しげに旅の宿、見返り〳〵立歸る。

ト靜よろしく思入あつて橋懸りへ這入る。此内義經四人はあとへ下りてくつろぐ。

〽跡見送りて船長が、淚を拭ひ立出て、（ト三保太夫前へ出で、）

三保　さても〳〵、靜の御有樣を見申して、思はず落淚いたして候。我が君西國御下向を、いづくまでも御供なさんと申さるゝも御尤、また世上の人口を思召され、御歸しあるも御尤、双方ともに御尤に候。如何に武藏殿へ申し候。

辨慶　何事にて候ぞ。

三保　只今靜の御歎きに、我等も落淚いたして候。

辨慶　さては、其方も見申されしか、誠に哀れなることにて候、されども同道なりがたければ、靜を歸し候て、君には一先づ西國へ、御下向あらせらるゝなり。用意はよろしく候や。

三保　足強き船を用意いたし、我等楫取り仕り候。

辨慶　それは近頃の事にて候、急ぎ船を出さうずるにて候。

三保　畏つて候。（ト三保太夫あとへ下る。四人前へ出て、）

義盛　武藏殿へ申し候、只今君の御諚には、

有經　先刻より空合變り、

景光　風波荒く候ほどに、

弘經　御逗留遊ばされんと、

四人 仰せ出されて候。

辨慶 なに、御逗留遊ばされんとや、察する所我が君には、靜に名殘り惜しませられ、左樣な事を仰せらるゝか。さりとては言ひ甲斐なし、御運の末と存じ候。一歳平家追討に攝州渡邊福島より、乘船ありし其折は、

〽しかも如月半にして、武庫山おろしの風烈しく、逆浪立ちて御船のいとも危く候へば。

漕ぎ返さんとなしたりしを、今この海を越え行くも、天下の爲に候へば、此義經の運あれば必ず神の加護あらん、臆せず進み候へと、

〽仰せに人々力を得、矢聲を掛けてエイ〳〵、念なう四國へ押渡り、平家の一門討亡ぼし、名をば雲井へあげたまひ。

鬼神といはれし我が君が、僅かの風波に臆したまふは、女々しき事に候なり。これより御心飜へされ、御乘船あつて然るべし。(ト義經前へ出で、)

義經 實に〳〵これは理なり、逗留なさんと申せしは、我が誤りに候ぞ。

義盛 武藏殿の仰せの如く、

有經 片時も早く御乘船、

景光　風波も靜まり候へば、
弘經　急ぎ御船を出し候へ。
〽いづくを敵と立浪の、立ち騒ぎつゝ船子ども、えいや〳〵と夕汐に連れて船をぞ出しける。
と此内鼓のあしらひにて、後見橋懸りより造り物の船を出し、船臺よき所へ直す、三保太夫、岩作同じこしらへ船子にて下手へ出で、
三保　皆々御船へ、
三保岩作　御乘り候へ。（ト義經は舳先、辨慶は中の間、四人は後へ並ぶ。）
三保　さて〳〵目出たい御吉相かな、此中まで海上が、毎日々々荒れましたが、
岩作　今日のやうなよい日和は、またとござりますまい。
辨慶　實に一段の天氣になり、此上もない事なれば、御出船を目出度く祝し、船唄をうたひ候へ。
兩人　畏つて候。
三保　さらば目出度く、
岩作　唄ひ申すべし。（ト三保太夫前へ出で、）
〽やんれ目出度や、天照す神の皇國は榊葉の、榮えさかゆく秋津洲の、八隅輝く御鏡の、曇

らぬ御代の時津風、枝をならさぬ住の江の、岸邊の松の袖垣や。

ト三保太夫よろしく振あつて、それより岩作出で、

〽先づ住吉の一歳の神事と申すは御手洗の、若水汲むを初めとして、五穀の祈り種卸し、梅と櫻に紅白のけぢめをなせし鷄合せ。(ト是れより三保太夫岩作兩人にて、)

〽その勝負の菖蒲月、遲速を競ふ競馬、輪乘りに廻る勇ましき、猛き心をやはらぐる乳守が里の遊び女が、鄙唄うたふ御田植、〽田樂舞や住吉の賤が手振も拍子よく、實に面白き神祭り。(ト三保太夫、岩作よろしく振あつて、)

〽折しも空に一點の、雲の出しを打ち見やり。(ト空を見る思入あつて、)

三保　いや、あれへ見慣れぬ雲が出た。

岩作　見る間に段々廣がつて來た、あの雲が出ると、風が替るが、そりやこそ風が替つて來た。

三保　我等が楫を取りますれば、お氣遣ひござりませぬ。(ト三保太夫岩作棹を持ち船へ這入る、)皆々精を出しませ。(ト肩衣を脫ぎ漕ぐ思入あつて、)最前から漕ぐ〳〵と思うたに、船は元の所にある、えい〳〵。(ト船を漕ぐこなし、大薩摩になる、)

大薩摩　〽それ一陣の魔風おこり、一天俄に磨墨を流せる如く打曇り、數丈の高浪忽ちに、御船の危

く見えければ。（ト大小入りの鳴物になり、辨慶きつとなつて、）

辨慶　やあ見る間に風が替つて候、後に聳えし武庫山颪、弓弦羽ヶ嶽より吹きおろす山風烈しく、此御船陸地へ着くべきやうぞなし、皆々心中に御祈念候へ。

四人　畏つて候。

岩作　今日ばかりはと思ひしに、俄に惡風吹き來り、なか〳〵これは凌ぎ難し。

三保　如何にも浪が高うなつて來た、浪よ〳〵越せ〳〵。（ト棹で浪を拂ふ思入。）

義經　今船頭が浪を拂へば、浪も心あるかして、

有經　少し靜まり候ぞ、猶も精を、

四人　入れ候へ。

三保　心得て候、アリヤ〳〵〳〵、浪よ〳〵〳〵、越せ〳〵。

ト早き合方、鼓のあしらひにて、三保太夫浪を拂ふこなしよろしく。

義盛　いかに、武藏殿に申すべきことの候。

辨慶　何事にて候ぞ。

義盛　此御船にはあやかしの附いて候。

辨慶　やあ、左樣なことは船中にて、暫く申さぬ事にて候。
岩作　いや、こな人は粗忽千萬、船中にて左樣な事は申さぬ事にて候。
辨慶　不案内の者なれば、某に免じ、許し候へ。
三保　あれ〳〵又浪が打つて事る、アリヤ〳〵〳〵、浪よ〳〵〳〵越せ〳〵。
〽棹にて浪を追ひ拂へば、辨慶向うを打ち見やり、
ト三保太夫浪を追ふこなし、よろしくあつて、辨慶向うを見て、
辨慶　あゝら不思議や、海上を見れば、西國にて亡びたる、平家の公達一門、銘々浮び出たるぞ、斯かる時節を窺ひて、恨みをなすも理なり。
義經　いかに辨慶。
辨慶　御前に候。
義經　今更驚くこと勿れ、假令惡靈恨みをなすとも、
〽惡逆無道の罪積り、神明佛陀の冥感に背き、天命に依つて沈みし一門。
何程の事あるべきぞ。
〽言ふ間あらせず雲霞の如く、浪に浮びて見えたりける。

ト義經こなしあつて、太鼓地になり、花道より知盛、黑頭鍬形の附きし白鉢卷、法被半切、附太刀、知盛のこしらへにて白衲の長刀を持ち出來り、花道にて、

知盛　抑々これは桓武天皇九代の後胤、平の知盛の幽靈なり。あら珍らしや、いかに義經、思ひもよらぬ浦波の、

〽聲を知邊に出船の〱。

知盛が沈みしその有さまに。

〽又義經も此海へ、沈めんものと夕波に、浮べる長刀取直し廻る巴や波の紋、四邊を拂ひ潮を踏立て、惡風烈しく吹きかけて、眼も眩み心も亂れ、前後を忘るゝばかりなり。

ト大小早笛太鼓入りにて、知盛舞臺へ來り、舞ばたらきよろしくあつて、

〽其時義經少しも騷がず〱、打物拔持ち、現の人に對ふが如く、言葉を交して戰ひたまへば。(ト義經太刀を拔き、知盛と打合ふた、辨慶中にて留め、)

〽辨慶中を押隔て、打物業にて叶ふまじと、珠數さら〱と押しもんで。

ト辨慶珠數をもみ、これより祈りになる、

辨慶　東方降三世南方軍荼利夜叉明王。

〽西方大威徳、北方金剛夜叉明王、索に掛けて祈り祈られ惡靈次第に遠ざかれば、辨慶船子に力を合せ。

ト辨慶珠數をもみ祈る、これにて知盛側へ寄れぬこなしよろしくあつて下手へ行く、

〽御船を漕ぎのけ汀へ寄れば、猶怨靈の慕ひ來るを、追ひ拂ひ祈り退け。

ト知盛またつか〳〵と來るを辨慶祈る、双方よろしくこなしあつて、

〽また引汐にゆられ流れ、また引汐にゆられ流れて、あと白浪となりにけり。

ト此内知盛寄り附けぬこなしにて、段々花道へ行く、辨慶は始終珠數を揉み祈る、知盛は浪に引かれろこなしにて、廻りながら唄一杯に、右の鳴物にて花道へ這入る。舞臺は辨慶珠數を取り直し、些々引張りの見得、よろしく段切にて、

幕

船辨慶（終り）

新歌舞伎
十八番の内

紅葉狩（もみぢがり）

解説

「紅葉狩」は明治二十年十月、七十二歳の時、新富座に書卸したものである。其時の役割は、市川團十郎（高位の息女更科姫、實は戸隠山の鬼女の精）、市川左團次（餘吾將軍平維茂）、中村芝翫（戸隠山神の翁）、中村鶴藏（維茂の臣鷲沼運平）、市川升藏（同八内）、澤村源之助（腰元望月）、市川升若（同田毎）、市川金太郎（女中の一）、市川猿藏（同二）、市川團八（同三）等であつた。振附は團十郎自身の工夫になつたもの。鶴澤市作、竹本菖蒲太夫、竹本歌賀大夫が竹本連中。岸澤式佐、岸澤文字兵衛、常磐津太夫文中が常磐津連中。杵屋正次郎、芳村伊十郎、芳村孝次郎、杵屋六之助、杵屋勝四郎、杵屋榮藏、住田又兵衛、寶山左衞門、松島庄五郎等が長唄囃子連中であつた。

新歌舞伎十八番の所作中では最も傑出したもの。其後更科姫の役は幸四郎、六世菊五郎等によりて、屢々上演せられ、又大小劇場を通じて、「戻橋」と共に絶えず上演せられてゐるといつてよい。挿繪にしたのは豐原國周筆の錦繪、である。

豊原国周筆
餘五将軍
平維茂
市川左團次
高位ノ息女
更科姫
市川團十郎
戸隠山神之翁
中村芝翫
更科ノ侍女
澤村源之助

紅葉狩

信州戸隱山の場

常磐津連中
竹本連中
長唄囃子連中

〔役名――高位の息女更科姫實は戸隱山の鬼女、餘吾將軍平維茂、同從者鷲沼運平、山神の靈、更科の侍女望月、同田毎等。〕

（戸隱山紅葉狩の場）――本舞臺一面の置舞臺、正面長唄囃子連中の雛段、紅白の段幕を掛け、上の方竹本連中の出語臺、同じく紅白の段幕を掛け、下の方常磐津連中淨瑠璃臺、矢張り紅白の段幕を掛け、所々に紅葉の立木、日覆より同じく紅葉の釣枝をおろし、上の方折廻して、緞子模樣の幕を張り總て信州戸隱山紅葉盛りの體。山颪にて幕明く。と頭取羽織袴にて三方へ所作觸を置いて、是れを持ち出來り、眞中へ住ひ口上あつて、所作名題太夫連名役人替名を讀み、其爲口上左樣と辭儀をなして上の方へ這入る。と知らせに附三方の段幕を切つて落す。爰に三連中居並び居て、前彈きあつて三方掛合になる。

常磐津へ信濃路に其名も高き戸隱の、山も時雨に染めなして、竹本へ錦色どる夕紅葉、唄へ日影梢に照添ひて、四方の景色をますら雄や。

ト合方小鼓のあしらひにて、花道より餘吾將軍平の維茂、烏帽子狩衣大口、短刀、金剛草履にて出來り、跡より從者鷲沼運平、侍烏帽子半素袍、短刀附太刀、太緒の草履にて、維茂の太刀を紫の袱紗にて持ち出來り、花道へ留る。

竹へ頃しも長月末つ方、世界も平の維茂は、從者を連れて紅葉狩、唄へ矢猛心も梓弓、入野の草、露を分け、常へ行方も遠き山陰の、嶮しき道を辿り來て、

ト此內花道で振あつて、舞臺へ來り思入あつて、

維茂　草木心なしといへど、必ず四時の時を違へず、春は花咲き秋は又、梢を染むる山紅葉、西へ傾く夕陽に、一層楓樹の色を增し、暮るゝを惜しむ此風景、歸る家路を忘るゝぞ。

運平　仰せの如く一圓に、西も東も眞赤にて、見事なことでござりまする。

維茂　見ればあれなる木の下に、幔幕を打廻し內に數多の人影見ゆるは、何れの誰か知らざれど、紅葉をめづる人と見ゆる。

運平　如何にも左樣でござりませう。

維茂　我も紅葉を見に參れば、知らぬ人でも懷しく、其方參りて何人なるか、其姓名を尋ねて參れ。

運平　畏つてござりまする、

竹〽木の間へ張りし幕張の、外面に從者は佇ずみて、

幕の內へ案內申す。

常〽音なふ聲に侍女立ち出で、（ト幕の內より更科の侍女望月、田每其外出來り）

望月　御案內とは、何御用にござりまする。

運平　率爾ながらお尋ね申すが、是れにおいでなさるゝは、如何なる御方にござるよな。

望月　これはやごとなき御方にて、此戶隱の山紅葉を御遊覽あそばしに、是れへ御入りありしなり。

田每　見れば烏帽子に狩衣で、お裝は嚴しく見えても、どこやら都の風あつて、此山國には珍らしき殿御振り。

一　それにお供も目尻の下つた、さりとては又をかしらしいお顏つき。

二　これはしたり、又其やうな戲言ばつかり、ちとお嗜みなされませ。

田每　して又お尋ねなさるゝは、如何なるお方でござりますぞ。

運平　手前主人は、餘吾將軍平の維茂なり。

望月　さればかね〴〵承はりし、餘吾將軍にて御座ありしか、折角のお尋ねなれど、

田毎　今日は忍びの御遊興ゆゑ、御名は明し申し難し。

望月　この由お傳へ、

兩人　下さりませ。

運平　承知いたしてござる。

竹〽從者はこなたへ立戻り、（ト運平維茂の前へ來り）

只今仰せに隨ひ、あれへ參りて尋ねしに、さるやごとなき御方にて、今日しは忍びの御遊興ゆゑ御名は明し申されずと、附添ふ侍女が立ち出て、左樣申してござりまする。

維茂　唯やごとなき御方とは、如何なる方にてありしよな。

運平　幕の隙より窺ひしが、紅葉も恥づる毛氈を木の間へ敷いて上座に、女御更衣の御方なるか、御身に羅綾の衣服を召され、しかも蒔繪の提重を開き、女子ばかりのまどゐにて、酒宴の樣子にござりまする。（ト維茂思入あつて、）

維茂　汝が申す樣子では、定めて高位の御方ならん、よし左もなくも此山邊に、女ばかりの紅葉狩、殊更酒宴とあるからは、其妨げにならぬやう、忍びて爰を通るべし。

運平　畏つてござりまする。

唄〽いざや忍びて通らんと、道を隔てゝ過ぎたまふ、常〽侍女はこなたへ立出でゝ。

ト維茂思入あつて、運平を連れ下の方へ行きかゝる。幕の内より以前の望月、田毎出來り。

望月　憚りながら、それなる御方、

田毎　暫く御待ち下さりませ。

運平　待てとお止めなされしは、御用ばしありての事か。

望月　只今それなる御主人の、御名を貴殿に承はりしが、かねて噂に聞き及ぶ、餘吾將軍維茂様。

田毎　定めし是れへ入らせられしは、紅葉狩と存じられます。暫くこれへ憩はせたまひて、御遊覽あそばされますやう、

望月　私共の主人より、

田毎　申し附けに、

兩人　ござりまする。（ト維茂思入あつて、）

維茂　其お招きに預りしは、忝うはござれども、女中ばかりと承はれば、男子の身にては憚りあり、よしなに仰せ下されい。

望月　すりや御請待申し上げても、
川毎　御止まり下さりませぬか。
維茂　御縁もあらば又重ねて。
常〽一禮なして道の邊の、草踏み分けて行く影を。（ト維茂下手へ行き掛ける、と幕の内にて、）
更科　客人暫し待ちたまへ。
竹〽なう〳〵暫しと立出る、姿氣高き女御の君、唄〽紅葉に勝る色絹の、色香こぼるゝ風情にて、

ト更科姫好みの鬘振袖打掛け、縫衣裳のこしらへにて出來り、跡より腰元四人附添ひ出で。

客人暫し待たせたまへ。
維茂　待てとお止めなされしは、やごとなき御方なりしか。
更科　女子の身なも顧ず、此の深山路へ入りつるが、
唄〽夕日に染む艶葉の、いとも勝れし此色を、
唯一人のみ眺むるは、
〽本意なき事ゆゑ共々に。

ト更科姫よろしく振あつて、

維茂　これにて紅葉を眺めたまへ。

其お詞に任せ度くも、唯やごとなき御方と、未だ御名も承はらず、平に御許し下されい。

ト維茂下手へ行くを、望月初め侍女六人取巻きて、

望月　假令御名は申さずとも、

田毎　女御様が御自身に、

一　斯様にお止めなされますれば、

二　御遠慮なされず共々に、

三　今を盛りの艶葉を、

四　是れにて御覧、

六人　遊ばしませ。

維茂　忝うはござれども、男女七歳よりしては、同席なさぬ戒あれば、何様お留めなさるとも心済まねば容赦あれ。

ヘ止むる袖を振拂ひ、すげなく行くを引き止め、

ト維茂袖を拂ひ行くを、女の一つかく〳〵と出て、

一　もし、

ト維茂を留め、くどきになる。

唄〽降りみ降らずみ村雨の、雨の宿りにあらざれば、竹〽一樹の蔭に立寄りて、一河の流れ汲む酒を、唄〽見捨てたまはで杯を、手に取り上げてたまはれと、常〽いはぬ色なる女郎花、袖に縋りて止むれば。

ト此内更科姫出で媚きし振、維茂行かうとするを望月、田毎留める。トゞ更科姫狩衣の袖をひかへ恥かしきこなし。

竹〽流石に猛き武士も、色には迷ふ紅葉狩、暫しは爰に憩ひてと、従者が勸めに維茂も、

維茂　左程に仰せ下さらば、暫し是れにて憩ひ申さん。

望月　維茂樣が共々に、此山蔭の艷葉を、

田毎　御遊覽とあるからは、あれなる毛氈を是れへ移し、

一　酒の調度を

二　少しも早う。

四人　畏りました。(ト上手幕の内へ這入る。)

運平　御酒と聞いては手前も共々、お手傳ひをいたしませう。

常〽さゞめき立つて毛氈を、こなたへ敷けば腰元が、手に〱に運ぶ酒道具。

ト運平望月田毎よき所へ毛氈を敷き、腰元四人提重三ツ組肴瓶子など運び。

望月　いざ〱是れへお進みありて、

田毎　一獻お過し、

五人　遊ばしませ。

維茂　仰せに從ひ、御免あれ。

唄〽岩木ならねばむら萩の風に隨ふ姿にて、心弱くも引留められ。

ト更科姫恥かしさうに維茂の袖を引く、これにてよろしく下に住ふ。此内腰元提重より酒道具を出し、

望月　さあ、お一つお過し遊ばしませ。

唄〽侍女が進めに取上げる、人の情の杯も、竹〽數を重ねて心解け、いつか隔ても中垣に、緣を結ぶ絲萩や。

ト此内侍女一田毎が三方の杯をすゝめ、維茂杯を取る、望月酌をなし、維茂酒を呑む。更科姫侍女一へ思入する、一心得て前へ出て、

常へ野邊吹く風に誘はれて、誰に靡くかしをらしや、野菊の花の紫に、唄へしのぶ由縁の藤袴。つい穗に出でし穗芒の、唄へ姿優しき男郎花、これも花野の色なれや。

ト侍女一、よろしく振。此内維茂田毎を相手に酒を呑む。

常へ夕日まばゆき紅に、紅葉うつらふ酒の醉。（ト維茂少し酒に醉ひし思入。）

運平　是れは〳〵御主人樣には、左のみ御酒を上らぬのに、

女二　御酩酊でござりまするな。

維茂　並々ならぬ銘酒ゆゑ、思はぬ醉を覺えしぞ。

更科　こたびは末の杯にて今一獻お過しあれ。（ト望月維茂の前へ杯を出す。）

維茂　なか〳〵以て大杯にては、

望月　左樣仰せられませずと、

田毎　早うお過し遊ばしませ。

一二　二人でお酌いたしませう。

維茂　餘程酩酊いたしたれば、最早許して下されい。

二　殿樣がおいやなら御家來樣、さあ私が思ひざし。

三　あなた御酒家と見えますれば、私がお酌いたしませう。〽いつか亂るゝ笹の葉の節も可笑しくうたひ出で、

竹〽大杯に滿々と、つぐを遲しと呑干して、

トシヤデンになり、女の二杯をさし、三酌をして運平呑み干し、醉ひたる思入にて扇を持ち立上り、

竹〽木曾の棧橋は丸木を渡し、下は數丈の早瀨の川に、唄〽見れば怖さに、怖さに見れば、何と信濃の難所の橋も、常〽見えぬ座頭の何市どのが、都登りに小座頭連れて、がつくり杖突いて、竹〽拍子取り〳〵渡りしは、これぞたとへの盲目蛇。

ト運平田每を相手に、よろしくあつて、

維茂　こりや〳〵御場所も憚からず、あられぬ所作は失禮なるぞ。

運平　つい一杯の御酒に乘じ、恐入つてござりまする。

維茂　最早數杯を傾けて、熟醉いたせばお許しあれ。

望月　左樣ではござりませうが、女御樣より御直のお進め、

田每　跡は兎もあれ此お杯、いなまずお受け、

皆々　遊ばしませ。

維茂　折角のお進めを、もどくは却つて失禮なれば、頂戴いたす其替り、何ぞ此場のお肴を。

望月　そのお肴には、女御様、

田每　一さしお舞ひ遊ばしませ。

更科　二人の者の進めなれど、わらはが拙き舞振を。

維茂　それは一段の事なれば、是非々々此場のお肴に、舞を一指御所望申す。

竹〽杯取ればとり／＼に、侍女が酌なす瓶子の酒、常〽天の美祿と維茂が醉に乘じて興に入り

（ト維茂杯を取り上げる、望月、田每酌をなし、維茂酒を呑みて、）

いざ／＼舞を舞ひたまへ。（ト更科姫扇を持ち前へ出て、）

更科　いとも面なきことにこそ。

唄〽敷島の三つの景色と歌人が、霞と共に杖を曳く、一目千本の三吉野や、常〽花の盛りに謎へてし、越路の雪の降りつみて、見渡す限り白妙の、飽かぬ眺めははる／＼と、竹〽木曾山越えて更科の、田每にうつる月影に、心も晴れて曇りなき、御代の鏡の鏡臺山。

ト更科姫振よろしく。維茂は酒を呑み居る、運平、田毎相をする。

竹〽秋の最中も疾く過ぎて、岸の柳の葉は散れど、山路は苔の滑かに、唄〽綠に茂る松柏の、木の間に時を知り顔に、紅葉色増す村時雨、

ト更科振あつて、扇を持ち前へ出で、

常〽其名所は取分けて、都に多く通天の、竹〽山を望めば山姫が、手に織りなすか唐錦、唄〽秋の山邊に日の入りて、入相告ぐる遠近の、里に暮るゝを恨みの山、常〽はゝその森や木の蔭の、小倉の山の風景は、竹〽外に類も嵐山、常〽あらしに散りて紅の、唄〽水を染めなす、　合方　大井川。竹〽暫しまどろむ維茂が隙を窺ひ立寄りしが、（ト此内更科姫扇を遣ひよろしく振、維茂は首を傾け居眠る、更科姫これを見てつか〳〵と傍へ行き、氣を替へ、）唄〽月日も早く立つ霧に、春ならねども遠山の、朧にかすむ谷川の、常〽流れの元はいづくとも、誰れ白菊の咲き亂れ、匂ひをこぼす花の露。

ト更科姫振ある、維茂又居眠る、更科姫傍へ行き、恐れる思入にて後へ下る。

望月　維茂樣にはまどろまれしか。

更科　これ。

唄 〽夢ばし覺したまふなと、幕の內へぞ入りにける。

ト更科姬維茂へ目を附け、侍女腰元を連れ幕の內へ這入る。

竹 〽時しも空は暮れ行きて、雨打ちそゝぐ夜嵐の、物凄じき山蔭に、鳴動なして山神の、假に姿を顯はせり。

トどろ〳〵、誂への鳴物になり、花道より山神、錦の頭巾異形なる山神のこしらへにて、丸木の杖を突き出來り、直に舞臺へ來て、

山神 なう〳〵爰に假寐なすは、實に風前の燈火より、いとも危ふき事なるぞ。

竹 〽此山奧に隱れ住む。

鬼神が夜な〳〵人を取り、

常 〽生血を吸ひて肉を喰ひ、むしやり〳〵と骨までも、嚙み割る音の恐ろしや、

竹 〽御身も爰に長居せば、必ず鬼の餌食とならん、疾く〳〵起きて參られよ。

我は八幡大菩薩の命を蒙むり來りしなり。

常 〽疾く〳〵起きよ〳〵と、杖突き鳴らし起しける。

ト此內山神可笑味の振あつて、杖を突き起す、維茂運平八內やはり坐睡り居る。

竹へ熟睡なして主從とも、起きる氣色のあらざれば。
よし〳〵足拍子を踏みならし、音にて目をば覺しくれん。
唄へ神すゞしめの夜神樂も、岩戸神樂の名殘りにて、常へ叩く太鼓に笛鼓、銅拍子打ちてどんがらこ、唄へどこどん、竹へぽんぽこ、常へぴいどんちやん、唄へ打てど叩けど目覺めねば、常へ山神呆れて杖を突き、跡をも見ずに歸りける。

ト此内山神よろしく振あつて拍子を踏み、トゞ兩人の目の覺めぬに呆れて花道へ這入る、烈しき風の音になり。

竹へ一吹きさつと吹き下す、夜風身に染み維茂が、ふつと目覺し四邊を見て、

ト維茂運平八内目をさまし、

維茂　あら淺ましゝ、我ながら、無明の酒に熟醉なし、まどろむ内に夢の告、扨は變化でありつるか。(トあたりへ思入あつて、)今までありし女性の姿、爰に見えぬは訝しゝ、正八幡のお告といひ、正しく鬼神に疑ひなし。いで、正體を見屆けくれん。
常へ勢ひ込んで幕張りの、内を目掛けて驅入れば、竹へ後に二人は起上り、

ト維茂きつとなり上手幕張の内へ這入る、運平、八内氣味惡きこなしにて、

運平　もしや今の上臈達は、變化ではあるまいか。

八内　えゝ、變化とは、恐ろしや〳〵。

〽命あつての物種と、從者は恐れわなゝきて、しどろもどろに逃行きけり。

ト運平、八内恐れし思入にて、下手へ逃げて這入る。

〽折しも烈しき山風に、散行く紅葉もろともに、〽逃出る女御を遁さじと、太刀拔翳し追ひ掛くれば、一天俄にかき曇り、目ざすも知れぬ宵闇に、

ト太鼓入りの鳴物ばた〳〵になり、幕の内より以前の更科姫、懷劍を持ち、維茂太刀を拔き立廻りながら出來り、鳴物にて立廻りあつて、更科姫懷劍を打ち落され、是までといふ思入にてきつとなる。

維茂　我に障礙をなさんとて、姿を變しは正しく鬼神、いでや此場で退治なさん。

ト更科姫思入あつて、

更科　汝が所持なす小烏丸、其銘劍の威德にて、我通力も忽ち挫け、今ぞ顯はす我本體、

〽やさしき姿忽に、左も恐ろしき其のありさま。

ト大どろ〳〵にて更科姫好みの鬘、衣裳、引拔き、紅葉の枝を持ちきつと見得。

維茂　我が推量に違はずして、汝は鬼神でありしよな。いで維茂が退治てくれん。

更科　何を小癪な。

竹〽鬼神は怒りて維茂を、微塵になさんと飛びかゝるを、常〽しや小賢しと飛違ひ、唄〽樹々の紅葉も炎となり、古き木の葉もさら〳〵、常〽業通自在の變化の働き。

ト太鼓入り誂への鳴物にて更科姫は鐵杖、維茂は太刀にてよろしく立廻りあつて、更科姫紅葉の木へ仕掛にて飛上り炎を吹き、又立廻つて、

竹〽暫しは挑み戰ひしが。（ト兩人きつと見得、）

常〽勇猛勝れし維茂が、唄〽劍の威德に戸隠しの、竹〽鬼神を忽ち討ち取りしは、目覺しかりける、三方〽次第なり。

ト兩人立廻り、引張りの見得よろしく、段切にて、

幕

紅葉狩（終り）

鞍馬山

段八　はい、左様しませうわい。

　ト これにて舞臺へ來り、有合ふ岩臺へ掛け、

○　して都より此夜中に、お供物をお供へなされますには、容易な御願掛けではござりませぬな。

　ト これにて段八思入あつて、

段八　旦那様御身の爲に、此夜中に登りますが、どうも今宵の夜明までに、願ひが叶へてほしいものぢや。

○　へえゝ、夜明までにお願ひが、

△　叶へてほしいと、

四人　おつしやりますは。

　ト これにて段八四邊へ思入あつて、武士のこなしになり、

段八　其の唐櫃これへ。

四人　はつ。

　ト 件の唐櫃をよき所へなほす、段八は懷中より鍵を出し、唐櫃の蓋を明け、内より太刀造りの一つ刀、捕縄熊毛の甚兵衛などを出し、仕丁手傳ひて着せる。皆々不審の思入あつて、

○　扨はあなたの、
四人　お身の上は。
段八　如何にも我は都に仕へ、機密を探る役目の武士、唯今申せし曲者の、擧動を見出さん其爲に、これより毘沙門堂へ赴けば、其方は麓に控へ、もし下山なすものあらば、一々詮議いたしてくりやれ。
○　委細かしこまつてござります。
△　左樣ござらば、
四人　お役人樣。
段八　竊に見張りいたせ。

ト山おろし合方にて、此内段八身拵へして菅笠と廻し合羽を唐櫃へしまはせ、仕丁擔ぎ、段八は上手、仕丁は下手へ這入る。山おろし打上げ、知せに附き道具幕切つて落す。

(毘沙門堂前の場)――本舞臺一面の平舞臺、後黑幕、此前諸所に松の立木、上の方一間朱塗り誂への毘沙門堂の前側、唐戸の兩扉、本庇附き、上下岩組の張物にて見切り、下手藪疊、雨落より

松の梢を出し、總て鞍馬山奥之院の體。山おろしにて道具をさまる。と山おろし打上げ大薩摩になる。

へそれ月も鞍馬の影薄く、木の葉落しの小夜嵐、物騒がしや貴船川、天狗だふしのおびたゞしく、魔界のちまたぞおそろしき。爰に源家の正統たる牛若丸は父の仇平家を一太刀恨みんと、夜毎詣づる多聞天、祈念の證顯はれて、一心不亂に見詰むる一卷。

ト誂へせり上げの鳴物になり、御曹子牛若丸兒髷小袴振袖小さ刀、畫面の拵へ、岩臺へ掛け、一卷を見てゐる。目覆より灯入りの半月をおろし、此牛若の側に誂への木太刀あり、此見得にて舞臺眞中へせり上げ、一卷を見やり、ぢつと思入あつて、

牛若　奥義の一卷、くはしく是に、ちえゝ忝い。(ト押しいたゞき、こだまの入りし誂への合方になり、)我當山の東光坊へ預けられしが武門を忘れず、一度望みを達せんと、多聞天へ祈誓を掛け、毎夜木立を相手となし、劍道修業いたせし故、今宵測らず神の告にて、我大望の成就せしは、再び花咲く春の宵、是も偏に御惠み、猶も此上御助勢を偏に願ひ奉ります る。(トちよと辭儀をなし、)猶も練磨の修業をなさん。

へ木立を目當に身構へなす時しも俄に風起り、天狗つぶてのばら／＼と、鳴動なしてすさまじく、

ト牛若一巻を懐中なし、木太刀を取つて立上る、此時天狗六人、何れも半面の小天狗、兜巾着込、達附、羽根を背負ひ、木太刀を持ち、上下よりばら〳〵と出で、牛若を取巻く、牛若きつとなり、

見れば怪しの天狗ばら、此牛若が劍術の稽古の妨げなさんとは、小ざかしき振舞乍ら、時に取つてのよき相手、此場に於て勝負をなさん。

六人　何を。

ト山おろし誂への合方になり、牛若六人を相手によろしく立廻りあつて、結局皆々花道へ逃げて這入る。

〽さしもの天狗もあしらひ兼ね、後くらまして逃げ失せけり。

牛若　やあ、卑怯なる天狗ばら、逃げうとて逃がさうや。

〽追ひかけ行かんとなす所へ、はるか彼方の梢より、〽又もや怪しの小天狗、木太刀打振り立向へば、

ト此内風の音になり、下手松の木の中ほどより木の葉天狗一人、以前の同じ拵へにて木太刀を持つて飛下り、牛若を目がけ打つてかゝる、牛若見てにつたり笑ひ、

〽シヤ小ざかしと牛若丸、附入る木太刀を拂ひのけ、上段下段、〽早速の働き、勝負いかに

と霧がくれ、後に伺ふ僧正坊、まさり劣らぬ兩人が打合ふ音はこだまして、目覺しくも又勇まし〻。

ト此内木の葉天狗牛若と立廻り、よき見得にて、後黒幕を切つて落す。と向う常足の二重、岩組の蹴込み、山又山の中遠見、岩臺の上に僧正坊朽葉の色の衣、白地の袈裟、紺地錦の兜巾、誂への面、僧正坊の拵へ、如意を突き、兩人の試合を見て居る。大薩摩の切にて、木の葉天狗小手を打たれ、木太刀を落す、此のはずみに牛若懷中より以前の一巻を落す。牛若是れを取らうとするを木の葉天狗是を引つたくり、逃げにか〻る。その腰を捉へ引き戻す、僧正坊是を見て、獨鈷を取つて牛若へ打附ける。牛若身を轉して、左にて腰の扇を取つて打返す。差金にて開いたる日の丸の扇。僧正坊の頭へあたる。此時後より幕明の段八伺ひ出で、僧正坊に組附く。木の葉天狗は牛若を捕へるを振拂ふ。此のはずみ木の葉天狗の兜巾半面落ち衣裳引抜き百日鬘素網四天好みの拵へになり僧正坊は段八とちよつと立廻つて面と衣裳脫げ、縕袍下に四天惡婆の拵へ、牛若丸肌脫ぎになり、下手戦璺を押分け所化雲念いがぐり鬘、破れし墨の衣、鼠の着附にて伺ひ出で、木の葉天狗實は天明太郎上手毘沙門堂にて柱巻、眞中に僧正坊實は惡婆峯尾、下手に雲念、双方一時の見得。誂への鳴物になり、上下より探り合の立廻り、此中へ段八搦み、よき程に天明太郎牛若の懷中より一巻を引出し、牛若は惡婆の懷中より錦の旗を引出す、此時風の音烈しく、件の旗を杉の梢へ巻上げる、此時一旦隱れたる月出で、皆々顔を見合せて立廻る。此中へ雲念入り邪魔になり、上下へ突きやる。結局天

明太郎印を結び、ドロ〳〵にてよき所へ消える、爰へ段八切て掛り、ちよつさ立廻つて僧正坊上手に段八を押へ、雲念眞中に下にゐて、下手より牛若上手を見込む、双方見合つて木の頭、山おろしカケリにてよろしく、

ひやうし　幕

ト幕引附けると、どろ〳〵にて花道へ以前の天明太郎旗を持ち、すつぽんにてせり上げ、につたり思入あつて旗を懐中してきつと見得。誂への鳴物になり花道へ振つて這入る、知せに附き跡シヤギリ。

鞍馬山（終り）

御註文の
高機の
宙乗り
世界を
結ぶ
雲の帯

日月星晝夜織分

解説

三段返しの淨瑠璃「日月星晝夜織分」は、安政六年九月、作者四十歳の時、市村座に書卸された。其の時の役割は、市川小團次（夜這星の精、牛方九郎藏、平の淸盛）、岩井粂三郎（二星の精織女、踊りの師匠岩井お若、白拍子祇王）、河原崎權十郎（二星の精牽牛、祭りの手古舞舛吉）、市村羽左衞門（手古舞竹吉、淸盛の近習天女丸）、澤村訥升（祭りの警固亭之助、淸盛の近習妙音丸）、中村歌女之丞（白拍子祇女）、關花助（祭りの練子宇佐吉）、嵐吉六（手古舞三吉）等であつた。振附は花柳壽輔同勝次郎。淸元連中は延壽太夫、家內太夫、順三、彥次郎、齋兵衞等。竹本和太夫、同猪太夫、鶴澤市作等が竹本連中。常磐津豐後大掾、岸澤式佐等が常磐津連中であつた。

三段返し中で、最も好評であつたのは、最初の「夜這星」の件であつた。今日も尙屢々行はれてゐる。夜這星といふ名題が風紀上面白からぬといふので、「流星」とも呼ばれてゐる。從つて今日の舞臺に行はれてゐる所と、原作との間には、詞句扮裝等の點に於て多少の改訂を餘儀なくされてゐる所がある。

日月星晝夜織分

七夕の星
祭禮の月
宮島の日

竹本連中
常磐津連中
清元連中

〈役名――夜這星の精、祭禮の仕方九郎藏、平相國清盛、祭禮の警固、清盛近習二人、祭禮月の兎、同仕事師三吉、牽牛、祭禮の手古舞弥吉、同竹吉。織女、踊師匠お若、祇王、祇女、其他〉

〈七夕天の川の場〉――本舞臺向う一面五色の雲幕、日覆雨落花道とも同じく雲の張物を出し、上下淨瑠璃臺同じく雲の張物、雲幕を釣りよろしく飾り附、風の音唐樂にて幕明く。と頭取出で淨瑠璃觸を讀み、其爲口上左樣とあつて這入る。知らせに附き淨瑠璃臺の雲幕を切つて落す。上手に竹本連中、下手に清元連中居並び、打合せの前彈あつて、

竹本 〽それ銀漢と詩に、列ぬる五言七言の、堅い詞を和らぐる、

清元 〽三十一文字の大和歌、天の河原に替らじと、深くも願ふ女夫星。

ト誂へせり上げの鳴物になり、本舞臺へ織女好みの裝束のこしらへにて苧環を持ち、立身、側に見事なる機殿を飾りある、花道へ牽牛好みのこしらへにて絖張の牛を引き、銀張の鞭竹を持ち、双方一時にせり上げ、鳴物打上げ、跡音樂になり、

織女 涼風に、一葉散る秋待ちわびて、桐の花咲く春も過ぎ、
牽牛 夏の到りて鶯の、鳴く音忍ぶも戀ゆゑか、
織女 焦れて空に飛ぶ螢、
牽牛 野邊の千草に置く露も、
織女 今宵一夜の宿りにて、
牽牛 鵲の橋に、
織女 翅を重ね、
牽牛 影を止むる、
兩人 天の川。

〽其逢瀨さへ一年に、今宵一夜の契りゆゑ、淸〽まだ明星の影うすき、暮れぬ内より織女が、待てば、竹〽待たるゝ牽牛も、牛の歩みのもどかしく、淸〽心は先きへ行合ひの、竹〽八

〽重の雲路をたどり來る。（ト是れにて牽牛牛を引き本舞臺へ來る）

〽それと見るより鵲の、飛び立つ思ひ押し鎭め。（ト織女こなしあつて）

織女　お懷しや我が夫さま、お替りとてもおはざりしか。

牽牛　そもじも堅固で重疊々々。思へば年に只一度、此七夕に逢ふのみにて、

織女　雁の便りもなき身の上、

牽牛　懷しさは如何ばかり、

織女　取りわけ去年は雨降りて、

牽牛　そもじに逢ふも三歳越し。

竹〽しかも續きし霖雨に、八十の河原に水增して、妻こし船に棹させど、緣の淺瀨も淵となり

淸〽とわたるようすが明け近く、長啼鳥に短夜を、かこち淚の紅葉川、竹〽思へばうしと引く綱も、あとへ引かるゝ後朝に、行きつ戾りつ川波の、つれなき別れもきのふと過ぎ、

ト此內牽牛鞭竹を持ち振あつて、織女出で、

淸〽けふは雨氣も中空に、心も晴れて雲の帶、とけて寐る夜の嬉しさと、寄り添ふ折柄閣雲に、

ト牽牛織女振あつて寄添ふ。此時花道の揚幕にて、

夜這　御注進々々。
竹〽呼はる聲も高島屋、飛んで氣輕な夜這星。
ト誂への鳴物になり、花道より一ツ星の附きたる鬘、好みのこしらへ、鬱金の褌を下げ走り出來り、花道へ留り。
清〽色の世界へ產れしからは、色をするのが犢鼻褌、寐るに手廻し宵から裸、竹〽ぞつと夜風に、ハツクサメ、きやつが噂をして居るか、えゝ畜生めといふ闇を、清〽足も空にて駈來る。
ト夜這星花道にて、よろしく振あつて本舞臺へ來る、牽牛織女見て、
牽牛　誰かと思へば夜這星。
織女　注進とは何事なるか。
牽牛　樣子は如何に。
夜這　はつ、（トのりになり）されば候、されば候、最一つ負けて、されば候。
竹〽夜這星と化物は夜半のものに宵の內、とろ〳〵やらうと思ひの外、一つ長屋の雷が夫婦喧嘩で亂騷ぎ。（ト是れまで注進の振あつて、是れより尋常の振になる、）
清〽聞けば此夏哥澤の、師匠の所へおつこちて、氣は失なはねど肝腎の、雲を失ひ居候、竹〽そ

こで端唄を聞き覺え、此天上へ歸つても、つい口癖に鳴る時さへ。（ト振あつて端唄になり。）

清〽小町思へば照日も曇る、四位の少將が涙雨、ごろ〳〵〳〵ごろ〳〵〳〵、えゝごろチごろチヽヽヽ。〽聞くに女房は呆れ果て、〽これそんな惚氣たごろ〳〵〳〵鳴りやうではこはがる臍で茶を沸さう、鳴るなら大きな聲をして、竹〽ごろ〳〵〳〵ぴか〳〵〳〵ごろごろ〳〵ぴか〳〵〳〵、いや、ごろ〳〵〳〵〳〵ぴつしやり、清〽と鳴らねば樣を附けられぬ。

竹〽いへば亭主は腹を立て、〽それは昔の雷だ、大きな聲で鳴らずとも、意氣な端唄で鳴るのが當世、それがいやなら、〽出て行きやれ、清詞〽なに、出て行けとえ。竹詞〽おゝ、角を見るもいやになつた。清〽我がものと思へば輕き傘の雪、竹詞〽我がものゆゑに仕方なく、我慢をすれば附上り、亭主を尻に引ずり女房、戀の重荷の子供を連れ、きり〳〵と出て行きやがれ、清詞〽いえ〳〵、爰はわたしの家、〽お前は聟の小糠雨、傘一本もない身の上。竹〽うぬさうぬかせば料簡がと、打つて掛かれば、清〽ごろ〳〵〳〵。竹〽ごろ〳〵〳〵と鳴る音に

清〽側に寢て居た子雷、こよ〳〵〳〵と起上り、詞〽これとゝさん可愛さうにかゝさんを、〽背負つた太鼓ぢやあるまいし、何で其樣に叩くのぢや。竹〽かゝる騒ぎに隣りから、婆あ雷留めに來て、詞〽えゝお前方は何うしたのぢや、夫婦喧嘩は雷獸も喰はぬに野暮をいふだ

ちは、どんな太鼓の八つ當りか、出て行けとの一聲に、清〽月が鳴いたか時鳥、いつしか白む短夜にまだ寐もたらぬ手枕や、竹〽あれおなるさんもくよ〳〵と、清〽愚癡なやうだが、清〽いえ〳〵〽ないて居るわいな。竹〽端唄に免じて五郎助どの、料簡してとごろ〳〵〳〵、清〽いえ〳〵わたしや打たれたからは、料簡ならぬとごろ〳〵。唄〽ならずばうぬとごろ〳〵〳〵。清〽とゝさん待つてとこよ〳〵〳〵。竹〽これはしたりとごろ〳〵〳〵留めるはずみに雷婆、うんとばかりに倒れゝば、こりやころりではあるまいかと、清〽醫者よ鍼醫と立ち騒げば、竹〽入齒の牙を呑込んで、胸に痞へて苦しやと、いふにをかしく吹き出し、果は笑うて仲直り、

ト是れまで夜這星夫婦婆お子供仕分けの振よろしくあつて、

竹〽夫婦喧嘩のあらましは、斯くの通りと褌で、汗を拭うて居たりける。

ト夜這星よろしく振あつて納る。牽牛、織女前へ出で。

竹〽織女は更け行く小夜風に、名残りを惜しむ託ち言、清クドキ〽今宵逢うたる嬉しさに、又一歳の悲しさは、別れし跡の物思ひ、身は空蟬のうつゝなく、竹〽五百機たてゝ織り立つる、梭の通ひも上の空、〽歸る雁金來る燕、春過ぎ夏に此秋を、指織殿に繰返す、其をだ巻の絲よりも、待身にながき悲しさを、汲分けてたべ我が夫と、竹〽いふに實にもと牽牛も、託ち

涙に暮れければ。

ト織女牽牛くどきの振よろしくあつて、兩人縋り泣く、夜這星出で。

清へ中を隔てゝ夜這星、これはどうした文句やら、まだ寐もせぬに文彌とは、竹へ側で聞くさへ氣が惡い、口舌はさゝらさらりつと、箒星にて箒き出し、さあ〳〵早くお床入り。

ト夜這星振にて牽牛織女を機殿の蔭へ入れ、

竹へこれから我等も色廻り、清へ西へ飛ばうか東へとぼか、どちへ行かうぞ思案橋、竹へ浮れうかるゝ足の下、撞出す鐘は淺草か、(ト本釣鐘。)

清へ雲の上野の明六つに、南無三夜明けに此裝では。竹へ日の目もあれぱと言ひ捨てゝ、虚空はるかに。(トどろ〳〵になり、夜這星仕掛にて日覆の際まで上り、)

夜這 はや、おさらば。

トどろ〳〵賑かな鳴物になり夜這星針金宙乘り、褌を下げし夜這星の裝にて花道へ這入る。是れにて機殿の蔭より牽牛織女出で、

清へ牽牛織女も後朝に、竹へ秋去り衣去り兼ぬる、清へ契りも深き霧隱れ、竹へ姿は消えて、兩へ失せにける。

ト兩人よろしく名殘りを惜しむ思入。引張りの見得。知らせに附、上手出語り臺を巴の紋附祭の幕にて消し、下手淨瑠璃臺を酒樽の積物にて消し、日覆雨落の雲引いて取り、正面の雲幕を切つて落す。

（神田祭禮の場）‖本舞臺三間の間棧敷と見たる淨瑠璃臺、軒口に巴の紋の團子提灯を提げ、幕を絞り、手摺の心にて毛氈を敷き、向う金屏風と見たる張物、爰に常磐津連中居並び、屋臺囃子にて道具納る。とこれと一時に織女引拔き踊の師匠お若好みのこしらへ、牽牛引拔き達附手古舞舛吉好みのこしらへになり、花道より警固紀之助肌脱ぎ一本差し好みのこしらへ、竹吉達附手古舞舛吉に似たるこしらへにて出來り、花道へ留り、双方一緒に振になる。

〽神田祭りは競ひな祭り、負けぬ氣性に片肌ぬいで、ツン〳〵連立つ手古舞に、しめろヤレコレ世話役警固、所望だ〳〵一踊り、屋臺囃子に木遣の聲は、江戸の花笠着連れてつれて中も宵宮の若い同士。

ト舞臺花道ともに一緒に振あつて、世話役警固、手古舞竹吉舞臺へ來り、踊の師匠と警固、舛吉と竹吉一緒になつて納る。此内上手より薄に月の山車を引出し、七夕の牛を殘し是れへ丁度車を掛ける、此山車の上に誂への獅子載せてある、祇園囃子になり。

升吉　おゝこりやあ紀之さん、さつきから、小路隱れに、どこへ行つてお出でになりました。

紀之　今竹公が此先きに、いゝ娘が棧敷に居たから、見に行け〳〵といふゆゑ、仕方なしに行つたのよ。

竹吉　若し紀之さん、人聞きのいゝ事を、お前さんが見に行け〳〵とおつしやつてからに。

師匠　そりやお樂みでござりましたね。

升吉　お師匠さん、打捨つて置いては行けませんぜ。

師匠　なにわたしが構ふことはないが、後見に連れて來た梅吉さんが、紀之さんにはどんなに惚れて居なさいませう。

紀之　又師匠の嘘ばかり。

竹吉　あゝ、あの銀杏髷に結つて居なさる子かえ。

師匠　よく知つておいでだね。

竹吉　そりやあ蛇の道はへびさ。

師匠　ほんにお前も鐵棒引の、

竹吉　おつと、それは沙汰なしに。

升吉　畜生め、旨くするな。（ト背中を叩く）

紀之　そりやあさうと、地走りの宇佐公はどうしたらう。
師匠　大方よい娘でも見に行きなさいましたらう。
升吉　違えねえ。
竹吉　いや、爰に臼や杵があるから、（ト臼と杵を前へ出し）どこかそこらに居るだらう。

〽おつと爰にと武藏野の、月の出しより飛ぶ兎

ト山車の上の獅子のあほりを上げ、內より宇佐、耳と見える白の鉢卷緋鹿の子の袖なしにて出で、山車より下へ飛下りる。

紀之　おゝ宇佐公か、びつくりした。
升吉　何であそこに隱れて居たのだ。
宇佐　昨夜夜通しで睡いから、獅子を冠つて一寐入りしたのさ。
竹吉　よく寐たがるやつだ。
宇佐　お前に似てよ。そりやあいゝが、ぐつすり寐たのでぼんやりして、踊りを忘れてしまつた。
升吉　今是れから練出すのに、そんな事を言つちやあいけねえ。
紀之　忘れた所はお師匠さんに、側から附けて貰ふがいゝ。

宇佐　それぢやあ一番演つて見ようか。

〽臼はまん丸十五夜お月さま、杵の長いを木賊に見立て、思ひ舂ぬき曲舂きに、浮いて兎の拍子よく、天の岩戸ぢやなけれども、上見て下見てやれ突けそれ突け、すつとん〳〵、月の影うつ飛團子。（ト宇佐曲舂に天の岩戸の振よろしくあつて、）

〽兎の拍子に手古舞が、乘つて木遣の勢ひよく、（ト升吉竹吉黒骨の扇を持ち前へ出て、）

キヤリ〽ヤンレかつかれ〳〵、そこで中綱きりゝや、しやんと〆めあげて、合の拍子がそうた、今年はじめて、ヤレコレお役にさゝれた、ヨイ〳〵熊野の山へ登つた、熊野のお山は汐が七ちり八ちり、九里から十里から峰から谷から、あれから是れまでえんや、これはえんやとな、そろ〳〵繰込め松の木、エヽヤレヨウヤア、〽引くや贔屓の江戸育ち。

ト升吉紀之助木遣の振よろしくあつて。

紀之　時にお師匠さん、話しに聞いて居ります扇の富士を、一つ遣つてお見せなさいましな。

師匠　なにお前さん方に、お目に掛けるやうなものではございませんよ。

升吉　其卑下はよして、天窓からとんだ髪結だが、早くおやんなせえ。

竹吉　ほんにわつちらも始めてだ。

師匠　そんなら皆さんのお笑ひ草に、

三人　さあ〳〵爰で、

師匠　恥かしながら。（ト師匠舞扇を持ち前へ出る。）

〽逆しまに掛けて扇の富士額、虎といふ名も東海の、てゝてんとたまらぬ取りなりの、姿ばかりか酒までも、街道一と夕映に、顔も紅葉の千鳥足、一寸一口祐成と、月に兎の杯にて九十三杯數重ね、和田酒盛の隨一と、殘る噂も高蒔繪、〽面白や。

ト師匠振あつて宇佐かゝり、一緒に振ある。此内上手より祭りの牛方九郎藏、好みの拵へにて揃ひの手拭を襟へ卷き、腰へ花笠を附け出來り、車にもたれ、是れを見て居て振の留り手を叩き。

九郎　やあおひせう（師匠、）さんは、おひせうさんだけいらいもんでござります。（ト大きな聲をする。）

紀之　誰かと思つたら、牛方の九郎藏か。

竹吉　とつぴやうしもない聲をして、

宇佐　あつたら肝を潰した。

九郎　えゝや肝をぶつ潰したは、おひせうさんの踊りだて。斯うめえてもおらなども踊りぢやあ、くろしんだもんだが、あゝ骨が柔らこくえかねて。

升吉　何だ骨が柔らけえの柔らかくねえのと、鰯鍋でも喰やあしめえし。
九郎　えゝ踊るそべもひらないで、生げゝな口をけかねえものだ。
師匠　ほんにお前が踊りを踊らうとは、人は見掛けによらないものだね。
紀之　何ぞ踊つて見せねえな。
九郎　あゝ何でもけなせえ、當ぶりにやります。
竹吉　それぢやあおら達と一緒に踊るか。
九郎　えゝ踊るとも〳〵。
師匠　是れは見ものでござんすわい。
升吉　さらばぬしに似合つたやう、
竹吉　おどけ節でやつてくりよ。
〽ぬしにサァ逢ひたさに、ひたぬか菜の葉ヱ、やろぞときめせサマはんじものよのヱ、〽そんじよそのこんだ、色戀するならかうべの早いが一の手、〽なぜに小糠どの智慧才覺はヱがおれこんだとサマめけて來たのヱ。
ト升吉竹吉の振を見て、牛方九郎藏眞似て踊り、是れより早き振になり。

〽それ來たやれ來た多羅福大盡、新造禿もお手々を引船、にこつく遣手にさゞめく藝者も、お髭のチリチツどん〳〵太鼓が、唄ひ囃せや大黑頭巾で、蒔出す惣花さん〳〵杯廻るお床もしつぽりとおしげりなんしえ其跡は、何うでもなんなとちよつくらちよつと、やらしやんせ、〽しどもなや。

ト升吉竹吉早き振になる、九郎藏困る可笑味の振よろしくあつて納る。師匠紀之助を連れて出で。

師匠　ほんにさつきも噂した、梅吉さんから紀之さんに、言傳がござんすぞえ。

紀之　梅吉さんから言傳を、わたしや受ける覺えはない。

師匠　なに、ない事がござんせう。

〽それ忘れてか此間、戀の手見せに兩國で多くの人の中村屋、色氣白齒の身ながらも、いとしいの字にどうぞして、野暮なやの字を解かれたく、お前にそつと杯を差す手引く手も岡目から、弄らるゝのがしみ〴〵と、嬉しい事ぢやないかいな。

ト師匠紀之助口說の振、此中へ宇佐這入りよろしくあつて振の留り、師匠紀之助に囁く。

紀之　そんなら晩に、

師匠　もし。

〽晩につと目で教へ、どれお先きへと夕汐の、詞に月の玉兎、打連れ立ちて入りにける。

ト師匠宇佐振あつて兩人上手へはひる。九郎藏師匠の跡を見送り居る。升吉背中を叩き。

升吉　どうだ高輪の親分、親讓りとは言ひながら、此紀之さんのやうに女に惚れられるとは、氣の惡い話しだな。

竹松　ぬしなざあ、百のきらずを一時に食つても出來ねえ事だ。(ト九郎藏せゝら笑ひ、)

九郎　へん、なにでけねえ事があるもんだ、牛方だとて馬鹿にしねえがえい、是れでもひな川の橋向うぢや、ぶつぱり凧にされる男だ、嘘ならもかでや(百足屋)か和國屋で、けえて見るがえい。

紀之　なに、ぶつぱり凧にされるとは。

九郎　ひろ男にも似合はねえ、ぶつぱり凧をひらねえか、あつちやからもけてくれ、こつちやからもけてくれと、ぶつぱり凧にされるのだ。

紀之　あゝ、それぢやあ引張り凧にされるといふのか。

九郎　ひれた事さ。

升吉　その橋向うで、色男がぶつぱり凧になつた時の。

竹吉　女郎買の話しが聞きたいな。

九郎　よくぱなし家の扇橋がするから、みづらしくもねえけれど、ぞんだら話して聞かせますべいか。

三人　そいつァ聞きてえな〳〵。（ト是れにて九郎藏思入あつて、）

九郎　先づ高輪の夜あかいで（夜明し）けらず汁でふと口呑み、〽微醉機嫌で十八町、だらり〳〵ぐわらころと、桐さへ生ないなせ下駄、ツヽリ郎〽八ツ山下の茶屋女、夜風を凌ぐ茶碗酒、〽そゝり節にて橋向う、上る二階も三町目、廻しと聞いて癇癪に、

ト九郎藏生醉素見の振あつて、

こえおかつさんえゝ（いゝ）と事よ、一寸けね〳〵、おら又ええま時分けたら、廻しのあらひれたこつちやねえか、廻しがあつたとて、ごて〳〵した事はあろまいぢやねえか、お前もえんけならおらが方もえんげだ、ふと口呑んでえつてくんねえ、えゝぢやあねえか、一寸むまこで酒えつぽん熱くして、持つてけてくんねえ、ふと口呑んでずッとけえるのだ、女子がえねえからとて酒が呑めねえものぢやねえ、えなか者ぢやあるまいしいとッ子だ、詞ァけえてもひれさうなものだ、早く持てけてくんねえ。自慢事するぢやねえけれど、明神さまでも山王さまでも、上覧場とけた時は、おらがふとつぷつぱたかにやあ、もうと牛が動きやあしねえ。

〽見れば誰やら覗くゆゑ、　セリフ〽こうそこを覗くは誰ぢやえ。えゝ。あんまり覗いて貰ふまいかい、見世物でもありやしまいし、誰だか爰へはひつたがいゝ。〽言へばひよつくり小じよくの子、　セリフ〽おや誰かと思ふたら小じよこさんかえ、お前に科はありやしない、ちやつとこつちやへゝんねえ、高輪でふと口呑んで胸がやけてなんねえ、大けな物で水えつぱいくんねえ、こんだけたら髷紐買うてやろぜ、早く持つてけてくんねえ、〽だませばぶつ〳〵口小言、返事もせずに出て行けば。

えゝ何をぶつ〳〵言やあがるのだ、やめ（闇）もぜうご日（十五日）なら月夜もぜうご日、おらが方でも通つて見やあがれ、えち〳〵ふッつらまへて牛でもけしかけべいか、どう畜生め、小豆殻でも喰やあがれ。

〽手拭肩にあげ胡坐、折から廊下をばたすたと入來る女郎に後向、〽拗ねる男を流し目に、名さへお八重の鼻聲にて、（ト是れまで九郎藏よろしくあつて、升吉女郎のわる身にて出る、）

女郎セリフ〽こえ九よぴやん（九郎さん）あいにふほん夜は落合つて、早ふ來うと思ふても、勤め番ぴう（衆）だから抜けられず、堪忍しておふれよ。

えゝ、えま時分けやあがつて、大概な化物はふつ込む時分だ。

女〽おそふ來たはわちひが末始終は、女房にひようならうといふ中で、〽そんなに野暮を言はずとも、よいではないかと抱附けば。

えゝ、あつくろしい、よせな。

〽腹立ち紛れに突きのくれば、女郎はふが〳〵泣聲にて、セリフ女〽えゝほれまでお前が來る度毎、わるぷしないはまふら(枕)が證據、〽朝の歸りに兩房の四文揚枝を掛流し、生き物遣ふ生業に、出先きに怪我のないやうと、案じればこそ御祈禱湯で、清めて行つて下さんせと湯錢までも達引くに、譯も言はずに腹立つて悲しいわいなと泣き伏せば。

ト新内模樣にて、升吉わる身の口說きよろしく。

何だ〳〵めろ〳〵と淚をこぼいて、お前がそんなにいふなら、おらもえつて聞かせらあ。

〽これ忘れもひまい、天王さまに絞りの浴衣がほしいといふゆゑ、三朱と三百三十三文で買うて遣つた其上に、

お臺場づゝの小遣も、えく度やつたかひれはひねえ、えゝ腹の立つ〳〵(と九郎藏腹の立つ思入にて立ち掛るを升吉留めて、)えゝふつぱるなとえつたらふつぱるな。

女〽これがふつぱらずに居られるものか。

えゝ放せといふに。
〽放せ遣らぬと引合ふ折柄、中を隔てゝ中どんが。
ト是れまで九郎藏は腹を立ち、升吉は泣く口舌の振よろしくあつて、牛方立掛るを升吉留める、此時紀之助若い者の思入にて是れを留めに出て。
中どんセリフ〽もし〳〵〳〵お二人さん、樣子は廊下で聞きました、はゝゝゝまあ〳〵お待ちなさいまし、はゝゝゝ、お前さんがふつぱるなといふと、お八重さんがふつぱると、はゝゝは、有卦に入つたか知らないが、ふの字盡しはこたへられぬ、はゝゝゝ、牛方〽えゝふつぱるなといふは江戸訛りだ、生げゝに笑やあがるな。〽と腹を立つればしく〳〵泣き、女〽わちひの鼻へ拔ぺるのは、おやへといふ名の看板だ、〽何ゆゑそれが可笑いと、いへば此方は吹き出し、中どん〽はゝゝゝこれが笑はずに居られるものか、ひの字をふの字にいふならば、はゝゝゝヒヽ火の用心はフヽふの用心、へほ將棊ではあるまいし、あれ〳〵お臍がはゝはゝ、〽ふつくり返ると打笑へば、もう料簡がと牛方が立つを、袖引き裾引きに。
ト此內三人よろしくあつて。
九郎 よさあがれ〳〵、うるせえどう畜生めだ。〽と留める升吉を手拭にて牛を打つやうに打ち、えゝ、歩き

やあがれ、こうまんどめ。スウ。

〽先づ牛方の女郎買、話しは是れでもうお了ひ、〽わけもなや。

ト九郎藏振の留り、指にて角の眞似をして牛のこなしよろしく納る、竹吉出て、

竹吉　イヨ品川の色男め、女を泣かす今の話し。

三人　面白かつた〳〵。

牛方　ひかし牛方の話しに彌次馬が出たので、えつもより長くなり、おら何か忘れたやうだ。おう、さうだ。

〽もう八つだのに肝腎の、〽辨當を遣ふを忘れたと、山車小屋さして急ぎ行く。

ト屋臺囃子を冠せ、九郎藏上手へ這入る、升吉竹吉獅子の拵へにかゝる、紀之助前へ出て。

紀之　おや、何時の間にか段々とみんな何處へか行つてしまつた。爰らは差詰め穴埋めにおれが一番やらずばなるまい。（ト牡丹の花に蝶二羽附きし花笠を持つて思入、）

〽花笠の牡丹に蝶の一曲を、ちよとつなぎに身拵へ。

トかんからの入りし手品の鳴物になり、紀之助笠を下へ置き扱帯を取つて襷にかける、此時上手より三吉仕事師の装牡丹の半纏、紺の股引尻掛のこしらへにて出來り。

三吉、もし紀之さん、世話役衆が一杯やると、會所に待つて居なさいますぜ。
紀之　さうでもあらうが待つてくれ、今一蝶齋が遣ふ、蝶の一曲をやるのだ。
三吉　お前さんに出來ますかい。
紀之　そこは米五郎にをそはつて置いた。
紀之　それぢやあ早くおやんなせえ。
紀之　東西。（ト扇を上げる、是れにて鳴物を打上げ、）まづお目通りで白紙をば、

〽捻つて蝶の形となし、扇の風のかね合にて、要へ止る放れ業。

ト此内紀之助手品の思入にて鼻紙を捻り、蝶のこなし扇で煽ぐ、飛んでしまふ、又こしらへる、是れを見て三吉うなづき、山車の水玉の竹を取り、花笠の二羽の蝶をこれへ結へる、紀之助又紙をあふぎ、飛んでしまふ、所へ三吉指金の蝶を出す、紀之助これを扇にてあふぎ、合方にて蝶を遣ふ振よろしくあつて。

〽番ひ放れぬ二羽の蝶。（ト扇へ二羽とめ思入あつて、）

〽放れぬものにとりては、門に松竹女夫雛、鬼と鍾馗に對の槍、笹にも色紙短册や、白紅の菊相撲、あれや〳〵よいやさ。（ト紀之助振あつて、）

〽會所へ酒の練込みに、浮れ興じて入りにける。（ト紀之助振にて上手へ這入る。）
〽實にや目出度き富貴草、色を慕うて二羽の蝶、かはす翼のしならしや。
ト三吉指金の蝶を遣ふ、升吉竹吉獅子を冠り出る。
〽時を感じて牡丹の花の、咲くや亂れて風にちり〳〵、散るは〳〵ちり〳〵〳〵、散掛る花の露そひ、〽獅子の頭をうなだれ、〽比翼の蝶の共に狂ふや、谷を隔てゝあなたへひらり、こなたへひらり、〽舞遊ぶ。（ト此内矢張り三吉蝶を遣ひ兩人獅子の狂ひの振宜しくあつて、）
〽勇む祭りの手古舞も、獅子の頭の息子樣、江戸生えぬきの名取草、花々しくぞ。
ト兩人獅子を持ち、三吉ちよつと掛るを投げのけ、竹吉これを踏まへ獅子の頭を持つ、升吉尻尾を持ち引ばりの見得、キホロ三重へ渡り拍子を冠せよろしく、
此幕廻廊の道具幕、大拍子にてつなぎ引返す。

（宮島拜殿の場）——本舞臺三間の間中足の二重、舞臺端まで出して飾り、正面破風造りの彩色彫物の欄間、一面に翠簾をおろし、上の方後へ下げて高欄附き廻廊出這入りあり、總て朱塗り、雨落

より波手摺を出し、總て宮島拜殿の體、下の方同じく廻廊の淨瑠璃臺、爰に常磐津連中居並び、よろしく道具納る。と波の音打ちあげ、淨瑠璃になる。

〽秦の始皇の破陣樂、入日を招く旗鉾の唐紅を今爰に、朱の玉垣いつくしま榮華の夢を宮島や。

呼び 今樣始り。

ト 誂へ樂太鼓の入りし舞樂の鳴物になり、上手廻廊より祇王、金烏帽子水干附太刀金の御幣を後へさし、男舞のこしらへにて中啓を持ち出て來る、跡より祇女同じこしらへにて出來り、舞臺にて入替り、しやんと構へ、鳴物打ちあげ。

祇王 蓬萊の常世の山もよそならぬ、君が惠みの高樓に、

祇女 海も靜けく龜遊び、鶴も群來て千歳ふる、

祇王 今日わたましの今樣も、

祇女 梢は秋の紅葉の賀、

祇王 錦うつして青海波、

祇女 波の鼓ともろ共に、

祇王　袖を返して、
兩人　一奏で。
〽春前に雨あつて、花の開くこと早し、秋後に霜なうして落葉遲し。
ト舞樂のやうな振あつて。
〽見渡せば四方の梢も艶葉の、錦色ある綾絲の、時雨の雨に濡れじとて、翳す袖笠ひぢ笠に袂をしばし鵲の、月の傘さす夕づれは、照添ふ顏の紅葉傘、〽しをらしや。
ト兩人振よろしくあつて納る、此時御簾の内にて。
清盛　最早太陽彌山に傾き、妙音天女遷座の刻限。誰そあるか、御簾をあげい。
近習二人　畏まつてござりまする。
祇王　あのお聲は、
祇女　我が君さま。（ト兩人共に住ふ。）
〽時めく平家の勢ひに、世界も平の淸盛が、玉の冠錦龍の御衣に四邊も輝きて、日影も恥づる如くなり。
トこれへ樂を冠せ、正面の御簾を捲きあげる、内に九尺の臺、此の上に又二疊臺を置き、淸盛玉の

冠、錦龍やうの裝束緋の袴、檜扇を掛ち立身、上手に近習一、下手に近習二、兩人とも緋の振袖指貫小さ刀にて、太刀と手箱を持ち控へ居り、よき所まで押出す、祇王祇女はつと辭儀をなす、

清盛見て。

清盛　宮殿樓閣成就なし、天女を遷座の壽ぎに、神すゞしめの一奏。祇王祇女大儀。

祇王　君の仰せに今樣の、拙き舞を御覽に入れ、

祇女　お恥かしう、

兩人　存じます。

近一　いや〳〵都の空より遙々と、お連れなされし程あつて、

近二　一際目立つ今の舞振り、流石は君の御意に入り。

祇王　數ならぬ身の姉妹が、

祇女　お情受けしも、

〽ほんに思へば過ぎし頃、祇園祭の神詣、ぬしは誰とも白綾の、出し衣したる絲毛の車、女車と三つ扇、忍び車のお詞に、祇王祇女とぞ召されつゝ、西八條の御館へ通ひ車も、いつしかに、馴れて嬉しき御所車、引手數多の文車に、浮氣な君の移り氣が、辛氣らしいぢやない

かいな。

ト此内祇王祇女清盛へ思入あつて、口説き模樣の振よろしくあつて。

〽凋るゝ花に稚兒達が、ちよつと出船の口まかせ。

ト近習の一刀を刀掛へかけ、近習の二手箱をよき所へ置き、前へ出て、のつたものになる。

〽安藝の宮島廻れば七里、浦は七浦七戎、岩の狹間に腰打ち掛けて、女子釣ろとて釣竿おろし、ひけや〳〵琵琶琴三絃、ふけや追手に笙篳篥で、鈎にかゝりし三年ものは、龍の都の三番姬、其御器量もうつくしまに、辨財天女と此島に祝ひ申して候と、口に任せて興じける。

ト兩人振あつて納る。

祇王　ても面白いお若衆さん、女子たらしの口合に、降參とやらするわいな。

祇女　やがて妹背の初陣に、よいお手柄をなさんせうわいな。

近二　いゝや我らは味知らず、色に素早き我が君の、

近一　お手柄多き其中にも、

清盛　おゝ、思へば過ぎし宇治の一戰。（ト是れより大小入り物語になる。）

近一　〽戀の手管の懸引に、枕を碎く其中へ、寐耳に水は宇治川の、橋の中の間引きはなし。

近一 名に負ふ大河の川波と、共に白旗幾流れ。
近二〽宇治山颪に靡かして、平等院に楯籠ると。祇女〽文の使りや物見の知らせ。
清盛 いや、何程の事あらん、時を移さず攻潰せと、味方に下知の下よりも。
近二 承はると馳出す、頃は皐月の末なれば、水嵩増せし五月雨に。
近二〽卯の花くだし山吹の、瀬さへも見えぬ朝ぼらけ。
祇王 敵にも聞ゆる荒法師、筒井の淨妙一來と、
〽名乘つてすぎる時鳥、翼返りの早業に。
ト是れまで皆々物語りの振よろしくあつて、是れより清盛一人になり、皆々左右へ控へる。
清盛 しや御ざんなれ、もの〳〵しと、心は彌猛に逸れども、
清〽橋なき川に水高く、如何にやせんと躊躇ところ、近一〽櫓に名さへ橘の、小島が崎より逸散に兵一手馳來り、大音聲に呼はつて。
近二 田原又太郎忠綱と、名乘るは生年十七歳、手勢すぐつて三百餘騎、水にさつくと飛び入れば。
〽友呼ぶ千鳥むら鳥の、翼並ぶる羽音かと、見返る方も白波に、浮いつ沈みつせし所、忠綱士卒に下知をなし。

清盛　水の逆卷く所こそ、必定岩のあると心得、

〽弱き馬をば下手に立て。

強きに水を防がせなば、

〽念なう川を越すべしと、只一言に魁なし、勝鬨舉げし宇治川の、其功しの物語。

ト此内大小入り、清盛檜扇を遣ひ物語よろしくあつて。

〽はや夕陽に造營の、社壇へ遷座の刻限に。

ト此時烈しく波音の頭などん〳〵と打込み、是れにて兩棧敷向う正面打返し、波手摺になり、正面打抜き本社の遠見・銅燈籠の灯入りよろしく替り。

〽清盛遙に見たまひて。

ト波の音、誂への音樂になり、清盛向うへ思入あつて。

如何に兩人、杢の棟梁大工等が、未だ浦邊に見えつるは、天女を壽ぐ船祭り、遷座の式を祝む爲か。

近一　はつ、本社に成就なしたれど、大經堂出來いたさず、それゆゑにこそ數多の人夫、只今それにて修理最中。

清盛　やあ豫て知れたる今宵の遷座、成就せざるは彼等が怠り。
近二　あいや番匠ども〻人を選み、兵庫の津より呼び寄せしが、此嚴島より周防へ掛け、汐の滿干の違ふゆゑ、
祇王　夜を日に繼いで精出せど、
祇女　最早傾ぶく夕日影、
近一　今一時にて成就いたさず、
近二　恐れ入つたる番匠ども。
清盛　左はいへ清盛、今日と定めし式を延す時は、四海の者の嘲けりなん。（ト此以前より向う正面へ紅絹張り灯入りの日を引出す、是れを見て、）今西海へ入らんとする、夕日を再び招き返さば、造營成就も瞬くうち。
近一　御諚には候へど、落花再び枝に返らず、
近二　假令我が君の御威勢でも、
祇王　入日を如何で止めたまはん。
祇女　思ひ止まり、

四人　たまふべし。

清盛　やあ小賢しきわいらが諫言、昔唐土堯の帝、九つの日を射たりし例し、今清盛が勢ひにてなど念力の通らざらん、いでや夕日を招き返さん。

〽折から峰の松風に、波の音さへ荒海の、拜殿近く進み出で。

ト波の音早めやうの合方、祇王祇女留めるを振拂ひ、清盛舞臺端まで出る、皆々後に並びよく居並ぶ

清盛向うをきつと見て。

南無歸命日天子、今清盛の願ひの如く、再び夕陽虚空へ戻り、惠みの光り明かに造營成就なさしめたまへ。

〽扇を上げて打ち招けば、不思議や夕陽招きに連れ、朝日の如くさし昇る、威勢の程こそ勇しけれ。

ト清盛檜扇にて向うを招く、是れにて波へ入り掛りし日段々と上へあがる、清盛これを見てきつと見得、上手に祇王、近習一、下手に祇女、近習二、引張りよろしく段切にて、

目出度　打出し

先づ今日は、是れぎり。

日月星晝夜織分（終り）

想ひ出雲の
大社に
八百や萬の
緣定め

神有月色世話事

解説

「緣結び」は本來文久二年十月、作者四十七歳の時、守田座に於て、市川小團次、尾上菊次郎、坂東三津五郎等に書卸されたものであるが、明治四年十一月中村座に再演された時に、殆ど面目を一新せんばかりに增訂された。茲にはその增訂の分を收めた。其時の役割は尾上菊五郎（飴賣かん子）、中村芝翫（とりあげ婆茨木）、坂東彥三郎（本町のいさみ綱五郎）、坂東三津五郎（九條の里の傾城濡川）、中村壽三郎（信濃屋のお半）、市川門之助（大經師の下女おさん）、市川女寅（藝者おしゆん）、中村仲助（長樂寺の飛燕坊）、市村家橘（狂言傳之丞）、坂東太郎（石川五口）、嵐榮三郎（腰元お輕）、中村福助（かん／＼のう茂右衞門）、等であつた。常磐津連中には小文字太夫、喜代太夫、綱太夫、文字兵衞、文字太郎、菊藏等。淸元連中には、延壽太夫、家內壽、千代太夫、勝造、東三郎、小梅等があつた。

書卸しに小團次の取上げ婆茨木が大好評であつたといふ話が殘つてゐる。現今時として上演される場合使用されるのは、增訂の時のである。

神有月色世話事（緣結び）

出雲國大社の場
淺草辨天山の場

常磐津連中
清元連中
竹本連中

（役名――本町丸網五郎、茨木婆おきん、飴屋かん子、八幡大菩薩、信濃屋お牛、稲荷大明神、かんかんのう茂右衛門、春日明神、狂言師傳之丞、金山彦命、長樂寺飛燕坊、愛染明王、講釋師石川五口、粂の平内、大經師のおさん、傾城瀧川、稚女の命、腰元おかる、藝者おしゆん、）

本舞臺一面の雲幕、爰に○△□◎何れも色替りの裝束、頭巾、神のこしらへにて、緣結びの圖を持ち立ち掛り居る、大拍子にて幕明く。

○時に何れも、毎年の吉例に任せ、神有月の朔日より日本國の神々が此大社へ集つて、爰の娘やかしこの息子、夫婦妹背の緣結び、

△弓矢神を初めとして、大小の神達もあらかた參着ありしゆゑ、今宵を初日に宮殿にて緣結びの大

□ 評定、（ト見物へ向ひ、）思召しがござるなら、我々へお頼みなされい。

□ どんな出來ない緣組でも、出雲でしつかり結んで置けば、假令海山隔てゝも、きつと一緒になさるゝは、神は正直嘘はつかぬぞ。

◎ 桂庵ならば五分の禮金、持參の分一を取るけれど、そこは神だけ十二銅、三文でも大事ない、思惑がござるなら、今の内お頼みなされい。

四人 緣結びの、御用はないか／＼。（ト見物へ向ひ思入あつて、土間棧敷へ聞き耳立て、）

○ はい／＼、筆屋のお鹿さんが命毛かけて、三津五郎と結ばりたい、宜しうござい、結んであげます。

△ 箔屋のおきんさんが女寅に打込んでござる、きつと情人にしてあげます。

□ 足袋屋の後家御が太郎に足を附けたい、一足揃ふやうに結び附けて上げます。

◎ 熊手屋のおかめさんが福助と結ばりたい、思ひのたけを届かして早く夫婦にして上げます。

○ これ／＼、もうよい加減にしようではないか、芝翫彦三郎菊五郎を初め、門之助壽三郎仲太郎榮三郎、當時色師の家橘などは附込みが四五本もある。

△ 如何さまさう澤山あつては、結ぶのに面倒だ、爰らで山留めとしませうか。

トやはり大拍子にて、花道より粂の平内、石と見える張子の鬘、同じ上下着附にて出來り、

平内　是れは何れもには、お早いことでござるな。

○　おゝ、粂の平内どのか。

四人　待つて居たく。

平内　大きに遲くなりました、毎年出雲の緣結びには一番掛けに參る平内、何をいふにも體が石ゆゑ馬に乘つても駕籠に乘つても、重い增しを取られた上、外の神より遲くなるて。

△　いつも緣結びの目安にする、衆人から願掛けの色文は持つてござつたらうな。

平内　所が無理な願ばかり、出來ぬ緣談が多いゆゑ、出來さうなのばかり持つて來ました。

トふところより一束にした文を出す。

□　何ぞ珍らしい文はござらぬか。

平内　あるともく、幾らもある。

◎　何ぞ一二本聞きたいものだな。

平内　所望とあらば、讀みませう。

四人　東西々々。（ト平内文の形の淨瑠璃觸を開き、）

平内　淨瑠璃名題――――（ト名題、太夫連名、役人替名を讀み終つて、）何の事だ、色文だと思つたら、淨瑠璃觸れだ。

四人　こんな事だらうと思つた。

呼び　緣結びの始まり。

○　最早緣結びの刻限とあれば、

△　神々が寄りたまふと見える、

□　淺草紙も紙の數、

◎　天窓數に列なりませう。

平内　然らば我れも共々に、（ト皆々立上り、）いよ／＼此處緣結び始まり、其爲め口上左樣。

ト右の鳴物にて平内先きに四人附いて上手へはひる。知らせに附き道具幕を切つて落す。

（大社の場）――本舞臺一面の大欄間、白木造り、本御簾を下し、眞中に出雲國大社といふ額を掛け、上下淨瑠璃臺、折廻し黑の狐格子、裾通り金張附、正面神鏡後御簾をおろし、雨落より白木鐵金の金物附の高欄を出し、總て大社の體よろしく道具納る。と鳴物を打ちあげ、大薩摩淨瑠璃

になる。

大薩摩 へそれ天地開闢の遠つ神代の有様を、思ひ出雲の宮居には、神有月と夕紅葉、しぐるゝ空も神風に、晴れて和光の月の影、朱の玉垣御社に、あらゆる神の影向ありて、男女妹背の縁結び、有難くもまた尊けれ。

ト夜神樂の入りし鳴物になり、正面の御簾を卷上げ、眞中に春日明神、白の装束紫の指貫曲玉を掛けしこしらへにて帳面を控へ、上手へ金山彦の命、織物の装束淺黄の指貫のこしらへ、絹張雲形長柄の傘をさしかけ、下手に碓女の命、織物の舞衣緋の袴、榊の枝を持ちしこしらへ、金山彦の上に八幡大菩薩、冠、白の装束、淺黄の指貫、弓矢を持ちしこしらへ。碓女の下に稻荷大明神織物の着附茶の水衣、白の大口、竹の先きに稻穗を附けしを持ちしこしらへにて、五人とも前へ押出す。留めの木にて上手出語り臺の霞幕を切つて落す、爰に竹本連中居並び、直に淨瑠璃になる。

へ八雲立つ其八重垣の言の葉に、和らぐ歌の敷島や、千代萬代も朽ちせざる、名に大社の神祭り、豐蘆原のもろ神も、輝く玉の冠に、かざしも匂ふ小忌衣、返すぐも面白き、夜遊の神樂舞の袖。

トこれにて誂への鳴物を冠せ、皆々振あつて羯鼓の入りし音樂になり。

春日 抑々天地乾坤と別れ、陰陽の二儀定まつて二柱のおゝん神、天の浮橋に立ちたまひ、

碓女　鳥の教へに妹背の道、初めて開きたまひしより、代々に傳へて日の本の、榮え久しき秋津國。
金山　その神代より今に至り、男女のみだりに通ぜざるやう、例年當社に諸神集り。
八幡　普く日本國中の、下萬民のもの共まで、
稻荷　子孫繁昌いたすやう、氏子々々の緣結び、
春日　いまだ八百萬代の神達も、半不參のものあれば、
碓女　今日は最上吉日ゆゑ、先づあらましの緣結び、
金山　それに控へし御兩所にも、急いで是れへ詰められよ。
八幡
稻荷　畏つてござりまする。
〽春日の神を上座に、左右に控へし諸神達、既に時刻と次の間より、足音重き平内が、男女の鬮を携へて。
ト此内眞中へ二疊臺を直し、春日明神是れへ上る、以前の四人の神出で、筆硯を春日明神の前へ置く、上手に碓女金山彥、下手に八幡稻荷、神々四人控へ、下手より以前の平内赤と白の鬮を持ち出で下手へ控へ辭儀をなす。
春日　おゝ、それに控へしは、近頃神になりし粂の平内なるか。

平内　はつ、左様にござりまする。
八幡　縁結びは其許の掛り、
稲荷　遠慮いたさず進み召され。
平内　眞平御免下さりませ。（と平内下手へ出る。）
金山　いつもながら遠路の所、重い體で御苦勞千萬。
碓女　さうして男女の名を記せし鬮、持參なりしか。
平内　鬮は前座の拙者の役目、これへ持參いたしました。
春日　時刻が移る、何れも早く、
皆々　畏つてござりまする。
〽天地を拜し神々は、紅白二つの男女の鬮、結び合せる緣定め。
ト此内平内鬮を持ち歩き、皆々二本づゝ結び、春日明神筆をとり帳を開き。
春日　して一番は誰々なるぞ。
八幡　本町丸の綱五郎に、絲屋の娘お房。
平内　それは慥、妹も惚れて居りまする。

春日　それでは絲屋だけ、こぐらからねばよいが。
稻荷　二番は信濃屋お半に帶屋の長右衞門。
春日　これは釣合はぬ緣だが、帶屋では結んだら解けまい。
平内　三番は何でござりまするな。
雛女　三番は傾城の瀧川に石川五右衞門。
金山　いや石川に瀧川では、流れの里で浮名を流さう。
春日　して又四番は、
金山　藝者のおしゆんに井筒傳兵衞。
八幡　おしゆんと傳兵衞の取組は、白藤ではないがよい相撲だ。
平内　さて五番は、大經師のおさんに手代の茂兵衞。
稻荷　是れもぴつたりとくツついたら、糊ばなれはしさうもない。
春日　又六番目は早野勘平に腰元おかる。
金山　二人が鹽冶の奥勤め、こんな緣は唐にもない。（ト此内春日明神帳面へ書記す）
平内　その次は浦里時次郎。

雛女　お染久松。
春日　あこれ〳〵靜かにせぬか、まだ先きのが附き切らぬわ。
平内　さうまんがちに言はずと、控へてござれ。
四人　はあゝ。
春日　おしゆん傳兵衛におさん茂兵衛ぢやな。
　へふんでを取つて書記す、折から向うに聲あつて。（ト花道の揚幕にて）
愛染　暫く〳〵。
春日　はて心得ぬ、今縁結びを書記すを。
八幡　暫く〳〵と留めしは、
稲荷　かねて噂に聞き及ぶ、
金山　暫くではあるまいか。
平内　何だか氣味の、
四人　悪い事だ。
春日　何にいたせ、暫く〳〵と。

碓女　聲を掛けたは、

皆々　何神なるぞ。

愛染　暫く〳〵。

〽雲の揚幕蹴破つて、韋駄天走りに板橋の、愛染明王駈來れば、それと見るより神々が。

トばた〳〵になり、花道より愛染明王、織物の裝束のこしらへにて出來り、花道へ控へる。

春日　誰かと思へば愛染明王。

碓女　何ゆゑあつてわたし等が、

金山　結びし今日の緣組を、

平內　暫くなどゝ、

皆々　留めしぞ。

愛染　はつ、某お留め申せしは、申し上げたい事あつて。

八幡　何か仔細のある事ならん、

稻荷　そこは端近。

皆々　先づ〳〵是れへ。

愛染　何れも御免下され。

〽御座間近く控ふれば、（ト舞臺へ來り控へる、）

春日　して〱如何なる仔細なるぞ。

愛染　はつ、仔細と申すは外ならず、（トのりになり、）

〽去年結びしお駒才三、小さん金五郎、二組とも晴れぬ思ひの時雨月、氣も相傘の濡れた同士、手に手を取つて土手傳ひ、誰白髭の森越えて、田の面に下りし雁金の、ばら〱ばつと棹に立つ、羽音も若しや追手かと、跡を三圍長命寺、長い命も冬の日の、短き契り木母寺で既に心中する所、やつと止めて參つたり。

今又お半長右衛門、おしゆん傳兵衛なんどをば、結はゞ末は心中もの。

〽それゆゑ止めし老婆心、結び直してたまはれと、大汗かいてぞ物語れば、神々賓にもとうなづきたまひ。（ト此内愛染明王碓女を相手に、道行物語模樣よろしくあつて。）

春日　成程是れまで結んだが、お初徳兵衛、三勝半七、皆心中で命を捨つる。

碓女　どうか心中せぬやうな、よい思案がありさうなもの。

愛染　おつとそれには結んだる、今の鬮を解いてしまひ、心中しさうもない者と結び直さば大丈夫。

春日　如何さまそれはよい思案、して綱五郎には誰ならん。

金山　おゝ、それにこそよき者あり。

〽羅生門河岸の小格子で、鬼と呼ばれし以前が女郎、今は產婦の取上げにて、茨木おきんはどでごんす。（ト金山彥振あつて、）

春日　おゝ綱五郎に茨木は、腕を切つたる事あれば、心中する氣遣ひなし。

平内　して信濃屋のお半には、

八幡　其お半には長樂寺。

〽後生菩提も白張りの、傘でお寺を開いても、坊主天窓にかつら川、すつぽりはまる氣遣ひなし。（ト八幡振あつて、）

春日　して又おしゆん傳兵衞は、

碓女　おしゆんも結び直すなら。

〽猿廻しに緣あれば、猿樂師の傳之丞、相〻袴の末掛けて、とつけつこうな鷄聟、必ず外へやるまいぞ。（ト碓女振あつて、）

春日　して〳〵おかる勘平は、

稻荷　勘平の勘の字から、
〽飴屋のかん子にしたならば、天王樣のよい〳〵に、山坂越えて山崎へ、道行するも氣遣ひなし。（ト稻荷振あつて）
平内　さて又瀧川五右衞門は、
愛染　石川といふ名を幸ひ、
稻荷　〽辯は流るゝ瀧川に、今評判もよし町の釜入ならぬ釜金井、流行る講師の石川五口。
ト稻荷、愛染振あつて。
春日　成程これも面白い、して〳〵殘りのおさん茂兵衞は。
金山　それも心中せぬやうに、かん〳〵のうの茂右衞門と、色男を取替へたら、
愛染
八幡　三間ばりの飴よりも、二人の命が延びるであらう。
春日　今まで心附かざりしが、好いた同士を結ぶ時は、果ては互ひの身の詰り、心中をして命を捨つれば、今年からは改めて、好かぬ者と結び合さん。
愛染　さうさへすれば世の中に、けして心中するものなし。
碓女　人の命の殘らぬは、何よりか目出たいこと。

金山　今宵は祝ひに奥殿にて、

八幡　夜の明けるまで打ち寛ぎ、

稲荷　碓女の命の舞を見ながら、

春日　神酒をひらいて、

皆々　神樂を奏さん。

愛染　左樣なれば、

皆々　春日の御神、

春日　何れもござれ。

〽折から奏す夜神樂の、音も涼しく神々は、宮殿深く、

ト三重夜神樂を冠せ、春日大明神先きに皆々奥へ這入る。跡に粂の平内殘り、是れにて太夫座を消す。

平内　流石愛染明王は、緣切榎に程近き板橋に居るだけあつて、折角結んだ二つ名をみんな引き裂いてしまつたが、嘸や是れから淺草へ歸つたならば好いた同士、添はれるやうにしてくれと願を掛けに來るであらうが、おれが自由にもならぬから、いいし(意地)の惡い平内などゝ、必ずおれを恨むまいぞ。どれ、奥殿へ行つて一杯やらうか。然し酒では度々のしくじり、こりや呑まずに早く歸らう。さ

うだ〳〵。

ト大拍子にて平内下手へ這入る、よき程に知せに附き高欄をせり下げ、半御簾を引揚げ、大欄間打返し霞になり、正面の御簾を切つて落す。

（淺草寺境内の場）‖本舞臺正面奥深に淺草寺境内、粂の平内の宮、辨天山の遠見、以前の神鏡替つて迷子のしるべ石になり、日覆より紅葉の釣枝をおろしよろしく道具納る。と鳴物打上げ知せに附き、上下狐格子の張物打返し、上手に淸元連中、下手に常磐津連中居並び、打合せの前彈きあつて。

常〽きのふまで色ある木々の椛葉も、けふは散り行く初冬に、淸〽身にしむ風の村時雨、片身替りの道行は、あぢな出雲の緣結び。

ト合方ばた〳〵になり、花道よりおしゆん藝者のこしらへにて出來り、花道にて向うへ思入あつて。

お俊　跡から追手の掛るのに、傳之丞さんはどうなさんしたか、何ぼ狂言師だとてあんまり氣の長い人でござんす。

常〽おしゆんに遲れ傳之丞、急ぐとすれど摺足に、道はかどらぬ狂言師。

緣　結　び

ト鼓のあしらひになり、花道より傳之丞紋盡しの袴、狂言師の拵へ、摺足にて出來り、

傳之　さても〳〵、わごりよは早い足ではあるぞ。

お俊　わたしの足の早いのでない、お前の足が遲いのだわね。

傳之　いや總じて道行といふものは、手に手を取つて行くものぢや、別れ〳〵に歩いては、道行に出た甲斐がない。

お俊　それだといつて道行には、跡から追手のかゝるもの、急がないと捉るわね。

傳之　なに、跡から追手が掛る、それは一大事ぢや、急がせられい〳〵。

（淸）〽風に追はるゝ白鷺の、泥田を歩む風情にて、（常）〽たどり〳〵て來りける。

ト　おしゆん先きに、傳之丞やはり摺足にて本舞臺へ來り、何か踏んだる思入。

やれ、待つておくりやれ、何やら踏んだやうぢや。

お俊　えゝも、氣を附けてお歩きならいゝに。

傳之　どうやらぐしやりとした鹽梅は、犬糞でなければよいが。

お俊　きたない事を言ひなさんすな。（ト傳之丞狂言の思入にて、そつと草履を取つて匂ひをかぎ）

傳之　やれ嬉しや、泥濘であつた。

お俊 足袋が汚れたら、これで拭きなさんせ。

傳之 心得て候。（トおしゆん鼻紙を遣る、傳之丞足袋を拭ひ居る、）

常〽暫し休らふ向うより、嘘を机はお互ひに、遁れぬ女郎講釋師、淸〽その瀧川か桂川、お半を背に長樂寺。

ト合方双盤になり、花道より五口着流し一本差し、懐へ袱紗包みの本を入れ、尻端折り誂への机を背負ひ講釋師のこしらへ、瀧川部屋着袱紗帯女郎のこしらへ、上草履をはき手を引き合ひて出で來る、是れと一時に東の假花道より長樂寺、坊主鬘頰冠り鼠の着附、丸ぐけ尻端折り、坊主のこしらへ、お半上方風の鬘、振袖いつものこしらへ、長樂寺これを背負ひ出來り、双方よき所へ留り、

常〽廓の意氣地と張扇、つい一晩が二晩と客足しげき格子先き、淸〽もしや追手と見返りの、柳の馬場や押小路、人目忍んで頰冠り、常〽首尾も四ツからしつぽりと、一汗かきし讀み切りに、淸〽早や五月の岩田帶、結びあうたる道行も、常〽落つれば同じ石川に、〽流れ寄つたる四人連、淸〽一つ所に落ち合ひぬ。

ト此内長樂寺お半をおろし、双方よろしく振あつて舞臺へ來り、入替り瀧川五口は上手、お半長樂寺は下手へ來り思入あつて。

五口　これ瀧川、斯うして道行きに出掛けは出掛けたが、心中をしないのだから錢がなくつて詰らぬ、辨天山の席亭で春の手附を借り込んで、それを路用に出掛けよう。

長樂　これお半、道々もいふ通り、上方からつッ走り、此東京まで道行イして來たが、これから檀中へ奉加なう賴み、それヱ元手にあめりか吳絽の帶屋でも初めべい。（トそれを聞き五口思入あつて、）

五口　もし〳〵、そこにおいでなさる和尙さんえ、お前さん方も道行でござりますか。

長樂　坊主天窓に面白うないが、上方から遙々と道行して來ましたのさ、見ればにしらも、どうか道行のやうだね。

五口　お察し通りの道行さ。

長樂　さう聞いてはえいみたけえ。（相見互ひ、）

五口　お心安くお賴み申します。（ト此時傳之丞前へ出て、）

傳之　いや申し〳〵そこなお人、われらも仲間へ入れておくりやれ。

五口　なに、仲間へ入れてくれ。

長樂　そんならにしらも道行かね。

傳之　さうでおりやる〳〵。

五口　何でこんなに道行が流行るか。（ト向うへ思入あつて）あれ〱向うから又來るぜ。

傳之　なか〱、是れも道行に相違ない。

長樂　こりやはあ、賑かになつて來たな。

ト本釣鐘合方ばた〱にて花道より、おかる文金島田、振袖屋敷模様のこしらへにて走り出來り、花道にて躓きどうとなる、跡より飴屋のかん子お芥子の鬘、袖無し半纏の上から三尺帶をしめ、持遊びの御輿を赤き紐で斜に背負ひ、二本杖を大小のやうに腰へさし、ひよこ〱と出て來る、おかる起上り顔見合せ。

勘子　おゝおてふか〱。

お輕　おてふぢやない、おかるでござんす。（トこれにてかん子勘平の思入にて）

勘子　おかるか、

お輕　勘平どの、

勘子　これ。

〽落人も見るかや、野邊に若草の、薄尾花はなけれども、世を忍び路の旅衣、着つゝ馴れにし振袖の、〽おかるにとんちん勘ちやんは、どうした鹽冶の奥勤め、結ぶやの字にふの字

が拔けて、足もしどろにヨイ〳〵ワイ〳〵、〽鳥の塒をたどりける。

ト花道にて勘子飴屋の思入にて、兩人よろしく振あつて舞臺へ來る。

傳之　やあ、そこへ來たは、誰かと見れば、わごりよは飴屋のかん子ではないか。

勘子　あい、勘ちやんだ〳〵。

お俊　とんだ者が來ましたね。

五口　何で爰へ手前は來たのだ。

勘子　何で來るものか、道行だ〳〵。

長樂　誰がにしらと道行のうすべいぞ。

勘子　そんな事を言はないもんだ、勘ちやん是れでも色男だ〳〵。女郎でも藝者でも女房でも娘でも牝犬でも三毛猫でも、勘ちやんに惚れぬものはない。勘ちやん〳〵大明神小便無用大明神、大きな御利生が大明神、勘ちやん御利生は大きなものだ。

五口　これ〳〵勘ちやん、いゝ加減に喋べらねえか、後座がいくらも支へて居る。

お輕　もうよい加減に言はしやんせいな。

勘子　いや〳〵言はずには居られない。勘ちやん御利生は大きなものだ、おかるの御利生も大きなもの

だ。

 トおかるかんこを留めて、

お輕　まだまあそんな事を言はしやんすか、少しは女房のいふ事も、聞いてくれたがよいわいな。

五口　やあ、さては勘ちやんの情人は、あの娘か。

傳之　これは呆れた事でおりやる。（ト長樂寺向うを見て、）

長樂　やあ、又道行のウ來ましたぜ。

ト是れをきつかけに、上手霞幕を切つて落し、竹本連中居並び、直に淨瑠璃になり。

竹〽餘所目には、色と白髮の茨木が、惚れて血道を上汐に。

ト合方双盤にて花道より、綱五郎紺の腹掛股引褞袍三尺帶、本町丸といふ火繩箱を肩へ掛け、出來り、跡より茨木白髮鬘いやらしき取揚げ婆あのこしらへ、綱の紋附きしれんれこ半纏を引つかけ、少し遲れて出で、綱五郎を捉へいやらしき思入。

常〽緣をもやふ綱五郎、腕に二世の彫物も、竹〽昔恥かしわる河岸で、鬼も十八羅生門、ちよと一分の立引も、清〽今なら丁度金札が、よき汐時と連れのきに、竹〽手に手を取りて來りける。

ト兩人花道で振あつて舞臺へ來る、かすめて双盤合方にて。

五口　おやそこへ來なすつたのは、定連の綱さんぢやあござりませぬか。

綱五　や、誰かと思つたら石川先生か、机を背負つて夜講の歸りかい。

五口　何さ、道行に出掛けたのさ。

綱五　道行に出掛けた、そりや誰と。（ト是れにて五口扇なとつて講釋の思入にて、）

五口　其道行の相手といふは、京都七條川原に於て、釜入りの刑に行はれたる所の、盗賊の張本石川五右衞門が、以前の情婦の瀧川さ。（ト瀧川を敎へる、）

綱五　そんなら、あのおいらんと旨くするぜ、然し道行にやあ可笑い裝だな。

五口　これは五右衞門を當込んだのだ。（ト五右衞門の思入にて、）机を背負つたが可笑いか。

綱五　成駒屋々々。（ト茨木くさめをして、）

茨木　はツくしよ、誰かおれの噂をするさうだ。

五口　そりやあさうと、綱さんは立退へでも行きなさるのかい。

綱五　何さ、おれも道行に出掛けたのよ。

五口　そいつは妙な話だ、若し爰に居る手合は、みんな道行さ。

綱五　そんなら、此衆も道行かい。（ト傳之丞長樂寺前へ出て、）

傳之　これは〳〵お初にお目に掛りますが、私事は傳之丞と申して、猿樂の狂言師でおりやる。

長樂　愚僧ことは、放蕩山道樂寺の末寺で、長樂寺の淫樂ちう、是れでもはあ一ヶ寺の和尚さまさ。

綱五　さうして傳之丞さんとやら、お前の相方はえ。（トおしゆん前へ出て、）

お俊　綱さん、わたしさ。

綱五　おやお前は藝者のおしゆんさん、それぢやあ傳兵衞さんと切れたのかい。

お俊　何だか急にいやになつたから、切文を書いて切つてしまひ、此傳之丞さんと情人になつたのさ。

綱五　そりやあとんだ事だね。若し和尚さん、お前の相方はえ。

長樂　愚僧の相方ちうは、是れなるお半ちう娘でござるて。（トお半を見せる。）

綱五　こりやあ素敵な代物だ、若しそちらの姉さん、お前はお屋敷かい。

お輕　はい、私は鹽冶さまのお奥を勤めまする、おかると申す者でござりますわいな。

綱五　お〻落人の淨瑠璃で、名は聞いて居るおかるさん、さうしてお前の色男は。

お輕　さあ、私の色男は、勘ちやんでござりますわいな。（ト恥かしき思入。）

綱五　何、お前の情人は勘ちやんだい。（トびつくりする、勘子前へ出て、）

勘子　おてふの替りにおかるが惚れて、毎晩裸でヨイ〳〵ワイ〳〵、神輿を持上げてヨイ〳〵ワイ〳〵勘ちやんは色男だ〳〵。(ト神輿をかつぐ思入よろしく)

綱五　いや、どれも〳〵玉揃ひ、其内でも先生お前のが氣が惡いぜ。

五ロ　所がきやつに疵があります。

綱五　はゝあ油でも甜めるかい。

五ロ　音羽屋の猫ぢやァあるまいし、そんな事ぢやあないが、根が越後玉だから詞がわりい。

綱五　道理でさつきから默つて居ると思つた。もし瀧川さん、お前越後かい。

瀧川　さうだのんし。

綱五　越後はどこだい。

瀧川　越後の國は蒲原郡柏崎在のあかざ村、ほんにやれ大地な村で、寺が三ケ寺床屋が一軒、其さあ庄屋の西隣で、太郎兵衛後家の娘だのんし。

綱五　それぢやあ大工殺しのあつた所だね。

瀧川　さうだのんし。

綱五　若しおしゆんさんの色男、お前はどこだい。

傳之　私事は大和の國奈良の都、薪能の役者でおりやる。
綱五　和尚さん、お前はえ。
長樂　愚僧これでも東京さ。
五口　ちと東京は受取りにくい。
綱五　當時東京に居なさるだらうが、産れはどこだい。
長樂　産れは奥州仙臺、岩沼ちう所さ。
五口　それぢやあ徳平の膏藥とづう國だな。
綱五　おかるさんは山崎だが、勘ちやん手前はどこで産れた。
勘子　どこだかおらあ知らないが、天王樣のある所だ、ヨイ〳〵ワイ〳〵おてふや持上げろ、ヨイ〳〵ワイ〳〵。（ト神輿を擔ぎぐる〳〵廻りばつたり轉ぶ、おかる抱起し）
お輕　えゝ、ぢつとして居なさればいゝに。（ト勘子其まゝおかるに抱きつき）
勘子　えゝ氣がわるくなつた、一寸口を甜めさせてくれろ。
お輕　人樣の見る前で、そんな事がなるものかいな。
五口　それでは影では甜めるのか。

勘子　何と勘ちやんは色男だらうが。
長樂　ほんにこりやあ氣が悪いこんだ。
綱五　若しお半はん、お前はどこだい。(トお半前へ出て京談にて、)
お半　わたいかいな、わたいは京都は三條通り柳の馬場を西へ上り、押小路を北へ下り、朱雀町の南側で角から曲つて三軒目、信濃屋の娘お半といひます。
綱五　おゝそれぢやあ伊勢へ行つた時、石部で逢つた娘ッ子だ、慥かお前は十四だね。
お半　さいなあ、形が小さいさかい、十四といつて居るけれど、ほんまの年は十六ぢやわいな。
五口　時に綱さん、お前も道行だと言ひなさるが、その道行の相手はえ。
綱五　さあ其相手は。(ト綱五郎天窓をかく、)
勘子　勘ちやんよりお前の方が、少しばかり男がいゝから、
傳之　定めて一段と美しい女子であろ。
長樂　早うお顔が見たいもんだなう。(ト此時茨木いやらしきこなしにて眞中へ割つて出で、)
茨木　其相方はわたしぢやわいな。
皆々　やあ。(ト茨木を見てびつくりなし、)

お俊　おやく、そんなら綱さんの色といふのは、此お婆さんかい。
お輕　彦三に似たよい男で、思ひ掛けない事でござんす。
お半　こりや大方情人ぢやあるまい、母御さんであろぞいな。
瀧川　こんな婆あさんと道行いするとは、ほんに魂消た事だのんし。
綱五　所が縁は異なもので、此婆さんを喰つたのだ。
勘子　やあ婆あくつた爺さんだノ〳〵。（ト手を叩いて囃す。）
五口　勘ちやんに囃されても仕方がない。
綱五　おらあいやだよ、今まで道行をする氣だつたが、勘ちやんでせえ美くしい、あんな情婦があるものを。
勘子　何うしておれに勝たれるものか、勘ちやんは色男だ〳〵。
綱五　あゝ誰ぞとおらあ、とつけえてえものだ。
　　〽竹折から來かゝるとつけえべ。
　　トかん〳〵のうの鳴物になり、花道より茂右衛門誂への頭巾、つゝつぽ裝異人めいたるこしらへ、かん〳〵のうと記せし飴の箱を肩へ掛け、三角の摺鉦を叩き、おさん世話女房のこしらへ、羽子板の八

方目鏡を持ち出來り。

〽これは臺所唐人がおさんを連れて茂右衞門と、おけゝら毛深い髭を剃り、かん〳〵のうのとつけえべ、〽ぱあ〳〵煙管の雁首や、火箸や藥罐の二人連れ、〽浮れ興じてやつこらかんのかん。（ト兩人振あつて舞臺へ來ろ、）

おい〳〵待つて居た〳〵。（ト茂右衞門思入あつて、）

茂右　これはお早う、お天氣。
綱五　時にお前は何でもとつけえるかい。
茂右　はあ取替るものならば、五德の折でも鐵灸の折でも、金氣なら何でも取替へます。
綱五　さうして其目鏡を持つて居なさるのは、お前のお上さんかい。
お三　わたしや大經師のおさんといつて、茂兵衞といふ情人があつたが、急に其男が嫌になつて、此飴屋さんと取り替ましたのさ。
綱五　それぢやあ此婆さんを遣るから、其お上さんと取つ替えてくんねえな。
茂兵　え、（トびつくりなし、）あんた途方もない事言ひなさる、金氣ならよろしいけれど婆さんは眞平だ。
綱五　天窓が藥罐だから、いゝぢやあねえか。

茂右　こないな藥罐は潰しにもなりやせぬ、ぺけ〳〵。（ト手をふる、）
茨木　何だぺけ〳〵とは誰がこつた、今でこそ婆あだが四五十年先きは新造だ、ほんの事だが雜生門河岸で茨木といつちやあ威張つた女郎だ。片腕に思つた客をなくし、それから取揚げ婆あになつたが、若い男と色をするからは、天窓は藥罐でも色氣はたつぷりだ、新造ッ子より旨い所があればこそ、綱さんが惚れ切つて居らあ。なに、ぺけ〳〵な事があるものだ、此毛唐人野郎め。
　　ト茨木立ち掛るを五口留めて。
五口　こりやあおつかあ、お前が尤だ、何ぺけ〳〵所か天窓はぴか〳〵光つて居らあ、實に綱さんが惚れて居るからは旨い所があるに違ひない。
茨木　あるのないのと、宵から此長夜を寐かしはしねえ、お前にも一晩振舞はうか。
五口　いや、其御馳走は食べたも同然。
茨木　遠慮しなさんな、跡の減るものでねえから。
五口　誰が遠慮をするものだ。（ト此内女形綱五郎を弄る、綱五郎悔しがつて前へ出で、）
綱五　これ〳〵先生、無駄話はいゝ加減にして、互ひに情人になつた話しを今夜夜通し話さうぢやねえか。

五ロ　そりやあいゝ思ひ附きだ、丁度觀音さまの御十夜なり。
傳之　あんの山から月もあがり、
長樂　明りえらずの辨天山、
勘子　ヽヽヽこはだに大根は旨かつた、
茂右　旨い中なるあんた方は、
お半　京もあれば田舍もあり、
お輕　思ひ〳〵の國所、
お三　互ひに言うたり聞いたりして、
お俊　三十石の噺のやうに、
瀧川　所替れば品替るだのんし。
綱五　先づ口明けに石川先生、お前の初めからやんなせえ。
五ロ　わたしが前座といふ所だが、爰は一番愛嬌ものゝ、勘ちやんから遣るがいゝ。
勘子　おゝおてふの話が聞かせたい。
綱五　さあ〳〵早く遣つたり〳〵。

勘子　此勘ちやんの色事は、

常〽しかも去年の夏の事、暑さに寐られず紙帳から、もぐじり出れば勘ちやんに、惚れたおてふが忍び來て、清〽勘ちやんお前はよい男、抱れて寢たいと帶を解く、裸でおてふが抱き附いて、竹〽勘ちやんべろが甞めたいと、さかりの附いた犬同様、舌をば出して追ひかける、騷ぎに行燈おつしこかし。

ト此内勘子可笑味の振あつて帶を解き、筒つぽ襦袢股引装にて、茂右衞門を引張り出し、兩人犬の思入のわる身の振あつて時の鐘になり。

常〽眞闇がりを手探りに、おいどふり〳〵鼻ぴこ〳〵、竹〽おてふが匂ひを嗅ぎ當てゝ、おてふや持ち上げろ天王様だ、ヨイ〳〵ワイ〳〵、おてふや〳〵ヨイ〳〵ワイ〳〵。

ト勘子闇黑の振あつて、神輿によそへし振あつて、

おてふや〳〵ヨイ〳〵ワイ〳〵。

竹〽おかるが手を取り抱き附けば、常〽ほんにお前は惡性な、勘平さんを牛に馬、乘りかへたのに今にまあおてふさんの事ばかり、最う堪忍がと牛の角、竹〽ふり廻されて勘ちやんが、胸にと叩く腹太鼓。（ト勘子おかるよろしく振あつて）

こんなに大勢男があつても、勘ちやんに叶ふものは一人もない、御見物の皆さまが此勘ちやんにほの字と見えて、にこ〳〵笑つておいでなさる、あゝ勘ちやんが肯めて上げたいものだ。

ト言ひながらお三に抱き附き頰をなめる。

お三　えゝ氣味の悪い勘ちやんだ、お前に肯められると禿げるわいな。

ト勘子を突く、よろ〳〵とするをおかる留めて。

お軽　餘所の人を肯めずとも、わたしを肯めて下さんせいな。

勘子　どれ〳〵肯めてやらうか。（ト勘子おかるを肯める思入）

竹〽飴屋の勘子に見せ附けられ。（ト綱五郎腹の立つ思入にて）

綱五　こうおしゆんさん、ちよと來ねえ。

お俊　綱さん何でござんす。

綱五　おらあ勘ちやんに見せつけられて、友達の前へ顔が出せねえ、お前どうかしてくれねえか。

お俊　わたしもどうかしたいのだが、そりや本當でござんすか。

綱五　嘘にこんな事が言はれるものか。

お俊　それでもわたしのやうな、ぴい〳〵たもれとあんまり不釣合だものを。

綱五　實は疾うから惚れて居たのだ。（ト新内模樣になり）
〽今更いふも愚癡ながら、いつぞや上手の歸り船、お客をあげて差向ひ、あのゝもののゝと夕暮に、色に鳴海の天窓かけ、〽解けかゝりしも其儘に、結ばぬ緣の橋越えて、本意ない別れの物思ひ、わたしも焦れて居るわいな。
ト綱五郞でかゝり、解けかゝりしよりおしゅんの振になり、兩人よろしく口說模樣の振あつて、傳之丞兩人を引分け、
傳之　これは如何な事、亭主の前で色狂ひ。
〽そもや二人が其中は、二世も三世も末廣がり、さす傘のかみ掛けて、〽骨になるまで替らじと、誓ひし詞は僞りか、〽言語道斷腹立や、おのれは人にやるまいぞ。
ト傳之丞狂言模樣間の拔けし振にておしゅんを追掛ける、瀧川留めて、
瀧川　これさ、そんなに腹を立てなさんな、不足でもあらうけれど、おらが情人にならうから、料簡したがえいぢやないかのんし。
傳之　いや、こなたが情婦になるならば、何の腹を立ちませうぞ。
瀧川　そりやはお嬉しい事だのんし。

傳之　然し一定眞實でおりやるかな。

瀧川　お前ゆゑなら死ぬ氣だのんし。（ト瀧川裾を端折り、手拭をすつとこ冠りにかぶり）

〽越後新潟は戀路の湊、船で焦れてサ、通ひ來る、色の一の町毘沙門島の、そのや神かけ眞實心に、二度の勤めもにいしゆゑならば、何の厭はう、厭やせぬ。

こりやノ〵、どうだのんし。（ト瀧川よろしく振あつて、是れより傳之丞と二人になりて、）

〽それは何より嬉しう候、さらば是れから海山越えて、行けば行きましよ、サ、越路潟。

ト兩人振あつて。

五口　よう〳〵おらがの、旨いぞ。

長樂　これ〳〵先生、あんまり褒められた事でもあるまい、瀧川どのと狂言師と、色事のうして居るのだ。

五口　なに、狂言師と色をして居る、そいつは捨ては置かれない、どうするか見やあがれ。

ト五口立ち掛るをお半留めて。

お半　あこれ、短氣な事しいな、お前にはわたいが惚れるさかい、あの女郎さんを思ひ切りいな。

五口　そりや本當なら思ひ切るが、お前坊主を捨てる氣か。

お半　捨いでかいな、こちや坊主はきつい嫌ひぢやがな。

五口　いよ／＼さういふ心なら、お前を連れて旅稼ぎ。

常〽扇一本本一册、口が元手の講釋師、ヤツトウ／＼／＼修羅場の間へ、有齋もどきに高座の一曲、膝を立てずに扇の所作事、清〽鐘に恨みは數々ござる、初夜の鐘を撞く時は諸行無常と響くなり、後夜の鐘を撞く時は、竹〽四つが限りの席のはね。

ト五口膝を立てず、道成寺模樣の振あつて、お半へ寄添ふ。

長樂　これ、えい加減におかんかいの、默つてゐればいゝかと思つて、人を踏附けにした仕方。

竹〽言はず語らぬ我が心、亂れし髮の亂るゝも、無情はたゞ移り氣な。（ト長樂寺振あつて、）西京から東京まで、長の道中さおぶさつて來て、嫌ひの何のちう事が、よう言はれたこつちや。

お年　こちの口でこちが言ふのぢや、何と言はうと打捨つて置きいな。（とお半長樂寺の天窓を打つ、）

長樂　あいたゝゝゝ、こりやおれがどたま打つたな、さあもつと打て。（ト天窓を突出す、）

お半　おゝ、打たいでかいな。

常〽煩惱菩提の撞木町より、難波よすぢに通ひ木辻に、禿だちから室の早咲き、それがほんの色ぢや、一イ二三四。（トお半長樂寺の天窓を鞠にして振あつて、おかる出で、）

お輕　お半さん、助けてあげようかいな。

〽夜つゆ雪の日、しもの關路も、共に此身と馴染重ねて、中は丸山たゞ丸なれど、思ひ初めたが縁ぢやえ。（ト お半お輕兩人して、長樂寺の天窓を叩き身振あつて、）

長樂　えい悔しいわい〳〵、誰ぞ情人になつてくれ人はないか、坊主一人助けると猫千疋に向ふがな。（ト 長樂寺に寄添ふ、）

お輕　お前の天窓を叩いた替り、わたしが情人にならうわいな。

長樂　是れは誠に地獄で佛だ、有難い〳〵。（ト お輕に抱附く、）

勘子　やあ、こりや勘ちやんの情婦を取られた〳〵、わあ〳〵。

ト 勘子足摺りをして子供のやうに泣く、おさん背中を擦り。

お三　これ〳〵、勘ちやん泣きなさんな〳〵、さつき嘗められたのが縁の端、わたしが情婦にならうわいな。（ト おさん涙を拭いてやり涕汁をかんでやる、勘子嬉しき思入にて、）

勘子　それぢやあお前が、勘ちやんの情人になつてくれるのか。

お三　さあ、浮氣心はなかつたが。

〽戀の手習つい見習ひて、誰に見しよとて紅鐵漿附きよぞ、みんなぬしへの心中立て、おゝ嬉し〳〵、末は斯うぢやにな。

トおさん勘子を捉へ振あつてトヾ抱附く、勘子おさんを嘗める思入、茂右衛門見て。

茂右　とつけえべいが爰に居るに、さうみんながとつけえべいにするなら、おれも誰ぞといつた所が、殘つたのは婆さん一人、話の種に食つて見ようか。

常〽かん〳〵のうは急腹に、悋氣の角の蛇三味線、じやんがらじやがたらぱあ〳〵、あんなあ安珍どうぜうじ、竹〽どゞんが太鼓の撥押へ、そろ〳〵婆さまへそひかけて、曲りし腰へ抱附けば、婆あは手荒く突倒し。（ト茂右衛門振あつて茨木へ抱附くを茨木突倒し。）

茨木　えゝ何をしやあがる毛唐人め、おれを洋妾だと思やあがるか、綱五郎といふ歴然とした情人のあるお婆あさんだぞ、うぬらと一緒に寐る位なら、四つ辻へ行つて犬と寐らあ。

茂右　是れ〳〵其色男はさつきから、あすこで藝者と癡話つて居るが、お前の目には見えないか。

茨木　口は達者だが目は悪い、ぼんやりして見えねえが、そいつは打捨つて置けねえわい。

竹〽狂言師の胸倉取り、（ト綱五郎と思ひ傳之丞の胸倉を取り。）

えゝ、聞えぬわいな綱五郎さん。

清〽そもや二人が馴初めは、昨日や今日の事かいな。

傳之　これは如何な事、我らは狂言師でおりやる。

茨木　おゝ傳之丞さんか。（ト傳之丞を突放し、）さうして綱五郎は、どこに居ます。
五口　綱五郎さんなら、それ爰に。
〽飴屋の勘ちやん突出せば、婆あはひしと縋り附き。
ト五口勘子を突出す、茨木綱五郎と心得取附いて。
茨木　これ、忘れてか此間
〽雨の降る夜にしんみりと、濡れたる傘のさし合も、泣きつ笑ひつ睦言に、〽骨になるまで替らじと、言うたは噓か僞りか。（ト茨木振あつて勘子を捉へ振廻す、）
勘子　勘ちやんは色男だ、婆さんにまで惚れられる。
茨木　さういふ聲は勘ちやんか。
茂右　婆さんおれが嘗めてやらうか。（ト嘗めに掛かるを突倒し、）
茨木　手前に嘗められてなるものか。（ト五口を捉へ、）今度は違はぬ綱五郎、
〽天窓を探つてびつくりなし。（ト長樂寺の天窓を撫でゝ、）
やあ、こりやまあ、何で此樣な坊主にはなつたのぢや。
〽こりやわたしへの言譯に、〽姿を替しか情ない、いとし可愛情人をば、坊主になして嬉

しかろ、〽早まつた事してくれたと、撫でつ擦りつ思はずも、悔し涙に喰ひ附けば、和尚はびつくり飛びのいて、（ト茨木よろしくあつてトヾ長樂寺の天窓へ喰附く、長樂寺飛びのき、）

長樂　あいたゝゝゝゝ、其恨みは尤だが、綱どんぢやあない長樂寺ぢや〳〵。

茨木　えゝ又間違つたか、忌々しい。

五口　それ、今度は綱さんだ。（トいやがる綱五郎を突きやる、茨木拂ひ除け、）

茨木　又おれを騙さうと思つて、目の惡いを附込んで、みんなして込めやあがる、えゝ誰ぞ逢はしてくれぬかいなあ。

〽かつぱと伏して泣きければ、女子は相身互ひとて。（ト女形五人立ち掛り、）

お三　これ〳〵お婆あさん、それ程綱さんに逢ひ渡くば、

お俊　わたしらが逢はして上げるから、

お輕　此東京で今流行る、唄をうたつて聞かせなさんせ。

茨木　そりやもう逢はしてさへくれるなら、何なりと唄ふわいな。

お半　そんなら何ぞ面白い唄うたうて、

瀧川　序に振が見たいのんし。

茨木　お三輪なら馬子唄といふ所だが、爰に迷兒の道知べ、これで一番やつてくりよ。
〽おらが長屋に迷兒が出來て、そこで一裏亂癡氣騒ぎ、〽月の行事が牛島登山、皆の代りに一人で出掛け、〽戀に焦れた男に逢ひたくば、南無觀音さんを皆出て拜めや、御利生はえらいぞ、なんな南無、いやこれおいて、〽南無阿彌陀。（ト茨木振あつて是より綱五郎出で、）
〽鉦と太鼓に三味線鼓、迷兒呼ぶのも八人前で、〽どこどんちや／＼ちやんつくたゝほ、て、んつ亭主が先きに立ち、迷兒々々の三太郎やあい、〽續いて隱居が皺枯れ聲で、迷兒々々の三太郎やい、〽何うした權助呼ばぬかやい、〽三太郎來い／＼、〽迷兒の／＼、〽三太郎やい。
ト綱五郎仕分の振よろしくあつて、是れより立役皆々出で。
〽隅田川さへ棹さしや屆く、なぜに屆かぬ婆思ひ、やれこりや、どつこい／＼よんやな、ずなこい／＼、〽段々是れから遠音になるぞ。
ト合方にて皆々振、此中へ勘子還入り、間拔けに皆々の邪魔をする振あつて、三味線遠音になり。
〽そろ／＼此方へ歸つて來るなら、早めて遣つたり。
ト是れより早き合方になり、皆々振あつて。

常〽廻つて遣らしやれ〳〵。（ト皆々疲れし思入）
竹〽折しも俄に動搖なし、粂の平内顯れ出で。
トどろ〳〵になり、皆々放心する、後へ以前の粂の平内出で。
平内 出雲で結びし緣結びを、洒落に結び直したら、心が替つて今の騷ぎ、心中でもされぬ內、元の通りに結んで置かう。（トどろ〳〵にて平內結ぶ思入あつて）
竹〽結び直して平內は、社の內へ。
トどろ〳〵三重にて平內後へ這入る。皆々心附き、どろ〳〵の打上げと一緒に、元の通り綱五郎に茨木、勘子におかる、殘らず二人づゝ一緒になり。
綱五 や、こりや何時の間にやら元々の、
茨木 綱五郎さんに、
綱五 茨木婆。
瀧川 石川さんに、
五口 傾城瀧川。
長樂 信濃屋お半に、

お牛　長樂寺。
傳之　藝者のおしゆんに、
お俊　傳之丞さん。
お三　茂右衛門さんに。
茂右　おさんどの。
勘子　おれを持上げるおかるちやんに。
お輕　飴屋の勘ちやん。
綱五　やつぱり元へ戻りしは、
茨木　出雲で結んだ緣定め、
勘子　かんちやん爰で、
皆々　一踊り、

（淸）〽與作小萬は將棊の駒よ、さいつさゝれつ杯事も、二人逢瀨の嬉しさよ、〽ちよゝげまちよげしてこめ〳〵、（常）〽晚に忍ばゝ瀨戸からござれ、裏の椋の木の灰小屋の小蔭で、〽ちよゝげまちよげ、してこめ〳〵、よんやな。

ト双盤入りにて皆々手拭を遣ひ、十夜踊りの心にてよろしく振あつて。

常〽流石に長き冬の夜も、清〽はや明け近き鶏の音に、常〽比翼の契り道行の、清〽死なぬ心ぞ日出度けれ。（ト二人づゝ引張りの見得、頭取出て、）

頭取 先づ今日は是れぎり。

ト日出度く打出し

縁結び（終り）

破魔弓に
塙槌
梯子を
買揃へ

歳市廓討入

解説

「歳市廓討入」は文久三年十一月、作者四十八歳の時、市村座に書卸された。其時の役割は市川小團次（神道者高間鈴成）、尾上菊次郎（こぶ市娘お高）、市川團藏（大工の棟梁由右衛門）、市村家橘（由右衛門子分與吉）、市川九藏（由右衛門子分與七）、澤村訥升（由右衛門子分十太）、中村歌女之丞（歌仙茶屋の娘おうた）、片岡十藏（按摩こぶ市）等であつた。振附は花柳壽輔。富本連中としては富本豐前太夫、同豐珠齋、同宮登太夫、名見崎德次、同八五郎、同長佐等が名を列ねてゐた。

假名手本忠臣藏の大切として新作されたものであつた。從つて全體の趣向もたゞその爲だけのもので、それに淺草の歳の市のことを入れたに過ぎない。大工由右衛門が大星由良之助で、高間鈴成にもろ〳〵と言はせて、高野師直を利かせたものであつた。たゞ此の趣向を、再びそのまゝに生かして三題噺の連中が、默阿彌の宅へ夜討の趣向で押掛けたことに關して著明である。その詳しい事は默阿彌傳に讓る。

歳市廓討入

淺草廣小路の場
富本連中

〔役名――棟梁由右衞門、神道者高間鈴成、由右衞門弟子十太、同與吉、按摩、夜蕎麥賣り、讀賣り。夜鷹のお高、武藏屋のお歌、由右衞門悴等。〕

本舞臺駒形堂より向河岸を見たる雪降遠見の道具幕、波の音通り神樂にて道具納る。と上手より○△股引尻端折り草鞋にて、羽子板入と記せし小さな長持を擔ぎ出來る、是れと一緒に下手より、蕎麥屋股引尻端折り草鞋夜蕎麥賣りにて、天川屋といふ行燈を點けし荷を擔ぎ呼びながら出來る。

○ おい〳〵蕎麥屋さん、熱くして一杯くんねえ。

蕎麥 はい〳〵畏りました。

ト是れにて下手へ長持を下し、是れへ腰を掛けて居る。夜蕎麥賣り上手へ荷をおろし、蕎麥をこしらへ居る。

△ 雪が降つたとはいひながら、滅法寒いぢやあねえか。

○ 蕎麥でも食はにやあ堪えられねえ。
△ 然し昨日まで降つた雪が、からりと上つて仕合せだ。
蕎麥 これも觀音さまの御利益でござりまする。
ト盆の上へ丼、箸を載せ出す、兩人捨ぜりふにて蕎麥を食ふ思入。此内上手より讀賣吉原冠り股引尻端折り下駄がけにて、敵討の次第書を持ち、呼びながら出來り。
讀賣 これは此度古今珍らしき敵討、所は鎌倉花水橋、高野師直が屋敷へ鹽冶の義士四十七人、裏表より討入り、主人の敵を討ちたる次第、畫圖面と平假名にて、知行高より姓名まで事明細に書記し上下にて僅か十六文。
○ おい／＼、二枚買ふが八文にしねえか。
讀賣 いえ、何枚お買ひなすつても、八文には負かりませぬ。
△ そんな事を言はねえで、八文に負けねえ。敵討の次第は上下八文に極つたものだ。
讀賣 そりやいつもの敵討でござります、瓦版とは違ひます、今日版行が改つて知行高から姓名まで委しく記してござりますから、十六文ぢやあお安うござります。
○ それぢやあ紙のいゝのをくんねえ。

讀賣　はい〳〵厚いのを上げます。（ト疊んだのを渡し、）ときに、市の景氣はどうでございます。

△今年はどうかと思つたら、滅法界な景氣さ、昨日一荷持つて來たが賣切つてしまつたから、跡荷を擔いで來たのさ。

○何でも昨日まで降つた雪が、いゝ天氣になつたものだから。夥しく人が出た。

蕎麥　觀音さまの市ばかりは、遂に外れた事がねえ、今に桶類などは賣切るだらう、よく賣れるといやあ其敵討の次第も、よく賣れませうね。

讀賣　いや賣れるの賣れないのと、實に摺が間に合はない。わつち等が仲間などにやあ、こんな事が時折なくつちやあ、長い錢は取れませぬ、義士のお陰で餅が搗けやすのさ。

△こいつア今に講釋師の、いゝ讀物が出來るぜ。

○來年あたりやお芝居でするだらう。

蕎麥　いゝ事はしたいものだ、末世末代名が殘りますね。

讀賣　まあ讀んで御覽じろ、すばらしい働きだ。

△家老の由良之助と息子の力彌は知つて居るが、跡はどんな人だか讀んで見てくれ。

○所が明盲でちつとも讀めねえ。蕎麥屋さん讀んでくんねえ。（ト出す。）

蕎麥　わつちも讀めりやあようござりますが。（ト取つて開き見る、）

○△　東西々々。

蕎麥　淨瑠璃名題、「破魔弓に塙梯梯子を買揃へ、年市廓討入、」はてな塙梯梯子で討入としてあるから敵討の次第か知らねえが、こりやあちつと違つたやうだぜ。

讀賣　わつちもまだ讀んで見ねえが、ちよつとお見せなせえ。（ト取つて開き、）「淨瑠璃太夫富本豐前太夫――（ト連名を讀み、）こりやあ違つた〳〵。

○　待ちねえ、跡に大勢名が書いてあるぜ。

△　大方それが義士だらう。

蕎麥　どれ〳〵。（ト又取つて開き見て、）相勤めまする役人――（ト役人を讀んで、）こりやあ芝居の淨瑠璃觸だ。

○△　大方こんな事だらうと思つた。

讀賣　いや飛んだ粗相をしました、さあ取替へてあげます。（ト次第書を取替へる、）

○　又間違つて居やあしねえか。

讀賣　今度は大丈夫、讀んで御覽じろ。

蕎麥　なに、もう讀むには及ぶまい、早く引込みせえすりやあいゝのだ。
△　何にしろ奥山へ行つて、一杯やらうぢやあねえか。
○　其事々々、寒くつて堪えられねえ。
蕎麥　どれ、わつちも一緒に行きませう。（ト荷を擔ぎ上げ、）それぢやあしつかり儲けなせえ。
ト通り神樂、波の音にて三人下手へ這入る。讀賣り殘り思入あつて。
讀賣　えゝこれ、纔切れのあるのを押附けて遣つたら、錢を置かずに行きやあがつた、とんだ意趣返しを喰ふものだ。敵討の次第を御覽じろ。
ト右の鳴物にて、讀賣呼びながら下手へ這入る。知らせに附き、道具幕切つて落す。

（淺草廣小路の場）＝本舞臺大盡柱より雷門を半分見せ、此下「しん橋」の提灯、出這入り、眞中二十間の茶見世武藏屋といふ掛行燈、桐紋附きし軒提灯、向う長提灯、板羽目暖簾口、下手に茶道具よろしく飾り、幅廣の床几を並べ、下の方飾り小屋と見たる淨瑠璃臺。爰に富本連中居並び、總て雪降淺草廣小路の體、道具納る。と前彈きなしに、直に淨瑠璃になる。

〽注連か飾りか橙か〱、〽賣る呼聲も勇ましき、三升の紋の組入に、重ね扇屋小松屋は、

緣起の面のお福茶屋、にた羽子板の似顔畫も、若手揃ひに吉原へ、討入急ぐ勢揃ひ。

ト太神宮の暮れ六つの時の太鼓へ双盤を冠せし鳴物にて、花道より由右衛門誂への革羽織ばつち尻端折り下駄がけにて、持遊の太鼓を手拭で結へ、これを肩へ掛け、同伜若衆鬘同じく革羽織ばつち尻端折り下駄がけにて破魔弓をかつぎ、續いて弟子一、二、誂への紺半纏腹掛股引草鞋にて大きな米揚笊へ注連繩、草もの、緣起お福の面、持遊びの槍、長刀、兜、頭巾、梯子消札好みの物を入れこれを擔ぎ、跡より弟子の三、鉢卷誂への紺半纏腹掛股引草鞋にて、塲槌をかつぎ出來り、花道へ留り、

〽塵は持たねど、棟梁といはねどしろき雪の暮、聲を塲槌に打連れて、いろは長屋に程近き雷門へ來りける。（トこれにて皆々本舞臺へ來る。）

〽それと見るより武藏屋の、お歌は門へ飛んで出で、

ト暖簾口よりお歌前垂がけ、茶屋女のこしらへにて出來り、

お歌　これは神田の親方、ようお早くおいでなさいました。

由右　いつもながら美しいが、今日は又別段だな。

お歌　今日は市でござりますから、とつときの顏でござりますよ。（ト伜に向ひ、）利キさんしつかりお買

ひ出しでござりますね。

悴　近所の子供に遣らうと思つて、中見世で買つて來たのだ。

ト此内お歌盆へ茶碗を載せ茶を汲んで、

お歌　どなたもお茶をお上りなさいまし。（ト出す、是れにて由右衞門と悴床几へ掛ける、お歌塥槌を見て）

彌あちやん、そりやあ何とかいひます物だね。

弟三　こりやあ塥槌よ。

お歌　木槌の親分でござりますね。

弟三　親分は有難えな。

弟一　それぢやあおいら達は、どんな木槌だな。

弟二　手前なざあ、遣ひやうが惡いから、木槌の中でもへこんだ。（ト弟子二は弟子一の額を撫でる）

弟一　えゝ面の讒訴はよしてくれ、是れでも今夜やつを迷はせるのだ。

弟三　おゝ、あの女は迷ふだらう、幽靈を見たやうな面だから。

弟二　幽靈ならいゝが、お化の方だ。

弟三　違えねえ。

お歌　それぢやあ今夜は、北廓でございますね

由右　年々家例で廓へ行くが、今年は利キを連れて來たから、是れから田川屋で一杯遣り、引けを合圖に討入る積りだ。

お歌　お樂しみでございますね。

由右　そりやあさうと、お前の所へ高間鈴成といふ神道者は來なんだか。

お歌　いえ、そんなお方はおいでなさいません。

由右　はてお前の所へ來て待つて居る筈だが、又どこでか呑んで居ると見える。

悴　おとつさん、何ぞ用かい。

由右　いや、別に用といふでもねえが、此間おれが親方が、棟上の故實を聞きに行つた時、酒の振舞やうが惡いとかいつて、吹つ掛けた上で、自腹を切らせた其意趣返しに、今日はおもいれ呑ませて敵を討つ氣だ。

弟三　てつきり是りやあ感附いて、逃げたかも知れませんぜ。

弟一
弟二　わつち等が行つて搜して來ませうか。

由右　なに、行くにやあ及ばねえ、十太と與吉が行つたから、今に搜して連れて來よう。

お歌　おや十太さんもお出でかい、嬉しいね。
弟三　お歌さん、勘定をして惚けねえ。
お歌　あい、十太さんなら仕ますよ。
弟三　おや〱手酷い言ひ方だ、いよ〱こりやあ勘定筋だ。
由右　何にしろ早く鈴成に逢ひたいものだ。
お歌　若し、其鈴成さんといふお人は、目にもろ〱の何とやら耳にもろ〱の何とやら、よくもろ〱
　と言ふお人でありませうね。
弟三　さうよ、其もろ〱先生よ。（ト弟子二向うを見て、）
弟二　もし噂をすりやあ影とやら、向うから引張つて來るのは、もろ〱でござりますぜ。
弟一　違えねえ、ありやあもろ〱だ。
由右　おのれもろ〱、覺えて居ろ。（ト向うへ思入、）
鈴成　いやだ〱、行く事はいやだ。
十太 與吉　えゝ、やかましい歩びなせえ。
　ト三絃入り大拍子になり、花道より高間鈴成、きめ頭巾白の道服着流し下駄がけ、神道者のこしらへ、

手に鈴を持ち生酔の思入、十太與吉誂への紺半纏腹掛股引草鞋のこしらへ、與吉は川升の弓張提灯、十太は山屋の番傘を持ち、鈴成を引張り出來り、花道にて。

鈴成　これさ〳〵、目にもろ〳〵の肴を見るとも、心にもろ〳〵の酒は呑まねえ、堪忍してくれ〳〵。

與吉　いや〳〵堪忍ならねえ〳〵、さつきからそこら中、お前の行方を捜して居たのだ。

十太　目に掛つたら逃しやあしねえ、棟梁の所へ歩びなせえ〳〵。

鈴成　今朝から呑み續けで、好きな酒だが眞平だ。

兩人　そんなに呑まずともの事を。

鈴成　えゝ野暮な事を言ひなさんな。（ト十太與吉を振拂ひ、鈴成鈴を振り思入あつて、）

〽それ亭主清淨内儀清淨、ぞつこん猩々呑み仲間、いつも高間がはら一杯、よい中臣に鈴よりも、振るはちろりか燗徳利、猪口を清めし杯洗の、水も色附くおつもりに、拂ひたまへ酒屋から、幣束ならで催促に、明日は頭痛の二日醉と、くだらぬ事を夕まぐれ、よろ〳〵もので引かれ來る。

ト此内鈴成十太與吉を相手に生酔の振よろしくあつて倒れるを、兩人引起し手を取つて舞臺へ來り、
鈴成下手へ倒れる。

與吉　もし棟梁、もろ〳〵先生を引張つて來ました。
由右　おゝ御苦勞々々、どこに隱れて居た。
與吉　隅屋の奧に隱れて居ました。
由右　なに、隅屋に隱れて居た、よく知れたな。
十太　入口に履物があつたから、一本槍に突當てやした。
弟三　そいつはいの字お手柄だつた。
與吉　こう〳〵、くの字や、いの字ぢやあねえ、おれが見附けたのだ。
悴　それぢやあうの字が先きか。
十太　なに、おれが先きだ。
由右　これさ、靜かにしねえか、跡も先きも入りやあしねえ。
お歌　若しお前さん方は、いの字だのくの字だのと、どういふ譯でございますい。
與吉　こりやあ片名を呼ぶのが流行るので、訥升に似て居るからいの字、九藏に似て居るからくの字よ。
お歌　それでお前が羽左衛門に似て居るので、うの字でございますね。
弟三　こりやあおいら達ばかりぢやあねえ、親方の弟子は四十人からあるが、みんな片名で呼ぶのよ。

第一　まだ〳〵そればかりぢやあねえ、親方は大棟梁で由右衞門といふから、大由といひやす。

第二　又壘かねのいゝので、よしかねともいふのよ。（ト此内鈴成起上り、生醉の思入にて、）

鈴成　これ〳〵棟梁の大よしどの、折角おれが隅屋に居たを、何で爰へ引張つて來たのだ。

由右　お前を爰へ引張つて來たのは、敵討をする積りだ。

鈴成　えゝ、敵討だ。（トびつくりする。）

由右　何もびつくりする事はねえ、此間おれが親方へ無理強に酒を呑ませ、自腹を切らせた意趣返し、今日これから駐春亭で、おもいれ呑まして敵を討つのだ。

鈴成　いや敵討は眞平だ、拜むから堪忍して下せえ〳〵。（ト手を合せて拜む。）

與吉　えゝ、卑怯な事を言ひなさんな。

皆々　覺悟しなせえ〳〵。（トみな〳〵寄つて床几へ掛けさせる。）

鈴成　いや、とんだ目に逢ふものだ。

〽折から爰へ引越しも、塒に迷ふ目なし鳥。

ト合方通り神樂にて、花道よりお高黑の着附、夜鷹のこしらへ、褄を端折り低き下駄がけ莫蓙を抱へ、按摩こぶ市瘤のある鬘尻端折り、按摩のこしらへ高下駄にて杖を突き、古行燈膳箱飯櫃を繩にて結

〽棒な通し兩人これを擔ぎ、肩の合はぬ思入にて出來り花道にて。
〽鳶が鷹と評判も、吉田町から淺草へ、まごつく暮の住替に、一荷にになふ親と子が、肩さ
〽合ぬ跛下駄、がつくりそつくり雪道を、(ト兩人花道にて振あつて、)

お高　さいで〱。

按摩　按摩針。
〽杖突きならし一休み。(ト舞臺へ來り、下手へ荷をおろし、)

お高　あゝ肩が痛い〱、とつさん一息ついて行かうぢやあないか。

按摩　今そこで休んだのに、もう休むのか。

お高　それだといつてお前とわたしとは、一尺から背が違ふものを、重くつてなりやあしない。

按摩　それぢやあ是れから跣足で擔がう。

お高　どうして〱、跣足でも追附けないから、膝つ小僧へ揚をおしな。

按摩　おきやあがれ、是れだからおれが米平を賴まうと言つたのだ。(ト皆々これを見て、)

由右　こうお歌坊見な、いつも顏見世の二番目に、引越しは紋切形だが、座頭と夜鷹とは珍らしいな。

お歌　おや、あの菊次郎に似て居るのが、あれが夜鷹でございますか、いゝ女でござりますね。

弟三　今垢離場で評判の、慥お高といふ女だ。（トこれを聞き、）

鈴成　なに、お高とは。（ト鈴成お高顏見合せ、）

お高　おやお前は鈴成さんか、逢ひたかつたわいな。（ト鈴成の側へ來る。）

鈴成　や、誰かと思へば垢離場のお高か、さうして、見りやあ世帶道具を擔いでどこへ行くのだ。

お高　どこといふ當もないが、とつさんが五十手にわたしが寸白で腰が痛み、久しく場所を休んだので、そこら中へ借りが出來、吉田町にも居られないから、今夜夜越しに引越すのさ、ほんに按摩の手の利かないのと、夜鷹の腰の利かないのは、三文にもならないね。

鈴成　寺町へ神道者が行つたやうなものだ。

由右　はゝあ、扨はもろ〳〵先生は、此姉エと情人だな。

鈴成　情人とも〳〵此器量で大の亂家、そこで亂の方といつて、此もろ〳〵が思ひものさ。

　　　　ト お高を引寄せる、按摩探り〳〵前へ出で。

按摩　もし〳〵、さういふ聲は鈴成さんかい、いやいゝ所で逢ひました、此間來なすつた時、蕎麥が二百にしやもが四百、酒が五ンつく、六百の勤めも出さず氣儘を言ひ、わしが揉んだ療治代まで〆たら丁度二貫ばかり、神で喰つて居る執事職、心の汚ないむさしどの、さあ勘定をして下さい。

鈴成 高間が原の祓なら、今でも直に祓つて遣るが、身にもろ〳〵の借はあるとも、手にもろ〳〵の金がない、大晦日まで待ちたまへ〳〵。

按摩 いや〳〵待たれませぬ〳〵、いはゞ喰逃げ泥坊同然、會所へ連れて行く、歩びなせえ〳〵。

ト立ち掛る、お高留めて、

お高 これさとつさん何を言ふのだ、わたしが貸して上げた金、取つてよけりやあわたしが取るよ、貸しを取るより邪魔になる、天窓の瘤でも取んねえな。

由右 おゝさうだ〳〵、こつちも今夜の敵討、此もろ〳〵が入用だ、連れて行かれてなるものか。

按摩 何でも連れて行かねばならぬ。（ト悴出て按摩を留め、）

悴 滅多に遣つてなるものか。

〽憚りながら土地柄で、直には行かぬ産神の、左りへ曲つた神田ッ子、親仁はどこの帳場でも、〽親分頭と立てられて、身幅も廣き革羽織、襟の角字の角だつは、そこが男でごんすとやら、負けぬ競ひの大工町。

ト此内由右衛門悴振あつて、よき所より由右衛門出でよろしく振あつて納ろ、按摩立ち掛り。

按摩 いや〳〵きほひでも何でも、連れて行かねばならぬ〳〵。（ト是れにて十太與吉弟子の三出て留め、）

十太　こう〳〵按摩さん、お前の方ぢやあ連れて行かうといふし、こつちぢやあ又遣るめえといふのだ
爰は一番狐拳でおつ附けねえな。
按摩　いや〳〵、目が見えぬから狐拳は御免だ。
十太　それぢやあ長い短いの、鬮取りにしねえな。
按摩　いや〳〵鬮取りも御免だ、然しそれ程にいふものだから、背丈競を仕よう、おれより背丈の高い
ものがあつたら連れて行くまい。
弟三　馬鹿な事を言ひねえな、仁王さまなら知らねえ事、お前より高いものがあるものか。
按摩　それだから背丈競を仕ようといふのだ。（ト十太思入あつて、）
十太　おゝ、望みなら背丈競をしよう。
弟一　こう〳〵與吉さん。詰らねえ事を言ひなさんな、あの按摩さんに叶ふものかな。
弟二　さうだ〳〵、一本齒の足駄を履くか、踏臺にでも乘らにやあ勝たれねえ。
與吉　所をおれが勝つて見せるのだ。
ト十太弟子の三に囁く、此時お歌火鉢へ鍋を掛け、是れを持つて來て。
お歌　一口上りながら、背丈競を御覽なさいまし。

由右 こりやあ有難い、さあ鈴成さん爰へ來ねえ。

鈴成 いや酒と聞いては、見遁せねえ。

お高 どれお酌でも仕ようかねっ

ト三人幅廣の床几へ掛け、お歌燗徳利と猪口を持つて來て酒盛りになる、此内皆々囁き合ひ弟子の三長暖簾を取つて肩衣となし、口上言の思入。

與吉 さあ〳〵、背丈競の、

皆々 始まり〳〵。(ト輕業の鳴物になり、)

へさて〳〵〳〵又背の高いのは、だいら法師はいざ知らず、皆さま御存じ豆腐屋の、二階を叩いた釋迦ヶ嶽、雲つく男の大空に、近くは名代の生月、評判々々。

ト此内弟子の三口上言のこなし、與吉は弟子の二、十太は弟子の一の肩車に乘り前へ出る、由右衛門鈴成お高は酒を呑みながら是れを見て居る。弟子の三、按摩を引張つて來る、按摩高下駄にて背伸びをなし、與吉十太を探つて見てびつくりする。

弟三 どうだ按摩さん、豪氣な背丈高があるだらう。

按摩 いや是れが誠に大鵬の話だ、恐らく十藏とおればかりだと思つたら、又上手がある。(ト言ひなが

ら探り〳〵弟子二の首を探り、）もし〳〵、此首は何でござります。

弟三　おゝそりやあ何だ、あんまり背丈が高いゆゑ、八重歯の生えるやうなもので、途中へ首が生えたのだ。

按摩　はあそれぢやあ、是れは八重首かね。

弟三　さうさ、八重首だ〳〵。

按摩　八重首なら八重歯の格で、引つこ拔いた方がよからう。（ト手酷く弟子の二の首を引張る）

弟二　あいたゝゝゝ。（ト十太飛下りる、按摩又弟子の首を探り、）

按摩　おゝ、爰にも生えてた。（ト弟子一の首を引張る）

弟一　あいたゝゝゝ。（ト與吉飛び下りる、按摩弟子一の首を捉へた儘上を探り見て）

按摩　やあ、こりやどうしたのだ。

與吉　お前が八重首を引張つたので、

十太　半分に折つぺしよれたのだ。

按摩　そりやあとんだ事をした、早く鑄掛屋へ遣つて繼いだらよからう。

弟三　えゝ、何を馬鹿な。

〽これ一切りの入替り。（ト與吉十太弟子の三ちよつと振りあつて納る、お高鈴成を前へ引出し）

鈴成　そりやあおぬしの事だから、逃げてくれなら逃げもせうが、此土地を放れては、神道者があがつたりだ。

お高　これ鈴成さん、お前に爰で逢つたのは、結ぶの神の引合せ、是れからわたしと逃げておくれな。

お高　あがつたりなら止めておしまひな。

鈴成　止めた日には、生業に困らあ。

お高　わたしが是れから過すから、吉田町へ來て亭主におなりな。

鈴成　なに、亭主になれ、べらぼうめ御裳濯川の流れを汲む神道者が、吉田町で夜鷹の亭主になられるものか、耳にもろ〳〵の不淨を聞いて、心にもろ〳〵の不淨を聞かずだ。

お高　そんな事を言はないで、わたしと一緒にさいで〳〵。

鈴成　さいで〳〵と言つたとて、行かれるものか。

お高　それぢやお前いやなのかい。

〽今更いふも愚癡ながら、そもや二人が馴初めは、垢離場の河岸を跡に見て、歸る途中の川風に、寒さ身に沁む鳥肌の、しやもを土産に小鍋立て、禰宜といふ名に鍋の數、ちろりも溫

くお直しに、互ひに熱くなりふりも、白と黒との鯨帶、結びし縁ぢやないかいな。

ト此内お高は夜鷹、鈴成は客にて夜鷹小屋の模樣、與吉しやも屋の客にて夜鷹小屋を覗く思入、双方よろしく振あつてお高鈴成に抱附く。

與吉　こう〳〵いの字や、もろ〳〵は仕合せものだ、あんないゝ女に惚れられるとは、羨しいぢやねえか。

十太　違えねえ〳〵、おいらも神道者になりてえもんだ。

弟三　こう、手前あの女に氣があるか。

十太　ある所か、大ありだ。（トお歌後へ出て、）

お歌　お前きつとさうかえ。（ト十太の背中を叩く。）

十太　え。（トびつくりする。）

與吉　お歌さん、默つて居ちやあいけねえぜ。

お歌　なに、默つて居るものかね。

〽何ぼお前が大工でも、曲つた墨をしなさんしてそれはよいはと墨壺に、誰が默つて濡鉋、つい尺杖に障るゆゑ、突ツ掛る氣の三分鑿。

ト お歌十太を捉へ口説模樣、是れより與吉弟子の三出で。

〽ヤアやんや引け〱、鋸がゝりで引切るとも、切れずに手斧でなぐり掛け、何でもかんでも逆目をおこさず、あらしこ掛けてやらしやんせ、よい〱よいやな、〽よい中綱の建前に是れもいろはの合印。（ト此内皆々大工仕事によそへし振あつて納る。）

〽此間に早くと鈴成が、逃ぐるを遣らじと追取り卷き。

ト 鈴成お高の手を取り、逃げようとする、是れを由右衞門はじめ皆々取卷き。

由右 やあ、逃げるとて逃がさうか、今日の敵と覘ふもろ〱。

與吉 先づ大よしの棟梁から、

十太 いろはを附ける子分まで、

弟三 廓の太鼓を打ちつれて、

忰 駐春亭の夜討。

お高 夜討と聞いてはわたしらは、

按摩 逃げるが役の座頭の坊、

お歌 丁度ちら〱降る雪に、

與吉　山屋で借りたる此傘、（ト山屋の番傘を開く。）
十太　又川升で借りて來た、（ト川升の提灯を出す。）
弟三　此提灯の頭字で、
由右　取りも直さず、山。
皆々　川、
鈴成　いや、飛んだ茶番だ。
由右　いで、もろ／＼を、
皆々　討取らうか。
鈴成　こいつは堪らぬ。（ト是れより所作立模様になる。）

〽淺草市に賑はしき、二つ巴の提灯に、客も大星川升を、義士の夜討に准へなば、見世にいろはの下足札、始終七輪絶間なく、鍋をかけやに弓の弦、矢種も盡きぬ板前や、敵の首を鳥鍋に、其名をあげし大手柄。

ト此內双盤の太鼓をどん／＼のやうに打ち、誂への鳴物にて由右衛門はじめ與吉十太弟子の三由右衛門悴鈴成と所作立模樣、これへお高行燈を提げ、按摩飯櫃を抱へ、お歌行火を提げ此中へ這入り、

手踊り模様、双方からんで所作立手踊りにて、夜討と見える誂への振よろしくあつて、淨瑠璃の留りに鈴成道服を天窓へ冠る、由右衞門有合ふ白丁の德利を首と見て差上げ。

由右　首尾よく敵を討つたりな。

皆々　うつたり、

由右　勝つたり、

皆々　よい〱〱。（ト手を打つ、弟子一、二、鈴成に掛るをぽんと投げ、顏を出して、）

〽勇む心の駒形や、人の波打つ宮戶川、流れたえせぬ繁昌に、目出度き春をぞ迎へける。

ト皆々引張りの見得よろしく。

鈴成　先づ、今日は是れぎり。

ト目出度く打出し

歲市廓討入（終り）

滑稽な
的に
流行を
覘って

柳風吹矢の絲條

解説

「吹矢」の浄瑠璃は、文久四（元治元）年二月、作者四十九歳の時、市村座に書卸された。其時の役割は市川小團次（工藤祐經、浦島太郎、甲子の大黑天）、市村家橘（曾我の五郎、うかれ雷、船頭木舟の字三）、尾上菊次郎（三途川の婆、金毛九尾の狐）、坂東三津五郎（工藤の侍女久須美、龍宮の乙姫）、中村福助（曾我の十郎、斧定九郎）、尾上榮三郎（工藤の侍女宇佐美、お菊の幽靈）、關三十郎（閻魔大王、茂林寺の文福狸）、中山現十郎（三つ目入道）、坂東羽太作（宮しげ大根）、市川竹松（龍宮の猿）等であつた。富本連中には豐前太夫、豐珠齋、名見崎德次、長佐等。清元連中には、延壽太夫、家內太夫、清元德兵衞、和三造等。竹本連中には戶和太夫、姬路太夫、猪太夫、鶴澤市作、安太郎等。長唄囃子連中には、茅村孝次郎、孝十郎、吉住瓢二、杵屋勝三郎、望月太十郎、卯之助等があつた。

時世相を當込んだ大切浄瑠璃中の代表作であり、又好評でもあつた。現十郎の演じた三つ目入道モヽンガアが殊に評判であつた。「大道具大仕掛にて奉入御覽に候」と添書もあつて、舞臺裝置などにも苦心したものであつたらしい。

柳風吹矢の絲條

吹矢見世の場

富本連中
清元連中
竹本連中
長唄囃子連中

〔役名――工藤祐經、浦島太郎、甲子の大黒天、曾我五郎、うかれ雷、船頭木舟の宇三、曾我十郎、斧定九郎、三つ日入道、閻魔大王、茂林寺の文福狸、三途川の婆、金毛九尾の狐。工藤の侍女久須美、工藤の侍女宇佐美、龍宮の乙姫、お菊の幽靈、龍宮の猿、宮しげ大根等。〕

〔吹矢見世の場〕――本舞臺後へ下げて五間通しの高二重、吹矢の舞臺蹴込み、黒木綿を張り吹矢的を附け、日覆より五色の雲の大襴間を下し、上の方長唄の臺、下の方淨瑠璃臺、ずつと上床の前出語り臺、三方とも紅白の段幕を掛け、上手に井筒柳の立木、此上に丸き雷の雲稻妻の書割、下の方浪板、三途川といふ榜示杭、此上に釣鐘、正面漏斗に庵に木瓜の紋附きし金襖、總て吹矢の飾り附よろしく、人寄せの鳴物にて幕明く。と袴裝の頭取出で、所作事名題、太夫連名、役人替名を讀み、知せに附き下の方段幕を切つて落し、爰に富本連中居並び、直に淨瑠璃になる。

へ魁の梅も替りて櫻花、柳の絲の機關に、長閑な風の吹矢的、當りを願ふ初芝居。

トばつたりと音して正面の大的上り、日覆より誂への土蜘下り、せり上げの鳴物になり、眞中に工藤祐經、羽織衣裳大小病鉢巻のこしらへ、刀を杖に立身、此前に碁盤を置き、上手に曾我十郎侍烏帽子、山形木瓜の紋附きし淺黄の素袍、小さ刀祐成のこしらへ、此上に侍女宇佐美振袖侍烏帽子庵に木瓜の紋附きし草色の掛素袍にて雪洞を持ち、下手に五郎侍烏帽子山形木瓜の紋附し褐色の素袍、小さ刀時致のこしらへ、此下に侍女久須美振袖侍烏帽子、庵に木瓜の紋附きし玉子色の掛素袍にて雪洞を持ち、總て頼光の四天王と見たる見得にてせり上る。

常磐津 へ蜘の圍作る盤上に、岡目八目祐經を、頼光公に准へて、竹本 へ碁敵覘ふ兄弟は、綱公時の互ひ先、さて貞光と季武に、宇佐美久須美の振袖を、寄せて三つ目の入道や、四つ目殺しの四天王。(ト此内五人よろしく振あつて納る、管絃になり、)

祐經　此度君の嚴命にて一臈職を蒙りしが、折惡しくも所勞に冒され、此別業に引籠り、圍碁に准へ富士ケ根の、假屋の地割人歩の懸引。

十郎　其地は然も廣大ゆゑ、富士を小楯に盤面の、四方に竹の矢來をなし。

五郎　御領の假屋を中央に、大手搦手黒白の二手に分かる大小名、

宇佐　井目打つて定石の、出口々々に固めの木戸、

久須　濫りに討つて入る事のならぬ左右にいだき石、

祐經　假令敵と覘ふとも、初段に鈍き小腕にて、段の違ひし一﨟職、討ち取る事は叶はぬわ。

十郎　それも下世話の譬草、上手の手より漏る水の、隙を窺ひ我々が、

五郎　石に立つ矢もあるものを、勝負は時の運次第、よしや駄目にも父への孝。

宇佐　若氣に逸るは無理ならねど、そこを延ばすが則ち功者、

久須　僅かの石を賴みにて、急きに急きなば負の元、

祐經　北條どのといふやうな、助言がなくば及ばぬ事、身の本望は遂げられぬ。

十郎　さはいへ濱の眞砂より、

五郎　數々つもる多年の恨み、

宇佐　今日の出會を幸ひに、

久須　祐經樣の相手となり、

祐經　すりや生き死にも厭はずに、

十郎　黑石取つて、

祐經　見事打つかよ。

五郎　おんでもない事。（ト立ち掛るを、）

宇佐久須　あゝもし。

〽それは短氣なお二人さん、命懸碁に其やうな、盤の角立つ事いはで、心を碁筒に丸う持つ石の數々恨みをも、水に流して負けるが勝、それも待たれぬ事なれば、近江八幡の替り役、どつこいそつこいわたしらが、遣つたものではないわいな。

ト宇佐美久須美十郎五郎を留めて、よろしく振あつて。

祐經　兩人控へい。

宇佐久須　はあゝ。（ト兩人控へる。）

祐經　宇佐美久須美が取持にて、圍碁の相手に召寄せし、二人の者の面差を、見れば見る程似たわく〳〵。

十郎　似たとは誰に、

五郎　似ましたな。

祐經　元は一家の端なりし、河津の三郎祐康に、生寫しなる二人の面差、正しく由縁の者ならん。

十郎　斯くお目立ちまする上からは、何をか包まん我々は、祐康が忘れ筐、兄の一萬成長なし、

宇佐　祐信殿の養子となり、
十郎　曾我の十郎祐成。
五郎　弟箱王と成つて、
久須　北條殿の烏帽子兒にて、
五郎　曾我の五郎時致。
祐經　さてこそ河津の胤なりしか、親はなくとも子は育つとは、はてよく言つたものぢやなあ。
五郎　親の敵、祐經觀念。（ト立ち掛るを、）
十郎　あゝこれ、必ず急くな早まるな。
祐經　いや敵とは誰が事、河津を討ちしは角力の遺恨、股野の五郎景久なるわ。
十郎
五郎　何と。
祐經　思ひぞ出づる其時は、（ト上手の段幕を切つて落し、竹本連中居並び、）
竹〽安永二年神無月、十日餘りの事なりしが。
佐殿を慰めんと、
竹〽伊豆相模の若殿原、赤澤山の晴角力、股野は聞ゆる力強、廿一番勝に乘り廣言吐きしを憎

しと、〽宮 祐康土俵へ飛び入つて、〽竹 股野を投げし河津掛け。

ト此内祐經扇にて物語模樣の振。

宮宇佐美〽おゝ聞き及ぶ其時に、河津殿の出立ちは、竹久須美〽秋野の摺つたる狩衣に、旃檀籐の弓携へ、

常十郎〽竹笠さつと木枯しに吹きそらし、叢月毛に跨りて、竹五郎〽絶所惡所の嫌ひなく、しんづ〳〵と歩ませたり。（ト此内宇佐美、久須美、十郎、五郎四人振あつて）

すは祐康よ、ござんなれ。

竹〽柏が峠の南尾崎、椎の木三本小楯に取り、一のまぶし二のまぶし、切つて放せば過たず、

常〽河津が乘つたる駿足の、鞍の山形射削つて、竹〽行縢の附際より、前へすつぱと射通したり。（ト祐經物語の振あつて）

常五郎〽萬夫不當の父上も、大事の痛手にたまり得ず、十郎〽馬よりどうとをちこちの、露と消えたる赤澤山。（ト五郎十郎振あつて、）

さあ、河津を討ちしは股野の景久、此祐經は存ぜぬぞ。

竹〽ありし昔の物語、聞くと無念に時致が。（ト五郎立ち掛り、）

五郎 包み隱すは卑怯未練、敵と名乘つて勝負なせ。

十郎　あこれ、立騒いで尾籠な弟、只何事も兄に任して。
五郎　でも。
十郎　ぢつと辛抱しやいの。
五郎　いやだ〳〵、堪忍袋の緒が切れた。
竹〽行くを遣らじと止むる折柄、朝比奈ならぬ閻魔王。
トばつたりと音して、鐃鉢鳴物になり、閻魔大王閻魔のこしらへにてすつぽんにて出で五郎を留めて。
閻魔　これ待て兄い、早まるな。そこを一番おつこてえろ。（ト祐經見て）
祐經　やゝ、こりや朝比奈と思ひの外、
久須　新井で名代の閻魔王、
宇佐　何ゆゑ爰へ、
兩人　出やしやんしたっ
閻魔　おゝ、いつもは差詰め吉例に、朝比奈が出る所だが、地獄廻りに出掛けて來て、おれに代りをしろといふから、しよう事なしに留めに出た、地獄の鎌髭朝比奈代り、一番留つてくんさるなら、

有難奈落の底だあもさ。

祐經　よしや祐經敵にもせよ、今は討たれぬ一臈職、富士の御狩の總奉行。

宇佐　お役目濟まぬ其内は、

久須　討つ事ならぬ我が君さま。

五郎　えゝ、寶の山に入りながら、

祐經　いや手を空しくは歸すまじ、今日初めての杯替り、（ト袱紗包みの切手を二枚投ろ。五郎十郎取上げ、）

十郎　こりや是れ狩場の、

祐經　切つて恨みを晴らせよ兄弟。

五郎　敵ながらも、

十郎　情の賜、

閻魔　先づ何事も、

宇佐
久須　皐月下旬、

祐經　祐成時致、

十郎　工藤左衛門、

五郎　祐經殿、
祐經　はて珍らしい、
皆々　對面ぢやなあ。
〽其名も高き富士ケ根に、〽昇れる龍の勢ひにて、〽勇ましかりける次第なり。
ト祐經立身、五郎立ちかゝるを閻魔留める、これを振拂ふ、閻魔後へ倒れる、十郎五郎を留め、上下に宇佐美久須美引張りの見得、流しにて此五人せり下げる。是れと一緒に下手富本連中を段幕にて消す、閻魔起き上り思入あつて。
閻魔　や、こりやおれ一人取殘されたか。
ト呆氣に取られし思入、ばつたりと音して正面の的上り、どろ〳〵にて上手へ三つ目入道童子格子の大褞袍鐵梃棒を持ち、すつぽんにてずつと出で。
三目　もゝんがあ。(ト大きな聲をして口を明く、閻魔びつくりして飛び退き、)
閻魔　えゝ、びつくりさしたが、手前は何だ。
三目　もゝんがあだ。
閻魔　何だもゝんがあだ、見れば童子格子の褞袍に、鐵梃棒を突いて、時代おくれな化物だが、手前の

出るのは賴光の御殿だ、もうおそかつたから早く引込め。

三目　もゝんがあ。

閻魔　もゝんがあは分つて居るが、手前の出ようがとんまだから、早く引込めといふのだ。

三目　もゝんがあ。（ト大きな聲をする、）

閻魔　えゝ、しつこい、引込まねえか。

三目　何ぼおれが踊れなくつても、淨瑠璃へ出て、此儘踊らずに引込まれるものか、都々一でもやつて引込まう。

竹〽小僧は一つ目親仁は三つ目、二人交ぜたら二つ目小僧、親仁すつとことんまな大入道、ももんがあやもゝんがあ。

ト三つ目入道鐵梃棒を突き無器用に踊る。よき程に矢取前の的を引く、三つ目入道踊りながらせり下る。是れにて正面の黑幕を振落し、段幕にて竹本連中を消す。

閻魔　いや、野暮な化物だ。

トばつたり音して正面の的上り波の音になり、日覆より柳の釣枝、舞臺前へ浪板、三途川といふ榜示杭、三途川の婆あ白髮鬘の拵へ、洗濯盥をかゝへすつぽんにて出る。

そりや又何か出た、（ト下手段幕を落し、淸元連中居並び居て、）

へ地獄々々と來る人毎に、こはい所と思ふは昔、今は地獄もサヽ、色所、怖い顏する閻魔さへ深い契りのサヽ、三途川。（ト三途の婆振あつて誂への合方になり、閻魔見て、）

やあ、そこへ來たのは三途のお婆か。

婆　おゝ閻魔さんか、搜して居たのだ、わたしを置いてどこへ行きなさるのだ。

閻魔　どこといふ當もないが、近年娑婆に罪を作る惡人がないかして、さつぱり地獄へ落ち人がなく、六道錢にもならねえゆゑ、淨玻璃の鏡から業の秤大釜まで、地藏の所へ質にやり、受戻す當もなければ、たまさか一人や二人の罪人が來たとこが、責めようといふ道具がなければ、地獄に居ても詰らないから、極樂へでも行かうと思ふのだ。

婆　お前極樂へ行きなさるなら、わたしも一緒に連れて行つておくれな。

閻魔　どうで一人では困るから一緒に連れて行く氣だが、何にしろ一文なしだ、阿彌陀如來に金を借りちとけんのんだが、蓮の葉の裏長屋でも借りると仕よう。

婆　夏は涼しくつてよからうが、わたしや血の道持ちだから、ぐら／＼して居られりやあいゝが。

閻魔　それも馴れッこになつたなら、居られねえ事もあるめえ、まあそれよりやあ肝腎の、仕業の當が

ねえが、質屋の帳附にでも入らうか知らぬ。

婆　わたしやあ仕馴れた事だから、洗濯屋を土臺にして、地獄へ亡者の手引をする氣だ。

閻魔　そりやあ止したがいゝ、極樂で地獄の手引きをして見ろ、直に地獄へ遣られるわ。

婆　それぢやあ地獄の手引きは止さう、あゝ最う四五十年年齢が若いと、自前稼ぎにでも出るけれど。

閻魔　兎も角泥水でなくつちやあ長い錢は取れねえ、おれも帳附を止しにして、太鼓持にでもならうかしらぬ。

婆　娑婆にも閻魔の金八といふ、太鼓持があるといふから、太鼓持もよからうが、何か藝があるかい。

閻魔　いや、藝は噯に出るほどあるが、先づちよつとした所がこんなものだ。

〽淨玻璃の鏡に娑婆の人心、上野飛鳥の花よりも、色と酒との兩國に、浴衣の汗を星下し、放れぬ月と雪と隅田、いざと轉びし所まで、寫る地獄の寫眞鏡。

ト閻魔裝束を脱ぎ、指貫裝にて振、節の留りへぱつたり音して大きな蛤出で、ぱつくりと口を明く三途の婆打伏しになり、此儘せり下る。閻魔これを見て、

や、こりや大きな蛤だ、

ト後黒幕切つて落し、向う龍宮の道具に替り、日覆の蜘割れて龍燈になる、これと一緒に下手へ乙姫

龍立の鬘のこしらへ、唐團扇を持ち、ヽヽヽヽすつぽんにて出る、閻魔びつくりして見惚れ居る。
〽わだつみの龍の都の乙姫が、うらなく契る浦島に、別れて跡の物思ひ、行方いづくと水の江の、便りも波の水や空、果てし涙に暮れたまふ。（ト乙姫よろしく振あつて、）
何時の間にか婆あが見えず、跡へうつくしいぼつとりもの、こりや見逭しにはならぬわい。
〽言ひつゝ姫に抱附けば、打驚きて振拂ひ、（ト閻魔乙姫へ抱附くを振拂ひ、）
乙姫　え、何をしやるぞいの。
閻魔　何をするものか、よい事をするのだ。（ト又抱附かうとする顔を見て、）
乙姫　ても怖らしい、そなたは何者ぢやぞいの。
閻魔　おれは地獄の閻魔王だ。
乙姫　えゝ、そんならわらはは死んだのかいな。（ト思入、閻魔うなづき。）
閻魔　おゝ死んだとも〳〵、死んで地獄へ落ちたのだ、男の亡者は兎も角も、女の亡者はどんな者でも抱いて寐るが閻魔の役徳、いやだといへば針の山か劍の山へ追ひあげて、呵責のせめに逢はさにや置かぬ、痛い目するよりやはく〳〵と、よい目に逢うたがよいではないか。（ト又側へ寄らうとするを、）
乙姫　假令何と言はうとも、言交したる夫があれば、そなたに此身は任されぬわいの。

閻魔　なに、言交した夫がある、して其夫は何者だ。

乙姫　丹後の國の水の江の漁師、浦島太郎といふものぢやわいの。

閻魔　さてはおぬしは浦島と。

乙姫　さあ、そもや二人が馴初めは。

〽なみ〳〵ならぬ海原の、八重の汐路に濡れ初めて、龍の都にたつ浮名、打ち來る浪は返れども、幾千代かけて返さじと、思ひし事も情なや、袖に時雨のふる里へ、歸る土産の玉手箱、結びし夫のある身ゆゑ、許してやいのと夕汐に、猶もさし寄る閻魔王。

ト乙姫の振、閻魔掛りよろしくあつて、節の留りへばつたりと音して三つ目入道ずつと出る、閻魔乙姫と心得抱附く、三つ目入道鐵梃をとんと突いて。

三目　もゝんがあ。

閻魔　又出やあがつたか。

三目　もゝんがあ。(ト矢取、的を引く、三つ目入道どろ〳〵にて這入る。此間に乙姫逃げようとするを閻魔捉へ、)

閻魔　どつこい逃してなるものか。(ト乙姫を捉へ、)言交したる浦島が、故郷へ行つたとあるからは、一人置くは惜しいもの、どうでも抱いて寐にやならぬ。

乙姬 其やうに言やるけれど、そちはわらはを世の常の、女子と思うて居やるのか。

閻魔 はて、竪から見ても横から見ても、女子に違ひないやうだが。（ト合點の行かぬ思入れ）

乙姬 假に女子と見すれども、誠此身は龍女ゆゑ、頭に二つの角があるぞよ。

ト龍立を取る、鬘に誂への角ある。

閻魔 いや角は大よし、ちつとも構はぬ、地獄に角は幸ひだ。

乙姬 おゝ角があつても構はずば、我が本體を顯はして、一呑みにしてしまふぞ。

閻魔 いや面白し〳〵、早くおぬしに呑まれたい。

乙姬 いでや、憂目に逢はしてくれん。

竹〽髮逆立てゝ惡龍の荒れたる如き有樣にて、浪を蹴立てゝ失せにける。

ト乙姬きつとなつて立掛る、閻魔びつくりなしどうとなる。大どろ〳〵にて乙姬すつ、ぽんにてせり下る。

閻魔 や、こりや乙姬はどこへ行つたか。（ト四邊を見る、どろ〳〵どん〳〵〳〵と音して、下手の釣鐘より吹矢の大蛇ずつと出る、閻魔びつくりなし）やあ、こりや鬼になつたわ、蛇になつたわ。

常〽喰殺されてはなるまいと、天窓かゝへて閻魔王、奈落の底へ。

ト　どろ〳〵三重にて、閻魔天窓を押へし形にてせり下る。これにて大蛇鐘の内へ引込み、清元連中を段幕にて消し、上手段幕を落すと、爰に長唄連中居並びて。

〽龍の都を立出でゝ、跡に水江の浦島が。

ト　正面浪の張物に替り、松の釣枝をおろし、ばつたりと音して、浦島太郎玉手箱を抱へ、釣竿をかつぎ、すつぽんにて出て。

〽花を見捨てゝ故郷へ、歸る女夫の雁ならで、一羽別れし放れ鳥、夕の床の睦言に、翼交せし乙姫が、情に名殘惜しまれて、跡へ心は引かれ行く、汐路に暫したゞずめり。

ト　浦島太郎振あつて、ばつたりと音して下手へ縫包みの猿、袖なし羽織のこしらへ、すつぽんにて出で。

〽それと見るより山猿が、一緒に連れていてくれと、袖に縋りて賴むにぞ。

ト　猿、太郎に連れて行つてくれと賴む思入。

太郎　おゝ、どうで故鄕へ歸り道、連れて行てやりたいが、そちは乙姫が藥の爲に、生肝が入用なれば一緒に連れて行かれぬわ。

〽言ふにしく〳〵泣出し、われは兎もあれ親猿が、嘸や山にて泣いて居よ、ほんにそさまは

知らざれど、味な閻魔と緣結ぶ、惡性な〳〵乙姬に、何で生肝やろぞいな、〽と猿智慧出して焚附くれば。（ト猿よろしく振あつて）

そんならおれが故鄕へ、歸るに附けて跡釜へ、最う閻魔を引込んだか。

ト是にて上手段幕を落し、竹本連中居並び。

竹〽人の話しも地獄耳、悋氣に婆は鬼の角。

ト太郞振、ばつたり音して以前の三途の婆、すつぽんにてずつと出て。

婆　さては閻魔は乙姬と、情人になりをつたか、はあ〳〵。

ト三途の婆泣き伏す、猿背中をさする、太郞見て。

太郞　これ、こなたは何處の婆さんだ。

婆　わたしや閻魔に捨てられし、三途川の婆あでござんす。

太郞　はあ、さては三途の脫衣婆か。

〽いふ顏つく〴〵打ながめ。（ト是れより誂への合方になり、三途の婆いやらしき思入にて）

婆　もし〳〵浦島さん。

太郞　え〳〵、此婆さんはいやらしい、どうしたといふのだ。

唄へどうした譯も浪の上、お前も姫に見限られ、わたしも閻魔に捨てられて、丁度幸ひ面當に
　女夫にならうと寄添へば。

婆　いや、是れが似合相應なら、乘替へまいものでもないが、十六七の乙姫と六七十の婆さんと、どうこれが替へられるものか。

太郎　なに、違つた所が高が四五十、下から讀めば十六七、左のみ違つた事はない、何でも情人になつて下さんせ。

婆　いくらなつてくれと言うたとて、お袋にしてもいゝやうな、こんな婆あさんと情人になつて、故鄕へ歸つて厄介だ。

太郎　いえ〳〵お前さん、うんと云へば是れから故鄕へ歸りはせぬ、直に地獄へ連れて行つて二代目の閻魔にして、わたしが過して置かうわいな。

婆　いや、男妾は有難いが、閻魔になるはどつとしない。然しいゝ新造があるなら、地獄へ行くまいものでもない。

太郎　それより昔新造のわたしと、一緒に寐て見なさい、若い者に負けやあしない。

婆　据膳喰はぬは男の恥だが、此梅干は眞平だ。

唄〽磯邊の鳥の差汐に、追はれて立つや夕煙、藻汐焼くなる賤が家の、軒の眞白の忘れ霜。
ト太郎逃げるを三途の婆追廻す、此時玉手箱を落す、猿出て紐を解き蓋をあける、太郎それと寄る途端、どろ〳〵にて箱の内より煙立ち、太郎白髪鬘になる。

竹〽深き契りも淺き瀬と、替り易さの世の習ひ、いつか寄せ來る白波に、さりとは〳〵、昔床しき戀路かな。（ト太郎爺の振あつて、）

婆　これ〳〵、よい氣な、踊りどころでもない、何時の間にか、そんな爺樣になつた。

太郎　なに、おれが爺になつた。〽ありし姿の俤も、今は七世とたちし仇波。（ト水鏡を見てびつくりなし、天窓を撫で見て、）やあ〳〵、こりや何時の間に此やうな、白髪にはなつたるぞ、えゝ情ない事ぢやなあ。
ト太郎悔しき思入。

婆　おゝ尤ぢや〳〵が、もう斯うなつたら仕方がない。

太郎　元の姿にならぬからは、丁度おぬしとよい釣合、

婆　一對揃ふ爺と婆、

太郎　これが譬の茶呑友達、

婆　今から女夫に、

兩人　ならうわいの。

　トこれにて正面谷川の道具に替り、下手段幕を切つて落し、富本連中居並び、是れより三方掛合になる。

竹〽むかし〳〵其昔、祖父は山へ柴刈に、宮〽腰も曲りし九十九折、杖を力に登り行く、竹〽婆は、あは川へ洗濯に、川邊の石に腰を掛け、磯拍子で踏み洗ふ、唄〽流れも淸き水の面、大きな桃がどんぶりこ、どんぶりこ〳〵と流れ來る。（ト此内太郎三途の婆の振、猿桃の思入にて出る）

竹〽ま一つ來いよ爺さまにと、流れ附いたる桃取りあげ、富〽二つに割ればひよつくりと、中から飛び出す桃太郎。（ト此時ぱつたりと音して以前の五郎着流しにてずいと出で）

五郎　鬼も十八年來の、今吹き返す天津風。（ト三保神樂を打ち込みきつと見得、兩人びつくりなし）

太郎　や、こりや大きな桃太郎、今生れて最う十八。

婆　鬼といふのは鬼ケ島へ、是れから直に行きやるのか。

五郎　えゝ、寶の山へ入りながら、

太郎　おゝ、手を空しく歸らずと。

婆　寶をしつかり取つて來や。
冨〽さし詰めお供は猿と犬、いつも喧嘩にけん〳〵と、雉子諸共に隨うて。（ト猿振あつて）唄〽出掛ける腰の兵糧は、婆が臼祖父がついて、そしてふかして丸めたる、日本一の黍團子、冨〽鬼ケ島へと急ぎ行く、竹〽さて又家では祖父と婆、太郎が歸れば是れ着しよと、唄〽手織木綿の花田染、浴衣洗うて煑て置いた、糊を雀に甜められて、冨〽おのれ憎き小雀め、此儘逃してならうかと、竹〽鋏おつとりちよつきりと、唄〽舌をば切つて放し遣る。

ト太郎婆振あつて、

太郎　えゝこれ、竹の千代まで生きようと、祝うて飼うたあの雀、
婆　大事な糊を甜めたゆゑ、舌切雀にしてくれた。
太郎　言はうやうない慳貪婆、
婆　役に立たずの間拔ぢや。
太郎　愛想が盡きた勝手にさらせ。
婆　おゝ勝手にせいでは。
竹〽負けず劣らず腹立ち紛れ、日の暮れまぎれ立別れ。（ト兩人よろしく）

宮〽可愛や雀はどうせしと、祖父は山坂尋ね行く、唄〽姿見るより飛んで出で、竹〽逢ひたかつたと縋り附き、笹よあかよと持てなして、宮〽歸る土産に貰うたる、輕い葛籠の蓋取れば、

唄〽ざつくりざく〱寶物、黄金の花が散りければ。

ト此内太郎、五郎を雀にして振あつて、三途の婆出で。

竹〽婆は見るよりおんらもと、慾には深き川を越え、〽雀の宿へ尋ね行く、宮〽重い葛籠を背負ひ歸り、蓋を明くればこは如何に、竹〽一つ目小僧轆轤首。

ト此内三途の婆、猿を雀にして、振あつてどろ〱になり、三つ目入道ずつと出で、

三目　もゝんがあ。

婆　やあ、こりや化物だ。

宮〽變化に恐れ煎豆に、唄〽話しの種の慳貪婆、宮〽打連れてこそ。

ト三つ目入道、五郎、猿、化物の思入、三途の婆これに恐れしこなしにて、四人せり下がる。是れと一緒に富本長唄連中を段幕にて消し、太郎、竹本連中殘り。

太郎　やれ〱、大風の吹いた跡のやうだ。

トばつたりと音して、上手へ定九郎のこしらへ刀をかつぎ、すつぽんにてすつと出で。

定九 えゝ、爰なはッ、つけ、親仁め。
〽思ひ掛けなき定九郎。（ト定九郎きつと見得、太郎おどろき）
太郎 あこれ〳〵、待つて下さい、おりやそんな事言はれる覺えがない。
定九 えゝ、こま言いはずとくたばつてしまへ。
太郎 何も死ね程の事はなにもせぬに。
定九 あつてもなうても、くたばつてしまへ。
太郎 いくら死ね〳〵と言はつしやつても、八千歳生きねば死なれぬわいの。
定九 八千歳生きねば死なぬとは。
太郎 長生きをする浦島ぢや。
定九 えゝ、（トびつくりなし）いや、惡い相手ぢやな。
太郎 六七千年經つたらござれ。
〽釣竿杖に浦島は、水江の里へ急ぎ行く。（ト太郎釣竿を杖に下手へ這入る）〽跡見送りて財布を出し、（ト定九郎懐より財布を出し）
定九 久し振りでの五十兩、忝ない。

トばつたり音してどろ／＼になり、上手の井筒より白装お菊の幽靈にて出で、

〽お菊は哀れな聲を出し。（ト幽靈の合方になり）

お菊　怨めしい。

定九　何ぢや、怨めしい。

お菊　おゝ、怨めしい。

定九　さてはおぬしは幽靈ぢやな。

お菊　おゝ、幽靈ぢやによつて怨めしい。

定九　怨めしくもあらうけれど、何も怨みを受ける覺えがない。

お菊　何でもかでも怨めしい。

定九　えゝしつこい、怖うないといふに。

お菊　怖うなうても怖がつてくれねば、幽靈に出た甲斐がない、怨めしい。

定九　えゝも、よい加減に消えんかいの、こちやそれ所ぢやないがな。（ト財布より小判を出し）こうつと、一枚二枚三枚。（ト小判をかぞへる）

お菊　四まい五まい六まい。

定九　七枚八枚九枚。

お菊　はあ〻。（ト泣く、定九郎びつくりして、）

定九　え〻、びつくりしたので勘定を忘れた、こうつと一枚二枚三枚。

お菊　四まい五まい六まい。

定九　七枚八枚九枚。

お菊　はあ〻。（ト又泣く。）

定九　え〻又勘定を忘れてしまうた。いけ喧しい幽靈ぢやが、一體何の幽靈ぢやな。

お菊　わたしやお菊の幽靈でおます。

定九　何ぢやお菊の幽靈ぢや、はて見たやうな顏ぢやな。

お菊　さういふあんたも何處やらで、見たやうなお方ぢやが、あんたお家はどこでおます。

定九　わしや播州赤穂の鹽冶判官の家來で、斧定九郎といふものぢやが、さうしてこなさんは。

お菊　わたしも播州姫路でな、青山鐵山の腰元で、お菊といふものでおます。

定九　それぢやあこなはんも播州か、道理で見たやうだと思うた。

お菊　まあ、話しておいでな。

定九　なんにせい一服遣りたいが、生憎火打を忘れて來た。

お菊　煙草の火なら今上げます、あゝ怨めしい。

定九　又怨めしいか。（ト此内どろ〳〵拵へ物の陰火出る。）

お菊　さあ、是れで附けいな。（ト定九郎煙草入を出し、）

定九　いや陰火で煙草とはしやれた事だ、時にこなはんはいゝ女子ぢやが、何で幽靈になつたのぢや。

お菊　さあ、此幽靈になつたのは。

〽むごい主人の鐵山が、非道の刃に此井戸へ、切殺されしも皆皿ゆゑ、〽皿に恨みは數々ござる、初めに皿をば見た時は、十枚揃ひし錦手が、一枚缺けたが身の因果、廻りくる〳〵皿廻し、中有に迷ふお菊が幽靈。

ト　お菊よろしく振、定九郎傘にて皿廻しの振あつて納る。

えゝ、怨めしい。

定九　おゝそりや尤ぢや〳〵が、おれが知つた事ぢやない、早う消えてしまつてくりやれ。

お菊　いえ〳〵、滅多に消えられぬわいな。

定九　なに、消えられぬとは。

お菊　わたしやあんたに惚れたから、一緒に連れて行つておくれいな。

定九　幽靈でも女ぢやから、連れて行くまいものでもないが、然し足がなうて歩けるかな。

お菊　それは昔の幽靈ぢや、今では皆足があるわいな。（ト足を見せる。）

定九　さう聞く上は、是れから連立ち、

お菊　夜明けぬうちに、

定九　何にしろ眞ツ闇ぢや。

お菊　えゝ怨めしい、（トどろ〳〵にて又陰火出る）さあ、是れを明りに、

定九　少しも早く。（ト此時又ばつたりと音して、三つ目入道ずつと出で）

三目　もゝんがあ。

お菊　あれえ。（トびつくりする。）

定九　や、又化物か。

三目　幽靈はこつちの仲間、遣ることならぬ。

定九　これ入道、こなたは綱と金時が碁を打つて居る所へ、によつきり出るが本役だ、何でこんな所へ出たのぢや。

三日　はて、生れた國が播州に、二人の裝が白と黑、それで碁石だと思つた。
お菊　成程お前がさういへば、わたしは井戸に緣ある綱。
定九　おれはせしめた五十兩、金に緣ある、金時か。
三日　それだによつて出掛けたのだ。
〽さあ來い來たれと入道が、お菊を引立て入りにける。
ト　どろ〳〵になり、三つ目入道お菊を引立て、すつぽんにてせり下ろ。
〽跡にうつかり定九郎、知らず立ちたる向うより。
定九　南無三猪だ。（ト早笛になり、下手より縫包みの鼠出て來てくる〳〵廻る、定九郎逃げ退き、）去年爰で忠臣藏をした時、五段目には猪が出たが、何で鼠が出たのだな。（ト 鼠物をいふ思入）なに、去年は亥の年だから猪が出たが、今年は子の年だから鼠が出たのだ。いや、猪を馬鹿にした。
ト　此時鐵砲の音して、定九郎打たれし思入、口より練ぐりの血を吐き。
〽ふすぼり返つて死したるは、心地よくこそ。
ト　是れにて定九郎せり下ろ。波の音を打込み、正面の黑幕切つて落し、向う一杯に寶舟の道具に替り、下手段幕切つて落し、淸元連中居並び居て。

清〽五段目に續く六十一年目、その亥の年も甲子に、替る吹矢の大黑天
トどろ〳〵になり、件の鼠くる〳〵と廻りすつぽんにて消える。直に大黑、一寸法師大黑のこしら
へにて、小槌を持ちずつと出で。
竹〽一に俵をふんまへて、二ににつこり笑うて、三に杯なる口に、お神酒が過ぎた機嫌から、
清〽今夜はきやつと子の刻過ぎ、こつそり拔けて假宅へ、竹〽駕籠はあれども君ゆゑに、邪魔
な鼠の取巻きも、連れず一人で大黑屋。（ト大黑振あつて、縫包みの大根出で、）
竹〽あがる二階に待兼ねし、宮城野ならぬ宮しげが、來ぬを恨みの胸盡し、
ト大根女郎のこなしにて大黑に取附き、新内模樣のくどき。
清〽今更いふも愚癡ながら、初めてこちへきのえ子に、鼠鳴きした初會から、惚れたればこそ
恥かしい、此二股の肌と肌、竹〽又いつの夜と約束も、ついそれなりに七色菓子、清〽待身
は長い燈心の、外に染りし色もやと、思ひ増す身は黑豆の、竹〽儘にならぬを託ち泣き、股
に挾んで口說きける。
ト此內大黑大根と口說きの振よろしく、トヾ大根大黑を股にはさみこなし。
清〽それはそつちの皆廻り氣、何をいふにも甲子に、ならねば出られぬおれが身に、竹〽料簡

してと言譯も、清〽聞かずひぞりて後向き。

ト大黑振、大根脇を向く、是れより猿廻し模樣になり。

竹〽これ〳〵此樣に、兩手を突いて謝るに、こちらをちやつと向かしやんせ、清〽機嫌を直して向かしやんせ、竹〽さりとは〳〵よほ〳〵腹立ちな、さんな又あらうかいな、

清〽心が解けたらしつぽりと。（ト大根を猿にして猿廻しの振宜しくあつて。）

竹〽角力甚句でやつてくりよ。

ト角力太鼓打合せの合方になり、大黑大根角力の思入にて四股を踏む、大黑立合ひやあと突く、大根仰向けに轉覆る、大根起上り取組解れて。

清〽色の白いと水澤山は、尾張大根の所から、ありや〳〵〳〵、〽譯もなや。

ト兩人振あつて大根大黑を投げ、股を開ききつと見得。

竹〽浮れ興じて大黑は、清〽大根を船にやつしつし、竹〽櫓拍子立てゝ。

ト大黑大根の足をかき大根倒るゝ、是れを船と見て大根の葉の長いのを櫓と見て舟を漕ぐ思入、引臺にて上手へ引込む。是れにて清元竹本連中を消し、どろ〳〵になり正面の鏡を二つに割り、誂への殺生石、高札芒の土手板を押出して、後へ黑幕を振落し、上手段幕を切つて落す、爰に長唄連

中居並び謠がゝりにて。

〽恨みは殘る草の葉に、消えにし露の玉藻の前、仇を那須野の殺生石。

トどろ〳〵になり、殺生石二つに割れ、十二單衣緋の袴玉藻の前のこしらへ、檜扇を翳し前へ出で。

〽我大内に在りし時は、詩歌管絃を弄び、御簾の隙漏る風だにも、厭ひし身さへ情なや、尾花が末の露霜と、消えても殘る執着に、鳥や獸の命を取り、浮む瀨もなき身の果ぞ。

ト玉藻の前よろしく振あつて、ばつたりと音して、下手へ茂林寺の文福狸、鼠の頭巾同じ法衣錦の袈裟、如意を持ち、玄翁和尙のこしらへにて出で。

〽汝は何れの所より、斯かる野邊へは來りしぞや、今より法に導きて、眞如の心になさしめん、佛の敎へぞ有難き。（ト如意を持ち振あつて、玉藻の前謠詞にて、）

玉藻　なう〳〵それなる御僧は、如何なる知識にて候ぞ。

文福　これは陸奥に隱れなき、玄翁和尙にて候。（ト兩人能掛りにて思入あつて、玉藻の前側へ來り。）

玉藻　これ古狸、噓を吐くな。

文福　なに、古狸とは。

玉藻　玄翁和尙とは僞り、誠は茂林寺の狸ならうが。

文福　そんならそれを知つて居るか。

玉藻　神通を得し白面の妖狐、それを知らいでなるものか。

ト是れより誂への合方になり、文福狸下に居て。

文福　さう知られたら隱しはしねえ、如何にも上州茂林寺の、文福茶釜の古狸だが、おれの方へ渡りも附けず、那須野が原へ飛んで來て、鳥獸を殺すのだ、上野下野はおれが繩張り、外土地から來たものに、幅をされてなるものか。

玉藻　やあ無位無官の身を以て、我に向つて緩怠至極、世にある時は上なき方と添伏しなせし玉藻の前、今此野邊の石となりても、空飛ぶ鳥も羽を縮め地上に落つる妖狐の德、狸如きの及ばんや。

文福　そりやあ以前は兎も角も、此野へ來れば同じ事、一つ穴の狐狸、別に替りはあるものか。

玉藻　それは汝が大きな僻言、狐は神に祀られて正一位の官位あり、狸を神に祀るや如何に、諏訪の氷を初めとして其德算へ盡されじ、たとへば物の色にさへ、狐色といふはあれど狸色といふはなし、狐の聲は人も知れど狸の聲は誰も知るまじ、何の德なき古狸三拜なして早う歸りや。

文福　成程それは叶はぬが、然し金毛白面でも八疊敷の大睾丸、こればつかりは叶ふまい。

玉藻　いや、其替り狸には、九本の尻尾はあるまいが。

文福　えゝ、又へこんだか。

玉藻　まだ〳〵狐の德といふは、死しても皮が鼓となるが、狸の皮は何になるや。

文福　皮が鼓にならぬ替り、腹で鼓を打ち分けるが、是れは狐に出來まいて。

玉藻　それも誠か僞りか、遂に聞いた事がない。

文福　知らずば爰で打つて聞かさう。

〽草より出でゝ草に入る、はら一杯の月の影。

ト文福狸肌を脫ぎ、狸の縫包みの大きな腹を出し。

先づ最初が、大小の打分けでござい。

〽吉野初瀨の花紅葉、更科越路の月雪に、あかぬ眺めの明石潟。

ト文福腹鼓を打ちながら振、玉藻の前浮れて共に振になり、トゞ兩手で打つ、此内大小の打合せあつて、ぴしやりと鼓の音替る。

玉藻　やゝ、俄に音色の替りしは。（ト合點の行かぬ思入）

文福　えゝ、腹の皮の破れたのだ。

玉藻　たんと破れぬ其内に、もうよしにしたがよい。

文福　なに、これしきの破れ疵、按摩膏でも張れば濟む。

〽あさる千鳥の打波に、羽袖かへして舞子浦、あら面白の景色になん。

ト此内兩手で無性に叩き、仕掛けにて臍飛び出す、是れにて長唄連中を消す。

やあ〳〵大變々々、臍が飛び出した〳〵。

ト是れにて下手段幕を切つて落し、富本連中居並び居て。

〽臍と聞くより雷が、雲間を分けてぬつと出で。

ト雷の音になり、ばつたりと音して日覆の雲わくより、浮れ雷、雷のこしらへにて太鼓を背負ひ宙乘りにて出で。

詞〽人間の臍は幾らも喰つたが、狸の臍はまだ喰はぬ、〽聞くに狸はびつくりなし。

なに、雷が臍を取る。是れを取られてなるものか。

〽臍を抱へて文福と、共に九尾も草隱れ。

ト文福狸玉藻の前後へ下り、殺生石にて消す、浮れ雷思入

〽おのれ取らいで置くべきかと、見廻すこなたの雲切に、竹〽おや〳〵〳〵〳〵是れは狸に縁のある、おぼこ娘のばくれんもの、どんな臍だかあゝ見たや、〽先づごろ附いて脅さんと

腰より取出す摺火打ち、〽下界をきつと見おろして。
ト雷の音にて浮れ雷宙乘りにて、舞臺より東の方土間の上へ行く。
常〽天の岩戸ぢやなけれども、それ出たやれ出た娘の出臍、こいつあ妙だ、こいつあ妙だ涎流して浮れ出し、太鼓拍子で一踊り。(ト浮れ雷振あつて背中の太鼓を取つて腰へ附け。)
常〽雷の子が臍燒を取らんとて、下界はるかにをちこちの、行方も雲の當途なく、太鼓叩いて長屋から、迷兒〳〵とゆふだちに、親達や雲間で涙雨、さつさぴか〳〵光らんせ。
ト浮れ雷太鼓を叩き振あつて、太鼓を落し。
竹〽えゝ鈍な、太鼓を落してのけた、こんな碇で揚げらりよか。(ト碇を下し振あつて。)
竹〽さつと吹き來る風に連れ、轟く音も高島屋、その俤の稻光り、雲間〳〵を。
ト雷の音になり、浮れ雷くる〳〵と廻りながら舞臺へ戻り、よき所にてとんと落ち、引抜き船頭好みのこしらへになる、上手段幕を切つて落し、長唄連中居並び。
唄〽篠をたばねて突くやうな雨に、濡れて通ふが憎からうか、常〽のつきる新地の上げ南、後へ引かぬが產土の、左りへ曲る氣も早緒、竹〽鬼にも向う鉢卷は、娶がお江戶の水の恩。
ト船頭兎の耳のやうな鉢卷をなし、振あつて、殺生石割れ、以前の文福狸出で、

文福　やあ、誰かと思へば、わりやあ兎か。
船頭　さういふおぬしは狸だな。（ト兩人きつとなり）
文福　一杯喰はした狸汁、婆々を喰つた意趣返し。
船頭　かち〳〵山の火傷から、辛き目見せた唐辛子。
文福　又土船でぶく〳〵と、
船頭　深い所へ沈めたる、
文福　遺恨重なる、
船頭　兎と狸、
兩人　此場に於て、（ト此時後へ玉藻の前十二單衣脱掛け、猪を冠りし者、猿と出來り）
玉藻　あゝこれ待つた、待たしやんせいな。
文福　やあ、兎と狸の此喧嘩、
船頭　留めにはひつたこなさんは、
玉藻　金毛九尾、白面の狐、
猪　五段目に出る手負猪、

猿　龍宮城へ行つた猿、

文福　揃ひも揃ふ皆獸、

船頭　一番負けて仲直り、

皆　よい〳〵〳〵。

ト手を打つ、是れをきつかけに後の黑幕切つて落す、向う打拔き富士の裾野の假屋の書割、是れにて總踊りになる。

唄〽富士の裾野のまき狩りに、陣笠冠りし軍兵が、割竹叩いてありや〳〵〳〵、宮〽そりやこそ逃げろと猪が先き、遁れ狐や猿兎、唄〽たん〳〵狸の腹鼓、宮〽打てや、唄〽囃せや、ありや〳〵〳〵、〽めざましや。

ト皆々紋盡しの傘を遣ひ、手踊りよろしくあつて、

兩方〽實に滑稽を的にして、宮〽流行覘ふ所作事の、唄〽拙き趣向も春の興、兩〽笑ふ門こそ目出たけれ。

ト猿猪に跨がりて仁田の見得、玉藻の前へ文福狸傘をさし掛け、左右に五郎十郎、卷狩りの模樣引張りよろしく、頭取出て、

柳風吹矢の絲條

頭取　先づ、今日は是れぎり。

ト目度度く打出し

柳風吹矢の絲條（終り）

忠臣藏形容畫合

唯御贔屓の
御評を當に
大序より
七段目まで
拙筆に認候

解説

「忠臣藏七段返し」は慶應元年五月、作者五十歲の時、市村座に書卸した。其時の役割は市村家橘（桃の井若狹之助、奴橋平、早野勘平、種ヶ島の六、豐竹鍋尾太夫）、坂東彥三郞（高の師直、奴音平、鷺坂伴內、寺岡平右衞門）、尾上菊次郞（顏世御前、おかる母おかや、鶴澤絲玉）、澤村訥升（鹽冶判官高貞、奴紀之平、こしもとおかる）、坂東三津五郞（本藏娵小浪、豐竹矢的太夫）、市川團藏（大星由良之助、狸の角兵衞）、中村鶴藏（斧九太夫、めつぼふ彌八）、市川新車（本藏妻戶名瀨、鶴澤市勇齋）、市村竹松（大星力彌）等であつた。振附は花柳壽輔常磐津連中には、文中、吾妻太夫、喜代太夫、文字兵衞、芝江等。淸元連中には延壽太夫、家內太夫、德兵衞、梅吉、千藏等。岸澤連中には竹翁齋、式佐、仲助等。竹本連中には戶利太夫、猪太夫、鶴澤市作、安太郞等があつた。

滑稽淨瑠璃としては上乘なるもので、好評を以て迎へられ、其後も屢々上演せられてゐる。挿繪にしたのは稿下當時の繪本である。

忠臣藏形容畫合（忠臣藏七段返し）

大序より七段目迄

竹本連中
清元連中
常磐津連中
岸澤連中

〔役名――高野武藏守師直、桃井若狹之介安近、鹽冶判官高貞、桃井家奴音平、同橘平、同紀之平、大星力彌、茶道珍才、早野勘平、鷺坂伴內、中間立平、同横平、斧九太夫、人形遣ひ西川伊三郎、狸の角兵衛、めつぽふ彌八、種ケ島六藏、寺岡平右衛門、太鼓持とん八、同かん八。顏世御前、本藏妻戸名瀨、同娘小浪、腰元おかる後に一力のおかる、與一兵衛妻おかや、一力の仲居、鹽冶の腰元、在所娘お市、竹本矢的太夫、大星由良之助、豐竹鍋尾太夫、鶴澤市勇齋、同絲玉等。〕

知らせに附き片シヤギリになり、よき程に打上げ、幕外へいつもの口上人形出で、役人替名、太夫連名を讀み上げ這入る。

〔大序の場〕――本舞臺三間の間向う石壇、左右丸に二つ引の幕張り、正面鶴ケ岡の本社廻廊の書割、上の方出語り臺、下の方淨瑠璃臺、黑板羽目打返し、日覆より黑板羽目の欄間を下し、總て大序

の道具よろしく、竹本連中居並び、天王立にて幕明く、

〽佳肴ありといへども、食せざれば其味を知らずとは、國治つてよき武士の、忠も武勇も隱るゝは、例へば星の晝見えず、夜はみだれて顯はるゝ、ためしを爰に假名書の、泰平の世の政事、曆應元年二月下旬、鶴ケ岡八幡宮御造營成就なし、足利左兵衛督直義公、鎌倉に下着なりければ、執事高野武藏守師直、御馳走の役人桃井若狹之介安近、鹽冶判官高貞馬場先に幕打廻し、威儀を正して相詰る。

ト淨瑠璃の切れ下り羽の入りし誂への鳴物になり、正面の幕を切つて落すと、眞中に師直立烏帽子大紋小さ刀にて立身、上手に同じく判官三方に龍頭の兜を載せて持ち、下手に同じく若狹之介桧へ居る、此の見得よろしく。

〽判官師直に打ち向ひ、

判官　如何に師直殿、是れなる兜は尊氏公に亡されし、新田義貞が後醍醐天皇より賜はつて着せし兜、敵ながらも義貞は淸和源氏の嫡流ゆゑ、着捨の兜といひながら其儘にも打捨て置かれず、當社の御藏へ納めよと直義公の仰せでござる。

〽言はせも果てず武藏守、

師直　假令直義公の仰せにもせよ、新田が清和の末なりとて、着せし兜を尊敬せば、御旗下の大小名清和源氏は幾らもある。奉納の儀は然るべからず、此儀は無用になされたがよい。

竹へ遠慮もなく言ひ放せば、

若狹　いや左樣にも候まじ、此若狹之介の存ずるには、是れは全く尊氏公の御計略、討漏らされし新田の徒黨に御仁德を感ぜさせ、攻めずして降參させる御手段と存ずれば、無用との御評議は卒爾かと存じまする。

師直　やあ默らつせえ若狹殿、出頭第一の師直に向つて、卒爾とは何の戲言、義貞討死の其時は大童、死骸の側に落散りたる兜の數は四十七、どれがどれやら分らぬ兜、奉納した其跡でそでねえ時は大きな恥だ、小身者の分として師直に向つて慮外だ。（ト中啓にて若狹之介の胸を打つ）いゝやよ、小身者の捨知行、誰が蔭で取つて居る、此師直の口一つで、五器を提げようも知れねえ身の上だ。それでも武士か侍か、馬鹿な面だ。

竹へ權威に誇る憎まれ口、くわつと急き立つ若狹之介、刀の鯉口碎くるばかり握り詰めは詰めたれど、目顏で止むる判官に、御前を憚り怺ゆれど、今一言が生死の詞の先手。

ト此内若狹之介無念の思入にて詰寄るを判官止むる思入、トゞ怺へ兼ねて柄へ手を掛ける、此時

奥にて、

呼び　還御。

師直　還御だわ。(ト中啓にて背中を打つ。)

若狭　はつ。

〽竹 詮方なくも期を延す、無念は胸に忘られず、悪事盛つて運強く、切られぬ高野師直を、明日は我が身の敵とも、知らぬ鹽冶が中隔て、立ち別れてぞ。

ト師直袴の裾を蹴る、若狭之介きつとなるを、判官中へ這入り留める、引張りの見得になり、引拔く、三人ながら紺看板水打奴のこしらへになり、是れと一緒に正面の張物打返しにて替る。

(二段目の場)——本舞臺三間の間向う中足の縁側附きの屋體、下手振よき松の立木ある、庭の書割總て二段目の道具、上手の竹本連中を打消し、下手張物を打返し、爰に常磐津連中居並び、右の鳴物にて道具納る。と直に常磐津淨瑠璃になり。

〽常 寒の師走も日の六月も、紺のだいなし只一かんで、二貫三貫酒屋の借りは、奴豆腐に大部屋ながら、酒のかんざん拾得よりも、呑むが一徳その身の憂ひ、掃ふ掃除の玉箒。

ト一の師直の奴竹箒、判官(三)若狭之介(二)の奴、水打手桶柄杓を持ち三人振あつて、一の奴後から一升徳利と茶碗を出し、

一 さあ〳〵徳利の替り目だ、最う一杯やれ〳〵。(ト三に茶碗を突附ける。)

二 これ〳〵最う酒はいゝ加減にしたがいゝ、そんなに呑んぢやあお上へ濟まねえ。

一 なに、お上へ濟まねえとは。

三 えゝ濟むの濟まねえのと、水屋の喧嘩ぢやァあるめえし。

二 それぢやあ昨日の話しを聞かずか。

三 なに、昨日の話しとは。

二 まあ聞かツし、斯ういふ譯よ。

第二〽鶴ヶ岡の八幡さまで、こちの大事の殿樣を、あの意地惡な師直が、いぢめ居つたといふ噂、おらあそれが悲しくつて〳〵〳〵怺へられぬと涙聲、一〽えゝ篦棒め、それを泣くことがあるものか、いぢめやあがつたら構ふ事があるものか、思入れ呑んで酒の力で、師直の白髮天窓を叩きこはして遣るがいゝ、それをぐづ〳〵泣きやあがつて、腹が立つて〳〵なりやあしねえ、呑めと言つたら呑まねえか、えゝ。二〽いくら手前が呑めといつたとて、おらあ胸

が一杯になつて、酒も喉へは通らぬと、しやくり上げたる泣上戸、一〽なに、呑めねえといふがあるものか、口を割つても呑ませにやあならねえと、腹立ち上戸が鉢巻も、しどろもどろの足許手許、利かぬといふも酒の癖。三〽見兼ねて中へ仲人に笑ひ上戸が空笑ひ、はゝはゝ是れさ〳〵何をそんなに腹を立つたり、はゝゝゝ泣いたりするのだ、はゝゝゝ殿様と師直と喧嘩をしたら、又酒だ、はゝゝゝ仲直りにしつかり呑めらあ、はゝゝゝおらあ可笑くつて堪えられねえ。一〽えゝ何が可笑い事があるものか、腹が立つてなりやしねえ。二〽おらあ悲しくつてなりやあしねえ、三〽はゝゝゝはゝゝゝ、こう〳〵手前が腹と顔ははゝゝゝ師直にそつくりだ、はゝゝゝゝまた手前が泣顔は若狭之介様に、むゝゝゝそつくりだ、はゝゝゝはゝゝゝゝ、こいつあ〳〵はゝゝゝ、可笑しつて〳〵はゝゝゝ、むゝむゝ、はゝゝゝゝ、こゝむゝゝゝ、てゝはゝゝゝ、いゝむゝゝゝ、らゝはゝゝゝれゝはゝゝゝゝない。はゝ、はゝゝゝむゝゝゝはゝゝゝ腹の皮。

ト此内一は腹立上戸、二は泣上戸、三は笑ひ上戸にて三人よろしくある。

常〽わけ生酔のしどもなや、〽折から一間を立ち出る戸名瀬。

ト是れにて戸名瀬掻取り丸髷鬘にて出來り。

戸名　こりや〳〵下部共、どうしたものぢや、下として上のお噂、殊に御前様にはおしつらひ、災ひは下部の嗜み、掃除の役目しまうたら、早う部屋へ行たがよい。
三人　畏つてござりまする。
戸名　以後をきつと愼みませうぞ。
三人　ねい。
〽鶴の一聲ひつそりと、水打手桶高箒、かたげて部屋へ立つて行く。
ト三人箒手桶を持ち下手へ這入る。
〽跡に戸名瀬が御前の首尾、兎や斯う案じる御次より、廊下おとなふ衣の香や、本藏がほんたうの一人娘の小浪御寮、しとやかに立ち出て。
ト跡に戸名瀬殘り向うへ思入、下手より小浪振袖装にて出來り。
小浪　母様、こゝにおいで遊ばしましたか。
戸名　おい小浪、何ぞ用事かいの。
小浪　只今鹽治様よりお使者として、大星力彌さまがおいでゞござりますわいなあ。
戸名　大方それは御勅使様が御到着ゆゑ、御馳走申し合せのお使者であらう、わたしは此由お奥へ參り

御前様へ申し上げよう。御口上の受取役は、そなた勤めてたもいなう。

小浪　え、あの私に。（ト恥かしき思入）

戸名　お使者はそなたの許嫁、

〽逢ひたう思ふ戀聟どの。

定めて顔が見たからうなう。

〽御口上の趣きは、力彌殿の口から直に、そなたの口へ口うつしに、受取り渡しをして貰や。

但しはいやか。

〽いやか／＼と問ひ返せど、あいともいやとも山吹の、口無し衣恥かしく、芽出し紅葉の赤らむ顔、おぼこ心を汲取りて。（ト此内戸名瀬小浪よろしくあつて）

あいた〻〻〻。

小浪　母様、どうか遊ばしましたか。

戸名　又持病の癪が差込んで、あいた〻〻〻、所詮是れではお使者には逢はれぬ、いやであらうがわしに代り、御口上を承はり、御馳走を申してたもや。

〽然しあんまり馳走過ぎ、大事の口上忘れまいぞ。

ほんにわしも聟にあひ、たゝゝゝ。

〽あいた家老の奥様は、氣を通してぞ奥へ行く。(ト戸名瀨思入あつて奥へ這入る)

〽小浪は跡を伏し拜み。

小浪 有難いお志し、態とわたしに此お役目、日頃戀しい力彌樣。

〽逢ひ度い見たいは山々なれど、逢へばどう言を斯う言をと、娘心のどき〳〵と、胸に小浪を打ち寄する。(ト小浪よろしくあつて)

〽疊ざはりも故實を質し、入來る使者の大星力彌、まだ十七の角髮や二つ巴の定紋附、大小さすが由良之助が、子息と見えし其器量、靜々と座に直り。

ト此内花道より大星力彌、若衆鬘上下大小にて出來り、直に舞臺へ來て。

力彌 誰そお取次頼み奉る。

〽小浪ははつと手を支へ、ぢつと見合す顏と顏、親と親との許嫁に、互ひに胸に戀人と、思ひながらも恥かしく、口へは出ねど顏へ出し、心土筆や早蕨の手をもじ〳〵と言兼ぬる、梅と櫻の花角力優り劣りはなかりける。(ト此内力彌小浪よろしくあつて)

小浪 これはようおいでなされました、其御使者の御口上受取る役は私ゆゑ、つい斯う〳〵とおつしや

つて下さりませうなれば、有難うござりまする。

力彌　これは不作法千萬な、總じて口上の受取り渡しは、行儀作法が第一、主人判官公より若狹之介樣へ御口上、明日は管領直義公へ未明より相詰め申す筈の處、定めて御客人にも早々に御出であらん、然らば判官、若狹之介兩人は、正七つ時に、きつと御前へ相詰めよと師直樣より御仰せ、萬事間違ひなきやうに、今一應お使者に參れと、主人判官の申し附け、此通りを若狹之介樣へ御申上げ下されい。

常〽水を流せる口上に、小浪はうつかり顏見惚れ、兎角う返答もなかりけり。

ト此内小浪見とれ居る思入。

使者の役目相濟めば、直にお暇仕らん。

常〽刀さばきも尋常に、立上るを留めたさも、使者の役目に留め兼ねて、若しと控へる袖さへも、すげなき春の雁ならで、花を見捨てゝ立歸る。

ト力彌刀を持ち立上るを、小浪殘り惜しき思入にて、袖をそつと引き留める、力彌振拂ひ花道へ這入る、小浪跡を見送り居る、奥より茶道出來り。

茶道　もし小浪さま〳〵、小浪さま。

小浪　何でござりまするぞいな。（ト大きく言ふ、）

茶道　御前樣が召しまする、早くお出でなされませ〳〵。

小浪　はい、只今上りますわいな。

常〽又あふ秋を樂しみに、奧へ入る日の夕霞、引き別れてぞ。

ト小浪向うへ思入、茶道せり立つるゆゑ、三重にて兩人上手へ這入る、知せに附き太夫座を消し、時の太鼓になり居所替りにて替る。

（三段目の場）――本舞臺向う上の方筋金入りの城門、是れより一面に城の書割辻行燈、日覆より松の釣枝、總て三段目の道具、時の太鼓にて道具納る。と上手淨瑠璃臺を打返し、竹本連中居並び。

竹〽勅使御入りに恐悅の、嘉儀を壽ぐ大小名、時の執事師直が威光を笠に肩臂怒らし、鶴の眞似する鷺坂伴內。

ト調べになり、伴內上下大小の拵へにて、○△紺看板中間にて一本差し、箱提灯を持ち上手より三人出來り。

伴內　これ〳〵家來ども、其方は氣の利かぬ奴だ、なぜ本藏殿へあのやうな無禮な事をいたしたのだ。

○　それでもさつきお前さまが、提灯これへといふを合圖に、
△　本藏めをばつさり遣れと、おつしやつたではござりませぬか。
伴内　馬鹿な事を言つたものだ、主人を始め身共にまで、進物を持つて來た、心の利いた本藏殿を、ばつさり遣つてたまるものか、さう目はしが利かなくては、二百文の酒代もやられぬぞ。
兩人　へい／＼恐れ入りましてござりまする。（ト伴内袂から包金を出し）
伴内　さて／＼桃井殿には、よい御家來を持たれた、此伴内にまで斯くの如く心附をさつしやるとは、さりとは心の利いた事ぢや、人は斯うありたいものだ。こりや／＼、提灯これへ。
兩人　はツ。（ト柄へ手を掛け立ちかゝる）
伴内　こりや／＼まだ其やうな事をいたすか。
兩人　もうよろしうござりまするか。
伴内　よくなくつてどうするものだ、此氣の利かぬに引かへて、身共にまで十兩とは、さりとは心の利いた事ぢや、人は斯うありたいものだ。
○　もし、伴内さま。
△　一杯吞まして下さいましな。

伴内　なに、一杯呑みたいとは水が呑みたいといふのか、心の利いた事ぢや、人は斯うありたいものだ。水は向うのお濠にあるから、勝手に行つて呑んだがいゝ。決して遠慮には及ばぬぞ、酒でも呑ませろといふのかと思つたら、水を呑ましてくれとは、身共に金を遣はさせぬ氣だな。さりとは心の利いた事ぢや、人は斯うありたいものだ。

○　誰が水を呑みますものか。

△　やつぱり酒を呑ましてドさいまし。

伴内　なに、手前達が身共に、酒を呑ませるとは心の利いた奴ぢや、人は斯うありたいものだ、實はさつきから此伴内も一杯呑みたい所であつた、さりとは心の利いた奴だ、人は斯うありたいものだ。

ト○△を扇であふぎ。

竹〽慾氣は深き外濠に、うつる星さへ銀玉かと、金に心を奪はれて、四邊きよろ〳〵見附の内家來引連れ入りにけり。

ト伴内よろしく思入あつて上手へ三人這入る。是れにて下手張物打返し、淸元連中居並び直に淨瑠璃になり。

淸〽まだ明けぬ空も彌生の花曇り、霞む朧の月影も、雨にかさ召す二重橋。

ト本釣鐘の合方になり、花道より腰元おかる、帽子鬘御殿がすりの振袖にて、文箱を持ち出來り花道にて。

〽三重櫓後に見て、四座の御能に地謠の、〽聲もかすかに吹送る、風の柳の都にて、〽堅い屋敷のとりなりも、〽きどく帽子の目に立つて、〽忍び廓の御門外。

ト おかる花道にて振あつて舞臺へ來り。

かる　爰までは來ることは來たれども、勘平どのはどうしてか、早う逢ひ度いものぢやなあ。

〽夏を隣に青々と、若葉隱れの時鳥、〽思ひ掛けなき勘平が、出合頭の一聲は。

ト おかる四邊へ思入、上手より早野勘平、上下 股立 大小 勘平にて出來り。

勘平　や、そこに居るのはおかるぢやないか。

かる　勘平さんでござんしたか、逢ひ度かつたわいなあ。

勘平　まだ夜明けに間のあるに、供をも連れず只一人、何しに爰へ來やつたのぢや。

かる　其處まで供を連れたれど、先きへ歸して參りましたは、奥樣よりのお使ひゆゑ。

勘平　なに、奥樣のお使ひとは。

かる　此文箱を殿樣から、師直樣へおあげなされて下さるやう、勘平を頼んで來いと仰せを受けて參り

ましたも、お前に逢ひたひばかりぢやわいなあ。（ト文箱を出す、勘平とつて）

勘平　さういふ事なら、少しも早く殿様へ。

かる　まあ其やうに急かずとも。

〽月もいつしか小隱れて、夜明けに闇き花の蔭、鳥さへ濡れて出るものを、積る思ひを晴らしてと、〽留める後へひよつくりと、深田の泥鰌踏むごとく、足もひよこすか鷺坂が、それと見るより中を分け。

ト此内おかる勘平を引留める、上手より以前の伴内出で、腹の立つ思入にて兩人の中へ割つて這入り。

伴内　これ〳〵勘平、何をして居るのだ。さつきから判官公が用があると呼んでござつた、早く御殿へ行つたがいゝ。

勘平　それは何の御用だか、少しも早く行かずばなるまい。

伴内　おゝ、早く行つたがよい〳〵、何か急な御用事なやうだ。

勘平　さう聞く上は。

かる　あもし。

淸〽袖引き留めるを振拂ひ、御門の内へ急ぎ行く。

ト勘平行かうとするをおかる袖を捉へ留めるを拂ひ、門の内へ這入る。

竹〽跡に伴内にこ〳〵笑顏。

伴内　何とおかる、戀の智慧は格別だらうが、勘平めとちゝくり合ひ、旨い話のたゞ中へ、判官公の用と僞り、彼奴を遠ざけ其跡で、おぬしとおれと差向ひ、何と憎うもあるまいがな。

竹〽袖を捉へて媚けば、淸〽おかるは手酷く突放し。（ト伴内おかるの袖を引くを振拂ひ、）

かる　えゝも、みだらな事をなさいますな、式作法のお家に居ながら、あた不行儀な、ちとお嗜みなされませいなあ。（トおかる振袖にて打つ、伴内打たれながら、）

伴内　いや、お嗜みなされまいわいなあ。

竹〽ほんにそもじを思ひ初め、あるとあらゆる神様や佛さんまへ願掛けても、淸〽つんほう程もきかざれば、遠い田圃も厭はずに、此頃流行の水死佛、竹〽うちや卒堵婆の目を忍び、茶だち鹽だち鯱ほこだち、野中の杉の一本だち、淸〽その輕業におかる坊、爰で逢うたは御利益ゆゑ、竹〽女夫になるとつい一言、言うてくれてもよいではないか、やいの〳〵と寄添へば、淸〽困る所へ奴ども。

ト此内伴内おかるを捉へ、惡身の振よろしくあつて、上手より以前の○△の中間出で、

○　もし〳〵伴内さま〳〵、師直樣が、

△　お尋ねなされてゞござりまする。

伴内　何の用かは知らないが、今居ないと言つてくりやれ。

○　畏りましてはござりますが、女を捉へてじやらくらして、

△　居ないと言つてくれとおつしやつたと、申しませうか。

伴内　あゝこれ〳〵、それを言れて堪るものか、さりとは氣の利かぬ奴だ、人は斯ありたいものだ。

○　心のきかぬもないものだ、式作法の御家に居ながら、

△　あた不作法な、あた不行儀な。

兩人　ちとお嗜みなされませ。

伴内　えゝ、わいらまで同じやうに。

兩人　さあ〳〵早くお出でなされ〳〵。

伴内　あゝ主と病だ、仕方がない。

竹〽面ふくらして伴内は、下部と共に入りにける、淸〽引違へて勘平が、奥を窺ひ立出て。

ト此内伴内中間に引張られて上手へ這入ろ、引違へて勘平出來り。

勘平　何とおかる、今の働きを見やつたか、おれが出て言ふ時は、古いといふが知れてあれば、奴共に
酒代を遣り、まんまと首尾よく仕果せた。

かる　その首尾序に、つい何處ぞで。

勘平　爰でそんな事がなるものか、今日は早う歸りやいの。

かる　えゝ、此儘去ねとは情ない。(トおかる勘平を捉へ、)

淸〽それいつぞやの御代參、佛をだしの束の間の、其樂みが極樂に、竹〽あの世かけての約束
も、蓮の臺の池の茶屋、淸〽人目を厭ひ話す間に、いつしか軒に雨の音、濡れにし跡の嬉し
さは、忘れぬ夢に見るばかり、竹〽つれないわいなとばかりにて、譯も涙に暮れにける。

トおかる勘平を捉へ振あつて、此内伴内出て來て金を落せし思入にて、四邊を搜す、兩人を見て此
中へ這入り。

伴内　大方こんな事だらうと思つた、よくもおれを出し拔いたな、此返報は判官殿へ、此通りを言つて
くれう。

勘平　あゝこれ、それを言はれてなるものか。

伴内　ならずば身共に取持つか。

勘平　さあ、それは、

伴内　言ひ附けようか。

勘平　さあ、

兩人　さあ〳〵。

伴内　勘平返事は、どうでおりやる。（ト是れにて兩人扇にて所作立廻りになり）

〽脇能濟んで狂言も、鷺が名代の末廣がり、〽地紙がようて骨ようて、〽傘をさすなら春の山、〽させほせ傘〳〵、〽傘をはすなら、〽春日山、〽山。

ト此内伴内おかるを捉へようとする振、勘平是れを隔てる振、トゞ上手へ伴内を蹴倒し兩人手を取り、

〽此間に早くと兩人は、腰掛さして急ぎ行く。（ト勘平おかる花道へ這入る、後に伴内起上り、）おのれ逃げようとて逃がさうか、やるまいぞ〳〵。

〽狂言詞で鷺坂が、烏飛びして、えゝ。（ト伴内三番烏飛びの振にて下手へ這入る。）

〔四段目の場〕——本舞臺向う銀張り花の丸の襖、欄間金地鷹の羽の紋散し、總て四段目の道具よろしく、調べにて道具納る。とやはり清元にて。

〽花生にいける花より媚きて、色香まさりし八重一重、物言ふ花の奥御殿。

ト腰元四人褥鼻紙臺煙草盆、銀張りの花筒へ櫻を活けしを持ち出で、舞臺眞中へ直す、跡より顔世御前、襠のこしらへにて出來り。

〽顔世御前が我が夫の、御氣慰めの活花も、閉ぢし御門の開くやう、祝せど若しや此儘に、水上げかねて散る事の、あればと胸の晴れやらぬ、曇り勝ちなる花の頃。

ト顔世花を見てよろしく思入あつて眞中に住ふ。

一　申し御臺樣、御覽遊ばしませ、今を盛りの櫻花、

二　枝にあるより生々と、蕾も殘らず開きしは、

三　今にお上の御沙汰にて、御門の開く瑞相ゆゑ、

四　殿樣に御覽に入れましたら、嘸お悦び、

四人　遊ばしませう。

顔世　さあ、此櫻の花のやうに、お咎めが開けばよいが、今が今とて九太夫が、殿樣の御越度は大切な

る饗應の御役目を蒙りながら、執事たる人に手を負はせ御館を騷がせしゆゑ、所詮御免の御沙汰
はないと、言やつたからは、殿樣には、

四人　えゝ。

顏世　あ今更いうても返らぬ。お咎めも自らゆゑ。

〽鶴ケ岡へ召されし時、御前の首尾も義貞樣の兜の目利き濟みしゆゑ、長居は恐れと龍頭、五枚重ねのつま重ね、主ある此身に戀をなす、道も白髮の師直面、憎さも憎し添削と古歌を送りて恥しめしが、遺恨となつて御家の大事、よくない事をいたせしと、託ち涙に暮れたまふ。（ト顏世振よろしくあつて思入、）

〽お道理さまやと腰元が、勞りかしづく折こそあれ、爰へ馳せ來る大星力彌。

トばた〳〵になり、花道より力彌出來り。

力彌　はつ、御臺樣へ申し上げまする。

顏世　おゝ、力彌何事ぢや。

力彌　表御門の扉裏へ、凡そわたり三尺餘りの蜂の巢のありし所、山蜂一疋飛び來り巢の邊を廻りしを、小蜂出で螫し殺せしが、暫くありて山蜂數千飛來り、挑み戰ひしが、殘らず小蜂を刺殺し、飛び

去りましてござります。

顏世　おゝ聞き及ぶ蜂の戰ひ、凶事か吉事か知れざれど。

力彌　今日御上使の御入りといひ。

腰元四人　御閉門の御免なるか。

力彌　但しは殿の御身の上か。

顏世　あ、心に掛る事ちやなあ。

淸〽案じ煩ふ其處へ、天窓押へて斧九太夫。

トばた〳〵になり、花道より九太夫袴一本ざしにて、天窓へ肩衣を冠り、押へながら出來り、

九太　あゝ痛や、くるしや〳〵。

力彌　これ〳〵九太夫殿、如何召された〳〵。

九太　如何どころか此やうに、山蜂めが刺し居つて、天窓中が腫れ上りました。

ト肩衣を取る、腫上りたる好みの鬘。

顏世　ほんにまあ九太夫が、蜂に刺された、其天窓は、

腰元四人　福助のやうでござりますわいなあ。

〽折しも雷の鳴る如く、又も飛び來る山蜂に。(ト風の音になり、指金の蜂大分飛び來る。)

九太 あれ〳〵、又山蜂めが刺しに來居つた。

力彌 御臺樣には此場を早く、

顏世 おゝ、刺されぬうちに奧の間へ、

腰元四人 早うお越し遊ばしませ。

〽飛びかふ蜂を拂ひ除け、一間の內へ入りたまふ。

ト腰元扇にて蜂を追ひ、顏世先きにみな〳〵奧へ這入る。

九太 あゝ苦しや〳〵。

〽あゝ苦しやと九太夫が、追へど拂へど群がるにぞ、仕方泣き聲助けてと、いふに力彌が扇もてあなたこなたへ追廻せば、風に散り來る花吹雪、ちらり〳〵と飛廻り、果てしなければ奧の間へ、扇投げ捨て入りにける。

ト此內力彌扇にて蜂を追ふ振よろしくあつて、ト群がる蜂へ扇を投げ附け奧へ這入る。

〽跡に殘りし九太夫が、數千の蜂に刺し通され、扇兩手に半狂亂、狂ひ狂うてくる〳〵〳〵。

ト九太夫扇を兩手に持ち、蜂を相手に狂ひの振になり。

清〽巴の字に廻る曲水の、杯ならでくる〳〵〳〵、あいたゝゝゝゝおいたゝゝゝゝ、くるり〳〵る〳〵、あいたゝゝゝくる〳〵〳〵。

ト此内木琴入りの合方にて、九太夫肩衣を冠り、石橋の振よろしくあつて。

清〽狂ひ狂うて門外へ蜂に追はれて。

ト三重にて蜂に追はれて花道へ這入る。是れにて清元連中を消し道具替りになる。

（五段目の場）＝＝本舞臺下手淨瑠璃臺、人形の砂手摺を引出し、向う五段目の書割、手摺上の方へ松の立木、掛稲稲村人形の道具よろしく、下手に竹本の紋附きし出入り口の揚幕を掛け、雨車雷の音にて道具留る。と上手打返し、竹本連中居並び。

竹〽別れ行く、〽降りしきる鐵砲雨のしだらでん、月なき夜半に稲妻の、光り便りに駈け來るは、斧九太夫が悴定九郎。

ト人形遣ひ、鼠辨慶の着附、市村の上下縞にて、定九郎の人形を持ち出來る。

〽胸に一物四邊を見廻し、詞〽やれ〳〵怖しい今の雷、それはさうと、金を持つたさつきの親仁め、慥に此道へ來るは必定。おゝ幸ひの此稲村、爰に待受け、さうだ〳〵。

〽又も降り來る雨の足、人の跫音とぼ〳〵と、道は闇路に迷はねど、子ゆゑの闇に突く杖も直なる道も堅親仁、詞〽あゝ今の雷さまで、雨もちつと小降りになつた、爰から在所へは最う一里足らず、どりや一休みしてから行きませうと、言ひつゝ傍の稲村の、小陰へ暫し雨宿り、詞〽やれ〳〵息せきしたせゐか、やもがつかりと草臥れた、嘸今頃は婆や娘が待兼ねて居るであらう、早ういんで此金見せ、悦ぶ顔を見るが樂みぢや、と呟く、定九郎〽後へ突出す白刃、詞〽やい老ぼれめ、おれが言ふ事をよく聞けよ、跡の立場で見ておいた、われが慥に持つて居る縞の財布の五十兩、金のあるのを見てする仕事、こま言ぬかさずくたばれと胸先へ突き附くれば、早替り與一〽まあ〳〵待つて、下さりませ、はあゝ是非に及ばぬ、成程これは金でござります、此金は私がたつた一人の娘が、命にも替へぬ大事な男がござりまする其男の爲に入る金、それをお前に取られましては娘は何といたしませう、これなうどうぞ助けて下さりませ、これ拜みますわいなう〳〵、え、誰ぞ來てくれぬかい、あれえ〳〵と呼はれど、後先き遠き山彦の谺に哀れ催せる、早替り定九郎〽えゝやかましいわい、其金でおれが出世すりや、其惠みでうぬが忰も出世するわい、人に慈悲すりや惡くは報はぬ、あゝ可愛やとぐつと突く、與一〽うんと手足も七轉八倒、年も六十四苦八苦、敢なく息は絶えにけり、定九郎〽仕濟まし

たりと件の財布、くらがり耳の摑み讀み、久し振りの五十兩、忝けないと首に引掛け、死骸を直に谷底へ、刎ね込み蹴込み泥塗れ、ゝゝはねは我が身に掛るとも知らず立ちたる向うより、あはやと見送る定九郎が、脊骨へ掛けてどつさりと肋へ拔ける二つ玉、うんともきやつとも云ふ間なく、燻り返つて死したるは心地よくこそ。

ト本鐵砲の音して、定九郎の人形よろしくあつてばつたり倒れる、知せに附き前の人形を手摺上へあほり、人形遣ひの體を消し、六段目盆踊の鳴物になり。

（六段目の場）――本舞臺向う暖簾口、上手に張交ぜの戸棚、下手に鐵砲簑笠掛けあり、總て六段目世話場の道具、盆踊りの鳴物にて道具留る。ト下手張物打返し、爰に岸澤連中居並び、直に淨瑠璃になり。

岸澤〽戀の山崎川をば隔て、舟がなければ逢ふ事ならず、水の淺瀨を步行にて行こと、それえそれえ、脛もあらはにどんぶりこ、中へはひればそれ首ツたけ、よい〳〵よい〳〵よいやさ。

ト此內暖簾口より角兵衞白髮鬘、山達附ほくそ頭巾のこしらへ、盆太鼓を叩き、源八同じこしらへにてれうはちを持ち、おかや白髮鬘婆あのこしらへにて、白の襦袢小紋の着附にて、澁團扇を持ち踊り

ながら出來りよろしく振あつて。

彌八 やれ〳〵婆あさん、御苦勞々々、まあ一服やつたがよい。

かや 久し振りで踊つたので、腰がめり〳〵いふやうだ。

彌八 いや此村で手踊りの、上手なはこなたゆゑ、取込みのあつた中で氣の毒だけれど、師匠樣に賴んだのだ。

ト此内右の合方にて、角兵衞上手に一人太鼓を叩きながら踊り居る。

かや おい、角兵衞どのはまだ踊つて居やつしやるか、これ〳〵一服呑んで又やらつしやれ。

彌八 どうして〳〵、かな聾だから、そんな事では聞えない。

ト是れにておかや角兵衞の傍へ行き、もうよいといふ思入をして見せる。

角兵 あゝ一服やつて又遣るのか、そんなら早くさう言へばよいに。

彌八 言つたとて聞えねえ癖に。

かや 自分では聞える氣か知らぬ。

角兵 これ、何をこそ〳〵話しをするのだ、四邊近所に遠慮はねえ、畑中の一軒家だ、話しをするなら大きな聲をしろ。

彌八　誰が遠慮をするものだ、大きな聲をして居るのだ。
角兵　まだこそ〳〵と小さな聲で、おれの事を悪くいふな、手前達が何を言つたとて、此狸に叶ふものがあるものか、睾丸ばかりが十人前だ、悔しくば大きくして見ろ飴細工の吹物と違つて、滅多に大きくなりやあしねえ。
彌八　尤だ〳〵こなたに續く睾丸はねえ。
かや　これ角兵衞どの、誰も悪くは言ひはしない、機嫌直して一服呑ましやれ。
角兵　何だ酒を呑ませる、そいつあ有難い。
彌八　最う呑みたがるのだ。
かや　いや酒はないが、親仁どのと勘平どのゝ二七日が、丁度盆に當つたゆゑお迎ひ團子を拵へたが食はつしやらぬか。
彌八　それは何より御馳走だ、甘いものなら何でもいゝ。
かや　甘氣といつては少しもない。鹽餡ばかりだがどうでござる。(ト重箱を出す。)
角兵　婆あさん酒はまだか、何だ團子か、團子は眞平だ。
彌八　お前の目にはどうだか知らぬが、此狸親仁は與一兵衞に何とよく似て居るではないか。

かや　されば他人の猿似とやらで、親仁どのに生寫しだ。

彌八　どうだえ、お前茶呑友達に親仁を貰ふ氣はないか。

かや　ほんにめつぽふ彌八といふが、滅法界なことを言はつしやるな、親仁どのが死んでから半分あの世へ行つた氣で、襦袢がはりに此やうに經帷子を着て居ます、常談にもそんな事を言はつしやるな。

彌八　こいつは大きにしくじつた。

〽後生願ひに狩人も、盆は休みの寺參り。

ト花道より種ケ島の六山逹附狩人のこしらへにて煙管を持ち、跛の振にて在所娘お市振袖にて、火繩を結へし竹を持ち出來り花道にて。

〽筒は持たねど道草に、火打がはりの竹火繩、日に五匁か十匁その鐵砲の玉煙草、火皿へすくふ小娘を、連れて野道をがつくりこ、跛引き〳〵來りける。

ト此內六藏跛の思入にて、兩人振あつて舞臺へ來り。

六藏　こりや二人とも、早かつたな。

角兵　おゝ種ケ島の六か。

彌八　待つて居たく。
六藏　ちよつと急な用が出來て、稽古に來るのが遲くなつた。
かや　さつきから二人の衆も、お前の來るのを待つてゞあつた。
六藏　嘸待ち遠でござつたらう。
彌八　これ種ケ島踊りに遣ふ鳴物も、鉦太鼓もねうはちも、さつき寺から借りて置いた。
六藏　それぢやあ稽古せえ出來れば、今夜から踊れるな、大方こんな事だらうと思つたから、道を急いで來たが、知つての通り跛だから駈出て來る事が出來ねえ。これお市ばう、こつちへ這入らぬか。
お市　はい、御免なさりませいなあ。
彌八　こうく種ケ島、この娘はどこの娘だ、
六藏　こりやあ又八新田の、市左衞門の娘だ。
彌八　むゝ、あの鼻の赤い男か。
かや　やれく大層大きくなつたの。
角兵　おゝお市坊、踊りに來たか、よく來たく。
六藏　是れが親仁の市左衞門は、おれの内に居た男、親子とも遁れぬ中ゆゑ、婆あさんも彌八どのも賴

みます。

彌八　あい〳〵承知しました。

かや　京へ奉公に行つたと聞いたが、いつ在所へ歸つたのだ。

お市　はい、此間戻りましたわいな。

角兵　これ〳〵婆あさまや、此娘はおれが名附親だ、こなた仕込んでやつて下せえ。これ〳〵お市ばう、よく賴め〳〵。

お市　どうぞお賴み申しますわいなあ。

かや　是れから先きはどのやうにも、わしが世話をして遣ります、それはさうと是れまでは、何處に奉公して居たのぢや。

お市　はい、舞妓さんの所に居りましたわいな。

彌八　それぢやお踊りはうまかんべい、何ぞ一番見たいものだ。

六藏　何ぞ手見せに踊つたがいゝ。

お市　それぢやというて皆さんの前で。

かや　はて、其遠慮には及ばぬわいの。

彌八　さあ〳〵時代に、所望だ〳〵。(ト是れにてお市團扇を持ち前へ出て、端唄模樣の振になり、)
〽時鳥々々聞けば珍らし初戀に、はれて人目が有明の、月に焦れて居さんすか、それでも行交ふかけ橋の、空にせかれて居るわいなあ。(トお市振あつて、)
　よう〳〵、親は居ねえか〳〵。
かや　ほんにうまいものぢやわいの。
角兵　これ〳〵、みんななぜ褒めて遣らねえのだ。
彌八
六藏　今褒めて居る所だ。
お市　伯父さん、お前には聞えないのだよ。
角兵　何だ、おれに踊れか、おつと合點だ〳〵。(ト角兵衞立掛るを六藏留めて、)
六藏　これさ、誰もお前に踊れと言やあしねえよ。
かや　これお市坊、こちの村にも彌八どのや六どのといふ、踊りの上手があるぞえ。
角兵　どれ、踊つて見せようか。(ト又立ちかゝるをおかや留めて、)
かや　あゝこれ、お前とわしは樂をして居るのだよ。
彌八　それぢやあ一番踊らうか。(ト盆太鼓を持ち前へ出で、)

〽奴五郎三は伊達者でござる、浴衣目に立つ辨慶縞に、七つ道具の巾着胴亂、腰にふらりと並べて提げて、下駄は朱鼻緒組造り、五條の橋へと拍子にかゝり、とん〳〵たうがらし踏みならす〳〵。(ト彌八太鼓たゝ叩きながらよろしく振あつて、)

これ種ケ島、此足拍子は踏めまいがな。

六藏　なに、踏めねえ事があるものか。

〽奴五郎三は伊達者でござる。浴衣目に立つ辨慶縞に、七つ道具の巾着胴亂、腰にぶらりと並べて提げて、下駄は朱鼻緒組造り、五條の橋へと拍子に掛り、

ト六藏跛の振にて轉ぶ。

彌八　それ、見たことか踏めまいが、これ斯う踏むのだ。

〽下駄は朱鼻緒組造り、五條の橋へと拍子に掛り、とん〳〵たうがらしと踏みならす踏みならす。(ト源八拍子を踏む、)

六藏　えゝ悔しい、どうかして遣りたいものだ。

お市　若し是れをはいて踊らしやんせ。(ト下駄を片々出し、六藏にはかせる、六藏立つて見て、)

六藏　こいつは妙だ。

〽下駄は朱鼻緒組造り、五條の橋へと拍子にかゝり、とん〳〵たうがらしと踏みならす踏みならす。（ト六藏拍子を踏む）

角兵　さう手前達に踊られちやあ、おれも見ては居られねえ。（ト立上り、）こちの與一兵衞どのも踊りが好きで、毎年盆にはおらと一緒に、念佛踊りをやつたものだ。どれ、手向けに踊りをやらかさうか。

ト角兵衞手拭を冠り、

〽嫁に行くとて洗濯まで覺え、臍が出臍で嫌はれた、しよ事がない〳〵、嫌ふ顏をば鏡で見れば、我が身ながらもぞつとする、しよ事がない〳〵。

ト角兵衞振あつておかやわつと泣く。

かや　其踊りを見るにつけ、與一兵衞どのがござつたら、一緒に踊らつしやらうと思ふと、悲しうて〳〵ならぬわい、はつくしよ。

彌八　尤もだ〳〵。

六藏　何しろ風でも引いてはならぬ、肌を入れさつしやい〳〵。（ト肌を入れてやる。）

角兵　これ〳〵、何をそんなに泣くのだ。

かや　お前が與一兵衛どのに似て居るからだ。はつくしよ。
〽折角忘れて居たものを、はつくしよ、お前に踊られ、はつくしよ、與一兵衛どんを今見るやうに、はつくしよ、思ひ出し、悲しいわいのと、はつくしよ、兩の手に擦る目許は、はつくしよ、皺だらけ。（ト三人を捉へ口説きの振よろしくあつて、）

彌八　お丶尤だ〳〵、そんなにこなたの嚔の出るのも、爺さまが噂してゞあらう。

六藏　然し今更言つても仕方がねえ、機嫌直して、わしらに盆踊りを敎へて下さいな。

かや　それだと言つて悲しいので、寸白が起つて腰が伸せない、あいた丶丶丶。

彌八　これ〳〵婆あさま、そんな事を言つてはいけねえ。

六藏　今夜踊りに出るのだから。

お市　どうぞ敎へて下さんせいなあ。

かや　それぢやあ我慢をして敎へるから、わしがする通りを眞似さつしやい。

源八 六藏　合點だ〳〵。（ト皆々肌脱ぎになり、角兵衛是れを見て、）

角兵　お丶踊りの稽古をするのか、おれは文句が聞えねえから、當振で踊るぞ。

彌八　どうとも勝手にするがい丶。

六藏　さあ〳〵踊りの始まり〳〵。

かや　あいたゝゝゝゝ。

ト　おかや腰の痛む思入にて、腰を曲げて立上る、皆々それを見て立上り、眞似をして腰を曲げて出て、手拍子を打ち。

〽戀の山崎川をば隔て、船がなければ逢ふ事ならず、水の淺瀨を歩行にて行こと、それえそれえ。（ト皆々おかやの通り腰を曲げて踊る、角兵衞皆々のを見て踊る。）

あこれ〳〵、もつと腰を伸すのだ。

六藏　それだといつて、お前が腰を曲げて居るがな。

彌八　切ねえ思ひをして、眞似をするのだ。

〽脛もあらはにどんぶりこ。

かや　もつと伸すのだ〳〵。（ト少し腰を伸す。）

兩人　合點だ〳〵。

かや　えゝ、もつとぐつと伸すのだ〳〵。

ト　おかや自分の腰を伸し、後へ仰向けに轉覆り目を廻す、六藏彌八介抱なす。

六藏　是れさ、それ所ぢやあねえ、目を廻したのだ。
彌八　婆あさんやあい〳〵。
兩人　婆あさんやあい〳〵。
六藏　此婆あさんも善方だから、そんな事では聞えめえ、これがいゝ〳〵。（ト下に鐃鉢を叩き。）
彌八　婆あさんや〳〵。
六藏　結構人な婆あさんや。
兩人　婆あさんや〳〵。

ト是れにておかや髮をさばき、下に着て居る經帷子肌脫ぎになり踊り出す、皆々鉦太鼓鐃鉢にてよろしく。

唄〽はや入相の鐘の音に、踊りの時刻と鉦太鼓、打ち連れ立ちて、

ト三重にて皆々踊りながら下手へ這入る、後踊り地になり、日覆より紅染の長暖簾をおろし、總て七段目前の道具よろしく納る。

唄〽花に遊ばゞ祇園あたりの色揃へ、東方南方北方西方彌陀の淨土か、塗にぬり立てひつかりひか〳〵、光り輝く箔や藝妓に、如何な粹めも現ぬかして、ぐでんどろつくわい〳〵〳〵の

わいとさ。

ト暖簾口より太鼓持仲居八人對の衣裳にて、箱枕、扇を持ち出來り。

太鼓一　時に今夜由良之助大盡さまから、枕拍子のお好みが出たが、おらあさつぱり忘れてしまつた。

同二　おれも久しく遣らねえから、まるで形なしだ。

同三　何にしろ爰で一番溫習つて見ようぢやあねえか。

仲居お源　ほんにそれがようござんす、わたしらも久し振ゆゑ、

お吉　拍子を忘れてしまつたわいなあ。

お大　どうぞ溫習つて下さんせいな。

太鼓四　それぢやあ二人づゝ左右に分つて、

仲居お龜　さあ〳〵枕拍子の、

皆々　始まり〳〵。

〽松になりたや、有馬の松になりたいな、そりやなぜに、富士の葛に這ひまつはれて、よれつもつれつ一夜の情に、こちや逢ひたいな。

〽雪になりたや、箱根の雪になりたいな、そりやなぜに、富士で流れて、三島女郎衆の肌に

觸れたいな。

皐 〽月になりたや、武藏野の月になりたいな、そりやなぜに、月に雁ながめを添へて、仇な尾花に色どる風情が見たいな。（ト此内皆々枕拍子、扇拍子よろしくあつて）

皐 〽扇拍子も一對に、放れぬ仲居太鼓持、拍子取り〳〵。

ト踊り地を冠せ、皆々暖簾口へ這入る、知せに附き長暖簾を切つて落す。

（七段目の場）――本舞臺七段目一力奧座敷緣先遠見の道具よろしく納る。と爰に出語り臺後衝立銀張り、花紅葉の模樣、爰に竹本鍋尾太夫、豐竹矢的太夫、上下太夫にて見臺を控へ、鶴澤市勇齋、同絲玉上下三絃を持ち、よき所まで押出す、前彈きあつて淨瑠璃になる。

鍋尾矢的 〽此里に二とは下らぬ一力に、由良大盡は晝夜とも、他愛仲居や太鼓持、浮きに浮かるゝ大騷ぎ、藝子が聲の高調子、彈く三味線も音〆よく。

兩人 〽世にも因果な者ならわしが身ぢや、可愛男に幾世の思ひ、えゝ何ぢやいな、置かしやんせ。

ト是れにおかる紫裾模樣の着附、手に硯箱卷紙を持ち、人形振にて出來り。

矢的 〽忍び音に鳴く小夜千鳥。

輕〽奥で諷ふも身の上と、おかるは思案とり〳〵に。（ト平右衛門下手より人形振にて出來り）

矢〽折に出逢ふ平右衛門、〽いやなに、ちと物が尋ねたい、此邊に山崎より參つて居る、かるといふ女がある筈だが、心當りもあらば、どうぞ敎へてくれまいか。

輕〽何ぢや知らぬが、用なら勝手で問うて下さんせいなあ。

矢〽是れは又すげねえ女だわい、さうであらうがさう言はずと、どうぞちよつと敎へてや、そちや妹ではないか。

輕〽や、お前は兄さん、恥かしい所で逢ひましたと、顏を隱せば。

矢〽えゝ苦しうない〳〵、關東よりの戻りがけ、母人に逢うて委しう聞いた、夫の爲お主の爲よく賣られた、出來した〳〵出來したなあ。

輕〽さう思うて下さんすりや、わしや嬉しいわいな。詞 したがまあ悅んで下さんせ、思ひ掛けなう今宵請出される筈。

矢〽や、それは重疊、して何人のお世話で。

輕〽それお前も御存じの、由良之助さまのお世話で。

矢〽何ぢや、由良之助さまに請出される、むう、それは下地からのお馴染かな。

輕〽いゝえ何のいなあ、此中から二三度酒の相手、夫があるなら添はしてやろ、暇がほしくば暇やろと、結構過ぎた身請ぢやわいなあ。

矢〽むう、すりや其方を、早野勘平の女房と。

輕〽いえ〳〵知らずぢやぞえ、親夫の恥なれば、明かして何の言ひませう。

〽むゝ、すりや本心放埒者、お主の仇を報ずる所存はないに、こりや極つたわい。

輕〽いえ〳〵、あるぞえ〳〵。

矢〽あるとは、どうして。

輕〽高うは言はれぬ、これ、斯う〳〵と囁けば。

矢〽やゝあゝゝゝ、むう、すりや其文を慥に見たな。

輕〽あい残らず讀んだ其跡で、互ひに見合す顔と顔、それからじやらつき出して、つい見請けの相談ぢやわいなあ。

矢〽むう、すりや其文残らず讀んだ、其跡で。

輕〽あいなあ。

矢〽讀めた。

輕〽びつくりするわいなあ。（トおかるびつくりする思入、此内床の合方になり、）

矢〽こりや妹、とても遁れぬそちが命、身共にくれよと拔打ちに、發止と切れば、

輕〽ちやつと飛びのき、これ兄さん、わしには何誤り、勘平どのといふ夫もあり、まこと兩親あるからは、こなさんの儘にもなるまい、請出されて親夫に逢はうと思ふがわしや樂み、どんな事でもあやまりませう、許して下んせ許してと、手を合はすれば。

矢〽平右衞門拔身を捨てゝどうと伏し、悲歎の涙に暮れけるが、可愛や妹、わりやお何にも知らぬな。

輕〽なに、知らぬとはえ。

矢〽さ、親與一兵衞どのはな、六月廿九日の夜人に切られて、お果てなされたわやい。

輕〽やあ、それはまあ。

矢〽あゝこりや／＼／＼、びつくりするな、未だ外に最一つ、どえらいびつくりの親玉があるわいやい、請出されて添はうと思ふ勘平はな。

輕〽勘平どのは、どうさしやんしたえ。

矢〽さあ、其勘平は。

錦〽勘平どのは。

矢〽さ、勘平は。

錦〽勘平どのは。

矢〽やつぱり勘平だわやい。

錦〽兄さん、勘平どのは外によい女房さんでも、出來たといふやうな事かいなあ。

矢〽え ゝ、そんな陽氣な事ぢやあないわい。

錦〽そんならどうしたのぢやえ。

矢〽お ゝ、腹を切つて死んだわやい。

錦〽え ゝ ゝ ゝ ゝと、びつくり差込む癪。

矢〽も、此事は必ず言うてくれるなと母者人のお賴みなれど、言はねばならぬ此場の仕儀。やあ大變だ〳〵。こりや〳〵のるな〳〵。是れだから言ふまいと思うたのだ、こりやまあ何うしたらよからう。こりやおかるやい、妹やあい。

錦〽あ ゝ〳〵。

矢〽お ゝ氣が附いたか。

錣〽あゝ兄さん、勘平どのわえ。
矢〽えゝ又問ふかいやい、勘平は腹を切つて死んだわやい。
錣〽やあ〳〵それはまあほんかいなあ。これなう〳〵と取附いて、兄さんどうせう。
矢〽おゝ尤だ。
錣〽どうせうぞいなあ
矢〽おゝ道理だゞ、尤もだ〳〵、様子話せば長い事、おいたはしいは母者人、言出しては泣き、思ひ出しては泣き、娘かるに聞かせたら泣き死にするであらうが、必ず言うてくれるなとのお頼みゆゑ、言ふまいとは思へども、とても遁れぬそちが命、其譯は忠義一途に凝りかたまつた由良之助殿、勘平が女房と知らねば請出す義理もなし、元より色には猶耽らず、見られた狀が一大事、請出して刺殺す思案の體と見て取つた、縱令さうなつても壁に耳、外より漏れてもそちが科、密書を覗き見たるが過り、殺さにやならぬ。人手に掛けうより我が手に掛けて大事を知つたる女、妹とて許されず、それを功に連判の數に入つてお供に立たん、〽小身者の悲しさは、人に勝れた心底を見せねば數には入れられず、聞分けて命をくれ死んでくれ妹と、事を分けたる兄の詞。

錦〽おかるは始終せき上げ〳〵、便りのないは身の代を役に立ての旅立か、暇乞にも見えそなものと、恨んでばかり居りました、勿體ないが父さんは非業な死でもお年の上、勘平どのは三十になるやならずに死ぬるとは、嘸悲しかろ、口惜しかろ、逢ひたかつたであらうのに、なぜ逢はせては下さんせぬ、親夫の精進さへ知らぬがわたしが身の因果、何の生きて居りませう、お手に掛らばかゝさんがお前をお恨みなされませう、自害した其跡で、首なりと死骸なりと、功に立つなら功にさんせ。さらばでござんす、兄さんと、言ひつゝ刀取上ぐれば。

矢〽おゝ妹出來した、それでこそ勘平が女房、今殺すは不便なれど、永い未來で勘平と夫婦になるを樂しみに。

錦〽あい、嬉しうござんす兄さんと、覺悟極めし健氣さを。

矢〽見る兄の身は今死する、妹に勝る憂き思ひ、是れが此世の別れぞと。

錦〽互ひに顏を見合して、落る涙は加茂川に、いとゞ〽水増すばかりなり。

ト此時踊り地になり、仲居太鼓持皆々出來り。

兩人〽別れを急ぐ忠臣貞女、人の手本と假名がきに。

皆々　おかるさん、さあ、ござんせいなあ。

ト下部△出で、覺悟と掛かるを平右衛門これを捻ち上げる。

〽同 譽れは世々へ。

ト平右衛門きつと奥を見込み、おかるどうせうといふ見得。三重にて。

幕

忠臣藏七段返し（終り）

判官ならぬ
　牽頭を
辨慶といふ
名によりて

滑稽俄安宅新關

解説

「滑稽安宅の新關」は、慶應元年十月、作者五十歳の時、市村座に書卸された。其時の役割は、坂東彦三郎（戸樫左衛門、五斗兵衛）、澤村訥升（横山太郎、猿廻し與次郎）、市川團藏（武藏坊辨慶）、市村家橘（煙草屋源七、奴助平）、尾上菊次郎（秋月娘朝顏）、市川新車（召使お初）、坂東三津五郎（杉酒屋のお三輪）、坂東吉彌（巡禮お鶴）市村竹松（伊吾）等であつた。振附は花柳壽輔。富本連中には豐前太夫、豐珠齋、名見崎長佐、忠五郎等。清元連中には、延壽太夫、家内太夫、順三、千藏等。竹本連中は戸和太夫、姫路太夫、鶴澤市作等であつた。

滑稽淨瑠璃としては代表的なるものゝ一つで、現今に至るまで、屢々上演されてゐる。彦三郎が戸樫の役で、藝當をする所を見てゐて、自然に釣込まれる味ひが無類であつたと言はれてゐる。

滑稽俄安宅新關

安宅新關の場

竹本連中
清元連中
富元連中

〔役名〕──關守戸樫左衞門、五斗兵衞、横山太郎、猿廻し與次郎、天川屋丁稚伊吉、軍兵四人、煙草屋源七、奴助平、武藏坊辨慶。秋月娘朝顏、鏡山のお初、杉酒屋お三輪、巡禮おつる、其他。〕

本舞臺一面の淺黃幕、時の太鼓にて幕明く。と頭取出て、淨瑠璃名題、太夫連名、役人替名を讀み、其爲口上左樣とあつて、又時の太鼓になり、頭取上手へ這入り、知せに附き淺黃幕を切つて落す。

〔安宅新關の場〕──本舞臺三間の間高二重本庇、戸樫の紋附きし幕を張り、向う大紗綾形の襖、本緣附白洲階子、二重後上手に琴三絃胡弓を立て掛け飾り、下手に太鼓銅鑼を並べ、上の方角もの、關門、左右柵矢來、すつと上手に霞幕を張りし出語り臺、下手淨瑠璃臺柵矢來の打返し、よき所に「一藝これなき者は、堅く通さゞる者也」と記せし高札を建て、總て安宅新關の體、平舞臺上手に○△の軍兵二人、手綱達附一本差しのこしらへにて控へ、下手に□◎軍兵二人同じ拵へにて控へ居る、時の太鼓にて道具納る。

○此度主人富樫の左衛門、一藝ある者を召抱へんと、此所へ新關を立て、
△先づ山伏修驗を始めとして、或ひは巡禮、古手買、瞽女や按摩にいたるまで、
□音曲踊り手品輕業、何なりとも其者の、得たる藝をば勤めさせ、
◎勝れし者を召抱へ、跡は見るを法樂に、故なく關を通しやり、
○既に此程より試し見るに、さて〱無藝なものゝみにて、
△主人の心に叶ひしは、僅か二十か三十人、
□きのふ三人抱へしは、ラッパの音にすてゝこ踊り、
◎又一昨日の五人の者は、どんどこせいの飴屋節、
○さて〱近年流行だが、日がな一日盤臺を、天窓の上へ載せて歩くは、餘程首筋のよい族、
△首筋の強い跡へ今日あたりは、押の強い藝人などが、參るかも知れん。
□いや、最早御出席に間もあるまいから、何れも眞面目な顔をして、
○さらば番頭、
四人　仕らう。
　ト正面を向き二人づゝ控へる、是れをきつかけに、上手霞幕を切つて落す、爰に竹本連中居並び、

下手柵矢來打返し、爰に富本連中居並び、淨瑠璃になり。

富本 〽抑々安宅の新關は、往來の人の隱し藝、ためして三つの琴三味線、竹本〽胡弓の弓を飾り立て、前後を取卷く番卒も、合圖の鐘や太鼓持、富〽襖ひらいて立ち出る、竹〽主人は酒の戸樫とて、富〽機嫌上戸の、竹〽遊藝好き。

ト此内太撥の時の太鼓を冠せ、正面の襖を左右へ開き、奥より戸樫の左衞門白髪鬘立烏帽子大紋小さ刀にて出來り、跡より小姓二人紫の袱紗にて刀を持ち、附添ひ出來り、左衞門眞中へ住ふ、番卒四人辭儀をなす。

左衞 如何に方々、未だ一藝勝れし者、此關を通らざるや。

○ はつ、今朝より我々も、是れにて番頭いたせし所、先づ勝れし藝と申すは、小栗判官が曲馬の一藝、

△ それに續いて放れ業は、菅相丞が博多の曲獨樂、

□ 又いがみの權太郎が、柳行李の手品を遣へば、

◎ 熊谷の次郎直實が、敦盛の寫し繪をうつし、何れも一藝いたせしゆゑ、

四人 通しましてござりまする。

左衛　いや、其やうな藝當は、此程より見飽きたれば、何ぞ珍らしい藝ある者が、早く關所へ參ればよいが。(ト◎向ふを見て、)

◎　いや、仰せに及ばず向うより、山伏めが參りまする。

三人　なに、山伏が來りしとな。(ト立ちかゝる、)

左衛　あこれ、立騷がずと、番頭いたせ。

四人　畏つてござりまする。

竹〽旅の衣はすゞかけの〳〵、露けき袖やしぼるらん、宮〽月の都を立出でゝ、杣のいたどり谷川の水のあそふづ越路潟、竹〽蘆の篠原世を忍び、安宅の關に着きにけり。

ト これへ螺の音を冠せ、花道より辨慶兜巾篠掛水衣達附小さ刀をさし、山伏のこしらへにて笈を背負ひ金剛杖を突き出で、花道にて眞面目に振あつて留り、

辨慶　はて、我が君はじめ四天王に、何處で道が間違つたか、向うは名に負ふ安宅の關、只一人では氣味が惡いが、誰ぞ連れがほしいものだ。

竹〽跡見返れば巡禮が、

ト合方にて、花道よりおつる引詰の島田髷、笈摺手甲脚絆草鞋、巡禮のこしらへにて出來り。

お鶴　もし／＼山伏さま、ちよつと待つて下さりませ。

辨慶　おれを呼ぶのは、何ぞ用か。

お鶴　關をお越しなされますなら、一緒に連れて行つて下さりませいな。

辨慶　おゝ、連れて行つて遣らうとも／＼、おれも一人で氣味が惡く、どうせうかと思つた所だ、さあ

さあ一緒に來やれ／＼。

〽（竹）辨慶大きに力を得、〽（宮）打連れ關所へ立ち掛る。（ト本舞臺へ來り、辨慶下手へ立掛り）

これは南都東大寺より、諸國を勸進いたす者、關をお通し下されい。

◎　なに、南都東大寺の客僧とな。

□　此關を通るなら、何ぞ一藝いたして通れ。

辨慶　なに、愚僧に一藝いたせとな。

○　一藝いたさぬ其者は、

△　一人も通すこと、

四人　罷りならぬ。

辨慶　愚僧に藝をいたせとは、近頃これは難題、一品も藝はござらぬ。

左衛　勸進の客僧とあらば、藝の替りに勸進帳を、小唄節にて讀み上げい。
辨慶　心得てござる。（ト懐より卷物を出し正面を向き眞面目に。）それ、つら〳〵惟れば、
　　ト謠にて言ひ。
〽大恩敎主の秋の月は、涅槃の雲に隱れたまひ、生死長夜の長き夢驚かすべき人もなし、〽一紙半錢奉加の輩、此世は無比の樂にして、〽來世は蓮華の上に坐せん、〽歸命稽首敬つて申す。（ト舟玉節にて辨慶振あつて納り、後へ下る。）
　〽爰に聖武皇帝とて帝の在しましけるが、后に別れ涙にくれ、盧遮那佛をば建立す、
左衛　是れは一段な事であつた、して次に控へ居るは、
お鶴　はい、巡禮にござります。
○　そちが國は何れぢや。
お鶴　はい、國は阿波の德島で、とゝさんの名は十郎兵衛、かゝさんの名はお弓と申します。
○　これ〳〵、其十郎兵衛の娘おつるといふは、小娘な筈だが、こんな大きなのを見た事がない。
お鶴　わたしも國を出た時分は、小さな形であつたれど、とゝさんやかゝさんを五年この方尋ねて歩きそれで大きくなつたのぢやわいの。

△ 如何さま、それでは大きい筈だ。

◎ そちも巡禮の事なれば、御詠歌でも唄つたがいゝ。

お鶴 御詠歌をうたひませうが、どうかしますと鞠唄になりますから、御免なされて下さりませ。

□ 何でもよいから、遣つたり〳〵。

竹本御詠歌 〽ふだらくや岸打つ波は、マリウタ〽三熊野の、宮〽那智のお山にひゞく瀧々。竹〽故郷を遥々爰に、マリウタ〽紀三井寺々々、宮〽花の都に近うなり〳〵。

ト御詠歌と鞠唄にて、おつる振あつて納る。

□ して巡禮は、西國か坂東か。

お鶴 はい、西國でござりまする。(ト辨慶前へ出で、)

辨慶 やあ、最前から白い装で怪しい奴と思つたが、西國とあるからは、さては平家の餘類だな。

お鶴 何を言はしやんすぞいな。(トおつる辨慶を柄杓で打つ眞似をする、)

辨慶 我に柄杓を差し附けしは、いよ〳〵以て船幽靈。どれ一祈り祈つてくれん。

竹〽珠數さら〳〵と押揉んで、のうまくさんまんだばさらだせんだと、大聲上げて祈るにぞ。

ト辨慶珠數を擦つておつるを拜む、おつる船幽靈の思入にて、柄杓を持ち兩人寸振あつて、

左衛　かしましい、通り居らう。

辨慶　はつ。

竹へ通れといふに山伏は、富へ虎の尾を踏む毒蛇の口を、遁れたる心地して、竹へ陸奥の國へぞ。

ト辨慶笈を背負ひ、上手へ這入る、お鶴跡を追つて這入る。

富へ跡へ一群取合はぬ連を結びし苧環や。

ト出の鳴物になり、花道より伊吾角大師の鬘、着流し、胸前垂のこしらへ、太鼓を紐にて斜に肩へ掛け、片手に誂へ辨慶の人形を持ち、太鼓を叩きながら出來る、續いて横山太郎、上下大小草履のこしらへにて春駒に乗り出來る、跡よりお三輪振袖のこしらへをだまきを持ち出來り、花道へ留り。

竹へどんといふ名は太鼓より、我が身に伊吾と太郎どの、富へハイシイ道中乗り歩く、其春駒の馬士唄を、へ謳ふお三輪も諸共に、富へ浮れ興じて、竹へどんつくどん。

ト三人振あつて留り。

太郎　やあ、人形を持つて居るから、おらは淺香だと思つたら、そなたは知らぬ丁稚どの。

三輪　ほんにわたしも寢太郎だと、思ひ切つて居りましたが、お前はどこの小僧さんだえ。

伊吾　おいらは天川屋の丁稚で、伊吾といふ拔作よ。

太郎　丁度おらとはよい道連、もう一乘り乘出さうか。

三輪　乘出すはよけれど、向うに關所がござんすぞえ。

伊吾　なに、關所があつたとて構ふものか。

太郎　乘打ち御免と遣つてくりよ。

富〽又も太鼓を打ちつれて、關所の内へ乘込めば。

ト太郎春駒に乘り、伊吾太鼓を叩き、お三輪附添ひ舞臺へつか〳〵と來る、軍兵四人立掛り。

○　やい〳〵、おのれらは爰をどこだと思ふ、街道一の安宅の關だ。

□　假令如何なるものなりとも、一藝なさねば通されぬ。

△　勝れし藝があるかは知らねど、乘打ちいたすは無禮な奴。

◎　何れいづくの者なるか、姓名名乘つて、

四人　一藝なせ。（ト是れにて三人下手に住ひ）

太郎　これ〳〵、そんな怖い顔をさつしやるな、びく〳〵して物が言はれぬ。おらあは横山大膳が忰
名は何とかいうた、おゝそれ〳〵、太郎といふわいの。

◎　これは餘程のぼんただな。して、次なる小僧は。
伊吾　何だ小僧々々と、大層な事を言ひなさんな、斯う見えても、百の錢が二三十ぬけて居る、天川屋義平が丁稚、伊吾といふのはおらがことだ。
○　こいつも同じぼん太郎、圓朝が見たならば、二代目ぼん太にするだらう。
ト此内左衞門お三輪に思入あつて、
左衞　して又娘は何者ぞ。
三輪　はい、私は。（トもぢ〳〵して言ひ兼ねるな）
△　さあ、何者なるか、
四人　早く申せ。（トきつと言ふ。）
左衞　あゝこれ〳〵、靜にいたせ〳〵。（ト目鏡を出しお三輪を見て）いやあ、是れはなか〳〵美しいものだ、定めて唄か淨瑠璃か、何か藝がありさうだ。
□　さあ、何れの者か、
四人　きり〳〵申せ。（ト又立ち掛る）
左衞　あゝこれ〳〵、靜にいたせといふに。其やうな大きな聲をして、蟲でも出ると惡いわい。女には

三輪　優しく申せ。（ト猫撫聲にて、）こりや〳〵おむす、そもじは何れの者なるぞ。

左衛　はい、私は三輪の里の杉酒屋の娘にて、お三輪と申しますわいな。

伊吾　はて、お三輪とはよい名ぢやなあ。（ト左衛門見惚れる、太郎伊吾見て、）

伊吾　やあ、あの親仁は、助平だ、囃してやれ〳〵。

伊吾
太郎　ほうやらほうやら〳〵。（ト手を打つて囃す。）

左衛　やあ、かしましい、默り居らぬか。

太郎　それお目玉だ。（ト天窓を押へてうづくまる。）

○　して、そち達は何ゆゑ是れへ參つたのだ。

太郎　おらあ茶道の珍才と、馬事をして遊んで居たを、淺香が出て叱つたから、馬に乘つて駈出したが生きた馬は自由にならぬが、是れはおらが歩く通り、自由になるので面白いから、爰まで乘つて來たのぢやわいの。

○　して、天川屋の丁稚めは。

伊吾　よし松さんを迷兒にして、旦那さんに叱られたから、太鼓を叩いてぼつちやんの、跡を搜しに出ましたのさ。

△　して又次の酒屋の娘は。
三輪　求馬さんに絲を附け、跡を慕うて來た所、途中で絲が切れてしまひ、行方が知れずうか〳〵と、行方を尋ねて參りましたわいな。
◎　さういふ事なら三人共、何なりと藝をいたせ。
□　藝をいたさにや通さぬぞ。（ト伊吾前へ出で、）
伊吾　げい。（ト大きくいふ。）
○　げいと云ふのは、それでは無いわ。
◎　隱し藝をいたすのだ。
太郎　おらは、何にも藝はないが、
伊吾　もし泣辨慶の信田妻、人形廻しをしませうか。
太郎　おゝ、そちが相手をしてくれるなら、仕ようとも〳〵。
伊吾　そんなら爰で、人形廻しの、
太郎 伊吾　始まり〳〵。（ト伊吾淨瑠璃を語る。）
伊吾〽辨慶は播磨の國で育てられ、三つの上は四つ五つ六う、七つ道具を背に負ひ、五條の橋へ

と急がるゝ。(ト伊吾辨慶の人形を遣ひよろしくあつて、是れより說教になり、)
宮へ爰に死れを止めしは、橫山太郎丁稚の伊吾、このや二人に止めたり、竹へ館に居たら遊び賃、淺香に菓子を貰ふのに、竹へこちも家なら手打蕎麥してやるものを關所にて、竹へ喰うたはお目玉ばかりゆゑ、お腹が北山時雨にて、宮へ淚と洟汁の絕間なく、竹へ泣き辨慶と申すなり。(ト此內太郎伊吾よろしく振あつて納る、)
左衞　さあ、是れからはおむすの番だ、竹に雀の唄をうたやれ。
三輪　其唄をうたひますから、どうぞお通しなされて下さりませ。
左衞　とてもの事に、木遣でうたやれ。
三輪　どうしてまあ其やうな事が、
○　えゝきり〳〵と、
四人　唄やいの、
三輪　はあい。(トお三輪前へ出る、伊吾淨瑠璃を語る。)
伊吾　へうたひまするとなく〳〵も、淚にしぼる振袖は、鞭に手綱よ立上り、
　　トお三輪木遣にて竹に雀をうたふ。

〽竹にさあ雀は品よくとまるヨイ〳〵、止めて止まらぬヤレコレ色の道かいな、エンヤコレハナエ、コレ〳〵エ、コレ、爰なほてつ腹め、エヽヤレヨウヤア。

ト お三輪鉢卷をなし、木遣にて竹に雀の振、これへ○◎掛り、よろしくあつて。

〽ほてつ腹めと叩かれて、馬は驚き跳ね出し。

ト 太郎春駒に乘り、伊吾太郎の腰へ附き、合方になり、兩人拍子を踏み、馬乘の振よろしく。

〽拍子に掛つて跳ね出すを、どつこいさうはと轡づら、〽竹留めればあふられころ〳〵ころ

〽此間に早くと兩人は、跡をも見ずに。

ト 此内左衞門立上り、二重にて同じやうに拍子を踏み、トヾ平舞臺へ下り太郎行きに掛るを留める、馬のはねたる思入にて、伊吾左衞門を蹴倒し、兩人はばた〳〵にて上手へ這入る、これにて富本連中を消す。

三輪　どれ、わたしも一緒に。（ト行かうとするを、左衞門起上り）

左衞　どつこい、おぬしは遣られぬぞ。

三輪　そりや又何で。

左衞　えゝ、何でとは胴慾な。

〽（竹）そもやおぬしが來た時から、〽竹に雀の品よく止めて、晩に我らが隱し藝、提灯ならぬ釣鐘の三つは捨がね四つ五つ、六十越してと嗜んでも、〽止めてとまらぬ色の道かいな。

ト左衞門お三輪を捉へ、可笑味の口說きあつて、

えゝ、ほてつ腹めにしてやりたい。

〽（竹）番卒どもは呆れ果て。

◎ あゝもし〳〵、よい加減になされませぬか。

四人 向うから誰か參ります。

左衞 なに、關所へ掛るものがある。

〽（竹）こりや斯うしてはと眞顏になり。（ト左衞門二重へ上り、眞面目に眞中へ坐り）

きつと番頭仕つれ。

四人 畏つてござりまする。（ト是れにて下手の張物打返し、爰に淸元連中居並び、直に淨瑠璃になる。）

〽（淸）折から爰へ朝顏に、目覺し草の煙草賣り。

ト合方になり、花道より源七淺黃頭巾袖無し羽織、手甲脚絆のこしらへにて、煙草の箱を背負ひ、朝顏切繼ぎ着流し、風呂敷包みを背負ひ、菅笠、杖を突き出來り、花道へ留り。

清〽道から連になりふりも、昔床しき眉入の模様物さへ色替へぬ、竹〽松葉煙草はやはらかく女子たらしについ袖を、清〽彈く三味線の合の手や、〽手を引合うて、竹〽來りける。

ト花道にて振あつて本舞臺へ來る、思入あつて。

源七　へい、私は往來の者でござりますが、

朝顏　どうぞお通しなされて下さりませ。

○　こりや豫て音にも聞いて居ようが、一藝なき者は通さぬぞ。

◎　して其方は、何者だ。

源七　へい私は刻み煙草を賣りまする、源七と申しまする者でござりまする。別に藝と申しまする事もござりませぬが、お屋敷方へ出ますゆゑ、女中衆の御愛嬌に煙草をお求め下さりますれば、音曲役者身振聲色、又は手品百眼、お望み次第いたしまする。

△　素人で其やうに、藝があるとは珍らしい、太鼓持にでもなればいゝに。

□　いやこなたが煙草屋源七なら、連の女は八重桐だな。

朝顏　いえ／＼、わたしや朝顏でござりまする。

○　朝顏は盲目と聞くが、見れば兩眼明らかに、

◎大井川でもある事か、安宅の關へ何しに來たのだ。

朝顔　其大井川で潰れた目は、此やうに明きたれど、言交した四郎左衛門さまのお行方が知れぬゆゑ、爰まで尋ねて來たのぢやわいな。

左衛　して、そちにも何ぞ藝があるか。

朝顔　はて、朝顔の唄をうたひますわいな。

左衛　それは定めて面白からう、その唄から先きへうたやれ。

朝顔　畏りましてござりますが、どうぞあれなる琴を、お貸しなされて下さりませ。

左衛　おつと承知ぢや、それ取つてやれ。

小姓　はつ。

竹〽飾りし琴を差出せば、調子合せて聲張り上げ。

ト小姓飾りある半琴を取つて出す、軍兵取次ぎ、朝顔調子を合せ、松坂節にて唄ふ。

朝顔　〽露の干ぬ間のあの朝顔を、照らす日影の無情よ。うんと濃い醬油樽天井板めくるやうだ。

ト朝顔琴にて唄ひ、是れより淸元へ取り、朝顔頰冠りなし。

淸〽あはれ曇りてや一村雨の、ばんらばら〳〵降れよかし。

コリヤ〳〵〳〵しよ。（ト右の合方にて宜しくあつて納り、下に居て厭らしき思入にて手を突き。）

おはもじうございます。

ト辭儀をなす、此内左衞門二重にて、始終眞似をなし、同じやうに辭儀をなすを。

◎　これは御前、何をなされまする。

左衞　つい面白さに浮れこんで、は、、、、（ト左衞門笑ひ、）やあ大變、捜して來やれ。

◎　何でござります。

左衞　大事の入齒が飛出した。

□　是れでござりますか。（ト拾つて出すを取つて、）

左衞　おつとよし〳〵。さあ是れからは源七とやら、其方も何ぞ遣つて見せい。

源七　畏りましてござりまする。

左衞　それ、三絃を取つてやりやれ。

小姓　はつ。（ト小姓三絃を取つて出す、○取次ぎ、）

○　さあ、是れで何ぞ唄つたがよい。

源七　いえ〳〵、三絃は大不調法、眞平御免下さりませ。

◎ 源七が三味線を、弾かぬといふがあるものか。
朝顔 ほんにお前の音曲を、何れも様がお待兼ねだ。
三輪 勿體附けずと遣らしやんせいな。
源七 左様ならしんぼの皮に、お題を取つて大津繪節をやりませう。
△ それは何より面白からう。
□ さあ〳〵、何ぞお題をお出し下さりませ。
ト是れより見物から題を取り、毎日替りに五題の大津繪節を唄ひ、よろしくあつて。
左衞 いや旨いものだ〳〵、扇歌小さんもなか〳〵及はぬ、とてもの事にもう一つ藝當が見たいものだ。
源七 左樣なら仰せに隨ひ、牛方の女郎買ひを、百眼で御覽に入れませう。
○ 何だ牛方の女郎買ひだ、べらぼうづらな。
源七 其べらぼう面の米造からをそはつたのでござります。もし太夫さん、お賴み申します。
ト是れにてそゝり節になり。
淸元〽八ツ山下の茶屋女、夜風を凌ぐ茶碗酒、〽そゝり節にて橋向う、上る二階の折わるく、
竹〽廻しと聞いて癇癪に。(ト此内源七頭巾羽織を取り、百眼を掛けて出で、)

こえおかつさんえゝとことよ、ちよつと來ねえ〳〵、おら又今時分來たら、廻しのあら知れたこつちやあねえか、廻しがあつたとてごて〳〵した事はあろまいぢやねえか、お前も緣起ならおらが方も緣起だ、一口呑んで行つてくんねえ、えゝぢやあねえか、一寸むまこで酒一本おつくして持て來てくんねえ。一口呑んですつとけえるのだ、女子が居ねえからとて、酒が呑めねえものぢやあねえ、田舍者ぢやあろまいし江戸つ子だ、詞あ聞えても知れさうなものだ、早く持つて來てくんねえ、自慢事するぢやねえけれど、明神さまでも山王さまでも上覽場と來た時は、おらが一つぶつぱたかにや、もうと牛が動きやあしねえ。（ト廊下から人の覗く思入あつて）こう、そこを覗くは誰ぢやえ、えゝあんまり覗いて貰ふまいか、見世物でもありやしまいし、誰だか爰へはいたがえゝ。

清へいへばひよつくり小職の子。

おや、誰かと思つたら小職さんかえ、お前に科はありやあしねえ、ちやつとこつちへ入んねえ、高輪で一口呑んで胸がやけてなんねえ、大けな物で水一杯くんねえ、今度來たら簪買うてやろぜ、早く持つて來てくんねえ。

清へ欺せばぶつ〳〵口小言、返事もせずに出て行けば。

ゑゝ何をぶつ〳〵言やあがるのだ、闇も十五日なら月夜も十五日、おらが方でも通つて見やあがれ、牛でもけし掛けてやるべいに、どう畜生め、小豆殼でも喰やあがれ。

ト此内源七よろしく振あつて、百眼女郎に替り。

清〽折から廊下をばたすたと、入來る女郎に、竹〽後向き、清〽すねる男を流しめに、

女郎 これ九郎さん、生憎今夜は落合つて、早く來ようと思つても、勤め番衆に拔けられず、

清〽堪忍してと寄添へば、

牛方 ゑゝ今時分來やあがつて、大概な化物は引込む時分だ。

竹〽腹立まぎれに突きのくれば、清〽女郎は膝に取附いて。(ト女郎の百眼になり)

女郎 これまでお前が來る度に、惡くしないは枕が證據、(ト新内の口說きになり)

清〽朝の歸りに兩房の、いつも楊枝は掛け流し、生物遣ふ生業に、出先きに怪我のないやうと案じればこそ御祈禱湯で、清めて行つて下さんせと、湯錢までも達引くに、譯も言はずに腹立つて、悲しいわいなと泣き伏せば。(ト女郎の振よろしくあつて)

牛方 何だ、めろ〳〵と淚こぼいて、そんな欺し喰ふものか。

清〽立つを袖引き裾引けば、

えゝ、ふつぱるなと言つたら引張るな、よさあがれ〳〵、うるせえどう畜生めだ。

　ト手拭にて牛を打つ思入あつて百眼替り。

えゝ歩きやがれ、そうまんどめ。スツ。(ト源七百眼を取り)

竹〽まづ牛方の女郎買、話しは是れでもうお了ひ。(トよろしく納る)

左衛　よう〳〵、面白かつた〳〵。

源七　八重桐の名代に、とんだ喋べりをいたしました。

朝顔　ほんにお前は噺し家よりよつぽど旨うござんすぞえ。

三輪　是れから役者の聲色を、遣つてお聞かせなさんせいな。

源七　どうして〳〵、大寄席同様大勢ゆゑ、跡が支へて居りますから、是れでお暇いたしまする。

左衛　おゝ天晴なる藝當ゆゑ、早く關所を通りませい。

源七　有難うござりまする。

淸〽荷箱背負うて源七は、次の村へぞ、(ト源七荷箱を背負ひ上手へはひる。)

竹〽跡へお初が走り出で、

　ト烏笛ばた〳〵になり、花道よりお初例の拵へ、文箱を持ち、走り出來り、

お初　折も折とて烏啼き、氣に掛る事ばかり、こりやもうお使ひに行た振して、直に爰から歸らうか。
　　〽いや〳〵、とはいふものゝどの樣な、急な御用があつてか知れぬ、此やうな事いうて居る暇に。
　　どれ、一走り行て來ようわいな。
　　〽心せはしく早足に、〽行くをやらじと立ち塞がり、
　　トお初思入あつて舞臺へ來り、つか〳〵と行かうとするを、軍兵四人立塞がり。
◎　こりや〳〵待て〳〵、此關所をつか〳〵と、
□　一體おのれは何者だ。
お初　はつ、私事は中老尾上が召使、はつと申しまする者でござりまする。
○　誰が許してつか〳〵と、爰を默つて通るのだ。
お初　誰も許しはいたしませぬが、主人の急な用事ゆゑ、無禮慮外も顧みませず、お許しなされて下さりませ。
△　通り度くば通して遣らうが、何ぞ勝れた藝があるか。
お初　少々武藝を習ひしばかり、藝はござりませぬわいな。

左衛　すりや其方が一藝は、武藝を習ひ覺え居るとな。
お初　さあ私の主人尾上ことは、町人の娘ではござりまするが、お宮仕へをいたしますれば、少し心掛けもござりまするが、召使の私へも、役に立ちます事か立ちませぬ事かは存じませねど、小太刀の一手も教へ置きましてござりますれば、何方か私をお相手に遊ばして下さりませうなら、有難う存じます。
左衛　いや武藝とは、武家の一の藝、竹刀を是れへ持參なし、其方共相手になりやれ。
四人　畏つてござりまする。
〽竹有合ふ竹刀を取り出し、左右に直せば立ち向ひ、
ト此内下手より竹刀を出し眞中へ直し、お初○に立ち向ひ。
お初　お支度よくば、
○　いざ、
お初　いざ、
兩人　いざ〳〵〳〵。（ト白囃子になるを）
左衛　あゝこれ〳〵待つた〳〵、立廻りの鳴物に、白囃子は餘り古いではござらぬか、ならば新しく七

○草拍子に乗つて試合を召されし。

畏つてござりまする。

〽（清）七草薺、唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬ先きに、すとゝんとん〳〵、〽（竹）七草薺、唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬ先きに、すとゝんとん〳〵、〽（清）七草薺、唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬ先きに、すとゝんとん〳〵。

ト此内軍兵四人陣羽織を脱捨て竹刀にて掛る、お初七草の拍子に合せて所作立もやうの竹刀打ちよろしくあつて、皆々を打ちすゑる、左衛門見兼ねて烏帽子を取り、大紋の上を脱ぎ、平舞臺へ下り竹刀を取つて。

左衛 さあ、是れからは身共が相手だ。

お初 そんならあなたと、

左衛 拍子に合せて、

兩人 一勝負。

〽（竹）七草薺、唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬ先きに、すとゝんとん〳〵。

ト立廻りあつて、兩人いつもの見得。

お初　是れではお相手になられませうかな。
左衛　なかく味をやり居るわい、所を、
　　〽七草薺、唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬ先きに、すとゝんとんく。
　　ト又立廻つてお初左衛門の竹刀を打ち落し、腰をしたゝかに打つ。
　　あいたゝゝゝゝ、參つたく。
お初　所を腰の立たぬやう。（ト又打たうとするを、）
朝顏　あゝこれ、お前樣の手柄は知れてある、もうよい加減にしなさんせいな。
三輪　是れでもあなたは殿樣ゆゑ、慮外があつては濟まぬわいな。（ト兩人にてお初を留める。）
左衛　あゝ痛いく。（ト軍兵立ちかゝり、）
○　こりや御前には、
四人　如何なされました。
左衛　いやといふ程腰を打たれ、立つ事が出來ぬわい。
△　こりや中橋の名倉さまへ、お連れ申さねばなりますまい。
左衛　何にしろ外聞が惡い、早く奥へ連れて行つてくれ。

四人　畏りました。
左衞　然し只引込むは殘念だ、胴揚げで擔いで行け。
四人　合點でござります。
〽目出たく〳〵の若松さまよ、〽枝も榮えて葉も茂る、〽お目出たや。
ト是れにて左衞門を胴に揚げ上手へ這入る。跡に朝顏、お初、お三輪殘り。
朝顏　若しお初さんにお三輪さん、加賀の國から中橋まで、よつぽどの道程ゆゑ、急に歸つて來まいから是れからわたしら三人が、關守の眞似をして爰へ掛つた旅人に、藝盡しをさせて見ようではござんせぬか。
三輪　こりやよい思ひ附きでござんす、どうぞ是れから江戸役者が、化けて爰へ來たならば、隱し藝を思入させ、見飽きが仕たうござんすわいな。
お初　幸ひ爰に烏帽子大紋、朝顏さんは是れを着て、戸樫の替りにならしやんせ。わたしら三人も爰にある陣羽織を引掛けて、番卒とやらにならうわいな。
ト左衞門が脱捨てし烏帽子と大紋の上を出す。
朝顏　そんならわたしが是れを着て、關守になるのかえ。

お初　さあ、お三輪やお初といふ名では、關守の名にならぬわいな。（トお三輪向うを見て）

三輪　あれ〳〵、もう誰か來るやうだ、早う支度をなさんせいな。

竹〽いふにとつかは身支度なし、折も烏帽子に大紋の、袖かき合せ座に直り、

ト此内吹替の烏帽子を冠り、大紋の上を引掛け二重眞中へ住ふ、お初お三輪も番卒の陣羽織を着て左右に控へ。

朝顔　如何に者共、居るかやい。

兩人　はあゝ、御前に候。

朝顔　是れでは關守らしいわいな。

お初　早う誰ぞ、

三輪　來ればよいが。

清〽待つ間程なく猿廻し。

ト合方になり、猿廻し切繼裝淺黄の股引、草鞋與次郎のこしらへ、猿縫包みにて引張られ出來り。

清〽おしゆんが跡を堀川から、氣も與次郎がなが〳〵と、竹〽尋ねて木曾の山々も、跡に三國の川越して、清〽流れ渡りの旅挊ぎ。（ト與次郎猿を相手に振あつて舞臺へ來る）

お初　こりや〳〵其方は、
兩人　何者ぢや。
與次　へい、私は堀川の與次郎と申す、猿廻しでござりまする。
お初　此安宅の新關は、無藝な者は通さぬぞ
三輪　何ぞ覺えた藝があらば、手形替りに藝をしやれ。
與次　いえ、私は無藝でござりますが、猿が藝をいたします。
朝顏　それは一入面白からう、早く藝をいたさせい。
與次　畏りましてござりまする。
朝顏　然しいつもの猿廻しは、耳馴れて古めかしい、今も七草の拍子が出たれば、萬歲節でいたしやれ。
與次　そりや、やれとおつしやりますれば、一番やつて見ませうが、萬歲と猿廻しと、何うか一緒になりさうだ。
お初　さあ〳〵鼓を貸さうから、
三輪　所望だ〳〵。（ト鼓を出す、與次郎取つて）
清元さる〽やんれお猿は目出度やなあ。（ト與次郎鼓を打ち猿を相手に萬歲の振になる）

與次　聟入り姿ものつしりと〳〵、これ、さりとは〳〵のほあろかいな。

清元さる〽さんな又あろかいな。

これ〳〵〳〵〳〵徳兵衛さん、あんまり來やうが遲いゆゑに。

清元さる〽腹をば立てゝ居やしやんす。

これ、お初さん。

お初　あい、なんだえ。

與次　あゝこれ、お初というたはお前ぢやない。

竹本萬歳〽これ〳〵〳〵〳〵、聟さんが杯したいと言はしやんす、機嫌直して呑ましやんせ、清元さる〽これいたゞくのほ杯を、同〽さんな又あろかいな、竹本萬歳〽嫁御の晝寐もごろりとせい〳〵、ほゝやれ〳〵、あろかいな、清元さる〽さんな又あろかいな、竹本萬歳〽くるりと廻つて立つたりな、ついでに日和を見てたもれ、清元さる〽よい女房ぢやに〳〵、のほあろかいな、同〽さんな又あろかいな

竹本萬歳〽日和を見たなら落ちてたも、嫁御さんもお好きなら聟さんもお好きだ、むつくり〳〵〳〵むつくり〳〵しやんと立たしやませ、清元さる〽落ちてくれ、竹本萬歳〽立たしやませ、清元さる〽これ、さうぢや〳〵、竹本萬歳〽やあれ百萬年のお祝ひを、清元〽おさゝは目出たやなあ。

ト此内與次郎猿を相手に萬歳と猿廻しの振よろしくあつて納ると、直ぐにばた〳〵になり、花道より助平旅奴のこしらへにて遠目鏡を擔ぎ逃げて出來る、跡より五斗兵衛麻上下一本ざし棕櫚箒へ角樽を結附け、是れを擔ぎ五斗のこしらへにて出來り、花道にて助平を捉へ、

五斗　これさ〳〵、おれが一緒に行かうといふに、なぜ一緒に行かねえのだ。

助平　なぜだといつて急ぎの道中、生醉と一緒に歩けるものか。

五斗　なに、歩けねえ事があるものか、おれが手を引いて行つてやらう。

助平　お前に引かれてなるものか。

竹〽留める五斗を振切つて、韋駄天走りに助平が、

ト韋駄天の合方になり、助平五斗ちよと立廻つて振拂ひ、韋駄天にて舞臺へ來る、お初留めて。

お初　や、こなたは奴の江戸平か。

助平　あこれ〳〵、わしは奴の助平とて、澤井又五郎の家來でござる。

五斗　えゝ奴め、待ちやあがれ。(トこなたへ來るを、お三輪留めて)

三輪　や、お前は漁師の鱶七どのか。

五斗　いやおらあ漁師のふか七ぢやあねえ、五斗兵衛といふ目貫彫だ。

お初　ほんに狀のばいやひから似寄つた裝の奴ゆゑ、江戸平かと思うたわいな。
三輪　德利と樽と違つて居れど、上下姿にわたしもまた、鱶七どのかと思うたわいな。
助平　して爰は、何でござりますな。
朝顏　これを知らずや、安宅の新關、一藝ある者は通せど、藝なきものは通さぬぞ。
助平　それは困つたものだなあ。
與次　これ〳〵、わしも今藝をしたのだ、何でもいゝから、お前方も藝をして通んなさい。
五斗　藝といつたら酒ばかり、樽の鏡を拔いて呑むから、藝が見たくば酒を呑ませろ。
與次　誰が呑ませるものがあるものだ。
朝顏　して助平とやらは、何が藝だ。
助平　へい、わしは足が達者なばかり、外に藝はござりませぬ。
お初　達者というて一日に、どの位の道を步くぞ。
助平　まづ一日に五六十里、京まで二日で參ります。
五斗　いや、此奴噓ばかり言やあがる。
助平　噓でない證據には、わしが足に續くなら、一緒に附いて、步いて見なさい。

與次　歩かなくつて何うするものだ。

助平　まづ此遠目鏡で幽かに見える五十里先きまで、一日に走る覺えの飛脚の早足、さあ／＼誰でも一緒にござれ。

五斗
與次　おゝ合點だ。（ト助平先きに五斗兵衛與次郎三人振になる）

〽花のお江戸の日本橋から、駕籠で通ひし色品川の、女郎衆に一世かけ替らぬ川崎、〽文のかな川程ヶ谷よいので、無暗に行くゆゑ戸塚の燒餅、〽酒の左へ鳥居を越えれば、〽浮繪の如くに江の島鎌倉。

助平　急いでござれや、拍子でござれや、爰らで一服。

ト八人藝の鳴物にて、三人振あつて、五斗兵衛與次郎叶はぬ思入にて。

與次　あゝ、こなたの足には及ばぬ／＼。

五斗　所詮生醉ぢやあ叶はねえ。

朝顔　今度替つてわたしらが、

お初　三人一緒に、

三輪　やらうわいな。

助平　さあ〳〵誰でもござれや〳〵。
〽藤澤からして由緣の色とて、平塚の間さへ逢はずに居られず、晩に小磯の小じよくの迎ひに、〽虎が雨より濡れて大磯、小田原いはずに眞實しつぽり、〽忍ぶ箱根に人目の御關所、〽峠越ゆれば三島の社が、
見ゆるぞ〳〵、急いでござれや、拍子でござれや、爰らで中食。

女形三人　あゝ草臥れたわいな。（ト猿出でうなづく、）

助平　おゝ今度はお猿か、早めて遣つたり。
〽元が沼津の泥水原ゆゑ、世辭も吉原蒲原おこさず、由井ぶんなしにて心を興津に、〽跡は江尻の府中となるとも、はずむ鞠子に岡部岡目の、そしりも藤枝からんだ口舌は、〽寐てから解ける島田の宿より、〽大井河原が一目に向うへ。
見ゆるぞ〳〵、急いでござれや、拍子でござれや、爰らでお泊り。
ト今度は助平疲れし思入にて、ひよろ〳〵となるを、猿行つては引搔く可笑味の振よろしくあつて、
あゝがつかりした。（ト猿見得をする、）
〽譯もなや。（ト此時以前の軍兵四人出來り、）

○やあ、こいつらは關所にて、無作法千萬。

四人　覺悟なせ。

助平　こいつは堪らぬ。

皆々　ちつとも早く。

清〽女子同士は打連れて、樂屋をさして。

ト朝顏、お初、お三輪上手へ這入る。五斗兵衞、助平、與次郎を留めて。

五斗　どつこい〳〵、おれ一人殘されて堪るものか。

助平
與次　それだといつて。（ト此内合羽の煙草入れを冠り、三番叟の思入にて、）

五斗　おゝさえ〳〵、悦びありや〳〵、我が思ふ人達は、外へは遣らじと思ふ。

清〽家の目貫の高彫に、竹〽牡丹に遊ぶけだものは、大方しゝの十六文、清〽月に兎は子持の證據、三五をかけて十五貫、竹〽猫にはにしんで八百目、清〽狸は金で百疋なり、竹〽紋盡しなら桐のとう、清〽五七兩から五三兩。

ト此内大小入り三番叟の合方にて、與次郎は箒を持ち操の思入、助平は附を打ち、四人を相手に五斗兵衞三番叟の所作立もやうよろしくあつて。

淸〽おどけ俄の狂言を、竹〽似せる鵜の眞似烏飛び。淸〽鶴の千歳と、兩方〽祝しける。

ト五斗兵衞は○△、助平は□、與次郎は◎とちよつと立廻り、引ばりの見得にて。

五斗　先づ、今日はこれ限り。

ト目出度く打出し

滑稽俄安宅新關（終り）

顔見世狂言の餘風にならひて

第二番目の淨瑠璃

父母を忘るゝ　天竺の般得薬

舊惡を忘るゝ　支那の叔齊蕨

憂苦を忘るゝ　本朝の喜笑草

三國三朝良薬噺

解説

「忘れ薬」は明治二年十一月、五十四歳の時、守田座に書卸された。其時の役割は、澤村訥升（獅子たいこどん八）、市川左團次（天竺人帶屋長、淵方五兵衛）、尾上菊次郎（義太夫師匠梅香）、中村仲藏（醫師藪垣寒竹）、尾上多賀之丞（天竺人信半女、代稽古竹本梅枝）、市川新車（寒竹女房おさじ）、大谷紫道（獅子舞チヤンギリの傘藏）、中村福助（神主高間鈴成）、市川小團次（鳶の者の綱吉）等であつた。振附は花柳壽輔。岸澤連中には三登勢太夫、佐喜太夫、式佐、式藏、九藏、佐九藏等。竹本連中には、豐竹國太夫、和嘉太夫、鶴澤市松、歌玉等があつた。

滑稽淨瑠璃の代表的作物である。好評を以て迎へられ、其後も屢々上演せられてゐる。**挿繪にしたのは明治十六年一月新富座に復演された時の錦繪で五世菊五郎の帶屋長と尾上多賀之丞の信半女である。**

三國三朝良藥噺（忘れ薬）

天竺桂川渡の場
日本稽古所の場

岸澤連中
竹本連中

〔役名――醫者藪垣寒竹、天竺の帶屋長、五平太、宮比神の神主、鳶の者小頭綱、酒屋の御用、天竺の人五人、獅子舞どん八、同菊造、義太夫師匠竹本梅香、天竺の信半女、梅香の弟子おたき、天竺の娘。〕

〔天竺國桂川の場〕――本舞臺向う岩山の遠見、少し上へ寄せて般得墳と記せし古びたる自然石の碑、此左右棕櫚の立木、上の方に岩組、此上竹本の出語臺霞幕を張り、石碑の前に誂へ般得草の土手板、下手岸澤淨瑠璃臺、岩山の張物にて隱し、上手舞臺前に流れの波板、此傍に天竺國桂川といふ榜示杭、柳の立木、同じく釣枝、總て天竺國般得墳の體よろしく、唐樂山おろしにて幕明く。

と上手にて、

○迷兒の〳〵信半女。

皆々やアい〳〵。

ト呼びながら一の天竺人親仁の裝、遠目鏡の筒を腰にさし、桶胴の太鼓を叩き、跡より二、三、四、五、天竺人にて棒を持ち出來り、

一　さても皆の衆、大きに御苦勞でござる〳〵、先づ爰で一服やつてから又尋ねて下さい。

二　尋ねるのは幾らでも厭ひませぬが、最前からお話しを聞くに、とても此の天竺には居りますまいぜ。

三　蒸汽船へでも乘つて、其帶屋長とやらいふ男と、日本の横濱か築地へでも逃げて行つたに違ひない。

四　一體信半女どのは、こなたの娘御でござるか。

五　又帶屋長といふは、旅商人だといふが、此の天竺の人で、

皆々　ござるかの。

一　成程、貴樣達は近年日本を喰詰めて來た天竺人だから、委しい譯を知らぬ筈だ、あの信半女といふは、兩親もあるが是れは大のびん天竺人だ、所でおれがドロ（弗）を貸込んで、女房といつてはあんまり年が違ふから、妹といつて貰つた所が、是れも此頃流れ來た他國生れの今唐人、帶屋長といふ奴がおれの家へ商ひに來て、信半女を摘んだと思はつしやれ。

皆々　所でお前が甚助なのだね。

一　さあ、それも同國の者ならよけれど、どこの象の骨だか虎の骨だか知れもせぬ今唐人にくッつかれ、合の子でも孕んで見なさい、此兄が恥になりますわ、それだから見附けたら帶屋長めを打ち殺して貰はうと、お前方に棒を渡して置いたのだから、どうか始末を附けて下さい。

皆々　合點だ〳〵。（ト一四邊を見て、）

一　お丶幸ひ爰は般得の塚、是れへ祈誓を掛けて、二人が思ひの根を斷つて、忘れてしまふやう、お前方も共々拜んで下さい。

皆々　合點だ〳〵。

ト一外皆々後向きになり、塚へ向ひ拜んで居る、始終山おろしにて、花道より六天竺人の娘にて、折れた短き杖、異風なる笠を持ち出で花道にて、

六　このまあと丶さん帶屋長さまは、よく稼ぐお人であつたに、此頃では毎日のどんたく〳〵、ちやぶちやぶ呑んで歩いてばつかり、それに昨夜からお戻りないゆゑ、心當りを尋ねに出た道で杖の折れたは氣に掛る、ひよんな事でもなければよいなあ、バア〳〵、（ト舞臺へ來り、）もし〳〵、此邊に今唐人のましまさば敎へてたべ。（ト是れを聞き、一桶胴の太鼓を花桶のやうにぶら下げ前へ出て、）

一　はてさて小兒といふものは、あられもない事を申すもの、四百餘州の國々より、毎日入り來る諸唐人、昨日來たのも今唐人。

二　あれ〳〵さう尋ねては知れぬ、俗の名をいうて。

皆々　尋ねられよ。

六　あい、わしのとゝさんの名は帶屋長。

一　何ぢや、帶屋長、さてはうぬは娘だな、おれが娘を取れた意趣返しに、うぬを慰むのが腹癒せだ。

　　ト六を捉へろ、みな〳〵留めろ。

皆々　まあ〳〵、待たつしやれ〳〵。

三　途方もない、こなたに慰まれたら、可愛やこの子はそれつきり、

四　何も娘に科はない、憎いのは帶屋長、もう一遍此邊を、

皆々　尋ねて見ようぢやござらぬか。

〇　いや〳〵、もう尋ねるには及ばぬ、爰は名に負ふ靈鷲山天竺の高山なれば、おれが家に昔から傳はる百里見といふ此遠目鏡、（ト腰にある遠目鏡の筒を抜き、）是れにて一見すれば直に分かる。

皆々　成程、これはいゝ思ひ附きだ。（ト筒の中より淨瑠璃觸れ出る、一見してびつくりし、）

一　やあこりや何だ、百里見と思ひの外こりや卷紙、何にしても中を改めよう。

皆々　東西々々。

一　淨瑠璃名題、（ト淨瑠璃觸れを讀み終り、）こりや日本の芝居の淨瑠璃觸れ、はゝあ分つた事がある、此頃日本も田舍芝居がやかましくなつたといつて、先祖のだいらぼつちの墓參りながら此天竺へ芝居を賣りに來た、半十郎といふ奴がおれが家へ來て泊つたが、元があいつ山師だといふから金儲けを仕ようと摺替て行つたに違ひない。

四　あいつは慥か大人國へ行きますぜ。

一　さうだらう、外國では通用の惡い男だ、男といやあ相手の男の帶屋長、遠目鏡がない上は、

五　娘のわたしもとゝさんの、

一　帶屋長と妹の、

二　信半女どのゝ行方をば、

三　探す目當も鐵砲玉、

四　あたりを覘つて、

五　どん／＼是れから、

一　太鼓を叩かして、
六　わたしはひいやァら、
皆々　身寄りの二人は、
○　兄弟娘。

ト太鼓を首に掛け叩く、六折れた杖を笛のやうに吹く、兩人先きに立ち二、三、四、五棒をかつぎ調練のやうに花道へ這入ろ、知らせに附き上の方霞幕を切つて落すと、爰に竹本連中居並び直ぐに淨瑠璃になる。

竹〽それ峨々たる岩山も、仰げば高き法の道、釋尊諸經を說きたまひし、南天竺の靈鷲山、麓に苔蒸す石の碑は、我が名も忘る、般得墳、〽草踏み分けて爰へ來る、身は仁術の醫者ながら、人を助けぬ藪垣寒竹。

ト合方へ唐人笛を冠せ、花道より寒竹慈姑天窓、ぱつち、醫者のこしらへにて、尻端折り黑の道行振、袖を筒つぽのやうに引掛け、誂への藥籠のやうな籠を提げ出來り、花道にて、

〽我が日の本より數千里の、波濤を越して和蘭陀へ、醫道修行とごまかして、ちゞれたお髭の塵を取い　そんじやとり巻き野太鼓を、支那唐土から天竺へ、流れ渡りに來りける。

ト寒竹花道で振あつて舞臺へ來り、思入あつて合方になり、

寒竹 斯樣に罷り出たる者は、大日本武藏の國淺草の片邊藪の內に住居なす、藪垣寒竹といふ、ずんと名高き名醫にて候、などゝ立派にいふものゝ、元は上下三十二文で弟子按摩も段々揉み上げ、知れぬ病で突き當てた鍼から一本極めこんで、人を助ける醫者にはなれど、廻らぬ匙の藥ゆゑ幾人人を殺したか醫者でなければ、此首が疾うにころりと落ちる處、命のあつたを物種に異國へ修行に出掛けて來たが、日本裝では見つともないから、袖を上へ縫ひ附けて異人めかして修行をなすが所詮名醫になられぬから、何ぞ金目な物でも拾ひ、ちつとも早く歸らうと、慾に迷つて今朝つから行先き知れぬ山道を、當て途もなしに歩いたが、爰は靈鷲山の麓にて、あの墳は般得といふ我が名も知らぬ人の墓、慥か爰へ生えてゐるのが般得草といふ草だ、何にしろ草臥れた、爰で一服遣つて行かう、

〽傍の石に腰打ち掛け、煙管取り出す向うより、爰へ來かゝる人影に、

ト寒竹岩臺へ腰を掛ける、煙草入を出し向うへ思入あつて、

や、向うから來る天竺人は、女と男の二人連れ、桂川といふ榜示杭が此の川端にあるからは、もしや道行の心中といふやうなことではないか、どんなクドキの淨瑠璃か、小蔭に忍んで樣子を見

よう、おゝさうだ〳〵。

〽一人うなづき心中の、二人を待つて忍び居る。

ト寒竹は向うへ思入あつて墳の蔭へ這入る、本釣鐘を打込み知らせに附き、下手岩の張物を打返す、爰に岸澤連中居並び、直に淨瑠璃になる。

〽色戀は支那天竺も日の本も、別に替りは中空に、澄む月影の桂川、水に姿をうつし畫や、半女を背に帶屋長。

ト浪の音合方時の鐘にて、花道より、帶屋長ちゞれし髭附の鬘天竺人のこしらへにて沓をはき、半女花鳥の附きし簪、天竺人娘のこしらへ、帶屋長背負ひ來て、花道に留る、是より掛合になる。

〽家を忍びてこつそりと、馬車にも乘らで二人連れ、ほんに放れぬ中々は、連立ちて行く馬よりも、竹〽脇目もふらで車道、竹〽若しや人目もあらうかと、心引かるゝ革手綱、信〽結ぶも深き緣の端、川端さして辿り來る。

ト此内帶屋長信半女をおろし、花道にて兩人振よろしくあつて、浪の音にて舞臺へ來る、合方になり、

帶屋　これ信半女じやう、そんちうもうそうすこりんたん、きうらいりんかんへんてこてん、へこてん

どんちやぎうモウ〳〵。
信半　なか〳〵きみけんによろこいすんば、めうかんどんちやきうらい〳〵。
帯屋　きうかんほこりんほこ〳〵りん、はんにやちうらいちくりんたい。
信半　そんらいきこりん、たいやちやうさん。

ト帯屋長惡い事をしたといふ思入、信半女帯屋長を捉へ口説になる。

岸〽そもやお前と馴初めは、一夜泊りに唐土の濱見物の歸りがけ、渡りに船の旅籠屋で、初めて怖い恥かしい男と二人添伏しに、竹〽塒烏の闇に啼く、可愛〳〵がつい何時か、人に言はれぬ岩田帶、岸〽隱せど袖に漏れ易く、若しかゝさんに見られたら何としようと取り縋り聲を忍びて泣きければ、（ト此内信半女帯屋長を捉へ、口説の振よろしくあつて、）竹〽男も實にもと背な撫でさすり、今更言うて返らねど、子供と思ひ一つ床、岸〽つい手がさはり味な氣に、横文字に寐て教へたる、いろのいろはが身の詰り、竹〽互ひに手に手を取交し、只バア〳〵と泣きにける。

ト帯屋長よろしく振あつて、トゞ兩人手を取りかはし愁ひの思入にて、顏見合せ可笑味になり、バアノ〳〵と兩人泣く。

〽始終小陰に窺ひ居る、藪垣寒竹立ち出でゝ。（ト塚の後より以前の寒竹出來り）

寒竹　これ〱、お前方は天竺の道行か。（ト兩人びつくりして寒竹を見て）

帶屋　や、あなた日本、

信半　お早う。（ト辭儀をする）

寒竹　如何にもわしは日本から醫道修行に參つたが、袖振り逢ふも他生の緣、何ういふ事でお前方は、道行に參つたか、譯を聞かして下さりませ。

帶屋　私、譯を申しても、天竺語では分りますまい。

寒竹　所で久しく諸州を渡り、學問をしたお陰には、フランス、アメリカ、イギリス、オロシヤ、通辭入らずに愚老は分れば、天竺語で言はつしやれ。

信半　すいらくすんもうすいれんかん。

寒竹　おゝ分るとも〱、してお前方は天竺のどこのお人でござるな。

帶屋　きうかんぽこりんほこ〱りん、さい〱かうらいこうきんにう。

信半　へんてこてこりんすつぽらぽん。（ト寒竹思入あつて）

寒竹　何と言はつしやる、天竺の柳の馬場、押小路といふ所で、帶屋長といふ町人で、此娘は隣の家の

信半女といふ娘御だと言はつしやるのか。

帯屋　そんれんほこたんきうかんほこ、どんちやんきうかんめうらい〳〵。

信半　とう〳〵さい〳〵かうらい〳〵、からころのほんぽゝ。

寒竹　親や女房の目を忍び二人色になつた所、世間の口が鬱陶しいから、當分別れる心にて、爰へ來たと言はつしやるのか。是れは見立て違ひをした、娘と二人手を取つて此川端へ道行とは日本でいふお半長右衞門、慥に是れは心中と一本槍で見立てたが、藥を盛る時は忽ち二人を殺す所、是れだから愚老に掛かると十人が九人まで、必ず命はむづかしい、けんのんな醫者樣だ。

帯屋　すいらくすいもううんもんちやん、なか〳〵めう〳〵りんかんきう。

信半　たん〳〵たいきうはらほてれん、ちうかちうらくちくりんたい。

寒竹　ちうかちうりくちくりんたい。いや不思議な事を聞くものだ、此般得の墳の側に生えて居る此草を甜める時は、何事もさらりと忘れてしまふとか。

帯屋
信半　よかほん〳〵。（トうなづく。）

寒竹　如何さまそんな事もあらうか、此般得といふ人は釋迦の弟子にて愚鈍な人、おのれが名さへも忘れるゆゑ、首へ名札を掛けたと聞く、其墳へ生えたからは是れを甜めたら忘れもしよう。して此

草は何と言ひますな。
帯屋　すんれんほこたんほこ〳〵さう。
信半　まんたんこつれつたんほこほん。
寒竹　はゝあ般得の墳へ生えたゆゑ、般得草とも又忘れ草ともいふとか。
帯屋 信半　よかほん〳〵。
寒竹　其忘れる所が見たいから、早く甜めて見せさつしやい。
帯屋　さかりきもゝりきひやうたんちゝう。
信半　かんなんしいぽろほろ〳〵ほん。ト信半女泣く、寒竹思入あつて、
寒竹　草を甜めれば暫しの内顔を見ても忘れるゆゑ、別れを惜しんで其涙か。おゝ尤もぢや〳〵、ゆつくりそこで別れを惜しみ、草を甜めて忘れさつしやい。
帯屋　いんまんきうれん、
信半　ふくりんちやん。
〽岸覺悟ながらも今更に、名殘りも鴛鴦の諸翼、ぢつと交して抱き附き、濡れにし岸の水放れ別れともなき風情なり、〽竹かくては果てじと兩人は、般得草を抜き取りて、甜むれば忽ち

氣色も替り、〽顏見合せて物言はず、〽素知らぬ振して右左り、〽別れ〳〵に歸りける。

ト此内帶屋長信半女名殘りを惜しむ思入の振よろしくあつて抱き附き泣く、寒竹早く草を甜めろといふこなし、兩人も思入あつて墳の前の般得草を取つて甜めろ、薄どろ〳〵になり兩人左右へ別れ、ほつと物忘れせし思入にて、顏見合せ誰であつたといふ思入にて、帶屋長は花道、信半女は東の假花道へ、物をも言はずに澄して行き這入る、寒竹これを見送り手を叩き、

寒竹　さて〳〵不思議な事を見るものだ、眼前今の二人が草を甜めると忽ちに、物をも言はず東西へ別れて行つたは妙不思議、思ひ掛けなく此草の奇特を見るは、これ正に、

〽醫道の祖たる神農の、授けたまはる此靈草、あら有難や忝なや。

是れを日本へ持ち歸り、先づ借金のある本町の藥種屋共にこれを甜めさせ、是れまで借りた藥種の勘定忘れさせてやらうわい。

〽犬も步けば金儲け、棒切れ取つて草を掘り、〽提げたる籠へ押詰めて、

ト寒竹草を取つて、提げて來た籠の中へ入れ、蓋をなし思入あつて、

おや、此草を取つたせるか、今來た道を忘れてしまつた、西であつたか東であつたか、（ト草履を

取つて投げ、）いしやアどつち。

竹〽投げし草履を栞となし、里ある方へ行くよと見えしが、岸〽これなん南柯の一夢にて、

竹〽さめて跡なく、

ト寒竹籠を提げ、花道へ行かゝとして思入あつて上手へ這入る。是れにてどろ〳〵になり、道具居所替りに替る。

（稽古所の場）――本舞臺三間の間正面三尺の襖明立てあり、上手一面春草をかきし地袋戸棚、此上に宮比の神と書きし鼠仕立の掛物、般得墳と忘れ草に見える心、下の方に三絃掛、此上に門弟の黑札、ずつと上の方障子屋體、舞臺に稽古の本箱、總て義太夫稽古所の模樣よろしく、どろ〳〵にて道具納まる。

岸〽時を違へず冬至に梅が咲いて、日ざしも氣も伸び〳〵と、今日は昨日に眞猿若、街賑ふ芝居の春に、獅子の囃子の勇ましや。（ト是れへ獅子の鳴物を入れ）

竹〽隣りで騷ぐ三絃の、音に目覺す寒竹老。

ト此内どろ〳〵を冠せ、心といふ字を上手屋體へ引いて取る、合方になり上手屋體より以前の寒竹着

流しにて出來り、

寒竹 隣りの家は横濱で此頃仕出した象牙師だが、冬至祭りで弟子どもの騷ぎの音で眼が覺めたが、般得墳で天竺の道行に出逢つたは三年後のことであつたが、久しぶりで夢に見た。（ト下に居て、）あの折草を持つて來て、藥種屋に用ゐた切り、百味簞笥へ入れて置いたが、扨て禍ひも三年目、今夜爰で用ゐようと持つて來た忘れ藥、（ト懷から袱紗包みの棗を出し、）斯うばかりでは皆さまに分らぬゆゑに、此藥を、用ゐる譯を一通り掻い摘んでお話し申さん。抑〻此家のあるじといふは菊次郎に生寫しの義太夫の師匠どの、張り半分に稽古に來れど、いつでも弟子が落合ふので、當つて見る事もならず、手を空しく歸るゆゑ、そこで三年跡天竺から、持つて來た般得草を振掛け、幾人來ても歸して仕舞へば、跡は師匠と差向ひ、そこで手に入れる魂膽、幸ひ祕密の忘れ藥、匙も廻れば智慧も廻る、今でのおれは名醫だわい。

竹〽低い鼻をぱひこつかせる、梅〽折から一間を立ち出る、此家のあるじ竹本梅香、竹〽彈く三味線にかせかけて、梅〽世辭も四つ間の調子よく、

ト此内寒竹よろしく思入、文句の内奥より梅香好みの鬘、義太夫の師匠のこしらへにて太棹の三絃を持ち出て來る、寒竹是れを見て衣紋を直し、いやらしき思入、合方になり、

梅香　寒竹さん、お前一寐入りなさんしたね。
寒竹　あんまり師匠のお化粧が長いので、火燵へ當り、ついとろ〳〵と遣つたのさ。
梅香　おやまあわたしがお化粧などゝ、そりやあ十年も前のこと、今ではほんの稽古ばかり、お化粧どころぢやござんせぬ。
寒竹　勿論師匠は肌膚細だから、お化粧を仕なくつても仕たやうに見えるて。
梅香　ほんに寒竹さんには殺されますよ。
寒竹　なんぼおれが藪醫者だつて、そんなに人を殺すものか、盛り殺したのは十四五人だ。
梅香　いえ今殺されると申しましたは、お前さんの口先きさ、匙先きでは猶の事、殺されるに違ひござりませんよ。
寒竹　えゝ人聞きの悪い事を言つてくれるな、おれだつて八當りで生したことも少しはあるて。
梅香　けんのんなお醫者さまでござりますね。
寒竹　先づ十人が九人まで藪醫者はこんな者だ。ときに師匠、お前の内で今日一日どんたくの居びッたれを仕ようと思ふが、稽古人が來ないうち、一段さらつて貰はうか。
梅香　何でございましたつけね。

寒竹　廿四孝の四段目、十種香の段だ。

梅香　ほんにさうでございましたね。（ト三絃の調子を合せる、寒竹本箱から廿四孝の本を出し控へる）さあ、お遣んなさいまし。

寒竹　エヘン、へ回向せうとてお姿を、書にはかゝせはせぬものを、田町にござる治丹坊。

梅香　またお株で間違ひましたよ。

寒竹　はゝあ、間違つたかな。

梅香　魂返す反魂香でございます。

ト此淨瑠璃の内奥よりおたき内弟子の小娘の拵へにて、三絃を持ち出來り、

たき　御師匠さん、今奥で飯焚をさらひましたが、忘れた所がございますから、ちよつと數へて下さいまし。

梅香　よく身にしみて覺えないからだ、どこの所を忘れたのだ。

たき　軒端の竹に飛びかはす、彼處からでございます。

梅香　さあ、そこで語つて見な。

たき　あいあい。

寒竹　回向せうとてお姿を、
たき　軒端の竹に飛び交す、
寒竹　回向せうとてお姿を、
たき　軒端の竹に飛び交す、
梅香　さあ寒竹さん、跡をおやんなさいましよ。
寒竹　おつと承知だ、回向せうとてお姿を。
たき　軒端の竹に飛び交す、
寒竹　軒端の竹に飛び交す、え〻おたきの稽古に巻き込まれた、どれ手始めに振掛けてやらうか。
たき　軒端の竹に飛び交す。（トおたき語り居る、寒竹おたきに薬を振りかける、）
竹〽薬を掛ければ忽ちに、忘れて奥へ入りにける。（トおたきすまして奥へ這入る。）
梅香　おやまあ、あの子は何うしたのだね。
寒竹　大方菓子でも買つて置いたを、思ひ出して行つたのだらう、いや、意地の汚ない奴だな。
ト大拍子になり、花道より神主高間鈴成烏帽子狩衣指貫、神主のこしらへにて鈴を持ち、少し酒に醉ひたる思入にて出て、花道へ留り、

〽目に諸々の婦人を見て、心に諸々の婦人を思ふ、色と酒との二道も、〽唯一神道神主が
お神酒徳利を傾けて、〽てんと面白拍手を、打つたり舞うたり酒機嫌、〽手に持つ鈴も
足許も、〽ふらり〳〵と門へ來て、（ト神主花道で振あつて舞臺へ來り、）
神主　師匠、お內かえ。（トずつと內へはひる。）
梅香　おや、宮比さまの神主さまでござりますか。
神主　今日はまだ誰も來まいと思つたら、もう誰か來てぢやな。
寒竹　お邪魔ながら先刻から、愚老稽古に參つてござる。
神主　おゝ、是れは藪の內の藪先生か。
寒竹　今日は冬至で、參詣も澤山あらうに、悠長らしく何しに是れへござつたのだ。
神主　何しに是れへ參るものだ、義太夫の稽古に參つたのだ。
寒竹　あゝ、參らずともよい事を。（ト脇を向き煙草を呑み居る。）
梅香　此頃は宮比さまも、大層お賑かでございますね。
神主　いや、芝居町を始めとして、諸藝人が信仰するので、お神樂講を取り立つた處が、殊の外講中が
出來て、誠に繁昌でござるて。

寒竹　いつたい宮比の神さまは、何の神さまでござるな。
神主　宮比の神と申すのは、天の岩戸で神樂を奏した、碓女の命の事でござる、それゆゑ役者はいふに及ばず、音曲鳴物渡世のものは、必ず信心いたしますて。
寒竹　岩戸で神樂を奏したとは、何ういふ事でござるな。
梅香　お前さん、御存じございませんか。
神主　知らずば言つて聞かさうか。
（竹）〽そもそも天の岩戸とは、ずんと神代の昔にて、（岸）〽世界を照す日の御神、岩戸へ籠りたまひしゆゑ。
ト神主中啓を持ち振になる、寒竹邪魔になる思入にて、棗より藥を出し神主に掛ける、薄どろどろになり神主忘れし思入にて、其儘門口へ出て、すまして花道へはひる、寒竹小躍りをなし。
寒竹　是れは希代、奇々妙々。
ト木遣り崩しの合方になり、花道より鳶の者小蛸の綱吉紺の腹掛け股引、褞袍尻端折り、鳶の者のこしらへ、酒屋の御用聞股引尻端折り、胸前垂にて、二升樽を提げて出來り、花道へ留り、
（岸）〽色のいろはのなア、鳶の若い衆が勇みに勇んで、鳶口揃へてやれこはせそれこはせ、向ふ

奴はぶん撲れ、逃げる奴は構ふな、ヨイヤサ男達ぢやの、ヤレコレサ、達引ぢやのというて

わたしをヤレコレ困らせる、ヨイ〳〵ヨイヤサ。

ト此内兩人花道より聖天にて、振あつて舞臺へ來り、

綱　お師匠さん、此間は。

梅香　おや小頭の綱さん、よくお出でだねえ。

綱　店の仕事が始まつたので、大きに御無沙汰しやした。

酒屋　お師匠さん、御酒を爰へ置きますよ。

梅香　何でお酒を持つて來たえ、さう言つては上げないが、間違ひではないかい。

酒屋　いえ、綱さんのお土産でございます。

海香　おや、およしなされぱよいに、毎度有難うございます。

綱　師匠さんも好きだから、稽古をしまつたらお遣んなせえ。

寒竹　えゝ、來ねえでもいゝ奴が、幾らも來やがる。

綱　何だと。

寒竹　いえ、こなたの知つた事ぢやあない、先づ小僧から歸して遣らうか。

ト寒竹酒屋の御用に振かける、酒屋の御用樽を提げたまゝ門口へ出て、

酒屋　何所へ持つて行くのだつけか、さつぱり忘れてしまつた。

ト薄どろ〳〵になり、合方にて酒屋の御用花道へ這入る。

綱　ときにお師匠さん、お頼みがあります、今夜冬至で茶番があつて、義太夫に寄せる角力といふ茶番の題を取つたから、一番義太夫の太棹で角力甚句を踊る積り、ちよつと稽古をして見てえから、彈いて見ておくんなせえ。

梅香　そりやあ面白うござんせう、さあ遣つて御覽なさいよ。（ト調子を合せて）

寒竹　これさ〳〵、師匠、愚老が稽古をどうしてくれる。

梅香　ちつとの內待つて上げておくんなさい。

寒竹　いや〳〵待つ事はならぬ〳〵、先へ來たものを後にすると、そんな法があるものか、物の譬が、愚老が玄關へ藥取りが參らうとも、前後させる事はない。

綱　法があらうがあるまいが、急ぎだから先きへ遣るのだ、待たれざあ腕づくでも、先へ遣らにやあ男が立たねえ。

寒竹　それだといつて、愚老が玄關へ。

梅香　遂に藥取りも來ないのに、まあ後でゆつくりとなさいまし。（ト寒竹の顏を見て呑み込ませる）さあ綱さん、お遣んなさいよ。

綱　醫者ツぽう、先きへ遣つてもいゝか。

寒竹　おゝ勝手に遣んなせえ、遣らせるものか。（トせゝら笑ふ）

綱　遣らなくつてどうするものか。（ト梅香三味線を彈く、竹本にて角力甚句になる）

竹〽花の顏見世梅松櫻、引けや贔屓の車引、ありや〳〵。

ト綱振になる、寒竹藥を振掛ける機會に、間違へて梅香に振かける、薄どろ〳〵にて梅香ふつと忘れし思入にて、三絃を持つたまゝすまして奧へはひる、寒竹びつくりして、

寒竹　南無三、間違つた。

綱　なに、間違つたとは。

寒竹　えゝ、やかましい默つて歸れ。

ト綱に藥を振かける、薄どろ〳〵にて、綱忘れし思入にて、間拔けに踊りながら花道へ這入る、奧よりおたき出來る。

これ〳〵、師匠はどこへ行つたか知らぬか。

たき　お師匠さんは物も言はず、三絃を持つて裏の方へすましてお出でなさいました。

寒竹　そりあとんだ事をした、追掛けて行かずばなるまい。（ト奥へ行かうとする、此時奥より梅香出て來る）

おゝ、師匠歸つたか。

梅香　どうしたことか、ふつと今何もかも忘れてしまつて、ぼんやり裏へ出た所寒い風に吹かれたので

やう〳〵氣が附いて歸つたが、どうしたのでござりませうね。

寒竹　そりや風で吹き飛んだのだ。

梅香　吹き飛んだとは。

寒竹　いやさ、飛んだ奴が大勢來て、大きに稽古の邪魔をした、最う誰も來ねばよいに。

トおたき向うを見て。

たき　向うから五平太樣が、踊りながらお出でなさいます。

寒竹　又例の月落ち烏啼いて霜天に滿つだらう、是れは恐れるわい。

ト浮いた合方になり、花道より五平太好みの鬘、袴大小足駄がけ、紐附きの扇、唐詩作加那といふ都

都一の本を見ながら出て來る。

五平　此山々亭有人といふ作者の作つた都々一は面白いことだわい、ちよつと吟聲いたして見ようか。

ト都々一になり、

〽鐘は七つか八つ山下を、〽月落ち烏啼いて霜天に滿つ、江楓の漁火愁眠に對す、〽駕籠で飛ばせる早歸り。（ト五平太扇にて振あつて）

コリヤ〳〵ずいと〳〵、（ト踊りながら門口へ來り）師匠、内かな。

梅香　おや、五平太さんでござりましたか、大層お遲うございましたな。

五平　今日は例のどんたくで、朋友どもに誘引され、柳橋の酒樓へ登り、佳肴を集めて酒宴を設け、それゆゑ遲刻いたした。

梅香　此頃はどこか外へお稽古にいらつしやいますか、さつぱりお出でなされませぬな。

五平　なか〳〵御身を捨て〳〵外へなどは參らぬが、二七が英佛の講釋、三八が横文字の指南、四九が世界の大議論、五十が寫眞と詩歌の集會、一六休日より外とんと外出がならぬて。

梅香　それはお暇がござりませぬな、今あなたがお謠ひなさいましたは、都々一のやうでございましたね。

五平　あの吟聲を聞かれたか、近頃赤面の至りぢやが、あれは唐詩作加那というて、山々亭が作いたした唐詩選入の都々一ぢや。（ト本を出して見せる）

梅香　有人さんのお作でございますか、それは面白うございませう。
五平　なか〳〵ようと出來てゐる。吟聲いたして聞かさうかしら、ちよつと一つ彈いてくりやれ。
梅香　此の三味線ではいけません。
五平　いや〳〵何でも構はぬ。（ト梅香三絃を彈く、五平太都々一を唄ふ。）〽のろい奴だと笑はゞ笑へ、〽願はくば輕羅と作て細腰に著ん、願はくば明鏡と爲て嬌面を分たん、〽惚れりや誰しも同じ事、（トよろしくあつて、）これ師匠、此の五平太願はくば輕羅と作て、細そりとした此の細腰に附きたいわえ。
梅香　五平太さまの御常談ばつかり、それが本當でござりますなら、もう一つ心意氣をお聞かせなすつて下さいまし。
たき　ほんに、こりや聞き事でござんせう。
梅香　おゝ、聞かさうとも〳〵、まだ斯ういふ心意氣があるて。〽堅い約束した中なれど、
寒竹　どつこいそんなにやられて堪るものか。（ト寒竹五平太に藥を振掛ける、薄どろ〳〵にて五平太其儘すまして花道へ這入る。）先づ五平太は追返したが、誰ぞ來はせぬか知らぬて。
ト おたき向うを見て、

たき　また獅子が參りましたよ。

寒竹　あゝ情ないことぢやなあ。

ト合方獅子の囃子になり、花道よりどん八紺の腹掛股引麻裏草履尻端折り、誂への獅子を首に掛け出る、跡より菊造同じ拵へにて、太鼓を首へ掛けて叩きながら出來り花道にて、

〽年々嘉例缺さずに、惡魔拂ひのお捻錢も、十二冬至の御祝儀と、門並流す獅子舞は、竹〽遊びに隅田の若い衆が、春を待乳の聖天や、神の囃子の拍子よく、〽氣も丸一の附太鼓、勢ひ込んで來りける。

ト此内花道にて兩人よろしく振あつて、早めたる囃子になり、どん八獅子を冠り舞臺へ來り直に内へ這入り、くるくる廻つて獅子の口をあき、おたきに喰附く。

たき　あれお師匠さん、獅子がいけませんよ。

どん　なに、いけない事があるものか。（トどん八獅子を脱ぐ、菊造内へ這入る、）

菊造　御師匠さん、お目出度うございます。

梅香　おや向島のどん八さんに菊造さんかえ。

たき　わたしや本當の獅子だと思つてびつくりしました。

菊造　嘘の獅子といふがあるものか、おらつちも本當の獅子だ。
梅香〽何でまたお前方も、獅子なんぞに出なすつたんだえ。
どん　今年はぼんやり詰らなく一年歳を取つたから、緣起直しに出て見たのさ。
菊造　それも二人が囃子が好きで、獅子の狂ひを習つた處から、斯うして出たのも酒落半分だ。
梅香　それぢやあ稽古はお休みでございますか。
どん　今夜は二人とも休みます。
寒竹　先づ嬉しや、二人助かつた。
菊造　其替り來年は、いゝ春が來るやうに、祝つて舞はうぢやねえか。
どん　おゝさうだ〳〵、緣起直しに遣らかさう。
梅香　どうぞさうして下さんせ。
たき　こりや面白うござんせうわいな。
寒竹　えゝ舞はずともよい事を。
どん　どれ一番遣つ附けようか。
菊造
竹〽二人は獅子を打冠り、牡丹に狂ふ獅子の曲。（トこれにて兩人獅子を冠り前へ出る。）

竹〽雪間を分けて咲き出す、牡丹の花の色香に引かれ、あなたこなたへ飛びめぐれば、竹〽巖の雪のぱつと散り、散り來る花に異ならず、岸〽共に狂ひてひら〳〵、竹〽ひらりと飛べばひよつくりと、岸〽替るひよつとこ外道の面、あのや姉さんにちよと惚れて、文の替りに鍬遣つた、竹〽惚れたとそれで判じ物。

ト此内兩人獅子の狂ひの振にて、おたきを追掛け、おたきもよろしく振あつてよき程に獅子の囃子になり、兩人振あつて獅子を脱ぐと、菊造はひよつとこ、どん八は外道の面になり、合方鳴物にて兩人振になる、寒竹兩人へ藥を振りかける、薄どろ〳〵獅子の鳴物にて兩人面を冠りしまゝ、すまして花道へ這入る、梅香跡を見て、

梅香　ほんにまあ、あの衆も洒落に出るとはいひながら、獅子も太鼓も忘れて行つてさ。

たき　常談ものでござんすねえ。

寒竹　やうやく邪魔を追返したが、おたき坊、おぬしも奥へ、（ト振かけるとおたきすまして奥へ這入る。）先づ師匠と差向ひ、是れからしつぽり稽古の始まり。

岸〽かゝる所へ引き續き、立歸りたる以前の人々。

ト寒竹四邊を見廻しいやらしき思入、八人藝の鳴物になり、花道より神主出來り、直に舞臺へ來り。

神主　さつきはさつぱり忘れたが。

〽そも〳〵天の岩戸とは、ずんと神代の昔にて。（ト振になる、寒竹立ち掛り）

寒竹　えゝ、聞きたくもない神代の話し。

ト藥を振掛ける。神主忘れ下手へ這入る、直に跡より酒屋の御用聞樽を提げて出で、直に舞臺へ來り。

酒屋　さつきのお酒を持つて來ました。（ト樽を出す、）

寒竹　あゝ、來ずともよいに。（ト藥を振掛ける、）

酒屋　あの、爰へ置きますよ。（ト酒屋の御用すまして下手へ這入る。）

寒竹　斯う來られては堪らぬわえ。（ト此内以前の綱出來り、）

綱　師匠さん、もう一遍遣つておくんなせえ。

竹〽花の束のきほひは花よ。

寒竹　えゝまた來たか、鬱陶しい。（ト藥を振掛ける。綱其儘下手へ這入る、寒竹四邊を見て、）もう來る人はないか知らぬ、おつとある〳〵、あの男がけんのんだ。（ト舞臺番の留場へ振掛ける、是れにて留場すまして留場口へ這入る、）さあ師匠、殘らず邪魔は拂つたが、愚老の思ふ心の內、察してくれる氣は

ないか。

梅香　まんざらいやでないお前の心は察して居るけれど、頼んだ物を下さんしたら。

寒竹　おつと中差の簪か、出物でよいのがあつたから、遣らうと思つて持つて來た。

　ト寒竹懷から鬱金の切に包みし鼈甲の中差を出す、梅香取つて見て。

梅香　これは丁度よい長さ、そんなら是れを下さいますか。

寒竹　おゝ、遣らうとも〳〵。

梅香　それは嬉しうござんすわいな。

寒竹　然し今は遣れない、今更いふも愚癡ながら、（ト寒竹梅香を捉へ振になる、）

岸〽今更いふも愚癡ながら、そもや稽古に來た時から、

　ト寒竹梅香を捉へ惡身の口說き、此内花道より五平太出來り、

竹〽一双の玉手千人の枕。

　ト扇を持ち此中へ這入り、邪魔をする。寒竹藥を振掛ける、五平太其儘奧へ這入る、是れに構はず。

岸〽手に手を取つて三味線を、敎へて貰ふ樂しみは、

　ト又獅子の鳴物になり、花道より以前のどん八菊造面を冠りし儘踊りながら出來り、此中へ這入りこ

つちやになり、

竹〽しやがれた聲で艶物は、押の太棹三の切れ、岸〽文彌節ではないけれど泣かせたいのが身の願ひ、

ト此内四人にてよろしく振あつて、寒竹兩人に藥を振掛ける、是れにて両方落し菊造どん入すまして奥へ這入る。寒竹梅香を捉へて思入。

竹〽口說き立てたる其處へ、

ト合方にて、花道より寒竹の女房おさじ、紋附・野暮なる醫者の女房好みのこしらへにて出來り、花道にてちよつと人形振になる。

竹〽夫の行方そこ爰と、尋ね詫びたる女房が、目當ては爰ぞと門口より、それと見るより忽ちに、悋氣の角を振り立てゝ、二人が中へ割つて入り、

ト寒竹のおさじ花道にて振あつて、舞臺へ來り、中へ割つて這入る、

さじ　さあ、見附けたぞ〳〵。

寒竹　やあ女房か、南無三ばう。（ト寒竹有合ふ獅子を冠る。）

さじ　えゝ、隱れる事はないわいなう。

梅香　そんなら若しや、お前さまは、

さじ　お初にお目に掛りますが、寒竹が妻でございます。

梅香　へゝえ、御新造さまでございますか。

さじ　これ藪垣どの、爰へ出やしやんせ。(ト合方になり、寒竹女房獅子を取りのけ、寒竹を捉へろ、寒竹南無三といふ思入)お前こんな美しい女中の處へ這入りこみ、遊んで歩いて濟むかいなあ。夫の恥を女房の身で言ひ度くもござんせぬが、わたしの先の連合は四枚肩の立派な醫者、果敢なく別れて一人住み、後家で居るより後添を入れた方がよからうと人の勸めに按摩とも、知らで貰うた寒竹どの、針さへ知らぬ藪醫者を、黑い羽織に一本さゝせ、どうやら斯うやら醫者らしくして遣つたのは誰が蔭、其恩のある女房を捨て顔にも似合ぬ色狂ひ、ほんにお前は此樣な女好きゆゑ女も置かず、

竹〽朝は疾うから下女替り、飯も炊いたり拭き掃除、岸〽案内あれば飛んで出で、お藥刻んで縫仕事、竹〽女房と下女に弟子坊主、三人四人の代脈も、(ト寒竹女房よろしくあつて、)

たつた一人で口八町、人に勝れた女房を、捨てるのみかわたしが大事の、親の筐の中差を、

ト言ひかゝるを、

寒竹　これ〳〵、それを言はれては物がない。
さじ　いえ〳〵言はねばならぬわいなう。
梅香　そんなら、今の中差は、
さじ　扨は爰へ持つて來たのか、腹の立つ。
寒竹　えゝ、やかましい、歸り居らぬか。
　　ト寒竹藥を振掛ける、薄どろ〳〵にり、おさじ眞面目に突袖をして花道へ這入る。
梅香　若し寒竹さん、お前と情人か何かのやうに、わたしやいやでござんすから、御新造さんの來ないうち、早く歸つて下さんせ。
寒竹　いや〳〵決して最う來ぬ、若しひよつと來たら、振り掛けて遣るばかりだ。
梅香　なに、振掛けて遣るばかりとは。
寒竹　さつきも師匠に間違うて振り掛けて忘れさせたが、此の棗に這入つて居るは、物を忘れる希代の良藥、是れをちよつぴり振り掛ければ、どんなものでも直に歸る。
梅香　それではみんな歸つたのも。
寒竹　此の般得草の則ち效驗、もし噓だと思ふなら、ちよつとためして見たがよい。（ト藥入れを渡す、）

梅香　誰でもわたしのいやなものに、是れを少し振り掛けると、
寒竹　忘れる事は神の如しだ。
梅香　どれ、ためして見ようかえ。
　〽醫者の天窓へ振り掛くれば、忽ち忘るゝ向うより、立ち歸りたる以前の女房、
ト梅香寒竹に振掛ける、薄どろ／＼になり、寒竹すまして花道へ行く、花道より寒竹の女房おさじ
取つて返し花道にて行合ひ、
さじ　これ、こちの人、どこへお前行かしやんすのぢや。
　〽いふ顏つく／＼差し覗き、（ト寒竹忘れたる思入）
寒竹　お前は、誰だ。
さじ　えゝ誰だとは何の事、わたしやお前の女房でござんす。
寒竹　はて、見たやうだが、誰だ知らぬ。
さじ　現在連添ふ女房を、忘れるといふがあるものでござんすか。
寒竹　どうも思ひ出されぬわえ。
さじ　えゝ呆れ返つたものぢやわいな。

寒竹　大分知らぬ人だらう。

〽岸　素知らぬ振りで行き過ぐれば、〽竹　跡を慕うて追うて行く。

ト寒竹、女房を振拂ひ花道へ這入る、女房跡を追つて這入る。ばた〳〵になり、奥より以前の菊造、どん八、五平太出來り、是れと一緒に、下手より神主、小頭の綱出來り、

菊造　樣子は奥で聞いて居たが、

どん　扨はみんなが物を忘れ、

五平　ふうら〳〵と歸つたのは、

梅香　寒竹さんが持つて來た、忘れ草の效驗ゆゑ、

神主　この意趣返しはあの醫者めを、

綱　袋叩きにして遣らう。

トばた〳〵になり、獅子の囃子になり、花道より寒竹逃げて來るを、おさじ追ひ掛け來り、

寒竹　えゝ、助けてくれ〳〵。

さじ　お前を逃してなるものか。

菊造　さつきの返報、

皆々　覺えて居ろ。（ト立ちかゝるを梅香留めて、）

梅香　あゝもし〳〵、お前方も御新造も、今日は冬至の祝ひ日ゆゑ、何事も此儘に幸ひ貰つたお酒もあれば、目出度く笑つて下さんせいな。

菊造　いゝや、料簡ならぬといふ處だが、

五平　師匠の挨拶二つには、

神主　酒と聞いては此儘に、

寒竹　そつちが言はねば、

さじ　こつちも言はず、

綱　爰で仲よく、

どん　冬至を祝つて、

皆々　ヨイ〳〵〳〵。（ト皆々手を叩き、是れをきつかけに手踊りやうになる。）

皆〽色のいの字に、血起請書いて、祇園守へ一世二世、竹〽重ね扇に二た升三升。

ト皆々振よろしく、此時梅香みな〳〵へ薬を振りかける、是れにてばつたりとまつて合方にて忘れたる可笑味の振あつて、梅香五平太の扇で皆々を煽ぐ、薬の落ちし思入。

輝〽よい中車よい紅葉、竹〽くつわといふも廓かいな、岸〽ヨイ〳〵ヨイ〳〵よんやな。

トみな〳〵手踊よろしくあつて、

どん　先づ今日は是れぎり。

ト目出度く打出し

忘れ薬（終り）

牽牛織女が
天の川船
夜這星が
雲の宙乘

日待遊月夜芝居

解説

「月の夜芝居」は明治八年三月、作者六十歳の時、守田座に書卸された。其時の役割は、坂東彦三郎（田舍醫者玄伯）、尾上菊五郎（百姓草分五左衞門）、中村芝翫（新家の金十）、中村翫雀（田舍神主澁柿鈴成）、中村七賀助（百姓佐次郎兵衞）、嵐大三郎（鈴成の妻さかき、）市川子團次（新田の與太郎）、坂東喜知六（振附仁多山新十郎）、尾上梅五郎（頭取庄屋の源右衞門）、市川幸升（道樂寺の和尙頓念）、市川團八（田舍婆おつん）、坂東秀調（後家おかね）、尾上菊之助（角兵衞獅子音松）等であつた。振附は花柳壽輔。淸元連中には延壽太夫、榮壽太夫、順三郎、東三郎、梅吉等。竹本連中は姬路太夫、葛蒲太夫、鶴澤市作、咲治等であつた。

好評を博した滑稽淨瑠璃で再演もされてゐる。一番目に忠臣藏と菅原とをテレコに演じた所から、其大切淨瑠璃として、かういふ趣向のものが作られたのである。

日待遊月夜芝居

豐年祝催の場

竹本連中
清本連中

〔役名――醫者玄伯、神主鈴成、頭取源右衞門、師匠番新十郎、與太郎、舞臺番金八、佐治郎兵衞、神主女房榊、五左衞門、新潟藝妓おかれ、同おいろ、金十、田舍婆おつん、音松、安藏、十八、頓念、豐作、萬作、諸士等。〕

〔雪中地芝居の場〕――本舞臺正面五布風呂敷を繼ぎ合せし心にて、茶、萌黄色種々の紋に印しの附きし風呂敷の幕を張り、上の方畫心に竹本の出語り臺、下の方雪山の蹴込み、淸元の淨瑠璃臺、双方共巴の紋附きし八幡宮奉納の幕を張り、左右雪山の張物にて見切り、日覆より雪の積りし松の釣枝をおろし、總て越後の國雪中地芝居の體。シヤギリにて幕明く。と上手より安藏、象股引尻端折り百姓裝、木鉢へ腹太餅を入れ是れを擔ぎ、十八同じく尻端折りにて、大藥罐、笊へ茶碗を入れ出來り。

安藏　腹太え〻か、餅え〻か。

十八　茶えゝかく〳〵。（ト下手より豊作萬作、袖なし半纏百姓装にて出來り）

豊作　これ〳〵餅屋、腹太を二つくれさつせえ。

安藏　あい〳〵、砂糖餡がえゝか、鹽餡がえゝか。

豊作　砂糖の方がえゝが、一つなんぼづゝだな。

安藏　砂糖が五十、鹽餡が三十だ。

豊作　そりやえらく値が高いな。

萬作　おらが村の餅屋では、砂糖餡が三十だ。

十八　今日一日の商ひだから、少しづゝは高いのさ。

豊作　二つ買はうと思つたが値が高いから一つにしませう。（ト錢を出して餅を買ふ）

安藏　お前も一つ買はつしやらぬか。

萬作　おらあ腹太より、茶にしますべい。

十八　今入れ立てだ、呑まつしやい。（ト茶碗へついで出す、萬作二口呑み）

萬作　茶は一杯何ほだ。

十八　なみ〳〵ついで十文づゝだ。

萬作　やあ茶が一杯十文とは、そりやあ滅法値が高い、是れはそつちへ返しますべい。
ト茶碗を出す。
十八　こなたが口ィ附けた茶を、返されちやあ迷惑だ。
萬作　そんなら五文に負けさつせえ。
安藏　四文や五文高いとて、見得の場所だ、呑まつしやいな。
萬作　えゝ馬の小便を見たやうな茶を、十文とは高いもんだ。（ト兩人餅を喰ひ茶を呑む。）
豐作　越後は雪の名所だが、今年のやうに十月から、降り續いたことはない。
萬作　久しい跡に一丈から降つた事があつたつけが、其翌年は豐年だつた。
安藏　それゆゑ今度若い衆が、雪ィならして舞臺を造り、八幡様の月見祭りを年の暮にするといふは。
十八　實ァ來年豐作の前祝ひに企てたのだ。
豐作　雪の中の寒いのも構はず、えらい見物だが、是れに引張つた此幕は、どこの村からくれたのだ。
安藏　此近鄕の若い衆より染めて寄越す約束だつたが、先月から大雪で紺屋の染めが間に合はねえから、
十八　道樂寺さまの思ひ附きで、十二ヶ村の風呂敷を、借り集めて拵へたのだ。
萬作　こりやはあ、綺麗でえゝ思ひ附きだ。（ト此時幕内で拍子木の音するゆゑ、）

豐作　樂屋で拍木ィ打つたからァ、
萬作　最う幕が明くと見えるわい。
　　ト此時幕の蔭より頓念、坊主鬘、白の着附・輪袈裟を掛け、拍子木を持ち出來り。
頓念　これ〳〵餅ィ賣りも茶賣りも、幕が明くから早く行かぬか。
安藏　もう幕が明きますかな。
十八　今度明くのは菅原かね。
頓念　いや、一幕毎に替るゆゑ、今度明くのは忠臣藏の、おかるに勘平、道行きだ。
安藏　や、こりや道樂寺の和尚さま。
萬作　あなたも役者に出さつしやりますか。
頓念　いや愚僧は役者に賴まれて、拍子木ィ叩くのだ。
豐作　そりやあはあ、御苦勞さまでござりますが、不斷お經で拍子木を、叩き馴れてござるわえ。
萬作　拍子木叩きはえゝお役だ。
頓念　今度明く道行は、神主の鈴成どのと新田の與太郞だが、淨瑠璃語りは東京から、えらい太夫を呼んだから、此淨瑠璃は聞きものだ。

豐作萬作　そりやあはあ、樂みな事だな。

安藏　幕が明くなら樂屋へ行つて、

十八　役者衆に賣つて來ませう。

豐作　わしらあ土間へ、

兩人　行きますべい。

頓念　さあ〳〵早く行かつしやい〳〵。

安藏　腹太えゝか。

十八　茶はえゝか。

ト樂屋の調べの鳴物にて、安藏十八は上手、豐作萬作は下手へ這入る、頓念ちよん〳〵と拍子木を打つ、上手より源右衞門麻上下にて、春慶塗りの三方へ觸書を載せ、是れを持ち出來り。

頓念　これは頭取の源右衞門どの、口上を言はつしやるのか。

源右　もう樂屋の支度がえゝから、役人替名を讀み上げるのだ。

頓念　はあ、役人替名を讀まつしやるのか。今頭取が口上を言ふから、神妙に聞かつしやれ。

ト是れにて源右衞門舞臺眞中へ住ふ、後へ下つて頓念控へ。

源右　高うはござりますれど、是れより御免を蒙りまして御一統樣へ申し上げます。越後の國蒲原郡柏崎在十二ヶ村は八幡さまの氏子ゆゑ、年々八月十五日に月見祭りの夜芝居を企てますが定例なれど、七月晦日の大嵐でお宮が大破に及んだゆゑ普請に掛つて祭りも後れ、十二月となりましたが今日舊暦の滿月に月見祭りを企てましたが、水ッ洟汁が凍ります寒さもお厭ひなされませず、雪中をわざ／＼と御見物に來て下さいますは、當社神主鈴成をはじめ、村中一同如何ばかりか有難ひ仕合にござりまする。（ト辭儀をする。）

頓念　南無阿彌陀佛々々。

源右　これ和尚さま、なぜ念佛を言はつしやるのだ。

頓念　つい口癖になつて居るゆゑ、うつかり言つてならねえ、南無阿彌陀佛々々。

源右　又念佛を言はつしやるか。

頓念　是れはしたり、南無阿彌陀佛。

源右　とんだ念佛に邪魔アされて、口上を忘れてしまつた。

頓念　こなたが口上忘れたら、愚僧が替りに言つて遣らう。（ト前へ出て、）則ち檀家の若い者が相勤めまする狂言は、假名手本忠臣藏に菅原傳授手習鑑、是れにて役人替名の次第を一人別に讀み立てま

すから、愚僧が説教を聞かつしやる氣で、神妙に聽聞さつしやりませ。(ト源右衞門觸書を開き、)

源右 役人替名――、(ト讀み)いよ〳〵、忠臣藏、第三段目おかる勘平道行の段始り、其爲口上、

頓念 南無阿彌陀佛。

源右 左樣、(ト辭儀をなし、)それ和尙さま、拍子木だ。

頓念 おつと承知だ、南無阿彌陀佛々々。(ト念佛に合して拍子木を打つ、幕の蔭から金八百姓裝にて出で、)

金八 これ〳〵道樂寺さま、念佛の拍子では、幕を明ける事がならぬ。

源右 どれ、おらが拍子木ィ打つてやらう。

ト源右衞門木を取り、山おろしになり、金八幕を明ける。

(道行の場)――本舞臺向う雪山の上へ板を並べし二重、後淺黃幕、本物の松並木、二段目道行の道具よろしく納る。と金八舞臺眞中へ尻をまくり坐る。

源右 これ〳〵金八、そこへ坐つて何をするのだ。

金八 おれ爰で、舞臺番をするのだ。

頓念 舞臺番とはどんな事だ。

金八　和尙さまは知るめえが、おれ東京へ行つた時芝居へ這入つて見て來たが、勇みな男が尻をまくつて小さな疊の上へ坐り、はくしよく〳〵と嚔をするが勇みでえゝから、眞似をするのだ。

源右　舞臺番をしるならば、もつとあつちの隅へ行つて、褌をしつかりとしめてくれ。

金八　おれ喧嘩の防ぎをしたから、しつかり褌をしめて居るわ。

源右　しめて居るか知らねえが、御見物の女中方が、くつ〳〵と笑つて居るわ。

金八　何が可笑くつて笑ふのだ。（トむつとする。）

源右　これが可笑くあるめえか、睾丸が半分出て居るわ。

金八　え。（ト金八前を合せ押へる。）

頓念　愚僧も可笑さをこらへて居たが、よく褌へくるめばえゝに。

金八　疝氣で人より大きいから、一幅位ぢや包めましねえ。

頓念　そんなに大きな睾丸か。

金八　嘘をつくと思ふなら、爰で出して見せますべいか。

源右　睾丸ア出されてたまるものか。

源右
頓念　はゝゝゝゝ。（ト花道の揚幕にて、）

鈴成　これ頭取さん、もう出てもえゝがな。

源右　おゝ、勘平が出るといふ、跫音をさせてくれ。

金八　おつと合點だ。（ト金八木を取つて、とんからんと飴屋で飴を切るやうに打つ）

頓念　なぜ、そんな拍子を取るのだ。

金八　おれ高田の飴屋に居たから、こりやぶつ切りを切る拍子だ。

源右　そんな拍子ぢやあ出られねえ、おれが跫音を打つて遣らう。

ト源右衛門取つてばた／＼と打つ、是れにて花道より與太郎島田鬘、行の短い振袖おかるのこしらへにて駈けて出來り、花道へばつたり倒れる、跡より鈴成野郎の鬘、おしよぼから、げ大小風呂敷包を背負ひ、跛を引きながら出來り、跡より新十郎着流し振袖のこしらへにて出來り、

新十　もし／＼鈴成さん、もつと早く駈けて出るのだ。

鈴成　どうして駈けて出られるものだ、ねぶとが痛くつてこたへられねえ。

新十　えゝそんな役者があるもんか、與太郎どの起きるのだ。

與太　腰をひどく打つて起きられましねえ。

新十　起きなくつては相手が困る。

與太　それぢやあ腰ィ擦つて下せえ。（ト鈴成與太郎の腰を擦りながら）
鈴成　これお師匠、あんとかいふのだな。（ト新十郎小聲にて）
新十　名を呼ぶのだ〳〵。
鈴成　おかるか。（ト與太郎寐たまゝ顏を上げ）
與太　勘平どの。
鈴成　これ。

ト是れなきつかけに下手淨瑠璃臺の前を切つて落し、爰に淸元連中居並び、前彈きなしに直に淨瑠璃になる。

〽落人も見るかや野邊に若草の、薄尾花はなけれども、世を忍び路の旅衣、着つゝ馴れにし振袖も、どこやら知れる人目をば、隱せど色香梅の花、散つてもあとの花の中、いつか故鄕へ歸る雁、まだ肌寒き春風に、柳の都あとに見て、氣も戸塚はと吉田橋、墨繪の筆に夜るの富士、よそ目にそれと影暗き、鳥の塒をたどり來る。

ト鈴成與太郎の腰を擦り手を取り、兩人無器用に振、新十郎側にて敎へ、やう〳〵兩人可笑味の振。此内鈴成はれぶとの痛む思入、與太郎は腰の痛き思入にてよろしくあつて舞臺へ來る。頓念本

を持つて後からせりふを附ける。

鈴成　色に耽つたばかりに、大事の場所にも有合さず、不忠に不忠を重ねしゆゑ。えゝ、あんとか言ふのだつたな。

頓念　是非に及ばず立退きしが、

鈴成　是非に及ばず立退きしが、

頓念　爰は戸塚の石高道、

與太　爰は戸塚の石高道、

頓念　そりやあおかるのせりふではない。

鈴成　そりやあおかるのせりふではない。

頓念　えゝ、又間違つたか。

與太　えゝ、又間違つたか。

頓念　やれ情ない、なんまみだ佛。

鈴成　やれ情ない、

與太　なんまみだ佛。

新十　斯うこぐらがつては、仕方がない。
源右　せりふなしにするがえゝ。

　　　トばた〳〵になり、花道より百姓麻上下大小諸士のこしらへにて出來り、

○　これ〳〵頭取、今新潟から枕後家と、三味線後家と連立つて、褒詞に爰へ出ますべい。
新十　今出られては困るから、跡の幕にして下さい。
○　そんだと言つて、遠い所から態々爰へ來たもんだから、
新十　はて、假令どこから來ようとも、
○　でも。（ト肩衣を脱ぎかけきつとなる。）
新十　えゝ、そのせりふは四段目で言ふのだ。
○　でも。
源右　さりとはしつこい、引込まぬか。
○　でも。

　　〽爭ふ折柄揚幕から、雪を欺く越後子。

　　　ト此内百姓柄へ手を掛けきつとなるを、新十郎留めて下手へやる。渡り拍子になり、花道よりおか

れおいろ新潟藝者のこしらへ、誂への扇を持ち出來り花道へ留り、是れにて鈴成與太郎みな〳〵舞臺に住ふ。

お粂　東西々々、狂言半、お邪魔をばかへりみず、湊の新潟から、
お色　勘平さんとおかるさんを、花によそへてわたしらが、
お粂　廻らぬ口で、
兩人　褒めやんせう。
　　〽梅はすつきり武士の、すいな姿の殿御振り、櫻は花のしをらしく、御殿勤めの女子なり。
お粂　どちらも對に色も香も、
お色　在原さんに小町さん、
　　〽二人手に手をとりがなく、東役者も及びなき、うら山吹の取りなりは、茅出楓の色盛り。
お粂　垣の卯の花雪國の、
お色　月見祭りの花形と、
お粂　ほゝ敬つて、
お粂
お色　さうだのんし。（ト此内兩人振よろしくあつて納る。）

皆々　やん〳〵。

鈴成　目出度く一つしめませう。

皆々　よい〳〵〳〵。（ト皆々手を打つ）

〽色の街の仇者も、さうだのんしが玉に疵、手を打ち連れて歸りける。

ト　おかれおいろよろしく花道へ這入る。

金八　二人ともちにえゝ器量、おれも首ツたけ惚れこんだがな。

新十　又そんな事を言ふか。

源右　それ、睾丸が半分出たぞ。

金八　どつこい、しまつた。

鈴成　褒詞が濟んだら、道行にかゝらうか。

與太　太夫さん頼みます。

〽更渡る松の葉音もおのづから、風がもて來る柳より、とんだ所へ招かれて、直ぐなる道を旅奴。

ト　鈴成與太郎向うへ思入あつて、下手丸木の臺へ腰を掛ける、花道より金十根の上りし奴の鬘、紺

看板一本差し草履、中間のこしらへにて、箱提灯を持ち出來り花道にて。

〽のそり〳〵と出掛けしは、月夜烏に起されて、八つか七つか足早に、寐惚た目をば擢火打、煙草を友に信濃坂、木の根をよける提灯の、しるしに附きし山道を、がつくりばつくり來りける。（ト金十よろしく振あつて舞臺へ來る。）

金八　ヨウ〳〵藪際の金十どん、盆踊の隊長だけ、踊りに掛けてはうめえもんだ。

源右　これさ、又舞臺番が褒めるのか。

金八　褒めても吉丸は出しやあしねえ。

頓念　さあ金十どの、せりふを言はぬか。

金十　何といふせりふだつたな。

新十　あれ程稽古をしなすつたに、

金十　おれが覺えの悪いのは、御見物さまが御存じだ。

頓念　そんなら、せりふはよしにして、

源右　早く踊を踊りなせえ。

金十　七つと思つて立つて來たが、こりやはあ時を間違へたか。

〽まゝよ三度笠横ちよに冠り、旅は道連れ世は情、〽昨夜宿りし旅籠屋の、給仕の下女が据膳を、喰ぬは恥とつい箸を、鷄の空音に夜明けかと、寐耳にびつくり鐘の音も、六つか七つか早立ちに、續く荷物の馬士唄や、〽箱根なあ八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川え、〽驛路の鈴のぶら〳〵と、持越し酒に睡氣さし、木の根につまづき鉢合せ、あいたゝゝ、田圃の道端に突立ち居るは、奧州の衣川にて往生の、立往生の辨慶か、但しは源九郎狐かと、眉毛濡らして柄に手を、掛けて寐ぼけて目を見開き、とつくり見れば地藏尊、扨こそ痛い石天窓。

ト金十よろしく振あつて、ばた〳〵になり、おつん白髮鬘田舍婆あのこしらへ、澁團扇を持ち出來りつか〳〵と舞臺へ來るを、金八これを留め。

金八　これ〳〵婆さん、何處へ行くのだ。

つん　褒詞を言ひに來たのだ。

源右　今は狂言のどうぶくら、いゝ、いゝ、褒詞があつては邪魔になる、幕になつたら褒めて下せえ。

つん　いや年寄は氣が短い、あんでも今褒めねばなんねえ。

頓念　一體お前は誰を褒めるのだ。

つん　おらが隣の金十を褒めるのだ。
源右　はて、それぢや佐五兵衛どのゝお袋だな。（ト是れにて金十前へ出て、）
金十　これ〳〵お袋、若い女ならえゝけれど、皺だらけな婆あさんに褒められては外聞がわるい。
つん　何わりい事があるものだ、是れでも昔は新造つ子、花のあつた時分さあ、〳〵螢なかせた事もあるこりや〳〵。（ト踊る。）
金十　これさ婆あさん、邪魔になるから引込みなせえ。
つん　おらが若い時から言出した事を、跡へ引いた事はない、あんでも爰で褒めにやなんねえ。
源右　えゝ、さう強情を言はつせるなら、仕方がねえ褒めさつせえ。
　　ト是れにておつん、澁團扇をかざし、いやらしき思入にて前へ出で。
つん　東西〳〵狂言半お邪魔ながら、おらが隣の金十どんを、ちくとんばかり褒め申さう。先づ金十どんのえらいのは日に一升の飯を食ひ、酒は一人で二升呑み、まだ其上に餅好きで三升舂の熨斗い餅、ぺろりと雜煮でしてやつた、四升馬鹿にしたこんだと六升仲間の堂場では、爺さまや婆さまの大評判。
新十　こりやおつな褒詞だ。

源右　悪くいふのか善くいふのか。
頓念　あんだかさつぱり分らない。（トおつん思入あつて）
つん　あゝ大變だ〳〵。
金八　婆あさん、どうしたのだ。
つん　急に小便が仕たくなつたが、爰へ垂れちやあ悪いかな。
源右　えゝ途方もねえ事を言はつせえな、爰へ垂れられてたまるものか。
つん　それでも、出もの腫ものは所嫌はずと言ひますぜ。
金八　そんな事をいはねえで、早く樂屋へ行かつせえ。（ト金八おつんを引張る。）
つん　あゝこれ、ひどく引張るな、漏りさうだからぶつこぼれるぞ。
金八　えゝ汚ねえ事を言はつしやるな。（ト山おろしにて金八おつんを連れて下手へ這入る。）
金十　とんだ婆あさんの褒詞で、おれが引込みを忘れてしまつた。
　〽燈火の消えたは南無三と供の奴の提灯を、かたげていきせき走り行く。
　ト金十提灯を肩へかけ、上手へ這入る。
新十　又褒詞のないうちに、

源右　早く口說きに掛るがいゝ。

頓念　さあ〳〵、せりふを言はつしやい。（ト是れにて鈴成與太郎前へ出で、頓念後から附け、）

鈴成　さては今の奴どのは、時を違へて立つたと見ゆる。

與太　おりや又二人の追手かと、思うてびつくり魂消たわい。

〽何も譯なき憂さ晴らし、うきが中にも旅の空、初時鳥明け近く、〽色で逢ひしも昨日今日、堅い屋敷の御奉公、あの奥さまのお使ひが、二人が艷冶の御家來で、其惡緣が白猿によう似た顏の錦繪、〽こんな緣が唐紙の、鴛鴦の番ひの樂しみに、泊り〳〵の旅籠屋の、ほんの旅寐の假枕、嬉しい中ぢやないかいな。

ト此內鈴成に源右衞門、與太郎に新十郎附き、口說の振無器用に可笑味あつて、トヾ兩人ひつたり寄添ふ、山おろしばた〳〵になり、花道より榊、神主の女房のこしらへ、抱兒を抱き出來り。

源右　そりやこそ言はぬこんではねえ、又褒詞が出て來たぞ。

新十　今日のやうに鬱陶しく褒詞の出る事はない。（ト榊舞臺へ來り鈴成に縋り、）

榊　えゝ、こなさんは〳〵、子まであるわたしを殘し、どこへ逃げて行きなさるのだ。

鈴成　や、褒詞と思つたら、そちは女房、

與太　そんならお前らのお上さまか。

源右　褒詞なら次の幕へ、どうか廻してくれさつせえ。

榊　いえ〳〵褒詞どころではない、恨みを言ひに來ましたのぢや。

新十　何の恨みか知りませぬが、今は狂言最中だ。

頓念　どういふ譯か存じましねえが、まあ樂屋へござらつせえな。

榊　いえ〳〵樂屋へは行きませぬ、爰で言ひたい事は言つて、恥をかゝせにやなりませぬ。

鈴成　何もおぬしに其やうに、恥イかゝされる覺えはない。

榊　なに、無い事があるものかいな。（ト合方。）お前方もぬしの惡性、まあ一通り聞いて下さりませ。元私は三條の白山明神の社家の娘、十二座神樂の巫子に出て鈴の振袖引かれしが、緣の端で言交し、終に高間がはら帶を人に見られて言譯なく、こんな赤兒まで出來たゆゑ、てけてつてんにも最う出られず。

〽それ其時のうろたへ者には誰がした、みんなわたしの心から、死ぬる其身を存命て、思ひ直して親里へ、連れて夫婦が身を忍び、〽野暮な田舍の暮しには、すゝぎ機織賃仕事、常の女といはれても、

お前と添ひ度く思ふのに、女郎はござれ地獄はござれ、生娘乳母下女子守、何でもござれに手を出して、年中わたしに苦勞を掛け、擧句の果てに娘を連れ、駈落する氣と見たゆゑに、恨みを言はねばならぬわいな。(ト此内榊よろしくこなし、)

新十　成程そんなに女好きで、お前に苦勞を掛けるとあれば、其腹立ちは御尤。

源右　然し是れは狂言で、お前が娘と思ひなさる、

頓念　此振袖は新田の太郎兵衛の息子與太郎、

三人　まあとつくりと顔を見さつせえ。

榊　えゝお前方までが同じやうに、太郎兵衛どのゝ息子などゝ、よい加減に嘘を吐かしやんせ。

新十　何しに嘘を吐きませう、

源右　これは女ではござりましねえ。

榊　なに、ない事がありませう。(ト與太郎前へ出で、男の思入にて、)

與太　たつて嘘だと言はつしやるなら、おれ乳を出して見せますべいか。

鈴成　えゝ馬鹿な事を言はつせえ、そんな事しると狂言が遲くなるぞ。

榊　見せぬは女に違ひない、こりや此儘にして置かれぬわい。

〽身拵へする其處へ。（ト榊きつとなる、花道の揚幕にて）

佐次　やれ來いやあい。（トどん〳〵になり、花道より佐次郎兵衞七段目の平右衞門の拵へにて出來りのりになり）やあ〳〵神主、おらが妹とちゝくり合、平にくれろといふゆゑに、おれが取持ち女房に遣つた恩さあ打忘れ、娘を連れて駈落と、聞いてこつちに言分あれば、爰まで附けて來た、さあ妹と一緒に歸ればよし、いやだなんぞとじくねると、握り拳を喰はせるぞ、神主返事は。

〽なんと〳〵と呼はつたり。（ト佐次郎兵衞舞臺へ來り）

榊　誰かと思へばお前は兄さん、力となつて下さんせいな。

佐次　おゝ、おれが來るからは大丈夫だ。

源右　これ〳〵佐次郎兵衞どの、こなたの役は平右衞門。

新十　七段目へ出るのが役、爰へ出る幕ではない。

佐次　幕であらうがあるめえが、親仁どのは六月の二十九日夜、人手に掛り敢ない最期を遂げられて、便りねえ此妹。

榊　兄さんが來て嬉しいと、思つたらば持病の癪が、あいたゝゝゝ。

佐次　これ妹、しつかりしろ〳〵。

頓念　これ〳〵そりやあ七段目でいふせりふだ。
源右　いやはや困つた人達だ。
鈴成　これ平右衛門ではない佐次郎兵衛どの、道行の邪魔になるから、女房を連れて行つて下せえ。
佐次　いや妹より、鈴成どの、こなたをおれが連れて行くのだ。
鈴成　何でおれが行くものだ。
佐次　行かねえと言やあ佐次郎兵衛が、腕づくで連れて行く。（ト胸倉をとる。）
鈴成　何をするのだ。（ト振拂ふ。）
佐次　いや、どつこい。
〽櫻々といふ名に惚れて、どつこい遣らぬはそりやなぜに、所詮お手には入らぬが花よ、そりやこそ見たばかり、それでは色にならぬぞえ。
ト此内鈴成佐次郎兵衛立廻り、皆々これを留め、自然に所作と見える可笑味の仕組、鈴成の胸倉を取り引立てるを、與太郎留めて、佐次郎兵衛與太郎の肩を足で蹴る、與太郎うんと云つて引くり返り倒れる、皆々びつくりして介抱なし、
新十　やあ大變だ〳〵、與太郎どのが目を廻した。

源右　水を持つて來て早く掛けぬか。（ト奥より金八、手桶を提げて出來り、）
金八　どこに犬が交尾で居るのだ。
源右　これさ犬ではねえ、人間だ。
頓念　早く水を掛けねえか。
金八　おつと合點だ。（ト柄杓に汲んで佐次郎兵衞にぶつかける、佐次郎兵衞びつくりして、）
佐次　やあ、きつた〳〵。
金八　喧嘩だ〳〵。
源右　それでは狂言が跡へ戻るわ。（ト此内皆々わや〳〵と水を掛け呼生けなどする事あつて、）
鈴成　所詮素人療治では、蘇生るのはむづかしい、玄伯さまを頼むがえゝ。
新十　玄伯さまは、定九郎の拵へをしてござるから、藥を盛つてくれゝばよいが。
頓念　あに盛らねえ事があるべい、人を助けるは醫者の役だ。
金八　おれ行つて、呼んで來ますべい。（トそこ〳〵に奥へ駈けて這入る、奥より以前のおつん襷を掛け出來り。）
つん　これ〳〵、そんなに騷がずと、湯でも沸すがえい。
源右　婆あさんお前、何しるのだ。

つん　蟲氣附いたと聞いたから、わしが產してやらうと思つて。

新十　蟲氣附いたのではない、目を廻したのだ。

つん　そりやあはあ飛んだ間違ひだつた。

ト奥より玄伯百日鬘、黒の着附、定九郎のこしらへ、木刀を差し醫者の思入にて金八附いて出來り。

玄伯　今金八に話しを聞いたが、とんだ事が起つたな。

鈴成　これははあ玄伯さま、お拵へ中お氣の毒でござります。

新十　蘇生りまするか、蘇生りませぬか、脈を見て下さりませ。

玄伯　どれ診察いたしまして、（ト玄伯おつんの手を取り脈を見る、）是れは平脈何ともないがな。

つん　もし、こりやわしが手でござります。

玄伯　道理こそ、皺だらけだと思つた。

源右　是れが當人の手でござります。（ト源右衛門與太郎の手を取り出す、玄伯脈を窺ひ、）

玄伯　これは大變、脈は絶えた。

皆々　えゝ。（トびつくりなす、）

鈴成　それぢやあ與太郎は死にましたか。

頓念　死んだら引導渡してやらう。
源右　まだ引導には及びますまい。（ト此内榊佐次郎兵衞顚へ出し、思入あつて、）
榊　若し兄さん、爰に居たなら掛り合、
佐次　なに、掛り合になるものだ。（トわざと力み、）
へ口の減らない鷺坂の、腰をかゝへてこそ〳〵と。
ト佐次郎兵衞さかき逃げに掛るを、新十郎源右衞門捉へて。
新十　どつこい逃してなるものか。
源右　相手が死ねばこなたは下手人。
榊　若し、下手人になりますと、どんな仕置になりまする。
つん　人を殺せば首がない。
佐次　そんなら首を取られますか。（ト首を押へて思入、）
榊　若し兄さん、
佐次　あゝとんだ事になつたなあ。（ト兩人手を取交し泣く、玄伯とつくり脈を見て、）
玄伯　いや、脈が出て來た、案じるな〳〵。

佐次　どうかはあ、助けて、
榊佐次　下さりませ。
玄伯　愚老が家傳の吹込み藥、これのう用ゐれば大丈夫だ。
ト此内玄伯紙入より藥包を出し、與太郎の鼻の穴へ入れる。
源右
四人　與太郎どのやあい。(ト呼び生ける、與太郎うんと心附き、)
與太　はつくしよ。(トくしやみする、)
四人　心が附いたか。
與太　はつくしよ。
四人　しつかりしねえか。
與太　はつくしよ。
鈴成　あんで嚔がこんなに出ますか。
與太　はつくしよ。(ト藥包を見て、)
玄伯　こりや嚔が出る筈だ、氣附けと間違へ、鼻の穴へ嚔藥を吹き込んだ。
與太　道理ではつくしよ、嚔が出續けだ。

鈴成　まあ、あんにしろ玄伯さまのお蔭で息を吹き返し、
佐次　一人ならず下手人の、二人の命が助かつたは、
玄伯　産神祭りに目出たいこんだ。
與太　先づ此幕はこれ切りに、跡の幕を急ぐがえゝ。
鈴成　そこは少しも氣遣ひなし、小頭どんが大の性急。
玄伯　はツくしよ、嚔藥をかいだか知らぬ。
〽塒を放れ啼く烏、かはいゝの女夫連れ、先づは急げと心は後へ、お家の安否いかゞぞと、案じ行くこそ。
ト鈴成與太郎道行の振、此内矢張りはつくしよをなし、手を引いて行くを榊立ち掛る、是れを佐次郎兵衞留め、鈴成與太郎は上手、榊 佐次郎兵衞は下手へ這入る。玄伯木を打つ、是れにて下手太夫座を消す。
源右　これ道具方、早く幕を引かねえか。
玄伯　いやいや爰は幕なしに、おれが當込みの五段目を引續いてやつてくれ。
源右　いや菅原と一幕置きゆゑ、爰は車引をしるのが順でござります。

玄伯　車引でも時平をしるから、どつちでもえゝけれど、先づ定九郎を早く見せてえ、其五段目が先へ出來ずば、芝居の入費は一錢も出さぬぞ。

源右　一の金主の玄伯さまが、金は出さぬと言はつしやつては、頭取初め掛りの迷惑、こりや五段目を先きへやりませう。

頓念　そんだら與一兵衞しる五左衞門どんに、支度しろと言つて下せえ。

金八　おつと合點だ。（ト金八奥へ這入る、）

新十　さあ、玄伯さまも樂屋へ行つて、早く支度をなさりませ。

玄伯　支度をしるも面倒だから、これで直に出來まいか。

源右　なんぼ脫劍の世界でも、定九郎が無腰では與一兵衞が殺されましねえ。

玄伯　ではあれども御布告にも、刀の事を兇器といへば、帶劍するは惡かんべい。

頓念　そんな議論を言はつしちやあ、狂言が出來ましねえ。

新十　さあ〳〵義太夫に掛りますから、

源右　早く支度のうなされませ。（ト源右衞門木を打ち、上手の幕を落す、爰に竹本連中居並び居て、）

〽又も降り來る雨の足、人の跫音とぼ〳〵と、道は闇路に迷はねど、子ゆゑの闇に突く杖も。

直なる心堅親仁、一筋路の後から。

ト此内玄伯はあわてゝ奥へ這入る、新十郎源右衛門は上手へ藪疊稻叢を出す、雨の音になりよき程に下手より五左衛門、白髪鬘石持の着附、着流し白太夫のこしらへ、三方へ腹切刀を載せこれを持ち出て來る、新十郎源右衛門是を見て。

新十　これ〳〵五左衛門どの、爰は忠臣藏の五段目、なぜ白太夫で出なすつた。

五左　今新田の金十どんが、櫻丸の切腹を、爰でしると言はしやつたから、

源右　なに、玄伯さまのお賴みで、忠臣藏の五段目だ。

五左　それぢやあ支度を仕直して來べい。（ト下手へ這入る。）

頓念　太夫さん、最う一遍賴みます。

〽子ゆゑの闇に突く杖も、直なる心堅親仁、一筋路の後から。

ト五左衛門笠を冠り杖を突き出來り、下手にて、

玄伯　おゝい〳〵親仁どの、

〽よき道連れと呼はつて、斧九太夫が忰定九郎、身の置所白浪や、此街道の夜働き。

ト下手より玄伯尻端折り大小、蛇の目傘を持ち出來り、

さつきから呼ぶ聲が、こなたの耳へは這入らぬか、此物騒な街道を、よい年をして大膽々々。

〽連れにならうと向ふへ廻り、きよろ附く目玉ぞつとせしが、流石は老人。

五左　是れは〳〵お若いに似ぬ御奇特なこんだ、わしもよい年をして一人旅はいやなれど、何處の浦でも金ほど大切なものはない、去年の年貢に差詰り、此中から一家中の在所へ無心に行たれど、是れもびたひらなり才覺ならず、埒の明かぬ所に長居はならず。

〽すご〳〵一人戻り道と、半分言はさず。

玄伯　やい、やかましい、貴様が年貢の納らぬ、其相談を聞きには來ぬ。

ト此内玄伯五左衞門、無器用に狂言をする、爰へ金八出で知らせの木を打ち、下手の幕を落し淸元連中居並び、直に淨瑠璃になる。

〽兄弟夫婦に引別れ、取殘されし八重の身の仕舞もつかぬ物思ひ、

ト此淨瑠璃を聞き、玄伯五左衞門間違つたといふ思入、奥より以前の與太郎出來り、八重の思入。

五左　これ〳〵與太郎、あんで貴様爰へ出たのだ。

玄伯　爰は五段目の鐵砲場、おかるの出る所ではねえ。（ト與太郎男の思入にて、）

與太　おらあおかるではねえ、八重で出たのだ。

源右　あんで五段目へ八重が出るのだ。

與太　今金十兄いが、櫻丸の腹切りしるといふから、

玄伯　いや誰があんと言はうとも、五段目をしねえ内は、賀の祝ひはさせられねえ。

　　ト奥より金十若衆鬘、賀の祝の櫻丸のこしらへにて出來り。

金十　これ、所に古いおれがしるを、させられねえとは誰がいふのだ、（ト氣を替へて、）女房ども嘸待つたであらう。

　　ト聲にびつくり、走り寄り、（ト皆々立ち掛り、）

新十　これ金十どの、爰は五段目の鐵砲場。

源右　お前の出る幕ではない。

金十　假令あらうがあるめえが、あんでも爰で仕にやあならねえ。

頓念　そんな無理を言はつしたとて、幕の順があるものだ。

金十　おれ幕の順には構はぬが、たつて櫻丸が先きへ出來ずば、入費の割は出しましねえぞ。

源右　さう言はれちやお頭取が、一人迷惑いたします。（ト玄伯思入あつて、）

玄伯　これ頭取、誰があんと言はうとも構ふ事はねえ、遣つたがえい、今でこそ醫者なれど、元は當所

の鄕士の身共、百姓などゝは譯が違ふぞ。

金十　そりやあ舊幕時分のこんだ、御一新此かたあ、穢多も非人も同じ平民、鄕士も絲瓜もあるもんか。

玄伯　あつてもなくても、五段目を、是非とも先きへせねばならぬ。

金十　いや、賀の祝ひを先きへしるわ。

玄伯　見事しるかよ。

金十　あんでもねえ事。

玄伯
金十　何と。（ト玄伯金十立ち掛る。此中へ五左衞門這入り）

五左　まあ〳〵二人とも待たつしやい〳〵お前方が大小さいたり、所に古い事をいへば、此五左衞門は新から開化して御免になつた大小も今ぢやお邪魔ゆゑ賣つてしまひ、學校入費に納めてしまつた草分で御領主樣から帶刀を御免になつた舊家だから、おれが先きへ言はにやあなんねえが、御一爰らが文明といふ所だ、新參古參の席順などを、いふのはそりやあ昔のこんだ、そんな野暮な事を言はずと、おらが與一兵衞と白太夫を爰で一緒にしようから、二人も一緒に鐵砲場と賀の祝ひを仕たがえい。

新十　成程これは年の功、五左衞門どのゝ云ふ通り、

源右　五段目と三の切を一緒にしたなら、面白かんべい。
頓念　玄伯どのも金十どのも、五左衛門どのゝ扱ひで、
金八　双方一緒にやらつしやい。（ト是れにて玄伯金十思入あつて、）
玄伯　所に古い草分の、五左衛門どのゝ挨拶ゆゑ、そつちが得心する事なら、
金十　こつちも是れで料簡しませう。
五左　そんなならおらが詞を聞き、双方得心ある上は、
新十
源右　さあ〳〵是れから遣り直し。
　　〽すた〳〵一人戻らずと、半分言はさず。
玄伯　やいやかましい、貴様の年貢の納らぬ、其言葉を聞きには來ぬ。（トせりふを忘れ、）何とやら長い
　事を言ふ所だが、性急ゆゑ手短かに、四五十兩持つて居るのを貸してくれ。
　　〽懐へ手を差入れ、引摺り出す縞の財布。（ト玄伯五左衛門の懐から財布を引出す。）
五左　あゝ若しそれは、
玄伯　これ程こゝに待つて居ながら、
　　〽引つたくる手に縋り附き。

清〽譯を聞かして〳〵と、聞きたがるこそ道理なれ。〽暫くあつて白太夫、はみ出し鍔の小脇差、三方に載せしを〳〵と、出るも老の足弱車。

ト此内新十郎源右衞門下手へ、梅松櫻賀の祝ひの臺幹を出す、與太郎金十よろしく狂言の振、五左衞門は尻をおろし三方へ脇差を載せ、是れを持ち白太夫の思入にて。

五左　用意よくば、さゝ早う。

玄伯　きり〳〵金を渡してしまへ。

五左　今賀の祝ひを遣りかけたから、暫く待つてくれさつせえな。

玄伯　知つての通りおらあ性急、長く待つては居られぬぞ。

五左　用意よくば、さゝ早う。

〽いふに女房又びつくり。

與太　こりやまあ何事でござりまする、これこちの人、あんで死ぬのぢや腹切るのぢや、切らねばならぬことならば、未練な心は出しやしませぬ、これ親仁さま。

ト與太郎五左衞門の胸倉をひどく取り、引き附ける。

五左　あいたゝゝゝゝ、何をするのだ。（ト與太郎手を放し女の思入にて、）

與太　たつた一言、斯ういふ譯ぢやと、譯を聞かせてくれさつせえ。（ト與太郎新十郎のする通りをする）
玄伯　さあきり〳〵金を渡してしまへ。
源右　又出かけさつしやるか。
玄伯　それでも待つて居られぬものを。
頓念　さあお前の番だ。
金十　あんと言ふのだな。
頓念　親人になに御苦勞を、是まで馴染む夫婦中、所存殘らず言ひ聞かさん。
　　ト經を讀むやうにいふ。
新十　さうお經になつてはいかない。
金十　これ師匠、おらあ覺えが悪いから、お前せりふを言つて下せえ。
新十　一々附けるも面倒だ、それではわしが言ひませう。百姓づれの悴ながら、相丞さまが御愛樹の松梅櫻に名を形どり、松王梅王櫻丸、
　　〽憚りありや冥加なや。
兄弟三人が其中に、櫻丸が身の幸ひ、竹の園生の御所奉公、下々の下たる牛飼舍人、

〽勿體なくも身近う召され、相丞さまの姫君と割なき中のお文使ひ、仕果せたるが仇となり。

ト此内金十よろしく櫻丸の思入、玄伯は待遠だといふこなしあつて。

玄伯　これ〳〵、いつまでおれを待たして置くのだ。

〽急き立つれば取り附いて、

五左　まあ〳〵待つて下さりませ、如何にも金でござりましたが、たつた一人の娘が聟、餘儀ない譯で入る金ゆゑ、どうぞ此金娘に見せ、悦ばせた其上で、殺されて死にたうござりまする。

玄伯　えゝぐづ〳〵とよまひ言、念佛はざいて早くたばれ。

五左　おゝ念佛を唱へる所だ。

〽願ひこんだる鉦撞木。（ト五左衞門懐へ手を入れ鉦のなき思入にて）

あれ、頭取、鉦だ〳〵。

源右　あい〳〵、（と四邊を捜し太鼓を出し）鉦がねえから太鼓だ。

五左　おゝあんでもえゝ、南無阿彌陀佛々々。（ト五左衞門太鼓を叩く）

清〽念佛の聲もろ共に。

竹〽ぐつとばかりに突込めり。

〽八重が泣く聲打つ鉦も、拍子亂れて南無阿彌陀。
〽年も六十四苦八苦。
金十　憚りながら御介錯、
〽おゝ介錯と、後へ廻り。
玄伯　南無阿彌陀佛。
五左　そりやおれが言ふのだっ
〽あへなく息は絶えにける。
ト此内五左衞門與一兵衞白太夫二役にて、あちこちの相手になりよろしくあつて。
〽わつとばかりに泣き伏せば。
ト與太郎わつと大きな聲して泣く、奧より平右衞門の佐次郎兵衞出て。
佐次　これ〳〵妹、まだ〳〵そんな事ではない、どえらい事があるぞよ。(ト與太郎おかるの思入にて)
與太　若し兄さん、そりや何事でござんすぞえ。
佐次　そちがお頭に身請をされ、添はうと思ふ勘平はな。
與太　勘平どんは、

佐次　腹切つておつちんだわやい。
五左　え丶何を邪魔をしに出るのだ、腹を切つたは櫻丸だ。
佐次　あに勘平だ。
五左　え丶櫻丸だといふに、
佐次　いや〱勘平だ〱。
竹〽爭ひければ、
源右　やあ誰かと思へば平右衞門の佐次郎兵衞、あ丶聞えた鐵砲場にも賀の祝にも、役がねえから狼籍か。（トのりになり、）但し又此處をば一力と、知つて出たのか知らずに出たか、返答次第で容赦はねえぞ。
〽白張の袖まくり上げ、摑み拉がん其勢ひ。
ト此時上手へ以前の鈴成、白張の上を引掛け賀の祝ひの高箒を擔ぎ出で。
鈴成　やあ、芝居知らずの暴れもの、何れもにはお構えあるな、同じ村には住ふとも、神主一つでねえといふ忠義の働きお目に掛けん、こりややい、今仕掛けたる此二場、留められるなら留めて見ろえ丶。

佐次　おゝ此五兵衞が留めたからは、一寸なりと遣つて見ろえゝ。

竹〽命限り根限りやッつ戻しつ引合ふ車、御簾も飾りも踏折り〳〵、顯はれ出たる時平の大臣、

ト佐次郎兵衞梅王の思入、源右衞門定九郎の傘を開き車にする、此後へ玄伯出で。

玄伯　牛扶持喰ふ青蠅めら、轍にかけて曳殺せ、えゝ。

五左　これ〳〵お前までが同じやうに、さう狂言をごた交ぜに、交ぜッ返されちや筋が立たねえ、いい加減にしなさらねえか。

玄伯　やあ麿に向つて推參なり。

〽くわつと睨みし目の光り。

五左　まだそんな事を言はつしやるか、五段目の方をつけさつせえな。（ト五左衞門淨瑠璃を語る。）

〽仕濟したりと件の財布、暗がり耳の摑みあひ。

ト是れにて玄伯又定九郎になり、財布の中へ手を入れ。

玄伯　久し振りの五十兩忝ない。

〽死骸を直に谷底へ、はね込み蹴込む泥塗れ、はねは我が身に掛るとも、知らず立つたる後より。（ト玄伯定九郎の思入よろしく、）

五左　それ、猪だ〳〵。
佐次　猪はどうした。
金十　おしゝは何處だ。
五左　おい、猪だ〳〵。
〽逸散に來る手負猪。（ト早笛になり、花道より音松角兵衛の拵へにて駈けて出來り）
玄伯　や、こりや月形の角兵衛獅子。
金十　これも越後の名物だ。
五左　ぐる〳〵廻つて早く引込め。
音松　いゝやおいらは、踊らにやあ引込めねえよ。
玄伯　こりやあ小僧の言ふのが尤。
金十　さあ〳〵早く。
皆々　踊つた〳〵。
音松　おとつさん、太鼓を叩いておくれ。
五左　いや、とんだ目に逢ふものだ、（ト五左衛門太鼓を叩きながら）えゝ最初御覽じろ、ちよいと遣りな

よ、一人で遣りなよ、

〽越後月形は北國一の、藝の實生の角兵衞獅子、五つ六つから引くり返り、獅子の洞入り洞がへり。（ト音松振あつて、五左衞門太鼓を叩き、）

又も遣りなよ、ちよいと御覽じろ、おや〳〵たんと遣りなよ、又來る爲だよ。

ト此內玄伯金十、音松振に浮れし思入にて、玄伯は時平の金冠を、金十は直衣の金烏帽子を冠り、角兵衞獅子の思入にて前へ出で。

竹〽越後新潟は北國一の、戀の湊の名所、一の町二の町八百八後家の、夜着の洞入り洞がへり。

ト玄伯金十振あつて。

あいや〳〵、まだイヤ。（トよろしく納る、雪おろし烈しく、日覆より夥しく一面に雪降る、）

鈴成　おゝ大層雪が降つて來たわえ、それに今夜は夜明けまへ。

與大　一倍寒さが強くなるので、手足は素より脣まで。

新十　凍つて口が利かれねえ。

源右　ト雪おろし烈しく、どんと音して日覆より誂へい雪の塊落つ、雪の花ぱつと散る、此內皆々體の

玄伯　さあ〳〵大變體が凍つた、是れでは焚火の夜明しで、凍る思入にて、トヽ立縮みに凍りし思入。

五左　日が當らねば氷が解けぬが、早く鳥の聲が聞きてえ。

ト本釣鐘、鶏笛、是れにてうしろ引拔き、向う雪の遠山になり、鈴成與太郎おかる勘平の思入にて。

鈴成　もはや東雲、

與太　東もしらむ、

皆々　横雲に、（ト鳥笛になり、正面へ紅絹張灯入の日を出す、是れにて體の解けし思入にて、）嬉しや解けた。

清〽おかる勘平ぢやなん〳〵なけれど、堅い屋敷のやの字の帯も、

竹〽戸浪源藏ぢやなん〳〵なけれど、いろのいろははつい解ける、

清〽解けて嬉しや、ヤアチヨン〳〵雪の肌。（ト皆々總踊りあつて、）

竹〽先づ今日は是れぎりと、朝日と共に打出しの、清〽月の夜芝居むら烏、兩方〽賑はしかりける次第なり。（ト皆々引張りよろしく、車引の見得にて、）

ト目出度く打出し

玄伯　先づ、今日はこれぎり。

月の夜芝居（終り）

幹事は平知盛に
扨海席の執持は
蛸入道海老上臈

浪底親睦會

解説

「浪底親睦會」は明治十四年十一月、作者六十六歳の時、新富座に書卸された。其時の役割は、市川團十郎（典侍の局）、中村芝翫（新中納言知盛、漁夫芝藏）、尾上菊五郎（水潛り河太郎）、市川左團次（僧月照）、岩井半四郎（龍宮の乙姬）、中村鶴助（帶屋長右衛門）、市川團右衛門（僧自休）、中村鶴藏（海坊主）、尾上松助（河童）、坂東しう調（日本武尊の妾橘姬）、中村福助（信濃屋お半）、尾上菊之助（兒白菊丸）、澤村清十郎（侍女さゞなみ）、岩井久女吉（侍女なぎさ）等で、あつた。常磐津連中としては、小文字太夫、長尾太夫、文字兵衛、八百八等。清元連中としては、延壽太夫、都喜太夫、梅吉、德兵衛等。竹本連中としては、菖蒲太夫、久村太夫、鶴澤市作、安太郎等であつた。

親睦會などといふ言葉の流行し始めた時のことで、好評を博したものであつた。特に菊五郎の勤めた水潛り、卽ち潛水夫が異樣の扮裝で現はれたのは大喝采であつたといふ。挿繪にしたのは稿下當時の繪本である。

福助
月照
乙姫
平の知盛
海坊主

浪底親睦會

常磐津連中
清元連中
竹本連中

〔役名━━典侍の局、龍宮の乙姫、橘姫、信濃屋お半、白菊丸、水潜り河太郎、新中納言知盛、漁夫芝藏、帶屋長右衞門、僧自休、海坊主、僧月照、河童等。〕

本舞臺一面の淺黄幕、爰に柿の筒ッぽ脈養、櫂を持ちし船頭三人立掛り居る、此見得波の音にて幕明く。

○此頃毎晩夜更になると、此壇の浦の水底から光の見えるは何だらうか、只事とは思はれない。

△爰は古源平の軍のあつた其時に、平家方の一門が入水したといふことだ。

□大方其時名劍や、名鏡などを持つて居て、其儘底へ沈んだ故、其光かも知れないぜ。

○成程手前が言ふ通り、よく芝居などでもするが、名劍や名鏡なら光の發しることがある。

△是が池か川ならば、かいぼりをして沈んで居る、名器を拾ひ上げたらば、いゝ金になるだらうに。

□既に土州の海からは、枝珊瑚が大層取れ、漁師仲間が思ひ掛けない金儲けをしたさうだ。
○海と違つて山方では、よく名劍や名鏡などを掘出す事があるさうだが、羨しい事ではないか。
△こつちも沖の光を當に、海へ這入つて取りたいが、何をいふにも此邊は、底の知れない千尋の大海。
□うつかり這入れば鮫の餌食、命がけ故誰あつて寶のあるは知つて居れど、取りに這入る者がない。
○古い話に硝子の、めつぽふかいな德利へ這入つて底を見た所、手が出ないので見たばかり、
△昔と違つて開化に進み、新發明のある世界、硝子から手が出て取れる、いゝ工風がありさうなものだ。
□今度何處でか工夫をして、自在に海の中の物が取れる器械が出來たといつて、東京から知らして來た。
○そりやあどんな器械だか、
△知つて居るなら聞きたいものだ。
□手紙で知らしてよこしたが、知つての通り己は無筆、讀めるなら是を讀んで見ねえ。
ト懷から手紙を出す。

○それぢやあ是に書いてあるとか。

△些つとも早く聞たいものだ。

○どれ、己が讀んで見ようか。（ト手紙を開き、）「淨瑠璃名題――」（ト淨瑠璃名題、太夫連名を讀み、）

こりやあ何だか違つた樣だ。

△己が後を讀んで見よう。（ト役人替名を讀み、）成程是は違つてる。

□それぢやあ手紙を出す時に、間違へて封じたのか。

○さうして是を出した先は。

△何生業をする人だ。

□其親類は東京の、新富座の狂言方常三といふ者だが、そゝつかしい男だから間違へたに違ひない。

○大方そんなことだらう。

△何にしろ今夜も又、風の出さうな空合だから、

□漁に行くのを止めにして、

○骨休めに一杯やらうか。

三人 それがいゝ〳〵。

ト波の音にて三人上手へ這入る、跡しらせに付き淺黃幕を切つて落す。

本舞臺一面の平舞臺跡へ下げて波幕を張り、上手出語り臺波幕を張り、下手岩組の淨瑠璃臺、同じく波幕を張り日覆より波の張物をおろし、雨落より波の張物を出し、花道兩側へ波手摺を出し、總て、海の底の體宜しく、波の音にて道具納まる、と知らせに付き淨瑠璃臺の波幕を切つて落す、爰に常磐津連中居並び、直に淨瑠璃になる。

常〽廣原海の浪の底にもありといふ、龍の都の靜けさに、波も平の人々が八重の汐路に九重の昔を忍ぶ五つ衣。

ト謠へ音樂の入りし鳴物になり、能き程にしらせに付き正面の波幕を切つて落す、眞中常足の岩臺に典侍の局、かつしき十二單緋の袴局の拵へ、檜扇を持ち立身、此後に漣渚かつしき緋の袴、局の拵へにて土器を載せし三方と長柄の銚子を持ち控へゐる。

常〽朱の袴に色添ふる今日ぞ彌生も末にして、梢の花の山風に散るかと思ふ水の花、さし來る汐の打寄りて睦み語らふ花の宴。（ト典侍局前へ出で檜扇を持つて漣渚を遣ひ振あつて、）

典侍　今日は彌生の末の四日、幾百歳の星霜を經れども今に忘れざる平家の一門悉く、八島の浦に入

水なし源家を恨む一念の、爰に殘りし我身の末。

漣　過し、文治の昔より、來る年毎に打寄りて、

渚　其日と祝ふ土器も、巴に廻る浪の底、

典侍　取分け今年は知盛殿が、思ひたちにて幹事になり、龍の都に住む者を誰彼となく打招き、親しく睦み語らふ宴會。

漣　龍宮城へおいでなされし、

渚　知盛公には何故に、

典侍　斯くお歸りの遲いことか。

常へ扇かざして波間をば、見給ふ折柄知盛が、

ト大小入りの鳴物になり、知盛立烏帽子白絲縅の鎧、小手脚當附太刀、いつもの知盛の拵へ、長刀を小脇に搔込みて出來り、花道にて長刀を突き、きつと見得。

常へ君恩忘れぬ武士の、忠義を頭に立烏帽子、夏を隣に卯の花の白絲縅小手脚當、きらめく月の長刀を小脇に搔込む勇ましさ、又と類ひも荒濤を分けてぞ爰へ來りける。（ト花道にて長刀を遣ひ振あつて舞臺へ來る、侍女出迎ひ）

漣　知盛樣には龍宮より、
渚　只今お歸りなされましたか。
知盛　龍宮城にて大王の思はぬ餘談に時移り、存じの外に遲刻致した。
典侍　して今日の此宴ひに、龍王殿にも此席へ御來臨なされますか。
知盛　いかにも今日知盛が、幹事となつて海底に住む者共を打集へ、貴賤上下の隔なく親睦會の催しを殊の外御悅喜にて、我も共々臨席なさんと、かねて思ひ居つたる所、俄の不快に是非なくも、乙姫を名代に遣はさんと仰せありしぞ。
典侍　スリヤ、龍王の御名代に乙姫殿がおいでであるとか。
漣　其姫君は帳臺深く、入らせられまする故。
渚　此都に二人となきよい御器量と承れば、今日お出で遊ばしたら、
漣　篤とお見上げ、
兩人　申さうわいな。（ト樂太鼓を打込む。）あの太鼓は。
知盛　龍宮城にて舞樂の調、
典侍　あの管絃を聞くに付け、思ひ出るは壽永の春。（ト典侍局立上る。）

常〽都の空を有明の月諸共に落のびて、憂き年重ね元暦の花まだ早き如月に、柳に風の福原御所、白旗押立て寄來りし源氏の勢を引受けて、

彼唐土の孔明が琴を彈ぜし故事に、准へて侍女が調べさへ、琴柱に通ふ松の聲。（ト琴唄模樣小文字太夫獨吟にて）

琴歌〽霞立つ空も長閑に山笑ふ、梅の盛を慕ひ來て、人來と告げる鶯の羽風に花のちらほらと、散りて流れて小澤の水に、薫りとゞめよ春の薄氷。（ト扇の振あつて、）

常〽琴の唱歌に今樣の、差す手引く手の諸翼、あさる鷗の舞遊び、實に面白の詠めやと樂しむかひもあらし吹く磯に浪立ち鯨波の聲、

智勇勝れし義經が、鵯越の坂落し。

常〽さゝへる暇もあらばこそ、船を浮べて西國へ浪のあはれや落給ふ、御運の末の悲しさは、今も忘れぬ思ひぞと、かこち涙にくれにける。（ト典侍局宜しく振あつて、知盛軍扇を持前へ出で）

知盛　おゝ、其時平家の一門は、

常〽我劣らじと舟に乘り、漕出す折しも風雲立ち、名におふ烈しき摩耶おろし、數丈の波にゆり上げられ、浮きつ沈みつ沈みつ浮きつ、漸八島へ漕付きて城廓固めて我君を、一門守護

なし奉り、

其年暮れて文治の春、再び攻來る源氏の大軍。

〽敵は陸味方は海、眞砂を蹴立て戰ひも、數合に及び水際迄進みし義經御ざんなれと、能登守教經が五人張の強弓に、三羽の素矢を引きしぼり、〽切つて放せば矢表に立つたる佐藤繼信が、胸板のぶかに射通せば、馬よりどうとをちこちに、入亂れたる舟軍。

素早き大將義經を、手取になさんと教經が、

〽乘込む舟に支へる兵士、其間にひらりと身を躍らせ、飛鳥の如く八艘の舟を飛越え遁れしは、

〽流石鞍馬の山奥に天狗に學びし早業と、敵も味方も手を打ちて暫しは鳴りも止まざりし、討漏せしを殘念に、能登守には支へたる、

〽兵士を小脇に掻込んで、海へざんぶと飛込んだり、是迄なりと尼君初め、傍にかしづく人人も浪の深みへ入給へば、

〽我も有合ふ碇を擔ぎ、底の水屑と入水なし、殘る恨みに今日迄も、生を替ざる此知盛。

常へ過ぎ越方の物語に、局も共に懷舊の思ひは深き青海原、涙の果ぞなかりける。

ト此内知盛物語模樣の振宜しくあつて、ト、典侍局と二人にて留る。

漣　かね〴〵噂に其時の、戰のあらまし承れど、

渚　思ひがけなく知盛公の、お物語で私共も、

漣　過し屋島の戰ひを、

渚　今見る樣で、

兩人　ござりまする。（ト此時唐樂を打込む）

典侍　我日の本の管絃にあらで、異なる拍子のあの囃子は。

知盛　龍宮城より乙姫殿が、是へ來臨あるに付け前後を守護なす樂器の調べ。

ト唐人囃子になり、花道より乙姫金の龍の付きし鬘、唐裝束子役二人魚の附物のある鬘、筒袖の唐裝束朱塗の臺へ金の壺と枝珊瑚を載せしを持出て來り花道へ留り、

常へ乾闥婆城と說かれたる龍の都の玉殿に、いつきかしづく乙姫の、今日しも八大龍王の代りに爰へ如月も、昨日と過ぎて麗に波瀾の袖を打返し、しづ〴〵歩み來りける。

ト花道にて振あつて舞臺へ來る、

知盛　これは〳〵乙姫君には、ようこその御來臨、

典侍　其所は端近、設けの席へ、

乙姫　今日祝宴の迎ひに應じ、父の代りに參りしわらは、詞に任せて其席へ、

漣　いざ先づお通り、

皆々　遊ばされませう。

〽いふに片邊の岩臺へ、住居給へば向うより。

ト乙姫岩臺の上へ住ひ、子役二人後へ控へる、淨瑠璃の切れ大拍子へ鐃鉢の入りし神佛の鳴物になり、花道より橘姫更毛のかつしき、白の裝束曲玉を襟へ掛け、榊の枝を持出て來る、跡より月照白髪の後へはえし坊主鬘、麻の法衣鼠の着付、珠數を持ち、

〽是は古日本武の尊が召されし、舟荒れて身を生贄に入水せし、橘姫の跡に付來りし、僧の月照は額に波の寄る年に、今は譏りも中垣の隔もあらぬ神佛、打連立ちて來りける。

ト兩人花道で振あつて舞臺へ來る。

典侍　これは〳〵橘姫樣には、お早きおいで、あなたは妾の水底では一番古き御方故、是へお通り下さりませ。

橘姫　成程局の云ふ通り、入水はわらはが古けれど、乙姫様の御前なれば。
乙姫　其遠慮には及ばぬ故、姫には是へ參られよ。
橘姫　左樣なれば仰せに隨ひ、それへ參るでござりまする。（ト橘姫は岩臺乙姫の下へ住ふ。）
月照　愚僧は誠に近世なれど、新古上下の差別なく、睦み語らふ今日の、親睦會へお招き下され、忝な
う存じまする。
知盛　各々方も某も、幾歳浪の底に住へど、時代違ひや所違ひで、朝暮出會ふ事あつても、是迄交際な
さゞれば、
典侍　一つ所に住みながら、双方共に知らぬ顔、是も本意ならざれば今日是へお招ぎ申し、以後は水魚
の交はりを致したうござります。
橘姫　譬にも云ふ四海兄弟、睦まじうしませうわいの。
乙姫　我大海に住む者が、各々厚く交はりなし、親しく睦み語らふとは、嘸父上にも悦び給はん。
漣　誠に目出度き、
渚　今日の宴會。
月照　して橘姫様には、いつ入水なされました。

橘姫　わらはが入水なしたるは、

常〽景行天皇四十年、時しも十月、日本武の尊が相模の國よりして上總へ渡る折柄に、

ト橘姫振あつて典侍局出で、

常〽一天俄にかき曇り、暴風起りし其事は日本の文にて閲せしが、逆浪高く、召し給ふ、

常〽御舟も今や覆へらんと、最危さは龍神の是ぞ祟りと此身をば、海へ投ぜし生贄に、

典〽忽ち空も晴渡り、浪も靜けく納りて、着せし所を君去津と、今に其名ぞ殘りける。

ト典侍局橘姫宜しく振あつて納る、是にて常磐津連中を浪幕で消す。

知盛　して月照老の、入水ありしは。

月照　愚僧が入水なしたるは、遁れ難なき事故あつて、さいつ頃西海に西條殿と諸共に、渡海の折に入水なし、はかなき死をば遂げたるも、是三世の因果にて、今更悔む所なし、是を委しく話す時は親睦會の妨げ故、後して海中の夜話しにゆる〳〵お話し申すでござる。

知盛　何樣追々海底の衆人、是へつどひ參れば、後して履歴を承らん。（ト乙姫向うを見て、）

乙姫　又もや向うへ四人連、是へ見えるは誰なるか。

典侍　見れば沙門が兒を背負ひ、

月照　又町人が娘を背負ひ、

漣　是は何でも色戀で、

渚　身投の者でござりませう。

ト双盤入りのシャデンになり、長右衞門頬冠り、尻端折り、お半振袖の拵へ、是を背負ひ出て來り、東の揚幕より自休坊主鼠の着付け、尻はしをり、白菊丸兒髷振袖さし拔、是を背負ひ、双方一時に出て來り、花道へ留る。是をきつかけに淨瑠璃臺の波幕を切つて落す、淸元連中上下にて並び、直淨瑠璃になり、

〽戀に悟りの道もなく、迷ひ入江の兒ヶ淵深き契りに是も又、浮名を流す桂川、今は互ひに水底の住居に忍ぶ人目なく、お半と共に白菊を背に自休と長右衞門、道行氣取りで來りける。

ト双方振あつて舞臺へ來る。

知盛　これは〳〵何れも方には、未だ御面會も致さぬのに、ようこそ御入來下されました。

ト誂への合方になり四人下に居て、

自休　扨今日は親睦會へ、態々お招ぎ下さりまして、

長右　思ひがけなく町人の、私共迄とも〳〵に、

白菊　此御酒宴の席に連なり、
お半　冥加にある身の仕合せ、
四人　有難うござりまする。
典侍　是迄時折海中で、お出合ひ申す事はあれど、
橘姫　お近付でない故に、詞を掛けし事もないが、
月照　親睦會で何れもと、因みを結ぶ上からは、
乙姫　先づ日本の通例に、
知盛　朝逢つたらばお早うござい、
典侍　お暑いお寒い御機嫌よう。
橘姫　互ひに詞を、
五人　掛けませう。
自休　左様お願ひ、
四人　申します。
知盛　時折貴僧は海中で、顔を見合す事があるが、一體何れの出家でござる。

自休　愚僧は鎌倉建長寺の、自休と申す沙門でござる。
白菊　又私も鎌倉の、相承院の兒白菊と申しまする者でござりまする。
典侍　いかなる事で入水なし、此海中には住はるゝぞ。
自休　お話し申すも面目ないが、戀故でござりまする。
月照　戀といふには、やさ形な僧なら實にもと思はるゝが、
橘姫　此でく〳〵としたなりでは。
漣　不釣合で、
兩人　ござりますなあ。
自休　愚僧も元はほつそりと、やさ形であつたれど、入水の時に水を呑み、それからこんなにふくれました。
知盛　それではこなたは水脹れか。
自休　半土左でござります。
月照　そんな色事師があるものか。
典侍　それは兎もあれ入水の譯を。

自休　さらばお話し申しませうか。

〽宿願あつて江の島へ、詣でし道で振袖の、袖ふり合ふが縁となり、

〽千束に餘る玉章に、いなと云はれず是非なく〳〵、思ひ忍ぶの言の葉を殘して水に入相や、
散行く花の兒櫻、

〽跡を慕うてどんぶりと、飛込むはずみに出張つたる岩で天窓をあいたゝゝ、其時呑んだ水
脹れ。（ト此内自休で掛り、白菊丸振あつて兩人宜しく納り）

典侍　してそちらに娘を連れし、分別盛りのこなさんは、何所の者で何と言はるゝ。

長右　私は京都の柳の馬場、押小路で帶屋長右衛門と申す者で、

お半　一緒に參つた私は、同じ京都の虎石町で、信濃屋のお半と申します。

月照　それは話に聞いて居たが、桂川へ身を投げた二人がどうして爰へ來たのだ。

長右　仰しやる通り桂川で、身を投げましてござりますが、丁度其折大雨後で流れが早く海へ入り、

お半　遂に川から此海の、底に久しく居ります。

自休　定めてお前も戀であらうな。

乙姬　其馴染の話をば、

漣　早う聞きたう、

兩人　ござりますわいな。

長右　其お話は私より、是なるお半に致させませう

お半　わたしやそんなお話は。

長右　はて、跡が支へる、早くやつたり。

お半　それぢやと云うて、

自休　さあ〳〵、早く聞きたい〳〵。

お半　そんなら爰で恥かしながら、（トお半手拭を持ち前へ出る。）

〽ほんに私が十四の折、長右衞門さんに誘はれて、伊勢の戻りに相宿の石部とやらの木枕が堅いお前と新枕。

〽添寐の夢を覺せとや、其馬士節に起されて、〽笠はてる〳〵やれ紅の紐、戀を鈴鹿に袖曇るナアエ、雨の土山ナア濡れて濡れぬよでナアエヽ。

ト此内お半で掛り、よき所より知盛お半に見とれて浮れだし口說の振、典侍局悋氣のこなしにて、知盛を引退け三人からんで宜しく留る。

白菊　ヨウ〳〵親はないかえ。

知盛　ハックショッ。（ト其時どろ〳〵を打込み、皆々びつくりして、）

白菊　えゝ、氣味の悪ひ、あのどろ〳〵はお化が出るのぢやありませぬか、

自休　何の怖がる事があるものか、お化はそなたの家の物だ。

トどろ〳〵へ源兵衛堀の合方になり、花道より海坊主好みの拵へ、河童縫ひぐるみにて胡瓜と徳利を持出來り、花道へ留る。此時上手出語臺の浪幕を切つて落し、爰に竹本連中居並び、直に淨瑠璃になる。

竹〽もゝんがアに桃川は、語呂さへ似たる講談師、如燕がお箱の桑名屋で、名を知られたる海坊主。

掛〽河童も今日の宴會へ、すゝむ開化の究理學、

竹〽それを目當に來りける。（ト兩人花道で振あつて、舞臺へ來る。）

白菊　そりやこそ私が云はぬ事か、

お半　お化が爰へ參りました。（ト惘りする。）

海坊　そんなに驚く事はない、此海中に古く住むあやかしに出る海坊主だ。

河童　私は葛西の源兵衛堀、河童のお化でございまする。
知盛　源兵衛堀の河童と云ふは、かねぐ〵噂に聞いて居たが、
典侍　慥お前は胡瓜とお酒が、
河童　最一つ好はあのお若衆。
海坊　どつこい、左樣な障り文句は、海中にては申さぬ事なり。
乙姫　して海坊主には何故に、
橘姫　是へ河童を連れて來たのぢや。
海坊　親睦會を聞傳へ、川より深い海の仲間へ這入りたいと申しまして、私を頼みまする故、一緒に連れて參りました。
河童　どうぞ是から私を、社中へ入れて下さりませ。
月照　社中は一人も多いが賑やか、
知盛　今日から入社するがよい。
河童　それは有難うございまする。さうして此社へ這入りますと、死ねば百圓下さりますか。
長右　それは此頃流行の、一錢社の事だらう。

海坊　此社は死んでも煩つても、三文にもならないのだ。
河童　そりやアつまらない社でござります る。
知盛　今に爰でも方法立て、一錢社を企つ積りだ。
河童　出來たら入れて下さりませ。早速ながら承りたいは、眞中においでなさる、辨天樣を見た樣なのは。
海坊　あなたは此海中の八大龍王の御息女で、乙姬樣と仰しやるのだ。
河童　それではあなたが乙姬樣で、右の方においでなさるのは。
海坊　新中納言知盛樣に、何とか云ふお局樣。
河童　して、左りの方においでなさるは。
海坊　日本武の尊樣の御愛妾、橘姬樣に、淸水寺の月照樣。
自休　又此席に連なりまする、愚僧は建長寺の自休坊。
白菊　又私は、兒白菊、
長右　それから私は京都の押小路の、帶屋長右衞門。
お半　連のわたしは信濃屋お半。

河童　いや河童がさつぱり合點の行かぬは、橘姫様は云ふに及ばず、知盛様やお局様、それから自休に白菊様、お半に帶屋の長右衛門様、何百年か知れないのに、何れもお若いお姿は、どうも合點が行きませぬ。

海坊　成程合點が行くまいが、此海中に住む者は何年立つても年を取らず、白髪も無ければ皺もなく、實に不老不死と云ふのだ。

河童　そりやどういふ譯でござります。

海坊　是は不斷の常食に、人魚を澤山喰ふせゐだ。

河童　成程それで分りました。さうして今日此様に、親睦會をなされますは、どういふ譯でござります。

月照　これは幹事の知盛殿が、今に祝辭や演説を致されるから、聞かつしやい。

河童　それは樂しみでござりますな。

橘姫　さあ〳〵爰で知盛殿、祝辭なり演説なり、早うお初めなされませ。

知盛　成程幹事の役だけれど、己に祝辭や演説をさせるは惡ひ思ひ付き、どうして己に出來るものだ。

ト此時乙姫平舞臺へ下りて。

乙姫　それでは祝辭や演説の替りにこなたが得意とする、踊を爰で踊るがよい。

知盛　踊は何の造作もないが、併し此裝では踊られぬ、ちよつと鎧を脱いで來る間、乙姫樣が何ぞ替りに。

乙姫　どうしてわらはが其樣な事を。

知盛　はて、お頼み申します。

竹〽手を取り前へ突出し、浪を潛つて入りければ、跡に乙姫是非なくも、

ト知盛乙姫を前へ引出し上手へ逃て這入る、乙姫是非なき思入にて、

乙姫　わらはゝ唄を知らぬ故、誰ぞ唄うてたもいの。（ト子役二人前へ出て）

子役　唄は二人で、

兩人　唄ひませう。（ト手拍子を打ちながら）

淸〽いつちくたつちく太右衛門どんの、乙姫さんはねちんがらもんに追はれて笑ふ聲、聞けばホツポ豐年ぢや豐年ぢや〳〵。（ト此内乙姫まじめに振あつて子役を遣ひ宜しく納る。）

竹〽折しも浪の音高く水底目掛下り來る變化、人々はつと打驚き、（ト浪の音烈しく打込む日覆より河太郎水潛りの拵へにて中途迄下りる、皆々是を見て悑りなし、典侍局長刀を構へ）

典侍　や、思ひがけない海上より、異形な者が舞下りしが、正しく變化と思はるゝ。

乙姫　田原藤太が居つたならば、一矢で射留めさうなもの。
橘姫　何に致せ神武此方、見た事のない此形。
月照　成程これは奇々妙々。
長右　いつたいあれは人間か。
自休　いや〱、土左とも思はれない。
海坊　それではこつちの、
河童　お化仲間か。
典侍　希代なものを。
皆々　見るものぢやなあ。（ト此内河太郎合方にて四邊を見る思入あつて）
竹〽上では水底見おろして、（ト是より河太郎宙乘りにて）
清〽是りや美くしまの辨天も、はだしで逃げる別品は、龍宮城の乙姫か。
竹〽童が携ふ金の壺、土州にあらぬ枝珊瑚、こいつを取らで置くべきかと、
清〽欲の深みへ下り來れば、（ト河太郎宜しく振有つて舞臺へ下りる、皆々左右へ飛退き）
竹〽局はこは〲立寄りて、（ト典侍局長刀を構へ、こは〲ながら屹度なり、）

典侍　今日海底の親睦會に、妨げ致す異形の者、きり〳〵此場を立去るまいか。
　　　トきつと云ふ、河太郎つか〳〵と局の前へ來る、局びつくりしてひつくり返る、是を女形皆々介抱する、是にて海坊主と河童河太郎に組付くを振拂ひて投退ける。
河童　はあゝ大變々々、天窓の皿が割れた〳〵。
海坊　いや〳〵少しの割だから、燒繼屋で間に合ふだらう。（ト長右衞門自休を引出し）
長右　斯ういふ時は出家の役、自休さんの法力で祈り返して下さりませ。
自休　いえ〳〵愚僧は生臭坊主、行力抔は少しもない、月照殿を賴んで下され。
長右　成程是は道德勝れた、月照樣へお願ひ申し、
典侍　大物浦で辨慶が、知盛殿を祈つた樣に、力を盡して下さりませ。
月照　承知致した〳〵、日頃の行力お目に掛けん。
　　　清〽衣をまくりいら高の珠數さら〳〵と押しもんで、
　　　ト月照衣をまくりいらだかの珠數をすりながら河太郎に向ひ、
　　　南無大聖不動明王、降魔の威力に異形の怪物、立所に退散なさしめ給へ。
　　　竹〽なうまくさんだばさらだせんだ。

〽竹菜を蒔き婆あさん轉んだそんだ、向うのかみさん孕んださうだ。

ほろおん〳〵。

ト月照祈りの振、是へ自休坊主からみ宜しく祈る、此内河太郎月照の前へつか〳〵と行く、月照びつくりして跡ずさりに下り、

海坊 いや、飛んだものが舞込んだが。

ほろおん〳〵。（ト珠數を振つて、）これは愚僧の手際にゆかぬ。（ト月照後へ下る。）

長右 一體是は、

皆々 何であらう。

芝藏 其化物の正體を、只今顯はしお目に掛けん。

〽折からこなたに聲あつて。

ト波の音にて、下手より漁師芝藏、野郎鬘花色の筒つぽの長半纏、腰蓑漁師の拵へにて出來る。

典侍 こなたは是迄見馴れぬ漁師、いつ海底へ。

皆々 沈みしぞ。

芝藏 私は此間、早風の折房州浦で難船して、それからこつちに居りまする新參者でござりまする。

月照　して其方が化物の、正體を見すると云ふが、
自休　一體何の化物だぞ。
芝藏　いや化物ではござりませぬ、是は人間でござります。
皆々　なに、人間だと。
芝藏　此三月博覽會で、水へ這入つて見せましたが、是は川や海へ這入り、底に沈んでゐる物を引上る其爲に、新發明に出來ました物だ。
自休　それでは是は器械にて、
お半　お化ではなかつたのかいな。（ト自休前から覗いて見て）
自休　成程、前から覗いて見れば、い丶男でござります。
橘姫　よい男とあるからは、早う顏が、
女形三人　見たいわいな。
芝藏　只今天窓のねぢを返し、顏を見せて上げまする。

竹へ冠りし頭を取退ければ、雲に離れし雷に等しく上るすべもなく、悶絶なして倒れける。

ト芝藏捻を返し、冠りし天窓を取る、散切鬘河太郎にて水に溺れ、宜しくこなしあつて、悶絶して

倒れる。

長右　やあ、是は大變、水を呑んで爰へころりと目を廻した。

海坊　呼生けるにも名は知れず、

河童　困つた事が出來ましたな。（ト乙姫思入あつて、）

乙姫　いや〳〵方々氣遣ふ事なかれ、わらはが助け遣はさん。

典侍　そは如何なる事で助かりますな。

乙姫　是に携ふ人魚の丹藥、是を彼に呑ますれば、忽息を返すであらう。

子役　さあ〳〵、是を飲まされよ。（ト金の壺を出す。）

芝藏　それでは是は池の端の守田で製す、寶丹と同じ様な物でござりますか。

乙姫　いかにも、利目は同じ事ぢや。

芝藏　ドレ、私が飲まして遣りませう。

〽起死回生の靈丹を、口へ入れゝば忽に、息吹返せし水潛り。

ト芝藏壺の藥を匙で河太郎の口へ入れる、波の音になり河太郎ウンと息を吹返す。

やあ、今迄己らァ氣が付かなんだが、手前は友達の河太郎か。

河太　おゝ、さういふは芝藏か。
芝藏　爰で逢はうとは思はなんだな。
河太　ほんにこりやあ夢の樣だ。
河童　何にしろ窮窟だ、其衣裳を脫いでしまひねえ。
河太　今脫がうと思つて居るが、爰は何といふ所だな。
芝藏　己も今日初めて來たが、爰は西海の海の底で、芝居でする知盛樣が親睦會といふ物をするのだ。
河太　よく東京の中村屋や、井生村である親睦會かえ。
海坊　手前も爰へ來たこそ幸ひ、今日の仲間へ這入るがいゝ。
河太　おいらも中へ這入りたいが、舟で待つて居るだらうから、ちよつと行つて斷つて來よう。
乙姬　いや〳〵船へはやらぬわいな。
河太　何やらぬとは。
乙姬　わらはゝそなたに惚れたわいな。
芝藏　是は飛んだ事が出來た。（ト乙姬河太郎をとらへ、口說模樣になろ。）
〽過ぎにし昔浦島と、うらなく契り交せしに、男心のつれなくも、いつか故鄕へ返る浪。

〽又來る事は荒海の、浪には女男の名はあれど、一人殘りてくよ〳〵と、〽思ひし胸の汐曇り、晴れて今日から我聟になりてやいのと寄添へば、〽思ひは同じ女子達、手取り足取り引合ふはずみ、何時しか漁師に入替り、

ト乙姫河太郎をとらへ、口說の振になる、局乙姫をとらへそれは惡いといふこなし、此內橘姫河太郎をとらへる、乙姫局を振拂ひ河太郎をとらへる、此中へ芝藏割つて入ろ、河太郎は後へ拔け波幕の蔭へ這入る、皆々は氣が付かず芝藏を引張る、爰へ海坊主河童出て、もゝんがアと驚かす可笑み宜しくあつて、

典侍 や、こりやいつの間にか入替り。

橘姫 房州浦で難船した。

乙姫 芝藏といふ漁師、

芝藏 私をば聟にするならば。

〽持參は船と腕前に、漁る業は仲間でも二とは下らぬ一の魚銛、〽鯨を突けば七里も、潤ふ濱の祝ひ酒、三味も少しはなる口に、一杯機嫌に浮れたち、〽端唄都々一かつぽれ甚句、〽長い流行のへら〳〵に、〽すてゝこどこ〳〵馬鹿囃子、〽面はなけれど素面にて、外

道ひよつとことんまにも、〽蛸の替りの海坊主。

ト此内芝藏宜しく振あつて、海坊主河童出て、打合せの合方にて十二座模樣の振あつて、

〽十二座もどきの河童釣。（ト三人からんで振納る、）

長右　是はなか〳〵多藝な事だ。（ト此内河太郎この好みの洋服裝になり出て來る。）

自休　これ、貴樣も何ぞ藝があるか。

河太　少しは藝がありますが、踊は兄貴に叶ひませぬ。

月照　さあ〳〵、何ぞやつて見せやれ。

橘姫　藝のよいのが聟になるのぢや。

河太　藝で聟になられるなら、何ぞ珍らしい事をやりませう。

〽先づ水底にないものは、一里は煙草二三服のむ間に走る千里軒、〽馬は二疋で足並揃へ鞭の響きに駈出す早さ、〽それを追越す人力車、綱引後押三枚で、〽御免財布へしつかりと、酒代を當に雲霞、（ト河太郎宜しく振あつて芝藏出で、是より二人になる。）

〽まだも早いは横濱へ、新橋からの蒸汽車で、〽汽罐の煙忽に子供だましぢやなけれども、〽ぴい〳〵どん〳〵がら〳〵〳〵、〽走る車の窓から見れば、山も廻れば海邊も廻

り、竹〽船も廻れば見る目も廻り、清〽鼻の先なる電信柱を、見留める間もなく、くる〳〵廻つて、竹〽いつしか田町を跡に品川大森、越えれば六鄕鐵橋、清〽流るゝ水より矢を射る如くに、弓と弦なる神奈川臺から、竹〽くる〳〵廻つて横濱湊へ、清〽どつこい止つた、ステイシヨン。

ト兩人くる〳〵廻る振あつて納る、

月照　ヨウ〳〵、兩人共うまいこと〳〵。

橘姫　乙姫樣はどちらを聟に、

乙姫　わらはゝ矢張水潛りが、

河太　それは何より有難い。

芝藏　さう極つたら目出度祝して、

皆々　ヨイ〳〵〳〵。(ト皆々手を打ち總踊になる。)

清〽龍宮の乙姫君の婚禮は、竹〽媒人は蛸の入道に、介添役は海老上臈、清〽お目出鯛やら鮃やら、竹〽しつぽり濡れる、清〽水祝ひ。

ト宜しく手踊あつて頭取出で、

頭取　先づ今日は是ぎり。

ト目出度く打出し

涙底親睦會（終り）

浅草の
公園地に
意浮立
かつぽれ節

初霞空住吉

解説

「かつぽれ」は明治十九年一月、作者七十一歳の時、新富座に書卸された。其時の役割は市川團十郎（かつぽれ升坊主）、市川左團次（同鳥藏）、市川海老藏（同海老八）、市川小團次（同高吉）、中村鶴藏（同鶴松）、中村仲太郎（同丸吉）、坂東しう調（船宿の女房お調）、澤村源之助（藝者小むら）、坂東喜知六（かつぽれ女房おれん）等であつた。常磐津連中は、小文字太夫、若太夫、都太夫、岸澤式佐、文字兵衞、八百八、巳佐吉、三郎助等であつた。

好評を博した滑稽淨瑠璃であつた。其後も度々上演されてゐる。然し他の淨瑠璃物と同じやうに、上演の度毎に不調和な改訂や省略乃至は挿入等が施されるので、原作とは甚だしく異つたものとして舞臺に現はれることがある。

初霞空住吉（かつぽれ）

淺草仁王門の場

常磐津連中

〔役名――かつぽれ升坊主、同島藏、同海老八、同高吉、同鶴松、同小奴丸吉、甘井官藏、船頭熊藏、箱屋宗吉。船宿の女房お調、藝者小むら、かつぽれ女房おれん、同おきつ等。〕

〔仁王門の場〕――本舞臺上の方板塀、見越の梅の木、下の方淨瑠璃臺、霞幕を張、正面煉瓦造床見世の片遠見、日覆より梅の釣枝、眞中に長床几二脚置き、總て荒澤不動前の體。右の鳴物にて幕明くと、知らせに付霞幕を切つて落す、爰に常磐津連中裃にて居並び、直淨瑠璃になる。

〽觀音の御山も今日は春めきて、まだ冬ながら淺草の淺緑立つ初霞、引もきらざる中見世の往來も繁き仁王門、

ト合方通り神樂にて、花道より官藏散髮鬘、黑のシヤツポ書生羽織、少し酒に醉ひしこなし、小むら藝者の拵へ駒下駄、お調船宿女房の拵へ、駒下駄、宗吉羽織着流し、駒下駄箱屋の拵へにて笹折を提げ出來り、花道へ留る。

〽顏に日影の茜さす酒の機嫌を取楫は、遊船宿か待合の妻の氣轉に客人の、調子を合す柳橋、

かつぽれ

流石藝妓と夕べ氣に張る奇功紙も色氣ある目許に延ばす鼻の下、浮れ〳〵て來りける。

ト皆々宜しく振あつて舞臺へ來る。

お調　先づ旦那是へお掛けなされませ。

官藏　爰へ掛けてもよいかね。

箱屋　萬梅の床几でございますから、御遠慮には及びませぬ。

むら　もし旦那、向うを御覽なさいまし、中見世の兩側が煉瓦造りになりまして、大層綺麗ぢやございませぬか。

官藏　爰から並木を見込んだ所は、京橋へでもいつた樣で、淺草とは思はれぬ。

箱屋　四邊がないので仁王門が、格別大きく見えまする。

官藏　僕が裸で立つたらば、あの仁王尊の樣であらうか。

箱屋　御酒を上つて赤い所は、運慶の作と見えまする。

むら　此お相手はお相役の、久保田樣がようございます。

お調　ほんに旦那と久保田樣では、よい一對でございます。

官藏　併し寺の門番は氣がないな。

箱屋　其替り朝から晩迄、女の見倦でござります。
官藏　女といへば萬梅で、隣座敷に居た藝妓は、なか〳〵勝れた別嬪だ。
箱屋　あれは廓の藝妓でござります。
お調　器量もよければ聲もよく、意氣な端唄を唄ひましたね。
むら　あれは種員さんが拵へて、大層此頃流行ますよ。
官藏　あの端唄で踊つたのは、何處の役者だな。
お調　いえ役者ではございません、吉原の男藝者善孝でござります。
官藏　とんだ面白い踊であつた。
お調　小むらさんは踊があるから、振は大概お覺えだらうね。
むら　あらかた筋は覺えましたよ。
官藏　覺えて居るなら今爰で、あの踊を踊つて見せてやれ。
むら　覺えては居ますけれど、此賑やかな往來中で。
お調　そりやさうでもござんすが、短い端唄の踊だから。
むら　それだといつて、

かっぽれ

官藏　僕が賴みを、おぬしは聞かぬか。

お調　折角旦那のお賴みだから。

箱屋　それ、御機嫌をそこねぬやう。（ト呑込ませる。）

むら　それぢやあちよつと踊りませう。（ト是にて端唄になる。）

〽人目忍んで廓から、廻る田圃の枝道に、香は悋からぬ梅咲きて、覗く軒端の賤が家、けふも柳の朝東風に昨夜の儘の亂れ髮、ぞつと素顏の富士の雪。

ト小むら振あつて此内官藏見とれる思入にて手眞似をする事あつて、

官藏　ヨウ〳〵旨いものだ〳〵。

お調　大層お氣に入りましたが、踊はお好きでござりますな。

官藏　いや鋤の鍬のと、國許で農業をする時分から、所謂踊り氣違ひで先づ小娘の踊から婆あのお助け踊り迄、おそらく踊と名の付くものは何でもかでも僕は好きだ。

むら　そんなにお好きでござりますか。

官藏　あまり好き故、踊に感じて目を廻す事が、度々ある。

お調　それではあなたは踊に感じて、目をお廻しなさいますか。

むら　其時あがる何ぞよい、合藥はござりませぬか。

官藏　おゝあるとも〳〵、よい合藥がある、もし僕が踊りに感じ目を廻したら此藥を、早く水で呑ましてくりやれ。（ト紙入より藥包を出す。）

お調　畏りましてござりまする、私がお藥をお預り申して置きませう。

ト藥包を取つて帶の間へ挾む、ばた〳〵になり花道より紺半纏着付尻端折りの船頭、草履にて出て直に舞臺へ來る。

箱屋　おゝ、熊さんお歸りか。

お調　かつぽれはどうしたえ。

船頭　今廣小路に居ましたから、直に爰へ參る樣に、さう申して參りました。

官藏　それではかつぽれが是へ參るか、古めかしいやうなれど、なま中な踊りよりをかしくつてよつぽどよい。

船頭　それに踊の手先が揃ひ、なか〳〵役者は叶ひませぬ。

箱屋　早くかつぽれを見たいものだ。

むら　あれ〳〵向うから參りますよ。

〽浮たつ空にかつほれの、傘も目に立つ一群が、

ト双盤入出の鳴物になり、花道より升坊主、赤い手拭を襟に巻き、島藏、高吉ざん切鬘、六彌太格子に牡丹の形の揃ひの着付、白のシャツ、千種の股引白足袋麻裏草履にて出て來る、鶴松野郎鬘、同じ拵へ二蓋笠を持ち、海老八野郎鬘同じ拵へ三味線を持ち、おれんおきつ結び髮同じ裝、年増の拵へ駒下駄にておれんは摺鉦、おきつは三絃を持ち、丸吉奴同じ拵へにて太鼓を擔ぎ出來り、花道へ留る。

山〽遊山半分奥山から、丁度時刻も吉原へ流しに行くも居續けの、お客を當の格子先、持越す酒の頭痛なら、そこらは鹽茶でかつほれと、趣向も甘茶な可笑みに、お釋迦に似たる坊主連、浮れ興じて來りける。

ト皆々宜しく振あつて舞臺へ來る。

官藏　お丶かつほれ來たか、待つて居た／＼。

升坊　毎度御贔屓に預りまして、連中一同有難い仕合に、

皆々　ござります。（ト皆々辭儀をして、）

島藏　扨今日はお禮かた／＼、お年玉に新作の淨瑠璃盡しのをかしみを、是にて御覽に入れまする。

むら　それは面白い事でありませう。
お調　早く見たうござりますね。
高吉　併し急稽古で口づきませぬから、つじつまの合ぬ所は、
海老　袖や袂へお隠しあつて、御見物を願ひます。
鶴松　どうで私共の致す事故、耳を取つて鼻へ付け、口から出任せ出放題。
丸吉　只皆さま方のお臍をよらせ、をかしい事を専一に。
れん　笑ふ門には福來ると、申しますからお目出度く、
きつ　恵方に向つて御機嫌を、酉の年から戌のとし、
升坊　先づ新年のお笑ひ初めに、ありふれましたをかしみを、是より御覧に入れまする。
　　ト太鼓一調の片シヤギリになり、此内升坊主島蔵高吉鶴松尻を端折り、支度をなし、
島蔵　扨かつぽれの三番叟、住吉踊を御覧に入れます。
〽伊勢はなア津でもつ津は伊勢でもつ、ヨイ〳〵、尾張名古屋はヤンレ城でもつ、ヤアトコセ
ヨイヤナ、アリヤリヤコレハノサ、コノナンデモセ。（ト四人住吉踊りの振あつて尻をおろし、）
〽姉さん本所かえ。（ト天窓へ手拭を乗せ、いやらしき女のこなしあつて、）

島藏　お升さん、ちよいと〳〵。
升坊　あい何だえ。（ト女のこなし。）
島藏　追羽子をするからお遊びな。
升坊　お前と遊ぶとおつかさんが叱るからいや。
島藏　なぜえ。
升坊　手癖が惡いもの。
島藏　誰が手くせが惡いものか。（ト升坊主の天窓を打つ、升坊主すましで下手へ來る。）しやア〳〵として居る。
升坊　おたかさん、ちよいと〳〵。
高吉　あい、何だえ。
升坊　双六をするからお遊びな。
高吉　お前と遊ぶと、おつかさんに叱られるからいや。
升坊　なぜえ。
高吉　拾ひ喰をするものを。

升坊　誰が拾ひ喰をするものだ。（ト高吉の天窓を打つ）しやァ〳〵として居る。

高吉　おつるさん、ちよいと〳〵。

鶴松　あい、何だえ。

高吉　お彈きをするからお遊びな。

鶴吉　お前と遊ぶとおつかさんに叱られるからいや。

高吉　なぜえ。

お鶴　助平だもの。

高吉　誰が助平なものか。（ト鶴松の天窓を打つ）しやァ〳〵として居る。

ト鶴松跡を見て誰も居ぬゆゑ丸吉を招く、丸吉下手へ來る。

鶴松　お丸ちやん〳〵。

丸吉　あい、なんだえ。

鶴松　お茶坊主をするからお遊びな。

丸吉　あゝ遊ばう〳〵。

鶴松　遊ばうと言つてはいけねえ、厭だと言ふのだ。

丸吉　厭ぢやあない遊びたいもの。
鶴松　幾ら遊びたくつても、お前とはいや。
丸吉　なぜえ。
鶴松　寐小便をするものを。
丸吉　誰が寐小便をするものか。（ト鶴松を打つ。）
鶴松　しやアく\とたれるくせに。
皆々　はゝゝゝゝ。
　　へ黄昏にさつても塗つたるうどんの粉、（ト皆々額を塗るこなしあつて、）
升坊　お島さん、ちよつと見ておくれ、今日の白粉はさつぱり付かない。（ト額を出すのを島藏見て、）
島藏　おやく\、お前は黃だん病かへ。
升坊　なぜえ。
島藏　それでも顏が黃色いもの。（ト升坊主間違へし思入あつて、）
升坊　おやどうせう、白粉とおつかさんがゆもじを染めるうこんの粉と間違へた。おゝ恥かし。
　　ト額を隱す。

〽土手の川風芝の露、勤めはつらいな、いつも歸りは高ばしをり、嘸寒からう。

四人　さうとも〳〵。（ト皆々振あつて納る、是より人寄の鳴物になり、高吉前へ出て、）

高吉　ときに鶴松さん、ちよつとお目に掛りたい。

鶴松　あい、何だえ。（ト傍へ來る。）

高吉　ちよつと爰でお前と私が何かをかしい事をして、御機嫌をとるのだが、お前お飯をお上りか。

鶴松　まだお晝はたべない。

高吉　たべずば何ぞ私が奢らう

鶴松　そいつは何より有難いが、一膳飯には借があるぜ。

高吉　そんな所へ行くものか、今日はぐつと大手を廣げて、公園の萬梅だ。

鶴松　あゝ指の藥を賣る内か。

高吉　そりやあ萬兵衛さんだ。

鶴松　大手を廣げると言つたから、指でも怪我をしたかと思つた。

高吉　それとも角の尾張屋へ行かうか、あすこの内のおかみさん位、世辭のいゝ人はない。

鶴松　むゝ、あの布袋樣のやうに太つたおかみさんか。

高吉　そんな悪口は利かねえものだ。
鶴松　なに、あすこの内の食物は旨くつて、布袋られねえと言ふおかみさんが看板だ。
高吉　看板と言へば、辨天山へ新築の岡田の惣菜はどうだ。
鶴松　ひじきに油揚は食ひたくねえ。
高吉　惣菜といふは卑下した名で、料理は上等豪氣なものだ、金の鯛を見たらうな。
鶴松　齒の性はいゝけれど、金の鯛はかぢれねえ。
高吉　あれをかぢるものがあるものか。それぢやあずつと横町へ曲つて、金田の軍鷄はどうだ。
鶴松　軍鷄は結構、けつこう〳〵とつけつかう。（ト鶏の眞似をして、）かしはがいゝね。
高吉　但しは田川の三階で、富士を見ながら一杯どうだえ。
鶴松　何でもいゝから早く食ひたい。
高吉　腹をすかして食ふが藥だ、運動がてら公園をぐるりと廻つて魚十か、一直か又は北村の汁粉か、萬盛庵の蕎麥はどうだえ。
鶴松　實は朝飯をたべないから、腹がぺこ〳〵していかねえ、何所か近くにしてくんねえ。
高吉　それぢやあちよつと耳を貸しねえ。

鶴松　ト言ふに鶴松さし寄れば、（ト淨瑠璃を語る。）
高吉　ト あたり見廻し耳に口、（ト同じく淨瑠璃を語り、時代の思入にて囁き、）合點が入つたか。
鶴松　すりや、廣小路へ。
高吉　これ。（ト押へる、おれん前へ出て、）
れん　ほうん。
　　　トおきつ忍び三重を彈く、鶴松時代に四邊を伺ひ、世話に氣を替へ、
鶴松　先づ廣小路では、古い隅屋か又新見世の松田の內か、但しは天斧伊勢虎か。
高吉　其所はお客が一ぱいだから、いつも二人が馴染で行く、
鶴松　むゝ、牛の煮込で丼飯か。（ト大きく言ふ。）
高吉　何故大きな聲で言ふのだ。（ト又天窓を打つ、）
鶴松　何も食はせず天窓をなぐり、もう是からは角突合だ。
高吉　うしやあ野暮に腹を立つぜ。（ト又天窓を打つ、此時おれん前へ出て、）
れん　なんで私の亭主をば、そんなにお前は打ちなさるのだ。
高吉　こりやあ狂言だから、仕方がねえ。

れん　狂言であらうが何であらうが、打つなら打つやうにして打ちねえ。(ト是を聞いておきつ出て、)
きつ　これ散蓮花のおれんさん、亭主の最屓をする樣だが、萬歳でいへば太夫と才藏、おまへの亭主の打たれたのは、才藏だから當りまへだ、打つならぶつやうにして打てとは。
れん　貸した物を返して打ちねえ。
きつ　何もおまへに借りた覺えはない。
れん　何だ相の子め、小僧ッ子のくせに耆碌したか、此間手前のお袋が稻毛在から出て出た時、蕎麥を買つて食せたいが、錢がないからおれんさん四錢貸してくれといふから、晩にお米を買ふ錢だけど、友達中の付合に貸して遣つたを忘れたか。
きつ　さあ、それは。
れん　ぶつなら貸を返してぶて。(ト升坊主島藏海老八出て、)
升坊　これ〳〵、樂屋内の內證事を家業先へ擔ぎ出して、爰で喧嘩をしちやあいかねえ。
れん　それだと言つてあいつらに、ほか〳〵亭主をなぐられちやあ、私の顏がへこみます。
海老　お前の顏のへこんで居るは、こりやあ生れ付だから仕方がねえ。
れん　お前方も留めるなら、私の顏を立てゝ下さい。

升坊　へこんだ顔を立てるのは、こりやあちつとむづかしい。
島藏　額と腭を削つた方が、中が高くなるだらう。
れん　お前方に迄馬鹿にされ、猶々私の顔が立たない。
きつ　立たずば私をどうともしなせえ。
升坊　これさ〳〵靜にしねえか。（ト三人で留める、官藏思入あつて、）
官藏　いや、此爭ひは狂言かと思つて居たら誠の事か、祝儀をやるから是で靜めろ。
ト札を紙に包み出す、箱屋とつて、
箱屋　旦那樣からお前方へ、御祝儀を下すつたから、
船頭　是で晩に一ぱい飲み、仲直りをしてくんねえ。（ト札包を島藏に渡す。）
島藏　これは〳〵有難うござりまする。旦那樣から一同へ、御祝儀を下すつたから、是で二人も笑ふがいゝ。
高吉　元が纔な貸借ゆゑ。
鶴松　御祝儀を頂戴致せば、
れん　是で低い顔も立ち、

きつ　誠に有難うござります。

升坊　さあ、目出度一つしめてくんねえ。

皆々　ヨイ〳〵〳〵。(ト皆々手を打ち、)有難うござりまする。(ト官藏へ皆々禮を言ふ。)

官藏　中直りに二人して、何ぞ爰で踊つて見せやれ。

高藏　へい〳〵、畏りました。

島藏　旦那樣へのお禮替りに、吉原通ひをちよつとやんねえ。

高吉　おい、下座を頼むよ。(ト高吉鶴松二人前へ出で、)

〽車いそがせ吉原通ひ、上る階子もアレハイサノサ、いそ〳〵と、

〽客の心はうはの空、飛んで行きたやコレハノサぬしの傍。(ト兩人振あつて、)

升坊　跡は紀州和歌の浦、吉例のかつぽれ。

ト是より鳴物入り、かつぽれの合方になり、升坊主、島藏、高吉、鶴松、赤襷を掛け、四人居並び、

四人　ヤツトナ。

〽沖の暗いのに白帆が見える、あれは紀の國ヤレコレ蜜柑舟、〽森のくらいのにあかりが見える、あれは狐火ヤレコレ信田妻。

ト皆々かつぽれの振宜しく、此内官藏段々浮れ出し、頻りに首を振り、ドヽウンと倒れる皆々びつくりして、

島藏　や、こりや旦那様が、

皆々　どうかなすつた。（ト皆々わや〳〵と言ふ。）

箱屋　こりや踊りに感じて、目をお廻しなすつたのだ。

船頭　何ぞお藥はございませぬか。

むら　お藥はおてうさん、お前預つておいでだらう。

お調　先刻爰へ入れて置きました。（ト帶の間から藥包を出す。）

升坊　早くそれをお上げなさいまし。

お調　是を上げたらようございませう。（ト藥包を明ける、此時風の音して藥を吹散せし思入あつて、）今の風でお藥が、旦那の體へ掛りました。

島藏　假令體へかゝるとも、毒でないからお藥の、必ず利目がございませう。（ト皆々捨臺詞にて介抱なし）

皆々　旦那さま〳〵。

官藏　ウン――。（ト息を吹返す。）

かつぽれ

高吉　さあ〳〵、もう大丈夫だ〳〵。（ト官藏目を明きひよろ〳〵と立上り、）
官藏　あれは紀の國ヤレコレ蜜柑舟、（トぐた〳〵してばつたり倒れる。）
むら　旦那、もう宜しうござりますか。
官藏　氣は付いたが、ぐた〳〵と體に少しもたわいがない。
箱屋　こりやどうなすつたのござりませう。（トお調藥包を見て驚き、）
お調　是は飛んだ粗相をしました。觀音樣で頂いたお土砂を私が間違へました。
升坊　それぢやあ旦那のぐたつくのは、
島藏　お土砂の利目でござりましたか。
高吉　飛んだ事をなさいましたな。（トお調ぐたつく官藏をとらへ、）
お調　これ旦那樣、あなたが是限り治らずば、（ト是より口說になる。）
　　クドキ〽御新造樣へ言譯が、奈良の大佛見たやうな大きな旦那がぐたつくも、土砂を掛けたる身の粗相、是が越度でお出入を上げられたらば揚初の、船の御用もなく涙、どうせうぞいのとかきくどけば、
　　トお調官藏をとらへ口說の振、官藏ぐたつく故、是を留めに小むら這入る、三人にて宜しく納る、

升坊主思入あつて、

升坊　もしおかみさん、お案じなさいますが、今旦那樣をしやつきりと、私が致しまする。

お調　何程でもお禮をするから、どうぞ治して下さいまし。

海老　安請合に請合つて、旦那樣が元の樣に、

鶴松　しやつきりと治るかえ。

升坊　其處は升坊主の方寸にありさ。(ト思入あつて、)やあ大變々々、別品を乘せた車屋が、仰向に引くり返つて、赤い所が出た〱。

官藏　なに、赤い所が出た。(ト立上り四邊を見て、)車屋が何處で引くり返つた。

升坊　車が引くり返つたのは、廣小路でござります。

官藏　あゝ廣小路か。(トぐた〱となる。)

むら　旦那しつかりとなさいましよ。(ト小むら手をとつて引立てる、官藏嬉しき思入にて、)

官藏　もう案じるな、大丈夫だ〱。

お調　どんなに私は氣を揉みましたらう。

官藏　踊を見ると感じるから、何ぞしやべる事をしやれ。

島藏　へい〳〵、畏りましてござりまする、不辯ながらしやべりまして、御機嫌を取りますでござりまする。（ト又人寄の鳴物になる、）おい樂屋の衆や、誰ぞ一人來て下さい。
升坊　あい〳〵。（ト升坊主下手へ出て來る。）
島藏　誰かと思つたら升さんか。
升坊　あい、升さんだ。
島藏　何ださんを付けて。
升坊　丁寧に云ふのだ。
島藏　ときに、お前と私がお笑ひを取るのだが、何がよからうね。
升坊　さうさ、何がよからうか。
島藏　あれに仕樣か、是に仕やうか。
升坊　いつそよしにしたがよからう。
島藏　何を言ふのだ。（ト扇で升坊主の天窓を打つ、）先づ世の中に、お女中樣のお好といふは芝居だな。
升坊　芝居位いゝものはない。
島藏　お前はどうか知らないが、私は芝居は大好だ。

升坊　はて、燒いた事もあるものだ。

島藏　燒いた事といふがあるものか、似た事といふのだらう。

升坊　燒いたのを煮る方が、生臭くなくていゝ。

島藏　おめえの所でさつぱを買ふやうだ。

升坊　それぢやあお前も芝居は好かえ。

島藏　三度の飯を二度食つても、芝居は見たい。

升坊　おいらも又三度の飯を四度くつても、芝居は見たい。

島藏　餘計に食ふものがあるものか。（ト又天窓を打つ。）

升坊　又天窓を打つのか。

島藏　ぶたれる樣な事を言ふからだ。

升坊　今にぶち返すから待つて居ろ。

島藏　ときに爰でお笑ひ草に、芝居を一幕仕樣と思ふが、お前相手は出來るかえ。

升坊　出來るかとは失敬千萬、見くびつた事を言ひなさんな、是でもら以前はおらァ役者だ。

島藏　なに以前は役者だ、そいつはなかなか話せるわえ、師匠は何といふ役者だ。

升坊　憚りながら元祿より當明治の聖代迄九代連綿と家名の續いた、市川團十郎の弟子だ。
島藏　そいつは豪氣な師匠だな、本名は堀越秀、權大講義の教導職、さうしてお前の名は何といふ名だ。
升坊　市川團十郎の弟子で、
島藏　むゝ團十郎の弟子で、
升坊　己は市川雛十郎といふ。
島藏　雛十郎といふのか。
升坊　年中貧敵で難澁するから、其所で師匠が付けたのだ。
島藏　おいらも以前はやつぱり役者だ。
升坊　お前も役者か、誰の弟子だ。
島藏　市川左團次の弟子だ。
升坊　そいつはいゝ師匠を取つた、本名は高橋榮三、新富座の後見だ、さうして何といふ名を貰つた。
島藏　おいらは市川左團次の弟子で、
升坊　むゝ、左團次の弟子で、
島藏　市川多鈍次といふ名だ。

升坊　色が黒いから多鈍次か。（ト島藏の天窓を打つ）
島藏　何故だしぬけにおれを打つのだ。
升坊　たどん次だから天窓をはつた。
島藏　成程、たどんは白灰が溜ると、天窓をはるから、それで天窓をはつたのか、こいつは一番己がへこんだ。（ト升坊主有合ふ竹切を取り島藏の耳を吹く）これ、何をするのだ。
升坊　へこんだといふから、ふくらまして遣るのだ。
島藏　張子の達磨ぢやアあるめえし。
升坊　お前の顏は達磨に似て居るぜ。
島藏　なに、おれが達磨に似て居ると。
ト島藏赤のケットを冠り、達磨の思入、海老八三絃を彈き、升坊主唄を唄ふ。
升坊　あまり辛氣くさゝに、棚の達磨さんをちよいとおろし、鉢卷をさせたり轉がして見たり。
島藏　えゝ、いゝ加減に馬鹿にしろ。（ト升坊主を打つ。）
ト升坊主島藏を達磨にして宜しくこなし。
升坊　そんなにぽかぽか打たねえで、早く芝居を仕ようぢやあねえか。

島藏　まあ、そんなに急きなさんな、新狂言が流行だから、己が一番書くつもりだ。

升坊　おめえ狂言が書けるかえ。

島藏　書けなくつてどうするものだ、芝居で言へば立作り三世河竹同様で、當時作者の賣出しだ。

升坊　賣出しならば景物が出るだらう。

島藏　引けた事をいひなさんな。

升坊　さうして狂言は何をするのだ。

島藏　初芝居の吉例に、古風だが曾我はどうだ。

升坊　蕎麥は結構、卷かあられか天麩羅か、寒いから鴨南蠻がいゝ。

島藏　えゝ、蕎麥ぢやあねえ、曾我といふのだ。

升坊　おいらは又蕎麥かと思つた。

島藏　お前は瘡が骨へからんで少し耳が遠いから、聞違へるのは無理ぢやあないが、鴨南蠻がいゝなどと食つた事もねえくせに。

升坊　なに、食はねえ事があるものか、昨夜も内で二はい食つた。

島藏　そいつは豪氣に奢つたな、鴨南蠻の丼には、何が中にはひつて居た。

升坊　言はずと知れた相手は葱さ。
島藏　鴨は幾つはひつて居た。
升坊　三角に切つたのがたつた一つ。
島藏　そりやア油揚の葱南ばんだ。
升坊　鴨南蠻とは違ふかえ。
島藏　恥をかくから默つて居ねえ。
升坊　もし皆さん、鴨南蠻は三角ぢやあござりません。（ト見物へ向つて言ふ。）
島藏　お客様方は御存じだわ。
升坊　さうして曾我は何處をするのだ。
島藏　狂言を見せる所は、鬼王の貧家だが、しんみりとして淋しいから、大詰の對面だ。
升坊　對面はうまからう。
島藏　旨いかまづいか、しねえ内に分るものか。
升坊　にうめんより上手だらう。
島藏　又食物の事を言ふか、さりとは意地のきたない奴だ、先づ爰でする曾我の大詰にうめんの役割は。

升坊　えゝ、にうめんとは何の事だ。（ト島藏の天窓を打つ。）
島藏　うつかり手前に引込まれた。先づにうめんの役割は。
升坊　又にうめんか。（ト天窓を打つ。）
島藏　えゝ、いめえましい、もう言へといつても言やあしねえ、先づ對面の役割は、あれに居らつしやる旦那樣を工藤左衞門祐經に見立て、虎少將は美くしいお二人さんがうつて付、所でお前が五郎で己が十郎だ。（ト升坊主むつとせし思入。）
升坊　おらあ五郎はお斷りだ。（ト立つて行く故島藏引留め。）
島藏　お前の大きな目玉ぢやあ、五郎はうつて付けだのに、何故此役を厭だといふのだ。
升坊　少し位の違ひなら、上と下だから料簡するが、半分から違つちやおらあ厭だ。
ト此時高吉鶴松海老八出て、
海老　だいぶ役もめがするやうだが、
高吉　及ばずながら扱ふが。
鶴松　どういふ譯で厭だといふのだ。
升坊　向うが十兩でこつちが五兩、あんまり割を喰せるから。

高吉　そりやあ五兩と十兩の金なら、すくねえ方が損だ。
海老　こりやあ狂言の役名だから、
鶴松　多くても少くてもいゝぢやあねえか。
升坊　役名でもおらあ厭だ。
高吉　どうすればお前はいゝのだ。
升坊　二つ割にするならいゝ。
海老　それぢやあ五郎十郎を一つにすれば、十五郎。
高吉　是を二つに割る時は、金なら七兩二分宛だが、
鶴松　役名だから七郎二、是でおめえは料簡するかえ。
升坊　あゝ七郎二なら、料簡します。
高吉　やうやく坊主を納めたから、七郎二でやんなせえ。
島藏　折角のお扱ひだが、兄も七郎二弟も七郎二、是ぢやあ兄弟になりませぬ。
升坊　なに、ならねえ事があるものか、針箱の古いのでも、鏡臺にすれば鏡臺になる。
島藏　所詮是では無駄だから、狂言はおくらにしませう。

升坊　それでおいらも安堵した、何ぞ外の物にしねえ。
島藏　いつそ氣を替へて淨瑠璃にしようか。
升坊　むゝ、淨瑠璃は面白いね。
島藏　お前淨瑠璃はいけるかえ。
升坊　あい、五はい位はいけます。
高吉　何だかをかしな返事だが、
鶴松　食ふものだと思つて居るのか。
升坊　どぜう汁ぢやァありませんか。
海老　大方そんな事だらうと思つた。
島藏　先づ淨瑠璃は色々あるが、私の得手は豐後節、お前檜物町はどうだ。
升坊　めらの新切に茶漬はいゝね。
島藏　えゝ干物ぢやあねえ、檜物町だ。
升坊　町と云ふは何だえ。
島藏　常磐津の家元だ。

升坊　あゝ差配人かえ。
島藏　そりやあ家主だ。
高吉　成程世話のやけた男だ。
鶴松　此調子ぢやあ淨瑠璃は、
海老　なんにも知つて居やあしめえ。
升坊　所が何でも知つて居るから、一くさり文句を言へば、直に私が跡を附けます。
島藏　只語るのも風情がないから、緣取り淨瑠璃といふをやらう。
升坊　緣取り淨るりといふは。
島藏　俳諧の付合同樣、ちよつと緣を取つて後を付けるのだ。
升坊　かうぜた事を言ふな。
島藏　先づ常磐津の名代物、關の戸から初めます。

〽上かゝる山路の關の戸に、さしも妙なる爪音を聞くに付けても身の上を、思ひ出せば錦の戸張、玉の臺に人となり。

〽上今はそれには引替て、草の衣に袖狹き、姿を隱す蓑笠や、杖を力にたど〳〵と。

ト島藏語る思入、升坊主は細き竹の杖にて小町の振。

〽道は闇路に迷はねど、子故の闇に突く杖も、直なる心堅親仁、一筋道の後ろから、

〽おゝい〳〵と聲掛られ、（ト升坊主與一兵衞の親仁のこなし宜しくあつて）

〽駒の頭を立直し、波の打際二打三打、いでや組まんと太刀投捨て、馬上ながらもむんずと

組み、（ト島藏細き竹にて升坊主と立廻り組打になり）

升坊　なに、熊谷に負けるものか。（ト角力太鼓になり、兩人をかしみあつて島藏を組伏せる。）

〽兩馬が間へどうと落ち、上帶とつて引起し、見れば我子の年ばいに、

ト島藏升坊主を引起し顏を見て思入。

〽苅萱心にうなづきて、

島藏　いかに小兒なればとて、頑是ない其詞、毎日入來る諸發心、昨日すつたも今同心。

〽一昨日刺つたも今同心、今同心では知れ難し。

升坊　それぢやあ交番へ行つて聞きませう。

島藏　又むだを言ふか。（ト天窓を打つ、）その同心のお顏でも。

ト島藏苅萱のこなし、升坊主石童丸子役の思入にて、

升坊　二つの年に別れし故、其お顏は知りませぬ。
島藏　して其國所は。
升坊　國は九州筑紫の松浦、
島藏　扨は筑紫の松浦より、
升坊　父を尋ねて高野へ登る。
皆々　ヤアトコセ、ヨイヤナ。（ト踊る。）
島藏　これ〳〵、母御も一緒に參られしか。
升坊　あい、母樣も父上のお跡を慕ひ、跡の宿迄お越しなれど、持病の癪に歩みもならず。
〽煎藥と練藥と針と按摩でやう〳〵と、命つないでたまさかに、逢うてお前にあまえうと。
（ト升坊主夕霧のこなしあつて島藏に取付き、）稻荷鮨を買つておくれな。
島藏　なぜそんな事をいふのだ。
升坊　逢うてお前にあまえうと。
島藏　えゝ、ふざけなさんな。（ト天窓を打つ。）
〽叩いて腹がいるかいな、これ死にかゝつて居る夕霧に、笑ひ顏見せて下さんせ。（ト升坊主
かつぽれ

夕霧のこなし。）さあ、笑ひ顏を見せてやらう、はゝゝゝ。（トをかしな顏をする。）

升坊　そんなにまぜつかへしては、おらァ厭だ。

島藏　これ、お前と己とは氣も合つて。

〽よい相肩の戻り駕籠、なぜ野暮に腹を立つのだ。

〽氣野暮うすどん情なし手なしのくせとして、惡洒落いうたり大通仕打はあるまいか、どういふ理窟か氣が知れぬ。（ト島藏振あつて、）

〽そりやほんの事ぢやいな、私しやお前に打ちこんで、身をつくし潟浪花潟、（ト升坊主振あつて。）

〽大阪を離れてより、かり駕籠に日を送り、奈良の旅籠屋三輪の茶屋、二十日餘りに四十兩遣ひ果して二分殘る。（ト升坊主梅川の振あつて、）

〽殘る恨みに俊寛が、せめて向うの岸迄と、艫綱に取付いて、（ト升坊主俊寛のこなしあつて。）

〽引けや〳〵よい聲かけて、エンヤラヨウ。（トきやり屋臺囃子になり、）

〽日吉祭の山王の、櫻の木にお猿が三千三百三十三疋さがつた。（ト升坊主島藏兩人振あつて、）

升坊　キヤツ〳〵。(ト猿のこなし。)

〽これ〳〵〳〵立たしやませ、のほよほ〳〵あろかいな、ついでに日和を見てたもれ、よほよほ〳〵さんな又あろかいな。(ト島藏細き竹を持ち猿廻しになり、升坊主猿にて宜しくあつて、)

〽ヤアトコセ、ヨイヤナ、アリヤ〳〵コレハイサノサ、コノナンデモセ。(ト兩人振あつて納り、)

官藏　よう〳〵、面白かつた〳〵。

島藏　さあ〳〵、是から御祝儀に、豐年踊の初まり〳〵。(ト鳴物になり、皆々襷尻端折にて、)

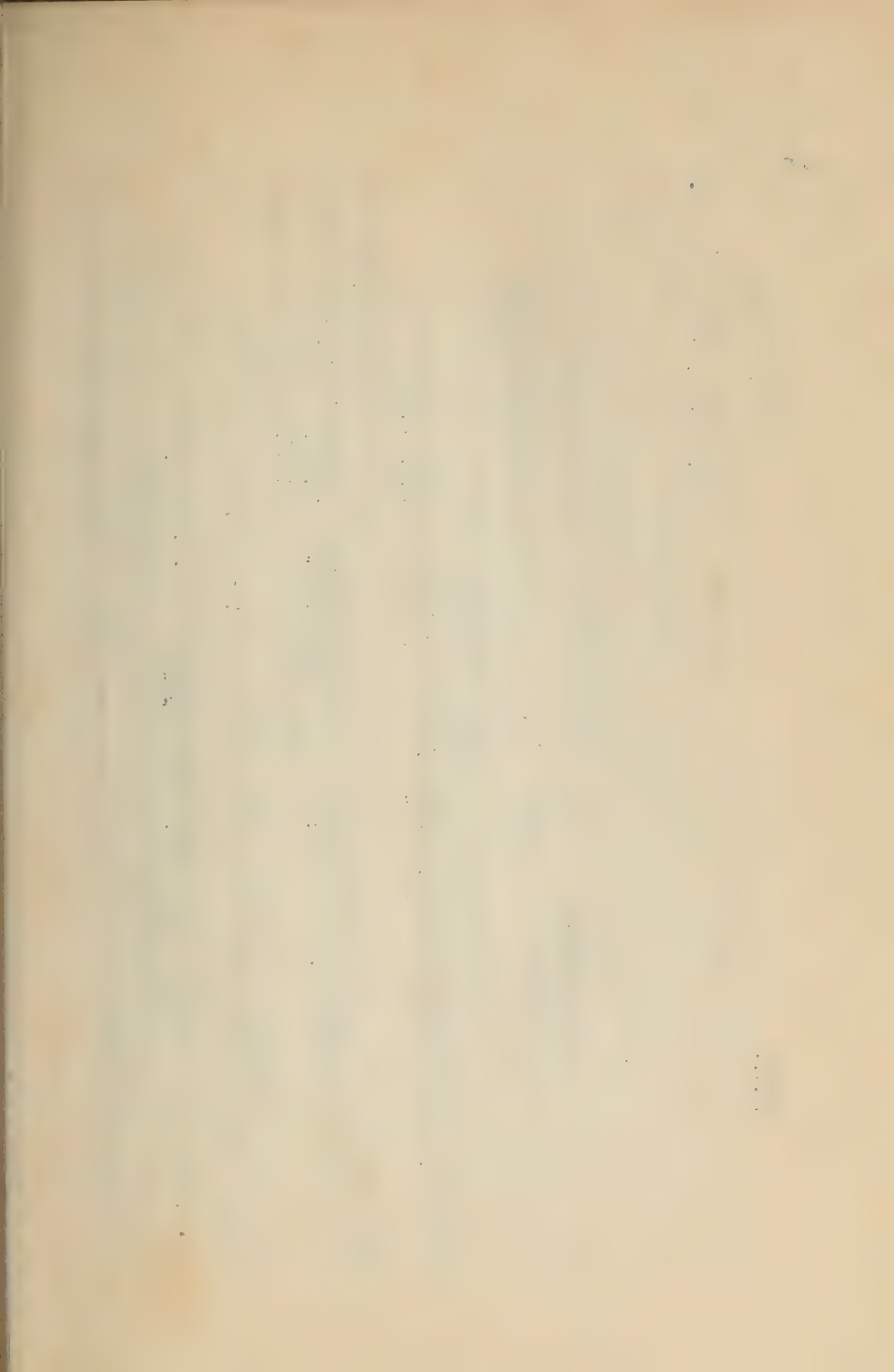
皆々　豐年ぢやあ萬作ぢやあ。

〽あすは旦那の稻苅で、小束に丸めてちよいと投げた、投げた枕にや〳〵科はない、おせゝのコレハイサノ、おべらに穗が咲いた、面白や。(ト皆々振あつて、)

〽國土安穩お目出たや。

ト目出度く打出し

かつぽれ（終り）

かつぽれ

上之巻は
上野の
博物館
下之巻は
淺草の
凌雲閣

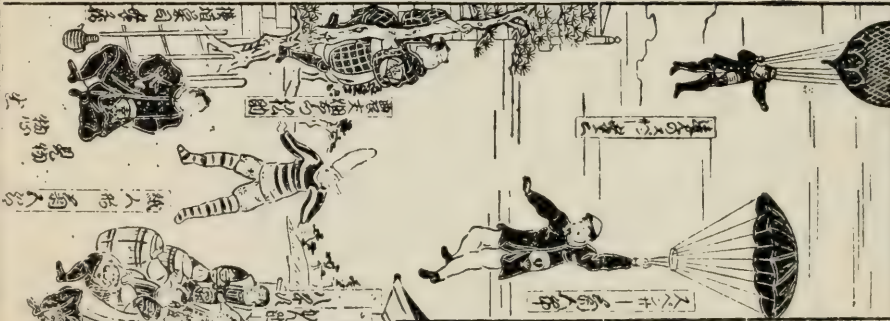
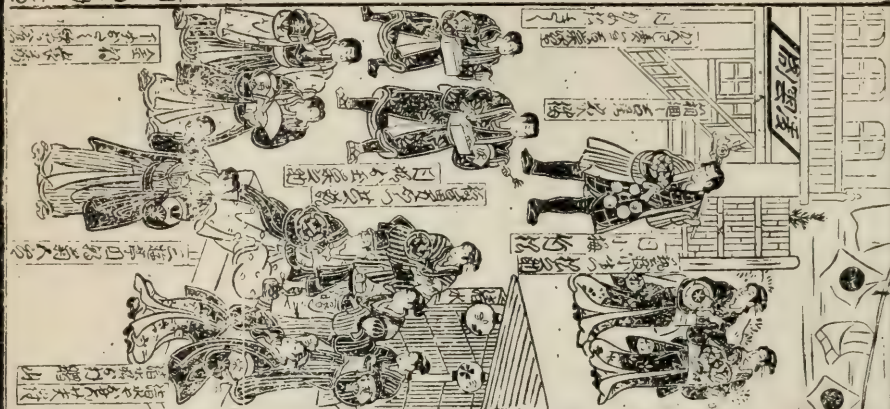
風船乘評判高樓

解説

「風船乘り」は明治二十四年一月、作者七十六歳の時、歌舞伎座に書卸された。其時の役割は、尾上菊五郎（風船乘りスペンサー、紙人形、三遊亭圓朝）、中村芝翫（福富萬右衛門）、坂東家橘（箱屋吉藏）、尾上松助（百姓畑右衛門）、尾上菊之助（三遊亭梅朝）、尾上幸藏（通辯横山榮司、三遊亭金朝）、尾上榮次郎（貉賣りの一）、尾上きく（同二）、岩井松之助（藝者小松）、尾上榮之助（福富の娘お玉）尾上芙雀（茶屋女房おせん）、市村竹松（藝者小梅）、中村歌女之丞（福富の下女お民）、澤村曙山（茶屋娘おひら）、尾上幸三（遠見のスペンサー）等であつた。常磐津連中は小文字太夫、都太夫、駒太夫、岸澤式佐、文字兵衛等。淸元連中は延壽太夫、榮壽太夫、梅吉、壽兵衛、佐喜造等であつた。市中の音樂會も出演した。

當時の際物を當込んだ大切淨瑠璃で、相當に好評であつた。十二階の凌雲閣といひ、英人スペンサーだのを捉へてあるし、明治二十年代の世相の一面を語つてゐる所に興味を惹く。挿繪にしたのは稿下當時の繪本である。

大切 上之巻 上野公園博物館の場
市中音樂會 樂士連中 出勤仕り
同 下の巻 淺草公園凌雲閣の場
凌雲閣

風船乘評判高樓

上の卷　上野博物館前の場

下の卷　淺草公園奥山の場

常磐津連中

清元連中

〔役名――風船乘スペンサー、三遊亭圓朝、箱屋吉藏、百姓畑右衛門、三遊亭梅朝、通辯稻垣榮司、三遊亭金朝、響賣り熊吉、同龜松、福富萬右衛門。藝妓小松、福富の娘お玉、茶屋女房お仙、藝妓小梅、福富の下女お民、茶屋娘おひら、遠見のスペンサー等。〕

〔上野公園博物館前の場〕――本舞臺一面の平舞臺、向う上野博物館の書割中遠見、上の方八角の屋臺、此内に洋樂師椅子へ腰掛け居る、正面白茶色の布に白の綱を掛けし輕氣球を飾り、下手に瓦斯の樽を誂へ通り並べ、此樽より輕氣球へ瓦斯の通ふ布の樋あり、傍に備前燒の壺、白燒の口と手の附きし徳利あり、下の方淨瑠璃臺樹木の張物打返し、總て上野公園博物館前の體。爰に紺半纏腹掛股引草鞋の一、二、三、四、五、六の人足六人、瓦斯の樽へ壺の藥を徳利にて注ぎ居る、此見得洋樂にて幕明く。

一　時に一服やつちやあどうだえ。

二　やらうとも〳〵、ならば一杯やりてえのだ。
三　何とどこから何處までぎつしりと、大層な人ぢやあねえか。
四　もう十一月の廿日過ぎだが、とんと霜枯のやうぢやあねえ。
五　先づ上等が一圓に、中等が五十錢。
六　芝居でいやあ立見の所が、下等の場所で二十錢だ。
一　今日一日の上り高は、なか〳〵容易い金ぢやねえ。
二　何しろ、輕氣球で、空へ昇るは一人だが、
三　何千人といふ人を、呼ぶのは豪氣な事だ。
四　曲馬だの輕業だのと、種々西洋ものを見たが、
五　海へでも落ちりやあ命掛け、こんなけんのんな事はねえ。
六　それを思ふと一圓でも、なか〳〵高いものぢやあねえ。

トやはり洋樂にて、下手より百姓畑右衞門、ぼつと鬘木綿の羽織、花色の股引、尻端折り竹の皮草履、田舍者のこしらへ、煙管を持ち煙草を呑みながら出來り。

畑右　もし、わしは田舍者で、何にも知りましねえが、風船乘りをする人は、何といふ人でござります

な。

一　是れは英國の產れの人で、スペンサーといふ人だが、

二　輕氣球へ乘るのが上手で、ドイツ、フランス、合衆國、

三　所々萬國を打廻し、今度日本へ始めて來たのだ。

畑右　それは珍らしい事でござりますが、あの袋が空へ上りますのか。

四　さあ、あれに瓦斯を中へ入れ、其氣で上へあがるのだ。

五　此袋が上へあがると、丁度お月さま位に見えます。

六　實に不思議なものだから、上つた所をよく見なせえ。

畑右　先づ長生きをしたお蔭には、大地震から大暴風雨、畫ばかりでなく本物の、戰を現に見ましたが異國からさもいろ〳〵な珍らしいものが來ましたが、象や虎は目古くなり、今度風船乘りを見ますのは、今の世界の有難さ、田舍へ土產になりまする。（ト畑右衞門煙草を呑む、）

一　若し、此瓦斯樽の側で、煙草は無用。

二　ひよつと火氣が瓦斯へうつると、大事が出來ます。

畑右　はあ、どんな事が出來ますな。

三　瓦斯の樽へ火氣が移れば、直に破裂して怪我をします。

四　お前、煙草をあがるなら、そつちへ行つてあがんなさい。

畑右　さういふ事なら止しますべい。（ト腰提げの煙草入へ煙管をしまひ、）何しろ二十錢の木戸は高いやうだが、まだ日本で初めての、風船を見るは有難い。（ト是れを聞き皆々思入あつて、）

五　もし、お前さんは二十錢で這入りなすつたか。

畑右　はい、二十錢で這入りました證據は、切手の端があります。（ト煙草入から下等の切符の切を出す、）

五　それぢやあ外へ出て見なせえ。

畑右　爰で見ては惡いかね。

一　惡いとも／＼、爰は上等の場所で、一人前一圓だ。

畑右　いや、一人前一圓とは、それはは魂げた事だ、實は圍ひの外に居ましたが、人の天窓で見えましねえから、圍ひの破れから潛り込みました。

二　圍ひを破して這入るなどゝは、そりやあ飛んだ事だけれど、

三　見りやあ田舍の人だから、大目に見るから早く行きねえ。

畑右　そんな事を言はねえで、隅の方へ置いてくれさつせえ。

四　そりやあ幾ら頼みなさつても、値段が違ふから置かれねえ。
五　それとも一圓出しなさるか。
畑右　どうして／＼一圓あれば着物を着ます、外へ出れば人の天窓で上る所が見られないが、むゝよしよし、あの松の木へ登つて見よう。
六　さあ／＼早く行きなさい。
畑右　えゝ喧しい、今行きますわい。（ト洋樂にて畑右衞門、不承々々に下手へ這入る。）
一　とんだ交ぜつけえしだ。

ト洋樂を打上げ、知せに附き、下手樹木の張物を打返し、爰に常磐津連中居並び、直に淨瑠璃になる。

〽外國に其名も高き輕氣球、昇る雲井の叡覽に、君の御感を蒙りて、榮譽を得たる英國のスペンサー氏の離れ業。

ト此内人足六人上下へ控へる、洋樂になり上手より通辯横垣榮司、黑の洋服、靴にて、手に黑のしやつぽを持ち出來り、

〽けふぞ再び上野にて、催す知せの報告に、人波打ちし大入は、數千里隔つ海外より、渡り來りし身の冥加、深き惠みを謝しにける。

ト榮司しやつぽを持つてよろしく振あつて、見物へ向ひ辭儀をなし、懷中時計を見て。

榮司　先刻より餘程の間、嘸諸君方には御退屈、スペンサー氏が昇降までは少々間がござりますれば、お慰みに瓦斯の氣で、一萬尺昇りまする理合を御覽に入れまする。これ、人形をこゝへ。

三　はつ。（ト下手へ這入り、直に紙細工の人形を持つて出來る、榮司取つて、）

榮司　此紙細工の人形へ、瓦斯の氣を入れますと、空中へ昇り自在に働きます。

ト矢はり洋樂にて、榮司一二の人足、瓦斯樽の口を拔き、人形の足より瓦斯を入れる、人形しやつきりとなり、ふは〳〵と飛上る。榮司足に附きし絲を引く、これにて人形下へ下りる、足の絲を取つて放すと、日覆へふは〳〵と上る、又小さなポンチ畫のやうな人形へ瓦斯を入れ、土間の方へ放すふは〳〵と見物の方へ飛行き、落ちた所へ遣る。

今度は、大人形を御覽に入れます。

〽言ふに心得傍なる、小屋より運ぶ大人形。

ト下手へ二三人這入り、紙細工人形のこしらへの菊五郎を手舁きにして持つて來る、菊五郎ぐつたりと紙細工のこなし、榮司菊五郎の片足を捉へ、瓦斯樽の口へ當てる。

〽足の先より瓦斯の氣を、入る日まばゆく散る紅葉、そよ吹く風に膨みて、木蔭に宿る鳥な

らで、ぱつと飛行く足の絲、引戻されてしやんと立つ。

ト此内菊五郎紙人形の如く、段々に手足を動し瓦斯の氣一杯に這入りし思入にて立上り、ふはふはと上手へ行くを、榮司足の絲を引く、引かれて戻る思入にて跡へ返りしやんとなる。

〽きのふ野掛の遊獵に、出掛けた途中で日が暮れて、月をよすがに薄原、たん／＼狸が打ち寄りて、居るは思はぬ獲物ぞと、見れば親子が鼓の稽古、腹膨らしてタヽポ、ヽ／＼タツポツポ、〽こいつは面黒狸だと、共に浮れてタヽポツポ、負けず劣らず拍子事。

ト此内菊五郎ふら／＼と人形の動くやうな振あつて、負けず劣らずと、洋樂と岸澤打合せの拍子よろしくあつて菊五郎ぐにや／＼と倒れる。

一　や、こりやどうしたのでござりませう。

榮司　何處にかぽッつり穴が明き、それから瓦斯が漏れたのだ。（ト二紙人形を見て）

二　爰に小さな穴があります。

榮司　それならそこを結へて置かう。

ト引裂き紙で結ぶ思入、一は人形の足を捉へ、瓦斯を入れる、これにてしやんとなり。

〽又も双方打寄りて、たん／＼タヽポヽスツタツタ。

ト菊五郎拍子を踏み、ぐた〳〵になり倒れる。

三　又穴が明きましたか。

四　今度は繼手がはなれたのだ。

榮司　それでは飛ばす事も出來ぬ、早く小屋へ持つて行け。

五六　畏りました。

〽大人形を引抱へ、小屋の内へぞ入りにける。

ト五六兩人菊五郎の人形を抱き、下手へ這入る。又洋樂になり、以前の畑右衞門出來り。

畑右　やあ面白かつた〳〵、紙の人形の踊つたのは、とんと生きてる人のやうだ。

一　や、お前はさつきの田舍のお人、

二　又邪魔に出なすつたのか。

畑右　あんまり今のが面白かつたから、あの踊りを覺えこんで、國へ土産にしたいから、憚りだがおらが足へ、其瓦斯を入れてくれさつせえ。（畑右衞門足を出す。）

榮司　いえ、紙細工の人形だから瓦斯の氣で今のやうに、生きてるやうに踊りますが、人間へ瓦斯は入れられませぬ。

畑右　そりやさうでもあらうけれど、股引の間へ入れたら、瓦斯でむく〳〵と、今の踊りが踊られよう

國へ土産にしますから、どうぞ入れてくれさつせえ。

榮司　達てお前がさう言ひなされば、入れて上げまいものでもないが、股引の間へ瓦斯を入れたら、お

前の體が空へ昇り、何所へ落ちるか知れませぬぜ。

畑右　瓦斯の氣で空へ昇り、何所へ落ちるか知れぬとは、それは何よりけんのんだ、辨天さまの池へで

もおつこちたら大變だ、何しろ今の踊りの、タヽポヽ〳〵タッポッポ、こいつは面黑狸だと、共

に浮れてタヽポッポ、（ト畑右衛門思入あつて、）あすこの所を覺えたい。（ト榮司時計を見て、）

榮司　もう時刻でござりますから、輕氣球が始まります、元の所へおいでなさい。

畑右　風船乘りが始まるなら、松へ登つて見物しませう。

○四人　さあ〳〵、早うお出でなさい〳〵。

畑右　今の踊りを忘れぬやうに、タヽポヽ〳〵タッポッポ。

ト畑右衛門踊りながら下手へ這入る。人足等皆々出來り、綱に附けし重りを取る。

〽早や日も西へをちこちに、むら立つ雲も晴れ渡り、小春日和の麗に、そよ吹く風も中空へ、

やがてぞ昇る輕氣球。萬國に名も聞えたるスペンサー氏は滿場の、諸見物に一禮なし、氣球

の許へ立寄りて、呼吸をはかり一聲の、合圖の聲に押へたる、綱を放てば忽ちに、虚空はるかに。

ト此内人足は重りを取り綱を押へ居る。洋樂になり榮司袋の脇へスペンサーの乘る臺を取附ける、よき程に下手よりスペンサー、黑のしやつぼ鼠の洋服にて出來り、見物へしやつぼを取り辭儀をなし、鼠の小さなしやつぼを冠り、臺の上へ乘る、榮司始終後見をなし、スペンサー合圖の聲を掛ける、是れにて押へし綱を放す、誂への鳴物にて、輕氣球と共にスペンサー宙乘りにて廣告を撒きながら日覆へ上る。此時大勢拍手する、知せに附き、向う博物館の張物を打返し、向う奥深に空の遠見よろしく、道具納る。

〽遙に高き空中にて、見る目もぞつとスペンサー氏は、氣球を放れ危くも、開きし傘に風を切り次第〳〵に。

ト此内誂への鳴物、遠見の輕氣球、これへ子役同じ拵へ、遠見によき所まで上り、仕掛にて氣球を放れ傘を開き、ふは〳〵と下へ降りる、氣球は下手へ引いて取り、向うの遠見淺草の凌雲閣の小さく見ゆる書割よろしく道具納る。

〽下降の途中さま〴〵な放れし業は大空を、翔る鳥にも彌勝り、目を驚す技藝の妙、〽折柄

さつと一吹きの風に追はれて、

ト此内スペンサー傘を持ち、日覆より降りて來る、途中にて大の字など好みの藝をなし、段々降る心にて、左右へ樹木の梢を段々に上へあげる。よき程に風の音になり、スペンサー風に追はるゝこなしにて傘を遣ひよろしくあつて、ト、下手へ降りながら奈落へ這入る。洋樂になり、知せに附き、博物館の元の道具へ戻る、爰へ見物の仕出し大勢捨ぜりふにて、わや〳〵と褒める事あつて。

榮司　只今風が出ましたから、根岸の邊へ落ちましたと思はれますが、車で直に歸りまして、演說をいたしますから、暫くお待ち下さりませ。

ト是れにて仕出し左右へ這入る。ばた〳〵にて。下手より人足六人畑右衛門を擔ぎ出來り。

六人　大變だ〳〵。

榮司　大變とは、何が大變だ。

一　さつき來た田舍者が、松の木の上へあがり、

二　見物をして居りましたが、輕氣球の上つた時、

三　よせばいゝに人並に手を打たうとして、松からおつこち、

四　打ち所でも惡かつたか、目を廻して、

皆々　居りました。

榮司　それは實に大變だ、池の水を汲んで來い。

◎　水は爰にありますから、

×　顏へ吹つかけて遣りませう。（ト合方にて畑右衛門を介抱し、番手桶の水を顏へかける、）

皆々　田舍の人ッ。（ト呼び生ける、是れにて畑右衛門ウンと氣が附く、）

榮司　氣が附きましたか。

畑右　あゝ、氣が附きました、體が痛い。

ト洋樂になり畑右衛門紙人形の思入にて、手足を段々動かし、トゞしやんと立つ、畑右衛門唄ふ心にて。

〽たんく狸が打寄りて、居るは思はぬ獲物ぞと、見れば親子が鼓の稽古、でつかい腹を皷らして、タゝポゝくタツポツポ。

ト畑右衛門人形の思入にて、不器用なる振よろしくあつて、ばつたり倒れる。

榮司　や、又目を廻しなされたのか。

畑右　いや、穴があいて瓦斯が拔けたのだ。

皆々　悪く洒落れるぜ。

ト折柄綱曳後押の、車で馳せ來るスペンサー。

ト洋樂になり、花道より以前のスペンサー人力車に乘り、後押綱曳にて、直ぐに舞臺へ來る、此内手を打つ音してスペンサー、しやつぽを取り見物へ辭儀をする、此内人足瓦斯の樽を後へ並べる、スペンサー此上へ上り英語にていふ、榮司これを聞き通辯にて。

榮司　只今スペンサーが申しましたるは、輕氣球が空中へ三千五百尺程上昇いたしましてございますが、降りの砌り折惡く少々風が出ましたので、根岸へ落ちましたと申しましたのでございます。

仕出大勢　よう〱。（ト手を叩く、スペンサー下へおりる。）

榮司　時事新報の廣告や、平尾の齒磨の廣告が、まだ殘つて居りますから、是れを撒いて下さいまし。

トスペンサーうなづく、榮司廣告を渡す、皆々も手傳ひ、おびたゞしく廣告をぱつと撒く。

打おろしの洋樂になり、知せに附き道具幕を振落し、双盤にてつなぐ。

此の道具幕、奥山から凌雲閣を見たる遠見の道具幕、双盤にて納ろ。とやはり双盤にて羽織着流しにて、小さな熊手、唐の芋など持ちし仕出四人出來り、

○もし喜助さん、お前さんも淩雲閣で風船を御覽なすつたのか。
△上野へ行かうと思ひましたが、酉の市へ參りましたから、十二階で見物しました。
□側で近く見るよりも、上つた所は遠くの方が、風情があつてようございます。
◎それに二十錢出すよりも、爰で八錢で見た方が第一懐が違ひます。
○何にしろ二の酉へ行つた人が入つたから、十二階は一杯だ。
△實に押されて困つたが、いゝ女と同じ所に、並んで居たのが儲けであつた。
□いゝ女といへば、成駒屋の福助に似たお孃さんは、びつくりする程いゝ女だ。
◎十二階の上に居た、源之助と榮之助に似て居た藝者も別嬪だつた。
○いゝ女を見た所から、是れから北廓へ繰込んで、全盛遊びでございませうな。
△所が今日は二の酉で、滅法人が出ましたから、廻しを喰ふのも氣がないから、
□北廓へ行かずに萬梅で、公園猫を呼上げて、わつさり騒いでお歸りかね。
◎そんな景氣ぢやあございませぬ、金田のしやもで一杯やり、直に家へ歸ります。
○それは何より上分別、お上さんがお仕合せだ。
△時にお二人にも、久し振りだが、金田へお附合なさらないか。

□ どうで何所へか行く積り、お邪魔でなくば御一緒に、

◎ そりやあ何より有難い、是れから直に火鉢を取巻き、

○ 好きな芝居の話でも、

△ 仕ながら一杯、

四人 遣りませう。

　トやはり双盤にて四人上手へ這入る、道具見計らひにて道具幕を切つて落す。

(淺草公園の場)――本舞臺上の方九尺庇附の茶見世、軒口に好みの團子提灯、上手正觀世音菩薩と書きし朱塗の長提灯を掛け、下手臺の上に赤銅の總銅壺、茶釜、眞鍮の藥罐を掛け其外茶道具よろしく飾り、正面常足の二重、障子立てあり、門の柱に梅屋といふ掛行燈、下の方淨瑠璃臺、眞中建仁寺垣、山茶花扇骨木などあしらひ、此後へ煉瓦造りの凌雲閣を見せ、總て淺草公園の體、爰に簪賣りの兩人對の裝、三尺、おしよぼからげ、白足袋草履、赤い紐の附きし文庫へ熊手の簪を入れ、これを首へ掛ける、手にも熊手の簪を持ち、茶屋女銀杏返しの鬘前垂、盆を持ち立ち掛り居る、淨瑠璃臺に清元連中居並び、双盤打ち上げ、道具幕切つて落す。と流行唄模樣の淨瑠璃になる。

〽けふは日和も吉原かけて、人の山なす奥山續き、田圃込合ふ二の酉詣、客を搔き込む熊手の手事、ちよつと格子で吸附けられし、延ばし鼻毛の長羅宇煙管、ほんに馬鹿げた阿房草。

ト双盤入りにて三人振あつて。

お村　お前方へ引込まれて、わたしも一緒に踊つたわいなあ。（ト床几へ掛ける、兩人前へ出て、）

簪賣一二　さあ〳〵皆さん、選取つた〳〵。

簪一　これは評判熊手の簪、お福を搔込む緣起のよいのが、

簪二　一本五厘で二本で一錢、

兩人　より取つた〳〵。

ト右の合方にて茶見世の内より、茶屋の女房、前垂掛け駒下駄にて、盆に茶碗を二つ載せて持ち出來る。

お仙　お前方は朝から簪を呼び續けで、さぞ喉が乾かうね、まあ息繼ぎにお茶でもお上り。

ト茶を出す。

簪一　これは每度有難うござります、（ト兩人茶を吞み、）初手の酉が降りましたから、今日は大層人が出ました。

簪一 朝ツから賣れますので、三度家から持つて來ました。

お仙 それは何よりよかつたね、是れといふもお前方が、踊りがいゝのに呼びやうが、面白いから賣れるのだね。

お村 お上さんのお言ひの通り、大人ぢやあこんなに賣れません。

簪一 もう少しで賣切れますが、是れといふのもお酉樣の、お蔭ゆゑでございます。

簪二 日が暮れたらばお參りに、二人連れで行きます積り。

お仙 けふは刎橋が明いて居るから、大方北廓へお廻りだらうが、引つかゝつてはいけないよ。

簪一 それは大丈夫でございます、まだ二人とも食氣の方で、色氣はさつぱり知りませぬ。

お仙 なに、知らない事があるものかね、お酌に情婦のある事は、疾うから聞いて居りますよ。

簪一 そんな事をいつて下さいますな、親仁に知れると叱られます。

お仙 若しおとつさんが叱つたら、親の眞似を子がしては、惡うございますかと、一本お極めな。

お村 ほんに爰らが極め所だよ。

簪一 どうしてそんな事が言へますものか。

簪二 兄さん、構はずさう言つて、おとつさんに叱られたら、梅園のお仙さんがさう言つたと言ひなさ

い。

お仙　そんな事を言つてはいけない、わたしがおとつさんに叱られるよ。

〽空も小春の麗に、十二階から風船を、見ての歸りの藝者連れ。

ト合方通り神樂にて、上手より藝者小松、小梅好みのこしらへ、駒下駄、箱屋吉藏羽織着流し駒下駄

誂へおかめの面の附きし熊手を持ち出來る、お仙見て、

小松さんに小梅さん、今お歸りでございましたか。

小松　今日風船を見るのには、凌雲閣が上棧敷だと、吉どんに勸められ、十二階へ上りましたが、

小梅　何所も彼所も一杯で、降りる事が出來ないので、どんなに困りましたらう。

吉藏　其替り上野の山が、目の下に見えますから、昇る所から落ちる所まで、すつかり見物いたしました。

お仙　嘸お草臥なさいましたらう。

お村　まあ爰へお掛けなさいまし。（ト是れにて下手の床几へ掛ける）

小松　おや、通り神樂が聞えますが、春のやうでありますね。

お仙　今日は酉の市で、太神樂が爰らを流して居ります。（ト簪賣兩人前へ出で、）

簪一　さあ〳〵皆さん、選取つた〳〵、これは評判の熊手の簪、お福を取込む緣起のよいのが。
簪二　一本五厘で、二本で一錢。
兩人　選取つた〳〵。
小松　吉どん、其の簪を買つておくれな。
吉藏　一本五厘の簪を、近所へ遣れもしますまい。
小松　近所へ遣れはしないけれど、可愛らしい子供だから、たんと買つて遣りたいのさ。
吉藏　さういふ事なら買ひませう、これ兄い、總仕舞で幾らばかりだ。
簪二　もう僅でござりますから、みんな買つて下さいますなら、三十錢で負けませう。
吉藏　それぢやあみんな買つて遣らう。（卜吉藏十錢銀貨を三つやる。）
簪賣兩人　これは有難うござります。
小梅　ほんに二人とも調子のいゝ、氣の利いた子でござりますね。
小松　それだから買つて遣つたのさ。
お仙　さうしてこんなにお買ひなすつて、此簪をどうなさいます。
小松　持つて歸るも邪魔だから、近所の子供に遣つておくれ。

お仙　それは有難うございます。
お村　嫐子供が喜びませう。
簪一　入りもしない簪を、そつくり買つて下さるとは、
簪二　藝者衆は違つたものだ。（ト首を振つて思入。）
簪一　えゝ、生利きな事をいふなえ。
〽是れから直に酉の市、熊手に附いた於多福の、なかを廻つて歸らうと、唐の芋から五つ六つ、年を重ねし小ませ者、打ち連れ立ちて急ぎ行く。
ト簪賣兩人振あつて、皆々へ辭儀をなし下手へ這入る。
〽折から又も高樓より、爰へ下り來る金滿家。
トやはり合方通り神樂にて、上手より福富萬右衛門、黑のしやつぽ絲織の羽織着流し、金の時計鎖を帶へ巻き、駒下駄にて物持のこしらへ、娘お玉、島田鬘、黑縮緬の羽織、お召縮緬の着附駒下駄、下女お民島田鬘着流し雪駄、誂への袱紗包みを持ち出來り、跡より三遊亭金朝、羽織着流し噺し家のこしらへ、駒下駄にて出來り。
萬右　やれ〳〵、押されて切なかつた〳〵。

お玉　やう〳〵下へおりたので、わたしやほつとしたわいの。
お民　あなたにお怪我をさせまいと、誠に心配いたしました。
金朝　其御心配には及びませぬ、金朝がお供をいたせば、大丈夫でござります。
お仙　是れは旦那樣、お歸りでござりましたか。
萬右　大層な人込みで、やつとの事で歸つて來た。
お仙　お孃さま、面白うござりましたか。
お玉　あい、面白うござりましたわいな。
金朝　面白いの面白くないのと、上る所から落ちる所まで、目の下に見える十二階、風船の御見物は凌雲閣に限ります。
お仙　まあ〳〵是れへお掛け、
お仙
お村　遊ばしませ。

ト毛布を掛けし床几を出す、是れへ萬右衞門お玉掛け、後の床几へお民掛ける、小松萬右衞門を見て、小梅と思入あつて前へ出で、

小松　どなたかと存じましたら、石町の旦那樣でござりますか。

萬右　おゝ、新橋の小松に小梅か。
小松　お孃さま此間は、何よりの品を頂戴いたし、
小松
小梅　有難うござります。
吉藏　私も旦那樣からお羽織を頂戴いたし、有難うござります。(ト辭儀をする。)
小梅　あの頂戴のお簪は、萬吉でござりますか。
お玉　あい、吉兵衞から取りました。
吉藏　吳服物と染物は、堀田原の竺仙に、櫛簪は萬吉が當時一等でござります。
小松　旦那樣も風船の、御見物でござりますか。
萬吉　酉の市へ參りながら爰へ出て來た。凌雲閣をまだ娘が見ないから、見せに上へあがつた所今風船が上るといふので、八階目で見物しました。
小松　私共も十二階で、見物をいたしましたが。
小梅　込み合ひますのでお孃さまを、お見掛け申しませなんだ。
お玉　わたしや多くの人に醉ひ、どう仕ようかと思つたわいな。
お民　それに下の方が一杯ゆゑ、下りるにはおりられず。

吉藏　嘸お困りなされましたらう。
萬右　是から歸りに萬梅へ行くから、みんなも一緒に行くがいゝ。
小松　それは有難うござりまする。（ト萬右衞門向うを見て）
萬右　や、向うへ來るのは三遊亭、
小松
三人　圓朝さんでござります。
ト合方通り神樂にて、花道より三遊亭圓朝、黑の羽織着流し駒下駄、同じこしらへにて出來り花道に留り。
〽日暮も早く上野から、鐘に追はれて淺草へ、今日お目見えに合乘りの、車坂町横に見て、燈明寺店暮近く、五時か六區の公園へ、初席急ぐ噺し家が、扇の骨の親子連れ。
ト兩人振あつて舞臺へ來り、圓朝皆々を見て、
圓朝　これは石町の旦那樣、お孃樣も御一緒で、酉の市へいらつしやいましたか。
萬右　察しの通り酉の市から、十二階で風船乘りを見て居た。
小松　お師匠さん、お出でなさいまし。
圓朝　おや小松さんに小梅さん、今日は旦那のお供かね。吉さん此間は。おやお民どんの美しい事、不

斷着と餘所行きは、こんなに違ふものか。

金朝　そりやあ馬喰町の平尾で賣る、小町水の下塗りに、小町白粉の上塗りだから、美しいは當り前さ

お仙　お師匠さん、今日は。

圓朝　おやお前も大層今日はきれいだ、よく白髮が染まつたね。

お仙　知りませんよ。

吉藏　相變らずお師匠さんが、萬遍なく嬉しがらせるね。

金朝　そこが名代のお世辭屋さ。

圓朝　そりやあ金朝、お前のことだ。

萬右　時に師匠、何處へ行つたのだ。

圓朝　スペンサー氏の輕氣球を、上野へ參つて見物いたし、酉の市へ參らうと、車で急いで參りました。

萬右　物を見るのが好きだから、とつくり側で見て來たらうね。

圓朝　いえ私もよく見ましたが、寺島が風船を淨瑠璃にでもする氣と見え、作者を連れて來て居りましたが、例の念者でござりますから、あつちを見たりこつちを見たり、うるさく側へ行きますので役者と知らぬ外國人が、何かぺらぺら小言をいひ、そつちへ行けと酷く突かれ、どつさり尻餅を

ついた時は、可笑しくつて〳〵。（ト圓朝の思入にて俯いて笑ひ、）それでも平氣で見て居りましたが、何でも人に喰れぬうち、走りを喰ふ氣と見えます、はツくしよ、誰かおれの噂をするわえ。

萬右　そりやあ嘸可笑かつたらう。師匠、そこに居るのは、そりやあお前の弟子かえ。

ト是れまで梅朝うつむき居る。

圓朝　お見忘れなさいましたか、私の忰でございます、久しく藝道修行の爲、上方へ參つて居りましたが、今度こちらへ歸りましてござります。

萬右　それぢやあ息子の菊坊か、大層立派な男になつたな。（ト梅朝前へ出で、）

梅朝　誠にお久し振りでござりまする、相變らず御贔屓をお願ひ申し上げまする。

萬右　それはおれより何れも樣へ、よくお願ひ申すがいゝ。

圓朝　憚りながら旦那樣、お引合せの口上を、

萬右　知つての通り口不調法、やつぱりお前が言ふがよい。

圓朝　それぢやあ御免を蒙りまして。（ト思入あつて、）忰の序に濱町の、息子殿の御披露を一緒にしようから、二人とも爰へ。

ト皆々下に居る。淨瑠璃臺より延壽太夫下りて來り、下手へ並ぶ、圓朝引合せの口上あつて、おむ

ら私もと頼む思入、圓朝口上あつて納り、流行唄の合方になり、皆々元の所へ並び。

萬右　久しく上方に居たとあれば、何か珍らしい踊りがあらう、ちよつと踊つて見せてくれ。

梅朝　外ならば知らぬこと、旦那の前で私などは、手も足も出はしませぬ。

お玉　そんな事を言はないで、所變れば品變る、珍らしい上方の踊りをわたしや見たいわいな。

小松　お孃さまのお好みゆゑ、

小梅　さあ〳〵早く見せなさんせ。

梅朝　それではちよつと踊りませう。

ト梅朝羽織を脱ぎ緋縮緬の襦袢を片肌ぬぎ、桃色の手拭を冠り、

〽伊勢ぢや濱荻、浪花ぢや蘆よ、所柄とて替りし中に、土地の自慢は砂持ち踊り、〽貴賤老若男女の中も、ヨウサテウサと砂をば擔ぎ、片身替りのきり物着れば、犬や猫の姿をうつし鈴と鳴子をぶらりんと提げて、手には太鼓をどんどゝ叩き、おどん〳〵や踊らにやそんぢや、どん〳〵がら〳〵どんがらこ〳〵。

ト梅朝振あつて、貴賤老若から吉藏同じく片肌ぬぎ、手拭を冠り出で、兩人にて振、此内萬右衛門踊りに浮れ首をふる、皆々よう〳〵と褒める。

萬右　なか／＼これは旨いものだ。
お玉　跡は差詰め圓朝さん、お前も何ぞおはこの踊りを。
圓朝　若い時には無器用ながら、ちよつと踊りも踊りましたが、いつが日にも手に取りませねば、先づそれよりは花柳の一番弟子のお孃さま、何かあなたの振事を、拜見したうござります。
お玉　久しく踊りを溫習ないから、大概忘れてしまつたわいな。
圓朝　そんな事をおつしやつても、あなたのお覺えのよい事は、師匠から聞いて居りまする。
お玉　それでは踊らにやならぬかいな。
お民　圓朝さんのお賴みなれば、何ぞ短い踊りをば。
小松　ならう事なら私共も、
小梅　拜見したうござります。
萬右　さあ／＼早く踊るがいゝ。
お玉　短いものを踊りますが、側であなたが首を振ると、つい可笑くなりますから、首をふらずに居て下さりませ。
萬右　おゝ承知だ／＼、決して首はふらぬから、さあ／＼早く遣つたり／＼。

ト お玉扇を持つて前へ出る。下手張物打返し、常磐津連中居並び掛合になる。

常〽ほの〲と霞棚引く朝ぼらけ、日影長閑にみんなみの梅が笑へば鶯の、鳴くも嬉しき庭もせに、常〽まだ山々は白々と、殘んの雲も有明の、月はいつしか山の端へ、常〽入江の澤の薄綠、芽ぐむ柳に風もなく、常〽靜けき春ぞ樂しけれ。

ト お玉振あつてよき程より小梅お民を招き、二人を相手に振ある、此内萬右衞門首を振る、心附いて兩手で首を押へ居る。

金朝　よう〱、親はないかと申したうござります。もうたまらぬ。（ト無闇に首をふり納る、）

小松　さあ此跡は圓朝さん、

小梅　お前の番でござんすぞえ。

金朝　それは幾らお好みでも師匠に踊りは踊れませぬ。

吉藏　なに、踊れない事があるものか、其以前は道具話しで、芝居の眞似もしなすつたのだ。

圓朝　そんな事を言ひなさると、お前の年が知れますぜ、先づ此跡は旦那樣、踊りは專賣特許の本元、何ぞお見せ下さりませ。

萬右　おれが踊りは古めかしいから、今日は御免を蒙むらう。
圓朝　いえ〳〵、あなたの踊りをば、みんなが待つて居りまする。
お仙　どうか旦那、私共に、
皆々　お見せなすつて下さいまし。
萬右　それではどうでも踊るのなら、其熊手を貸してくれ。
吉藏　さあ〳〵お遣ひなされませ。（ト萬右衞門おかめの面を取り熊手を持ち、）
萬右　さらば是れにて踊らうか。

常〽十返りの松に花吹く君が代の、目出度き時に相生の、松諸共に年老いて、常〽幾歳こゝに住の江の、岸のさゞ波皺よりて、常〽面影かはる尉と姥。

ト萬右衞門熊手を持ち、お仙を姥に遣ひ、振あつて、爰へ簪寶の一、二出で、

〽蘆邊に群がる雛鶴を、友に餘念もあら磯へ、打來る波の鼓につれて、翼かはして舞ひ遊べば、尉も浮れて手拍子を。（ト簪寶一、二鶴の思入、萬右衞門是れを相手に振あつて、）

〽うつゝ他愛も中空へ、舞ひ行く影を打ち仰ぎ、翼ほしやとかこち泣き、尉が切なる心をば知るや知らずや舞ひ下りれば、あら嬉しやと扇をさし、千歳の齢萬歳と祝ひかなでゝ舞ひ納

む。

ト轡賣一、二飛び行く振、萬右衞門空へ思入、兩人前へ出る、萬右衞門悦び扇をもちて、舞模樣にて納る。

圓朝　相變らず旦那の踊りは、凄いものでございます。

金朝　實にこれは專賣品だ。

お仙　さあ〳〵、跡はお師匠さん。

お民　お前さんの番でござんすぞえ。

圓朝　椅子へ掛けて小半日、風船を見て居たので、脚氣が起つて踊られない。

小松　そんな卑怯な事をいふと、

小梅　昨夜の事を言ひますぞえ。

萬右　なに、昨夜の事とは。

吉藏　柳橋での意氣筋を、

圓朝　それを爰で言はれては、

小松　いえ〳〵言はねばならぬわいな。（ト小松圓朝をとらへ口說きになる、）

〽そもや初日の初めから、眞の噺の人情に、迫る涙は笑ふより、身に沁々と忘られず、〽夜毎に通ふ席亭へ、仇な浮名が立花や、逐に離れぬ中入から、〽掛持ち多き主ゆゑに、外へ心が移らうかと、〽氣も合乘りは餘所目から、羨しいぢやないかいな。

ト小松圓朝を捉へ口說きの振、是れへ吉藏小梅金朝からみよろしく振ある、此內萬右衞門浮れて首をふる、お玉袖を引く、心附きて止め又首をふる、可笑味あつて納る。

萬右　さういふ事がある上は、みつしり爰で踊るがいゝ。

圓朝　あゝ、昔へかへつて踊りませう。(ト此時獅子の鳴物になる。)獅子の來たのは丁度幸ひ、囃子をかりておかめの踊りを。

吉藏　さあ〳〵時代に、

皆々　所望ぢや〳〵。

ト獅子の鳴物にて羽織をぬぎ、お福の面を冠り、姉さん冠りに手拭を冠り前へ出で。

〽おかめ〳〵と村中で、鼻は顋より低けれど、噂は高い評判の、〽娘盛りに白々と、白粉附けて紅附けて、しよなめく姿は若い衆が、〽袖褄引くも數多く、誰に仕ようか思案橋、〽ちよいとわたしの目に附いた、男があつて聟に取り、〽三々九度の杯も、いつか日もた

ち月もたち、〽清 満つる十月にや、産んで、祝ふ産衣の宮参り、〽常 ねん〱ころ〱ねんねこせい、ねんねが守はどこへ行た、山を越えて里へ行た、〽清 わたしが聟の其里は、山坂越えて谷川の、流れへかけし水車、〽常 臼舂く拍子の 合方 面白や、〽清 雨後は水増しくる〱と、〽常 早めて廻る水車。

ト此内獅子の鳴物を冠せ、おかめの振よろしくあつて、羽織を子供となし、子を扱ふ世話の振よろしく、萬右衛門是れを見て首を振らうとして心附き、兩手で首を押へ居ろ、水車の件より圓朝首をふる、萬右衛門悴へ兼れ首をふる、それより萬右衛門にかぶれ、お玉、小松、お仙、お民、おむら、吉藏、金朝、小梅、簪寶一、二皆々一時に首をふる、ト早めてふる可笑味あつて、圓朝面を取り。

圓朝　是から跡は紋切形、總踊りといふ所だが。（ト此時頭取出で、）

頭取　先づ今日は是れ限り。

ト目出度く打出し

風船乘り（終り）

奴凧廓春風

解　説

「奴凧」は明治二十六年一月、作者七十八歳の時、歌舞伎座に書卸された。其時の役割は、尾上菊五郎（誂へ張の奴凧、獵人碓氷仁太郎）坂東家橘（曾我十郎祐成、鹿島屋若い者市助）、尾上菊之助（若黨赤澤十內、鹿島屋若い者音松）市川猿之助（舞鶴屋朝吉、鎌倉屋の若い者助藏）、坂東竹松（舞鶴屋娘おひな、鹿島屋の若い者宗七）、尾上榮三郎（化粧坂の少將、富士屋娘お山）、中村福助（大磯の虎）、尾上丑之助（舞鶴屋小傳三）、尾上きく（同出入の悴三吉）、尾上梅助（碓氷峠の猪）、中村翫太郎（狩人峠の權兵衞）等であつた。常磐津連中には、小文字太夫、都太夫、國太夫、岸澤古式部、式佐、文佐等があつた。

嘗て慶應三年に綴られて其のまゝになつてゐたのに增訂を施し、此時始めて上場したものである。作者は此年の一月二十二日に歿したのであつて、まさしく作に於ける絕筆と言つてよい。好評を得て、此後も屢々今の羽左衞門、六代目菊五郎等によつて再演せられてゐる。挿繪にしたのは稿下當時の繪本役割である。

第二番目
大切
常磐津連中

奴凧廓春風

大磯舞鶴屋の場
八町堤奴凧の場
兩國鎌倉屋の場
常磐津連中

〔役名〕——奴凧、獵人碓氷の仁太郎、十郎祐成、鎌倉屋助藏、祐成の家來十内、舞鶴屋の若い者三吉、鹿島の若い者一、二、三、獵人峠の權兵衞、鎌倉屋の若い者四人。大磯の虎、化粧坂の少將、待合富士屋のおやま、舞鶴屋新造千鳥、同胡蝶、舞鶴屋の息子小傳三等。〕

（舞鶴屋格子先の場）——本舞臺四間朱塗りの大格子、後ろ青簾、上手一間の入口、舞鶴屋といふ紺の暖簾、下手千本格子の張物。打返し淨瑠璃臺、總て大磯廓舞鶴屋見世先の體。爰に千鳥、胡蝶新造のこしらへ、駒下駄羽子板を持ち、近江屋のお藤、八幡屋のお雪、柿横縞の前垂、茶屋女中のこしらへ、駒下駄にて羽子板を持ち、四人追羽根をして居る、此見得通り神樂鞠唄にて幕明く。

千鳥　これ胡蝶さん、さつきから追羽根をお前と二人で突いた所へ、近江屋のお藤どん八幡屋のおゆきどん。

胡蝶　二人助けが入つたので、負けまいと思ふから、大層わたしや草臥れたわいなあ。
お藤　嘸お草臥れでござりませう、ちつとお休みなされませ。
お雪　それにお前さん方の羽子板は、大板でござりますから、一倍重うござりませう。
千鳥　ほんに誰も頼まぬのに、さつきから突通しで。
胡蝶　わたしや此手が抜けるやうでござんす。
お藤　ちよつとそれをお見せなさいまし。（ト兩人羽子板を取つて）こりや菊五郎に家橘でござりますか、大層よい押繪でござりますね。
お雪　觀音樣の市でお買ひなさいましたか。
千鳥　それは此間、吉備の宮の大藤内さんに貰ひましたが、
胡蝶　人形町の勝文で拵へたと言はしやんした。
お雪　道理でよいと思ひました、當時押繪の羽子板は勝文に限ります。
お藤　此音羽屋は工藤さんに、よく似て居るぢやあござりませんか。
お雪　又橘屋は祐成さんに、生寫しでござりますね。
千鳥　おゝ祐成さんといへば、久しくおいでなさんせぬので、此間から虎さんが待ち焦れて居なさいま

す。

胡蝶　工藤さんもこつちへは、さつぱりお出でなさんせぬが、何處か外へお出でなさんすか。

お藤　いえ〳〵外へはお出でなさんせぬが、五月下旬富士の裾野で、狩くらとやらがござんすので、

お雪　狩場の御普請の御用がござんすので、それでお出でなさんせぬわいな。

千鳥　いえ〳〵さうではありますまい、大方こちらへ内々で、

胡蝶　大藤内さんが取巻きで、外へ行かしやんすに違ひない。

お藤　それはお案じなさいますな、此近江屋と八幡屋がお出入りでございますから、

お雪　お側に居らねば知らぬこと、

お藤　どつこいそつこい餘所外へ、

お雪　決して送りは、

兩人　しませぬわいなあ。

ト是れをキツカケに下手千本格子の張物を打返し、爰に常磐津連中居並び、直に淨瑠璃になり。

〽遊君の名に大磯の品定め、街道一と名の高き富士の山形二つ星、虎少將は色香へぬ松の位の太夫職。

ト此内四人は下手床几へ掛る、淨瑠璃の切すがゞき通り神樂になり、暖簾口より虎、兵庫髷打掛、駒下駄のこしらへ、少將島田髷打掛、駒下駄のこしらへにて出來り。

〽千歳を祝ふ家毎の、門の飾りに去年今年、若やぐ空の春氣色、けふは霞のひき初めに、心浮き立つ遊び女が、誰に靡くか見返りの、柳の街花の里。

ト此内兩人よろしく振あつて。

虎　年毎に只一夜にて日の影も、昨日に替る今朝の春、常は憎みし烏さへ鳴く音嬉しき朝ぼらけ。

少將　霞棚引く東雲に、魁競ふ彈初めの、三味線の音も若やぎて、重ねし年も忘れ草。

虎　笠紐目立つ鳥追が、うたふ唱歌の寶船、

少將　七福神に由縁ある、笑ふ夷の大黒舞、

虎　見る物事が新らしく、

少將　勤めする身も正月ほど、

虎　嬉しい事は、

兩人　ござんせぬわいなあ。（トよろしく思入、四人前へ出で）

千鳥　おいらん、是れへお掛け、

胡蝶　なさんせいなあ。（ト虎少將上手の床几へ掛ける、）
お藤　これは〳〵おいらん方には、大層お早うござりますが、
お雪　お約束でもございまして、揚屋へお出でなさいますか。
虎　今日は和田さんのお催しで、大小名の若殿達が、揚屋へお出でなさるので、
少將　虎さんも又わたしも、お招ぎゆゑに常よりか、今日は早う支度して、
虎　少將さんと連立つて、揚屋へ行くので、
兩人　ござんすわいなあ。
お藤　其お噂は昨日から承はつて居りましたが、
お雪　それでは大方祐成樣も、時致樣も御一緒に、
虎　いえ〳〵祐成さんも時致さんも、祐信樣の御養子なれど、
少將　いはゞ日蔭のお身の上に、大方お出ではござんすまい。
千鳥　それではお出でなさんしても、
胡蝶　お樂しみがござんせぬなあ。
虎　定めて一臈別當の工藤さんがござんせうから、一座をするもいやなれど、

少將　和田さんからのお招ぎに、いやでも行かねばならぬわいなあ。
虎　それに附けてもお上さんに、
少將　お目に掛つて行きたいけれど、
千鳥　今朝早く惠方參りに、妙見樣へござんしたが、
胡蝶　もうお歸りでござんせう。（ト向うを見て、）おゝ、噂をすれば影とやら。
お藤　お雛さんが向うから、
お雪　歸つてお出でなさんすわいなあ。
ト鳥追通り神樂になり、花道よりお雛、島田髷黑の羽織、遊女屋の女房のこしらへ、駒下駄、手に頭巾を持ち出て來り、跡より若い者朝吉、紺半纏腹掛股引草履にて、繭玉を擔ぎ出來り花道へ留り。
〽廓に老舖の大籬、二とは下らぬ一丁目、角に羽を伸す舞鶴屋、然も今年は明きの方、惠方參りの家土產に、買ふ繭玉に當り的、緣起もよしや吉原へ、心いそ〳〵歸り來る。
ト此内お雛朝吉を相手に振あつて舞臺へ來る。
千鳥　お雛さん、お歸り、
四人　なさいましたか。

お雛　小傳三を連れて行つたので、大きに遲くなりました。

お藤　どこへお參りにお出でなさんした。

お雛　今年は巳午が惠方ゆゑ、妙見樣から天神樣、歸りがけに觀音樣へ、お參り申して來ましたわいな。

千鳥　今朝御一緒にお出でなさつた、

胡蝶　坊ちやんはどうなさいました。

朝吉　大きな奴凧をお求めになり、直に土手で上げるのだとおつしやつて、例のわやくをおつしやるので、お上さんもお困りで三吉とお跡に殘り、お雛さんのお供をして、お先きへ歸つて參りました。

お藤　凧をお上げなさるには、廓内では所詮いけませぬ、

お雪　土手は四邊に木がないから、引掛らないでようございます。

朝吉　もしおいらん、祐成さまは、まだお出でなさりませぬか。

虎　いゝえ、お出でなさんせぬわいなあ。

朝吉　さつき觀音樣でお目に掛りましたが、是れから大磯へ行くとおつしやつたが、何處へお出でなさいましたか。

虎　又朝どんの人ぢらしな、わたしを擔ぐのでござんせう。

朝吉　何でおいらんを擔ぎますものか。
虎　そんならほんまでござんすか。（ト朝吉向うを見て、）
朝吉　噓を言はぬ其證據は、あれ〳〵向うへお出でなさいます。（ト皆々向うを見て、）
少將　ほんに、祐成さんが、
四人　ござんすわいなあ。
〽待つ間程なく向うより。
ト二挺鼓の合方になり、花道より祐成卷羽織、大小草履のこしらへ、富士編笠を冠り出來り、跡より十内繻子奴一本ざしのこしらへにて出來り花道へ留り。
〽戀に人目を忍ぶ身は、富士編笠に卷羽織、大小さすが祐成は、姿もよしや丹前に、翳す扇の鼻平太、お供はいつも十内が、腰巾着の優奴、ふつて振出す六法に、格子先へぞ來りける。
ト花道で兩人振よろしくあつて舞臺へ來り。
虎　思ひがけない祐成さん、
少將　ようお出で、
四人　なさんしたな。

朝吉　何と嘘ではございますまい。

虎　堪忍して下さんせいな。それはさうと祐成さん、久しくお出でなさんせぬが、何と思つて今日爰へ。

祐成　久し振でわしが來たのは、今日和田殿の催しで九十三騎の一族が、打ち寄つての大酒宴、如何なる趣向のある事か、餘所ながら見聞せんと、人目を包む目堰笠、忍んで廓へ參つたのぢや。

十内　九十三騎の其内には、我武者の衆もござるゆゑ、御身の警固に十内がお供いたして參りました。

虎　大勢おいでの事なれば、其御酒宴は夜に入りませう、お話し申す事もあれば、ゆつくりと暮合まで、わたしの部屋へござんせいなあ。

祐成　實は酒宴を假託て、母の前を繕らうて今日廓へ參つたのは、そなたに逢ひたく思ふゆゑ。

虎　そりやあ嬉しうござんすわいな。（ト嬉しき思入、少將こなしあつて、）

少將　もし祐さん、なぜ時さんを御一緒に、連れて來ては下さんせぬ。（と少將祐成を捉へ、）色戀知らぬお方なら、仕方がないが祐さんが、なぜ連れて來て下さんせぬ、情知らずでござんすぞえ。

祐成　さあ、おぬしの心も知つて居るゆゑ、連れて來ようと思うたれど、いやといふので仕方がない。

少將　そんならいやといはしやんしたか。そりや無情ぞえ時致さん、お前は忘れさしやんしたか、わた

しや忘れぬ卯月の末。
〽鰹の名にし烏帽子親、北條樣のお屋敷で、お好み受けて今樣を、わたしが舞ひし扇の手、
〽惚れて思ひの深見草、花の露吸ふ胡蝶より、先きへ心が狂ひ初め、指す手引く手もうはの空、星影更けて一つ間に、思はぬ夢を結びしも、いつしか明ける短夜に、二世を掛けたか〱と、落返り鳴く時鳥。（ト少將よろしく振あつて、）
斯ういふ中でござんすに、なぜ連れて來て下さんせぬ。
祐成　幾度となく勸めたが、今日は馬の乘初めにて、今鎌倉に名の高い草苅先生の馬場へ行つた。
少將　常から馬のお話しを、來る度每になさんしたが、そんなにお好きでござんすか。
十內　お好きといふもお上手ゆゑ、鞍のない裸馬で、馳けるを追つてお歩きなさる。
お雛　其草苅先生の隣りは、角力の年寄株高砂さんでござんすな。
十內　角力も今日は稽古初めで、關取衆が取るといつて、大層な見物だ。
朝吉　角力と申せば其古へ、赤澤山に大名衆の、角力があつたとやら。
祐成　おゝ伊豆相模の若殿儕が、佐殿を慰めんと、力競べの角力があつた。
虎　話しに聞いて居りましたが、あなたの父上祐康樣が、お手柄をなされしとか。

少將　祐成樣も其時は、御一緒でござりましたか。
祐成　いや〳〵それは過ぎし事にて、五つか三つの事であつた。
朝吉　それでは委しいお話しも。
祐成　成長の後鬼王より、委しく聞きしが涙の種。
虎　そのお話しを祐成さん、
少將　どうぞ聞かして、
皆々　下さんせいな。
〽いふに是非なく祐成が。
ト祐成刀を拔いて十內に渡し、床几に掛けしまゝ扇を持ち。
祐成　思ひ出せば安元二年、神無月の事なりしが、
〽赤澤山の狩くらに、若殿儕が晴角力、股野は勝れし力強、廿一番勝に乘り廣言吐きしを憎しと、〽父祐康が飛入つて、股野を投げし河津懸け、天晴力士と褒められて、歸る其日の出立は、秋野のすつたる狩衣に、〽栴檀藤の弓携へ、むら月毛の駒に騎り、〽時雨を運ぶ木枯しに、竹笠さつと吹きそらし、しんづ〳〵と步ませたり、〽柏が峠の南尾崎。

小闇き椎の木の間より、主は誰とも白羽の矢。

〽行縢の着際より、前へすつぱと射通され、〽流石の父上堪りえず、馬よりどうとをちこちの鐘も哀れや露霜と、消えし昔の物語。（ト祐成物語模様の振あつて、）

十内　〽聞く十内は思はずも、（ト十内悔しき思入にて、）

敵は正しく工藤祐經。

祐成　あこれ。（ト押へる、）

お雛　めつたな事を言はしやんすな。

〽言はぬは言ふに十寸鏡、曇らぬ御代に餘所事へ、心移さず忠孝を、磨かばいつか光り出で譽れを上げる天下一。

ト是れへ朝吉からみ、十内を留める振あつて、虎前へ出で。

虎　果敢ない御最期なされたる、亡き父上の御無念を、晴さにやならぬ御身にて、其大事をば打ち忘れ。

ト虎祐成を捉へ口說きになる。

〽此頃聞けば喜瀨川の龜鶴さんに馴染めて、沖より深い仲となり、人の噂に夕潮の、〽さし

つさゝつさゝ事に、現他愛も波寄する、鴫立澤の身は秋に、〽磯邊に生ふる筆草に、書くとも盡きぬ恨みごと、〽つれない心ぢやないかいな。（ト虎祐成を捉へ口説の振あつて、）

朝吉　いえ〱それは祐成樣が、深いお心あつての事、何でおいらんとお見替へなされませう。

虎　それぢやといつて皆人が、

朝吉　いえ、假令誰が何と申さうと、此舞鶴屋の朝吉が、きつとお請合ひ申しますから、口舌は留つて下さりませ。（ト朝吉虎を留める、十内前へ出で、）

十内　こりや朝吉どのゝ言ふ通り、是れには譯のある事ゆゑ。（ト是れより早きのりにて、）

〽悋氣は女子の愼みにて、募れば蛇身の三つ鱗、野暮な庵に木瓜は、まだお心がいたら貝、元より堅い石疊、二つ瓶子の一對に、放れぬ中の四つ目結ひ、角立つ心の恨みをば、さらりと思ひ桐の臺、物事丸く三つ引に、開き扇の末かけて、緣を結ぶ繫ぎ馬、大一大萬大吉の御鬮もよけりやあ仲もよい、よい〱よやしよと狐拳、拍子に掛つてヤトヽントン。

ト拍子あつて。

〽大黑舞の昔振、わけもなや。

ト十内のりの早き振あつて拍子たゝ踏む事あつて納まる。

祐成　今十内が意見にて、虎が心も直りし樣子。
お雛　まだ大寄に間もあれば、
少將　久し振りにて虎さん、
十内　部屋にてちよと仲直り、
祐成　さういふ事なら詞に附いて、
虎　早う二階へ、
皆々　ござんせいなあ。

〽さあ〳〵早く〳〵とせり立てられ、心嬉しくいそ〳〵と、暖簾の内へ、

ト三重へ二挺鼓を冠せ、祐成先きに、虎少將十内朝吉お雛女形四人附いて暖簾口へ這入る、知らせに附き松飾りを上手へ引いて取り、正面大格子居所替りになる。

（八町堤の場）――本舞臺向う低き土手の緣、上の方柳の立木、下の方梅の立木、後土手下の屋根遠く廓の二階を見たる遠見、總て八町堤の體よろしく道具留る。と直に淨瑠璃になり。

〽大空の凧のうなりに有頂天、遊び盛りの小傳三が、絲卷持つてかけ來るを、供に連れたる

小奴が、まあ〳〵待つてと引留めて。

ト通り神樂ばた〳〵にて、下手より小傳三お芥子の若衆鬘、派出な派手着流し、駒下駄遊女屋の息子のこしらへ、絲卷を持ち出で來る。跡より小奴股引草履尻端折り出入の者のこしらへにて追駈けて出來り。

小奴　まあ〳〵坊ちやん、お待ちなせえ。

小傳　何でおれを留めるのだ。

小奴　柳の枝さへ動かない、こんな風では上らないから、まあ〳〵よしになされませ。

小傳　外の凧なら知らないが、奴凧は風がなくとも、上らない事はない。

小奴　小奴ならば上りませうが、六枚張りの大奴、どうして上りますものか。まあ、あすこの梅の木へ立てかけて置きませう。（ト凧を上手の木へ立てかける事よろしく）

小傳　上らうが上るまいが、おれが買つた凧、何でも爰で上げにやあならねえ。

小奴　所をどつこい、おつ留めた。

小傳　えゝ面倒な、放せといふに。

小奴　いや留めた〳〵、おつ留めた。

〽一番留つてくんさるなら、有難茄子の辛子漬、つんと涙の出る程に、きいて貰はにやならぬぞえ、〽えゝ面倒な小奴め、河岸の女郎を見るやうに、惡く留め立てするからは、親代々の癇癪持、横ぞつぽうを春風に、凧を上げねば腹が癒ぬ、〽放せ留めたと爭ふ折、一吹きさつと落し來る、待ち設けたる天津風。

ト此内兩人草摺引模樣の振あつて、風の音になり。

小傳　それ風が出た、少しも早く。

小奴　おゝ、合點だ。

〽おゝ合點と土手下より、形より大きな奴凧、絲目を持つて立ち掛れば、袖もたぶ／＼風受けて。

ト此内うしろより奴凧を持ち來り、風の音になり、奴凧よき所まで上る。

〽それ上つたぞ駈出せと、絲巻持つて小傳三と、共に奴も駈けて行く。

ト小傳三絲巻を持ち小奴附いて逸散に花道へ這入る。是れにて奴凧よき所まで上る、後の道具居所替りになり。

（奴凧の場）＝本舞臺大門口より遊女屋の屋根を見せ、向う青空に種々凧の書割よろしく道具納まろ。

〽吹上げし風もそよ〳〵ふは〳〵と、我が故郷の赤坂は、遠く霞みて見えわかず、四つ谷鳶に言傳を、夕日まばゆき春の空、〽幾羽と上げし烏凧、塒へ急ぐ人力の車も續く五丁町、〽おや〳〵爰は吉原か、此大門の屋根越せば、色の廓の仲の町、〽あこれ、どうする〳〵、もつとたまを出さないか、えゝ不器用な戀知らず。

ト此内下手へ行く、又上手へふは〳〵と行き、下手を見て。

〽何れを見ても賑かに、二挺鼓の絕間なく、一寸一杯丼で、野見の宿禰とやりたいが、酒と色との取組に、角力甚九で遣つてくりよ。

甚九 〽客も手取りに女郎衆も手取り、四つに渡つて腹櫓、ありや〳〵〳〵、〽浮れてのぞく裏茶屋に、戀の紛れの癡話喧嘩、突倒されて仰向けに、〽是れは大變々々と、夢中になつてよろ〳〵〳〵、〽これ〳〵今が肝腎の、所をそんなに手繰るとは、〽そりや無情ぞえ息子どの、少しはわしが心にも、なつてくれたがよいわいな。（ト此内行きつ戻りつよろしくあつて、）

〽あれおいらんが湯上りで、浴衣のまゝの身仕舞に、ちらりと見えし白い脛、成程粂の仙人

が落ちたも無理では。（ト覗き込む思入にて、とんと舞臺へ落ち、）

〽ないわいな。（と節にて拍子を踏み上へあがる、）

〽えゝ今の間に膝立て直し、あつたら月を叢雲が、隠せし如く本意なさに、暫しは口もあんぐりと、殘り惜しげに奴めが、伸びつ縮みつ身をあせり、覗けば引かれ手繰られて。

と此内心の殘ろ振あつて、下手へ手繰られて行き。

〽くるり〳〵と。（ト爰にて二つ横になり、）

〽めんを喰ひ。（ト三つ廻りて留り、）

〽あゝ目がまふ〳〵、どうしてくれうと、袖もたぶ〳〵のめついて、どつこい止つた鬼瓦。

トちよつと振あつて留ろ、本釣鐘を打込み。

〽はや入相のたそがれに、四方に響く鐘の聲。（ト上手へ行き風の音になり、）

〽又もや風の落し來て、手繰り驅出す絲につれ、飛ぶが如くに。

ト風の音、誂への鳴物になり、奴凧逸散に下手へ這入る、直に屋臺囃子になり、霞幕にて淨瑠璃臺を消し、知せに附き、正面の鏡を二つ折にして上へ引きあげ、後より屋體を押出す。

（兩國鎌倉屋の場）――本舞臺三間の間木地の大格子、下の方一間入口、鎌倉屋といふ紺暖簾、柱に山鯨といふ大きな掛行燈、軒下に鹿、猿、兎の口へ庖刀を銜へさせしを並べ、上手鎌倉屋樣若者中と記せしびらを張りし紋盡しの積樽、此左右に笹龍膽の紋附、鎌倉屋といふ高張提灯を建てしをよき所まで押出し、長床几三脚並べ、總て兩國鎌倉屋の體よろしく道具納まる。と屋臺囃子にて暖簾口より、紺の腹掛、股引草履の若い者四人、割竹二本と太鼓を持ち出來り。

○ 今日は方々の初荷が出るので、朝つから屋臺囃子で、大層表が賑かだ。

△ あの囃子にも聖天だの、鎌倉だのといふ名があつて、なか〳〵むづかしいものださうだ。

□ こう其太鼓と割竹は、夜番に遣ふ道具だが、晝も叩いて廻るのか。

◎ 昨夜は家の番だつたが、今日は隣りの番だから、送らうと思つて持つて來たのだ。

○ こつちの家の親方は、元鎌倉から出た人で、天窓勝な事が好きゆゑ、頼朝といふ仇名を取り、仲間内での大將分。

△ それゆゑ今度富士の見える二階が出來た所から、若い衆中から樽を積んだが、印は曾我の紋盡し鎌倉屋といふ家名を當込み、趣向をしたに違ひない。

□ 趣向といへば軒下に、鹿や兎が吊してあるのは、こいつも富士の牧狩の、趣向といつてもいゝや

うだが、なくてならねえ猪が、去年の暮からさつぱり取れず、

◎外の獸は澤山あるが、猪のないのが殘念だ。四つ足ばかりか人間にも、年中人が化すので狐といはれる此勘次。

○金太は痴氣で睾丸が、大きいゆゑに名を呼ばず、狸々といふ金太。

△さういふ手前も友達が轉んだら喰はうといふ、油斷のならねえ狼だ。

□おいらばかりは手前達に、獸仲間へ入れられる何も體に疵がねえ。

◎所が手前はむじ／＼と、あんまり口は利かねえが、中々喰へねえ古貉。

○揃ひも揃ふ獸仲間、

△とんだ俄茶番のやうだが、

□いよ／＼富士の牧狩りも、

◎趣向の内へ入れて貰はう。

○何にしろ賑かで、

△こんな目出度い、

四人　春はねえ。（ト是れにて霞幕を切つて落し、常磐津連中居並び淨瑠璃になる。）

〽打ち囃す葛西囃子も鎌倉屋、見世を目指して積み送る、初荷の聲の勇ましく。

ト合方屋臺囃子にて、花道より初荷の若者四人、何れも紺の印半纏、紺の腹掛股引草履、揃ひの手拭にて鉢卷をなし出來り、跡より大八車へ蝶千鳥といふ酒樽を積み、是れを車力二人にて引き四人は綱を引き出來り、直に舞臺へ來る、此時奥より鎌倉屋の亭主、長き綿入羽織、主人のこしらへにて出來り。

亭主　是れは第六天の鹿島の若い衆、先づ明けましてお目出度うございます。

初一　年々吉例にまかせまして、初荷をお送り申しますが、

初二　今年はお家が惠方ゆゑ、第一番に參りました。

亭主　それは有難うございまする。

初三　是れは今年、手前店で賣出しました蝶千鳥、

初四　一本生で呑口がよく、評判物でございます。

亭主　曾我に緣ある蝶千鳥、初春の賣出しには、よい銘でございまする。

○　こいつも富士の牧狩に、

△　なくてならねえ曾我兄弟、

□　段々趣向が殖えて來て、
◎　面白くなつて來た。
亭主　何しろ初荷の祝儀に、目出度くしめて下さいまし。
初一　只今お祝ひ申します。
皆々　よい〳〵、よい〳〵、よい〳〵よい。
〽酒の銘酒の數ある中に、わけて名高き正宗は、切味よりも呑口の、よいは勝れし別嬪の娘盛り嫁盛り、三々九度の菊杯に、三國一や世界一、見世繁昌の夷鯛、芝居はいつも當ります。
ト○△でかゝり□◎一緒になり、振あつて納る。鳥追通り神樂になり、お山、待合茶屋の娘のこしらへ、跡より妹娘出來り。
お山　是れは鹿島の若い衆さん、皆お揃ひでござりますね。
初一　おや富士屋のお山さん、大層早く朝つぱらから何所へお出でなさいました。
お山　今日は柳島の妙見樣から、天神樣へお參り申して今歸りでござります。
亭主　富士屋のお山さんとは、春早々見世先きへ一富士で緣起がいゝ。

○　それにこつちの牧狩には、大關筋の富士の山。
△　まあ兎も角も此床几へお掛けなされて下さいまし。
お山　いえ〳〵さうしては居られませぬ、晝から用事がござりますから、皆さん御免なさいまし。
ト行き掛けるを、皆々にて留め。
初二　どつこいたゞは通されない、さつきから皆さんが、富士の牧狩りの趣向だから、
初三　狩場の切手があればよし、なければ爰は通されない。
お山　その狩場の切手とやら、そんなものはありませんよ。
妹娘　慈善會の切符なら、爰に二枚持つて居ります。
初一　其切符では通されない、お前の得手の踊をば、一寸踊つておくんなせえ。
お山　往來中で見ともない、飴屋ではあるまいし。
亭主　見世の縁起でござりますから、ちよつぴり踊つて下さいまし。
お山　それではどうでも踊るのかいな。
お二　長い事は時間の妨け、
初一　さあ〳〵早く、

皆々　遣つて下さい。（トお山是非なく前へ出て端唄模樣になり、）
〽見渡せば富士を向うに兩國の、橋の景色は東京の、名所の內で一の橋、外に中洲へ流れ寄る、水上淸き隅田川、月影さえる三味線の、音色やさしき柳橋。
　トお山よろしく振あつて納る。
皆々　よう〳〵。（ト褒める、此時揚幕にて、）
仁太　やつしつし〳〵。
亭主　あの聲は何だ知らぬ。
○　何か初荷が、
四人　來ると見える。
　ト獅子の鳴物になり、花道より仁太郎手綱逹附草鞋ほくそ頭巾獵人のこしらへにて、鐵砲を擔ぎ話ながら出て來る、跡より權兵衞同じく獵人の裝、猪の縫包みを着たるを橫長の籠に入れ繩で結へ、是れを背負ひ出で來り。
仁太　最う少しだ急げ〳〵。
權兵　合點だ〳〵。（ト兩人舞臺へ來る、）

初一 こりや獸の、
四人 初荷だわえ。
亭主 や、誰かと思つたら碓氷峠の仁太郎どんか。
仁太 去年の暮からさつぱり取れねえ、猪を初荷に持つて來ました。
亭主 それはよく持つて來てくれた、お馴染のお得意から毎日催促受けて居たのだ。
仁太 そりやあいゝ所へ持つて來ました、さあ權兵衞そこへ下してくれ。
權兵 碓氷峠から背負つて來て、あゝ重かつた〳〵。（ト權兵衞よき所へ猪の籠をおろす）
○ 猪のねえのが殘念だと、
△ いつた所へ猪が來て、
□ 是れで牧狩りの道具が揃つた。
◎ 少しも早く見世へ飾らう。（ト四人立掛るを權兵衞留めて）
權兵 あゝ危ねえ〳〵、めつたに側へ寄らつしやるな。
四人 なに、危ねえとは、
權兵 此猪は生きて居ります。

亭主　なに、此猪が生きて居るとは、

仁太　此猪はわしのやうに滅法界な朝寐坊で、朝早く山へ行つたら、枯薄の其中に鼾をかいて寐て居たから、足を細引で縛りあげ、生捕りにしましたのだ。

亭主　そりやあ豪氣な手柄だつたが、生きて居てはけんのんだ、こなたに殺して貰はにやあいけねえ。

初一　鹿や豚はよく見るが、生きてる猪は初めてだ。

初三　まだ曲馬でも見せねえから、話しの種に見て行かう。

お山　五段目の外本物の、猪を見るのは今日初めて。

妹娘　喰附れるといけないから、姉さん早く行きませう。

權兵　なに、此猪は氣がいゝから、洋犬より怖くはありませぬ。

仁太　今出してお目に掛けませう。

亭主　何だか氣味が惡い話しだ。

〽籠を詰へし荒繩をとく〳〵、猪を引き出せば、欠をなして伸をなし。

ト權兵衞籠の繩を解き、仁太郎猪を引出す、猪欠をする。

仁太　嘸籠の中で窮屈だつたらう、足を伸ばして樂をしろ。

〽猪は廻らぬ首を振り、四邊見廻し流し目に、色を含みて媚けば。

ト猪お山に見惚れしこなし。

權兵　これ、何を手前はきよろ〳〵見るのだ。（ト仁太郎思入あつて、）

仁太　猪、いやらしい目をするのは、あの姉さんに惚れたのか。（ト猪うなづき、恥かしいといふ思入、）さうして手前が惚れたのは、小さい方の姉さんか、（ト猪頭をふる、）それぢやあ大きい方の姉さんか。

ト猪うなづく。

權兵　こりやあ猪が尤もだ、わしも姉さんには惚れました。

お山　えゝも、氣味の惡い。

初一　こりやお山さん、嬉しからう。

初二　今年やお前の當り年だ。

お山　そんなに弄つておくれでない。

〽猪がのそ〳〵這出せば、仁太郎しつかと抱き留めて。

ト猪お山の方へ行かうとするを、仁太郎抱き留めて。

仁太　惚れたは無理もないけれど。

〽及ばぬ戀の掛橋は、渡るに難き谷川や、緣も碓氷の山育ち、〽我が身を返り見るならば、毛並優しき女鹿をば、くどかば顏に散る紅葉、恥かし小夜の草枕、〽木々の雫に濡るゝのが猪相應と仁太郎が、異見交りに止むれば、〽叶はぬ戀に腹を立て」

ト此内仁太郎猪を相手に、可笑味の振、是れへ權兵衞からみ、トヾ猪腹を立てし思入にて仁太郎を突倒す、權兵衞掛るを牙に掛けて投げる。

亭主　こりやあ大變、猪が怒つた。（ト早笛になり猪は荒れ廻る、お山妹娘は上手へ逃げて這入る。）それ逃すな〳〵。

ト亭主火の番の太鼓を叩く、若い者割竹を叩いて追廻す、皆々ごつちやの立廻り、仁太郎鎌倉屋の見世にある狼の銜へし庖刀を持つて追廻し、トヾ猪を投げのけ、上へ乘り、仁田の見得よろしく、

頭取出で。

頭取　先づ今日は是れ限り。

ト目出度く打出し

奴凧（終り）

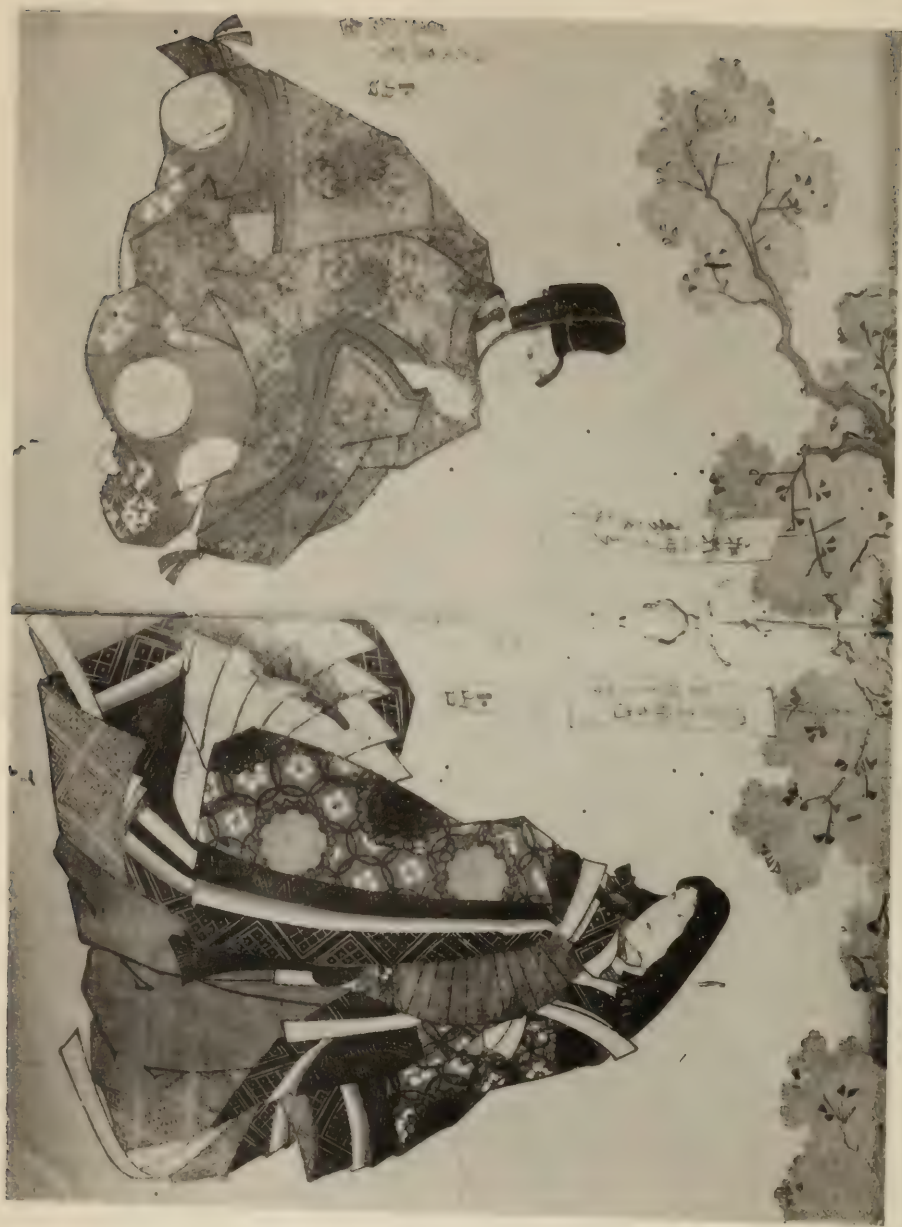
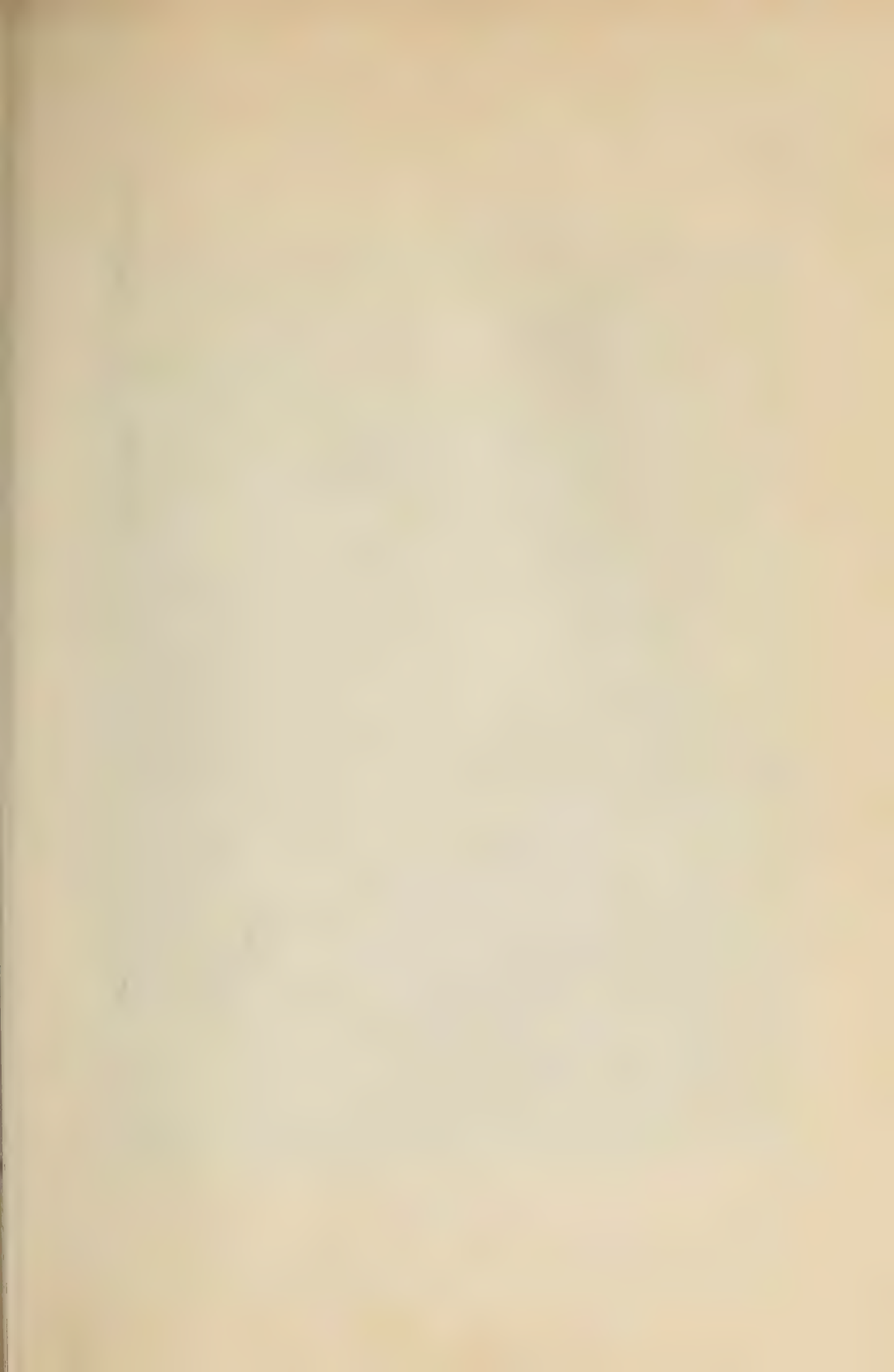
上巳に飾る
お誂らへを
やうやく出來
おそれ入り候

時翫雛淺草八景

解説

「時翫雛淺草八景」は弘化四年五月、河原崎座に上演された。作者三十二歳の作であつて、最も初期に屬する淨瑠璃である。

書下しの時の役割は四世中村歌右衞門（彫物師左甚五郎、和歌三神人丸の精檜の熊武成の神靈）、市川九藏（和歌三神住吉の精、檜の熊須成の神靈）、松本錦升（檜の熊友成の神靈）、中村芝雀（雛人形隨身の精の一）、中村福助（同隨身の精の二）、河原崎長十郞（草苅童の精）、尾上梅幸（おやま人形の精）、市川新車（和歌三神玉津島の精、蛩宮戸川のおふみ）等であつた。常磐津連中は岸澤式佐、常磐津文字太夫等。長唄囃子連中は望月太左衞門、岡安喜代八一派。振附は藤間大助であつた。

左甚五郎は補作であるが、淺草觀音の開帳を當て込んだ、三社樣の緣起と和歌三神の分は新作で評判よかつたといふ。挿繪にしたのは豐國筆の錦繪で、九藏の住吉、新車の玉津しまの精である。

常磐津連中
長唄囃子連中

時翫雛淺草八景（和歌三神）

〔役名〕━彫物師左甚五郎、和歌三神人丸の精、檜の熊武成の神靈、和歌三神住吉の精、檜の熊濱成の神靈、同友成の神靈、雛人形隨身の精二人、同草苅童の精、お山人形の精、和歌三神玉津島の精、蛩宮戸川のお文、花四天六人。〕

（幕外の場）━前狂言の幕切れに一面の道具幕を引張ると大拍子になり、花道より捕手六人、花四天襷鉢巻にて出で、舞臺へ來り、

一　上林刑部が働きにて、義廣が妹井筒姫の在所、
二　慥にそれと知れたるゆゑ、首にして持ち歸りしを、よく〱見れば、
三　甚五郎が細工の、お山人形の身代り、
四　此上は手柄は仕勝ち、裏口より細工場へ踏ん込み、

五　搦め取つて、御主人大淵源藏樣へ差上げ、

六　褒美の上に立身出世、必ず共にぬかりめさるな。

皆々　合點だ。

ト大拍子になり、皆々幕の引附けへはひろ。鳴物打ち上げ知らせにて道具幕を切つて落す。

（甚五郎細工場の場）――本舞臺正面板羽目、日覆より注進を張りたる通し欄間、上手前幕の二階前建仁寺垣を打返し、長唄囃子連中居並び、下手淨瑠璃臺板羽目の張物、眞中に和歌三神と記せし箱、少し下手に隨身と記せし箱を並べ、總て甚五郎細工場の體道具納まると、直に下手より以前の六人出で來り、

一　最前より井筒姫が詮議の爲め、

二　甚五郎が細工場へ入込んで見るところ、

三　何か怪しい此の雛箱、

六人　いで、われ〳〵が。

ト皆々隨身の箱へ掛る。ドロ〳〵になり箱の蓋開き、内より隨身の一、隨身の二、誂への隨身のこし

らへ、弓矢を持ちて住ふ、ドロ〳〵にて六人目くろめきどうとなる、ドロ〳〵打ち上げる。

〽絲竹の伏見に似たる桃園や、雲井をこゝに壇雛の、階下に立つ弓取の、姿優しき花靭。

ト兩人よろしく出で振りあつて、隨身の二振りになる。

〽抑弓と矢は、唐土の黄帝の世に始まりて、日の本にては往古の綏靖帝の造らしめ、天の鹿兒弓羽子の矢を、是れぞ初めて武士の惡魔を除くためしかや、其ますら男も和ぎし。

ト隨身の二よろしくあつて、隨身の一を招き二人振りになる。

〽實にや古今の端書に、花に鳴く鳥水に住む、かはい蛙も君と我れ、二人が中のとこぶしに三人持ちし子安貝、惣領人形羽織着て、妹人形搔取りに寳盡しを附紐も、三番息子は腹掛を掛けしや袖の留木さへ、移りにけりな花衣。

ト兩人よろしくあつて、隨身の一扇の振りになり、

〽廻りくる〳〵花車、ながめぞ盡きぬ三千世竹、桃花の節會とり〴〵に。

ト隨身の一よろしくあつて、隨身の二を捉へ、これより兩人にて扇の振り、

〽色香爭ふ鷄合、白きは光る源氏貝、須磨の御祓に明石潟、月毛の駒や競馬。

トこれより拍子模樣兩人あつて、

〽あら面白の花の袖、かへす袂も忽ちに、いつかは元の箱の內、納まる御代の雛遊び。

ト此うち以前の六人心附き、掛るとドロ〳〵散らしにて、隨身の一、二、以前の箱の內へはひり、箱の蓋下りる、六人心附いて、

一　どうでも怪しい雛人形。

五人　いづれも必ず、ぬかるまいぞ。

トドロ〳〵にて、六人眞中の童人形の箱へかゝる、箱の蓋仕掛にて左右へ開き、中に草刈童、田舍染め、衣裳切禿鬘、草苅籠を背負ひ、葉櫻の杖をかつぎ、誂へ牛の綱を持ち、裸人形の見得、よき所まで押出す。皆々目くろめきどうとなる。ドロ〳〵打ち上げ、長唄になり、草苅童所作よろしくあつて、散らしになり、六人草苅童に掛る。ドロ〳〵にて立廻り、以前の籠を奪ひ合ひ、この籠仕掛にて廚子入り尊像と替り、仕掛けにて草苅童を消し、尊像は指金にて飛び去り、このキツカケにて囃子連中を段幕にて隱し、ドロ〳〵打上げる、皆々思入あつて、

一　やゝゝゝ、今までありし雛人形。

二　忽ち廚子の尊像と化し、

三　光りを放ちかしこの流れへ、

四　此の川下は宮戸川、
五　堤傳ひに手分けをなし、
六　手柄は仕勝ち、ぬかるまいぞ。
六人　合點だ。

ト大拍子にて、皆々下手へはひる。鳴物打上げ、知らせに附き、下手の板羽目打返す。常磐津連中居並び、前彈きにかゝる。

〽それ呉道子金岡が筆はものかは小刀に、無量の工は往古より。右に出づべき者もなき左りが作の不思議にや、精魂入りし和歌の神。

ト誂への樂に、薄くドロ〳〵を冠せ、『和歌三神』と記せし箱をよき所まで押出し、知らせに附き、箱左右へ割れると、内に玉津島眞中に立身、上の方に人丸、下の方に住吉、畫面の見得、鳴物打上げ、直に淨瑠璃になる。

〽八雲立つ出雲に祀る言の葉の、三十一文字に天地の氣さへ動かし鬼神の、心もいつか和らぐる、和歌の浦邊の片男波、寄せては返りかへりては通ふ千鳥の諸翅、ぱつと立つ名も面白や。

〽契りていだく月影に、嬉し紀の路の玉津島。

ト三人よろしくあつて、誂への鳴物にて、玉津島の精前へ出で、

〽彌生のけふを上巳とて、大内山の花の宴、汲みやかはさん御酒古艸、巴の字に廻る杯の。〽其あふせをも朝霧に、あかぬ別れを島隠れ、名残りもをしと思ふ身に。〽明暮にこがれ寄る舟もつれなや、風の便さへ磯馴の松に甲斐もなく、〽幾夜淡路に明石潟、人丸寢して藻汐燒く、須磨の恨みや夕煙り。（ト三人交りよろしくあつて、）〽それは名所に寄する戀、これは幾とせ住吉の。（ト住吉の精出で、早きのりになり、）〽昔思へばなあ、思へば昔花の盛りの色も香も、ありし姿に花や咲く、〽あら恥かしの落葉して、霜や置くらん我が頭、〽うたてやな。（トよろしくあつて、）〽實に睦じき敷島の、神祇釋敎戀無常、へだて長歌短歌、道を守りの三ツの神、惠みの程ぞ著き。

ト早き下りはになり、三人一時に引拔き、人丸の精、住吉の精一對の柿の筒ッぽ、腰蓑漁師のなり、玉津島の精は汐汲む蜑のこしらへに替る事よろしく、鳴物打上げ、

唄〽角田川澄の流れの末で、聞けば上野か淺草鐘の、こんと突出す新地の端は　常磐津〽今日もよ

い凪よい汐時よ、魚どころか女子が釣れる、連れて來つれて汐干狩。

唄 〽あれ見やしやんせ水鳥の、女夫々々の樂みの、波に浮名を流し目は、ばんに青布の嬉しさは、

唄 〽床杯の恥かしく、顔に紅葉の色直し。

常磐津 〽嬉しさこはさ天人の、五するとやらも今の身も。

唄 〽ふるいやつだが寒かろに。

常磐津 〽もしも風でも引き寄せて。

唄 〽枕の下へ流す手は。

常磐津 〽實と、唄 〽まことの、常磐津 〽仇くらべ。

唄 〽しどもなや。（ト三人口說きあつて、）

常磐津 〽かゝる折から虛空より、暫時稻妻光りもの、大空きつと見上ぐれば、

〽あゝら不思議や。

唄 〽一ツ星なら長者にも。

常磐津 〽並んで出たる荷ひ星。

唄〽あらはれ出しは。

常磐津〽二ッ玉、思ひがけなく落ち散る風の、ぞつと身に沁み狼狽す、

唄〽善哉々々、われこそはぜんざい持前酒呑まず、女郎は買はず惡はせず、善人引込む善の網。

常磐津〽惡に取つては事も愚や惡七別當惡禪司、これは昔よ今は又、惡性男が惡婆に掛り、すたすた通ふあくる日は、欠交りに仕事も出來ず、かゝは側から惡ぬいてあくせく無駄を口小言、えゝ其面でと惡たいかゝれば、へゝゝゝべつかつこと減らず口、爰が惡女の深情。

唄〽それがいやさに氣の毒さ、こつちは善に形振りも。

常磐津〽構はず内儀は惡所場の、年が明いたら冷酒やめて、下齒にひッ附き差向ひ、

唄〽緣の箸箱、蝶足の膳と、

常磐津〽惡との、唄〽こゝろい、常磐津〽い、唄〽いゝゝゝき。

唄〽娘絲とる車が廻る、親仁燒餠で氣を揉ませ。

常磐津〽沖では朝晩まはる汐、さしたり引いたり帆が廻る、風にゆられりや、唄〽目がまはる、しよんがえ。

常磐津〽晝でも吸ひ附く生蛸取るとて、船を乘り出しや明石の蛸壺、門でいらへばひよつくりひよ

つと出いもさ。

唄 〽しよんがいな。

ト三人散らしやうの振りあつて、兩人以前の雛ゝ臺へ上る。大ドロ〳〵になり、臺の蹴込み仕掛けにて船に替り、人丸引拔いて武成、住吉引拔いて濱成、時代の漁夫好みのなり、大手擢を持ち、此時眞中へすつぽんにて、友成同じこしらへにて竹笠を翳し、網を携へ居る見得、これと一時に日覆より紫雲を引きおろし、二人これへ目を附けきつと見得、小太鼓の樂、大ドロ〳〵になり、

常磐津 〽折から爰へ兄弟の、跡を慕うて友成が、小船に掉をさし汐や。

友成 兄貴、弟、爰にであつたか。

武成 弟友成、早船にて來たりし樣子は。

友成 仔細といふは外ならず、此頃夜な〳〵水中に怪しき光り、

濱成 實否を糺すは兄弟が、持參の網を、

三人 此場に於て。(ト網を持ち、三人畫面の見得、ドロ〳〵)

友成 あゝら怪しやなあ、頃も彌生の中空に、朧氣ならぬ紫の、雲の川邊に棚引くは、父にて候檜の熊の郡領、賊の爲に失させたまひし、閻浮の御佛。

濱成　一寸八分の尊像の此の水底に沈みあつて、われ〳〵三人の漂泊を、救はせたまはん其爲めに、
武成　今出現の時を得て、衆生を濟度なさしめん、奇瑞を正に告げたまふ。
友成　ちえゝ悦ばしや。
三人　有難やなあ。
武成　いそふれ友成。
友成　合點だ。
武成　取梶。
濱成　ようそろ。
〽水と船との退かげん、心にねんぴ觀音力、一心凝つたる網の内、月の光りのそれならで、四邊まばゆく、アラ不思議や、赫々たる光明に、兄弟が勇みいさんで引揚げる、網にかゝりし尊像こそ。
友成　これぞ正しく天竺より、唐土日本三國へ、傳來ありし閻浮の靈像。
三人　ちえゝ忝ない。（ト此時以前の四天六人出て取卷き、）
六人　それを。（ト掛るを振りほどき、）

三人 何を。

へ右往左往に組附く組子、見向きもやらず兄弟は、たゞ一心に渇仰なし、幾千年の今までも金龍山と名に高き、日本一の靈場の三社やしろの故事を語り傳へて常磐津の、替らぬ色こそ目出たけれ。

ト鳴物になり、六人を相手に立廻りあつて、よろしくドッコイと見得にて、

武成 先づ今日はこれぎり。

ト目出度く打出し

和歌三神（終り）

後立は近江八幡
取持は和田舞鶴

魁若木對面

深川に地廻魚屋
假宅に浮名鳥追

契戀春粟餅

解説

「對面」も「粟餅」も文久元年二月市村座に上演された、作者四十六歳の作である。前者の主なる役割は中村芝翫（祐經）、坂東龜藏（近江の小藤太成家）、市川團藏（八幡の三郎行氏）、市川新車（舞鶴）、河原崎權十郎（曾我五郎）、市村羽左衞門（曾我十郎）等であり、後者の役割は中村芝翫（粟餅屋あん太郎）、市村羽左衞門（同きな七）市川新車（女太夫）等であつた。「對面」は富本淨瑠璃で富本豐前太夫、名見崎德水等。「粟餅」は常磐津豐後大掾、佐々木市藏等の常磐津淨瑠璃であつた。當時の若手の人氣俳優を網羅した觀のあつた對面も好評であり、又粟餅も深川の假宅を當て込み、當時の風俗を寫したもので好評を博した。後者は時々複演もされた。

上の巻　魁若木對面
下の巻　契戀春粟餅

富本連中
常磐津連中

〔役名＝＝工藤左衞門祐經、近江の小藤太、八幡の三郎、曾我の十郎、同五郎時致。和田の舞鶴〕
〔粟餅屋臼平、同杵作、白魚賣三筋の綱吉、蜆賣の三吉。女太夫お梅、地廻り六人。〕

（鎌倉長谷觀音、三十三間堂の場）＝＝本舞臺高足の二重、本椽附本庇、段々の昇り口、正面に觀世音の座像、須彌壇、蓮の造り花、丸柱に幡、曼多羅を掛け、佛具一式を飾り、此の左右に諸佛の書割り、昇り段の正面に大きなる賽錢箱、上下共折廻し廊下の心にて、金剛矢來の窓をかきし大欄間を卸し、この道具居所替りになること。下手いつもの所淨瑠璃臺、廻廊の張物にて隱し、よき所に梅の立木、總て鎌倉長谷の觀音三十三間堂の體、大拍子にて幕明く。
トよろしく口上觸れあつて、知らせに附き、廻廊の張物を打返し、富本の淨瑠璃になり、

〽薪樵る鎌倉山の初霞、ひくや贔屓を掛的に、魁きそふ小殿原、矢並揃へて睦じく當りを願ふ弓初め。

ト誂へせりの鳴物になり、眞中に祐經羽織衣裳大小、先きに小さき的の附きしを持ち立身、上手に近江の小藤太、柿の上下、大小、吉例の弓を持ち、下手に八幡の三郎、同じこしらへにて控へ、是れより下へ舞鶴、侍烏帽子、かちんの掛素袍、金の采配を持ち、花道へ十郎祐成、長上下、小さ刀吉例、時致同じこしらへにて、三方に矢を載せこれを持ち、立掛り居るを、祐成これを留めて居る。此の見得双方一時にせり上げる。

〽身にも應ぜぬ大役に、いづれも樣のお叱りを、かへり三ツ羽の矢數より、三千餘町のお取立て、時に近江ぞ有難き、八幡矢聲に舞鶴が、弓も引方取持ちし、蝶と千鳥の兄弟は、家の鏑矢親譲り、みがく矢の根の若い同士。

ト双方よろしく振りあつて、鳴物になり、祐經思入あつて、

祐經　まことや一張の弓の勢ひに、四夷八荒の果てまでも、隨ひ靡く時津風。

近江　泰平謳ふ鎌倉の、治に居て亂を忘れざる、矢數爭ふ弓初め。

八幡　若殿原の大寄せに、當り外さぬ大的を、射ぬきし跡や星月夜。

舞鶴　殿御の中へ恥かしき、烏帽子素袍も兄さんの、代りにたつか弓取りの、
祐成　目指す相手は名にし負ふ三ヶの所領三間堂、今日の射初めを待兼ねて、
時致　心はやたけにはやれども、鈍き拳のわれ〱は、射術の道も白羽の矢、
祐經　その弓矢の名所を、尋ねていはゞ數多く、
近江　先づ裏筈に日天子、元はずには月天子、
八幡　握り七曜七重に卷き、重籐の數は二十八宿、
舞鶴　蟇目に用ふる二筋の、水破兵破の鏑矢は、
祐成　それは陰陽に象りて、山鳥の尾に不淨を拂ひ、
時致　弦音高く射て放す、矢聲に惡魔を降伏なす、
祐經　されば唐土堯の代に、十の日輪出でし時、
近江　粹が矢先に九ツの日をば忽ち射落したり。
八幡　我が日の本にも其古へ、近衛の院の御時に、
舞鶴　賴政勅を蒙りて鵺をば射たる武の譽れ、
祐成　其弓矢ゆゑ赤澤の、露と消えにし父の讐、

時致　狙ひ定めてたゞ一矢。（ト時致立ちかゝるを、祐成留めて、）
祐成　あこれ、迂濶に切つて放しなば、狙ひも外れて恥の恥、時節を待つて重籐の、
祐經　引くや弓矢の故事來歷、
舞鶴　まツ魁し梅の春。
祐成　これや若木の、
時致　對面と、
祐經　ほゝ、
六人　敬つて申す。
　　〽梅の花形鶯の、つらねは江戸の春なれや。
近江　行氏殿見やれ、あれに控へし兩人は、見るから裝もそがくと、貧乏染みた奴ではねえか。
八幡　誰が手引か我君の、御前間近く無禮な奴。
兩人　いで、われくが。（ト立ちかゝるを、）
祐經　兩人、控へい。
兩人　はツ。

祐經　祐經思ふにあの二人は、何か願ひのある者ならん。何と舞鶴さうではないか。

舞鶴　あれなる二人は舞鶴が、手引なしたる矢數の役人、けふの褒美に祐經樣、お逢ひなされて下さんせうなら、兄朝比奈が名代に、かッちけないでござんせうわいなあ。

祐經　こは改りし其の願ひ、餘人ならば兎も角も義盛殿の祕藏の妹、殊には兄たる朝比奈が、名代とある事なれば。

舞鶴　逢うて上げて下さんすか。

祐經　いかにも、そなたの詞に任せ。

舞鶴　えゝ、嬉しうござんす。

近江　いざ、我君には、

八幡　設けの御席へ。

祐經　高座御免下さりませう。

〽流石鎌倉一臈と、いはねど薰る裏梅の、許しをうけて舞鶴が、顏も赤根の初日影。

ト此うち祐經吉例の二疊臺へ乘る、舞鶴は前へ出て花道へ向ひ、

舞鶴　それに控へしお二人さん、今の詞を聞かしやんしたか、願ひに願うた祐經さんが逢うてやらうと

いゝぎやる程に、おめず臆せず恥らはず、急いでのたくり出やしやんせいなあ。

時致　參りますべい〳〵。

祐成　あこれ、必ず粗相のないやうに。

時致　合點だ。

〽荒氣な風も青柳の、枝にしづめてしづ〳〵と、靜けき色の若綠。

親の敵、祐經觀念。（ト舞臺下手へ來る。）

祐成　こりや、急くところでない、早まるな。

祐經　我を目掛けて敵といふ、是れなる二人の面差を見れば見るほど、あゝ似たわ〳〵。

舞鶴　似たとは誰に、

時致
祐成　似ましたな。

祐經　河津の三郎祐康に、生寫しなる二人の面差、正しく河津の悴にて、忘れがたみの兄弟ならん。

舞鶴　かくお目立ちまする上からは、何をか包まんお二人は、祐康樣が忘れがたみ。

近江　兄の一萬成長なし、祐信殿の養子と成り、曾我の十郎祐成。

八幡　弟箱王人と成り、北條殿の烏帽子子曾我の五郎時致。

祐經　扨こそ二人は、兄弟なりしか。
近江　見れば年端も行かぬ身で、當時一﨟別當たる、
八幡　我君、左衛門祐經樣へ、刃向ひ立ては及ばぬ事だ。
近江　斯くいふ近江の小藤太成家。
八幡　八幡の三郎行氏。お側になくばいざ知らず、
近江　どッこい、
八幡　そッけえ、
八幡
近江　やりやあしよねえ。（ト兩人きつとなるを、）
祐經　兩人控へい。二人の者が祐康に、別れし折は五ッか三ッ。
祐成　十八年の其間、父が最期の其の無念。
時致　忘れもやらぬ此の年月。
祐經　親を討たれて無念なか。
時致　さん候。
祐經　口惜しいか。

時致　さん候。

祐經　さもさうずさもありなん、然し河津を討つたるは、斯くいふ左衞門祐經ならず、股野の五郎景久なるわ。

祐成
時致　何と。

祐經　思ひぞ出づる其時は、

〽安永二年神無月、十日餘りのことなりしが、伊豆と相模の若殿原、赤澤山の曠相撲。

ト祐經よろしくあつて、

近江　股野は聞ゆる力强、廣言吐きしを祐康が、

八幡　股野を投げし河津がけ、勝誇つたる歸り道。

舞鶴　おゝ、聞き及ぶ其時は、(ト舞鶴前へ出て、)

〽河津殿の出立は、秋野の摺つたる狩衣に、千段籐の弓携へ。

トよろしくあつて祐成出で、

祐成　竹笠さつと木枯しに、

〽裏を返して吹きならし、名に負ふ名馬の聞えある。

時致　むら月毛に跨がりて、
〽絶所悪所の嫌ひなく、しんづ〳〵と歩ませたり」
祐經　すは祐康よ、御參なれと。
〽拍が峠の南尾崎、椎の木三本小楯に取り、一の射騶二の射騶、切つて放せば過たず。
河津が乘つたる駿足の、鞍の山形射削つて。
〽行縢の附際より前へすつぱと射通したり。
祐成　萬夫不當の父上も、大事の痛手にたまり得ず、
〽馬よりどうとおちこちの露と消えたる赤澤山。（ト此うち皆々物語りの振りあつて、）
〽今見る如き物語に、時致たまらず立掛り。（ト時致きつとなつて、）
時致　扨こそ敵左衞門祐經。
祐成　あこれ、立騒いで尾籠な弟、急いては殊に大事の前、たゞ何事も兄に任せて。
時致　でも。
祐成　ぢつと辛抱しやいなう。（ト留めるを振拂ひ、）
時致　いやだ〳〵、もう、いかう癇癪が、こてへられねえ。（ト行かうとするを、舞鶴留めて、）

舞鶴　そこを一番朝比奈代り、わたしが留めた時致さん。

〽其癇癪も無理ならぬ、五ツやみさごの頃よりも、うき鶯の月日立ち積る恨みの山雀や、氣もはやぶさに鳶かゝり、思ふ敵の片鶉、うつて我名を雲井まで揚げ雲雀とは知りながら、その荒鷹のあら氣をば緣のはし鷹舞鶴に、一羽あづけて水鷄なら、ありがた茄子ぢやないかいな。（ト此うち舞鶴くどき模樣にて、三人よろしく振りあつて納まる。）

祐經　流石は舞鶴よく留めた、河津を討ちしは股野の景久、此の祐經は覺えない。

時致　覺えないとは、卑怯な祐經。

祐成　なぜ名乘つては討たれぬぞ。

近江　やあ、假令主人が敵にもせよ、富士の御狩の總奉行。

八幡　役目蒙むる上からは、討つことならぬ祐經樣。

祐成　すりや皐月下旬の狩くらまで。

時致　討つ事ならぬか忌えましい。（ト口惜しき思入。）

舞鶴　とはいへ、此場を此儘に、たゞお二人も歸れまい、春の初めの年玉替り、祐經さんのお杯を。

祐經　何さま一家の因みあれば、二人の者へ杯くれん。近江八幡、銚子杯持てっ

近江八幡　畏つてござりまする。

〽仰せにはッと兩人が、替らぬ春の土器に、銚子取添へ差出せば。

ト三保神樂になり、近江八幡土器の載りし三方、八幡は長柄の銚子を持ち出で祐經の前へ置く。祐經土器を取り、八幡酌をして祐經呑んで、

祐經　兄なれば、祐成へさし申さう。

祐成　頂戴いたすでござりまする。

ト祐成摺寄る、舞鶴酌をなし祐成呑んで祐經へ戻す。祐經又呑んで、

祐經　五郎やアい。

時致　なんだ。

祐經　杯くれう、づんと參れ。

時致　頂きますべい〳〵。（ト立上りきつとなつて、）今日は如何なる吉日にて、日頃逢ひたい見たいと、神や佛をせがんだ甲斐あつて、爰で逢ひしは優曇華の花待ち得たる今日の對面、三ケの庄の福は內、鬼も十八年來の、今吹き返す天津風、杯頂戴いたすでござらう。

トぢり〳〵詰寄り、土器を碎き、三方をめり〳〵とこはす。

祐經　はて、勇ましき時致へ、絶えて久しき一家の對面、些少なれど、土產くれん。

ト祐經懷より袱紗包みの狩場の切手を投げて遣る、祐成開き見て、

祐成　やゝ、こりや是れ狩場の。
時致　二枚の切手。
祐成
時致　何ゆゑこれを。
祐經　廻り逢ひなば渡さんと、かねて所持なす二枚の切手。
舞鶴　流石は左衞門祐經樣。
祐經　敵ながらも情の賜。
舞鶴　たゞ何事も。
近江　皐月下旬。
八幡　先づそれまでは。
祐經　祐成時致。
時致　工藤左衞門。
祐成　祐經どの。

祐經　はて、珍らしき、

三人　對面ぢやなあ。

〽名におふ江戸の初芝居、曾我中村の故事も相河原崎吉例に、坂東市川市村の榮うる春ぞ目出たけれ。

ト皆々引つばりの見得、カケりになり、知らせに附き大欄間を打返す。假宅格子先の張物になり、此人數を隱し、上手より用水桶を出し、下手の淨瑠璃臺をあふり返し、粟餅屋の荷に替る。下手の廻廊を打返し、爰に常磐津連中居並び、淨瑠璃になる。

〽淨瑠璃も曾我物語の二番目に、辰巳の富士の裾模樣、狩場にあらぬ假宅の、初すがゝきに兄弟の、女郎も並ぶ見世先を、流して歩く粟餅屋。

トすがゝき通り神樂になり、上手より臼平、杵作、着流しおしよぼからげ、粟餅屋のこしらへ、團扇を持ち出る。

〽これは此度ほうやれあれわさのさ、すとんと任せて夜がな夜一夜、ひつたくとつたく放れぬ中の、臼と杵との拍子よく、是れぞ評判本家本粟。（ト兩人よろしく振あつて、）

杵作　評判々々、本家本粟はこれでござい。

臼平　粟餅屋々々。

〽名代々々と呼ぶ聲に、呼ばれ招かれ蜆賣。

ト合方になり、花道より三吉奴天窓、筒ッぽ、半纏、草鞋、蜆の入りし笊を天秤棒にてかつぎ出で花道にて、

〽洲崎育ちの筒ッぽに、唐人めけど假宅の、まだ鐵砲の味知らず、色氣中川三枚洲、波の粟餅零杭の喰氣に浮れ來りける。（ト三吉振りあつて舞臺へ來る。）

杵作　おゝ、これは蜆屋の奴さん、今商ひからお歸りか。

臼平　大方しつかり儲かつたらう、一盆奢る氣はないかね。

三吉　今永代團子を喰つて來たが、又粟餅は見のがせねえ。

臼平　成程、お前は色氣もあるが、又喰氣も豪氣だね。

三吉　おらア子供だから喰氣の方だ、早く曲舂きを見せてくんねえ。

臼平　さらば曲舂きに、

杵作　かゝらうか。（ト三吉振りあつて、）

〽今年や世がよて木に餅がなるえ、ウヤンヤレサテヤレサテナ、おらが嚊衆を褒めるぢやな

いが、じたい燒餅疳癪餅で、兎角物をば胸にもち、さうだぞ〳〵あれわさの、これはさ、これはさの黄金餅。（ト臼平杵作よろしく振りあつて納まる。）

〽其粟餅の太神樂、心浮き立つ鳥追や、春めく聲の白魚賣。

ト通り神樂鳥追の合方になり、花道より、お梅一文字の編笠下駄がけ、三味線を持ち女太夫のこしらへ、綱吉紺の腹掛股引三尺尻端折り、いなせな駒下駄、白魚の箱を提げ出來り花道にて、

〽色ぢやなけれど心では、思ひ佃の四ツ手網、引く手數多の仇ものに及ばぬ鯉の瀧の屋と、いはれて叩くさいじりや、指先細き白魚のまだ一ちよぼにたらぬ年、船の浮氣にちやほやと濡れた水棹に樫棹の、調子合せて連れ立ちぬ。

ト兩人花道にて振りあつて舞臺へ來る。

杵作　やあ、誰かと思やあ佃の兄ィ、花魁達を迷はせに、素見に來なすつたのか。

綱吉　どうして〳〵大違ひだ、此春は辛抱人で、朝から晩まで商ひだ。

三吉　また綱兄ィが嘘ばッかり、おめえにやあ假宅の女が、みんな迷つて居るぜ。

綱吉　えゝ手めえまでが同じやうに、そりやあ此粟餅屋のことだ。

お梅　わたしもこんなに思つて居るに、何のかんのと憎らしい。

綱吉　さういふ譯ぢやあねえけれど、此間も假宅で。

お梅　面白いことがござんしたかえ。

綱吉　聞いてくんねえ、見世先をそゝつて歩く頬冠り。

〽わたしや元より深川育ち、貝の柱に牡蠣の屋根、仇なあさりと添ふよりもやつぱりお前の馬鹿がよい。〽えゝ、いけどうめといふ聲を、禿が聞いて飛んで出で、もし花魁からお前にと、言はれて嬉しく見る文に。

あばいが惡いひこでると、字餘り字たらずちや〳〵むちやく、あの字が仰向きこの字がこゞみ、よの字が横に寐て居るを、上つて寐ろとかんづいて、ゆうべも四百で明の鐘。

〽けふは降るのに流してと、氣轉黄袋房揚技、ちよつと櫻の立引きに、花咲く朝の迎ひ酒。

〽ほんにわちきが此やうに、熱くなるのに温い燗、ぬしの心に似たせるか、土瓶の湯まで水臭くじれて茶碗の八ツ當り、割れても末に逢はんとは、嬉しい仲ぢやないかいなあ。

ト此うちお梅をとらへてよろしくあつて、杵作むつとして、

白平　えゝ、おれが見る前も憚らず、とツ附いたり引ッ附いたり、斯う見せ附けられては男が立たぬ。

綱吉　さう言はれるとおれもまた、一番男を立てにやあならねえ。

杵作　一番目から二番目まで、二人寄ると女の爭ひ、爰は一番古めかしくも、狐拳でおッつけなせえ。

三吉　狐拳なら此頃はやる、初午の狸がいゝぜ。

杵作　そりやあ知らねえが、どんな拳だな。

臼平　おつと拳なら親讓り、知らざあおれが敎へてやらう。

綱吉　負腹を立つちやあいかねえよ。

臼平　そんな野暮な男ぢやあねえ。

杵吉　それぢやあ姉え彈いてくんねえ。

お梅　あい〱、合點ぢやわいな。

杵作　どれ、おれも彌次馬にはひらうか。

臼平　さあ〱、早く遣つたり〱。（ト臼平、杵作綱吉前へ出る、お梅三絃を彈く）

〽初午に囃す太鼓のどんつくどん、負けぬ狸が腹鼓、ぽんぽこどんつくぽんぽこぽん、あんまりたゝいて、たんたん狸の腹が破れてへこ〱、是れでも狐にや負けやせぬ。

ト三人狐拳あつて、綱吉勝つこと、臼平まけ、頭をぶたれる。

臼平　いや、忌えましい、おれが負けたか。

杵作　所詮色ぢや叶はねえから、やつぱり、お前は踊りで勝ちねえ。
お梅　ほんにお前の振事は、お父さんよりいゝとやら、わたしに見せて下さんせ。
臼平　おつと皆までいふな、おめえの事なら何なりと。
お梅　そんなら見せて下さんすか。
臼平　見せなくつてどうするものだ。もし、太夫さん、お頼み申します。

〽そもそもわれらがしにせには、粟をかしぎて舂き初め、其正月は齒固めに、彌生は雛の女夫事、皐月はちまきで蒲團着て、寐たる姿や柏餅、男は誰も一盛り。（ト杵作出で、）〽浮いた波とや山谷の小舟、猪牙もこがれて通はんせ、さつさと押せ押せ妻戀舟は七夕の、其の星合のちぎり餅、明けてわびしき盆踊り。〽今宵逢ふとの嬉しさに、積る涙の水增して中を隔つる天の川、三粒の雨の戀知らず、よいよいよいやさ、それえよいやさ。

ト此うち杵作よろしく、盆踊りより三吉出て、一人にてあつて臼平出で、〽はや菊の酒、重陽のてうと引受け醉はされて、〽えゝい、醉うたよ五人の中へ、小町一人と正僧遍照、呑めや唄へや座も色見えて、うつろふ文屋がほら吹くからに、どうか心も

在原さんに、思ひ出したらまッ黒黒主、料簡ならぬと腹を辰巳に、世を宇治山の喜撰茶にして、ちやんと來なせ、ちやつと摘む茶摘の小唄節。

ト此うち臼平振りあつて、是れより團扇太鼓を持ち、

〽あつみさ、これ五郎左殿さ、庭の鳥はめんなごやのさつこい〱、可愛い男の目をやさんます、せう〱かんらくともなんばん、畑でやつてくりよ、これ枯木に花が二度咲くか、權兵衛が茶屋まで三里はないぞや、來いとて來なけりやかつさきますぞえ、さッさ、こい〱わけもなや。

ト臼平振りあつて、納まる。とばた〱獅子の鳴物になり、所作立の人數六人、派手なる揃ひの形、鉢卷尻端折り、地廻りのこしらへにて出で、上下より取卷き、

一　こりやあ佃の三筋の綱吉、
二　新地の鼻を乘ッ切つて、
三　此假宅へふん込まれ、
四　格子色を稼がれちやあ、
五　土地の者の面が立たねえ、

六　生しちや歸さぬ、覺悟しろ。
綱吉　えゝやかましいいけどうめら、喧嘩を賣るなら買つて遣らう、一度にかためて持つて來い。
杵作　さあ、おめえ方は怪我せぬうち。
臼平　少しも早く。
〽いふより早く引連れて、三味線抱へ急ぎ行く。
トこれにて三吉先きに、お梅三絃を抱へ下手へはひる。
綱吉　さあ、是れからはおれが相手。
杵作　助鐵砲は粟餅屋。
臼平　片ツ端から覺悟しろ。
六人　何をこしやくな。
〽梅に鶯粟に餅、どつこい放れぬ臼に杵、おつと黄な粉を胡麻の鉢、一ツ二ツは面倒な、一度に投げる粟餅の、でつちてちぎつて餡ころ〳〵、そりや來たやれ來たすとゝんとん、もーツもて來い、あれわさのさ、どつこい土産の皮包。
ト六人を相手に、曲舂きの所作立ちの振りあつて、

〽また取附くを投げのける、粟の曲春き戲れに、笑ひ壽く春の興、睦月とぞ祝しける。

トまた六人掛るをちよつと立廻り、皆々引ばりの見得、獅子の鳴物にて、

頭取　先づ今日は、是れぎり。

ト目出度く打出し

對面、粟餅（終り）

龜屋都樂が
昔を今に
替らぬ鶴の
三番叟

其儘姿寫繪

解　説

「寫し繪」は元治元年十一月市村座に上演された、作者四十九歳の作である。書きおろしの時の主なる役割は市川小團次（口上言ひ福助）、市村家橘（三番叟、幽靈）、市村竹松（千歳）、坂東吉彌（蝶遣ひ）、坂東三津五郎（獅子舞）、尾上榮三郎（獅子舞）、中村福助（寒念佛）、市川米平（隱居）等であつた。淸元は延壽太夫、家内太夫、齋兵衞、德兵衞。竹本は戸和太夫、猪太夫、鶴澤市作等であつた。

安政から文久、慶應、明治の初年へかけて榮えた寫し繪（蔭繪）を取り入れた大切淨瑠璃。作者は臺本の末に「これより菊次郞の山姥、家橘の怪童丸にていつもの振あつて三十郞の男天狗、菊次郞の女天狗、小團次の婆ア天狗夫婦喧嘩のをかしみある筈なれど、右を脚色せぬ中、前だけを出し打出しにいたし候」とある。尻切とんぼの形のあるのは此故であらう。

其儘姿寫繪（寫し繪）

竹本連中
清元連中

〔役名――口上言ひの福助、三番叟、千歳、蝶つかひ、獅子舞、寒念佛、幽靈、白髮の隱居、町人六兵衞、同七助等。〕

（往來の場）――本舞臺一面の淺黃幕、通り神樂にて幕明く。と下手より白髮の隱居杖をつき出來り、後より六兵衞、七助出來りて、

六兵　もし〳〵そこへおいでなされますは、横町の隱居さんではござりませぬか。

隱居　おゝこれは六兵衞さんに七助さん、お揃ひでどこへおいでなさるな。

七助　この先の別莊で、故人龜屋都樂から預つてゐる寫し繪が、拔け出ますといふ噂。

六兵　そつと隙見をしませうと、二人連で出て來ました。

隱居　それはいゝ所でお目にかゝつた、私もその寫し繪の拔け出るのを見に行きますのさ。

兩人　左樣なら、御一緒にまゐりませう。

隱居　巨勢の金岡、左り甚五郎、名人上手の仕おいたものは、皆魂がはひつてゐるから、その形が拔

け出ますて。

六兵　昨夜見た者の話でござりますが、實に生きてゐるやうで、皆それ〴〵口を利き、

七助　立廻りから所作事まで、芝居で役者のする通り、寫し繪のやうではござりませぬさうだ。

隱居　そりやあその筈のことだ、貴樣達は知るまいが故人都樂といふものは、初代可樂の門人で、元は噺家であつたが寫し繪といふものを工夫して、都樂が元祖で創めたものだ。その都樂が魂を入れて書いておいた繪だといふから、拔け出て働く筈だ。いや、先づその頃は噺の元祖立川のぢいさんが達者で、寄席で噺を始めたのが石井宗叔、佐川東幸、それから續いて可樂、むらく、鳴物入りが圓生に怪談が正藏、音曲噺が十番の扇橋、影芝居がそば源に坂東政吉、みんな故人になつてしまつたが、今達者なのは八人藝の壽鶴齋ばかりだ。

六兵　又隱居さんの昔話が始まつた、これから出るのが釋迦ケ嶽に雷電。

七助　助廣治から市紅、白猿、六部順禮の話も度々聞きました。

隱居　兎角昔がなつかしく、今仲見世の古本屋で、古い番附があつたから買つて來た。

ト　懷から番附と見える觸書を出す。

七助　そりやいつ頃の番附だか、ちよつとお見せなさいまし。

隱居　貴樣達が見ても分からない、おれが讀んで聞かせよう。

六兵　どうぞお聞かせなすつて下さりませ。

隱居（觸書を開きて）「淨瑠璃名題——」、淨瑠璃太夫——（ト太夫連名、役人を讀み、）や、こりや淨瑠璃の觸書と間違へて持つて來た。

七助　早く行つて取りかへておいでなさい。

隱居　何といつても年のせゐで、眼が惡くていけない。

七助　なに、隱居さんの眼の惡いのは、年のせゐぢやない瘡毒のせゐだ。

隱居　なんだと。

六兵　いえさ、年かさのせゐでござります。

ト時の鐘鳴る。

七助　や、もうあの鐘は暮六だ、ちつとも早く寫し繪の拔け出るのを行つて見ませう。

隱居　おゝさうだ〳〵、長噺しは後の邪魔だ。又あつちへ行つてゆつくりと話しませう。

六兵　左樣ならば、

兩人　隱居さん。

隱居　どれ、一緒に行きませうか。

ト派り神樂になり、隱居先に六兵衞、七助附添ひ上手へはひる。これにて淺黄幕を切つて落す。

（寫し繪高座の場）――本舞臺四間中足の二重、板羽目の蹴込み、正面に黑塗りの大枠、障子と見たる白木綿の幕、上の方竹本の出語り臺、下の方清元の淨瑠璃臺。總て寫し繪高座の模樣、人寄せの鳴物にて道具とまる。

ト鳴物打上げ、下手霞幕を切つておとし、こゝに清元連中居並び直に淨瑠璃になる。

〽金岡が筆はものかは寫し繪の生けるが如き働きは龜屋都樂が新工夫、こゝにうつして淨瑠璃の種に芝居も小春月、歸り花咲く花舞臺、

トこれにて正面の白木綿の幕を引いて取り、黑幕になる。

〽いつも替らぬ口上も、名に大頭上下の色さへまさる蔦紅葉。

トこの內正面黑幕の內より、口上言ひの福助、額の出たる鬘、子持筋紅染の上下、扇を持ち、坐りしまゝよき所まで押出し、

福助　高うはござりますれど御免を蒙むりまして、これより口上の申上げ奉ります。先づは御贔屓とご

ざりまして、相變らず賑々しく御見物に御來駕なし下されまする段、總座中たこばかりか、いや、たこではない、いかばかりかありが鯉仕合せに、いや、ありがこひではない、ありがたい仕合せにござりまする。

トお辭儀をなし、

實にありがこひ仕合せにござりまする。(ト辭儀をなし)、どつこい違つた、有難い仕合せにござりまする。(ト辭儀をなし、)扨、こゝもとにて御覧に入れまするは、吉例の三番叟、引きつゞきまして四季の百花鳥、並に諸國名所の引道具、滑稽怪談を取り仕組み、御覧に入れまする。又中入後には二重風呂出遣ひにて、所作事大怪談を御覧に入れまするやうにござりまする。先づは三番叟の始まり、その爲口上左様、(ト辭儀をなし、)も一つまけて、その爲口上左様、數よく三つ、その爲口上左様。

〽立たんとせしが足しびれ、京へ登りの座頭の坊、片々失せし下駄ならでちんば引き〳〵、

トよろしく振あつて、

皆さん、あばよ。

〽入りにける。

ト福助下手黒幕の内へはひる。と直に上下へ切出しの若松出る。

〽常磐の色の若松に鶴の齢の千歳が、面箱携へしづ〳〵と、脇座へなほれば三番叟、

トこの内寫し繪の鳴物を冠せ、下手より千歳、侍烏帽子面箱を持ち出來り、上手へ住ふ。とばた〳〵になり、上手より劔烏帽子三番叟の打扮にて出來り、

〽おゝさへおゝさへ、悦びありや〳〵、我思ふところより外へはやらじとおんもふ。

ト三番叟の振あつて、

〽相の押への杯ももみてもみだす烏飛、とつぱひとへにまゐらする、酒は劍菱劍烏帽子、〽素袍の模樣鶴首の銚子も長い後引に、〽誰にあふぎの末廣屋、さす手ひく手の振事に、〽ふるや德利の鈴の段、〽管の種蒔三番叟、

トこの内寫し繪三番叟の振よろしくあつて、

〽ひやうしとり〳〵打込みや、(ト三番叟下手へはひる。)

〽つゞくしやぎりの太鼓持、客を待つ夜の松盡し、

ト千歳立上りて引拔き、奴鬘幇間の打扮になり、扇を持ち、

〽一本めには池の松、二本めには庭の松、三本めには下り松、四本めには志賀の松、五本め

には五葉の松、六つむかしは高砂の尾上の松に栖をくひし、鶴も千歳の尉と姥、腰もまがりて、箸を杖、額に寄するさゞなみも、女波男波の打合せ、

ト この内扇にて振よろしくあつて、

こゝらが汐の引きどきと、うかれ興じて入るあとへ、(ト下手へはひる。)

またもひよつくり口上言ひ、

ト 又黒幕より口上言ひの福助、着流し肩衣ばかりにて出來り、上手へ坐り、

福助 東西。さて私が出ませぬと、口上は〳〵と美しいお孃樣方がお待兼故、お邪魔ながら又出ましてござります。唯今は吉例の三番叟首尾よく相勤めましてござりまする。これよりは、四季の草木百花鳥を御覽に入れまする。先は目出度い富貴草牡丹を現はし御覽に入れまする。

ト 薇仕掛の鳴物になり、正面へ牡丹の石臺を押出す。

扨、お目通りへ現はしましたる石臺の牡丹、莟は殘らず開きまする。

ト 又鳴物になり、牡丹の莟仕掛にて花一時に開く、福助これを見て、

いや、こいつは妙だ。(トひつくり返る。)まづ牡丹の花が開きますれば、露吸ふ蝶の戲れより、獅子の狂ひを御覽に入れまする。(ト辭儀をなし、)これでおれが役は濟んだが、樂屋へ行つて茶でも

呑まうか、ちよつと表へ行つて一ぱいやつて來ようか。樂屋へ行かうか表へ行かうか、はて、どうしたものであらうな。

〽潮來出島の十二の橋、どちを渡ろか思案ばし、

ちよいと來なせ。

　　トよろしく振あつて寫し繪の見得にて、上手の大枠へ頭を打附け、

あいたゝゝゝ。（ト上手へはひる。）

〽咲滿ちし牡丹の花の香にひかれ、色に迷ふや雌雄の蝶、

　　ト下手より蝶遣ひの娘振袖裝、扇の遣ひ蝶を持ち出來り、

〽おのが羽風にひら〳〵と、白くれなゐの花に置く露に戲れ狂ふにぞ、いとゞ眺めの深見草、

　　トよろしく振ある、と獅子舞二人對の振袖裝にて、獅子頭を持ち出來りて、

〽今を盛りと咲く花に對の裝の競獅子、立舞ふ蝶に餘念なく、ともに狂うて舞遊ぶ、

〽姿色ある袖の雪、解けて寐た夜の睦言に辛き別れの朝日山、心盡しに思ひわびこゝに三國や汐風の便り渚にます花の、外にありとも白菊に女子は愚癡のいづも白、えゝ、何と猩々亂れ紅、八重九重の思ひかな。

ト此の内二人口説模様にて蝶遣ひをあしらひよろしく振あつて、

〽時しも風に舞ふ胡蝶、女獅子男獅子の追ひめぐり、狂ひ亂るゝありさまは、あなたへひらりこなたへひらり、ひらりひら〳〵くる〳〵〳〵、おのがさま〴〵牡丹花の色香に引かれ戯れて、狂ひ狂ふぞ目覺しや。

ト兩人の獅子舞獅子頭を持ち蝶遣ひを追廻す。この内捕手二人出來り、十手にて打つてかゝり、寫し繪の立廻りよろしくあつて、

〽實に勇しき若獅子と名にたちばなの、

ト三重にて皆々を黑幕にて消し、淸元連中も霞幕にて消し、上手の霞幕を切つておとす、と竹本連中居列びゐて、せりふになる。

（前）扨これは前藝と仕り、千人塚骸骨の怪談を取立て御覽に入れまする。

〽吹きおろす木の葉落しの小夜嵐、身にしみ〴〵と物凄き茂る柳の無緣墳、靑き灯影は人魂か、ぞつと時雨の雨上り、千日參りが獨語、

トこの時上手へ石の千人塚、榊の立木を出し、木魚入りの合方になり、下手より寒念佛鼠頭巾鼠の着附、胸へ鉦をかけ、樒の入りし手桶を提げ、鉦をたゝきながら出來り、

寒念　扨々今夜は暗い晩だ、鼻をつまゝれるのも知れない。今ぴかりと光つたのはたしかに人魂に違ひない。聞けばこの頃千人墳へ幽靈が出るといふことだ。どうぞ出逢ひたくないものだが、

〽臆病風にぶる〳〵と、怖げだつたる後より、

ト犬出來りて裾を銜へる、寒念佛びつくりして、

わあゝ、それ出た、なんまいだ〳〵。（ト犬ワン〳〵吠える。）おゝ幽靈かと思つたら犬か、やれびつくりした。かう見えても生れつき病犬と幽靈が大嫌ひだ。（ト後を振返り見て、）あゝ怖い〳〵と思ふせるか、後から人が來るやうだ。南無幽靈頓生菩提、南無阿彌陀佛々々。

〽どきつく胸にひゞく鐘、一吹さつと腥ぐさき風に扨はと打ちおどろき、

トドロ〳〵になり、寒念佛ぞつとせし思入にて、

そりやこそ腥ぐさい風が吹いて來た。

〽ぞつと身の毛もたちまちに、陰火えん〳〵と燃えあがり、現はれいでし幽靈が、いとうらがれし聲音にて、

トドロ〳〵になり、上手に大きな陰火をおろし、この蔭より幽靈、額に三角の紙をあてし男の亡靈の打扮にて出で、

幽靈　恨めしい。

寒念　（びつくりして、）南無幽靈頓生菩提、南無阿彌陀佛々々。（ト鉦をたゝく思入。）

幽靈　恨めしい。

寒念　あゝこれ、恨めしいと言はれる何も覺えはない。南無阿彌陀佛々々。

幽靈　恨めしい。

寒念　さりとはしつこい、早く消えてくれぬか。

幽靈　恨めしい。

寒念　これほど念佛を申すに聞えぬのか。

幽靈　恨めしい。

寒念　えゝ、何で幽靈には聞えぬぞ。

幽靈　おゝ、何といふかさつぱり聞えぬ、おれはかなつんぼうの幽靈だわ。

寒念　なに、つんぼうの幽靈だ、道理こそ聞えぬ筈だ。

ト始終寒念佛は慄え聲にて、少し怖くなりし思入。

これ幽靈、こなたはなんで死んだのだ。

幽靈　おゝ、おれはしんの勞れで死んだのだ。

寒念　何だ、しんの疲れだ。いや羨しい病で死んだな、してこなたの女房は何者だ。

幽靈　おゝ、おれが女房はお屋敷の、御殿下りのぼつとりもの。

トこれにて下手霞幕を切つて落して淸元を出し、

〽ほんに男といふものは、おれより外に白齒から、今年二十で眉落し、〽睦み合ひたる夫婦仲、互ひに思ひ思はれて、〽身體も痩せし餓鬼道の身の行末を察してと、〽ゴホンゴホンと咳きにける。

ト幽靈よろしく振ある。

寒念　いや呆れかへつた幽靈だ。坊主を捉へてのろけるのか。勘定しろといつたところが、六道錢より持つてはゐまい。何にしろ亭主をばそれほど大事にしたとは好もしい女房だが、その女房はどうしたぞ。

幽靈　さ、その後私のことを思ひこれもたうとう焦れ死に死んでしまひ、又々冥土へ尋ねて來て一つ蓮で暮してゐたが、この間からしんが勞れてしまつたので、中有に迷つて娑婆へ出るのだ、恨めしい。

寒念　何が恨めしいことがあるものか、女房にそんなに慕はれるとは、さりとは〱羨しい。

幽靈　いや〳〵恨めしい。

寒念　いゝや羨しい。

幽靈　おゝ、それほどまでに羨しくば、こなたに女房を讓らうから、おれに替つて死んで下され。

寒念　その女房は好もしいが、死ぬのは厭だ、まつぴら〳〵。

幽靈　さう言はずと死んで下され。（ト袖などとらへる。）

寒念　えゝ忌はしい、こゝを放さぬかい。

幽靈　いゝや放さぬ、こなたを冥土へ連れて行くぞ。

（竹）へ冥土へ來れと取附くにぞ、仕方なむあみ寒念佛、有合ふ卒塔婆でめつた打ち、不思議やありし幽靈の青顏たちまち消え失せて、たゞ白骨のみぞ殘れり。

ト この內寒念佛卒塔婆を持つて打つてかゝり、ちよつと立廻りドロ〳〵にて幽靈引き拔き骸骨となる。

寒念　やあ、こりや幽靈は骨になつたか。

幽靈　さあ、おれと一番角力を取れ。

寒念　なに、角力を取れとは。

幽靈　おゝ、おれが負けたら許してやる、勝つたら冥土へ連れて行くぞ。

寒念　なんでおのれに負けようぞ。

幽靈　そんならこゝで、

兩人　一勝負。

竹〽打出す修羅の太鼓につれ、四股ふみならし西方の、竹〽西と東に立別れ、

ト修羅太鼓を角力太鼓のやうに打込み、兩人左右へ別れ角力の思入。

清〽西イしやれかうべ〳〵、東イ寒念佛々々。(ト兩人向ひ合ふ。)

竹〽あうんの呼吸ともろともに立合ふ骸骨寒念佛、四十八手も亡者だけ天蓋附の輿車、清〽身はあだしのゝはら櫓、四つにわたつて取組みしは、これぞ蓮の花角力、竹〽暫時は挑み爭ひしが、なか〳〵手者の骸骨故、清〽ずんでんころりと寒念佛、坊主頭の丸負に、竹〽負腹立つて卒塔婆にて打つてかゝれば丁と受け、竹〽又も上段下段に分かれ、竹〽打ッつ清〽打たれつ竹〽打合ひしが、清〽一いき叫んで打込む卒塔婆、竹〽受け損じて骸骨は、清〽南無阿彌陀佛の聲もろとも、竹〽骸は碎けてばら〳〵〳〵。

トこの内角力太鼓にて兩人角力の振よろしくあつて、寒念佛負け卒塔婆にて打つてかゝる、幽靈も卒塔婆にてそれを受け、白囃子になり、立廻りよろしくあつて、トゞ骸骨ばら〳〵に碎ける。

（清）〽こいつを土産に骨酒と、（竹）〽有合ふ繩にて結ひからげ、手桶と一緒にうちかつぎ、（清）〽なんまいだ／＼。（竹）〽浮かれ／＼て寒念佛、（清）〽おのが宿所へ、

ト寒念佛骨を繩にて結び、手桶と一荷に擔ぎ、下手へはひる。

幕

寫し繪（終り）

十一段の
言立も
水魚連の
茶番めかして

是評判伊吾同餅

解説

「伊吾餅」は明治二年五月市村座に上演された、常磐津、清元の大切滑稽淨瑠璃、作者五十四歳の作である。書おろしの時の主なる役割は河原崎權之助（餅賣り義兵衞）、尾上菊五郎（おその）、岩井紫若（おいし）、市村羽左衞門（由松）、大谷友右衞門（伊吾）等であつた。常磐津連中は、小文字太夫、喜代太夫、文字兵衞、芝江等。清元連中は延壽太夫、志津太夫、德兵衞等であつた。

此の時の一番目が義士を書いた「名大星國字書筆」であり、且つ泉岳寺の開帳を當て込んで、境內の伊吾餅屋を舞臺に持つて來たもので好評であつた。

是評判伊吾同餅（高輪開帳）

常磐津連中

清元連中

〔役名――伊吾餅賣の義兵衞、同じく由松、同じく伊吾、手傳ひ太子吉、伊吾餅賣給仕女おいし、同じくおなみ、同じくおその、其他仕出し。〕

本舞臺一面の淺黃幕、日覆より青葉楓の釣枝、爰に○、△、□、開帳參りの仕出し三人立掛り居る、波の音、双盤にて幕明く。

○何と泉岳寺のお開帳は、時候がいゝのに名にし負ふ義士といふ靈寶があるので、大層人が出るぢやあねえか。

△それに品川といふ目當はあるし、海を見晴らして氣が替るから、いつでも外したことはねえ。

□先づ七軒はいふに及ばず、五町目の魚鐵などは爪も立たねえ大入りだ。

○ほんに炭部屋へ人がはひらねえばかり、二階も下も義士々々と、お開帳の客で一杯だ。

△芝肴の新らしいのを喰はせるのが山鹿流だが、今の大星はうまかつたな。

□なに、大星とは。

△それ、尺からあつた、大きな星鰈よ。

□成程、それで大星か、良金といひてえが、悪い洒落だ。

○何にしろ日が高いから、是れから天川屋の伊吾餅が十一段の言立てを聞いて、品川へ夜討としようぢやあねえか。

△そりやあ一味徒黨で出掛けたから、行きは行かうがお前の奢りか。

○どうして〳〵、夜討の事だから、何れ切合だ。

△先づ切合なら、金がほしいから不義士となつてお斷りだ。

□おいらもそつちへ變心だ。

○いや、しみッたれな奴だな。

△おゝ、不義士といへば、今靈寳場で買つた、義士と不義士の名前を書いた、分限帳はそこにあるか。

○おゝ、爰に持つてゐる。（ト懐から分限帳と見える、淨瑠璃艦を出して見せる。）

△ 其中に、品川與惣太といふ、不義士があるか讀んで見ねえ。
○ そんな名があるものか。(ト言ひながら淨瑠璃觸を開く。)
△□ 東西々々。
○ 「淨瑠璃名題、十一段の言立も、水魚連の茶番めかして、是評判伊吾伊吾餅、淨瑠璃太夫常磐津小文字太夫、ワキ常磐津――。」(トよろしく常磐津連名を讀む。)
△ どれ〳〵、おれに見せねえ。(ト△取つて、)「淨瑠璃太夫、清元延壽太夫、ワキ清元――。」(ト清元連名を讀み、)跡はお前讀んでくんねえ。(ト出すを、□受取り。)
□ 「相勤めまする役人――。」(ト役人を殘らず讀み、)
○ 分限帳だと思つたら、伊吾餅の淨瑠璃觸だ、とんだものと間違へたな。
△ 何にしろ、伊吾餅の曲舂きから、十一段の言立てを聞いた上、
□ 義士のお開帳のことだから、雁木から船に乘つて、
兩人 歸らうぢやあねえか。
○ それぢやあ、品川へ行かずにか。
□ お前の奢りなら行かう。

○又駄目を押すか。
△そのだめ、口上左樣。
○おきやアがれ。
　トやはり波の音双盤にて、三人上手へはひる。鳴物打上げ、知らせに附き、淺黄幕を切つて落す。

（高輪開帳の場）——本舞臺三間の間葭簀張り、伊吾餅の見世、正面富士の山長暖簾、軒口に雁木の暖簾、伊吾餅と書いた團子提灯を提げ、上手へ寄せて餡ときな粉の木鉢を載せし積臺、側に臼と杵、荷ひなぞを置き、下手暖簾を掛けて見切り、上の方一間奉納の庭、建仁寺垣、松の立木へ燈籠をかけ、此下に四ツ手駕籠、上に草履と短刀を挾み、下に蛇の目傘を開き、稻むら、奉納金五十兩といふ立札、下の方太き青竹へ玩具の兜、立烏帽子、大森鬘をかけ、上手に清元の淨瑠璃臺、後石摺の鏡、下の方常磐津の淨瑠璃臺、後銀張り鷹の羽の紋附し鏡、双方共段幕をかけ、總て泉岳寺開帳境内の體。爰に義兵衞、由松、伊吾の三人伊吾餅賣にて、對の裝、鉢卷、麻裏草履、赤襷をはすに掛け、おいし、おなみ、おその給仕女にて、同じく對の裝、赤前垂、赤い襷をかけ、皆々立掛り、道具納まる。とこれと一時に、上の方の段幕を切つて落し、爰に清元連中居並び、直に二上りの浮いた淨瑠璃になる。

清元〽戀のいろはの色品川を、かけて賑ふお開帳參り、四十七軒名に大木戸を、越して雁木へ乘合舟か、月の岬やたん〳〵高輪、いつも定見世名代の伊吾餅、ヤレサテコレサテスツトントン、味もよし松天川屋、氣も輕口な若い同士。
ト皆々振りあつて納まる。これより見世物の鳴物になり。

義兵 さあ〳〵、これは御當山の四十七士のお開帳には、のがれぬ家名の天川屋。
伊吾 伊吾よ〳〵とお子さま方が、皆御存じの伊吾餅は、本家本芝雜魚場が本元。
由松 御開帳中御當所へ、出張りをいたして商ひまするが、決して値段は高輪ならず。
いし お茶は新茶を差上げますから、奥の床几へお掛けなされ、向うを一目に御覽なされば、
なみ 皆さま方のお馴染の、その品川から羽根田をかけ、
その 遠くは横濱唐天竺、そのやうにも見えませぬが、安房と上總は向う前。
義兵 さあ〳〵、お茶を上つてお休みなさい。
由松 本家本元、
皆々 名代々々。
清元〽人足留めて呼び立てる、氣も輕口な若い同士。

ト皆々團扇を持ち、見物を招き、ちよつと身振りあつて、

義兵　これから粟餅の曲春から、忠臣藏十一段の身振り聲色仕方話し。
伊吾　國清さんや國周さんが、洒落にしなさる水魚連の、滑稽茶番の趣向にならひ、
由松　踊りもあれば俄もあり、又は役者のかげ芝居、御見物さまへ御愛敬に、
義兵　何でもござれに突きまぜて、餡ときな粉のうまみでごまかし、只今御覽に入れまする。
その　その十一段の言立てより、さつきからお客さま方が曲春を見て行きたいと、お待ちなされてゞござんす。
いし　御遠方のお方もあれば、お前方三人で、
なみ　曲春の拍子事を、少しも早く、遣らしやんせいなあ。
伊吾　いや遣るのは造作もないことだが、爰は一番色氣のあるやうに女の方でやつちやあどうだ。
義兵　そりやあおぬしの言ふ通り、おいら達よりその方が、御意にかなふに違ひない。
いし　いえ〳〵、何でわたしらに、曲春が出來ようぞいな。
伊吾　なに、出來ない事があるものか。
由松　これ、またそんな差合をいふか。（ト背中を叩く。

なみ　ほんにお前は、いやだねえ。(ト叩く。)
伊吾　えゝ、いやなことも知らねえくせに。
その　何にしろ、わたしらの方で、曲春の出來ぬといふは、
いし　先づあの杵が、持上らぬわいな。
伊吾　えゝ、うまいことを言つてらア。
由松　又口を出すか。(ト叩く。)
義兵　成程、杵が持上らぬといふ所へは氣が附かなんだ、それぢやあやつぱり古めかしくも、
由松　おいら達で遣らかさう。
伊吾　こねどりは、三人で替りく。
その　さあく早く。
三人　遣らしやんせいな。
義兵　さらば是れより、曲春の、
四人　始まりく。

ト伊吾は臼を眞中へ出す。義兵衞、由松は鉢卷をなし、杵を持ち前へ出る。知らせに附き、下手段幕

を切つて落し、常磐津連中居並び、

常磐津〽今年や世がようて木に餅がなるエ、ヤレサテヤレサテナ。

ト二人杵を持ち振りになり、伊吾これ取りの振り、此うち兩人杵にて伊吾の天窓を叩く、

伊吾　あゝこれ、待つてくれ〳〵、何でおれが天窓をつくのだ。

義兵　誰もつく氣で舂きはしねえが、つい曲舂きの拍子にかゝつて、

由松　思はず知らず、舂いたのだ。

伊吾　太神樂のおしなぢやあるめえし、こんなにぶたれるなら、おらあいやだ。

由松　もう是れから氣を附けて、ぶたねえやうにするから、遣つてくんねえ。

義兵　さあ〳〵、始めから遣つたり〳〵。

常磐津〽今年や世がようて木に餅がなるエ、ウヤヤレ、ヤレサテヤレサテナ、おらがかゝ衆を褒めるぢやないが、ぢたい燒餅疳癪持で、兎角物事胸にもつ、さうだぞ〳〵そこらでかみさん持上げてやんねえ、ヤレサテコレサテ、ドッコイサノサ、これは評判、伊吾よ伊吾餅。

ト兩人曲舂拍子の振りよろしく、伊吾これどりの振りあつて、餅を引取り、から臼をつかせる、是にて兩人杵にて伊吾の天窓を打つ。

伊吾　あいたゝゝゝゝ。又おれが天窓をつくのか。
義兵　空臼をつかせようと、餅を持つて逃げるからだ。
伊吾　それだつて是れが、曲春きのだいゝゝせんだ。
由松　それ、餅がだらける、これへ入れねえ。（ト木鉢へ餅を入れて片附る。伊吾天窓を撫で、）
伊吾　それ見ねえ、そこら中へ伊吾餅のやうな瘤が出來たっ（ト由松又杵で天窓を打つ。）えゝ、又ぶつのか。
由松　出た瘤を、引つこませてやるのだ。
伊吾　大きにお世話だ、うつちやつておきねえ。
義兵　さう怒らなくつてもいゝわな。

ト此時うしろの積臺の下より、太子吉手傳ひのこしらへ、晝寢をして居たる心にて伸びをしながら出來り。

太子　こいつは大笑ひだ、大笑ひだ、あはゝゝゝゝ、（ト大きく笑ふ、皆々見て、）
伊吾　えゝ、びつくりさせらあ、何がをかしいのだ。
義兵　さうして今まで、どこへ行つて居たのだ。
由松　人が出盛つて、忙しい最中だ。

伊吾　どこへ引込んで居たのだ。
太子　なにさ、昨夜新宿のきやつにせめられて疲れたから、出し臺の下で、とろ〳〵とやつたのさ。
伊吾　えゝ、悪く洒落るな。（ト太子吉を打つ。）
義兵　どこを押せば、そんな音が出るのだ。（ト打つ。）
由松　まだ手めえは、目が覺めねえな。（トまた打つ。）
太子　さあ、もつと打つてくれ、初音の鼓ぢやあねえが、打てば音の出る體だ。（ト太子吉ムキになり。）
義兵　生ぎゝをぬかしやあがるな。（ト又打つ。爰へおその出で、）
その　もう〳〵よいわいなあ。太子吉さんももう默つて居やしやんせ、是れから仲直りに御見物さま方のお待兼ね、忠臣藏十一段の身振り聲色、道化茶番を、早くお目に掛けようぢやござんせぬか。
太子　それがいゝ〳〵。
伊吾　又口を出しやあがるか。
太子　おッと出直し。（ト太子吉は跡へさがる。）
義兵　いつも遣る言立ては、古めかしくなつたから、けふは一番新らしくやりませう。
由松　先づ大序は、水魚連でやる、新芝居の聲色がよからう。

いし　誰でお遣ひか知らないが、直義は太夫元の聲色で、由松さんがようござんせう。
なみ　若狹之助は明石屋の聲色で、伊吾さん、お前遣ひなさんせいな。
伊吾　なに、おいらに明石屋を遣へ、おれが遣つて似ればいゝが。
太子　不斷の聲が似て居るから、お前ならきつといゝ。
義兵　それぢやあ友右衛門の若狹之助、師直は誰がよからう。
その　師直は山崎屋の聲色で、義兵衛さんがようござんせう。
由松　どうして〳〵、おらあ山崎屋の聲色はちつとも似ねえ。
なみ　似なくつても、ようござんすわいなあ。
義兵　全體權之助は嫌ひだから、遣つたことがねえ。
その　そんな事を言はないで、まあ遣ふとなさんせえな。
由松　さうして、二段目の役割は。
その　まづ差詰め、おなみさんの小波。
太子　おなみさんの小波なら、わしが力彌とやらかさうか。
伊吾　えゝ、手めえに力彌をされてたまるものか。

太子　なにさ、さう安くしねえものだ、是れでも田舍芝居で、猪と力彌では當て込んだものだ。
由松　貴樣は力彌はむづかしいが、猪の方なら持役だらう。
いし　さうして力彌は、誰がようござんせう。
義兵　裝風俗が優しいから、差詰め力彌はおれが役だ。
由松　これもをかしくつてよからう。
義兵　なに、をかしいことがあるものか。
伊吾　それから、三段目の喧嘩場は。
義兵　喧嘩場は色氣がねえから、ずつと色氣のあるやうに、お輕勘平の落人がよからう。
由松　成程そりやあよからう、さうしてお輕はおいしさんかの。
義兵　所を少し北向きに、おれがお輕をやらかさう。
太子　こいつは大笑ひだ、あはゝゝゝ。
伊吾　えゝ又四文と出やあがらあ。
なみ　さうして勘平わえ。
いし　勘平は由松さんがようござんす。

その　成程、それがよからうわいなあ。
太子　そこへ猪は出られまいか。
なみ　猪の出るのは、五段目でござんす。
太子　えゝ猪が出ると、ぶつてしめるが。
義兵　落人の道行へ猪が出られてたまるものか。
いし　先づ三段目は道行で、それから跡の四段目は。
その　おとつさんの身振り聲色で、由さんが判官の腹切り、これはきつとようござんせう。
太子　そこへ力彌で出ませうか、もし惡くば猪で出やせうか。
伊吾　よく猪で出たがる男だ。
由松　はて五段目の鐵砲場は、義兵衛さんのお輕のがたで、おいしさんの定九郎、おそのさんの與一兵衛
　といふのはどうだ。
いし　わたしに定九郎が、出來るものかいなあ。
その　それよりはわたしに與一兵衛は、あんまりではござんせぬかいなあ。
由松　出來ないところがお慰み、とほけて遣つておくんなせえ。

太子　そこへこそ猪が出ますか。

なみ　爰が猪の出所でござんす。さうして次の六段目は。

その　おいしさんと義兵衛さんのお輕勘平に、おなみさんの婆さんはどうでござんす。

なみ　おそのさん可愛さうに、わたしや婆さんはいやでござんす。

太子　婆さんの替りに、猪が出ようか。

伊吾　また猪か、欝陶しい男だ。

由松　さて七段目は惣掛合ひ、卽席見立の思ひ附き、惡口の言ひ次第。

伊吾　八段目が行列に、九段目が槍踊り、十段目が伊吾餅の曲切りの拍子ごと。

由松　十一段は大切で、夜討で逃げる裸踊り。

義兵　先づ伊吾餅の御愛敬に、忠臣藏の言立ても、大序は名に負ふ鶴ヶ岡、直義公の參詣に、隨ふ師直若狹之助、三人出合のかけ合ぜりふ、聲色が最初でござい。

常磐津〽佳肴ありと雖も、食せざれば其味ひを知らずとは、國治まつてよき武士の忠も武勇も隱るるに、たとはゞ星の晝見えず、夜るは亂れて顯はるゝ例を爰に假名書の、〽泰平の世の政事直義公仰せ出さるゝは。（ト此内床几を出し、三人扇を持ち、これへ腰をかけ、）

由松　扨大序に遣ひまするは、市村羽左衛門にござりまする。

太子　橘屋ア。（ト由松聲色の思入にて、）

由松　いかに師直、この唐櫃に入れ置きしは、父尊氏に滅ぼされし新田義貞後醍醐天皇より賜つて着せし兜、敵ながらも義貞は清和源氏の嫡流、着捨ての兜といひながら、其儘にも捨ておかれず、當社の御藏に納めよと、父尊氏の嚴命なり。

常磐津〽嚴命なりとのたまへば、武藏守承はり。

跡は河原崎權之助。

伊吾　山崎屋ア。

義兵　ちとせりふが怪しいから、忘れたら附けてくんねえ。（ト扇を額へ當て、）こは思ひ寄らざる御仰せ、新田が清和の末なりとて、着せし兜を尊敬せば。（ト忘れたる思入あつて、）何だッけな。

由松　御旗下の大小名。

義兵　御旗下の大小名、清和源氏はいくらもある、奉納の儀は然るべからず、此儀御無用に遊されい。

女三人　山崎屋ア。

伊吾　跡は、谷友右衛門。

義兵　明石屋ア。
伊吾　いや、左樣にては候ふまじ、此若狹之助が存ずるは、是れは全く尊氏公の御計略、新田に徒黨の討ち漏らされ御仁德を感心し、攻めずして降參さする御手段と存ずれば、御無用との御評議は率爾かと存じまする。（ト伊吾首を振つて、聲色のこなしにていふ。）
義兵　默らッせえ若狹之助殿、出頭第一の師直に向つて、率爾とは何の戲言。何だ〳〵。
伊吾　義貞討死の砌りは大童。
義兵　義貞討死の砌りは大童。何だ〳〵。
由松　死骸の傍に落ち散つたる。
義兵　死骸の傍に落ち散つたる。何だ〳〵。
伊吾　また忘れたのか。兜の數は四十七。
義兵　兜の數は四十七。何だ。
伊吾　えゝ無器用な男だな。
義兵　えゝ無器用な男だな。（ト聲色のやうにいふ。）
由松　そりやあおめえの事だ。

權　そりやあおめえの事ぢやよなあ。

皆々　山崎屋ア。

義兵　もう聲色は御免だ〳〵。跡は二段目〳〵。

由松　扨二段目は桃の井の屋敷へ使者に力彌が來り、許嫁の本藏が娘小波と出合の所でござります。

常磐津〽疊ざはりも故實をたゞし、入來る使者の大星力彌、清元〽まだ十七の角髪や、二ツ巴の定紋附、常磐津〽大小さすが由良之助の、子息と見えしその器量。

ト此うち義兵衞下手にある若衆鬘を冠り、靈寶場の上下を着て有合ふ竹を二本さし、力彌の思入にて出る。

義兵　これ〳〵、どこで上下を借りて來たのだ。

今靈寶場で借りて來たのだ、何と力彌と見えるだらう。（ト眞面目になり）

清元〽しづ〳〵と座に直り。

誰ぞ御取次頼み存ずる。

いし　さあおなみさん、お前が出るのでござんす。

なみ　わたしやどうぞ、堪忍して下さんせいな。

その　そんな事を言はないで、早く小波で出やしやんせいな。

常磐津 〽小波ははッと手をつかへ、ぢつと見合す顔と顔。

トいやがるおなみを、おその無理に捉へて、小波の振りをさせる。是れにて人形振りになり、

清元 〽親と親との約束に、互ひの胸の戀人と思ひながらも恥かしく、常磐津 〽口へは出ねど顔へ出し、心土筆や早蕨の手をもぢ〱と言ひかぬる。

清元 〽梅と櫻の花角力、常磐津 〽枕の行司、清元 〽なかりける、常磐津 〽小波はやう〱胸押鎮め、

ト此うちおその人形遣ひの思入にて、おなみ人形振りあつて、おそのせりふを附け、

いし　これは、ようお出でなされました、其御使者の御口上、受取る役はわたしゆゑ。

常磐津 〽お前の口からわたしの口へ、ついかう〱と、おつしやつてと寄添へば、力彌は跡へ身を控へ、

トおなみよろしくあつて、義兵衞も同じく人形の思入、常磐津早口にて、

詞 〽これは無作法千萬な、惣じて口上の受取り渡しは行儀作法が第一、明日は管領直義公へ未明より相詰め申す筈の所、正七ツ時までにきつと御前へ相詰めよと、師直樣より御仰せ、萬事間違ひなきやうに今一應お使者に參れと、主人判官の申附、此通りを若狹之助樣へ御申上

げ下されい。〽と水を流せる口上に、小波はうつとり顔見とれ。

ト義兵衞、一人遣ひの人形振りよろしくあつて、

なみ　ほんに馬鹿げた顏でござんすなあ。（ト義兵衞を突き倒す、義兵衞起上り。）

義兵　浄瑠璃〽力彌はしづ〳〵立歸る。（ト義兵衞、一人で語りながら下手へ行く。）

由松　さて松切りかち三段目、喧嘩々々の御殿を預かり、直にお輕勘平落人の淨瑠璃としようか。

清元〽色で逢ひしもきのふけふ、堅い屋敷の御奉公、あの奥樣のお使ひから、二人が鹽谷の御家來で、その惡緣か白猿によう似た顏の錦繪の、こんな緣が唐紙の鴛鴦の番ひの樂しみに、泊り泊りの旅籠屋で、ほんの旅寢の假枕、嬉しい中ぢやないかいな。

ト義兵衞、由松、世話のクドキの振りよろしくあつて、是れへ伊吾からみ、三人よろしくあつて、

常磐津〽いつかお輕と勘平の、その振事が誠となり、清元〽ひつたり抱き舂抜きの餅より早く契りける。

トおそのうつかり出るを由松おさへて、

由松　えゝ、氣がわりい。（ト、由松おそのに無理に寄添ふ。）

常磐津〽知らず立つたる後より、逸散に來る手負ひ猪。

ト早笛になり、太子吉來納場の稻むらを冠り、猪の思入にて駈け廻る、由松、おそのほぐれて、

伊吾　えゝ、猪の出るは、五段目だのに。

由松　邪魔をしねえで、引込まねえか。

太子　それだつて二人があゝやつて、いま〳〵しいから、猪で脅してやつたのだ。

ト これをキツカケに、四段目の淨瑠璃になる。

常磐津〽大小羽織を脱ぎすつれば、下には川意の白小袖、無紋の上下死裝束、皆々これはと驚けば、

女三人　さあ〳〵、四段目でござんすぞえ。

義兵　扨四段目は石堂山名の上使のお入りに、判官がかねて覺悟の腹切を、手づまめかして、御覽に入れまする。

常磐津〽判官は靜々と、疊の上へ座をしむれば。

ト此うち眞中へ床几を二脚合せて置き、由松、上下を着て床几の上へ住ふ。

常磐津〽力彌は仰せを承はり、かねて用意の腹切刀、御前に直し置く。

ト義兵衞、開帳場の三方へ紙を敷き、杉箸を載せ、力彌の思入にて持つて出て、由松の前へ出し、

一座高う控へ居りまするは、伯州の城主鹽谷判官にござりまする。何れも樣へお引合せの口上も

濟みますれば、先づ三方より改めまして、腹切の一曲を御覽に入れ奉りまする。

ト かんからの入りし、手づまの鳴物になり、

清元〽判官肩衣後ろへはねのけ、襷を背なへ十字にあやどり、常磐津〽五ツの指と三方を左右に改め、腹切り刀、清元〽左りの腹へ突くよと見えしが、常磐津〽更に血汐の出でざれば、

ト 此うちかんからを冠せ、由松肩衣を刎ねのけ、赤い襷をかけ、左右の手を改め、三方の裏表を見せ、紙を改めて箸を包みつゝ、脇腹へ突立て思入あつて、

由松 力彌〳〵。

義兵 はッ。

由松 腹の血は。

義兵 いまださつぱり出ませぬ。

由松 むゝ、血が出ぬとは、殘念な。

常磐津〽切口へ手を差込んで、

ト 合方へかんからを冠せ、手品の鳴物になり、竹、切口より赤き紙の細いのを長く引出し、手づまの思入。

〽清元 色も赤穂の鹽濱へ、打來る浪の寄る如く。

ト此うち太子吉、奉納場の蛇の目の傘をそつと持ち來る。

〽清元 女浪男浪のふきわけ〳〵。（ト由松、白き細き紙を出し、向うへ投げ引寄せる、此時傘を出し、）

〽常磐津 ひよつくり替る蛇の目傘。（ト由松、傘を取り、ちよつと振りあつて、傘をかつぎ思入。）

義兵 さて五段目は暮明きの、彌五郎勘平が件を預り、直に與一兵衛の出でござります。〽清元 子ゆゑの闇に

〽常磐津 またも降り來る雨の足、人の跫音とぼ〳〵と、道は迷路に迷はねど、突く杖も、〽常磐津 直ぐなる道を堅親仁。

由松 さあおそのさん、與一兵衛で出なさらないか。

その 外の事なら出るけれど、與一兵衛では出られぬわいなあ。

いし おそのさんの與一兵衛より、わたしの定九郎は、堪忍して下さんせいなあ。

由松 今更そんな事を言つちやあいけねえ。

義兵 何でもいゝから、遣んなせいな。

その それでも女ばかりの五段目も、をかしいではないかいなあ。

いし さうしてどんな事を言ふのだか、ちつともわたしや知らぬわいなあ。

山松　なにさ、むづかしい事はねえ、大津繪節でやるぢやあねえか。

伊吾　おいしさんが、おゝい／＼親仁どの、其金こつちへ貸してくれと言つたら、いえ／＼金ではござりませんと、唄の通りに遣んなせえな。

その　それでは、大津繪でやればよいのでござんすか。

伊吾　おゝ、いゝとも／＼。さあ、子ゆゑの闇から遣り直した／＼。

清元〽子ゆゑの闇に突く杖も、常磐津〽直ぐなる道を堅親仁。

トおその薄柿の手拭を冠り、與一兵衛の思入にて前へ出る。

義兵　もつと腰を曲げなくつてはいかねえ。

その　かうでござんすかいなあ。（ト杖をつき、よろしく腰を曲げて思入。）

常磐津〽一筋道の後より、（トおいし以前の蛇の目傘をさし、尻端折りにて、）

いし　おゝい／＼。

清元〽親仁どの、その金こつちへ貸してくれ。常磐津〽與一兵衛びつくり仰天し、いえ／＼金ではござりません、娘がしてくれた。清元〽まゝにならない浮世をかこち、結ぶむすびも六十の上を三ツ四ツ皮包み。常磐津〽案じる姿の梅干も、小判に形は似て居れど、ひね澤庵の山吹色

清元〽用意の握り飯お先きへさんじましよ。常磐津〽やれ／＼死太い親仁めと抜きはなし、何の苦もなく一抉り。

ト此うちおいしおそのよろしく振りあつて、おいし定九郎の思入にておそのをこぐる。

常磐津〽知らず立つたる後より。

ト早笛になり、太子吉稲むらを冠り、くる／＼と廻り邪魔をする。

義兵　えゝ、キツカケの悪い所へ出たぜ。

太子　おつと、まだ早かつたか。

常磐津〽何の苦もなく一抉り、清元〽命と金との恩愛妹背の、常磐津〽二ツ玉。

トおいしおそのよろしく振りあつて納まる、由松、伊吾出て、

清元〽つゞけてあがる鐵砲の、花火の玉屋焔硝の、匂ひ鍵屋のあげ初めは。

常磐津〽一月早い五月闇、五十兩國船込に、清元〽あとや千崎争うて、急ぐ早野のかんちやんどんちやん、定九郎幕のかげ芝居、常磐津〽晝も與一兵衛、寫し畫の、うちや床しきとものうち、

清元〽ちよつと渡りの線香花火、常磐津〽唐松、清元〽すゝき、常磐津〽露の玉、清元〽落ちてしつぽり濡れの幕、常磐津〽あすは財布の底見えて、二つ玉より眼の玉の、清元〽飛び出る高い勘

定は、常磐津〽これ猪喰ひし。
ト此うち両國夜見世の鳴物を冠せ、由松、伊吾、よろしく振りあつて、猪喰ひしといふ文句にて、太子吉猪にて又出る、由松、伊吾、猪を捉へ、
常磐津〽むくいなり。（ト節の留りに、兩人太子吉を投げる。太子吉起き上らうとして、）
太子　あいたゝゝゝゝ、腰をひどく打つて、動くことがならぬ。是れぢやあ晩に歸られねえ。
伊吾　動くことが出來ねえなら、いつもおめえが品川へ行くやうに、おんぶで行きねえ。
太子　おんぶはいやだ。
由松　おんぶがいやなら、居殘りのやうに、お馬で行きねえ。
太子　お馬もいやだ。
義兵　お馬がいやなら。
三人　お駕籠で來なせえ。（ト奉納の四ツ手駕籠を取つて出す。）
義兵　これから續きが六段目。
その　ほんに是れから六段目は、五段目からの續きゆゑ、縞の財布ぢやなけれども、同じ縞柄の人ばかり。
いし　お輕勘平もさつき出た、おなみさんの婆アも可愛さうだ、何ぞ代りはござんすまいか。

義兵　おつと有馬の人形筆、いゝ思ひ附きがひよい〳〵と出る。

由松　どうで、ろくなことぢやァあるめえ。

義兵　今爰へ駕籠が出て來たから、六段目の一文字が、祇園から連れて來た、京の駕籠屋の眞似はどうだ。

いし　そりや面白うござんせう。

なみ　さうして京の駕籠屋わえ。

義兵　先づ東京と違ふのは。

常磐津〽所がらとて廓の駕籠も、傘さしてかく祇園町、清元〽不斷出入りに一文字屋と、供に二文の渡しも越して、常磐津〽杖を立場の五文どり、清元〽餅を力にがつくりそつくり、常磐津〽猫ぢや〳〵ぢやなけれども、下駄穿いて杖突いて、清元〽汗を絞りの浴衣なり常磐津〽くはへ煙管で長き日を、清元〽松の小陰に一寢入り、常磐津〽夢に牡丹餅内儀から、額の酒手に裾からけ、清元〽三枚肩で、

ト此うち、義兵衞傘をさし太子吉を相手に、駕籠をかつぎ、駕籠屋の振りあつて、よき所よりおいし此中へはひり、三人にてよろしく振りあつて、また駕籠をかつぎ、

兩人　ヨウサヤテウサ。（ト駕籠をかく振りあつて、）

義兵 常磐津へ掛けごゑのろい京の駕籠。さあ〳〵是れから、七段目〳〵。

清元へ花に遊ばゞ祇園あたりの色揃ひ、常磐津へ東方南方北方西方、清元へ彌陀の淨土が塗りにぬり立て、常磐津へひつかりひか〳〵、清元へ光り輝く箔や藝子に、常磐津へいかに粋めもうつゝぬかして、清元へぐどんどろつく、わい〳〵のわいとさ。

ト此うちおいし、おなみ、おその三人振りあつて納まる。此うち太子吉簾の蔭へはひる。

伊吾 太子吉め、どこへ行つたらう。

義兵 駕籠の中で、寢てゞも居やうか。（ト兩人駕籠の垂を上げる。此中に奉納の庭の丸石載せてある。）

伊吾 や、駕籠の中と思ひの外、

義兵 とんだ松浦佐用姫だ。（ト太子吉出來り）

太子 これぞ九太夫が、一ッの計略。

由松 惡く洒落るぜ、何が計略だ。ときに、此石を始めとして、いつもの見立をしてはどうだらう。

お菊 成程これは。

女三人 ようござんせう。

義兵　重い石から輕口の、さあ〳〵見立ての、
皆々　初まり〳〵。（ト是れより替つた合方になり、）
男三人　智慧を貸さうか、智慧かそか。
女三人　遲いと酒を呑ますぞえ。（ト太子吉駕籠の中から石を出し、）
太子　これをやつとこさと、斯う持つて。（ト石を擔ぎあげ、）力持とはどでごんす。
伊吾　何だ、石を持つて力持は、當りめえぢやあねえか。
義兵　こんな面白くねえ見立はねえ。
太子　そんならおめえ達、持つて見なせえ。
由松　誰が持つ奴があるものか。
皆々　智慧を貸さうか、智慧かそか。
　　トこれより皆々思ひ附きの見立、毎日當りによろしくあつて、ト、太子吉きな粉の木鉢を持ち出で、
太子　これをちよつくらちよいと、斯う冠せ。（ト木鉢を冠り、）大笠なんぞはどでごんす。
　　ト木鉢を取ると天窓へきな粉かゝり、黄色になり、皆々見て笑ひ、
義兵　これをちよつくらちよいと、斯うのせて。（ト盆へ太子吉の顏をよろしく載せて、）伊吾餅なんぞはど

でごんす。

皆々　こいつはえらい、えら趣向ぢや。

由松　さあ〱、段々日が傾く、早く八段目の行列々々。

清元〽田子の浦邊に打寄する、小浪戸名瀬の道行は、常磐津〽やがて嫁入りに三國一の、富士の煙りに立つかさや、清元〽さツさ振込め對の鎗、常磐津〽ありやりや、清元〽こりやりや、常磐津〽よいやさ、清元〽面白や。

ト立役女形一人おきに並び、行列模様の手踊りよろしくあつて、

常磐津〽實に類ひなき忠と義の、清元〽鑑に殘る天下一、常磐津〽譽れは世々に輝きて、清元〽錆びぬその名ぞ、常磐津〽有難き。（ト皆々引張りの見得よろしく）

義兵　先づ今日はこれぎり。

ト目出度く打出し。

伊吾餅（終り）

春日の鹿
伊勢の鶏
八幡の鳩

能中富清御神楽

解　説

「能中富清御神樂」は明治二年八月（作者五十九歳の時）市村座に上演された富本清元掛合の大切淨瑠璃である。書きおろしの時の役割は河原崎權之助（手力雄命、鳩ヶ峯の翁實は鳩の精、春日の仕丁五郎丸、舞乙女夕榮）、關三十郎（猿田彥命）、岩井紫若（うすめの命）、市村羽左衞門（樂人求女）、嵐璃鶴（放鳥賣鶴作）、河原崎國太郎（女鳥賣お國）等であつた。

富本連中は、富本太夫豐洲、宮登太夫、名見崎德治、名見崎安治等。清元連中は延壽太夫、家內壽、順三、順三郎等であつた。

能中富清御神樂

上の卷　天岩戸に旭出の鷄
中の卷　石清水に靈時の鳩
下の卷　春日社に紅葉鹿

富本連中
清元連中

〔役名――手力雄命、猿田彥命、麁道、鈿女命、鳩ヶ峰翁實は鳩の精、放鳥賣鶴作、女夫鳥賣お國、蔦奴二人、春日の仕丁五郞又、舞乙女夕榮、樂人義勝、春日仕丁四人、春日の鹿。〕

（天岩戸の場）――頭取出て淨瑠璃觸を讀んではひる。と東西の窓をおろし、上下へ篝火を出し、よき程に淺黃幕を切つて落し、下の張物打返し、爰に富本連中居並び、大薩摩がゝりの淨瑠璃になる。

〽それ神代の故事を、うつしてこゝに天照す、仰げば高き大神、岩戸に隱れたまひてより、晝夜を分かぬ常闇に、目ざすも誰と白和幣、くらきを照らしたまはれと、八百八千萬の神々

が、いさめの神樂ぞ勇まし〻。

卜謡への神樂になり、手力雄命劔をさし、鷄を抱へ、上手猿田彦命白髪鬘、附髭裝束、白の差拔を端折り、幣附の榊に八ツ花形の鏡を掛け、是れを持ち、下手鈿女命、さらげかつしき、白の着附、緋の袴、織物の舞衣、幣の附きし短き榊の枝を持ち、此の見得にて三人せり上る。鳴物打上げ、かすめし山颪三人思入あつて、

手力　天地陰陽二儀に別れ、伊弉諾伊弉冉二柱の御神の命により、天照大神、あまねく世界を照らしたまひ、民を撫育ましませしに。

猿田　弟の君たる素盞嗚命、勇氣に任せ荒々しき、所業を御神疎んじたまひ、數度御諫言ありしかど、いつかなそれを用ひたまはず。

鈿女　いよ〳〵荒き所業ゆゑ、弟の君を懲さん爲め、これなる岩窟へ籠りたまひ、天の岩戸を堅く閉し世界を照らしたまはねば、世は常闇の黒白もわかず。

手力　諸民の歎き見るに忍びず、八百萬の神打ち集ひ、神の御心和ぐやう、思兼神の計らひにて、

猿田　日の御神になぞらへし八咫の御鏡榊に掛け、諸所に大焚きの篝を焚き、

鈿女　長鳴鷄に時をつくらせ、諸神集うて神樂を奏し、

手力　工み作りし俳優を、鈿女の命に舞ひ唄はせ、

猿田　神樂の拍子取り〴〵に、いと面白く打ち囃せば、

鈿女　若し大神の怪しみたまひ、岩戸を明けさせたまひなば、

手力　この手力雄が御手を取り、

猿田　再び世界へ出しまゐらせ、

鈿女　あまねく御國を照らしたまひ、

手力　五穀成就あるやうに、

猿田　八百萬の神諸共、

鈿女　力を合せて、

三人　祈り申さん。

〽天地を拜し淸らかに、諸の不淨を猿田彦、神慮を思ひかねてより工み作りし俳優の、役に
鈿女と手力雄。

ト手力雄岩臺の上へ鷄を置き、三人天地を拜しよろしく振りあつて、猿田彦は上手の岩臺へ腰を掛け鈿女眞中へ住ふ。

〽折から告ぐる常世なる、長鳴鷄の初聲に、

トかすめて風の音、鷄仕掛にて羽ばたきして時を告げる、三人思入あつて、

猿田　長鳴鷄の初聲は、日の御神の出でまゐらす、時節來ると覺えたり。

手力　猶豫いたさず鈿女命は、諸神の奏す神樂に合せ。

鈿女　用意よくば歌舞の一指し、

手力　疾々この場で、

二人　御舞ひ候へ。

鈿女　心得申して候

〽既に時節と諸神が、羯鼓と拍手打ち囃せば、鈿女命は再拜なし。

トこれへ冠せ誂への神樂の鳴物になり、鈿女榊を持ち、四方を拜し榊を戴くをキツカケに、

〽見渡せばあら面白や限りなき、狹田の長へに、日の御神の惠みにて、みのる十寸穗のます穗の稻の、天津空吹く風につれ、青海原の漣や、寄せては返るともうねり、〽猶も八隅の隅々までも、照させたまへや日の御神々々、八重の浮雲吹き晴れて、和光の光願ふ俳優。

ト此うち鈿女舞の振りあつて風の音になり、

〽時しも烈しき山颪、大焚きの篝吹き消せば、さゝへなす神顯れ出で、

トこれにて、左右の篝一時に消え、風の音烈しく、魔神異形のなり、劍を持ち出ろ、猿田彦手力雄は是を見て、

〽鈿女命に抱附けば、あれとばかりに振拂ひ、こなたに窺ふ猿田彦、扨こそ魔神と探り寄り襟上取つて引き退くれば、又立ち掛るを手力雄もんどり打たせて投げ退けたり、篝火なければ常闇に、三人も暫し猶豫ひける。

ト此うち魔神鈿女にかゝるを、猿田彦探り寄り、襟上取つて突放す、魔神たぢ〳〵として手力雄に行當り、手力雄其儘取つて投げ退ける。此音にて三人三方に別れ見得。誂へ神代めきしだんまりの鳴物になり、猿田彦鏡を懐へ入れ、榊にて足を掻く。手力雄これを捉へ、ぐつと引く。猿田彦よろ〳〵として鈿女へ行當り榊を放し、手力雄榊にて打つて行く、魔神掛り、始終猿田彦手力雄は魔神を捉へんといふ、探り合ひの立廻り、皆々よろしく、

〽互ひに挑み爭ふ折、又もや告ぐる長鳴鶏の、聲に岩窟の間よりさす日の影に手力雄、岩戸に手を掛け引き明くれば、あたりまばゆき日の光り。

ト又立廻りのうち、鶏鳴く、正面岩戸の間より明りさす、是れにて手力雄魔神を投げ、岩戸へ立ちか

かる。猿田彦魔神を引附ける。トゞ手力雄岩戸を引き明ける。内に紅張り莫大なる太陽あり、この光に魔神恐れる思入。

猿田　再ひ岩窟を、

鈿女　出現ありしか。

手力　あら有難や。（ト魔神うぬと立ち掛れば、ちよつと立廻つて、手力雄岩戸にて魔神を押へ、）

三人　悦ばしやなあ。

〽四方輝く御神の、妙なる光ぞ。

ト樂の入りし誂への鳴物にて、三人を載せしまゝ二重を後へ引く、後より石の玉垣、石清水遠見の張物をあほり返し、三人を隠す。是れにて富本連中を段幕にて消す。大拍子になり、居所替りに替る。

（石清水の場）――本舞臺三間の間石の玉垣、この向う石清水社の遠見、上手よき所に石井筒を押出し、下手へ「放生會、石清水」といふ高札を出し、杉の釣枝紅葉に替る。總て石清水境内の體。大拍子にて道具納まる。と直に鳴物打上げ、知らせに附き、上手張物打返し、爰に清元連中並び居て、直にかゝる。

〽直な世の例に引くや弓矢をば、守りの神の石清水、淸き流れの御手洗に結ぶ妹背の鳥賣も番ひはなれぬ女夫連れ。

ト大拍子にて花道より鳥賣男鶴作袖なし羽織、淺黄の頭巾、手甲脚絆、草履にて鳥籠をかつぎ、同じく女鳥賣お國同斷のなり、小さなる鳥籠をかつぎ、兩人花道にて留り、

〽今宵は月もよい中の秋の祭の放生會、それを目當に木幡から、戀の山崎鳥羽越えて、小鳥商ふ取りなりも餘所目に色と瑞籬や、參り下向も仇口に赤らむ顏の初紅葉、半は靑き若い同士、宮居間近く歩み來て。

ト此うち花道にて、兩人鳥籠を下へ置き、よろしく振りあつて、トゞ籠を擔ぎ舞臺へ來て、よき所へおろし、

男　これお國けふは朝から天氣もよく、此頃にない日和ゆゑ、八幡樣の放生會へ、夥しいこの參詣

女　ほんに去年もお前と二人で、放生會に賣りに來たが、去年にまさる賑やかさ。

男　そりやあ去年に勝る筈だ。今年は世界も昔に返り神々樣のお流行ゆゑ、放し鳥も澤山にきつと賣れるに違ひない。

女　どうぞ早う賣り切つて、明るいうちに渡しを越し、家へ歸りたいなあ。

男　いや、今夜は名におふ十五夜ゆゑ、明るいうちより日が暮れて、月を見ながらぶら〳〵と、手に手を取つてひつたりと、比翼の鳥で歸らうわいの。（ト女房の手を取り引き寄せるを振拂ひ）

女　またそんな常談はかり。

男　何にしろ爰らがよい場所、まづ放し鳥の見世を出し、一服やつてお客を待たう。

女　ほんに、それがようござんす。（ト兩人捨石へ腰をかける。）

男　あゝ、いつ見ても見あきのない、石淸水のこの風景。

女　前は名におふ淀川に、

男　後は高き鳩の峰、

女　左手は伏見、

男　右手は鳥羽、

〽四方の景色を打ちながめ、首尾よく吉田の搯火打ち、吸附け煙草に寄添うて、二人は憂きを忘れ居る。（ト兩人搯火打ちにて火を打ち、吸附煙草に媚めきしこなしあつて、）

〽我年も社に掛けし鈴ならで、幾年經りて翁さび、昔に替る男山。

ト宮神樂になり、花道より翁、白髮鬘萠黄の投頭巾、派手なる袖なし羽織古風の小袴、草履、鳩の杖

を突き出來り、花道にてよろしく杖を立て、

〽腰は二重に今ははや、三重の帶さへ四重廻り、箍はゆるめど氣は若く、色香媚めく藝子に逢へば、腰をのばして見あげ雛、七重に八重に九重の都育ちの姿に見惚れ、先きよりこちがつい轉び、杖の手前も恥かしと心輕々薄草履、神垣さして來りける。

ト此うち翁花道にて、年寄りの振りよろしくあつて、舞臺へ來り、

〽それと見るより、鳥賣りが、（ト鳥賣り夫婦立上りて、）

男　サア〱、お放しなさい〱、生けるを放す放生會。

女　八幡樣へ御奉納に、鳥は山雀鳩雀。

男　何でもかでも、お望み次第。

兩人　さあ〱、お放しなさい〱。（ト翁はこれを聞き思入あつて、）

翁　おゝこれは女夫の鳥賣どの、此身の祈禱に其鳥は、殘らずわしが放しませう。

男　えゝ何とおつしやります、私共二人の者が、持つて居ります此の鳥を、

女　殘らずお求め下さりますか。

翁　求めるとも〱、幾羽でも惣仕舞にして放しませう。

男　それは何より有難い、仕舞にして下さりますとは。
女　また來年も參りますから、どうぞお願ひ申します。
翁　おゝ相替らずござらつしやい、年々今日の放生會には、此の社內で賣る鳥は一羽も殘さず放してやります。
男　それはよい御功德でござりまするな。
女　それはさうとこちの人、この放生會といふものは、いつ始まつたものでござんす。
男　さア吉原雀の文句にあつたが、さつぱりと忘れてしまつた。
翁　おゝ放生會の始まりは、ずんと昔の事にして、養老四年秋の末、遙に遠き豐前の國、宇佐八幡の托宣にて、諸國に始まる放生會、其時は九月であつたが、それから後は八月十五日に極つたのぢや。
男　それでは、宇佐八幡樣が。
翁　おゝ、放生會の始まりぢや。
女　さうして、爰の八幡さまは。
翁　申すも恐れ多けれど。（ト翁腰にさしたる扇を取り、前へ出て、）

〽抑々當社男山八幡宮と申すのは、貞觀元年秋の末、いとも賢き勅定にて、爰に勸請なしてより、流れ絶えせぬ石清水、神も榮ゆる榊葉の梢に群がる山鳩に、鳩の峰とも申すなり。

ト大小入りにて、扇を持ち、よろしく振りあつて、

〽然もわれらが若き時、八幡祭りが見事に出來て、きやつめと對の染浴衣、浮名立つ浪玉兎はねたやつではないかいな、昔思へば恥かしや。（トよろしく振りあつて、）

男　これは〳〵、御隱居さまも堅いお顔でござりまするが、やはり昔は色事師。

女　思ふお方とそのやうに、對の模樣の染浴衣、お羨しうござりますわいなあ。

翁　いや、鳩の峰の由來から、とんだ事を言ひ出したが、斯う見たところがお前方も、定めて色でござらうの。

男　どうして〳〵私共は、そんな事ではござりませぬ。

翁　いや〳〵、それは嘘ぢや〳〵、神は見通し僞りいふと、忽ち罰を蒙りますぞ。

男　神の御罰を蒙ると、聞いては嘘はつかれない。

女　そんなら爰で、身の懺悔。

翁　さあ、有體に言つたり〳〵。
女　いやも、話せば長いことながら。
〽ほんに二人が馴初めは、日待の晩に約束の、日柄を待つて親鳥の、目白を忍び山雀の小坂越してきくいたゞきや、闇い背戸家へさす月に、互ひに顏を三十三ざい、誠明かして噓つかず雀ならねどしつぽりと、肌を合して溫め鳥、嬉しい仲ぢやないかいなあ。
ト娵クドキの振り、よき所より、翁はひつてよろしくあつて、時の鐘。
〽はや夕陽の黄昏に、雀色時鳴きたつる、小鳥の聲に氣もせはしく。
ト此時小鳥笛になり、翁思入あつて、つか〳〵と籠の側へ來り、
翁　おゝ籠の内にて小鳥の鳴くは、早く逃して貰ひたいのか。(ト言ひながら懷より金包を出して、)
さあ〳〵、是れで鳥賣どの、殘らず逃して下さりませ。
男　これは〳〵澤山に、有難うござります。
女　價をお貰ひ申せし上は、
二人　早く放して遣りませう。
〽籠の戸明くれば數多の小鳥、羽ばたきなして飛び立つを、翁は見るよりほた〳〵悅び。

ト金を渡すと風の音烈しく、鳥賣兩人鳥籠を明ける、雀數多日覆へ引いて取る。指金の鳩五六羽舞臺を飛び交ふ。翁これを見て嬉しき思入あつて、

翁　籠を放れて山鳩が、嬉しさうに飛ぶわ〳〵。

〽あなたこなたへ飛び廻る、鳩を慕うて餘念なく。

ト合方にて、鳩の飛ぶを、翁跡を慕ひ、我を忘れて追ひ歩く振り、鳥賣りは合點の行かぬ思入にて娘に囁き、上手へついとはひる。跡合方にて、鳩を追ひあるく。此うち上手より、鳶奴鬘鼠色、鳶の羽根を出せし着附、捻切奴にて出來り、

鳶奴　怪しい親仁め。

〽後に窺ふ宮奴が兩手を取るを振拂ひ、又立ちかゝるを羽ばたきなし、右と左りへ投げ退けて、ひらりと飛びし有樣は、さながら鳩に異ならず。

ト兩人掛るを立廻り、此うち頭巾を投げ捨て、黑毛前茶筅、衣裳引拔き、鳩羽鼠、好みのこしらへになり、羽ばたきなし、ひらりと井筒の上へ飛び上り、指金の鳩を見込み、鳩の思入、

〽鳩は諸鳥の其中にも親に三枝の禮ありて、五常を守る譽れゆゑ、正八幡の使はしめ。

ト是より狂ひの合方になり、指金の鳩と共に翁は井筒へ上り、舞臺にては二人の奴掛り、これを相

手に狂ひになり、兩人組合ひ橋の形になり、此上へひらりと飛び上り、又井筒へ飛び下り、よろしく狂ひの振りあつて、

〽飛びかふ鳩は子鳥にや、袖に群がり裾にまつはり狂うてひら〳〵〳〵、木々の紅葉の散り行く如く、峰吹きおろす風に連れ、むら〳〵ぱつと飛び行くは、跡を慕うて。

ト此指金の鳩を相手に鳩の振りよろしく、爰へ又兩人掛り立廻り、風の音烈しく指金の鳩花道へ行く翁もこれを慕ひ行かうとする、鳶奴二人支へる、此時以前の女夫鳥賣出で、兩人を引附ける、是れにて鳩の精は花道へ行く。舞臺の兩人と立廻り鳩の精は三重、ドロ〳〵かけりにて、指金の鳩を追ひながら花道へはひる。

男　扨は今の老人は、鳩の精にてあつたるか。

女　思ひがけなく出逢ひしも。

男　身の殺生を御神の、戒めたまふに疑ひなし。

女　心の附きし上からは、今貰うたるあの金を、

男　八幡樣へ奉納なし、

女　殺生なせし、

兩人 お詫び申さん。

〽あら有難や御神の、年頃なせし殺生を戒めたまふ鳩の峰、此身の懺悔石清水と、支ゆる宮奴投げのけて、御社さして。

ト鳥賣の兩人振りあつて鳶奴掛るを、立廻つて投げ退け、早き拍子にて兩人上手へはひる。鳶奴兩人も跡追駈けはひる、これにて淸元連中を段幕にて消す、矢張り大拍子にて此道具居所替りになる。

(春日社の場)――本舞臺三間の間石清水の遠見打返しにて、一面の廻廊になる。裾廻り紅白の段幕この前へ一間程の末社の小宮を押出し、此道具替る仕掛けの誂へあり、左右へ春日燈籠を出し、紅葉の釣枝、總て春日の社内の體よろしく道具納まる。と大拍子打上げ、下手の段幕を切つて落す。爰に富本連中居並び、直に淨瑠璃になる。

〽春日山峰の紅葉に色まさる、朱の玉垣鳥居先、庭を淸めの宮雀、今日の祭りに林間で紅葉を焚きし酒機嫌。(ト大拍子にて、上手より仕丁五郎又、生醉の思入にて出來り、)

仕丁 あゝ醉つた〳〵、今日はこの春日の宮に伶人の舞樂があつて、庭を淸めのわれ〳〵まで、たらふく御酒を頂戴し、夫の林間で紅葉を焚く三人上戸といふ所を、おれ一人で遣つたので、あゝいゝ

心持に醉つた〳〵。

〽扨も見事や梢の錦、西も東もあれ〳〵、赤いは人の山紅葉、空にちら〳〵散り來る景色、外には内外清淨に、われらも六根猩々に日に諸白の續け呑み、釣りの神主お手許と猪口を清めの高間ヶ原、鈴はふらねど德利振る、わけ生醉の舌鼓。

〽一人浮かるゝ向うより、風が持て來る伽羅が香は、何でもおてきごさんなれと、暫し小蔭へ身を忍ぶ。

ト此うち仕丁よろしく振りあつて、眞中の小宮の蔭へはひる。直に樂の入りし鳴物になり、花道より樂人義勝伶人のこしらへにて、鞨鼓を附け、撥を持ち出來り、

〽照りまさる深山の紅葉錦して、今日翻す舞の袖、指す手引く手もたほやかに、粧ひ飾る花舞臺、絲竹の調べ音もすみて、雲井に響く一曲も拙き業の八ツ撥に。

ト花道にて、よろしく振りあつて、舞臺へ來り、眞中へしやんと直りこれより掛合になり、

富本 〽吉野立田の花紅葉、更科越路の月雲も。

淸元 〽わが敷島の歌人は、居ながらに知る須磨明石、富本 〽蜑の焚く火に見る目の關を、小動ぎの磯田子の浦。

清元 〽連れて出羽の象潟に、いづれの人を松島や、涙は袖に天の橋立。

清元 〽物思ひ山下おうの、

宮本 〽松の操を三つの原、四季の眺めも一奏で。

ト伶人羯鼓の振りよろしくあつて上手へ住ふ。又鳴物替つて、花道より舞乙女夕榮島田髷、花櫛振袖衣裳、狩衣の上を着、鳥兜を持ち出來り、花道にて、

清元 〽天津乙女と夕榮の、日影に袖をかざし艸。

宮本 〽花の姿に紅葉衣、なまめく姿恥かしく。

清元 〽小褄をしやんと鳥兜、清元宮本 〽取り〴〵はやす、清元 〽樂の音に、

ト此うち花道にて、振りあつて舞臺へ來り、鳥兜を伶人に渡す、伶人は取つて紅葉の枝へ掛ける。乙女中啓を持ち前へ出て、

宮本 〽扇おつとり進み出で、〽抑々舞樂の始まりは、彼の唐土の周の世に作り始めて末廣き、

トよろしく振りあつて、これより扇の振りになる。

清元 〽四季の扇の畫もさま〴〵に、開くや花の梅櫻、宮本 〽思はぬ雪の卯の花を、清元 〽音づれて行く時鳥。

（宮本）〽空にも星の待戀に。

（清元）〽つれなや雨の小夜時雨。

（宮本）〽つもる思ひもいつしかに。

（清元）〽解けて睦まし六ツの花。（ト此時乙女伶人兩人振りあつて、）

（清元）〽此間にあふぎと手を取つて、戀の要の袖屏風、（宮本）〽ついいたづらな臂枕。

ト伶人乙女の手を取り、下手小宮の蔭へ突き入れ、跡を振返り見て、同じく宮の蔭へはひる。直に前の仕丁に早替り、上手へ出て、

（宮本）〽おや〳〵、こいつはたまらぬ鄙者め、あんな女子と添ふならば。

（清元）〽深山の奥のその奥の、（宮本）〽ずつとの奥の奥山に、（清元）〽紅葉踏み分け鳴く女鹿、

ト仕丁振りあつて、此時下手段幕の蔭より、縫包みの鹿出て、仕丁へしなだれる。仕丁びつくりして突き飛ばし、逃げようとするを、鹿これを留めてクドキになる。

（宮本）〽そりやつれないぞえ奴さん、わたしやお前の男振り、

（清元）〽思ひ染めたは去年の秋、紅葉おろしで彌太一の、（宮本）〽一杯機嫌によろ〳〵と、（清元）〽寢てゐてわたしが此角を。

宮本〽踏ましやんした其時に、

清元〽えゝ畜生め、宮本〽縁の端。

ト此のをかし味のうち、仕丁鳥兜を取つて冠り、幕串を拔いて打たうとする、鹿下手より宮の蔭へはひる。仕丁はこれを追ひかけはひる。入替つて伶人出る。鹿は附いて出る、此時以前の仕丁吹替にて追つかけ出る、以前の乙女替りて出で三人の振りになり。

清元〽紅葉の落葉搔き寄せて、交す枕も春日なる、明神さまのお媒人。

宮本〽浮氣立つともこちや厭やせぬ、外の女子に見返られ、どう堪忍が奈良坂や、清元〽兒の手柏の双面。

宮本〽悋氣の角を振袖に。

清元〽包む時雨の、宮本〽は、清元〽ぢ、宮本〽もみ、清元〽ぢ。

ト此うち鹿三人へ搦み、よろしく振りあつて、乙女は宮の際にて、仕丁に替り、乙女は吹替になる。

宮本〽逃げ行く袂引き戻せば、突き飛ばされて二本棒。

清元〽押取りのべても千鳥足。

ト仕丁乙女の吹替を捉へようとするを、伶人突き倒し、吹替の手を取り、上手へはひる。仕丁は件の

幕串を取上げ立廻り、追つ駈け行かうとする。ばた〳〵になり、上手より立衆の仕丁四人、紅葉の枝を持つて出で、仕丁を取卷く。

仕丁四人　やらぬわ。

仕丁　何を。（トきつとなり、これより所作模様、双方掛合ひの拍子になり）

淸元〽春日山、仰げば高き葛城山。

富本〽峰の紅葉を三輪の山、眺めもよしや吉野山、

淸元〽いつしか秋も立田山、

富本〽時雨にかざす三笠山、霰降る夜の郡山、

淸元〽軒端に音の高圓山。

ト此うち立廻りあつて、是れより拍子を踏みよろしくあつて、

淸元〽面白や。（トヤアと四人また立ち掛る、）

富本〽實に有難き神の國、岩戸の光り櫓受け、

淸元〽當りを願ふ弓矢神、

富本〽三笠の山の大入に、

〽賑はふ芝居ぞ。

〽目出たけれ。（トどつこいと納まり。）

頭取　まづ今日は是れぎり。

ト目出度く打出し。

清御神樂（終り）

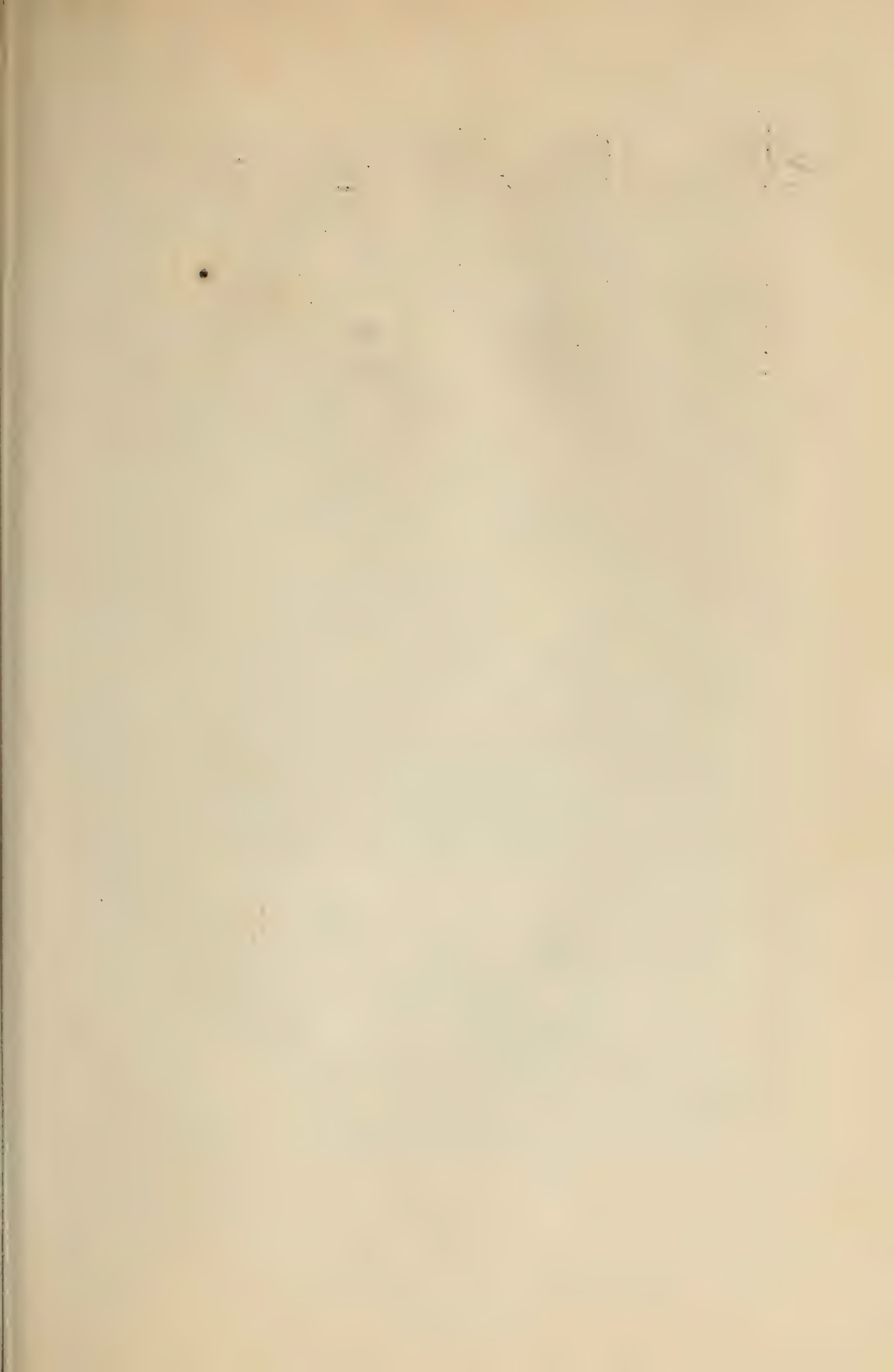
浮世又平が
滑稽の
筆意を集めて

名大津繪劇交張

解説

「大津繪」は明治四年三月（作者五十六歳の時）、市村座に上演された、清元と岸澤の淨瑠璃である。書きおろしの時の役割は澤村納升（座頭）、中村芝翫（瓢簞鯰、辨慶）、中村仲藏（鬼の念佛）、岩井紫若（藤娘）、市村家橘（福祿壽）、坂東三津五郎（鷹匠）、市川左團次（奴）、市川小團次（大黑）等であつた。清元連中は延壽太夫、家内壽、政太夫、勝造、東三郎等。岸澤連中は三登勢太夫、式佐、仲助等であつた。

作者の淨瑠璃中好評の部に屬するものと言つてよい。挿繪にしたのは書卸しの時の繪番附である。

大切浄瑠璃
所作事
清元れん中
岸沢れん中

名大津繪劇交張（大津繪）

清元連中
岸澤連中

〔役名――座頭紀の市、鎗持奴、福祿壽、鬼の念佛、大黑、瓢箪男、藤娘、若衆鷹匠、大鯰、犬猿、家主、合長屋二人。〕

本舞臺三間の間、正面茶壁、櫛形の欄間銀張り、誂へ大津繪交張りの襖、日覆より櫛形の大欄間をおろし、此外へ櫻の釣枝、上の方岸澤の淨瑠璃臺、下の方淸元の淨瑠璃臺、双方とも霞幕を掛け、舞臺へ淺黄幕を釣り、大津繪節の合方にて幕明く。と下手より○家主のこしらへ、羽織ふん込み、觸書を懐へ入れ、火の用心といふ弓張提灯を持ち、△、□合長屋、兩人とも羽織股引尻端折りにて出來り。

△　もし大家さま、御支配なさるゝ御地内に、不思議な事がござりますとは、

□　どんな事でござりまするな。

○こなた達も知つて居る、將監樣といふ御隱居がお建てなされた河岸の別莊、花や月の時分には御遊山にお出でなさるゝが、不斷はこの家主が寮番を兼ねて預かつて居るが、不思議といふは座敷の襖、名人の又平が正筆の大津繪を張交にしてある所、その繪が毎夜拔け出して、話しをするといふ噂、何と不思議な事ではないか。

△成程、將監樣の御座敷の、大津繪が拔け出ると、長屋の內でも噂をします。

□誠にそれが拔けるなら、見たいものでござります。

○されば、おれも地主から地面を預かる家主ゆゑ、見屆けねば役目が濟まぬ、一人では不氣味ゆゑ月行事のこなた衆を、爰へ一緒に連れて來たのは、おれと一緒に一間に隱れて、見屆けてはくれまいか。

△これが幽靈か化物なら、大家さまのお賴みでも、眞平御免でござりますが、高が繪の拔け出るのだから、更に怖いことはござりませぬが、いつたいこりや、どういふ譯で繪が拔け出るのでござりませう。

○名人の名を取つた、浮世又平といふ繪師が、一心を籠めて書いたゆゑ、その大津繪に魂がはひつて、それで繪が拔け出るのだ。

△それぢやあ話しに聞いて居ます、古法眼の書いた馬が額から抜け出し、田圃の草を喰ひに出たといふ事だが、

□やつぱりそれと同じ事で、何でも名人上手になると、魂がはひると見えます。

○何にしろとつくりと見屆け、いよ〳〵それに違ひなければ、代官所へ訴へねばならぬ。

△如何さま、是れは不思議な事ゆゑ、

□お訴へ申さずばなりますまい。

○訴狀も最前書いておいた。（ト懐から觸書を出す。）

△どういふ文面でござりまする。ちよつとお見せ下さりませ。

○さあ、讀んで見て下され。（ト渡す。△開き見て、）

△「淨瑠璃名題、浮世又平が滑稽の筆意を集めて、名大津繪劇交張、相勤めまする太夫、清元、」

□「岸澤――、」

○これはちつと違つたやうだが。（ト○取つて、）「相勤めまする役人――、」（ト役人替名を讀む、）こりや違つた〳〵。面目ないが此の家主、一字一點書けぬゆゑ、狂言方へ頼んでおいたが、淨瑠璃觸と間違へたと見える。

兩人　そゝツかしい大家さまだ。

○　此の觸書を間違へて、持つて出るのが、おれが役だ。（ト時の鐘。）

△　ときにあの鐘は、山の九ツでござりますぜ。

□　もうそろ／＼出ませうから、ちつとも早く行きませう。（ト○見物に向ひ、）

○　いよ／＼此の所、大津繪淨瑠璃初まり、其爲め口上。（ト辭儀をして、）さあ、行きませう。

ト右の鳴物にて、○先きに兩人附いてはひる。鳴物打上げ、知らせに附き淺黃幕切つて落す。これと一時に、左右の霞幕を落し、上手岸澤、下手清元の兩連中居並び、掛合ひ淨瑠璃になる。

清元〽金岡が書きし馬の故事を、例にひくや牛車。

岸澤〽名にし大津に名物の、ざれ繪の浮世又平が、　清元〽魂入つて髣髴と、　岸澤〽姿抜け出し筆の妙。

ト大ドロ／＼になり、正面の襖上へあがり、眞中に瓢簞を持つ男、繻絆なりにて縫包みの鯰を瓢簞にて押へ居る、上に紀の市、袴なり座頭にて、杖を突き、縫包みの犬側に附添ひ、ずつと上に鷹匠、若衆鬘、袴大小鷹をする、側に藤娘塗り笠、振袖脫ぎかけ、藤娘のこしらへ、藤の花をかつぎ居る、下に鬼の念佛、法衣なり、傘を背負ひ、鉦を襟にかけて立身、側に槍持奴、奴のこしらへにて、槍を突

き、立ち居る、後に福祿壽の立身、大黑階子を持ち、猿杯を抱へ居る。此の見得よろしく前へ押出す、
前の襖打返して、大津繪の抜け出せし心にて、薄墨の形殘りし襖になり、

岸澤 〽まづ丹青の彩りは、類ひ繪にひやうきんな、けほう天窓の階子剃り、 清元 〽杖一本で道中を登る座頭に奴らさ、槍を振袖お若衆に、 岸澤 〽ぬり笠おやまや竹笠の、船頭どのゝ片法華

清元 〽鬼が念佛で犬と猿、(ト皆々打交り、振りあつて、並よく居並び、)

座頭 何といづれも、此の座頭を初めとして、これに連なる人々は、皆大津繪のざれ仲間。

瓢男 一つ襖の張交ぜに、朝夕顔は見て居れど。

藤娘 晝は人目があるゆゑに、繪で居るうちは話しもならず。

若衆 世間の人のひつそりと、子の刻過ぎて襖を抜け出で、

鬼念 こんな樂しみな事はないが、何をいふにも座敷中ゆゑ、

奴 ちよつと一杯呑まうにも、肴のないが一つの疵。

福祿 何にもせよわれ〳〵は、同じ筆から抜け出た體。

大黑 いはゞ兄弟同樣ゆゑ、犬と猿さへ睦まじく。

鬼念 然し何の何某と、互ひに知らぬ襖の繪。

奴　魂入りて此樣に、拔け出た上は名乘合ひ。

若衆　これから兄弟同樣に、杯をして義を結ばん。

座頭　おゝ、それがいゝ、酒と聞いては目のない紀の市。

瓢男　酒と聞かない其先きから、お坊の目はありやあしめえ。

座頭　こいつは一番あやまつた。

鬼念　何にしろ義を結ぶ。

奴　酒がなくては、話しがならぬ。

瓢男　それは幸ひ瓢簞に、酒が五合ばかりある。（ト瓢簞を出す。）

福祿　然し僅かなその酒では。

大黑　此の連中へはしみ足りまい。

鬼念　なか〳〵、それでは此鬼の、顏が赤くはなられない。

籐娘　その酒盛りは後にして、お名をお聞き申したいは、天窓の長いそのお方は。

瓢男　お前は何といふ人だ。

福祿　おゝ、我を知らずや天津空の、南極星の精なるわ。

若衆　南極星といはるゝからは。

奴　扨はお前は、講釋師だな。

大黑　こりや〳〵、南極星とは、遙かに遠き南の果ての星のことだ。

福祿　そも〳〵我は久堅の。

座頭　あもし〳〵、それをお前の天窓のやうに、長く遣らずと小短く。

福祿　おゝ、さらば名乘つて聞かさうか。

岸澤〽そも〳〵我は久方の、天津空より諸人の福祿壽命打守る、南極星の化身にて、清元〽修南山の松影に假に顯はす我が姿、岸澤〽筆に寫せし福祿壽。

ト福祿　壽　軍配を持ち、振りあつて、大黑階子を持ち、前へ出で、

清元〽扨大黑は七福の、仲間に天窓剃合へど。

岸澤〽我はちくだの一寸法師、長い天窓に階子を掛けて、身を輕業の逆さ剃り、清元〽あぶない藝も禿げ天窓、すべる階子にあいたゝゝゝ、岸澤〽あいたゝゝゝ、立ち居もならざれば

ト大黑振りあつて、短き階子を出し、福祿壽の天窓へ階子を掛けて上り掛けるを振拂ふ、是れにて階子ばつたり倒れ、大黑落ちたる思入、起き上らうとして腰の痛むこなし。

清元〽これは危ない怪我ならば、一揉みもんで紀の市が、氣轉氣輕に探り出で、

ト紀の市の座頭探りながら出る、福祿壽大黑をかき退け、天窓を出す、座頭探り見てびつくりなし、

岸澤〽おや〳〵、これは何だんべい、綿摘み桶か屑籠か、こんな天窓の片頭痛、並療治ではあやま針。(ト座頭、福祿壽とちよつと振りあつて、一人になり、)

清元〽旅を挊ぎに東ッ子、色ゆゑ家と目を潰し、しかた馴染の故郷を、跡に品川川崎と、

岸澤〽杖一本で京都まで登る門出に飼ひなれし、犬に袂を引き留められ。

ト此うち縫包みの犬出て、座頭を留める振り、是れにて新内模様、

清元〽そなたも共にと言ひたいが、愛しそなたの手を引いて、どうなるものぞ長旅に、我がなき目にて連れらりよか。

岸澤〽いへど放れずとも〴〵に、箱根八里や大井川、越して悦ぶ立場酒、

清元〽探る肴をひよつくりと、下から犬めにしてやられ、杖振り上げて追つかければ、

清元〽恐れかんしん我が股を、くゞつて下りし褌の、端を銜へて引き戻され、がつくりそつくり驚きて、さまと書いたろざつとの坊、(ト座頭よろしく犬を相手に振りあつて、奴槍を持ち前へ出で、)

清元〽扨またおらは道中を、登り下りの旅奴、朝顔茶碗の盛切で、かい込む槍の左り利、

岸澤〽年

中顔も赤坂や、吉田通れば二階から、〽招く鹿の子の振袖を、岸澤〽ふつて振り込む大鳥毛、ありやせこりやせ、やつとまかせ、岸澤〽車々と人力車、待たぬか馬車の異人さん、女ならよか〳〵だんべいよかだんべい、清元〽昔流行つた藏前の、大和人形操の、岸澤〽拍子にかゝつて面白や。

ト奴槍を持ちよろしく振り、大和人形の拍子あつて納まる、若衆鷹を据ゑ、前へ出で、

〽そも〳〵鷹を野へ放ち、鳥を狩りしは異國の名さへ百濟の酒君にて、清元〽わが日の本へ渡りても業になれたる齊頼公の、跡追ふ鷹の小鳥狩り、岸澤〽世の諺に犬骨を、折よく空へ舞ひあがる、鶴に合せし隼の、組んづ解れつ、ひら〳〵〳〵、清元〽時しも櫻咲きみちて、風に散り行く花吹雪、岸澤〽鷹も手柄に紫の、許しの色の紐の房。

ト此うち若衆扇を遣ひ、よろしく振りあつて、世の諺といふ件より犬を遣ひ、扇を鷹にして鶴を取る振りあつて納まる、藤娘出でクドキになり、

清元〽その紫に由縁ある、誰と伏見の藤の森、稻荷祭りの其折に、社の前の扇崎、岸澤〽浮田の森の浮き立ちて、思ひ月見の岡目から、色とや人の夕ばえに、清元〽淀の渡りに船ならば、焦れ寄邊の水馴棹、ぬれて嬉しき竹の下。

ト此うち藤娘若衆を捉へ、クドキの振り、よき所より、鬼の念佛此中へはひり、をかしみの振りよろしく。

岸澤 〽中を隔てる墨染の、あら氣の鬼もほれ〴〵と、清元 〽われも以前は色ゆゑに、奈落の親の勘當うけ、閻魔の帳へ附けられて、岸澤 〽仕方なく〳〵伏鉦を、叩く大津の撞木町、なまいだ〳〵南無阿彌陀、清元 〽そら念佛に煩惱の起るは、目の前ていたらく、岸澤 〽見ては折れたる角もうち、なまいだ〳〵南無阿彌陀、清元 〽迷ふや鬼の目に涙。

ト鬼の念佛藤娘を捉へをかし味の振りあつて、

岸澤 〽どつこい網を破つたは、五尺餘りの大鯰。

ト網を引きあげる思入よろしく、大鯰眞中へ割つて出で、

岸澤 〽踊り出すを捉へんと、押へ附ければぬら〳〵〳〵、髯で拂はれ逃げ出せば。

ト取らんとするを刎れのける、是れにびつくりし、跡へ下る、瓢男瓢簞を持ち出る。

清元 〽それぢや行かぬとこなたより、襦袢一ツで飛んで出で、小脇に抱へし瓢簞で、岸澤 〽ほつくり押へりやぬらりと抜け、ぬらりほつくり、ほつくりぬらり、ぬらりぬらくら池の中。

ト瓢男鯰を遣ひ振りあつて、

清元〽友朋輩の鯉鮒や、〽すつぽんどん龜踊り子の、どぜうの當て振り浮き拍子、岸澤〽浮氣暢氣の河せゝり、春ながらまだぱつとして、風は鯰の髯しぶき、清元〽お寒からうと吉田屋の、喜左な花色もみくちやな、岸澤〽羽織似合はぬ大盡氣取り、鯰にいんでは此胸が、清元〽さめぬ心の内にもしばし、呑めば由縁の茶碗酒、岸澤〽またお押へのお手許は、しつこい呑手ぢやないかいな。

ト此内瓢男鯰を相手に、夕霧の惡身の振あつて、鯰逃げ出すを捉へて、

清元〽いゝや逃さぬ、逃しはせぬ、昔もかゝる例はあり。（ト是れより猿を相手にして、）

岸澤〽仙臺の〳〵大川普請のあつた時、鯰一疋とらまへて、行水させて髯抜いて、頭巾冠せて面冠せ。

清元〽三味線彈かせて開帳へ、小唄踊りで出したれば、是れが名代の紅勘と、岸澤〽辻や町々御子様方が、皆御存じの鉦太鼓、ちんからどんがらすちやらかちやん、糸のねじめもよいこのよいこの〳〵。清元〽よいとまかせぬ小手がらみ、岸澤〽腕もぢり、摑めばすべる、清元〽抜ければ押込む、後家鞘に、合はぬ相撲に四股踏みならし、岸澤〽瓢簞鯰の根競べ、をかし珍らし阿呆らし。

ト瓢男猿を相手に、よろしく振りあつて納まる。

鬼念　あゝ面白かつた〳〵、是れに列なる人々は、又平どのゝ魂が繪にはひつて拔けたれば。

座頭　姿は變れど心は一つ、二つ三つ四つ八つの景、手拍子打つて惣踊り。

（岸澤）〽石山の秋の月夜と唐崎の、夜るの雨夜の闇踊り。（ト皆々順よく立ち並び、）

（淸元）〽花の浪よる粟津の晴嵐に、矢よりも早き矢走船、歸帆にひらく晩鐘の、その三井寺の木下闇。

ト皆々明るき心の振りあつて、本釣鐘を打込む。兩窓をおろし、忍び三重模樣の掛りにて、闇になりし心。

（岸澤）〽聲をしるべに友呼びつれて、堅田へ落つる雁金の、水に浮寐の浮御堂。

ト此うち皆々闇の心、探り合ひの振り、思ひ〳〵鶍になり、をかしみあつて又明るくなる。

（淸元）〽紅葉も瀨田の夕照に、梢色ます石山は、眺めに秋の月の影、

トまた明るき振りあり、闇になり、

（岸澤）〽見る間にかはる唐崎の、夜の夜雨にしつぽりと、濡れて色ます一ツ松。

ト闇の振りあつて明るくなる。

清元 〽比良の高根に降り積る、雪のあしたの朝日影、よい〳〵よい〳〵よい眺めわけもなや。

ト皆々よろしく振りあつて、

岸澤 〽實に又平が魂が、戯繪に入りて抜け出し、

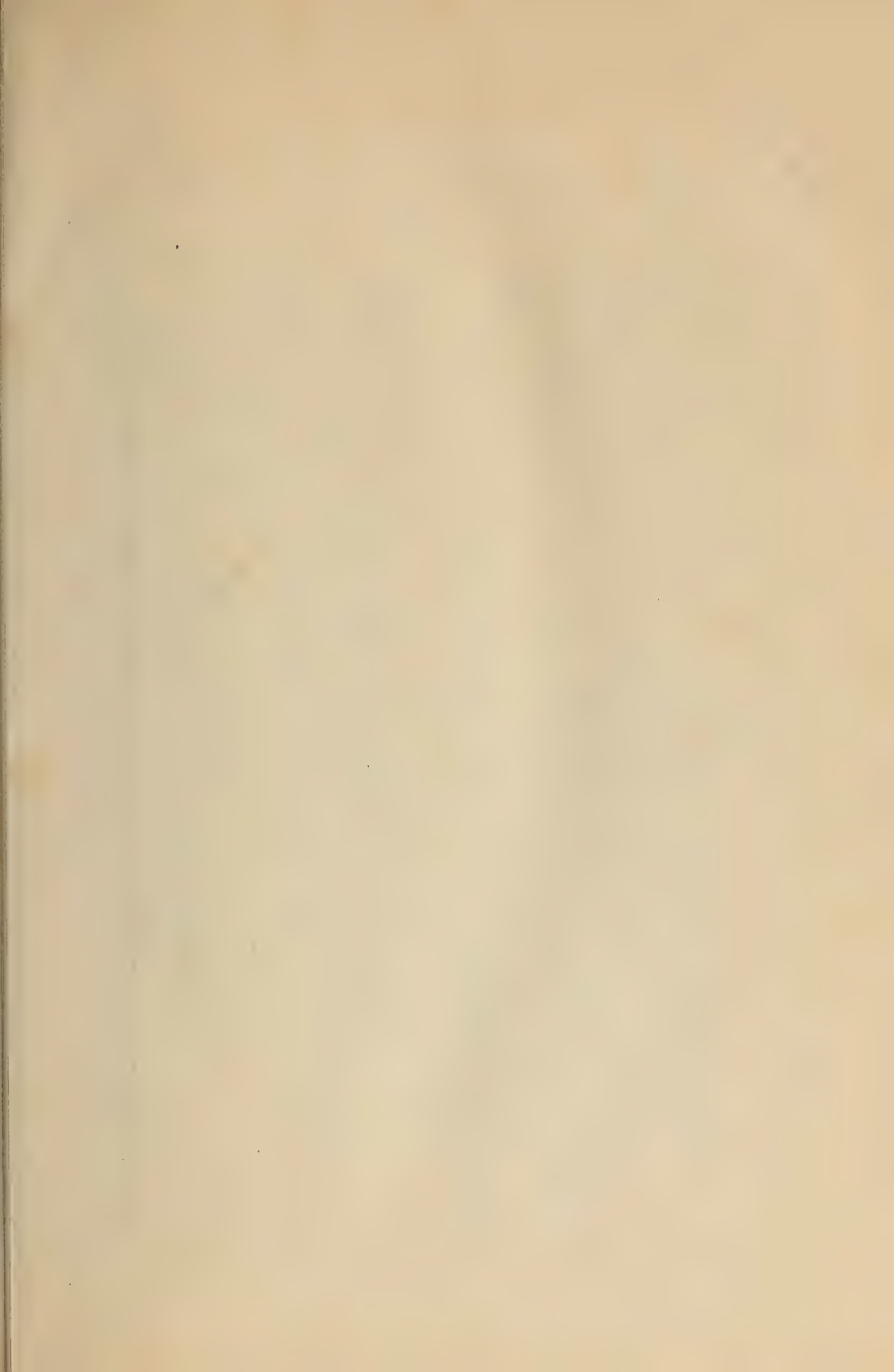
清元 〽筆の奇特に後の世の、

岸澤 〽語り草とぞ、

兩吟 〽なりにける。（ト引ばりの見得よろしく、頭取出で）

頭取 まづ、今日は是れぎり。

ト目出度く打出し

大津繪（終り）

爰も苦界の海にして
浅い深いは客と間夫

初會浦島廓釣針

解説

「廓の鈎針」は明治七年三月（作者五十九歳の時）村山座に上演された富本淨瑠璃である。「上の巻猿樂の望月、中の巻狂言の靭猿と共に下の巻となつてゐて原名題を「眞似三升劇番組（まねてみますかぶきのばんぐみ）」といふ。書きおろしの時の役割は、河原崎三升（浦島太郎作）、中村宗十郎（俳諧師）、市村家橘（女郎）、關三十郎（比丘尼）、市川門之助（女房お鯛）、河原崎國太郎（藝者）等であつた。

初會浦島廓釣針（廓の釣針）

竹本連中
清元連中

〔役名――浦島屋太郎作、宗匠龜成、龍宮屋震助、在所婆あお蛸、歌比丘尼九良毛、宿場女郎お鰒、太鼓持鈍中、龍宮の若い者二人、浦島の女房お鯛、巫女木の葉、藝者お勝、生娘お喜壽、下女おいな。〕

〔龍宮屋二階の場〕――本舞臺三間の間正面銀襖、蜃氣樓の畫、上の方畫心に銀張り襖、裾通り浪の畫、下の方中二階の淨瑠璃臺、蹴込み同じく浪の畫、下手舞臺前に二階の上り口、此前へ銀張りの波板を出し、手摺へ「座敷釣堀」といふ幟を立て、日覆より櫛形の欄間、座敷釣堀といふ提灯を掛け總て龍宮屋二階の體よろしく。二挺鼓の鳴物にて道具納まる。と奥より鈍中、奴𩯭黒の羽織、太鼓持のこしらへにて扇を持ち立身、○△若い衆のこしらへにて、左右に立身、淨瑠璃臺の段幕を切つて落す。爰に清元連中居並び、前彈なしに流行唄模樣になる。

〽釣竿のうきふし繁き吉原を、苦界の海になぞらへて、重りに沈む勤めの身、はりと意氣地

と手練てぐすの手管にて、ほんにおいろを釣堀は、洒落た趣向ぢやないかいな。
○　こう〳〵、お前は何をして居るのだ、海神さんの所へ早く行かねえか。
△　今櫻の木の甘味が來て、双六が始まる所だ。
鈍中　そりやあ本當かえ。
○　なに、嘘をつくものか。
鈍中　かくも文明開化して、晦日に月の出る世界。舊弊の嘘をつくと、一分づゝ罰金を取るよ。
○　またそんな生をいふか、太鼓持を止めて書生になればいゝ。
△　さうして九州とは西國のことか。
鈍中　今僕がいつたのは、西國の九州ではない。古き仕癖といふことよ。
○　成程、おれもさう思つた。
鈍中　えゝ、負け惜しみな事を言ひなさんな。
△　嘘を吐くのが昔から此廓の習ひだが、所が文明開化して、少しも嘘はつかねえから、海神さんの部屋へ行つて違ひなくば、お前から一分づゝ罰金を取るよ。
鈍中　そりやあ言はずと知れたことだ。

○　それぢやあ一分きつと出すね。

鈍中　出さなくつてどうするものだ。

○　さあ一分づゝ貰はうか。

鈍中　まだ嘘か本當か、海神さんの部屋へ行かにやあ分らない。

△　所が行くに及ばねえ、文明開化僞りなしだ。

鈍中　えゝ嘘でもほんでも、高が二分だ、くれろといふなら上げやせう。

ト紙入から二分札を一枚出す、兩人これを見て、

○　いや栴檀は双葉よりだ、嘘かほんか分らないのに、二分出すとは實に豪氣だ、人は斯うありたき者だ。

△　そりやあいよ〳〵此金をわたしら二人にくんなさるか。

兩人　善は急げだ。（ト兩人札を取りにかゝるを、鈍中札を引込ませ、べつかつこうをする。）

○　えゝ欺されたか。

兩人　もう此上は。（ト取りに掛るをちよつと突廻して、）

鈍中　さあ、取つて見さいな。

をさして走り行く。

〽釣ろな〳〵信田の森の狐を釣ろな、こん〳〵ちきやこんちきや、浮れ興じて鈍中は、座敷

ト鈍中札を見せびらかす。兩人取らうとするを、鈍中兩人の足をすくつて轉ばし、踊りながら上手

へはひろ。兩人起上り、

えゝ二分の金を取らうと思つて、いやといふ程膝を打つた。此の埋草は神奈川から浦島屋太郎作

さまがけふお出でなさるから、しつかりお貰ひ申さにやならねえ。

龜に乘つて龍宮まで、お出でなすつたさうだが、あの旦那くらゐ釣りの好きな旦那はない。

いやもう、釣りといふと目のないお方だ。

其のくせ大きな目玉だけれど。

えゝ何をいふのだ。（ト向うを見て、）おゝ、噂をすれば影とやら。

早くも旦那が、お出でなすつた。

〽待つ間程なく入相の、鐘に花咲く持て囃し。

ト二挺鼓の鳴物になり、花道より太郎作・炮碌頭巾羽織着流し好みのこしらへ、釣竿をかつぎ玉手

箱を抱へ出來る。跡より龜成黑のきめ頭巾道行振り、着流しにて畚を提げ出來り、兩人花道へ留り

〽罷り出でたるやつがれは、便りの文の神奈川に初會馴染の浦島や、釣りと女郎に沖を越え今日も朝から龜成と、駕籠より早き三枚洲、追手南に三挺櫓立てゝ、程吉原の釣堀へ得物なさんと來りける。（ト花道にて太郎作龜成よろしく振りあつて、舞臺へ來る。）

○　これは神奈川の旦那さま、今朝早く電信で、お知らせがござりましたから。

△　さつきから入らつしやるのを、お待ち申して居りました。

太郎　今朝早く鐵道で、こつちへ來ようと思つたが、つい一潮釣りたいので、船で來るだけ遲くなつた。

龜成　これだから鐵道で、直に馬車か人力車になさいましと申したのだ。

太郎　今度は陸で早く來よう。

○　神奈川から吉原までは、一日がけでござりましたが、僅か一時か一時半でお出でなさるも鐵道ゆゑ。

△　そこで主人が思ひ附き、座敷釣堀と申すのも、一に旦那を當込んで始めましたのでござります。

太郎　知つての通り釣好きに、今度吉原の龍宮屋へ、新發明の釣堀が出來たと話しを聞いたゆゑ、是れは行かずばあるべからずと、同氣求める宗匠を、誘つて釣りに出て來たのだ。

龜成　こちらの主人も俳諧好きで、飾り景の思ひ附きなどは、餘人の及ばぬ趣向者ゆゑ、まさか中坪へ

池を掘つて、鮒や鯉を入れて置く、たゞの釣堀でもあるまいと、旦那のお供を幸ひに、主人の趣向を見に來たのだ。

太郎　どういふ主人の趣向だか、早く筋が聞きたいものだ。（ト此時奥にて、）

〽年は行かねど廓育ち、如在内證の息子株。

ト奥より震助、着附袴なりにて出來り、太郎作へ辭儀をなす。

おゝ、誰かと思つたら、龍宮屋の息子どのか。

震助　浦島屋の旦那さまには、遠路の所を吉原まで、ようお出で下さりました。

龜成　それといふのも釣堀ゆゑ、少しも早く御趣向を、旦那へお話し申しなさい。

震助　別にこれが、趣向と申す程の事もござりませぬが。（ト前へ出て、）

〽先づ龍宮屋といふ名によりて、二階を沖の海原に下をば底とみほつくし、打込む浪の乙姫に勝りし龍の玉揃ひ、口から鯛のお職まで鈎をおろせば、ついそれへ、掛る趣向は此廓の、新發明の蜃氣樓。（ト震助よろしく振りあつて納まろ。）

太郎　成程これは面白さうだ、して見ると脂肪の乗つた中年増の鯿もあれば、また泥臭い新造のいゝなもあるといふのだな。

○　そこに又、一趣向ござります。

龜成　して、其の趣向といふのは。

○　先づ女郎衆のこしらへを、御殿女中、圍ひ者、又は藝者、生娘、はした、

△　或ひは巫女、神子、比丘尼。思ひも附かぬ姿のものが、鈎へ掛かるがお慰み。

龜成　これは心を用ゐた趣向、どんなものが掛りますか、早く釣つて御覽じませ。

太郎　一番手柄をして見せたいが、魚と違つて女郎を釣るには、何を餌に附けるのだな。

○　御銘々の御所持の品、お手拭かお煙草入、何でもよろしうござります。

太郎　それでは附けたその品を、好いた女郎が取るのだな。

△　左樣でござります。

太郎　さういふ事なら此の扇を、ちよつと附けて下して見よう。

ト太郎作鈎へ扇をかけ、階子の口へおろす。かすめて波の音になり、

龜成　波の音のあしらひなどは、生業半分茶番をする氣だ。

太郎　それ、掛つたぞ。

ト波の音をドロ〳〵のやうに打ち、太郎作竿を上げる、階子の口よりお鰹、藝者好みのこしらへ、

小さな鰹の簪を差し、件の扇を持ち、舞臺の眞中へ出て、端唄模樣、

〽三絃の三筋いろどる松の魚、ちよつと端唄の一節も知らぬ藝者の恥かしさ、片身は里の水に馴れ、初といふ字の初會から、惚れし人目の皮作り、末は涙の辛子酢も、爰が命ぢやないかいな。

トお鰹よろしく振りあつて納まる。

太郎　これは美なるものが釣れたが、然し一度ではあつけない、もう一度釣つてもよからうか。

○　よろしい所ではござりませぬ、幾度でも御勝手次第、

△　たんと、お釣りなされませ。

太郎　知つての通り朝から晩まで、釣り通しでも飽きないから、一度や二度では止められない。

龜成　さあ〳〵早く、お釣りなさい。

太郎　今度は兩天で釣つてやらう。（ト兩天秤鈎の釣竿を取つておろす。）

龜成　それ、旦那引きますぜ。

太郎　おつと承知だ。

ト引上げる、波の音ドロ〳〵、大拍子へかんから鉦を冠せし鳴物になり、階子の口より木の葉、練の

帽子舞衣巫女のこしらへにて、御幣と鈴を持ち、九良毛黒の頭巾腰法衣、白の手甲脚絆、比丘尼のこしらへにて、伏鉦と撞木を持ち、兩人眞中へ出て、

〽神をいさめの宮神樂、巫女の出立ちも里馴れぬ、鈴の振袖新造に、戀の諸譯も白幣、ほんに鰈の裏表、比丘尼は烏賊の墨染や、〽とんびからすにならるゝならば、飛んで行きたやちとかん主の側。

比丘　ちとかん〳〵。

ト巫女、比丘尼よろしく振りあつて、振りの留り、比丘尼鉦を叩き納まる。○△兩人を後へ住はせる。

龜成　これは實に古今未發だ。僕も一人釣りたいものだ。

太郎　さあ〳〵宗匠、釣んなさい。

龜成　何を餌に附けようか、煙草の筒を結んでおかう。（ト煙管筒を附けながら、）何ぞ大きな物を釣りたいものだ。

△　いえ、そこはお手際次第でござります。

太郎　お手際の程が、見たいな〳〵。

龜成　さらば手際を、お目に掛けませう。（ト波の音になり、龜成二階の口へ鈎をおろし、）入れると直ぐに

びく／＼引くは、何か獲物が掛つたわえ。

ト竿を上げる。波の音、竹笛入りの鳴物になり、階子の口より、お鱚金の簪を差し、振袖、生娘のこしらへ、おいな鯔の簪をさし、下女のこしらへにて日傘を持ち出來る、

〽花ならば半開きし生娘の、色香こぼるゝ取りなりを、鱚に見立の三ツ扇、まだ色薄き引込みに、附添ふ鯔の番頭は、機轉も菊のお杉役。

ト唄模様にて、兩人よろしく振りあつて納まる。龜成悦び、

よう／＼、振事のうまいこと／＼。もし旦那、手際の程を御らうじたか、ぽつとり姿の生娘ごしらへ、豪氣なものでござりませう。

太郎　實はおれも氣が惡い。

龜成　さあ／＼お孃、こつちへ來たまへ。（ト龜成、生娘の手を取るを。）

太郎　あゝこれ宗匠、待つてくれ、その生娘を、おれにどうか讓つてはくれまいか。

龜成　いえ／＼、是れはお讓り申されませぬ。

太郎　そんな事を言はないで、拜むから讓つて下せえ。

龜成　それほどにおつしやいますなら、あなたへお讓り申しませうから、償金をお出しなされませ。

太郎　さういふ事なら、仕方がない、一圓出すから讓つて下せえ。（ト懐中より札を出し、龜成へ渡す。）
龜成　お安いものだが是非がない、大負けにして、是れでお讓り申しませう。
太郎　さあ〳〵お孃こつちへ來やれ。（ト生娘の手を取り、連れ來るを藝者二人仲へ割つて入り、）
藝者　いえ〳〵さうはなりませぬ。先きへ釣られたわたしが敵娼、今更その子に見替られ、默つて見ては居られませぬ。（トまた巫女此中へはひり、）
巫女　そりやお前ばかりぢやない、二度目に釣られたわたしも敵娼、見替へられては顔が立ちませぬ。
藝者　何でもぬしは、わたしのお客に。
巫女　いえ〳〵、わたしのお客にせねば、
藝者　廓の意氣地が、
巫女　立たぬわいなあ。（ト下女前へ出て、）
下女　おゝお前方が立たぬといへば、お金さんも此儘に、二人にお客を取られては、やつぱり意氣地が立たぬ、側に附いて居る番頭の、わちきが第一立たぬわいな。
生娘　何でもぬしをお客にせねば、わたしの意氣地が立たぬわいな。
　　ト比丘尼みな〳〵を搔き退け、眞中へ出て、

比丘　あゝこれ〳〵、待つて下さい〳〵、誰彼れと言はうより、わたしが中での年役ゆゑ、外へ取られては顔が立たぬ。さあ、わたしを立てゝ下さんせいなあ。（ト藝者太郎作を上手へ連れて行き。）
藝者　さあ、わたしを立てゝ下さんせいな。（ト巫女、太郎作を下手へ連れて行き。）
巫女　さあ、わたしを立てゝ下さんせいな。（ト生娘、下女眞中へ引摺り來て、）
生娘　さあ、わたしを立てゝ下さんせいな。
藝者　いえ〳〵、わたしを。
巫女　いえ、わたしを。
〽あなたこなたへ引廻され、中にふわ〳〵太郎作が、空にもまるゝ奴凧、風に水汲む如くなり。（ト此うち四人にて太郎作を上下へ引張り、よろしくあつて太郎作振拂ひ、）
太郎　あゝこれ、待つてくれ〳〵。さう引つ張られては、目がまふ〳〵。
鶴成　先きに釣られた藝者と巫女が、立たぬといふも尤もなれば、又生娘がいふのも尤も、何にしろ此中で、後生を勤める比丘尼どの、お前までが同じやうに、そんな事を言つては濟まぬ。
比丘　わたしだとて勤めの身、廓の意氣地が立たぬわいな。（ト頭巾を取ると坊主鬘になる。）
太郎　坊主禿といふのはあるが、女郎の坊主が買はれるものか。

龜成　何でまた、色氣のないお前は坊主になつたのだ。
比丘　わたしや虱がたかつたゆゑ、それで坊主になつたのさ。
太郎　それではお比丘は、虱たかりか。
比丘　あい、天窓ばかりぢやござんせぬ、體中に。（ト背中を掻く思入あつて、）うよ〳〵這つて居ります
る。
太郎　そんな者が、抱いて寐られるものか。
龜成　斯う大揉めにもめた上は、誰れ彼れといふと面倒ゆゑ、この五人を揚げにして、是れから更に
釣り直し、それを敵娼になされませ。
震助　成程爰は宗匠のおつしやる通りになすつた方が、波風なしに納まりませう。
比丘　流石は點をなさるだけ、負勝ちのない、よいお捌き。
藝者　わたしら五人を揚げにして、
巫女　これから別に釣直し、
生娘　それを敵娼になさんすりや、
下女　五人共に顔も立ち、

太郎　さらば、敵娼を極めようか。
龜成　それで双方納まれば、旦那は早く釣直し。
四人　しませうわいな。
藝者　それで堪忍、

ト太郎作また釣をおろす。波の音、驛路の鈴の音になり、階子の口よりお鰒、結び髪鰒の簪をさし、胴抜きのなり、仕掛を羽織り出來り、

〽箱根なア、八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川なアえ。
〽渡る宿場の板頭、我儘ものに北向きと、仇名浮名を立花のおふぐと呼びて命取り。

トおふぐ手拭を遣ひ、振りあつて納まる、此のうち龜成おふぐに惚れる思入あつて、

それでは是れが敵娼か。
龜成　あもし旦那、今お釣りなされた宿場玉を、僕に讓つて下さいませぬか。
太郎　宗匠お前氣があるか。
龜成　どういふ事か女郎といふと、かういふ少し小傳法な所を、拔句にいたします。
太郎　さういふ事なら讓らうが、然したゞでは讓られない。償金を出すなら讓らう。

龜成　とんだ意趣返しに逢ふものだ、さつきの一圓をお返し申すから、是れで讓つて下さいまし。
　　ト最前の札を出す、太郎作取つて、
太郎　安いものだが、讓つてやらう。
龜成　それは何より有難い。（ト龜成嬉しきこなしにて、おふぐの手を取り、）さあ、お前は僕の敵娼だよ。
お鰒　おや、そびやあ嬉びいね。（ト鼻へぬけて言ふ、龜成合點の行かぬ思入にて、）
龜成　こう、お前はをかしな物言ひだの。
お鰒　なに、をかびい事はあいまべんが、此あびたまで塒にぶいて、すんでにびややながおびる所さ。
龜成　それぢやあお前は、瘖ツかきか。
お鰒　あい、わたびやあ大のおやへさ。
龜成　これは眞平、御免々々。（ト龜成逃げにかゝるをお鰒捉へて、）
お鰒　今びやらお前に嫌はれては、わたびの顏が立たぬわいなあ。
太郎　宗匠、お前嬉しからう。
龜成　あゝ、とんだ目に逢ふものだ。（ト天窓を搔く。）
太郎　さらば是れから美くしい、ぼつとりものを釣り上げて、宗匠に氣を揉ませようか。

鶴成　それは堪忍して下さいまし。
○　さあ〳〵旦那、爰が日頃の御手練だ。
△　美くしいのをお釣りなさい。
太郎　どれ、手並の程を見せようか。（ト波の音になり、太郎作鈎をおろし、思入あつて上げようとして、）こりや滅法重いものだが、ぼつとりものが掛つたか。
ト波の音、双盤になる。階子の口よりお蛸、白髪鬘田舍婆アのこしらへ、裾を端折り出來る、これをキツカケに、上手の霞幕を切つて落し、竹本連中居並び、直に淨瑠璃になり、
竹本〽わしは三浦の漁師の娘、名さへお蛸と惡足多く、二度の引負ひ苦界へ沈み、今は額に漣寄れど、昔忘れぬやンれ色の道。
ト手拭を冠り、よろしく田舍節の振りあつて、振りの留りにて手涕汁をかむ。
○　これさ婆アさん、お客さまのお座敷で手ばなをかむといふがあるものか。
お蛸　こりやあはあ、色氣のねえ事をしました。（ト件の手を○の顏へ附ける。）
○　えゝ、人の顏で、手涕汁を拭いて、
お蛸　それぢやあ甜めて置くべいか。（ト指を甜める。）

△ えゝ、ぢゞむせえ事ばかりする婆アさんだ。

お餉 これ喜助どん、おらがお客さまは、どれだえ。

太郎 やあ、これは大變だ。

龜成 もし旦那、豪氣なものが掛りましたな。

太郎 これ〳〵宗匠、今日は親の命日だから、直に逃して遣つて下せえ。

龜成 はい〳〵畏りました。これ婆アさん、今日は旦那の親御さまの御命日ゆゑ、釣つたものを逃してやれとおつしやるから、お前は下へ行きなせえ。

お餉 假令親御の命日でも、

竹本 〽一旦爰へ釣り上げられ、どうまあ下へ行かれうぞ、何でも今宵は汗かいて、

清元 〽といへばこなたの親比丘尼、お前はわたしの敵娼と、背中搔き〳〵寄添へば、

竹本 〽餘所の口說の羨しく、わたびもお前の宿場玉。

清元 〽右と左りに取縋り、

竹本 〽ふが〳〵ぱく〳〵、

清元 〽ちとかん〳〵口說きける。

ト太郎作をお蛸、尼丘尼捉へ、おふぐは龜成を引出し、双方惡身のをかしみ、トヾ比丘尼は龜成、おふぐは太郎作に寄添ふ。兩人氣味惡く突ッ放す、お蛸其中で兩手で手ばなをかみ、おふぐと比丘尼の額を撫でる、是れにて振り納まる、○△三人を留めて、

○　これ〳〵、お前方はどうしたものだ、まだ引附も濟まないのに、

△　さう取附いたりひッ附いたり、あんまりそれでは不見識だ。

○　さあ〳〵、お座敷の引けるまで、

△　もつと脇へ放れたり〳〵。（ト兩人を隔てる。）

龜成　もし〳〵旦那、延喜直しにもう一遍、何ぞよいものをお釣りなさい。

太郎　いや、よいものが掛ればよいが、婆ァ沙魚には眞平だ。

龜成　惡い跡は善いといふから、今度はよろしうござりませう。

○　私どもがよい事は、

△　きつとお受合、

兩人　申しまする。

太郎　止さう〳〵と思つても、つい止されぬがおれの病、それぢやあもう一遍釣つて見ようか。

竹本〽またもや竿を取直し、鈎をおろせばぴく／＼と、そりやこそ掛つた大獲物。

ト波の音、しやでんの鳴物になり、階子の口よりお鯛、好みの鬘、鯛の簪、模様もの〻着附白練の被衣を冠り出て、

清元〽被衣をもる〻衣の香に、都女臈と夕汐や。

竹本〽鯛の位の備りて、これぞお職の太夫様。（トお鯛被衣の儘、振りある。太郎作龜成是れを見て、）

これは素敵だ／＼。

龜成　其れは都風でござりますな。

太郎　ほッそりとした腰附は、美なるものに違ひない。

龜成　被衣眼深に恥しがる、所が命でござります。

太郎　東男に都女臈、いつそ女房を去りこくッて、是れを女房にしようか知らぬ。

龜成　それぢやあお前さんは、御新造さまをお捨てなさるお心か。

太郎　お〻、捨てるとも／＼、女房と疊は古いより、新らしい方が寐心がよい。

龜成　それぢやあ、私がどんな量輩か、ちよと内見いたしませう。（ト龜成、お鯛の側へ行き、そつと被衣の内を覗き、びつくりして、）やあ、是れは大變だ／＼。

太郎　これ〳〵宗匠、被衣の内はどうだな〳〵。
亀成　どうだどころか、御新造さまだ。
太郎　なに、女房だ、これはたまらぬ。

ト太郎作びつくりなし、土間へ逃げ込まうとするを、お鯛被衣を脱ぎ捨て、つか〳〵と行きて太郎作を捉へ。

お鯛　これ旦那どの、何處へござんす。
太郎　あゝ南無三、夢になれ〳〵。（トお鯛眞中へ連れ來り、）
お鯛　これお前さん、今何と言はしやんした、わたしを去ると言はしやんしたな。
太郎　何でそんな事をいふものか。
お鯛　言はない事がござんせうか。ようも〳〵わたしをば、古疊にしなされましたな。
太郎　あゝこれ〳〵、宗匠、どうかしてくれ〳〵。
亀成　いえ〳〵、僕は口が出されませぬ。
お鯛　おゝ、お前にも恨みがござんす。
太郎　此間に爰を。（ト太郎作逃げにかゝるを、お鯛捉へ、）

お鯛　えゝ、お前さまはなあ。（ト涙を拭ひ、）今更いふも愚癡ながら。（トくどきになり、）

清元　〽如何にお前の好きぢやとて、釣りが嵩じて底知れぬ、龍の都の居續けに。

竹本　〽いつ歸るやら白波の、越路へ歸る雁にさへ、便り渚に泣きあかし。

清元　〽明暮れ待ちし甲斐ありて、磯馴の松に十返りの、其嬉しさもいつしかに。

竹本　〽さかなばかりか女子まで、釣りに出るのは胴慾と。

清元　〽恨みかこつぞ道理なる。

ト鯛太郎作を捉へ、口説きの振り、これへ比丘尼、おふぐお蛸はひり、をかしみの振りよろしくあつて納まる。

竹本　〽羽根田沖から洲走りの、おさき鰹が飛んで出て、

清元　〽堪忍せずば其儘に、お上さんを去らしやんせ、ぬしならわたしが年季を入れ。

竹本　〽そりやお前より、わたしがと。

清元　〽言へば側から口々に。

竹本　〽わたびか引取り世話びようと。

清元　〽齒もない口にお婆まで。

竹本〽しなだれ掛れば女房が。

〽怺へかねて突倒し。

ト此うち藝者太郎作を捉へ振りになる。これを巫女割つて出で、生娘、下女、比丘尼、おふぐ、お蛸みな／＼爭ふこなし、トゞしなだれ寄る。龜成、お鯛は悋氣の思入にて、お蛸おふぐを突倒し、

お鯛　え〻、現在女房の見る前で、男をたらす女郎共、是れといふのもお前の惡性、此腹癒せは龍宮から持つて歸つた玉手箱。（ト誂への玉手箱を出し）決して蓋を明けるなというた蓋を明けてくれう。

ト紐を解く。

太郎　あ〻これ、其の玉手箱を明けてはならぬ。

お鯛　いえ／＼、明けねばならぬわいなあ。

竹本〽悋氣の餘り女房が、蓋を明くればこは如何に、姿も變る七世の翁。

ト太郎作留めるを拂ひのけ、蓋を明ける。太郎作あわて〻蓋を取る、中より煙り立ちドロ／＼にて、太郎作頭巾を取る、白髮鬘羽織の兩袖を引拔き、袖なし羽織になる。

〽おらも若い時やぢよなめきつれて、對の浴衣で大山參り、なんまいだ／＼。

ト太郎作親仁の振りちよつとあつて、是れより皆々出て、

清元〽お江戸の道者は金持だ、錢持金持田地持。

竹本〽十貫ざしの口解いて、白鷺なんぞの舞ふやうに。

清元〽ばらりやばッと、お蒔きやれな〱、わけもなや。

ト皆々手踊り模様の振りあつて、

清元〽花の廓の釣堀も、絲より長き春の日の、

竹本〽眠りの夢を書綴り、

清元〽笑ひの種ぞ殘しける。(ト引張りの見得よろしく)

先づ今日はこれぎり。

ト目出度く打出し

廓の釣針(終り)

誰が
權妻か
白齒の
丸髷

千種花月氷

解　説

「西洋氷店」は明治十年八月（作者六十二歲の時）、新富座に稿下された、淸元の大切淨瑠璃である。書きおろしの時の役割は中村芝翫（氷屋の翫太）、中村宗十郎（同廣太）、岩井半四郎（おやま）等であつた。淸元連中は延壽太夫、淸海太夫、喜兵衞、東三郎、梅次郎等であつた。

當時始めて世間に流行し始めた、氷店を取り入れたもので、評判はよかつたが、再演はされなかつた。

千種花月氷（西洋氷店）

清元連中

〔役名――米屋勘太、花簪屋廣吉、氷屋の男、職人大鐵、同屋根勝、同建卯之、商家權妻お山、同下女お仙。〕

本舞臺一面淺黄幕、屋臺囃子にて幕明く。

○コウ日中は暑いゆゑ、片蔭が附いてから、天王樣へ人が出るが、何ぞ飾り物でも出來たか知らぬ。
△何も出來た話しはねえ、神酒所で囃子をするばかりだが、近年になく賑やかだ。
□それといふのも暑いから、通り町をひやかしながら、涼みに人が出掛けるのよ。
○暑いといやあ今年位、雨の降らねえ年はねえから、去年よりよつぽど暑いな。
△それだから近在では、田の水が干揚つて、何年にも覺えねえ、旱魃だといふことだ。
□そりやあ近在ばかりぢやあねえ、こちとらも干揚つて、何年にもねえ旱魃だ。
○何でも今年の當りは、瀧に溫泉に氷屋だ。

△二人が今もいふ通り、旱魃だから水でも一ぺい呑まうぢやあねえか。

□水と聞いては怺へられねえが、振舞水がこゝらにあるか。

○えゝ、しみツたれな事を言はねえがいゝ、軒並にある氷屋だ。

△振舞水が呑まれるものか。

□氷屋のあるのは知つて居るが、いくらあつたつて、たゞは呑ませめえ。

○そりやあ言はねえでも知れたことだ、金一升土一升といふ土地へ、金を掛けて出す氷屋だ、たゞ呑ませる奴があるものか。

△錢が出るといつたつて、高が一錢か二錢のことだ、何べいでも呑むがいゝ。

□そいつア何より有難い、いゝ、れもんを一ぺい呑みてえが、拂ひは手めえが持つのだな。

○錢がありやあ持つてやるが、今しがた蕎麥を喰つて、氣の毒だが一厘もねえ。

□それぢやあ勝公、手めえが持つのか。

△おれも屋臺の鮨を喰つて、五百ばかり遣つたから、二十か三十はあるだらう。

□二十か三十の端た錢で、何べいでも呑めといふのか。

○手めえの懐が、こつちは當てだ。

□ 大方そんな事だらうと思つた、うつかり氷屋へ飛び込んで、二人を當てにがぶ〳〵呑み、氷屋の居殘りはどつとしねえ。

△ それぢやあ二人が當てにした、卯の公手めえもなしか。

□ 何を呑まうが何を喰はうが、いつでもおらあ人におんぶだ。

○ そこでおあしがないと云ふのか。

△ 惡いこぢ附茶番だな。

○ よく新聞に出て居るから、落ちて居ねえこともあるめえが、ひよつこりそこへ出逢ふも運だ。

△ 何にしろ暑いから、通り町を素見しながら、落ちて居る物を搜して歩かう。

ト三人上手へ行きかけ、紫の包みを見附け、

□ そりやこそ、爰に落ちてあつた。（ト取らうとするを○早く取つて）

○ 紫縮緬の袱紗包みか。

△ 慥に中は札だらう。

□ それはおれが見附けたのだ。

○ 馬鹿な事をいへ、おれが見附けたのだ。

□なに、おれが見附けたのだ。（ト兩人爭ふを、）

△いや、爭ふものは中からと、こいつはおれが預かつた。（ト△包みを引つたくる。）

○いや〳〵、おれが拾つたのだ。

□手めえにやあ、預けられねえ。

△斯うして三人連立つて歩いたらば、此中に幾らあらうと三ツ割りだぞ。

○まあ、幾らあるか其中を、

□早く明けて見たがいゝ。（ト△袱紗を明け、中より手紙のやうに書いた淨瑠璃觸を出し、）

△こりやあ札だと思つたら、厚紙へ書いた手紙だ。

○大方そんな事だらうと思つた。

□何と書いてあるか、讀んで見ろ。

△いつもお定まりの淨瑠璃觸だ。（ト出す、○取つて開き、）

○「淨瑠璃名題――、」（ト三人替り〳〵讀んで、）

□淨瑠璃觸を讀んだので、なほ〳〵咽喉が渇いて來た。

△芝翫に似て居る氷屋へいつて、一ぺいづゝ呑んで行かう。

□ 氷屋へ拂ふ錢はどうする。
△ 實はおれが持つて居る。
□ さう聞いちやあ、咽喉がぐびつく。
○ ちつとも早く出かけよう。
△ いよ〳〵此所、淨瑠璃始まり。
□ その爲め口上。
三人 さあ行きやせう。

ト下手へはひる。と知せにつき淺黄幕を切つて落すと、氷屋の店掛りになり、直清元淨瑠璃になる。

〽名にし東の名代の京橋、軒端揃ひし煉化の家並、街は櫻に花咲く賑ひ、紅葉に色増す夏季の繁昌、わけて暑中を當込む氷は、肌も眞つ白別品育ちの、堅い心の箱入おむすが、解けて嬉しい氷水。（ト氷屋翫太、氷屋の男鶴助早き振りあつて、）

鶴助 あゝ忙しい〳〵、此頃にねえ暑さだから、晝間ッから立てつゞけ、こつちァ足が棒になつた。
翫太 何處か一雨かゝつたか、今しがたから涼しい風が吹いて來たので、少し途切れた此間に、一服遣らかさうか。（ト兩人床几へ腰を掛け、煙草を呑みながら、）

鶴助　親方お前見なすつたか、今し方小間遣の小女を連れて爰を通つた、二十一二の別品は、ぞつとする程いゝ女だつた。

翫太　手めえあれを知らねえか、元柳橋で指折りの、半四郎お山といふ藝者だ。

鶴助　道理で大和屋に似て居る筈だ、西洋風の半元服に、根の下つた丸髷は、何でも權的に違ひねえ。

翫太　さつき家を覗き込んだが、あんまりお客が多いので、間が悪くでもあつたかして、知らない顔をして行つたが、歸りに寄つて來れゝばいゝが。

鶴助　もし、噂をすりやあ影とやらで、今話した別品さんが、向うから來ましたぜ。

翫太　今度はこつちから、詞を掛けよう。

〽誰が權妻と夕風に、素顔涼しき夏の富士。（ト合方。）

〽汗を厭うて白粉は、知らぬ白歯の丸髷へ、挿す簪も古渡りに、五分もすかない玉の艶、交す指輪に二世かけて、心狂はぬ金時計、五時から涼み半分に、小附けの下女と連立つて、遊歩ながらに來りける。（ト兩人振りあつて舞臺へ來る。）

もしお山さん、素通りはなりません。

お山　さつきお寄り申さうと、思つたけれど暑いので、あんまりお見世が込んで居たゆゑ、

お仙　お寄り申すも間が悪いと、おつしやつてゞござりましたわいなあ。
翫太　おほかたさうだらうと思ひました。
鶴助　まあ、是れへお掛けなさいまし。（ト是れにてお山お仙床几へ掛ける。）
翫太　お山さん、何ぞ上りませんか。
お山　あい、氷を一杯おくんなさいな。
鶴助　はい〳〵、畏りました。（ト硝子の水呑へ氷を入れ砂糖水を入れ、盆に載せ持ち出て、）さあ、お上んなさいまし。（トお山お仙水呑を取つて、）
お山　柳橋に居た時分は、よく翫太さんの踊りを見たが、旦那の方へ行つてから、久しく踊りを見ませせんな。
翫太　雀屋の忠七さんは、かつぽれが好きだから、よくわつちも踊らせられました。
お仙　御新造さんのお話しに、不斷聞いて居ましたが、何ぞ踊つてお見せなさいましな。
翫太　わつちの踊りは古いから、今賣出しの鶴公に、一番口明けを踊らせませう。
鶴助　どうして〳〵親方の前で、何ぼわつちがしやあつくでも、踊りなどが踊れるものか。
お山　そんな事を言はないで、早く踊つて見せなさんせ。

鶴助　それぢやあわつちが踊りますから、姉さん相手になつておくれな。
お仙　あい、わたしで間に合ふことならば。
助鶴　どれ、口明けを遣りませう。
〽是れは此頃評判も、屋根より高い志度の蜑、その珠取りに氣を取りて、込み合ふ客の大人形。
ト鶴助床几にかけてある赤毛布をちよつと腰へ卷き、蜑の見得、
〽厩橋からによつきりと、誰しもびつくり鹽竈の、神社に緣ある懐胎の、月々見する大目鏡
ト是れより鶴助とお仙兩人になり、
〽意氣な別品手を引いて、見るは媚茶の長羽織、車のすれか裾の皺、昔の花のちゞばゞか、孫をば杖に胎内を、やつと廻つて頂上の、目から覗いて三圍りや、船の往來を目の下に、涼しい風の耳の穴。（ト兩人振り、）
お山　なか〳〵鶴さんの踊りは、うまいものでござんすな。
鶴助　いえ、お恥しうござります。（ト翫太向うを見て、）
翫太　や、目の寄る所へ玉が寄ると、踊りの上手な簪屋が、向うから來ましたぜ。

お仙　こりや御新造さま、お嬉しうござりませう。
お山　何でわたしが嬉しからう。
翫太　おつと昔馴染といふ事は、わしが知つて居りますが。
鶴助　おい、花簪屋の廣吉さん、お客さまがお待兼ねだ、早く來ねえ〳〵。

〽秋の千種の色々に、造りし花の簪も、萩や尾花に招かれて、御得意先の御註文、桔梗苅萱女郎花、萩の浮氣な廓でさへ、露にも濡れしことぞなく、堅いといつか札附に、掛値馴染の町々を、流してこそは來りける。（ト廣吉振りあつて、荷をかつぎ舞臺へ來る。）

翫太　けふは廣吉さん、いつもより遲いやうだの。
廣吉　けふは清元のお師匠さんの、お浚ひを當て込んで、大層商ひをした替り、大きに遲くなりました。
翫太　そいつアいゝ所へ行き當つた。
鶴助　またいゝ所へ來當てたのだ。
廣吉　なに、來當てたとは。
翫太　爰にも、お得意さまがお待ちなすつてだ。（トお山廣吉を見て、）
廣吉　いや、是れは石町の御新造さま、どちらへお出でなさいました。

お山　けふはあんまり暑いから、涼みながら天王さまへ、お參り申しに來ました。

廣吉　へい、左樣でござりますか。

お仙　此頃は廣吉さん、さつぱり廻つてお出でゞないねえ。

廣吉　四五日暑さにあたりまして、生業を休みました。

お山　そりやあ惡うござんしたな。

翫太　いえ〳〵、あれは噓でござります、噂を聞けば何處のか藝者と、東京内は人目があるゆゑ、江の島から金澤へかけ泊り〳〵の旅籠屋で、嬉しい遊びをして來ました。

廣吉　なに、そんな事があるものかね。

翫太　いや、ないと言つても逃げられねえのは、小間物屋の萬吉さんが、江の島の惠比壽屋で落合つたが何よりの證據だ。

廣吉　それぢやあ萬吉さんが喋べつたか。

翫太　何とのがれはあるまい。

廣吉　さう知られたら仕方がないが、實はお袋連で行つたのだ。

翫太　逆に年をよみやあしめえし、十八になるお袋があるものか。

鶴助　さあ〳〵、言譯は暗いから、何ぞ一番踊んなせえ。

廣吉　それだといつて、往來中で。

お仙　はて、そんな事を言はないで。

廣吉　いや、とんだ所へ出ツくはしたな。（ト廣吉扇を持ち前へ出て、端唄模様になり、）

〽身の願ひ金澤かけて江の島へ、氣も合乘りの二人連、汗に鳴海の着替さへ、對の模様に餘所目には、色と岩窟の穴籠り、磯打つ波に裾濡れて、嬉しい仲ぢやないかいな。

ト廣吉振りあつて、お山立ちかゝり、

お山　今お話しの江の島へは、誰と一緒にお出でだえ。

廣吉　さあ、その連は。

お山　えゝ、人の心も知らないで。（トお山廣吉を捉へクドキになり、）

〽ほんにわたしも去年の夏、湯治歸りに江の島へ、廻る其夜は惠比壽屋で、蚊帳に波打つ涼風に、明りは消えて十日月、さし込む癪にこの胸を、押して貰ひし嬉しさを、悟る旦那が末末は二人女夫にしてやろと、おつしやつたを忘れてか、つれない心と恨み言。

トお山廣吉を捉へクドキの振り、此のうち鶴助羨ましき思入にて、此中へ割つてはひり、をかしみあ

づて三人納まる。翫太は花簪を十本ばかり抜き取り、立ち掛るを廣吉留め、

廣吉　コウ〱、其の簪をどうするのだ。

翫太　こりやあ受賃に貰ふのさ。

廣吉　詰らねえことを言つたものだ、受賃を出す因縁がない。

翫太　有つてもなくつても、こりやあ貰つた。

廣吉　受賃などゝだまかして、大方それは楊弓場か、茶見世へ持つて行くのだらう。

翫太　どこへ持つて行くものか、御見物さまへ上げるのだ。（ト見物に向つて、）これは末廣屋の受賃でござります。（ト廣吉も簪を取つて、）

廣吉　これは成駒屋の、受賃でござります。

ト兩人双方へ花簪を蒔く、此内翫太一本天窓へ挿して置くを見て、

鶴助　コウ親方、その簪はどうするのだ。

翫太　こりや釣堀の、小女にやるのだ。

お山　おゝ翫太さんは釣堀に、情婦があるさうでござんすね。

翫太　なに、そんな者がありますものか。

廣吉　あつてもなくつても、受賃は氷だ。
鶴助　そりやあわつちが證人だ、たゞ兄貴のは釣りばかりさ。
廣吉　何だか知れたものぢやあねえ。
翫太　ほんに此間も岡釣りに、
鶴助　二人で行つた其時は。
〽友を誘うて岡釣りに、腰に辨當ぶら〳〵と、爰の小溝かしこの入江、竿を並べて安閑と、つい居睡りの出汐先き、岡と底との物思ひ。

ト鶴助園子提灯の篠竹を取り、釣竿になし釣をする。此うち翫太、青海波の暖簾を取つて、これを魚の鱗と見えるやうに逆さに引つかけ前へ出て、

〽戀は曲者龍王の、ほんの娘の姫小鯛、人目の闇はやつしても、ひよつくり浮の水音は、爰ぞ肝腎寒行の、竿にこたへて意氣地も汁も。
〽くどき上手のつい口先きで、うまく合せてまだ早い。
〽ゆるめつしめたはずみにどんぶりおつこちた。〽その手で深みへはゝま千鳥〽おゝこは、歸りましよ、〽えゝ、ならぬぞえ、〽放せ、これ、なんぢやいな。

〽女子を釣るの愛しさは、水際の立つ殿御振り、聞いて心も飛びの魚、まだ文も見ぬ荒海の底に情のあるならば、二世の固めとかこつにぞ。

〽その釣竿の馬鹿囃子、太鼓の音に浮れ立ち。

ト此うち翫太、鶴助釣りの振りあつて、廣吉お山お仙立ちかゝり、

〽獅子の木遣りに手古舞が、よい聲かけて町々を、廻る巴の軒提灯、東の花と夕暮に、賑はふ街ぞ目出たけれ。

ト皆々振りあつて、引張りの見得にて頭取出て、

頭取　先づ今日はこれぎり。

ト目出度く打出し

西洋氷店（終り）

狩野が畫きし
筆勢に
馬の抜け出し
月の夜遊び

昔噺額面戯

解説

「額ぬけ」は明治十二年七月（作者六十四歳の時）、猿若座に於て書きおろされた、常磐津淨瑠璃である。稿下當時の役割は、片岡我童（韓信）、岩井半四郎（天人）、市川八百藏（喜三太）、市川新十郎（頼政）、中村仲藏（一つ家の老婆）、勝川又吉（猩々）、岩井紫若（あやめの前）、片岡市藏（廐別當）等であつた。

常磐津連中は小文字太夫、吾妻太夫、文字兵衞、芝江、八百藏、三郎助等であつた。

昔噺額面戲（額ぬけ）

常磐津連中

〔役名――韓信、源三位頼政、御厩喜三太、猪の早太、猩々、一ツ家の老婆、老婆娘お淺、天井の天人、あやめの前、御曹子牛若丸、鵺等。〕

（淺草奥山の場）――本舞臺上の方一間の臺、裾通り菖蒲の模様の暖簾を掛け、上に「新製あやめ團子」といふ横看板、臺の上へ大皿三枚に團子を積み、桃色木綿の布巾を掛け、此前に長床几を並べ、下の方同じく一間の臺、裾通り葭簀にて張り、上に「銘酒泉」といふ横看板を掛け、臺の上へ三段に酒の入りし壜を飾り、此前に誂への酒瓶蓋の上に長柄杓、臺の上へコップを並べ、眞中あとへ下げて猿の乘る臺、正面左右とも葭簀圍ひ、臺の上に縫包みの尾のなき鵺、鎖にて繋がれ乘り居る、此前に一間の床几、上に半弓と矢を載せある、ずつと下の方淨瑠璃臺、爰に常磐津連中居並び、總て淺草奥山の體。

こゝに頼政立烏帽子、淺黄の指貫、赤い襷をかけ杵を持ち、早太侍烏帽子單の鎧下、鉢巻をして杵を持ち、菖蒲の前白の着附緋の袴を端折、赤の襷をかけ臼の傍へ立掛り、これ取りの思入、三人よ

ろしく幕明く。

ト双盤入り、賑かなる流行唄の淨瑠璃になり、

〽狩野が畫きし名譽の馬は夜るは田甫へぬけ出て、草を喰ひし昔を今、こゝに並ぶ御堂の額からぬけ出て、妻の其名に賴政どのがあやめ團子の見世をば開き、舂くや早太がはやめし杵に拍子とり〴〵囃す曲舂き。

ト此うち賴政、早太杵を持ち、菖蒲の前これ取りのこなしにて、三人振りあつて、

〽臼と杵との面白き、音に浮れて喜三太が。

ト双盤にて、花道より喜三太、侍烏帽子鎧下、小手臑當、喜三太のこしらへ、弓へ白の幣束を結附け、これをかつぎ出て、花道へ留り、

〽我は元來御厩と言はれし緣に御神馬の、馬料の役の今參り、けふ御目見得に御贔屓を願ひ揚げ幕花道へ、小腰かゞめて來りける。（ト喜三太花道にて振りあつて、舞臺へ來り）

賴政　只今これへ見えられしは、誰々なるやと存ぜしに。

菖蒲　容齋老が畫かれし、喜三太どのでありしよな。

早太　さあ〳〵是れへ、掛けられよ。（ト床几を出す。）

喜三　これは蒿谷先生の、名譽の筆の賴政公、見ればよき御商法をお始めなされてござりまするな。
賴政　我は華族の身の上ながら、此の世の中にぶら〳〵然と、座食は本意ならざるゆゑ、菖蒲の前の名にもとづき、あやめ團子を始めてござる。
菖蒲　譬にもいふ士族の商法、どうあらうかと思ひの外、日長の折ゆゑよう賣れて、よい商法になりますわいの。
喜三　それは結構な事でござります、拙者も何ぞ始めようと存じますれど資本はなし、元御厩の喜三太と申せし所から、御厩の雇人になりました。
早太　喜三太どのが御厩の雇人になられたのは、所謂これは名詮自稱だ。
喜三　然し僅かな給金で、好きな酒も呑まれぬが、元手入らずに早太どのは、よい思ひ附きをなされたな。
早太　よい思ひ附きでもござらぬが、あすこにも猿こゝにも猿と、あんまり猿が流行るから、鵺を猿の代りに遣ひ、半弓をもつて射させますが、思ひの外錢になります。
喜三　お前は錢にならうけれど、射られる的に使はれる、鵺は痛くて難儀だらう。
賴政　それは決して難儀でござらぬ、元より怪鳥の事なれば、此賴政なれば知らぬこと、なか〳〵たゞの人達の矢先に掛ることはない。

喜三　君が射られし鵺といふは、頭が猿で胴が虎尻尾が蛇だと聞きましたが、尻尾は蛇と見えませぬな。
菖蒲　わらはを始め此邊の、女子が嫌ひますゆゑに、尻尾は切つて貰ひましたわいな。
喜三　女子ばかりぢやござりませぬ、拙者なども大嫌ひ、見てもゝ身の毛が立ちまする。
ト賴政向うを見て、
賴政　額をぬけ出た連中か、大分向うへ人が見える。
菖蒲　さあ〳〵早く、お呼びなされませ。
賴政　新昇亭の眞似をして、それでは客を呼び込まうか。これは名代評判の、あやめ團子でござります。
菖蒲　お休みなすつていらせられませ。（ト兩人重く長くいふなど、）
早太　如何に口が永いとて、さう長く呼んではいけませぬ。是れは名代評判のあやめ團子でござい、お休みなすつていらつしやいまし〳〵。（ト輕くいふ。）
賴政　なか〳〵其方のやうに、輕口には言へぬ。是れは名代評判のあやめ團子でござい。
菖蒲　お休みなすつていらつしやりませ〳〵。
早太　先づそんなものでござります。時に喜三太さん、端ッ張りに二三本、鵺を射てくんなさらぬか。
喜三　それは僕が大得意、弓に弦をかけて居る所を、容齋先生に書かれた喜三太。

頼政　定めて勝れし手練でござらう。
菖蒲　これで拜見仕りませうわいな。（ト兩人床几へ腰をかける。）
喜三　鵺を射たらば僕へ褒美に、團子を四五本おごんなせえ。
早太　おゝ奢るとも〳〵。さあ〳〵評判の鵺をお射なさい、矢は二十本でわづか一錢のお慰み、お射ん
なせい〳〵。
喜三　どれ、僕が手並を見せようか。
〽弓に矢番ひ喜三太が、的は茶見世の別品に、ちよつと尻目に掛的の、覘ひは外れて鵺より
も赤らむ顔に又候や、二の矢もそれて口惜しく。
ト喜三太弓矢を取りねらふ。子役の鵺は喜三太を馬鹿にするこなし、えいと放つ矢外れて鵺は舌を出
し、胸を押へて爰を射よと教へる、喜三太また射にかゝる。是れも外れて鵺尻尾を叩き嘲ける、喜三
太口惜しき思入、
えゝ、また、射損じたか忌々しい。
頼政　なか〳〵貴殿の腕前では、怪鳥の鵺は射られまい、身共が代つて射てくれん。
〽射眉つくれば南無三と、柱の蔭へ身を隠す、雲間の月のそれならで、見えぬあやめが手に

持ちし、團子に心奪はれし透きを狙へば過たず、うんとばかりに倒れ伏す。

ト此うち頼政弓矢を取る、鵺は恐れて柱の蔭へ身を隱す、菖蒲の前團子をとつて鵺をぢらす、鵺飛び附かうとする隙をねらひ、えいと放す、これに當りし思入にて、臺より落ち倒れる。

菖蒲　蟇目の法か知らねども、只の一矢に射落されしは、恐れ入つたる御手練々々。然しどうやら死んだ樣子。

早太　生業道具を失うては、明日から早速困る早太。これ鵺、しつかりしてくれ〳〵。（ト早太介抱する。）

頼政　なに蒲公英附の矢の根だから、必ず死する氣遣ひなし、急所で氣絶いたせしならん、身共が活を入れて遣らう。

菖蒲　活をお入れなさるより、此頃はやりの寶丹水を、呑ました方がようござりませう。

頼政　なに〳〵、活を入れゝば大丈夫。

早太　どうぞ生かして下さりませ。

頼政　これ、其鎖を解いてくりやれ。

早太　畏りました。

〽鎖を解けば頼政が、何の造作も投首せし、鵺を捉へて脇腹へ、活を入れゝば飛び掛り。

ト早太鎖を解いて前へ出す、賴政後へ廻り、鵺へ活を入れる、風の音になり、鵺起上り、いきなり賴政に飛びかゝり、引ツ掻く、是より合方へ見世物の鳴物を冠せ、また喜三太へ飛びかゝり引ツ掻く兩人逃げるをかし味。

賴政 〽滅多無性に引ツ掻けば、〽あいたゝ、〽おいたゝ、〽あいたたんぽの矢を捨て。

喜三 あいた〳〵〳〵。(ト額を押へる。早太は鎖を手繰つて鵺を引ずる。菖蒲の前立ちかゝり)

菖蒲 どこぞお怪我を、なされはしませぬか。

賴政 猿と違つて虎の爪だけ、

喜三 大層痛うござりました。

早太 こつちは鵺が生きかへり、是れで活計に困らない。(ト鵺を柱へ結び附ける。)

賴政 とんだ意趣を返された。

ト引ツ掻かれた所を擦る、双盤入りの合方になり、花道より牛若丸稚兒髷、振袖、袴、塗り下駄 紫の袱紗包みを持ち出來る。跡より一ツ家の老婆、白髪鬘、結び髪やつしなり、棲を端折り、安下駄をはき、御安泊り一ツ家と記せし掛行燈を持ち出來り、花道にて、

老婆 もし、そこへおいでなさるは、一信さんがかいた、牛若丸さまぢやござりませぬか。

牛若　さういふこなたは、一勇齋が一ッ家の老婆どの。

老婆　あなたは何處へお出でなされました。

牛若　今日は淺草學校に演說會があつたゆゑ、それを聞きに行きました。

老婆　丁度よい所でお目に掛りましたが、安泊りを始めますから下宿をなさいますなら、お安くお賄ひ申しますから、私共へお出で下さりませ。

牛若　一ッ堂で馴染ゆゑ、行くまいものでもなけれど、野には伏すとも宿かるなと、歌の敎へもあるなれば。

老婆　それは石の枕をさせた、昔の事でござります。

〽今は開けて一ッ家は、名のみに殘る安泊り、薄い蒲團もそんじよそれ、厚い情か有合の肴にちよいの氣散じは手輕な洒落と進むるを、こなたは頭振袖の、袖を拂うて來りける。

ト老婆牛若、花道で振りあつて舞臺へ來る。

賴政　これは御曹子牛若どの、今學校からお歸りかな。

牛若　今日は校内に演說會がありしゆゑ、常より歸りの遲いところ、朋友どもに誘はれて、牛肉店へ參つたので、猶々遲刻いたしてござる。

菖蒲　あなたは清和の御血統だのに、穢れ不淨の牛肉などを、何でお上りなさいます。
牛若　さのみ懇望もいたさぬが、牛肉店は書生の交際、止むを得ざることでござる。
賴政　牛肉ぐらゐは仕方なけれど、湯屋の二階や楊弓場へ引つかゝつてはなりませぬぞ。
牛若　それは決して案じるな、學費に囊中錢なき牛若、遊墮に流れはいたさぬぞ。
喜三　口綺麗にはおつしやるが、何だか安心ならぬ事だ。
早太　おつかあ、お前は何ぞ始めるのか。
老婆　賴政さまを始めとして、みんなが商法しなさるから、此頃流行の安泊りを、わたしも田圃で始める積りだ。
早太　お前が安泊りを始めたら、内のお娘が別品だから、書生の下宿があるだらう。
老婆　娘に其氣があつてくれると、安泊りなどをしなくつても、左團扇で暮らされるが、男猫の側へさへ寄らぬ位な娘の堅藏、あんな不孝な奴はない。
菖蒲　男猫の側へさへ、寄らぬといふは見上げたこと、それを現在親の身で、不孝な者と言はるゝは。
老婆　あなた方なら知ちぬこと、私共の娘などは、地獄をしてこそ濟まないが、旦那取りは當りまへ、誰に憚る所もなけれど、うんとさへ言つてくれゝば、十圓位は物言はずだのに、旦那取りをいや

だと言つて、一把十文か十五文の新藁などを賣られちやあ、是れまで育つた甲斐がない。

早太　成程おつかあの言ふ通り、今時の娘には珍らしいが、あの子が旦那を取る氣になつたら三圓位で旦那になりたい。

喜三　三圓ならば喜三太も、雇賃の前借をして、一月ばかり圍ひたい。

牛若　貴様がさういふ心なら、化粧料を二圓出して五圓で妾にしたいものだ。

頼政　五圓所かあのお娘なら、十圓までは出してもよい。

菖蒲　あなたはそれでお圍ひなさるか。

頼政　え、今のはほんの、譬のはなしだ。

菖蒲　いえ〳〵さうではござりませぬ、えゝ、あなたはなあ。

〽恐れ多くも上もなき、許しの色のお許しに女夫となりし此の菖蒲、それを今更つれなやと纖弱き手にて胸づくし、取るも悋氣の角文字や、色のいの字のいさかひを、あなたこなたへ引分ける、折柄這ひ出る鵺の蛇。

ト菖蒲の前頼政を捉へ、悋氣の思入にて胸づくしを取る。是れを頼政振拂ひ、夫婦喧嘩の模様、これを老婆喜三太留める。指金の蛇出る、皆々びつくりなし飛びのき、

老婆　如何に團子屋の奥さまとて、あんまり燒きやうが强いゆゑ、その一念が蛇になつた。
喜三　こんな悋氣な奥さまでは、うつかり色は出來ませぬな。
牛若　扨はこれなる丈なる蛇は。
菖蒲　わらはが嫉妬の一念なるか。
頼政　ても怖ろしい執念ぢやなあ。
早太　もし〳〵、これは一念ではござりませぬ、鵺の尻尾でござります。（ト蛇を取つて見せる。）
頼政　成程、鵺の尾であつたか。
老婆　これは馬鹿げた事であつた。

ト大拍子になり、花道よりお淺結び髮田舍娘のこしらへ、褄を端折り、草履にて、籠に入れし新藁を提げ出來り、跡より猩々短き赭熊の鬘、靑海波の單衣、兵兒帶にて駒下駄をはき出來り。

猩々　これ〳〵、國芳が書いた一ッ家のお淺坊、さつきからおれが呼ぶのに、なぜ聞えねえ顏をするのだ。
お淺　誰かと思つたら嵩溪さんの猩々さん、わたしやお前のやうな生醉と、一緒に步くは厭でござんす。
猩々　成程酒には醉つて居るが、一ッ御堂の額仲間、そんなに嫌ふことはない。
お淺　それぢやといふて。

猩々　はてまあ、一緒に來ねえといふに。

〽田舍育ちに似もやらず、まだ色戀を新藁の心も靑い生娘が、袖を引く波目先へ汐を、寄せて連れ立つ潯陽の笑顏つくりて猩々が、一杯機嫌に足許もよろ〳〵もので來りける。

ト兩人花道で振りあつて、お淺捉へる袖を振拂ひ、舞臺へ來る、猩々跡を追つかけ來り。

老婆　お〻娘、歸つたか。

お淺　これか〻さん、猩々さんがいけません。

老婆　此間からわしが娘を、附けつ廻しつするさうだが、赤髭ならば金になるが、赤頭のこなたなどは五厘の錢にもならぬから、手出しをするときかないぞ。

猩々　何も手出しは致しませぬ、今仲見世で逢つたから、一緒に行かうと言つたばかりだ。

お淺　いえ〳〵、さうぢやござんせぬ、わたしを捉へていやらしい事を。

猩々　あ〻これ〳〵、そんな事を言つてはいけぬ。

お淺　いえ〳〵、言はねばならぬわいな。

猩々　拜むから言つてくれるな。

老婆　言つてくれるなといふからは、娘を口說いたに違ひない、こりやたゞは濟まされぬ。

喜三　どんな事をしたか知らぬが、相手が一ツ家のお袋だから、あやまり賃を出さずばなるまい。
早太　全體お前の口說くは無駄だ、あのお娘は疾から、牛若さんに惚れて居る。
お淺　あれ又、そんな事を言つて。
老婆　なに、牛若さんに惚れて居る、學費に嚢中錢なしだといふ、貧乏書生に何で惚れたのだ。
お淺　わたしや觀音さまと思ふゆゑ。
賴政　成程、同じ稚兒髷なれば。
菖蒲　こりやさう思ふも無理はない。
老婆　かういふぼんやり人足ゆゑ、好きな酒も呑まれねえ。
早太　娘をくどいた詫び賃に、早く酒でも呑ませねえ。
猩々　酒で濟むなら幾らでも、見世にあるから呑みなせえ。
老婆　それぢやあ酒を呑ませるか。
猩々　おゝ、呑ませるとも〳〵。
牛若　ほんにこなたの瓶の酒、いくら呑んでも減らぬとやら。
猩々　一杯呑めば一杯殖ゑ、盡きぬ泉のこの銘酒。

頼政　此頃世間で泉といふ、銘酒が大層はやるさうだが、
菖蒲　猩々どのが、本元なるか。
老婆　何にしろあやまり賃と、聞いては呑まずには居られない。
お淺　さあ〳〵皆さん、お上りなさい。
頼政　等淋子が書いた韓信どのも、額仲間での呑手だが。
喜三　一杯呑まして上げたいものだ。
牛若　おゝ、噂をすれば影とやら。
早太　向うへ見ゆるは、韓信先生。
皆々　おゝい〳〵。

ト呼ぶ、是れにて唐樂を打ちおろし、花道より韓信、畫面の鬘筒袖、薄物の唐衣裳沓をはき、誂の氷屋の荷をかつぎ、天井畫の天人、天人の鬘羽衣絞りの浴衣、縫物の腹合せの帶、襷を斜にかけ、團扇を持ち出來り、花道へ留り、

〽氷々と晝夜とも小股くゞりて韓信が、風の吹く日も雨の夜もなまけ内儀は別品と、噂も高き天井のてんとたまらぬ天人に、世辭も器量も吉原が一の得意にひと廻り、廻りて歸る御堂

前。

ト兩人團扇を遣ひ、花道にて振りあつて舞臺へ來る。

頼政　これは〳〵韓信先生、よい所へござられたな。

天人　これは皆さん、お揃ひでござりますな。

喜三　今猩々どのゝ振舞で、大宴會を開くところ。

老婆　一ッ御堂の向ぅ三間附合ゆゑに、待つて居ました。

天人　それは有難うござります、酒は何より大好きゆゑ、嘸悦ぶでござりませう。

牛若　見れば韓信先生には、氷賣りを召さるのか。

天人　この長の日を二人して遊んで居つても退屈ゆゑ、向う側の關羽や張飛に外聞の悪いのも、外聞は當分と、氷屋を始めましたわいなあ。

老婆　氷屋ならば韓信さんが、一人で歩いてよからうのに。

お淺　何でお前さんが御一緒に、附いてお歩きなさいまする。

天人　皆さん方も知つての通り、唐土産れの韓信どの、詞がさつぱり分らぬゆゑ、わたしが通辯に附いて居ねば、少しも譯が分かりませぬわいな。

老婆　成程これは御尤も、韓信さんの云ふ事は何を言つてもばあ〳〵と、よく人のいふ唐人の寢言で、さつぱり分からない。（ト此うち韓信まち〳〵して居て、）
韓信　ぱんけんたんぺかぱあぺるほん。
老婆　今韓信さんの言つたのは、何と言ふのでござりますえ。
天人　よく喋べる婆あだといふ事でござります。
老婆　おや〳〵、それぢやあわたしの事かえ。
韓信　らい〳〵せいこうじやうべいたん。
賴政　あれは何といふ事だ。
天人　日本詞に譯しますと、賴政さまは助平さうだ。
早太　こりや旦那、當てられました。
賴政　なに、そんなでもないものを。
韓信　よくたんてんこうにはほんちゑ。
猩々　こつらの方へ指をさして、ばあ〳〵言つたはわしが事か。
天人　お前さんは酒好きゆゑ、二本杖だと申しました。

猩々　これも少々當てられた。

お淺　少し所か大當りでござります。

韓信　かいがんびやくらいてんたうたい、たい〳〵ごくたいすつぱあぱあ。

早太　今のはわしの事ではないかえ。

天人　おゝお前は顔が中低で、お負けに天窓がでこすけだ。

早太　いや、ひどいことを言ふではないか。

賴政　成程早太は、中低で、

喜三　よつほど天窓がでこすけだ。

老婆　でこすけどころか大出來だ。（ト三人手を叩きはやす、早太腹を立て、）

早太　この韓信の毛唐人め、よくでこすけだと吐かしたな。

〽腹にすゑかね氣の早太、打つてかゝれば人々も、悪く言はれた意趣返し、ともに拳の雨霰。

トこれへ鳴物を冠せ、早太弓を取つて打つて掛ろ、是れを賴政猩々老婆留める思入にて、韓信を打つ、韓信ばあ〳〵と逃げ歩く、天人韓信を圍ひ皆々を留め、

天人　お前方は大勢で、韓信どのを打つたからは、こりや此儘には濟まされぬわいな。
お淺　そのお腹立は御尤もだが、元は互ひの常談から、
菖蒲　起りしこのいさかひ。
喜三　皆に免じて料簡さつしやれ。
天人　お前方のお扱ひゆゑ、顔さへ立てば料簡しませう。
牛若　して、其顔の、
四人　立てやうは。
韓信　すつぺらほんぺらすからかほん。
牛若　して、すつぺらほんぺら、
早太　すからかほんとは。
天人　すからかほんとは、韓信どのゝ股を潛れといふのぢやわいな。
頼政　なに、韓信どのゝ股をくゞれ。
早太　それは近頃勝手違ひ。
老婆　そつちで潛るがあたりまへ。

早太　どうしてこつちで潛れるものだ。

天人　それでは屯へ持出しませうか。

皆々　さあ、それは、

牛若　早く股をば、

四人　潛つた〱。

〽韓信四股を踏みならし、股を開いて突ッ立てば、今更何と猩々も早太も老婆も手を突いて、潛る跡より源三位、小腰かゞめて足を搔き、投げる手段の土俵際、力競べの相撲取り。

ト此うち韓信よき所へ立ち股を開く、猩々老婆早太おづ〱と韓信の股を潛るをかし味あつて、賴政股を潛る思入あつて、足を搔く。韓信どつこいさうはと蹈み止まり、兩人相撲の見得、櫓太鼓になり、牛若日の丸の扇を開き行司のこなし、韓信賴政を投げる。猩々身ごしらへなし韓信に組附く。

〽惚れて逢ふ夜はこつそりと、左りをさしの座をぬけて、四ッに渡つて腹櫓、ちん〱鴨の入首に、どつこい殘つた手管の手取り、爰らが水の行司役。

ト韓信猩々所作立のやうな相撲の振り、是れへ牛若からみ、よろしくあつて兩人を留めて。

牛若　先づ此の勝負は、預かりにして、

老婆　これから跡は酒だ〳〵。
猩々　呑んでも盡きぬ泉の酒。
喜三　誰に遠慮も仲直り。
早太　思ひいれ手酌で、呑んだ〳〵。（ト猩々柄杓で瓶の酒を茶碗へ汲んで出す。皆々これを呑み）
賴政　然し酒ばかりでは風情がない。
菖蒲　誰ぞ肴に仕舞でも。
天人　そんなむづかしい事よりも。
老婆　娘に何ぞ踊らせませう。
韓信　そんれんよかぱあよかぱつぱ。
賴政　おぬしの振りが見たいのだ。
お淺　どうしてまあ、そんな事が。
喜三　えゝ、斟酌せずと、
皆々　やつたり〳〵。
お淺　そんなら爰で、お笑ひ草に。（トお淺手拭を持ち前へ出て、田舎娘の振りになり）

〽おらがえゝ、おらが小村は三社の氏子、笛だ太鼓だお祭り毎に、昔しのぶのあの拍櫻、それの拍子は太鼓につれて、さゝらさつくり〳〵腰ざゝら。

ト お淺びんざゝらの振りよろしくあつて、老婆出て二人になり、

〽どゞんがどゝやれとがやつしよ、是れの祭りに諸白造り、一夜寢かせし淺草海苔の、鮨の重しに姥が石、どゞんがさつくり〳〵どがやつしよ。

ト 此うち老婆中へはひり、よろしくあつて、トゞ牛若上手、眞中にお淺、下手に老婆銘酒の壜を振りあげ、額の畫面の見得にて納まる。

頼政　さあ、此跡は天人どの。

菖蒲　韓信どのと馴染めを。

お淺　話してお聞かせなされませ。

天人　それは許して下さりませ。

老婆　何も此場の一興ゆゑ、

喜三　さあ〳〵早く。

早太　お聞かせなされい。

天人　その馴染は恥かしながら。

〽過ぎし彌生の花の頃、春の心の浮き立ちて男選みの垣間見に、ふつと思ひを掛額の、〽韓信さんと言交し、香の煙りの雲となり、又雨となる打水や、〽濡れて嬉しき鷄の羽の、今は比翼の女夫中、樂しいことぢやないかいな。

ト天人韓信を捉へクドキの振り、此中へ猩々お淺を引張つてはひり、たかし味よろしく、四人からんで振りあつて、韓信一人殘り、

〽妻の惚氣に韓信が自慢の髭と鼻の下、長い話しに箱詰の氷は解けて朝からの、儲けを水に打ちおどろき。

ト韓信女房を自慢する思入にて、氷の箱につまづき、引くり返しびつくりして、

老婆　や、こりや氷が解けて水となつた。

韓信　ぱつ〳〵〳〵ぱあ。

〽はつとばかりに泣き伏せば、一杯機嫌に賴政が。

ト賴政烏帽子の上へ鉢卷をなし、生醉の思入にて前へ出て、

〽えゝい、こなたも唐土漢の世で、五本の指へ折られた韓信、氷が解けてしまつたとて、な

な何で泣くに及ぶものだ、〽臂を怒らし腹立てば、菖蒲の前は吹き出し、〽おまへが何も腹を立て筋を出すには及ばぬに、お腹がくねつて、ほゝゝゝはゝゝゝゝゝと打笑へば、〽韓信またも泣出し、〽わんちうなかんでおられんぱい、ぱあ〳〵、〽水にしたとて僅な錢、それを泣くとは腹が立つ、〽あれまた泣いたり腹立つたり、こんなをかしいことはない、〽こつちは悲しや、〽えゝ腹の立つ、えゝ、〽さりとはをかしや、ほゝゝゝゝ。〽ひゝゝひ、〽えゝえ、〽ほゝほ、〽ひゝ、えゝ、ほゝゝゝゝ。わけもなや。

ト韓信頼政菖蒲の前三人生酔の振りあつて、韓信殘り唐音の早き振りになり、

〽ねん〳〵ちう〳〵、ねんくわんちやん、そんでへきう、きうらい〳〵いつぱいしやう、せんろうさあてん、しやうかつぽう、さんぱんぴかちう、ころぷうぱい、さんぱいせう〳〵いんかうきん、かんわいめうらいめうらい〳〵、めうてんす、三けんぺんてこぺんてん〳〵、きうらいす〳〵てんとうひら〳〵ねんころりん、ぴるてうのうちうさあらんぱん、ぱあ〳〵。

ト月琴模樣にて、支那樂の鳴物を冠せ、韓信よろしく振りあつて納まる。

〽こなたは手酌のぐい呑みに、殘らず醉ひしどろんけん。

ト老婆、猩々、喜三太、早太、お淺、牛若丸みな〳〵ひよろ〳〵と前へ出で、

牛若　實に猩々が、この酒は、
猩々　いくら呑んでも盡きざる泉。
老婆　こんな目出度いことはない。
喜三　泣くといふのも、分からなければど、
早太　腹を立つのも分からない。
お淺　また笑ふのも氣が知れぬ。
天人　機嫌直して一踊り。
韓信　それよかぱあ。

〽醉うた〳〵猩々の酒に、見る物事が二ツ三ツ、殖ゑるは大地の繁昌に、岩井祝うて粂や汲め、つきぬ泉に常磐津の松の千歳の末かけて、榮ふ櫓ぞ目出たけれ。

トみな〳〵生醉の思入にて、手踊りよろしくあつて、

頭取　まづ今日は是れぎり。

ト目出度く打出し

額ぬけ（終り）

一座も
二世を
掛念佛に

首尾四谷色大山

解説

「首尾四谷色大山」は明治十三年六月（作者六十五歳の時）、新富座に稿下上演された、清元淨瑠璃である。書きおろしの時の役割は、市川團十郎（大山參り升右衞門）、尾上菊五郎（同菊松）、坂東家橘（同嘉吉）、中村宗十郎（同宗次）、市川左團次（同左吉）、市川小團次（同小太夫）、中村鶴助（同梅吉）、岩井半四郎（茶屋女房おやま）、河原崎國太郎（お國）等であつた。清元連中は延壽太夫、淸海太夫、順三郎、德壽郎、梅次郎等であつた。

夏のことで、相州の大山まゐりを當て込んだ大切淨瑠璃であつた。「登々色大山」（慶應三年七月作清元の大切淨瑠璃）と全然同一趣向のものであつた。

首尾四谷色大山（大山參り）

雨降山大瀧の場

清元連中

〔役名━━大山まゐり升右衞門、同菊松、同嘉吉、萬助、宗次、茶屋女お仙、お仙、お國、其他大勢。役者の名のまゝにても差支へなし。〕

總て大山前不動大瀧の模樣。爰にお國、お仙島田蔓輪棒を首拔きに染めたる揃ひの浴衣、對の前垂、東下駄茶屋娘のこしらへにて團扇を持ち立掛り、喜知六紺半纏腹掛け山附の脚絆、麻裏にて新富と記せし長提灯を持ち立掛り居る、双盤瀧の音にて幕明く。

喜知　頭取の役廻りで一足先きへ駈拔けて來たが、今年やアいつもより連中が殖ゑて、十八九人の同勢が今爰へ登つて來るから、茶の支度でもしておきねえ。

お仙　おやまあ、それは嬉しいンですが、嘉吉さんや小太さんも定めて御一緒でござりませうね。

喜知　あの二人はおめえといふ當込みがあるから、來ずにやあ居ねえが、さうして爰に居るあんねえは、

今年から助けに來たのか。

お國　はいお國と申す新參もの、何分よろしくお頼み申しまする。

喜知　愛敬揃ひの其中へ、斯ういふ別品が一枚殖ゑては、猶々繁昌するだらうが、時にこつちの姉御はどうした。

お仙　姉さんは蟲が知らしてか、奥でお化粧をして居ますよ。

喜知　素顔でせえ美くしいのに、化粧立てられちやあ猶堪らねえ。

お國　さうして新富の御連中とは、どんなお方衆でござんすえ。

喜知　爰に名前書を持て居るから、讀んで聞かせて遣らう。

お仙　どうぞ聞かせて、

兩人　おくんなさい。（ト喜知六懐より淨瑠璃觸れを出し）

喜知　東西々々。（トよろしく讀むこと、）

お國　おや、それぢやあ清元の太夫衆だの、役者が來るのでござんすか。

お仙　それぢやあ奥の姉さんに、早く知らせて遣りませう。

喜知　實は一足先きへ來たのは、皆さんの來ねえ其うち姉御に頼んで情夫になつて貰ひ、若い手合に見

せつけて遣る氣だ。

お國　あの姉さんにお前さんが、めつたな事をおつしやると、却つて恥を掻きますよ。

喜知　はて、所が頭取といふ名目をもつて、押強く頼む積りだ。

お仙　何ぼ頭取の御威光でも、恥を掻くからおよしなさい。

喜知　いや／＼そんな事は決して構はねえ。いよ／＼此所頭取恥かき、其爲め口上左樣。

お國
お仙　おや、悪い地口ですねえ。

ト右鳴物にて、三人茶屋の内へはひる。知らせに附き下手の張物打返す、爰に清元連中居並び、直に淨瑠璃になる、

〽開け行く御代の恵みに大山へ、参るも僅か一日で、見上ぐる峰に瀧津瀬の、流れ涼しき鈴の音に、掛念佛も勇ましく、〽南アまア、ア、アイ、陀アボウ。（ト此時花道の揚幕にて、）

大勢　南アまア阿アアい陀アぼう。（ト掛念佛の掛合二三度あつて、）

〽倶利加羅の勇み目に立つ一群は、負けぬ勢ひと夕暮に、昇る夜山に雲晴れて、丁度月さへ宵の口、揃ひ浴衣の派手を賣る、家業は土地の花競べ。

ト是れへ聖天の鳴物にてあしらひ、花道より梅五郎、門藏、紺の半纏脚絆、麻裏がけにて、「新富」と記

せし長提灯を持ち、鈴を振りながら、首へ富士講の大珠數を掛け出る。團十郎、左團次、家橘、小團次、鶴助、團右衛門、鶴藏、仲藏、宗十郎、いづれも好みの鬘、輪棒首拔きにて染めし揃ひの浴衣、紺の腹掛、山附脚絆、麻裏がけにて、長提灯を持ち出來る、菊五郎對のこしらへにて、黒塗り莫大なる納め太刀をかつぎ、是れへ猿十郎、幸升、竹二郎、政壽郎、升藏、尾登五郎いづれも半纏、腹掛、脚絆にて、長提灯菅笠を持ち附添ひ、ずつと後より荒次郎、同じく半纏ごしらへにて造花の枠をかつぎ出來り、皆々舞臺へ來りよろしく並ぶ。是れにて出茶屋の内より、お山對の浴衣、前垂東下駄をはき、以前のお國、お仙附いて出來り、

お山　これは〳〵親方衆さま、ようこそ御參詣。

お國　お先觸れがございましたゆゑ、道までお迎ひに出ませうと、支度をして居る其うちに、

お仙　思ひの外にお早いお出で、此間から皆さんのお出でをお待ち、

女三人　申しました。

團十　世界が開化に進むに附け、毎年お山へ來る度に、道中筋の樣子は替るが、

左團　いつ來ても替らねえのは、お山坊の美くしいのと、お仙坊の世辭のいゝのだ。

お山　いえ、わたし共より親方衆が、いつもお替りのございませんのには、實にお嬉しうございます。

お仙　また此間は銘々に、お揃ひをお屆け下さいまして、
お國　新參者のわたしまで、有難い事でござります。
家橘　お國ばうは今年から、爰の見世へ助けに來たのか。
お國　はい、皆樣のおすゝめで、お邪魔に參りましてござります。
菊五　よい子だといふ事は、話しにやあ聞いて居たが、今日逢ふのが初めてだ。
團十　おゝお前達ばかりでなく、皆さま方へも、まだ初めてだ。
お國　もし親方さん、どうかお前さんから皆樣へ、お引合せをお願ひ申しまする。
團十　ちよつとお願ひ申して遣らう。此のお國は私の兇れぬ者でござりますが、生れ附いての無器用者にて、世辭も追從もござりませぬが、どうか行く〳〵大和屋の大姉え同樣、御贔屓をお願ひ申し上げまする。

ト團十郎お國目見得の口上をいふこと。

お國　有難うござります、是れで氣丈夫になりました。
小團　引ぱり凧のお仙坊も、相傘が出來て助かるだらう。
鶴助　いや、助かるといやあ大山參りも、陸蒸汽があるので大助かりだ。

團右　朝飯を喰つて東京を出て、其日の中に夜山へ登り、
鶴藏　直に明日は人力車で、神奈川までは樂なものだ。
仲藏　車があらうが鐵道があらうが、山歸りの紋切形で、あしただ。
宗十　いや、今の若い者は締り見世だが、昔のわけえ者は助平でならねえ。
菊五　所がいくら締り見世でも、助平ばかりは別なもので、昔も今も替りはあるめえ。
團十　時に開化とはいふものゝ、神事は爭はれねえから、爰で銘々懺悔をして體を清めて登るがいゝ。
左團　それぢやあ世界が開化しても、穢れて居りやあ登れねえか。
家橘　扨は昨夜左吉兄ィは、
小團　こつそりどこかへ出掛けたな。
左團　實はさつき境木で、ちよんの間自然薯を掘つた。
菊五　いや、忌々しい素早い奴だ。
宗十　さういふ事なら瀧へかゝつて、早く體を清めるがいゝ。
左團　瀧へ掛つて清めるより、爰へ泊つて三人のうちを、今夜一晩抱いて寢てえ。
鶴助　いや、呆れ返つた助平だ。

團右　それぢやあお山が出來なくなつても、
鶴藏　女ゆゑなら、構はねえ氣か。
左團　東京へ歸つて大山の、出張所へ參詣すりやあ、お山へ登つたも同然だ。
團十　なに、東京の出張所とは。
左團　麻布櫻田町へ去年から、大山の出張が出來て、今年の夏は大流行だ。
菊五　それぢやあ去年開帳のあつた、麻布へ爰の出張りが出來たか、そいつア繁昌するだらう。
宗十　何は兎もあれ初山の、祝ひに何ぞ姉え手合の、
仲藏　端唄なりとも踊りなりとも、意氣な話しが聞きてえものだ。
お山　爰は差詰めお仙さんが、此頃覺えた夕暮の、
お國　高輪八景を皆さんへ、踊つて見せたがようござんす。
お仙　それでもわたしや、うろ覺えゆゑ。
お國　さあ〳〵早く、
皆々　遣つたり〳〵。
お仙　そんならお國さん、助けて下さんせ。（ト團扇を持ち前へ出て。）

〽夕暮の景色とゝなふ八ツ山を、名にし近江の八景に、よそへていはゞ石山の月の岬や唐崎の、松に時雨の袖ヶ浦、人も堅田の約束は雁木へ落つる雁の文、繁き矢走に高輪の歸帆も待たで岡蒸汽、日暮を照らす瓦斯燈に、芝の御寺の晩鐘や、雷がねの比良の雪、晴れて嵐の芝浦は、ぬしに粟津ぢやないかいな。（ト此内よき程にお國出て揚み、兩人端唄の振りよろしく、）

相中
皆々　やんや〳〵。（ト爰へ家橘小團次出て、）

家橘　一番こつちも、負けぬ氣で、

小團　かつかれ節で、

兩人　遣つてくりよ。

〽やんれかつかれ〳〵、道も四筋に線路をすらりとつき並べ、あいのきけんが揃うた、今年初めて、やれこれな、すていしよんで乘込んだ、無理な道でも僅かな時間、あれからこれまで、えんやこんれのえんやらな、そろ〳〵乘込め東ッ子、やァれよォい、〽行くも譯なき山參り。

ト兩人木遣りの振りよろしくあつて納まる、宗十郎出て、

宗十　此間に、どうかお山坊と、うまく話しを附けたいものだ。

左園　所をおれが腕づくで、姉えの返事を聞かにやあならねえ。（トお山の手を取り、連れて行かうとする。）

お山　あもし。（ト是れより口說き模様、）

〽首尾も四ツ谷と途中まで、送る積りの別れ路も、つい程ヶ谷の口前に、乘りても多き神奈川で、ぬしと鶴見の嬉しさは、初めて枕川崎に大師河原の替らじと、又大森の約束も色品川ぢやないかいなあ。（ト宗十郎左園次を捉へお山振りあつて、）

園十　今度は差詰め、こつちの番だ。

菊五　六根清淨身の懺悔。

左園　所へおれも附祭りに、

鶴助　身の上話しも、

鶴藏
園右　懺悔々々。

〽誰も色にはつい踏み迷ひ、道に背いて親の目を忍ぶ愉快の廓通ひ、上る二階で差合の客はいづくの何者と、廊下鳶に障子越し覗いて見ればこは如何に、堅い親仁がぐんにやりと、鼻毛よまれし爲體、くらます藥罐は爰なりと飛び込む座敷の大喧嘩、これなう待つてと相方が中に立番若い者、二階廻しも駈附けて留める騷ぎに短夜の、いつか白みて啼聲は阿呆烏の面

憎や、

ト此うち菊五郎、宗十郎、親子の女郎買の振りあつてをかし味の親子喧嘩になる、爰へ鶴助、團右衛門の若い者、鶴藏の二階廻し出て留める振りよろしく、此うち以前の喜知六盆の上へ三十本程の手拭を包みしを持出で、

喜知　爰のお娘の三人から、揃ひの浴衣の返しだといつて、手拭が澤山來て居りますが、誰にこれを渡しませう。

團十　いや誰彼れといはうより、おれが爰で撒かうから、拾つたものが持つがいゝ。

喜知　それぢやあ早く。（ト皆々よろしく並ぶ、團十郎件の手拭を取つて前へ出る、）

〽まアきやいなく〳〵、東京の道者は金持ぢや、金持札持貨幣持、黄金の花の散るやうに、ばらりやばらりと、まアきやいなく〳〵〳〵。

ト此うち皆々手踊り模樣、件の手拭を團十郎、菊五郎、左團次、宗十郎銘々持ち、土間桟敷の見物へ蒔くことあつて、

〽實に大瀧の音羽屋に、昇る大和屋高島屋、鶴も羽をのす末廣の、要はいづれ成田屋の、清き心に大山の、當りを爰に祝しける。（ト皆々引張りよろしく。）

團十　先づ今日は是れぎり。

ト目出度く打出し

大山參り（終り）

曲亭翁が
古代の名器へ
今様物な
書き添へて

質庫魂入替

解　説

「質屋の藏」は慶應三年二月（作者五十二歳の時）、市村座に上演された、富本清元の淨瑠璃である。角書きにも明らかにされてゐる通り、馬琴の作から暗示を得たものであつた。書きおろしの時の役割は坂東龜藏（孔明の精）、市村家橘（奇妙院魂入替傳書の精）、澤村田之助（宿場女郎ひよく枕の精）、市川左團次（大津繪奴の一軸の精）、關三十郎（平將門裝束の精）、河原崎國太郎（袈裟御前打かけの精）、市川新車（橘逸勢一行物の精）等であつた。

富本連中は豐前太夫、豐珠齋、名見崎八五郎、名見崎安治等。清元連中は延壽太夫、家內太夫、九兵衞、千藏、等であつた。

質庫魂入替（質屋の藏）

常磐津連中
竹本連中

〔役名――法印奇妙院、諸葛孔明、田舍婆あ、大津繪の奴、袈裟御前、漢語樓秀鶴、藝者、若い者、下男、平親王將門、宿場女郎、橘逸勢の娘、石童丸。〕

（寶珠質屋の場）――本舞臺一面の置舞臺、上の方出語り臺の段幕を張り、下の方淨瑠璃臺黑塀の打返し、正面窓、腰卷を見せたる、土藏外廻りの道具幕。總て好事屋寶珠質屋外廻りの體。爰に若い者一人、着流し紺の前垂、懷へ觸書を入れ、鐵雪洞を提げ、下男一人花色の股引、尻端折りにて、拍子木を持ち立掛り居る、時の鐘、稽古囃子にて幕明く。

若者　火の用心。（ト拍子木を打つ。）

下男　火の用心々々。

若者　久助どの、毎晩御苦勞だの。

下男 いやも、忘れても金持の所へ奉公はしねえものだ。火の用心と泥坊の用心で、雨でも降らにやあとつけりと寐られねえ。
若者 今夜は雨になりさうだから、とつけりと寐られるぜ。
下男 そりやあ有難いことだ。
若者 久助どん、あの囃子はなんだらうの。
下男 ありやあ近所の若い者が、祭に出る稽古をするのだ。
若者 おらあまた狸囃子かと思つた。
下男 狸といやあ與七さん、雨が降ると此藏で人聲が聞えるが、狸でゞもありやあしねえか。
若者 いや〳〵そりやあ狸ぢやあねえ、好事屋寶珠といはれるだけ、內の旦那が好事だから、しかも南朝時分から取溜めておいた道具質の、古物の精が抜け出るのだ。
下男 それぢやあ化物かね。
若者 まあ化物と同じやうなものだ、何でも雨の降る晚には、きつと二階へ出るさうだ。此間も內の旦那が、そつと藏の中へはひり、階子から見たところ、先づ孔明に將門、袈裟御前に石童丸、種々雜多のものが出るさうだ。

下男　そりやあ、嘸面白からうね。
若者　とんだ面白いといふ事だ、それに就いて昔から、取溜めて置いた古質を調べて見ろと言はつしやるから、今日晝から書立てゝ見たら、大層な品數だ。（ト懐から觸書を出す。）
下男　どんなものがあるか、讀んで聞かして下さらぬか。
若者　おゝ、讀んで聞かせようとも〳〵、これを讀むのがおれの役だ。（ト觸書を開く。）
下男　東西々々。
若者　『淨瑠璃名題、曲亭翁が名譽の古物へ今様物を取添へて、質庫魂入替、相勤めまする淨瑠璃太夫――、役人――、』（ト是れより兩人して太夫連名役人を讀むことよろしくあつて、）
下男　何のことだ、こりやあいつもの淨瑠璃觸だ。（ト時の鐘、雨車になり、）やあ、雨がばら〳〵降つて來たわえ。
若者　遠寺の鐘に雨の音、化物の出る鳴物だ。
下男　早くこつちは引ッこまう。
若者　いよ〳〵此所、質屋の藏淨瑠璃始まり、その爲め口上左樣。
ト下男ちよん〳〵と木を打つ、是れにて下手黒塀を打返すと、常磐津連中居並び、これと一ッ時に上

手の霞幕を切つて落す、竹本連中居並び、小短く前彈きあつて、淨瑠璃になる。此うち若い者下男下手へはひる。

〽咲花の雲井にまがふ大和路や、吉野皇居に遠からぬ、〽六ツ田の里に名も高き、七ツ屋寶珠が質藏に、〽憂き年月を重ねたる、雨さへ古き質草の、〽假に姿を顯はして、〽その身をかこつ、〽物語り。

ト誂へ唐樂の入りしせり上げ模樣の鳴物になり、知らせに附き、正面の道具幕を切つて落す。正面藏の内を見たる書割の張物、左右へ菊燈臺を照らし、眞中へ唐冠り唐裝束の孔明立身、上手に金冠り裝束の將門笏を持ち、此次にかつしき花櫛打掛けなりの袈裟御前控へ、下手に元祿風古畫の振袖なりの逸勢の娘本を持ち控へ、この脇に振袖、指貫の石童丸附添ひ、鳴物打ち上げ、

〽先づ上座に孔明が鳴りひゞきたる陣太鼓、一座の指揮も五千餘騎、〽七人影の將門は、其名高雄の袈裟御前、〽思はぬ浮名橘の逸勢が娘、石童丸、〽おの〳〵席に列なりて、

ト此内皆々振りあつて、孔明床几へ腰を掛け、跡は左右へ分れて居並び、唐樂のやうな鳴物になり、

將門　如何に方々、長の年月罪もなくして、配所の月も疾に切れ、遂に左遷の流れとなり、寶珠が藏の侘び住居。

袈裟　日の目を見るもこの窓の、網の目よりは見ることならず、身の果敢なさに質草の假に姿を顯して雨の夜雪のつれ〴〵に、古き器物の打ちこぞり、昔々の物語りに憂きを忘るゝ質屋の藏。

將門　最早今宵も子の刻過ぎ、家内の者も寢入りし樣子、袈裟御前には孔明どのへ其身の憂きことを、今樣に、舞うて見せやれ。

袈裟　將門公の仰せながら、拙き振りにござりますれば、お恥かしう存じます。

石童　早う踊りが見たいわいの。

袈裟　それぢやというて。

將門　斟酌せずと、さあ〳〵早く。

袈裟　左樣なれば不束ながら。（ト舞扇を持ち、孔明へ辭儀をして前へ出る。）

〽常 抑々これは其古へ、亘と深く契りたる白拍子の小袖にて、仇し緣に橋供養、〽常 盛遠ぬしに見染められ、〽常 袈裟といふ名の由緣にや、遂に思ひを掛けられて、秋の紅葉のはかなくも、〽常 亘に替り散りし身の、筐に殘る縫模樣、〽常 淚に色ぞ替りける。

ト此うち袈裟御前扇にて振あつて納まる。

將門　身の上哀れな物語で、雨夜に猶更しめり勝ち、一座の興になるものが、誰ぞ爰へ參ればよいが。

〽折からこゝへ奇妙院。

トドロ〳〵になり、下手浄瑠璃臺の下より、奇妙院、黑の頭巾着流し、輪袈裟法印のこしらへ、錫杖を持ち仕掛にて出る、將門びつくりなし。

やあ、其方は何者なるぞ。

奇妙　へい、奇妙院といふ法印の、所持して居た、眞言祕密の一卷でござります。

袈裟　して、此所へ參りしは、何ぞ用でもありつるよな。

奇妙　これへ出掛けて參りましたは、今樣の新質手合が、あなた方と御一緒に身の上話しがしたいといふから御挨拶を聞きに來ました。

袈裟　それは雨中のよき慰み、違慮に及ばぬこれへ〳〵。

奇妙　それは早速のお聞濟み、有難うござります。（ト向うへ向ひ、）そこに居なさる新質手合、みんな一緒に爰へ來なせえ。

〽いふにあなたの片隅から、名に大津畫の奴の畫、〽顏もあかねにほんのりと、珊瑚珠の玉の精、藝者と人も遊客の、〽なま西洋に片言も鉛におとる銀鎖、時計の精も後から、〽惡く開けぬ古鍋の、在鄉婆アが打連れて、〽所狹しと居並んだり。

ト此うち鳴物をあしらひ、花道より奴、大津畫の奴のこしらへにて、槍を持ち出る。跡より藝者、藝者のこしらへ。其跡より秀鶴散切り羽織着流しにて出る。其跡より婆ア、田舍婆アのこしらへにて、鐵鍋を提げ出來り、花道にてよろしく振あつて、舞臺へ來り下手へ居並ぶ。

將門　これは見馴れぬ者共が、もう是れぎりかな。

奇妙　此外に美しいお職が一人居りまする。おい婆ァさん、品川から來て居る仕掛の新質はどうした。

婆　まだ棚に寐て居たッけ。

奇妙　起して來ればいゝに。

將門　こりやく、寐て居るとは何だな。

奇妙　橋向うの女郎でござりますが、びつくりなさる代物でござります。

將門　それは早く見たいものだ。

奇妙　畏まりました。（ト向うへむかひ、）おいく仕掛の姉え、目を覺して來なせえ。

トドロくになり、花道より女郎、宿場女郎の好みのこしらへにて出で、花道へ留り、

常〽はしをる御召の小袖さへ、仕立おろしか富士おろし、裾に波打つ見通しの、常〽沖にかゝりし船底の、枕も木地の垢拔けし、常〽二階で幅の姉え株、竹〽蹉音高く歩み來て、

ト女郎振りあつて舞臺へ來る、浮いた合方になり、

女郎　奇妙院さん、何ぞ用かえ。
奇妙　見なさる通りの大一座だ、おめえも爰で話しねえな。
女郎　話すはいゝが、お酒はあるかえ。
奇妙　爰は質屋の藏の中だ。そんな贅澤を言つちやあいけねえ。
女郎　それぢやあみんな、轉寐だね。
將門　成程これは別品だ。さゝ、爰へ來やれ〳〵。
袈裟　してそもじ達は、何者なるか、一人々々に名乘りやいなう。
奇妙　さあ〳〵、新質のお前方は、古質の衆へ近附に、そこへ出て名乘りなせえ。
奴　あゝゝゝゝゝゝゝ困りました。（ト吃つていふ。）
將門　奴めは、吃りと見えるな。
奇妙　吃りの筈でござります、これは吃の又平がかいた、奴の一軸でござります。
將門　して其次の、散切りは。
秀鶴　僕でげすか、僕は文明開化の通りものでげす。

將門　はゝあ、通りものとは、光りものゝ類ひか。

秀鶴　これは失敬な仰せでげす、僕はしかも昨年まで、銀座で銀の時計を鬻ぎ、その外銀瓶銀更紗、銀にて長らく賣込みやしたが、去暮本家が開店に支店の僕も改名して、今は漢語がはやるところから、漢語樓秀鶴と稱しやす。

袈裟　して、其次なる女中さんは。

藝者　はい、わたしやあ藝者でござりますわいなあ。

將門　さうして、どこの藝者だな。

藝者　此間まで濱に出て居りましたが、親仁が一人ござりますので、なか／＼わちきの拵ぎで足らず、此頃故郷の東京へ、歸ると間もなく暮れの凌ぎに、質屋の藏のわび住居どうぞ皆さん是れからはわちきを贔屓にして頂戴な。

奇妙　いや、さういふ事なら奇妙院が、流行るやうに祈禱をして遣らう。

袈裟　さうして次の、お婆アさんわえ。

婆　わしやあ赤本のかち／＼山へ出る、狸汁の古鍋で、便りに思つたづくがすたり、たうとう質屋へ流れ込みました。

女郎　さうして古質の、お前さん方はえ。

へいふに將門、肩臂張り、

將門　かねて音にも聞きつらん、犬打つ童も猛威に恐るゝ、下總の國猿島郡へ内裏を築き、自ら新皇と唱へしも、桓武天皇六世の孫、王位を出でゝ遠からぬ平親王將門とはおれが事だわ。

トきつと見得、皆々びつくりして、

女郎　えゝも、野暮な大きな聲だね、わたしやびつくりしたよ。（ト將門目を細くして、）

將門　おゝさうであつたか、堪忍しや〳〵。

秀鶴　扨はこれまで神田の社に、鎭守の神だとごまかして、大きな顏をして居たのも、開化の時節に明神は、大己貴命と知れ、神田の社を追ひ出された將門公でげすか。

藝者　さうして、次の姉さんわえ。

袈裟　尋ねに名乘るも恥かしながら、元は都の白拍子で、渡邊の左衞門亙が妻、袈裟御前といふわいの。

女郎　さうしてこちらの、お稚兒さんわえ。

石童　元は筑紫の松浦の黨、加藤左衞門重氏が一子、石童丸といひます。

婆　はゝあ、そんならおめえがでろれん祭文で聞いた、石童丸どんかえ。
奇妙　さうしてこちらにおいでなさる、元祿風のお前さんは。（ト逸勢の娘思入あつて、）
娘　自らがたらちねは、日本三筆のその一人、桓武の御時延暦の末に遣唐使に隨つて唐土に到り、彼の地にて橘秀才と賞せられし、右中辨從四位の下、橘の朝臣逸勢が娘にて侍るなり。
奇妙　これは古い落し話しにある、土風烈しうして砂石眼入するたちだね。
女郎　さうして眞中に、むづかしい顏をして居る唐人さんは、何といふお人だね。
奇妙　あれが唐土の大元帥、日本の楠でも智慧ぢやあ叶はぬ孔明先生。
女郎　道理で何か考へ顏をして、さつぱり口を利きなさらないね。
奇妙　はて、口を利いても唐人の寐言で、さつぱり譯が分らねえのさ。
竹へけなせば、孔明くわつと急き立ち、（ト孔明羽團扇を構へ、きつとなり、）
孔明　法印たいさん馬鹿あります、あなた別品よか〳〵。（ト女郞へ思入、）
奇妙　やあ〳〵、扨は日本の詞が分ると見える。
孔明　私、じやつぱん飜譯勉強、法印ぺけ〳〵、はゝゝゝゝ。（ト笑ふ。）
奇妙　こいつは大しくじりだ。

秀鶴　扨は孔明先生も、質にはひつた飜譯書を見て、日本詞を覺えたか、成程これが開化でげす。
將門　いや何か奇妙院、其方の本體は人の魂を入替へる傳書の一卷ださうだな。
奇妙　左樣でござりまする、人の魂を入替へまするゆゑ、魂かへる法印さんと申します。
將門　惡洒落はさておいて、何と今宵の慰みに、魂を入替へてはどうだな。
藝者　もし、質屋の藏で入替へると、捨利が出ますよ。
奇妙　はて、そんな野卑なことを言ひなさんな。
娘　それでは斯うして居る者の魂が、替るので侍るか。
袈裟　こりや面白いことであらうわいの。
婆　わしやこの美しい藝者どんと、替へて貰ひたい。
奇妙　そりやもう誰でも彼れでも、お望み次第だ。
秀鶴　いや、開化の時節に、そんな不思議はげえせん。
奇妙　不思議があるかないか、試みにこなたを古鍋婆ァさんと、入替へて見せやせう。
秀鶴　いや婆ァさんは恐れやす、成るべくは別品にして貰ひたい。
奇妙　それぢやあ、あすこに居る、袈裟御前さんにしよう。

袈裟　いえ〳〵わたしや。

將門　はて、逃げるとて逃がさぬ〳〵。

孔明　法印、早くやつてよろしい。

奇妙　畏りました。

〽常 奇妙院は九字を切り、口に呪文を唱へつゝ、〽竹 二人が魂入替へれば、忽ちかはる形容。

ト此うち奇妙院九字を切り、口の中で呪文を唱へる、ドロ〳〵になり、指金にて誂への魂ぬけ出で、左右へ入替る、これにて秀鶴ぐにや〳〵になり。

〽常 思ひ出せば恥かしや、義理の柵堰き留めかねて、つまを重ねて袖濡るゝ。

ト秀鶴袈裟御前の振りよろしく、袈裟御前男の身形にて前へ出る。

〽竹 空も時雨の涙雨、梢の紅葉色づきて、散りてぞ浮む水の面。

ト男の振りあつて兩人よろしく。

秀鶴　わしやどうやら、恥かしいわいなあ。

袈裟　文明開化に限りやす。

〽常 元へかへせば、〽竹 夢の蝶。

ト此うち奇妙院印を結ぶ、ドロ〳〵になり、兩人元の形になる。

秀鶴　成程、これは妙でげす。

袈裟　ほんに奇妙でござんすわいなあ。

奇妙　扨この次は、お約束の婆アさんと藝者の番だ。

藝者　いえ〳〵、わたしや。（ト逃げにかゝるを、）

婆　どつこい、こなたは逃がさぬ〳〵。

〽今は梅干婆アであれど、花の若い時や色香も深く、鶯啼かせた事もある、さつさよいこのよいこの。（ト藝者婆アの振りよろしく、爰へ婆ア腰を伸ばし前へ出る。）

〽春雨にしつぽり濡るゝ鶯の、羽風に匂ふ梅の花、わたしや鶯ぬしは梅、やがて身儘氣儘になるならば、鶯宿梅ぢや。

ト合の手の所にて婆ア仰向けにひつくりかへる、奇妙院印を結ぶ、双方元の形になり、

〽ないかいなあ。（ト藝者端唄の振りの留り、婆ア腰をさすりながら、）

あゝ、腰が痛い〳〵。

藝者　ほんに、お氣の毒でござんすなあ。

孔明　たいさんよか〳〵、はゝゝゝゝ。（ト笑ふ。）
將門　して此次は、誰だ〳〵。
奇妙　お前さんと、石童丸さんだ。
將門　いや、そりや餘り馬鹿々々しい。
奇妙　まあ遣つて御覽じろ、飛び違つたのがお慰みだ。
將門　假令何と言はうとも、あんな子供めを。（ト此うち奇妙院魂を入替ろ、石童丸將門の思入にて、）

竹本詞　〽えゝ、何をぬかし居る。（ト將門石童丸の思入にて、）

あれ、怖いわいなう。

常　〽石童丸はうろ〳〵と、遙々遠き筑紫より高野の山の九十九折登りし甲斐もなく涙、此儘ひよつと父上に逢はれぬならば母上には、焦れ死をなさらうかと、思へばそれがわしや悲しい

わあゝ。（ト將門目をこすり、口をあいて泣く。）

常　〽ないじやくりするいぢらしさ。（石童丸人形振りにて、）

竹本詞　〽えゝ、この餓鬼めはめろ〳〵と、何をそんなに泣き居るのだ。

それぢやというて悲しいもの。

竹本詞〽まだ泣き居るか、〽どたま歪めてこまさんと、握り拳も早蕨のかよわき腕振りあげて、

常〽打てば將門、天窓を押へ。（ト石童丸人形振り、將門の思入にて將門の天窓を打つ、）

あれ、痛いわいの。

竹本詞〽最一つこますぞ。

痛いわいなう。

常〽幼き振りの魂を、竹〽元へ戻せば平親王。（ト奇妙院魂を元へ戻す、將門きつとなり、）

將門とは、おれが事だわ。

石童　あれ、怖いわいなう。

常〽譯も他愛もなかりけり。（ト双方よろしく納まる。）

孔明　大さんよか〳〵、法印跡を遣つてよろしい。

奇妙　さて此次は大津絵の、吃りの奴さんと、逸勢卿の御息女の侍るさんと入替へよう。

奴　なゝ何、おゝゝゝおらが、たゝゝゝ魂をいゝゝゝ入替る。

娘　自らはいやで侍るなり。

ト此うち奇妙院魂を入替る。これにて臂を張つて居る奴ぐにや〳〵と女のこなしになり、逸勢の娘臂

な張り、奴の思入になる。

奇妙　はッ、替りました。（ト女郎逸勢の娘に向ひ、）

女郎　もし、お前さんは。（ト逸勢の娘奴の思入にて、）

娘　おゝゝゝおらは、おゝゝゝ大津のかゝ片邊り、せゝ瀬田のうゝ鰻ののらくらと、わゝ渡る浮世又平だ。

女郎　もし、そちらの奴さんはえ。（ト奴いやらしきこなしにて、）

奴　自らのたらちねは、日本三筆の其一人、桓武の御時延暦の末に、遣唐使に隨うて唐土に到り、彼の地にて橘秀才と賞せられし、右中辨從四位の下橘の朝臣逸勢が娘にて侍るなり。

孔明　たいさんよか〳〵、ぱゝゝゝゝ。（ト羽團扇を叩きながら笑ふ。）

奇妙　とても事に、何ぞ踊りを。

娘　がゝゝゝ合點だ。（ト前へ出る。）

竹〽旅の往來の人の氣に、大津土産の浮世繪は、又と荒氣の鬼の顏、常〽丹で一筆塗り笠や、若衆のすゐた鷹といふ、竹〽名さへ床しきやつこらさ。

ト逸勢の娘奴の振りある。奴女のこなしにて出て、

常〽それは大津繪これは又、京で名代の隷書かき、竹〽筆の逸勢唐までも、常〽譽れの鳥の跡たえて。

ト奴振りあつて、奇妙院魂を元へ戻す、ドロ〱になり、兩人心の替りし思入にて、逸勢の娘出て

竹〽野末の露と消え行きし、亡き父上を問ふ人も。（ト奴出て）

常〽あらきの鬼も、發起して、（ト逸勢の娘、奴振りあつて、）

竹〽鐘撞木。（ト逸勢の娘釣込まれて、大津畫の振りになる。）

常〽釣鐘、辨慶、矢の根五郎。（ト兩人振りあつて納まる。）

えゝも、釣込まれて侍るなり。

女郎　こりや面白い傳授だが、わたしに敎へておくれでないか。

奇妙　お前なら、敎へてやらう。

女郎　しかし、覺えられゝばいゝが。

奇妙　何も造作もない事だ、此の卷物さへ讀んで見ると、誰にでも出來ることだ。（ト懷より卷物を出す。）

女郎　それぢやあ、早く敎へておくれ。

奇妙　敎へる代り、おれが賴みも。

女郎　聞かないでどうするものかね。

〽（常）ほんに思へば古川の廣尾にぬしが居た時分、色を拵ぎに品川へさんげ〳〵の提錢で、泊りに來たる橋向う、達引く臺の附合せ、慈姑天窓に惚れこんで。

ト此うち女郎奇妙院を捉へクドキの振り、奇妙院浮れて一巻を側へ置く。これを逸勢の娘取つて、開き見て傳授を覺えし思入、將門魂を入替へろといふこなし。逸勢の娘呑込み、孔明は二人のクドキを見て段々浮れて前へ出る。逸勢の娘孔明と女郎の魂を入替る。ドロ〳〵になり、女郎孔明になり、

大さんよか〳〵。

〽（竹）ろんちやんろんちやんきんちやあきんちやあ、おんじうよかまかぱか〳〵ぱあ。

ト手を叩き、孔明の振りになる。奇妙院びつくりして、

奇妙　や、こりや誰か入替へたな。

娘　自らが入替へて侍るなり。

奇妙　いや、とんだ所を侍られた。（ト孔明女郎のこなしにて、）

孔明　なんだな、おめえ愚癡をこぼして、船玉でも遣つておくれな、えゝ自烈ッてえのだよう。

〽ぬしゆゑならば身の皮を、蝦蛄同様に剝かれても思ひ切られぬ悪足に、辛い勤めの枕脂瘤

ト孔明奇妙院を捉へ女郎の振り、女郎此内へ割つてはひり、

〽そんちうどうらんちく〳〵りん、ばく〳〵ぱんぱかすつぱかぱあ。

ト女郎孔明の振り、三人の振りのうちに、逸勢の娘魂を入替る思入にて、孔明の魂を間違へて奇妙院へ入れる、奇妙院孔明のこなしにて、

奇妙　ふんたんよかぱか、まか〳〵ぱあ。

娘　こりや間違へて侍るなり。(ト魂を入れ直すことよろしく。)

孔明　ふんたんよかぱか、まか〳〵ぱあ。(ト女郎の魂戻り。)

女郎　えゝも、狐に化されたやうだ。(ト爰へ皆々出て、)

將門　誠に奇妙な、このまじなひ。

秀鶴　何でもこりやあ、博覽會ものだ。

藝者　ほんに古質と新質と。

婆　名乘つて見れば珍らしい。

奇妙　先づ孔明の陣太鼓に、

女郎　宿場女郎の仕掛の精。

娘　又自らは書物の精なり。

奴　おゝゝゝゝ、おらは、やゝゝゝゝ奴繪。

秀鶴　僕は時計。

袈裟　わらはゝ小袖。

藝者　わたしは簪。

婆　婆あは古鍋。

石童　この身は脚絆。

將門　平親王の金冠。

孔明　はくらん會がよか〳〵。

常〽もく〳〵れんきうでんすぴい、しやうくわんさんどうしうろ、竹〽きん〳〵しやうさい、常〽よかしいちいな、常〽ごうさいすいぱすいりやうさい、竹〽こんぱか〳〵よかぱつぱ、よかぱつぱ、竹〽よかぱつぱ。

ト此うち唐人囃子の鳴物になり、皆々惣踊りよろしくあつて、時の鐘鷄笛になり。

〽（常）早や明近きくだかけの、鷄の鳴く音に孔明が、〽（竹）一座の陣を引上げて、元の棚にぞ。

〽（兩方）歸りける。

奇妙　先づ、今日はこれぎり。

ト目出度く打出し

質屋の藏（終り）

千載の一遇に
憲法の發布
萬民の幸福に
區中の祭典

朝日影三組杯觴

解説

「朝日影三組杯觴」は憲法發布の祝典に際して上演された常磐津、淸元の大切淨瑠璃であつた。明治二十二年三月（作者七十四歳の時、）新富町桐座に於て稿下された。書きおろしの時の役割は市川團十郎（薩摩踊り）、尾上菊五郎（同）、市川左團次（同草苅庄五郎）、中村芝翫（百右衞門）、市川小團次（燕枝）、尾上松助（賣り子天九郎）、澤村源之助（草苅豐子）、市川八百藏（畑右衞門）等であつた。常磐津連中は文中、林中、小文字太夫、式佐、文字兵衞等。淸元連中は延壽太夫、志津太夫、壽兵衞、梅吉、里八等であつた。

記錄によれば、この大切淨瑠璃は大好評であつて、この中の薩摩踊りの件の如きは、淺草公園の見世物にも取り入れられたといふ。

朝日影三組杯觴（憲法發布）

憲法發布盛典の場

清元連中

常磐津連中

〔役名＝草苅庄五郎、牛方の梅六、園柳樓燕枝、園々珍聞寶、草苅豊子、百姓畑右衞門、同女房おくれ、柳亭牛燕、三遊亭燕保、同圓尾、三遊連の雀踊大ぜい、狐の嫁入行列、鹿兒島踊り、雀の親百右衞門、狐の花嫁お安、同かしづきお雁、同おてる、同おさめ、人力車夫松藏、角力赤駒四郎藏、角力荒熊九郎八、雀の娘小樂、手古舞小鶴、同寅次、同政次等。〕

（二重橋前の場）＝本舞臺一面の置舞臺、上の方清元の淨瑠璃臺、下の方常磐津の淨瑠璃臺、上下共紅白の段幕を張り、正面二重橋より宮城を見たる拵らへの遠見、屋臺囃子にて賑かに幕明く。と知らせに附き、上手段幕を切つて落す、玆に清元連中居並び、直淨瑠璃になり、

清〽鳳凰の光りまばゆき御車を、ひくは麒麟か皇の、聖の御代に有難き、憲法發布の御惠み
あふげば高き日の御影。

ト屋臺囃子にて、花道より一、二、三、四、五、六の小學校の生徒六人、何れも對の袴、帽子靴にて出來り、花道へ並び、

〽軒端に立てし家毎の、國の御旗に風もなく、靜けき四ツの海原や、霞と共に學校の生徒は多く連れ立ちて、寶祚萬歳々々と、君が代祝し奉りける。

ト花道にて振りあつて、舞臺へ來り、

一　時に音羽君、僕等の連中はどうしましたらう。

二　教師の指揮に從うて、二列に整列して來たも、

三　今和田倉の雜沓で、あちらへ押れこちらへ押れ、

四　實に困難きはまつたので、隊伍もいつか崩れまして、

五　右往左往に逃げ出したが、先幸ひと怪我もせず、

六　爰まで來たのはみんなの幸福、かくとは知らずに先生が、

一　嘸さがしておいでなさるであらう。

二　跡へ歸つて見て來ませうか。

三　行つたら道で間違はう。

四 何でも爰へ來るのだから、
五 跡へ歸らず爰にゐて、
六 みんなの來るのを、
六人 待合はさう。

〽清 生徒がかたへに佇めば、角な活字も圓々の、をかしみ多き珍聞屋。

ト馬鹿踊りの囃子になり、花道より圓々珍聞の配達夫天九郎、長いシャツポ、高い鼻のつけ鼻、赤の洋服、高足駄にて、手に圓々珍聞を持ち出て來り、

天九 是は今般御發布の憲法の事譯から、東京十五區の町々から引出す、山轢や踊り屋臺、又大通りの西洋飾り、諸所の積み物飾り物、洩らさず記せし圓々珍聞、一枚が僅か一錢。

〽清 呼はる聲も高足駄を、ふり立て〱來る跡へ、けふの祭りを見物に腰辨當で葛西から、わけも白髪の爺婆が、見る物ごとにめづらしく、共に浮れて來りける。

ト天九郎ちよつと振りあつて、花道より百姓畑右衞門、白髪かづら、ちよん髷羽織、股引、尻はしをり低き下駄、女房おくれ同じく白髪かづら、婆の拵へ、辨當を風呂敷に包み、腰に結び附け、低き下駄にて出來り、天九郎を見てびつくりなし、めづらしき思入の振りあつて舞臺へ來る。

天九　是は評判の圓々珍聞、一枚づゝ買ひなさらないか。
畑右　わしは無筆で讀めないから、そんな物は入りましねえ。
天九　たとひお前は讀まずとも、若い衆には讀めるから、在所へ土產にお買ひなさい。
くね　孫が學校へ行きますから、一枚土產に買ひませう。
天九　けふ御發布になる憲法から、諸所へ出來た飾り物、一切これに記してあります。
くね　それは一錢では安いものだ。（ト錢を出して一枚買ふ。）
畑右　安い物を買ふと、鼻が落ちるぞ。
天九　大丈夫、天狗の賣物、鼻を高くして賣ります。
畑右　ときに鼻高先生、きんりん樣のお內は何處だね。
くね　どうか敎へてくれさッせえ。
生徒　此の老人達は近在のやうだが、
二　見れば頭もちよん髷で、
三　まだ舊習が脫せぬか、
四　今日天皇陛下をば、

生徒　きんりん樣などゝいふ、
生徒　未開國がありますな。
畑右　何だか今の子供達は、高慢くせえことをいふから、
くね　わしらなどには分からねえ。
天九　そこは開化を敎へる新聞、わたしが敎へて上げませう。向うに見えるあの橋が德川家の時分から人の知つてる二重橋、うしろに見えるあの屋根が、今いふ禁裡樣のゐらせらるゝ、皇城といふところだ。
畑右　そのきんりん樣のお座敷を、どうか拜見したいものだ。
くね　切符は二錢で賣りますか。
天九　どうして〳〵、切符などで見られるわけのものではない。
畑右　十錢ぐらゐ迄は出します。
くね　どうか見られますまいか。
天九　十錢出さうが一圓出さうが、所詮拜見は出來ないから、それより爰で錢の出ない御祭りを見なさるがいゝ。アレ〳〵、向うから美しい藝者の手古舞がまゐります。

ト神輿太鼓になり、花道より寅次、小鶴、政次、何れも藝者の手古舞、若い衆肌ぬぎ、達附、草鞋、鐵棒を引き出て來り、花道へ留り。

清〽江戸といふ昔しからして水道の、水ぎは立ちし土地の花、若衆出立の白粉の、ないが自慢の富士額、鹿子まだらの肌ぬぎに、其名もひゞく鐵棒を、引連れてこそ來りける。

ト三人花道にて振りあつて舞臺へ來る。

畑右　これは〳〵立派なことだ、赤染の襦袢は何枚だか。

くね　めりんすかと思つたら、ちりめんだ。

天九　當時賣出しの藝者衆、めりんすなどを着るものか。

畑右　こりやあ實にたまげたことだ。

ト屋臺囃子になり、花道より、鳶のもの蔦吉、紺のはら掛、もゝ引、揃ひの半天、わらぢ、黑骨の扇を腰へさし、鳶の者の拵へ、牛方梅六、童子格子の半天、車引兄弟の牛方の拵へ、篠竹を持ち生酔ひの思入にて、連れ立ち出來り、花道にて、

清〽ヤンレ引け〳〵、よい聲かけて、エンヤラサ、きかぬきほひも憲法の、祝ひにかざる提灯の、丸い心に角目立つ、わけなまゑひの牛飼ひを、だましすかして兩人が、エンヤラやつと

爰へ來た。

ト梅六生醉ひのこなし、是を相手に蔦吉よろしく振りあつて、舞臺へ來り、

蔦吉　オヤ、おめえ達は爰にゐたのか、抑されて怪我でもしやあしねえかと、どんなに搜したか知れやしねえ。

寅次　それは私の方でいふことだ、さう先へ言はれては、何んとも言ひやうがありません。

小鶴　あんまり人が出て怖いから、ほんとに搜して居りましたよ。

蔦吉　誰を搜したか知れるものか、こんな嘘はありやあしねえ。

ト梅六前へ出て、

梅六　コレ姉え達、おらにも何とか言つてくれぬか。

寅次　おや、此人は菅原の車引の拵へだね。

小鶴　大方これは地走りの、俄にでも出なすつたのだらう。

政次　爰で一つやつてお見せよ。

畑右　ばゝアどん、エヽ所へ來た、今芝居が初まるさうだ。

くね　それぢやあ此人は、役者かね。

梅六　おらア麹町の平川町、天神様の町内だから、車引の牛飼舍人だ。
天九　成程、そこで童子格子の、兄弟のこしらへか、なか〳〵是はいゝ趣向だ。
寅次　ほんに、さう言へば烏越でした、高砂屋の梅王に、
小鶴　お前どこか似て居るよ。
梅六　あんなへゞ役者に似てたまるものか。
　　ト矢張屋臺囃子にて、上手より一人乘りの人力車、白のケットを載せ、松藏車夫の拵へにて引いて出來り。
松藏　御免なさい〳〵。
蔦吉　何處から來たか知らないが、この人込へ引込んで、怪我でもさせたらどうする氣だ。
松藏　眞平御免下さいまし。（トあやまつて引懸けるを、）
梅六　車やらぬ。（ト兩手を開き、梅王の思入にて留める、松藏も車を留め、松王の思入にて、）
松藏　ヤア何ものかと思つたら、麹町の山車を引く車引きの牛方が、一杯きけんの常談か、但しはおれが車と知つて、邪魔をする氣で止めたのか、返答次第で堪忍ならねえ。
梅六　ヤア言ふな〳〵、此人込みへ引込んだ、向う見ずの人力車、くらひふとつた尻こぶた、二ッ三ッ

五六百くらはさねば堪忍ならぬ。

ト無器用に梅王の見得、蔦吉双方を留めて、

蔦吉　これさ〳〵、そんなに梅王めかさずと、目出度い日だから料簡しねえ、おめえも早く引いて行きねえ。

松藏　ヤアいづれもには、おかまひあるな、此の松公が引かけた此車、留められるなら留めて見ろ。

梅六　この牛方の梅王が、爰になくばいざ知らず、一寸なりともやつて見ろエヽ。

ト梅六きつと見得、生徒皆々手をたゝき、

寅次
小鶴　高砂屋ヤア。

ト褒める。此内天九郎白のケットを着て、車の上へ上り。

天九　早く車を轟かせろエヽ。（ト時平の見得。）

蔦吉　こいつア飛んだお茶番だ。

ト皆々笑ふ、祭の鳴物にて、上手より演説師寺島杉雄、高ジヤツポ、黑の洋服、靴にて出來り、

寺島　ヤレ〳〵、押された〳〵、こんなひどい目に逢つた事はない。

寅次　チヤ、濱町の先生。

小鶴　今お出でなさいましたか。
寺島　イヤ是は馴染の顔ばかり、けふは憲法發布式で、天皇陛下を奉迎のため、友人輩と出かけて來たが、立錐の地もない雜沓、やう〳〵爰へ逃げて來たのだ。
　　ト車夫の松藏前へ出て、
松藏　旦那、お捜し申してをりました。
寺島　ヲヽ松公、爰に居たか。
蔦吉　それぢやあ先生の車屋でございましたか。
松藏　年來御供をして居ます、松藏といふ者サ。
蔦吉　こいつァ間違ひにならなくつてよかつた。
寺島　何しろ此の人ぢやあ、所詮車に乘れねえから、手前は先へ行くがいゝ。
松藏　左樣なら虎の門でお待ち申します。（ト車を引き下手へはひろ。）
　　淸〽けふ初午に行列の、つゞく狐の嫁入りは趣向も四ツ谷の鹽一稻荷、外に長刀、挾箱、花をかざりの、花駕籠に、嫁はいくつと白練の帽子まぶかにかしづきの、娘や孫も共々に、打連れてこそ來りける。

ト此内花道より、四ッ谷鹽一稲荷、狐の嫁入といふ幟を持ち、先へ立ち、紺看板、對の挾箱をかつぎ、花駕籠の内にお安白髪かづら、白練の帽子、打掛、上下股立の侍二人、長刀持一人、駕脇におてる、おさめ着流し、介添の拵へにて附添ひ、跡より紺看板の中間出來り、皆々舞臺へ來る。

寺島　是は四ッ谷の鹽町か、けふ初午を當込んで、鹽一稲荷はいゝ趣向だ。

天九　そこで狐の嫁入りか。

蔦吉　こりやあなか〳〵凝つたものだ。

天九　成程狐の嫁入りだけ、雨が降つたも天氣になつた。

小鶴　狐でも花嫁は、いゝ娘だと思つたら、

くね　わしらと同じ樣に婆アさんだ。

清〽谷の戸出る鶯の、啼かせし昔し偲ばれて、

ト此内駕籠の内より、お安出るを、介添おてる、おさめ手をとり前へ出る。

蔦吉　成程是れは正直正銘、まがひなしの婆さんだ。

お安　正月産れの今年が八十、まがひなしの婆アさんだが、下から讀めばまだ十八、昔し思へば恥かしい。

さめ　ほんにお婆アさんは、年とつても、こんなに綺麗に見えるから、
てる　さぞ十八時分には、よい娘でござんしたらう。
お安　自慢ばなしをするやうだが、鬼も十八番茶も出花、その時分は若い衆に、
〽まだ色氣さへ白梅に、氣も青じくの生娘と、人になぶられ言はれしも、いつかほころぶ花の香に、慕ひ慕はれ袖や褄、引かれて嬉し春霞、
トお安年寄のなまめきし振り、これをおてるおさめ介抱して三人振りあつて、トヾお安腰の痛き思入にて跡へ下る。
〽曳手あまたの殿達が我妻戀ひしと九十九夜、雨の日比谷の通ひ路も、首尾の王子の樂しみに、幾夜か門に立ちあかし、鳴くや夜明けの烏森。
トおてる、おさめ、お安を引出しよろしく振りある。この留り花道の揚幕にて、大勢の聲にて、
大勢　ヲヽさて、合點だ。（ト是にて心附き、）
畑右　今度は何が參りますかな。
寺島　慥かにあれは、三遊連の雀踊りだ。
ト渡り拍子になり、上手より圓保、拍子木を持ち、圓尾ラッパを吹き、あとより六人いづれも扇を冠

り、雀踊りと見える着附にて出來り、雀踊りの鳴物になり、アリヤサヨイヤサと一件踊りあつて、跡より大きな雀籠をかつぎ出る。

寺島　昔しばなしに基いた、雀をどり、これは妙だな。

寅次　圓保さんのステテコに圓尾さんの馬車のラッパ、

小鶴　皆さんがたのおはこの藝を、早くしてお見せなさいよ。

圓保　それぢやあお邪魔ながら、

圓尾　お笑ひぐさに、やりませう。

ト兩人好みの振りあつて納まる。

寅次　もつと何ぞして、

小鶴　お見せなさいよ。

圓保　高座の藝は目古いから、先づこれでお預かりとして、

圓尾　雀の振をお目に掛けよう。

圓保　そりやあさうと世話役は、何をして居なさるだらう。

圓尾　ヲヽイ世話役々々。（ト上手へ向ひ呼ぶ。）

燕枝　半燕　エヽ忙しねえ、今行くのに。（ト言ひながら上手より燕枝、半燕袴なり、世話役の拵へにて出來り、）
寺島　誰かと思つたら、燕枝さんか。
燕枝　こりやア濱町の先生、いゝ所でお目に掛りました。
圓保　もし世話役、皆樣がお待ち兼ねだ。
圓尾　ちつとも早く、雀のお爺さまを。
燕枝　半燕　ヲヽ、是がけふのお景物だ。
〽籠の戸明くれば正直の、親仁は外へ立出でゝ、
ト此内鳥籠の戸を明ける、内より百右衞門投げ頭巾、袖なし羽織、股引昔咄しの親仁の拵へにて出、見物へ辭儀をなし、
〽空も長閑に晴渡る、四方を拜して是れまでの御禮の數の山々も、綠色濃き春景色、
ト百右衞門振りあつて納まる。
燕枝　去年から長い間、みんなも案じて居ましたが、
半燕　早く病ひも全快して、けふ爰で一緒になり、お目出度う、
皆々　ござりまする。

百右　久しぶりでお目見得なし、こんな嬉しいことはござりませぬ。
畑右　コリヤ又年寄りがふゑた。
くね　お前さんは、いくつだね。
百右　わしは踊り忘れぬといふ、今年丁度百になります。
畑右　それはえらい長命だ、わしは今年が九十一、
くね　女房のわしは八十八、
お安　此花嫁は数よく八十、
燕枝　八十以上とあるからは、お前方はお上から、養老の恩賜金が下りますぜ。
百右　それは何より難有い、思ひがけない。
四人　賜物だ。
燕枝　ときに何ぞみつしり踊りが見たい、私ばかりか御見物の諸君が疾くよりお待かねだ、何ぞ爰で踊つて下さい。
百右　病後でなか／＼踊れないから、わしが代りを出しませうか。（ト籠へ向ひ、）チイ／＼雀の娘／＼。
小榮　アイ／＼。

ト合方にて籠の中より、小榮振袖娘にて出來り、

お爺さん、何でござんすえ。

百右　けふは雀の娘の役、何ぞ爰で踊つてくれ。

小榮　私ばかりぢや恥しいから、小鶴さんちよつと一緒に立つておくれな。

小鶴　アイ〳〵。（ト鶴松前へ出て、）

〽打ちはれし空も綠に青々と、千代も替らぬ常磐木の、飾り目に立つ日本橋、名にし大路も人の山、賑はしいではないかいな。

ト小榮、小鶴の二人へ、團保團尾をかしみにはひり、よろしく振りあつて、

燕枝　何にしろ百迄も、踊り忘れぬ雀の大將、何でも一ツやんなさい。

百右　けふはどうぞ堪忍して下さい。

天九　どうぞ跡がつかへて居るから、ちよつと短かく三人で、古めかしいが拳はどうだね。

燕枝　それがい〻〳〵。（ト三人前へ出て、）

〽お祭りに淺草大きな象が出る、芝から轜の牛が出る、本所からは馬が出る。吉原狸や猫が出る、出るにやんのこつた〳〵、四ッ谷の狐でサア來なせ。

ト三人早めたる振あつて、

〽折から貝鐘陣太鼓、打立つ音に人々はびつくりなして、

ト此時向うにてどんちやんを烈しく打込む、皆々びつくりする、是にて清元連中を段幕にて消す。

梅六　ヤ、あの太鼓や鐘は何であらう。

天九　あれは本所に名の高い、草苅先生の連中が、鎧兜で馬に乘り、押出して來たに違ひない。

梅六　さうとは知らず、

皆々　びつくりした。

ト是をキツカケに、下手段幕を切つて落す、爰に常磐津連中居並び、直に淨瑠璃になり、

〽帝國の國威輝く大御旗、大和錦と打ちなびく、治にゐて亂を忘れざる、敎へを守る武者出立ち、

トどんちやん、螺の音になり、花道より、草苅庄五郎、惣髪かづら、陣羽織、達附、大小にて小旗を持ち出來り、花道に留り、向うを招く、是にて草苅豐子、立烏帽子鎧陣立の拵へにて、長刀をかい込み、片手綱にて出來り、

〽時を烏帽子に鎧着て、目立つ馬上の女武者、主は誰とも白雲の勇士の名にし草苅の敎へ子

だけに恥らはず、手綱かいくり來りける。

燕枝　是は草苅先生、只今お出でなされましたか。

庄五　これは〳〵お早いこと、今和田倉の雜沓で諸人に怪我をさせまいと、一ト足先へ駈け拔けましたが、所詮後の衆達は、巡査の保護でも受けなくては、尋常には通られない。

燕枝　然しいろ〳〵趣向もございましたが、今の先生の御趣向は、外に眞似手はございませぬ。

半燕　殊には數年のお稽古で、男も及ばぬ御新造樣、

梅六　牛なら自由になるけれど、馬はなか〳〵手際に行かず、誠に感心、

皆々　いたしました。

豐子　そんなに皆さんにほめられますと、お恥かしうござりまする。

ト角力太鼓になり、上手より四郎藏、九郎八、角力の拵へ尻をはしをり、はだしにて憲法發布を祝すといふ旗を持ち出來り、

四郎　草苅先生、爰にお出でなさいましたか。

九郎　内の親方は、何處に居りませう。

庄五　ヲヽ、高砂親方なら、まだ跡だ。

梅六　なか〳〵力士の力でも、容易なことでは來られまい
百右　聞けば今度お前方は、出世をしたといふことだね。
四郎　御贔屓さまのお引立てゞ、未熟ながら二人共、
九郎　段が一段上りまして、天窓數になりました。
四郎　よき折なれば草苅先生、此の御披露を皆さまへ。
九郎　憚りながらお前さまから、どうぞお願ひ申します。
庄五　隣りづからのことだけれど、コリヤわしが役でねえから、今にどうか工夫をします。
四郎　何分よろしく、お願ひ申しまする。
九郎　これで重荷をおろしました、こんな嬉しいことはない。
兩人　ヨイト〳〵。

ト手を打ちながら、角力甚句になり、兩人角力の振り、是へ圓保圓尾一緒になつて踊り、四人浮かれて、豐子の乘りし馬へ突當る。馬も驚き四人びつくりして逃げる。豐子輪乘に乘り廻し、馬をしやんと乘り鎭める。皆々感心せし思入にて、

皆々　よウ〳〵。

燕枝　細君の今の乗り方、實に驚き入りましたが、僕が一曲お目に掛けたい、先生暫時馬をお貸し下さい。

庄五　承知しました。（ト口をとり、花道へ引出し、）此馬は癖がないから、素人衆にはちやうどよい。

燕枝　素人衆とはひどい言ひ方、馬は大坪の免許とり、先づ手並の程を御覧なさい。僕はよッぽど生業人だ、先づ日本は言ふに及ばず、西洋から來た曲馬師も、遠く拙者には及ぶまい。

庄五　その廣言は跡にして、サア／＼早くお乗りなさい。

燕枝　さらば馬術を、お目にかけよう。

ト手綱を引けど馬動かず、困ることなしよろしくあつて、

先生、どうかちよつと、動かして下さい。

庄五　承知しました。

〽一鞭うてば駈け出し、息をつく間も嵐吹く、砂を蹴立てゝ走り行く、

ト庄五郎鞭にて馬を打つゆゑ、馬は駈け廻つて仭れる。燕枝蹴られてどうとなる。此内に馬下手へはひる。

燕枝　ヤレ／＼、ひどい目に逢つたが、幸ひに怪我をしなくつて仕合せだ。

百右　怪我のないのは、何よりだ。

皆々　御目出たうござりまする。

ト此時向うにて螺の音する。皆々向うを見て、

梅六　ヤア、あれへ來るのは珍らしい、銘々鎌や棒を持ち、薩摩がすりの脚絆をはき、白足袋に草鞋がけ、鐘や太鼓を打合せ。

百右　成程女子も大分まじつて居る、こいつアてつきり薩摩の國の御城下より、十里ほど左方にて、勝目郷なる農人で、此の御發布式を祝さんと、列をたゞして來たのでござらう。

燕枝　それぢやあ兼ねて噂さの高い、鹿兒島踊りの一群か、こいつア一番見物事だ。

ト是にて賑かな鳴物になり、花道より鹿兒島踊りの連中、大勢出て來り、鹿兒島踊り十分にあつて、惣踊りになり、よろしき見得にて打出し。

憲法發布（終り）

階子乗出初晴業

解説

「階子乘」は明治二十五年一月（作者七十七歳の時）、歌舞伎座に上演された、清元淨瑠璃である。書きおろしの時の役割は尾上菊五郎（消防組辰五郎）、坂東家橘（同與吉）、尾上松助（同梅右衞門）、市川八百藏（同八百吉）、尾上菊之助（同音松）、坂東秀調（待合女房お秀）、尾上榮三郎（藝者小榮）、尾上丑之助（辰五郎悴丑松）等。清元連中は太兵衞、榮壽太夫、菊壽太夫、梅吉、梅次郎等であつた。

「續々歌舞伎年代記」には「大切の階子乘は梅幸（菊五郎）のケレンもの圖に當りて非常の人氣となり、當り振舞をなす程の盛況となりたり」とあつて、好評を博したもの。挿繪は稿下當時の繪番附である。

梯子乘出初晴業（出初め）

鍛冶橋内土手際の場

清元連中

〔役名――鳶の者辰五郎、同與吉、同梅右衞門、同八百吉、同音松、同勘太、同竹治、同彦兵衞、其外大勢。町人金兵衞、同銀藏、官員、巾着切、豆蟹小助、百姓、船宿の女房、藝者小榮、鳶の者菊松、同丑松等。〕

本舞臺總て鍛冶橋内土手際の體、爰に百姓權右衞門、作十、町人金兵衞、銀藏立ちかゝり幕明く。

權右　モシ、おらァ田舍者でがんすから、何處が何處やら分からねえ、けふ仕事師の出初があるさうだが、

作十　警視廳といふは何處でがんすか、どうか敎へて下せえまし。

金兵　そりやあツイ此先だが、すばらしい見物だから、容易な事ぢやァ見られねえ。

銀藏　今迄わし等も見て居たが、芋を揉むやうに押れながら、引いて來る歸りを見ようと、此土手へ逃げて來たのだ。

金兵　懷中物や煙草入、又うつかりすると背負つて居る毛布までも、巾着切に取られますぜ。
權右　ヤア、それは油斷のならねえ事だ、作十用心したがいゝ。
作十　わしやア褌へ紙幣も錢もしつかりくるんでおきました。
ト兩人はこれにて、もしや巾着切がなりはせぬかと氣遣ふ體にて、きよろ〳〵して居る、兩人は見て笑ひをこらへながら、
金兵　何をきよろ〳〵見なさるのだ、わしら二人は、堅氣の商人、
銀藏　巾着切ぢやアありませんから、氣を附けるにやア及ばない。
權右　イヤ、人を見たら泥坊だと思へと、よく〳〵親父が云ひましたから、
作十　失禮ながらお二人とも、それで油斷をしましねえ。
金兵　田舍の人は正直だが、何處から東京へ來なすつた。
銀藏　なんでも言葉の樣子ぢやア、上州邊の人達だ。
權右　昨日兩國で見て貰つた、易者よりよく當りました。
作十　おらア上州沼田ア下新田の者でがんす。
金兵　それぢやア鹽原多助の國だ。

權右　ハイ、同村の者でがんすが、今度木挽町の歌舞伎座で、菊五郎がするといふから、

作十　わざ〳〵それを見に來やした。

銀藏　さういふ事なら馬喰町に、宿を取つて居なさるのだね。

權右　ハイ、刈豆屋に居りやすが、今朝半鐘がなつたのでびつくりしたら、火消しの學びがあるだと聞きましたから、見に來やした。

作十　是れから芝の愛宕樣へいつて、神明樣から増上寺の大鐘を見にゆきますので、宿で道を書いてくれたが、ちよつとこれを讀んで下せへ。（ト懷中より書附を出して渡す。）

金兵　どつこい、それは淨瑠璃觸、讀まずと知れた役者は惣出、太夫は清元榮壽太夫に菊壽太夫。

銀藏　三味線は、清元梅吉。

權右　イヤ、こいつは趣向が無駄になつた。

金兵　こんな物を讀む手間で、早く土手へ上つて見よう。

作十　わしらも一緒に行きますべい。

銀藏　然し、たゞも引込まれまい。

金兵　いよ〳〵此所、淨瑠璃初まり、サア行かうではないか。

ト四人は下手へはひる。知らせに附き、栅矢來を打返し、爰に清元連中居並び、直に淨瑠璃になる

〽新らしき年はさかえて冬ながら、凧のうなりに春めきて、空に霞も辰の年、辰の一日たちまちに、けふは四日の出初式、

ト合方、通り神樂にて、花道より藝者小榮、餘所行きの打扮にて、跡よりお梶船宿の女房の拵へにて出て來る、此のずつと後より、官員歌木醞三、酒に醉ひて出來り、小榮の器量に見惚れて居る。

〽組合衆の勇ましき木遣りの聲に起されて、亂れし髮の柳橋、惠方參りをかこつけに、氣も合乘りの車からおりて連立つ八重洲橋。渡りに船と生醉は、くだもそれ者の女房が、中を取楫あやなして、土手のこなたへ來りける。

ト小榮と船宿の女房おかぢの兩人、振りあつて、よき所より官員歌木も混り、三人よろしくあつて舞臺へ來り、

歌木　コレ小榮、何故知らぬ顏をするのだ。

小榮　あなた樣はどなた樣でござりまするか、わたしは少しも存じませんもの。

歌木　なに存ぜんことがあるものか、先頃僕が校友と築地の隅屋で懇親會があつた時に、君の酌で泥醉になつた事がある。

小榮　ございましたか存じませんが、大勢樣のお座敷故、お見忘れ申しました。

歌木　そつちは忘れるか知らんが、僕は決して忘れない、計らず出逢うたのは、月下氷人のひき合せ、何處かこゝらの待合で、一杯やるから來てくりやれ。

小榮　けふはお馴染樣のお約束がござりますから、御一緒には參られません。

歌木　なぜ參られんと申すのぢや。

お梶　あなたも粹士のやうでもない、けふは晩までお約束のお客樣がござりまして、今參りますゆゑ、御一緒には參られませぬ。

歌木　厭ぢやと言へば腕力で、連れて行くからさう思へ。

お梶　なぜ、其樣な野暮をおつしやります。

〽酒の機嫌のこぶ柳よれつ縺れつ云ひ寄れど、風のまに〳〵とりなせば、聞かぬ田舍の片意地に、もてあましたる後より、見兼ねて飛込む鳶頭、

トおかぢは歌木を取なす思入のせりふよろしくある。此時後へ鳶の者與吉、長半纏を着て出て來り、此中へ分つて入り、歌木を突倒す、歌木はどうとなつて、

歌木　アヽ痛い〳〵。

小榮　ヤ、お前は與吉さん。

かぢよい所へ來ておくれだ。

ト此時歌木は起上り、身内の痛むを押へ、與吉を見て、

歌木　女にしては強い奴と思つて居たが、今のは貴樣の仕業だな。

與吉　どこの馬の骨だか知らねえが、弱い家業の藝者をとらへ、無理な事をぬかすから、突倒したが何とした。

歌木　イヤ、どうのかうのと失敬極まる、溝浚ひだ馬の骨とは何の事だ、國では縣會の議員の一人、既に國會開設の際、代議士にもなる所を僅少の點の違ひから朋友に勝をしめられ、遺憾腦髓に徹したが、此次の國會には、必らず代議士に出る僕だ、平民ならぬは鼻の下の、髭を見ても知れさうなものだ。

與吉　猫でねえ證據に傍へ竹をかきと、柳原の古洋服に鯰髭をひねくつて、譯のわからぬ漢語をつかひ、官員めかすえせ者、手前達に虎の威をふるはれて、猫になつちやア居られねえ、ぐづ〳〵すりやア、横面頰を、叩きなぐるが當りめえだが、今文明の世の中に、鳶の者でも夜學に行きやア、そんな野蠻な事はしねえ、巡査方へ引渡し、有無を云はせず拘引させるぞ。

歌木　おゝ拘引するなら拘引しろ、警察署へ出て辯明いたす。
與吉　しやらくせえ事を言やアがるな。
歌木　サア、僕より貴様を拘引するぞ。
　　ト歌木は立ちかゝる、爰へ豆盤小助、町人と見せ、實はスリにて出來り、歌木を留めて、
小助　マア〳〵旦那、どういふ事の間違ひか、けふは出初めの人足衆と喧嘩をしちやア割が悪い、若い手合に聞かれたら、袋叩きになりますから、まア御料簡なされませ。
歌木　イヤ〳〵、料簡ならぬ〳〵。
小助　そんな事をおつしやらずと。
歌木　入らぬ留だて引こんで居れ。（ト振切る、此内小助は歌木の懐中より金時計を切り、逸散に逃げてはひる。）
お梶　もし旦那、今留めたのは名代のスリでござりますが、何ぞお取られはなさいませぬか。
　　ト是にて、歌木は心附き、胸を見て時計のなきに驚き、
歌木　南無三、金時計を取られた、泥坊々々。（ト花道をかけ廻りながら、追駈けてはひる。）
與吉　馬鹿野郎め、いゝ氣味だ。
小榮　いゝ氣味とはいふものゝ、金時計を取られたのは、お氣の毒なことだね。

お梶　なあに、眞正の金ではあるまいよ。
與吉　それはさうとおめえ達は、今日の出初を見に來たのか。
小榮　イエ出初ぢやァありませんよ、わたしやおまへに逢ひに來たのさ。
與吉　ナニ、おれに逢ひに來たとは。
お梶　さつぱり近頃おいでゞないから、小榮さんも氣を揉んで、
小榮　大方どこぞへか這入る所が。
　　トこの内後へ鳶の者音松出で、窺ひ居て、此時前へ出て小榮に向ひ、
音松　兄貴は此頃、本所へ情人が出來たから、朝ッぱらからあつちへばかり行つて居るから、思ひ入れ
　いじめてやんねえ。
小榮　おや音さん、眞實かえ。
與吉　つまらねえことを云ふな、ありやァ仕事があつて行くのだ。
小榮　イエ〱、さうぢやァありますまい。
　〽去年の暮の寄合から、しかもおまへが當番を擔いで廓へ繰込んで、ポンプの雨に三日程、
〽流しなんすも階子より、登りつめたる仲とやら、互ひに熱くなりふりも、〽構はぬ末の消

口を、わしより向うへ取られては、〽腹が立つではないかいな。

ト よき程より、音松おかぢも打混りて、クドキ模様の振あつて納まる。

與吉 ありやア、ほんの仲間の附合、馴染んで行つた事ぢやあねえ。ヤ、モウ向うから引いて來た。

ト向う花道を見込む、此時木遣りの聲勇ましくして、

〽東の花と昔より、稱へし四十八組の、振り出す纏長階子、日影輝く長鍵や磨く男の勢揃ひ、今日を出初に半鐘の音に響きし頭分、目立つ朱入の半纏に、列を正して來りける。

ト此内花道より、鳶の者辰五郎を初めとして、梅右衞門、勘太、八百吉、竹次、彦兵衞、丑松、菊松、其外惣出の鳶の者、ポンプを曳き、纏、階子を擔ぎ、纏を振り、木やりにて出來り、皆々舞臺へ來る。

音松、與吉出迎ひ、一禮なす。

辰五 コウ與吉、手前の影が見えねえから、何處へ行つたと思つたら、又小榮坊といちやつきか。

梅右 出初早々、でれすけは、あんまりひどい仕方だぜ。

八百 こいつアたゞは通せねえ、胴上げにでもしてやらう。

音松 突放して腰でも拔きやア、小榮が泣き出すだらう。

彦兵 晩にみんなで押込んで、しつかり何ぞ奢らせよう。

梅右　イヤ、ときにいつもは、是からみんな別れるのだが、今年はこゝで、一ツ楷子乘をしようぢやねえか。

八百　そりやァ此方は大賛成だ。

梅右　えゝ生利な事を云ふな。サァ階子を立てろく。

　ト合點だと、皆々よき所へよろしく階子を立てる。

小榮　こゝで階子乘が見られるとは、何よりわたしは嬉しいね。

お梶　さうして、どなたがするのです。

音松　さしづめ與吉兄イが、小榮さんに見せたからう。

與吉　おりやァ躰量が重いから、階子乘りは眞平だ。

丑松　兄イが出來ざァ、おいらが乘らう。

辰五　エヽ、又四文と出やァがる。

彦兵　丑坊、階子乘が出來るものか。

丑松　出來なくツてどうするものだ。

〽立てし階子へ驅上り、怖氣は更に中程へ、ちよつと留つて大の字や、足を伸ばして吹流し、

手に汗握る見物が、思はずどつと褒める聲。

ト此内丑松は、何の怖れもなく、階子の頂上へ登り行き、色々とわざをなし、おりて來て、どんな物だといふ思入、一同感心して捨ゼリフにて褒める。

梅右　五歳や六歳で、おめず臆せず階子乘をするとは、なか〳〵こりやアいゝ氣性だ。

八百　蛇は寸にして其氣あり、末頼もしき、この少年。

音松　又四角ばつた事を云ふか。

八百　コリヤア講釋で聞いて來たのだ。

梅右　實に丑は末頼もしい、今に親父も敵ふめえ。

辰五　こんな事を見習はねえで、澁い事でも眞似りやアいゝに。

丑松　そりやアこつちの畑にねえのだ。

菊松　モシ頭、出過ぎる事をいふやうだが、御見物がお待兼ねだ、早く階子乘りをしちやアどうだ。

辰五　おゝ、こりやア手前の云ふ通り、早く誰ぞ乘らねえか。

梅右　イヤ、誰かれと云はねえで、頭、おめえ乘つてくんねえ。

辰五　又吻こしに乘せられたか、うまく己に乘れりやアいゝが。

小榮　頭が階子乘をしなさるとは、

お梶　是れは見物でござりますね。

梅右　みんな鍵で階子を固めねえ。

皆々　合點だ。

ト皆々鍵にて階子を固め、辰五郎頂上へ登り、

〽晴れ渡る空に雲なき階子のり、高きに登り見渡せば、戸毎に立てる日の丸の、國の御旗の輝きて、我大君の大の字や、〽四つの海原浪立たず、靜けき御代に相生の、松に由緣の下り藤、〽實にや目出度き時津風、枝も鳴らさず吹流し、〽かゝる技藝は又外に、中空に舞ふ鳥よりも、輕き其身の放れ業事、

ト種々あつて、終に上より下へ飛びおりて來る。

梅右　今年は惠方が辰年に、辰の元日又そこへ、

與吉　辰頭が、階子乘り。

辰五　祝ひに一つ、しめてくれ。

皆々　ヨイ／＼／＼。

ト皆々にて手を打ち、鉢巻をなし、木遣崩しになり、

〽ヤンレ目出度やナア、今年や出初も日並がようて、天氣もよければ、仲もよく、睦み語らふ睦まじ月に、　六ツに放れる各區の組合、まことにポンプの水と魚、ヨイ〳〵これから別れて引いたりしよ、ヤンレ引け〳〵、キヤリを揃へて引いたりしよ、エンヤラサ。

ト皆々惣踊りあつて、

辰五　先づ、今日はこれぎり。

幕

出初め（終り）

連獅子

解説

「連獅子」は文久元年、花柳芳次郎の名弘め浚ひの爲に新作された長唄の所作で、明治五年七月、村山座に於て先代坂東彦三郎、澤村訥升（助高屋高助）の二人によつて上演された。二世杵屋勝三郎の作曲である。明治三十四年二 竹柴晋吉氏が狂言の「宗論」をツナギとして補綴し、東京座に於て先代市川猿之助（段四郎）・市川染五郎（當代松本幸四郎）兩人によつて上演され、それが廣く行はれてゐる。此時には法華の僧蓮臺を中村勘五郎（後の仲藏）が、淨土の僧偏念を市川團次郎が勤めた。尙ツナギの狂言としては宗論の外に、「百物語」或は「蚊角力」等も取入れられたことがある。

連獅子

天竺國石橋の場

長唄囃子連中

〔役名――親獅子の精、子獅子の精、法華宗の僧侶蓮臺、淨土宗の僧侶偏念。〕

本舞臺一面の平舞臺、所作臺を敷き、後松羽目、其の前雛段、下手よき所へ柱を立て、手摺を取附け後松羽目、下手へ緞帳をさげ、橋懸りの心、上より破風をおろし、總て能舞臺の模樣、片シヤギリにて幕明く。と雛段に長唄囃子連中、烏帽子素袍にて居並び、置鼓あつて長唄になり、

〽それ牡丹は百花の王にして、獅子は百獸の長とかや、桃李にまさる牡丹花の今を盛りに咲き滿ちて、虎豹に劣らぬ連獅子の戲れ遊ぶ石の橋。

ト是れより一せい鳴物になり、

〽是れぞ文珠のおはします、其名も高き淸涼山、

ト此うち橋懸りより、親獅子の精、着附能衣裳、大口にて、白き獅子頭を持ち、後より子獅子の精、

同じこしらへ赤き獅子の頭を持ち、橋懸りより出來り、直に舞臺よき所へ住ひ、

〽峯を仰げば千丈の漲ぎる瀧は雲より落ち、谷を臨めば千尋の底、流れに響く松の風、見渡す橋は夕陽の、雨後に映ずる虹に似て、虚空を渡るが如くなり。

〽かゝる嶮岨の山頭より剛臆ためす親獅子の、惠みも深き谷間へ蹴落す子獅子はころ〳〵ころ落つると見えしが身を翻し、爪を蹴立てゝ駈登るを、また突き落しつき落す猛き心の荒獅子も、

ト親獅子、子落しの振りあつて、

二上り

〽牡丹の花に舞ひ遊ぶ、胡蝶に心和らぎて、花にあらはれ葉に隱れ、追ひつ追はれつ餘念なく、風に散り行く花びらの、ひらりひら〳〵、翼を慕ひ、共に狂ふぞ面白き。

ト竹笛入り、蝶の狂ひあつて、

〽折柄笙笛琴箜篌の妙なる調べ舞の袖。

ト此うち樂の鳴物になり、親子の獅子よろしく振りあつて、兩人花道へはひる。鳴物になり、橋懸りより法華宗の僧侶蓮臺、旅なり好みのこしらへにて出來り、舞臺よき所にて、

蓮臺　罷り出でたる者は、豐葦原の中甲斐の國身延山の僧でござる。聞き及ぶ天竺の淸凉山は殊に絕所ゆ

ゐ、修行いたさねば老いての物語りがないと申す、先づそろ〳〵と登りませう。いか程も參らぬに草臥れてござる程に、先づ此所にて、少し休らひませうず。

卜よき所へ休む、爰へ淨土の僧偏念出來り、

偏念　罷り出でたる者は、東山黑谷の僧でござる、聊か思ふ志願あつて此淸涼山へ參つてござる。先づそろ〳〵登りませう。

蓮臺　あれへよき僧が見えられた、呼び掛けて道連れにいたさうと存ずる。あゝ申し〳〵。

偏念　こなたでござるか。

蓮臺　なか〳〵。

偏念　何の御用でござる。

蓮臺　して、こなたは、どれからどれへござる。

偏念　いや、其の昔貞友の舜照法師捨身の行にて、此の淸涼山の石橋を渡りし事を傳へ聞き、我れも捨身の行にて、橋を渡り文珠淨土へ參る心でおぢやる。

蓮臺　なつかなか、上味噌ぢや、黑豆商ひ賣りの御修行では、苔滑らかな石橋は、つるり〳〵と辷り、足を踏み外せば下には年經る獅子が群がり居て、生あるものを喰ふと申す、ぢやによつて二つと

なき命を失へば、我が法華經の、一天四海皆歸妙法の祈禱をなせば、如何なる難行にも屈せず惡獸でも妨げいたすことなければ、法華宗にならしやませ。

偏念　いや／＼、法華にはなりともなうおぢやる。そなたに異見かしたいは、一部廿八品などゝてむづかしい事を願ふより、南無阿彌陀佛とさへ申せば、假令惡獸毒蟲でも、念佛に恐れをなせば、禍却つて幸となれば、淨土宗にならしやませ。

蓮臺　左樣な事をなが／＼と申したとて、際限がござらぬ。是れにて法問を試し見て、何れが負けても珠數を切り、師弟の因みを結びし上、捨身の行に石橋を渡つては如何でおじやる。

偏念　それはよい所へお氣が附かれた、さらば法問をいたさうぞ。

蓮臺　先づ、然ればそなたからおしやれ。

偏念　いや／＼、そなたよりおしやれ。

蓮臺　その儀なら語らうほどに、耳の垢を取りて聞かしやませ、先づ五するてん／＼隨喜の如くといふ事がある、聞きやつたことがあらう。

偏念　まことに、どこやらで聞いておじやる。

蓮臺　聞かいで何とせう、三國に憚るほどの法問ぢや。

偏念 左樣にいかい事を言はずと、語らせませ。

蓮臺 さらば、語つて聞かさうか。五するてん〳〵隨喜の功德又は淚とも說かせられたる法問は、大地を割り芋の子を植ゑる、大地のうるほひを以てずゐきを出すだけゆる〳〵と成人したるを、刃物を以てなぎ倒し、からしでから〳〵とあへ、檀方へ出た時は尊うて有難うて、淚がこぼるゝを以て五するてん〳〵隨喜の功德、又は淚とも說かせられた法問、何と有難い法問であらうがな。

偏念 いや、もつと說かせませ。

蓮臺 いや、是れまでゞおぢやる。

偏念 それは芥子がきいて、淚がこぼれたのでおぢやらう。

蓮臺 先づそれとして、貴僧說かせませ。

偏念 おゝ、宗論でおぢやる程に愚僧も申すぞ、それへよりて聞かせませ、一念彌陀佛卽滅無量在といふ事があるが、お聞きやつたらうなう。

蓮臺 まことに聞き侍つたやうにおぢやる。

偏念 そなたの身の上にもある事、檀方へ齋にまゐれば、事足る家にては醍醐のうどめ、鞍馬の木の芽積麩椎茸無量の菜をみち〳〵て下さる。又かの事足らぬ方へまゐれば、碗一菜で下さるゝ、彼の

無量在がみち〳〵てあると思へば、心に觀念して下さるゝを以て、一念彌陀佛卽滅無量罪又は栄ども說かせられたる法問、何と有難いではおぢやらぬか。
蓮臺　たつたと說かしやませ。
偏念　これまでゞおぢやる。
蓮臺　して、それがまことでおぢやるか。
偏念　なか〳〵。
蓮臺　悉皆それは、無罪餓鬼といふものでおぢやる。
偏念　いや〳〵、無罪餓鬼ではおぢやらぬ。
蓮臺　いや、さうでない、無い物を有ると思うて喰へば、無罪餓鬼ではおぢやらぬか。
偏念　いや、そちがやうなものに構ふよりも、以而非學者論議に負けずと申すことがある、念佛を唱へたがよい。
蓮臺　大黑の喧嘩ではあるまいし、勝手許の栄論、それより念佛を止めて題目を唱へませ。
偏念　いや情のこはきづくにうどの、何としたらよからう。（ト考へ、）まだ此外に我が宗門には、一遍上人が殘し置かれた踊り念佛、これは法華宗にはござるまい。

蓮臺　なッかなか、我が宗門には、題目踊りといふ事があるわ。
偏念　さればどちらが面白いか、踊りくらをいたして見ようか。
蓮臺　それは一段とよい考へ、先づそなたからやらしやませ。
偏念　先づそなたからやらしやませ。
蓮臺　それなれば、一つ初めようではおぢやらぬか。
偏念　成程それもよくござらう。
蓮臺　さらば、是れにて、
兩人　踊りまするぞ。
〽なまうだ蓮華經、なまうだ蓮華經、是はいつかな、念佛に題目、かん〳〵どん〳〵どんかんどん〳〵、拜む經文品第十六、得佛在生今在西方妙阿彌陀、示現觀音三世の利益は同一體法華に阿彌陀も隔てぬ中合、いづれが負けても天竺國だけ、釋尊お恥を方便なぞとはのたまはぬ。
ト此内蓮臺は團扇太鼓、偏念は鉦撞木にて、兩人よろしく振あつて納まり、
蓮臺　これ〳〵、何と題目踊りは面白いものであらうな。

偏念　いや、一遍上人の踊り念佛、こんな面白いものは唐天竺にもありはせぬわ。
蓮臺　いや、こちらの太鼓の叩き工合がよいからでござる。
偏念　なに、鉦の叩き鹽梅がよいからでござる。
蓮臺　いや〳〵、太鼓ぢや。
偏念　いや〳〵、鉦ぢや。
偏念　さういふ事があるものではないわ。
蓮臺　さういふ事があるものではないわ。
　へ鉦と太鼓の爭ひに、おのが宗旨の得手勝手、互ひに論議の果ぞなき、折から吹き來る惡風に、法問忘れてがた〳〵〳〵、顫えをのゝきうづくまる。
　ト此内兩僧鉦と太鼓を持ち爭ふことよろしく、よきほどに烈しき山おろしになる、兩人これに恐れふるへることよろしくあつて。
蓮臺　やあ〳〵〳〵、これは大變、山荒れがして來たが、さつき麓で噂があつた通り、
偏念　年經る獅子が、我等二人が爰に居るのを嗅ぎつけて、やつて來るのではあるまいか。
蓮臺　假令惡獸來ようとも、我が法力にて解脱させせんは造作もないが、然しどんな惡獸だか、不氣味な

事ではある。

偏念　命あつての物種だが、さりとて爰を歸られもせず。

蓮臺　石の上にも三年、達磨は九年の行をして、足が腐つたといふ事がある。

偏念　それではいつまでも、爰に居ねばならぬのか、ア、怖やの〳〵。

蓮臺　こりやあ段々山荒れが、ひどくなつたわ。

偏念　どうやら爰には居られぬわえ。

〽足もたまれずおきやがりの達磨法師がころ〳〵と、山を下りて行きにける。

ト此うち兩人よろしく振りあつて山おろしを冠せ、橋懸りへはひる。爰へ後見出て一疊臺を二つよき所へ直し、牡丹花を花筒へ取付け、山おろしを打上げ大薩摩がゝりになる。

〽さる程に天地開闢、雨露の惠みに砂長く、自然と作れる石橋は、其幅尺に足らねども、長さは三丈有餘にして、苔滑かに往來の人の影もなく、雲に蔽はれ霞に消え、深き谷間に瀧の音の谺に響きどう〳〵〳〵、山河鳴動物凄くもまた怖しゝ。

ト鳴物になり、親獅子の精白頭を冠り、能衣裳を着替へ、子獅子の精赤頭を冠り同じく能衣裳を着替へ橋懸りより出て舞臺へ來り、

〽目前の奇特あらたなり、暫く待たせたまへや影向の時節も、今幾程によも過ぎじ。

〽獅子とらでんの舞樂のみきん、牡丹の英にほひみち〳〵、大金裏金の獅子頭、うてや囃せや牡丹芳々黄金の蘂顯はれて、花に戯れ枝に伏しまろび、實にも上なき獅子王の勢ひ、靡かぬ草木もなき時なれや、萬歳千秋と舞ひ納め〳〵、獅子の座にこそなほりけれ。

ト此うち鳴物あつて、親子の獅子よろしく振りあつて、

幕

跡シャギリ

連獅子（終り）

釣女

解説

「釣女」は常磐津の淨瑠璃として新作されたものであつたが、明治三十四年七月、東京座に於て、竹柴晋吉氏の補筆によりて先代市川猿之助(段四郎)によつて上演されて以來、舞臺上に廣く行はれるに至つたもの。その時の名題は「戎詣(ゑびすまうで)戀釣針(こひのつりはり)」といふのであつた。常磐津の語り物としても、亦作者の淨瑠璃中著明のものと言つてよい。

釣女

常磐津連中

〔役名――大名、太郎冠者、姫御寮、醜女〕

本舞臺一面の平舞臺、正面板羽目、七五三の松の繪、下手純帳、總て能舞臺の飾り附、片シヤギリにて幕明く。と直に常磐津になり。

〽そも〳〵これは猿樂の、昔よりして其技のをかしといひし狂言師、名に大藏や鷺流の姿を寫す釣女。

ト純帳より大名出で、跡より太郎冠者出で。

大名　かやうに候ものは、此の所の大名でござる。やい〳〵、太郎冠者あるか。

太郎　はツ、御前に。

大名　居たか。

太郎　はあ。

大名　汝も知る如く、此年まで定まる妻がない、承はれば西の宮の惠比壽三郎殿は福者と申すこと、

太郎　是れへ參り、妻を申し受けうと存ずる、汝供をせい。

大名　誠に仰せの如くでござる、西の宮の木比壽三郎殿へ參るがようござりませう。私も定まる妻がござりませぬゆゑ、ついでながら申し受けませう。

大名　扨々おのれは率爾なる事をいふものぢや、惠比壽三郎殿とこそいへ、木びす三郎と申すことがあるものではない。

太郎　仰せではござれど、繪にかいた折は惠比壽三郎と申す、木で造つた折は木比壽三郎と申しまする。

大名　なか〳〵、汝は物知りでおぢやる、某は道不案内ぢや程に、名所舊跡を語り聞かせよ。

太郎　畏つてござる。

大名　さらば急いで參らう、さあ〳〵來い〳〵。

太郎　參ります〳〵。いやなう賴うだお方、先づ參る程に是れがはや。

〽小唄に唄ふ奈良法師、行くも戻るも心の留るも、山崎々々の女郎と涅槃の長枕、結ぶ緣の尼ケ崎。

といふ所でござります。

大名　や、面白い〳〵。して、向うに見ゆる山は何山ぢや。

太郎　はて、あれは山でござる。
大名　こゝな奴、山は山ぢやが、何と申す。
太郎　はゝあ何山は山でござる。おゝ、それ〳〵。
〽あんの山からこんの山へ、飛んで出たるは何ものぞ、頭にふッふと二つ細うて長うて、りんと刎ねたをちやつと推した。
鬼ぢや。
大名　何を申すぞ、して西の宮はまだか。
太郎　最早、この森の内でござりまする。
大名　さらば参詣のいたさう、先づ鈴の緒に取附かう。ぐわらん〳〵如何に申し上げ候。
〽われ此年まで無妻なり。
三郎殿の利益にて、定まる妻を授けたまへ。
〽授けたまへと一心こめて伏拝み。
いや太郎冠者、汝もをがめ。
太郎　畏つてござる、ぢやんぐわん〳〵、いかに木比壽三郎殿へ申し候。

〽われも定まる妻はなし、似合相應美しき妻をお授けくと、六拜九拜したりける。

ト太郎冠者もよろしくあつて、

大名　やい太郎冠者、今宵は通夜をせう、これへ山賊または盜賊が參らぬやう、わごりよはそれにて番をいたし、もし參つたら身共へ知らせい、どりや微睡まう、やつとな。（ト大名寐ること、）

太郎　畏つてござる。いやはや、こちの賴うだお方は人遣ひの惡いことぢや、今夜は通夜をせう、われはまどろむ、何なりと參つたら身共へ知らせろ、おのれはそれにて番をせい、手前勝手をいふ人ぢや、何ぞ脅かしてやりたいものぢや、はてな。（ト考へ、）參りましたく。

大名　何者が參つた。

太郎　向うへ犬が參りました。

大名　犬が參つたとて、身共を起すことがあるものか。

太郎　それでも何ものか參つたら、起せと仰せられたではござりませぬか。

大名　たはけめ、汝もまどろめ。

太郎　占めた、畏りました。

大名　あら尊や。

〽内陣のうちぞ床しき我妻を、千代と契らん手枕の袖を覆うてまどろみしが、程もあらせず夢覺めて。

太郎　何とござりました。

大名　やい〳〵お告げがあつた、汝が妻になる者は、西の門の一の階にあらう程に、連れて歸れとお告げがあつた。

太郎　これは如何な事、私がお告げも其通りでござります。

大名　さらば西門へ急いで參らう。

太郎　お出でなされませ。

大名　さあ來い〳〵。

〽勇み悦ぶ足許に、落ちたる竿を取上げて。（ト竿を取りて、）や、是れは如何なこと、妻ではなうて竹の先に、絲が附けてある、これは何であらうぞ。

太郎　いやそれは物でござる、賴うだお方が此年になられて、女房をお持ちなされ、一本棒にならぬやうに、一本棒をお授けでござりませう。

大名　えゝ、こゝなたはけ者め、何事を申すぞ。これは悟つた、惠比壽殿は不斷釣竿をはなさず、釣ばか

りしてござるによつて、此針でよい妻を釣れといふ事でござらう、先づ急いで釣らう、えい〳〵。

〽釣ろよ〳〵と神の數への釣針をおろし、見目よき妻を釣らうよ〳〵。

〽針をおろせば不思議やな、氣高き女を釣り上げて、

ト釣絲を緞帳の内へ投げる、上臈被衣を冠り、大名よき所へ釣り來り、

大名　あら有難や、扨もよい妻がかゝつてござる、嬉しや〳〵。

太郎　何がさてお悦びでござる。

大名　これは〳〵、そなたは定まる妻ぢやによつて目を掛けてやる程に、夫を大事にしませうぞ、先づ何はともあれ被衣を取つて、お顔を拜見いたさう。や、小野の小町か揚貴妃か、あら美しや〳〵。

太郎　いや申し〳〵、道々こつそり樂しまうと、背中へ入れて來た此の吸筒は、お二人様の三々九度、これにて目出たう御祝言、いかゞでござりまする。

大名　や、これは一段のことぢや、さあつげ〳〵。

太郎　心得てござる。

大名　先づ、女子の方よりさしませい。(ト上臈より始める。)

姫　申し我夫、必ず見捨てゝ下さるな。

大名　何の見捨てゝよいものか。

姫　おゝ嬉し。

大名　太郎冠者、祝うて一ッ諷うてくれ。

太郎　畏つて候。

〽高砂やこの杯が二世の縁、神の御前で祝言は三郎さまがお媒人、よしそれでも浮氣心があるなら、ほんに罰が當るであろぞいな、必ず見捨てゝ下さるな、やいの〳〵と寄り添へば。

〽傍に聞き居る太郎冠者、氣をもみあせり。（ト此うちよろしくあつて、）あゝ申し〳〵、其釣竿をお貸し下され、見事釣つて見せませう。

大名　早う釣れ〳〵。

太郎　いや、釣る段ではござらぬ、えい〳〵。

〽釣ろよ〳〵、釣るものは何々、鯛に鰹に惠方棚に撞鐘、信田の森の狐にあらぬ釣鉤を、さげておろして、三十二相揃うた十七八を釣らうよ、おかつさんを釣らうよ。

〽餘念も長き鼻の下、おゝ當るぞ〳〵どつこいしめたと、引き上ぐれば、被衣目深にかつぎし女、あら尊や、掛つたわ〳〵、さあ〳〵、こちへござれ嬉しや〳〵。

太郎　さあ〳〵、これからは三々九度の杯ぢや。これへござれ、何も恥かしいことはない、そなたと夫婦になるならば、春は花見夏は涼み秋は月見の酒盛りに、冬は雪見のちん〳〵鴨、天にあらば比翼の鳥、地にあらば連理の枝、必ずそもじは變るまいな。（トよろしくあつて、）

醜女　何の替つてよいものかいな。

太郎　先づ何はともあれ、御面相を。

〽被衣を取ればこは如何に、鰒に等しき醜女ゆゑ。（ト被衣を取り、顏を見てびつくり、）

わごりよは鬼か化物か、なう消えてなくなれ〳〵。

醜女　なう〳〵我夫、今おつしやつた樂しみは、嬉しうて〳〵、わたしや忘れはせぬわいな。

太郎　やれ情ない、許してくれ〳〵。

醜女　そりやつれないぞえ、太郎冠者どの。

〽これこつち向かんせ、えい何ぢやいな、〽思へば深い戀の淵沈むわが身を釣絲に、結んだ緣の西の宮、蛭子まうけて二世三世、變らぬ色は棹竹の、末葉榮ゆく女夫中放れはせじと取縋る。

ト醜女太郎冠者を捉へてくどきよろしくあつて、

太郎　なう、恐ろしや〳〵。

大名　やい太郎冠者三郎殿の授けたまひし、妻ぢやによつて否應はなるまいぞ。

太郎　そなた樣はよい月日の下でお產れなされた、此の太郎冠者は月も日もなく、闇黑で生れたと見えまする。

大名　何はともあれ、目出たう舞はうではないか。

太郎　勝手にさつしやれ。

大名　高砂や、この浦船に帆を上げて。

〽月諸共に舞の袖、女蝶男蝶の中もよく、遠く鳴尾の沖の石、堅い契りは住吉の、千代に八千代をかけはしや、千秋萬歲の千箱の玉を奉る目出たさよ。

目出たいな。

太郎　へゝ、お目出たうござります。

〽笑ひ興ぜし能舞臺、鏡の松の常磐津に昔へかへる岸澤の、波の鼓の打寄りて、睦じかりける次第なり。

ト此うち振事よろしくあつて、大名は醜女をつれてはひる。太郎冠者はびつくりなし、跡を追うて行ゆ

きかける。これを姫御前さゝへる。此の模様賑やかな鳴物にて、

幕

釣　女（終り）

水滸傳雪挑

解　説

「水滸傳」のダンマリは明治十九年五月、新富座に書卸された。「夢物語蘆生容畫」即ち渡邊華山、高野長英の中幕として挿入されたものである。此の時の役割は市川團十郎（九紋龍史進）、市川左團次（花和尙魯智深）、大谷門藏（惡僧生鐵佛崔道成）、市川荒次郎（惡僧飛天夜叉丘小乙）等であつた。

ダンマリとしては最も代表的な、はなやかなものである。作者は當時發售された錦繪に暗示を得て舞臺上に持ち來つたものと言はれてゐる。挿繪としたのは國周筆の錦繪で、團十郎の九紋龍史進である。

水滸傳雪挑（水滸傳のダンマリ——一幕）

瓦罐寺雪中の場

〔役名——花和尙魯智深、九紋龍史進、惡僧崔道成、道人飛天夜叉丘小乙、瓦罐寺の僧等。〕

本舞臺一面の淺黄幕、日覆より雪の積りし松の釣枝をおろし、舞臺前に雪板を置く、替つた禪の勤めにて幕明く。と右の鳴物にて、下手より瓦罐寺の僧三人○△□、白髮の生えし坊鬘、鼠の著附藁沓をはき杖を突き出來り、

○やれ〳〵情ないことではないか、やう〳〵焚いた粟の粥を、今來た大きな旅僧に喰れたばかりに此の三人が喰ひ足らず。

△斯うして僅な粥を喰ひ、露の命を繫いで居るも、世の盛衰とはいひながら、瓦罐寺も荒果てゝ、

□庫裡本堂に住はれず、僅な小屋に雨露を凌いで果敢ない浮世を送る、生き甲斐のない此の三人、

○それに引替へ惡僧の生鐵佛崔道成、同氣求める道人の飛天夜叉丘小乙。

△我々共を追出し、此の荒寺の住持となり、晝は出家と見せれども、夜は强盜追剝なし、

□多くの寶を得るゆゑに、肉を喰ひ酒を飲み、それのみならず美しき小姓を寺へ連れて來て、
○酌を取らせ伽をさせ、したいがいな榮耀榮華。
△かゝる惡僧が住居なれど、都に遠き山里ゆゑ、
□誰訴へる者もなければ、是れを罰する役人なし。
○これを思ふと世の中に、惡いことをせぬのは損。
△天は誠を照すといへど、是れを許して置くからは、
□さりとは分らぬことなれど、其の内官へ惡事が知れ、
○彼等二人が召捕られ、
△重き所刑に行はるゝ、
□時をば待つて居ませうわい。（ト此時雪ちら〳〵と降る。）
○又雪が降つて來た。
△毀れた雜木を拾つて來て、
□焚火でもして當りませう。

ト右の鳴物、雪おろしにて三人上手へはひる。鳴物打上げ、大薩摩になる。

〽それ樓門も青苔を帶び、半は朽ちて軒傾き、瓦罐の寺と記したる、四つの金文字雨に曝れ光りも失せし荒寺に、音なふものは風鐸の風に吹れて鳴るばかり、降り積む雪も生茂る、古松の許は蔭暗く、いと哀れにも物凄し。

ト大薩摩の切れ、淺黃幕を切って落す。

（瓦罐寺雪中の場）——本舞臺、平舞臺諸所に雪の積りし松の立木、上の方一間常足古びたる小堂、前の唐戸半朽ち、後打ち破りになる事、下の方崩れかゝりし屋根附の塀、これも打ち破りになる事、正面奧深に崩れ掛りし山門。此の上に同じく鐘樓堂。此の下同じく庫裡、總て雪積りし夜るの遠見、日覆より雪の積りし松の釣枝をおろし、總て瓦罐寺古寺の體。爰に崔道成坊主鬘鼠衣沓を履き劍を提げ、丘小乙頭巾手綱の唐裝束、長沓を履き劍を提げ、兩人立掛り居る、誂への禪の勤めになり、

道成　丘小乙。

小乙　崔道成どの。

道成　今うせ居つた旅僧は、何れへ逃げて行き居つたか雪に跡を隱せしが、携ふ包を忘れて行けば、爰へ再び來るであらう。

小乙　多分は二人の手並に恐れ、引返しては參るまいが、若し參りなば其時は、後日の憂ひなきやうに、殺生ながら殺してくれん。
道成　見るから大兵肥滿にして、あの鐵杖を自在になすは、なか〳〵力量勝れた坊主。
小乙　假令何程力あるとも、彼れは當地の地理に疎く、殊には單身こなたは兩人。
道成　力を合したことならば、必ず後れは取るまいと、思へど油斷はならざるぞ。
小乙　何は兎もあれ囊中は、空しく見ゆるあの旅僧。
道成　殺すも益なきことなれど、生して置けば後日の妨げ。
小乙　歸り來らば有無を言はせず、
道成　命を取つて憂ひを拂ひ、
小乙　今宵は酒を呑み直さん。
道成　然らば汝は裏手を見張れ。
小乙　心得ました。
道成　我は是れにて待合さん。
小乙　どれ、張番をいたさうか。

ト右の鳴物にて丘小乙は上の方へはひる。崔道成懐より金を入れし錦の袋を出し、

道成　先達てより追剝して盗み溜めた此の黄金、斯く懐へ入置かば持ち重りがして甚だ難儀、と言つて女にも預けおかれず、なくてならざる寶なれど、さて〳〵邪魔なものだなあ。（ト此時塀の内にて、）

智深　邪魔ならおれが、貰つて遣らう。

道成　や、何と。

ト此時下手の塀をばら〳〵と打ち破り、魯智深附髭、毛の延びし坊主鬘、白地錦の手綱の着附、黒八丈の法衣、露を取り、沓をはき、鐵杖を持ち出る、崔道成見てびつくりなし、

おのれはさつきの旅僧か。一人ぢや叶はぬ、逃げるが勝だ。（ト逃げにかゝるを引戻し、）

智深　おれに恐れて逃げるなら、邪魔な金を置いて行け。

道成　これを取られてなるものか。

智深　その金ばかりか、命も取るぞ。

道成　何を小癪な。

ト替つた禪の勤めになり、ちよつと立廻つて引捉へ、錦の袋を取る。それをと寄るを拂ひ退け又立廻つて投げ退ける。崔道成起上る所を肩へ踏掛けきつと見得。此の時上手堂の唐戸をばら〳〵と毀し、

内より九紋龍史進、獅子頭の冠り物、雲の模樣手綱の唐裝束、劍を提げ、沓をはき、筋鐵の入りし八角の棒を持ち、緣側へ出で、棒を突いてきつと見得。是れにて誂へだんまりの鳴物へ雪おろしを冠せ、日覆より誂への雪を降らす、道成刎れ返し立ちかゝるを史進棒にて上手へ廻し、魯智深へ打つてかゝる。魯智深鐵杖にて受け留め兩人だんまりの立廻り。此時雪をたつぷり降らせ、上手より丘小乙出で、崔道成と兩人してこの立廻りに搦み、よろしくあつて、史進へ小乙、魯智深へ道成かゝり立廻りて、兩人後より組付く、是れにて棒と鐵杖を投げ、兩人肌を脫ぎ、道成、小乙を投げ退け裏向きの見得。史進緋包みへ九龍の彫物、魯智深同じく櫻の花の彫物を見せ、落ち散りある錦の袋を道成取上げるを史進引取る、魯智深是れを取らうといふ立廻り、兩人よろしく袋を爭ふ立廻りあつて、よき程に道成は鐵杖、小乙は八角の棒を取り打つてかゝる、是れを史進魯智深引き取り、兩人を打ち据ゑる、本釣鐘を打ち込み、正面遠見へぼんやり朧の月を見せ、史進魯智深と顏を見合せ、

史進　や、御身は花和尙魯智深ならずや。

智深　さいふは九紋龍史進なるか。

史進　闇夜にそれと知れざれば、

智深　今まで數合戰ひしが、

史進　互ひに命に、

智深　別條なきは、

史進　天運盡きぬ、

ト爰へ兩人何をとかゝろを投げ退け、史進は肩へ踏み掛け、魯智深は鐵杖にて押へろ、是れを見合つて、木の頭。

兩人　所ぢやな。

ト兩人引張りよろしく、山おろしカケりにて、

ひやうし　幕

水滸傳（終り）

新編水滸傳の瓦罐の寺
彼花和尚と九紋龍の畫面を
寫せしだんまりが御意に適ひて
又候や其古寺の勇に反して
篠つく雨の古社に人目を包む
藁帽子挑み爭ふ兩勇士が
素性は誰としらはの稲妻

油坊主闇夜墨衣

解説

「油坊主」のダンマリは明治二十一年九月（作者七十三歳の時、）千歳座に書きおろされた。「語り」にも明かに斷つてある如く、「水滸傳」のダンマリの好評であつたに就いて、追隨的に作られたものであつたが、水滸傳ほどに評も芳ばしくなく、行はれてもゐない。書卸しの時の役割は市川團十郎（油坊主實は甲賀三郎義澄）、尾上菊五郎（平の忠盛）、市川左團次（陸奥四郎爲義）等であつた。

油坊主闇夜墨染（油坊主のダンマリ――一幕）

京都祇園社の場

〔役名――平忠盛、陸奥四郎爲義、橘小島之助、忠盛臣運藤太、兵卒四人、油坊主雷玄實は甲賀三郎義澄。侍女撫子、侍女等。〕

（祇園の社外廻りの場）――本舞臺正面瓦屋根附き白木の廻廊、上下樹木の張物にて見切り、總て京都祇園の社外廻りの體、爰に運藤太、侍烏帽子半素袍、股立、附太刀、馬手差、草履にて立身、下手に○△□◎兵卒四人手綱達附一本ざし、草鞋にて控へ居る、此見得時の太鼓にて幕明く。

運藤 先年謀叛の兆ありて、出雲の國へ流罪となりし源家の一族義親こと、更に後悔の樣子なく、又もやより〳〵味方を集め、討つて出ん隱謀顯れ、勅命受けて正盛殿討手に向ひ、義親に一味の者を討取りて平定に及びしが、心得難きは先達てより、義親法師と名乘る者、北陸道を徘徊なし、愚民を一味に語らひて、當の敵の正盛殿を覘ふ由、それ故竊に詮議せよと、嚴命受けし運藤太。

○ 今義家殿の養子となりし、陸奥四郎爲義殿は、其義親の實子ゆゑ。

△　勅命なりとは申せども、實父を討つたを遺恨に思ひ、正盛殿御父子をば、

□　折がなあらば討取らんと、笑ひの内に刃を隱し、時節を待つて居るとやら。

◎　內裏守護のお役目も、常より源平確執なれば、始終は亂が起りませう。

運藤　何は兎もあれ愚民を惑はす、僞義親のありかを尋ね、搦め捕つて梟首に掛け、騷立つ人氣を鎭めにやならぬ。

○　それに附けて種々雜多、下々の者が評議なすは、

△　東の方から西へ飛んだ、世にも稀なる光りもの、

□　それに又祇園の社へ、怪しき坊主が出るよし、

◎　もしや謀叛を企つる、僞義親に荷擔の者か。

運藤　如何にも汝が申す如く、油斷のならぬ此の世の中、今宵樹木の陰に隱れ、搦め捕つて手柄になさん。

○　左樣なれば、

四人　運藤太樣。

運藤　何れも參れ。

ト時の太鼓にて運藤太、兵卒四人上手へはひる。三絃入り大拍子になり、花道より橘小島之助烏帽子半素袍、大小草履にて出來り、花道にて、

小島　入梅中とはいひながら、兎角に晴れぬ日和癖、七つ過ぎより雲立ちて空も一面曇りしからは、今宵も雨になるであらう、濡るゝといふも由縁ある、戀ゆゑ上なき我が君も祇園の邊へ忍びの御入り、供奉は平の忠盛殿、今宵も程なく入らせられる其先觸に女御さまへ、内命うけて竊のお使ひ降らぬ内に急いで參らう。

ト舞臺へ來る。此時上手より侍女撫子、文金島田振袖、侍女のこしらへ、京草履にて被衣を被り出來り、兩人舞臺にて行合ひ、左右へ避ける事あつて、撫子を搔き退け上手へ行くを留める。

小島　火急の用事で參る者、何ゆゑあつて留められしぞ。

撫子　暫しお待ち下さりませ。

小島　や、さういふ聲は。

撫子　撫子でござりまする。

ト被衣を取る。小島之助見て、

小島　最早黄昏でござるのに、供をも連れず唯一人、何れへお出でなさるのだ。

撫子　いつも上さまのお入りには、お先觸がござりますのに、今日は御沙汰がござりませねば、女御樣にも最前から、殊の外のお待兼ね、それゆゑ道まで私が、遠見に參りましたわいな。

小島　それは御苦勞千萬でござつた、御忍びの御小勢にて忠盛殿の御供なし、程なく是れへ入らせられまする。則ち拙者お先觸に、只今參つてござりまするが、よい所でお目に掛りました。

撫子　まことによい所でござりましたわいな。

ト嬉しき思入。

小島　お待兼ねとござりますれば、少しも早く女御樣へ、程なく入らせまするると、何卒お知らせ下されい。

ト爰へ上手より、一、二、三、四の侍女四人出來り、

一　撫子さま。

四人　お上が召しまする。

撫子　又お待兼ねの御沙汰ならん、橘樣へお上の事委細申し上げしゆゑ、直御一緒に參りませう。

一　その忠盛樣はたつた今、御社參にござりまする。

小島　おゝ、最早お入りでござるかな。

二　それゆゑ御上の仰せにて、
三　撫子どのを、
四　火急のお召し。
撫子　左樣ならば、橘樣。
小島　直お跡より參上いたす。
一　お待ち申して、
皆々　居ります〻。
　　卜唄になり、女形皆々會釋して上手へはひろ。時の鐘、合方になり、小島助思入あつて、
小島　彼等と近しくいたすのも、平家を討たん隱謀が露顯なして流罪となり、出雲の國で果敢なくも正盛に討たれたまひし義親公の御無念を、晴らさん爲めに我が主人、甲賀三郎義澄殿、假に染衣の姿となり、義親法師と名を呼びて北陸道を經歷なし、竊に集むる源氏の味方、若年なれども某も此企てに加はりて、是れに帶する一刀は乃ち主人の賜にて、雨龍丸と名附けし名刀、正盛父子を始めとして、平家の一族討滅し、修羅の御無念晴らし申さん。
　　卜此内上手へ運藤太四人の兵卒を引連れ　窺ひ居て、

運藤　怪しき若者、

四人　動くまいぞ。

ト小島之助を取卷く。

小島　身共を怪しき者といふは。

運藤　先達てより北陸道を、義親法師と僞つて愚民を惑はす謀叛人、それに荷擔の怪しき若者、さあ尋常に、

四人　繩にかゝれ。

小島　斯く知られたる上からは、最早此身の破れ口、片ッ端から命がないぞ。

運藤　何を小癪な、討つて取れ。

四人　心得ました。

ト早き大拍子にて、四人打つて掛るを、小島之助立廻りよろしくあつて、四人下手へ逃げてはひる。運藤太太刀を拔き切つてかゝる、是れより大小入りの鳴物になり、兩人烈しき立廻りあつて切結びながら上手へはひる。知らせに附き大拍子になり、左右の植込み田樂にて杉林になり、正面の廻廊を三つ折に疊み、日覆へ引きあげる。

（祇園社境內の場）――本舞臺奧深に杉林、御影石の燈籠數本を斜に見たる誂への道具、上の方に古びたる二枚開きの宮、本屋根本椽附き、總て祇園の社境內の體、奧の方燈籠に明りあり、よろしく大拍子にて道具留る　と矢張り大拍子ばた〳〵にて小島之助運藤太兩人とも手を負ひ、立廻りながら出來り、小島之助運藤太を切倒し、乘つかゝり止めを刺さうとする下より、小島之助の脇腹を突く、是れにて小島之助立身にて苦しみばつたり倒るゝ、時の鐘はげしく打ち込み、大薩摩になり、

〽それ綠陰森々として、木の間の星もあらき風、一吹きさつと梢をならし、叢立つ雲の足早く、見る間に空は磨る墨を流すが如き宵闇に、目ざすも知れぬ闇がりに、幽に光る燈籠の火影尊き皐月雨。

ト大薩摩の切れ、雨の音になり、本雨をさつと降らし、よき程に夜神樂を打ち込み、正面杉の木の間より油坊主雷玄實は甲賀三郎義澄、鼠の着附に墨の衣の露を取り、誂へ麥藁の冠り物、下駄をはき油差と灯入りの銅燈籠を持ち出で、運藤太を足にて蹴返し、銅燈籠の明りにて小島之助を篤と見て、燈籠と油差を下へ置き、小島之助の持ちし刀を取り、小島之助の袖にて血を拭ひ腰の鞘を取り是れへ納める。此時花道揚幕の內にてばた〳〵と人音する、雷玄向うを見て、ムヽとうなづき刀を腰へ差し、又燈籠と油差を持ち、後を見返りながら、以前の杉の木蔭へはひる。

〽火影を的に忠盛が、弓矢を携へ走り出で、

ト ぱた〳〵小鼓のあしらひにて、花道より平の忠盛、烏帽子狩衣、指貫を端折り、附太刀馬手差し、忠盛のこしらへ、弓矢を持ち走り出で、花道に止り、向うをきつと見て、

忠盛　時しも皐月に降り續く、霖雨に暗き木下闇、立ち列ねたる燈籠の木の間に光る燈火に、見れば頭に白銀の針を植ゑたる如くなる、怪しき出立ちの人影は人間にてはよもあるまじ、たゞ一矢に射留めよと嚴命受くれど是れまさに、狐狸の類の仕業ならん、篤と實性見屆けて命を斷つとも遲からじ、木蔭に忍び生捕つて、其の正體を顯はしくれん。

〽宮居をさして來る道も、風に燈火吹き消えて、闇路にいとゞ物凄う。

ト 忠盛舞臺へ來る、風の音になり、燈籠の明り消え闇き思入にて、忠盛窺ひながら前へ立つ、雷玄身を躱して下手へ行く、忠盛つか〳〵と行き鎧を取つて引戻し、立廻りあつて、雷玄麥藁を取り、きつと見得。此の時上手古宮の戸を毀し爲義棒茶筌。鎧直垂附太刀、馬手差し好みのこしらへにて此中へはひり、ちよつと立廻りて三人きつと見得。是れより誂への鳴物になり、弓を遣ひ三人だんまりの立廻り。此の内知らせなしに道具蛇の目廻しに廻り、杉林の燈籠を正面に見たる道具。よき程に三人拔き合せて立廻り、此の時本雨烈しく降り、雨中の立廻りよろしく、此時段々瓦斯の明りを暗くなし、

三人共刀の光りを當に立廻り、ト、眞暗になる、此途端ドロ／＼烈しき音して、西より東へ誂への光り物を引いて取る。此の雷氣にて舞臺一面にくわつと明るくなり、是れにて三人顏見合せ双方へ別れ、雷玄上手に刀を擔ぎ、眞中に忠盛刀を差し附け、下手に爲義刀を構へきつと見得。是れを木の頭。三人引張りの見得よろしく。ドロ／＼カケリにて、

ひやうし　幕

油坊主（終り）

大正十五年四月十六日印刷
大正十五年四月十九日發行

著作權者印

『默阿彌全集第二十卷』

非賣品

補修　河竹糸女

校訂編纂者　河竹繁俊
東京市日本橋區通四丁目五番地

發行者　和田利彦
東京市小石川區久堅町一〇八番地

印刷者　大橋光吉
東京市小石川區久堅町一〇八番地

印刷所　共同印刷株式會社
東京市日本橋區通四丁目五番地

發行所　春陽堂